昭和十年二月十五日印刷
昭和十年二月二十日發行

國譯一切經 諸宗部 六

不許複製

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番

昭和十年二月十五日印刷
昭和十年二月二十日發行

國譯一切經 瑜伽部 六

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 東京市芝區芝公園地七號地十番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝（二）一一六番
　　　（三）〇四〇番

製本所　兩角製本所

なり。四には捨寂靜、謂はく六恒住、六根門に於て喜ばず憂へず、上捨に安住して正念正知す、阿羅漢等、無學地に住して四の寂靜を具し、少しく餘依有り、是の故に說いて有餘依地と名づく、此の地は卽ち是れ二乘無學の身中の有漏無漏の諸法を總じて自性と爲す、如來は眞實の身心有漏の餘依無しと雖も、而も變化有つて有漏依に似たり、故に化相に就いて亦た說て有餘依地と名づくることを得るなり。

第十七目　無餘依地を釋す

無餘依地とは謂はく無餘依涅槃地なり、一切有漏の餘依皆捨つ、二乘は有爲無漏も亦た捨つ、如來は有爲無漏有りと雖も而も一切の有漏の餘依無し、故に亦た說いて無餘依地と名づくるなり、此の地の中に於て唯だ淸淨眞如の所顯甚深の功德有り、諸の分別を離れ、諸の戲論を絕す、說いて蘊界處等及び人天等と爲す可らず、若は卽、若は離、若は有、若は無、所有る名相は皆是れ假說なり。有義は此の地は正しく究竟擇滅の眞如無爲を用つて性と爲し、兼ねては如來の有爲無漏の功德を以て性と爲すと、如來の功德は甚深にして相を離れ不可說なるが故に、亦た五識地等に攝すと言はざれども理實には亦た攝するなり。有義は如來の有爲の功德は有餘依に攝す、無爲の功德は無餘依に攝すと、故に後に論に言く、無餘依地は五地の一分なり、謂はく無心地と、修所成地と、聲聞と獨覺と及び菩薩地となりと。

瑜伽師地論釋（終）

聲聞地とは謂はく、佛の聖教は聲を上首と爲す、師友の所に從つて此の教聲を聞き展轉して修證し、永く世間を出で、小行小果なるが故に聲聞と名づく。是の如き聲聞種性の發心と修行と得果との一切を總じて說いて聲聞地と爲すなり。

第十四目　獨覺地を釋す

獨覺地とは常に寂靜を樂つて雜居を欲せず、加行を修じて滿じて、師友の敎無く自然に獨り悟つて永く世間を出で、中行中果なるが故に獨覺と名づく。或は緣を觀待して聖果を悟るを亦た緣覺と名づく、是の如く獨覺種性の發心と修行と得果との一切を總じて說いて獨覺地と爲すなり。

第十五目　菩薩地を釋す

菩薩地とは大覺を希求し有情を悲愍し、或は菩提を求めて志願堅猛にして長時に修證して永く世間を出づる大行大果なるが故に菩薩と名づく。是の如き菩薩種性の發心と修行と得果との一切を總じて說いて菩薩地と爲す、三乘の大義は彼に當に廣く辯ずべし。

第十六目　有餘依地を釋す

有餘依地とは謂はく有餘依涅槃地なり、依とは卽ち是れ有漏の所依なり、略して八種有り、一には施設依、謂はく五取蘊なり、此に依るに由るが故に假者を施設して種性等と名づく。二には攝受依、謂はく七攝事なり、卽ち自の父母と、妻子と、奴婢・作使・僮僕と、朋友・眷屬となり。三には住持依、謂はく四種の食なり。四には流轉依、謂はく四識住と、十二緣起となり。五には障礙依、謂はく諸の天魔なり、六には苦惱依、謂はく諸の欲界なり、七は適悅依、謂はく諸定の樂なり、八には後邊依、謂はく阿羅漢相續の諸蘊なり。今は全く一の最後邊依を取つて六の攝事と流轉と障礙とを除き餘の一分を取る。又た此の地の中に四寂靜有り、一には苦寂靜、謂はく當來の苦畢竟不生なり。二には惑寂靜、謂はく諸の煩惱畢竟不生なり。三には業寂靜、謂はく惡を造らず諸善を修習す

は く四倒等に倒亂せらるゝ心を無心地と名づく、本性を失ふが故なり。三には心生不生門なり、謂はく若し緣具して此の心生ずることを得るを有心地と名づけ、若し緣具せずして彼の心生ぜざれば無心地と名づく、此の門の中に於て隨て此心生ずるを有心地と名づけ、彼の心生ぜざるを無心地と名づく。四には分位建立門なり、謂はく六位を除くを有心地と名づく、若し無心の睡眠の位、と無心の悶絕の位、と無想定の位、と無想生の位と滅盡定の位と及び無餘依涅槃界の位とを無心地と名づく。五には就眞實義門なり、謂はく唯だ無餘依涅槃界の中、諸心滅皆するを無心地と名づく、餘位は諸の轉識無きに由るが故に假に無心と名づくれども、第八識未だ滅盡せざるに由るが故に有心地と名づく、是の如き二地の諸門差別は進退不定なり。

第十目　聞所成地を釋す

聞所成地とは謂はく聞より生ずる所の文義を解する慧及び慧と相應する心心所等なり。

第十一目　思所成地を釋す

思所成地とは、謂はく思より生ずる所の法相を解する慧、及び慧と相應する心心所等なり。

第十二目　修所成地を釋す

修所成地とは謂はく修より生ずる所の理事を解する慧と及び慧と相應する心心所等なり。聞は謂はく聽聞なり、即ち是れ耳根耳識を發生して言教を聞くが故なり。思は謂はく思慮なり、即ち是れ思數智慧を發生し法を思擇するが故なり。修は謂はく修習なり、即ち是れ勝定智慧を發生して對治を修するが故なり、此の三種より三慧及び相應法等を發生するを三地の體と名づく、三慧の廣義は後に分別するが如し、是の如き三地は三慧品の心心所等、及び所得の果を以て自性と爲す、故に後の論に修所成地は亦た是れ有餘無餘依地と言ふなり。

第十三目　聲聞地を釋す

界の若し散心に在るは亦た等引に非ず、欲界に同じきが故に、此に由つて相對して四句を作ることを得、或は等持と倶にして等引地に非ず、謂はく欲界等の散心の位の三摩地と倶なる心心所等なり。或は等引地にして等持と倶に非ず、謂はく定位の中の三摩地の體と及び無想定・滅盡定の位の所有る諸法なり。或は等持と倶にして亦た等引地なり。謂はく諸の靜慮及び諸の無色の有心定の位の心心所等にして三摩地を除く。或は倶非なる有り、謂はく上位の所有る諸法を除く。又、三摩地と三摩鉢底と三摩呬多とは名に寛狹有り。三摩地の名は心數の中に目づく。等持の一法は通じて一切有心位中の心一境性を攝す、定と散との位に通ず、然るに諸經論には勝に就て但だ空無願等を說いて三摩地と名つく。三摩鉢底は通じて一切の有心と無心との諸定位の中の所有る定體に目づく、諸經論の中、勝に就て唯だ五現見等相應の諸定を說いて名づけて等至と爲す。等引地の名は通じて一切の有心と無心との定の位の功德に目づく、故に此の地中に通じて一切定位の功德を攝す、是れ總なるに由るが故に偏へに地の名を目づく。

第七目　非三摩呬多地を釋す

非三摩呬多地と言ふは上に翻じて了じ易し、煩しく廣釋すること無し、是の如き二地は總じて一切の定と非定との位の所有る諸法を攝す。

第八目　有心地。第九目　無心地を釋す

言ふ所の有心無心地とは略して五門に就て差別を建立す。一には就地總說門、謂はく五識身相應地と意地と、有尋有伺地と、無尋唯伺地との此の四は一向に是れ有心地なり。無尋無伺地の中、無想定幷に無想生及び滅盡定を除く所餘は一向に是れ有心地なり、若し無想定幷に無想生及び滅盡定は是れ無心地なり。此の門の中、無心の睡眠、無心の悶絕は亦た有心と名づく、七と八と有るが故に、唯だ無想定等は心不相應行にして心と相違すれば無心地と名づく。二には心亂不亂門なり、謂

言ふ所の三摩呬多地とは、謂はく勝定地なり、沉と掉と等を離れ、平等に能く引き、或は平等を引き、或は是れ平等に引發せらるゝが故に等引地と名づく。有義は此の名は唯だ一切の有心の諸定を攝す、皆能く平等に功德を引くが故に、無心に通ぜずと、前頌中に三摩地俱に言ふを以ての故に、三摩地とは是れ別境中の心數法なるが故に、二無心定は等しく諸の功德を引くこと能はざるが故に等引地に非ず。

若し爾らば何が故に等引地に說くや。

此の等引地に略して四種有り、謂はく靜慮と、解脫と、等持と、等至となり。靜慮とは謂はく四靜慮なり。解脫と言ふは謂はく八解脫なり。等持と言ふは謂はく空等持と、無願等持と、無相等持となり。等至と言ふは謂はく五現見等至と、八勝處等至と、十遍處等至と、四無色等至と、無想等至と、滅盡等至となり。此れ失有ること無し、二無心定は是れ等引の果なるが故に其の名を與ふ、實は等引に非ず。有義は此の名は有心の位及び無心の位の所有る定體に通ず、若し有心定は平等に能く諸の功德を引くが故に、亦た平等の根大等を引くが故に、及び沉と掉とを離れ、戒無悔等の平等の方便に引發せらるゝが故に名づけて等引と爲す、若し無心定は殊勝の功を引くこと能はずと雖も、平等の根大等を引くが故に、是は平等定に引發せらるゝが故に亦た等引と名づく。

若し爾らば何が故に前頌中に三摩地俱と言ふや。此れ失有ること無し、頌中の文は略す、且らく彼と俱と言ふ、其の實は等引は俱に非ず、亦た是れ後に等引は無心に通ずと說くが故に。如實義は等引地の名に通有り局有り、有心無心の兩位に俱に攝す、故に名づけて通と爲す、後に無想・滅盡定も亦た是れ等引地の體なりと說くが故なり、唯だ有漏無漏の勝定に在つて、欲界等の一切の散心に非さるが故に名づけて局と爲す、後に說いて唯だ靜慮等を等引地と名づく。欲界に於ける心一境性には非ず、此に由つて等引は無悔歡喜安樂の引く所にして、欲界は爾らずと言ふを以てなり。此に准ずるに上

るが故に說いて無尋無伺地と名づく、現行せざるに由らざるが故に、所以は何んとならば、未だ欲界の欲を離れざる者、教導作意の差別に由るが故に、一時の間に於て亦た無尋無伺の意の現行すること有り、已に尋伺の欲を離るゝ者も亦た尋伺現行すること有り、彼の定を出で及び彼の地に生ずるが如しと。如實義は、此の三は但だ界地に就て建立す、謂はく欲界地、及び初靜慮の有漏無漏の諸法の、中に於て尋伺倶に得可きが故に第一地と名づけ、靜慮中間の有漏無漏の諸法は、中に於て尋無くして唯だ伺のみ有り、故に第二地と名づけ、第二靜慮已上の諸地の有漏無漏の諸法は中に於て尋伺倶に有ること無きが故に第三地と名づく。故に後に論に言く、此の中に欲界及び初靜慮の若は定、若は生を有尋有伺地と名づけ、靜慮中間の若は定、若は生を無尋唯伺地と名づけ、第二靜慮已上の色界無色界の全を無尋無伺地と名づく、無漏有爲の初靜慮定をも亦た有尋有伺地と名づく、尋伺處の法に依つて眞如を緣じて境と爲し、此の定に入るが故に、分別の現行に由らざるが故に、餘は前に說けるが如し。若し相應に就き、及び離欲に就て三地を建立せば法を攝すること盡きず亦た大に雜亂す。有尋有伺等の地は唯だ是れ有心と言ふと雖も、此は一門に就て麁ぼ地相を辯ず、此の門中に於て、唯だ第二靜慮已上の無尋無伺地の中、無想定・無想生・滅盡定を無心地と名づけ、餘の一切位は有心地と名づくと說く、後に四門有り、復た異建立す、復當に說くべきが如く、此の中、尋伺の欲を離るゝに由るが故に說いて無尋無伺地と言ふと雖も、然も唯だ彼の第二靜慮已上の諸地は必定して已に尋伺地の欲を離ると說き、已に尋伺の欲を離るゝ者の下地の諸法亦た說いて無尋無伺と名づくることを得と言はず。若し是て如くならば未だ下地の尋伺の欲を離れざる者の上地の諸法も亦た應に說いて有尋伺等と名づくべし、是の如く建立せば大雜亂を成ず、是の故に此の三は唯だ界地の上下に就て建立するなり。

第六目　三摩呬多地を釋す

量の攝なるが故に別に一と立て、說いて第二に在く、是の如く二地の自性と、依と、緣と、助伴と、作業とを合して體とするが故に一切の法を攝す、應に知るべし、此の中一切の法は識に離れざるを以ての故に、識に依つて起るが故に、識を體と爲すが故に、識最勝なるが故に先に八識に依つて二地を建立す、是の如き八識の自性と依と緣と助伴と業等は後に當に廣說すべし。

第三目　有尋有伺地。第四目　無尋有伺地。第五目　無尋無伺地を釋す

有尋有伺等の三地とは、尋は謂はく尋求、伺は謂はく伺察なり。或は思、或は慧境に於て推求するに麁なる位を尋と名づけ、卽ち此の二種、境に於て審察する細なる位を伺と名づく。一刹那に二法相應するに非ず、一類の麁細前後に異なるが故なり、今此の二に依て三地を建立す。有義は此の三、二が前後の相應に就て建立す、謂はく、欲界地及び、初靜慮麁の心心所前後相續して尋伺と共に相應すること有る可きが故に有尋有伺地と名づく、靜慮中間の麁の心心所は前後相總して定んで尋有ること無く、唯だ伺と共に相應す可きが故に無尋唯伺地と名づく、第二靜慮已上の諸地の諸の心心所は、前後相續して決定して尋伺と相應せざれば無尋無伺地と名づく。若し欲界地と及び初靜慮と、靜慮中間の細の心心所の、尋伺と共に相應せざる者、と及び一切の色と、不相應行と、諸の無爲法とは、尋伺と共に相應せず、故に亦た皆說いて無尋無伺地と名づく。故に後の論に言く、有尋有伺地と、無尋唯伺地とは一向に是れ有心地なり、無心の睡眠と、無心の悶絕と、無想定と、無想生と、滅盡定と、及び無餘依涅槃界とを無心地と名づくと。有義は此の三は二が離欲の分位に就て建立す、謂はく、欲界地と及び初靜慮の諸法假者は、尋と及び伺とに於て並に未離欲なれば有尋有伺地と名づく、靜慮中間の諸法假者は尋は已に離欲し、伺は未だ離欲せざれば無尋唯伺地と名づく、第二靜慮已上の諸地の諸法假者は、尋と及び伺とに於て並に已に離欲すれば無尋無伺地と名づく、若し下地に在つて並に已に離欲するも、亦た說いて無尋無伺と名づく、故に後に論に言く、此の中、尋伺の欲を離るゝに由

賊相應論と說けるが如し、謂はく、王賊に依つて言論を興す、此れ亦た是の如し、此の中に多法を分別すと雖も、五識を主と爲す、是の故に偏へに說く。又た五識身相應の心品は總じて相應と名づく、此の地の中に於て多法を明すと雖も、心心所勝を以ての故に別して說く、又た相應とは是れ攝屬の義なり、謂はく此の地の中に五識身に攝屬する所の法を說く、即ち是れ自性と、所依と、所緣と、助伴と、作業との故に相應と名づく、地は前に說けるが如し、自後の諸地の識身相應は其の所應に隨つて亦た通ずる者有り、略するが故に說かず。

第二目　意地を釋す

意地と言ふは六七八識なり、同じく意根に依る、識身相應の三語を略去す、故に但だ意と言ふなり。又實義門は八識有りと雖も、然も、隨機門は但だ但だ六識のみ有り、六七八識は同じく第六に攝す、所依に就て名づく、故に但だ意と言ふ、所依は色に非ず、或は身を離る、猶し心受の如し、故に身と言はず、相應は前に准ず、故に略して說かず。又た六七八は皆同じく心と意と識との義有りと雖も、心法と意處と識蘊との攝なるが故に、然れども意の義等し、故に但だ意と言ふ、皆な是れ思量の意根に攝するが故なり。第八は種を持す、心の義偏へに強し、第六は普く遍く境界を了別し識の義偏へに強し、是の故に心地識地と說かず、身及び相應は略するが故に說かず、地の義は前の如し。

何に緣つてか五識は合して一地を立て說いて最初に在き、餘識は一を立て說いて第二に在くや。

五識は同じく當に說いて分別すべき無し、所緣等の業所說の事少し、故に合して一を立て、說いて最初に在く、意地は此に翻ず、故に別に一を立て說て第二に在くなり。又た五識は同じく色根を依として同じく色境を緣ずるを以ての故に合して一と立て、餘は無色を依として所緣不定なるが、故に別に一と立つ、自性と依と緣と、麁細次第す、故に說くに先後あり。又た五識は同じく現量の攝なるを以ての故に合して一と立て、說いて最初に在く、餘識は不定なり、或は現、或は比、或は非

はく三摩地と倶なるに非るを非三摩呬多地と名づく。此は一相に就て且く地の名を別つなり、盡理の説には非ず、是の如き二名互に寛狹あるが故に三摩地の名は定と不定とに通ず、唯だ有心に在る三摩呬多は有心位及び無心位に通じ、唯だ局つて定に在り、後に廣説せるが如し。是の如く三乘を具すとは、謂はく、是の如く聞等の地に由るが故に、或は是の如く上の諸地に由るが故に三乘を具することを得るなり、及び有餘依と無餘依との地なり、一一の別名は後に廣く釋するが如し。

第三項　廣く名を列ねて重ねて前問に答ふる文を牒釋す

【本文】 論に曰く、一には五識身相應地、二には意地、三には有尋有伺地、四には無尋唯伺地、五には無尋無伺地、六には三摩呬多地、七には非三摩呬多地、八には有心地、九には無心地、十には聞所成地、十一には思所成地、十二には修所成地、十三には聲聞地、十四には獨覺地、十五には菩薩地、十六には有餘依地、十七には無餘依地、是の如く略して十七を説いて名づけて瑜伽師地と爲す。

釋して曰く、次に廣く名を列ね重ねて前答に答ふ。

第一目　五識身相應地を釋す

五識身相應地と言ふは、謂はく眼等の根は是れ眼等の識の不共所依なり、眼等は餘識の依と爲らざるが故に。又た是れ親依なり、眼等利鈍なれば識明昧なるが故に。又た同時依なり、倶有なるが故に、意等の如くには非ず。是に由つて五識は眼等の根を用つて其の名を標別す、猶し麥芽の如く、鼓聲等の如し、故に五識と名づく、所依の根に由るなり、形礙有るが故に、又た必ず所依の身に離れざるが故なり、猶し身受の如し、故に名づけて身と爲す、又た復た身とは、依の義、體の義なり、六識身、六思身等の如し、五識身に依つて此の地を建立す、故に相應と名づく、律の中に王相應論、

り、樂徒の爲に分別し解說せんと欲して自ら假に問を興して起說の因と爲すが故に、「云何んが瑜伽師地なりや」と問ふなり、若し爾らずんば先に略說無し、欻ち此の地云何と問ふ容きこと無し。又發問する者に略して五種有り、一には解せざるが故に問ふ。二には疑惑の故に問ふ。三には試驗の故に問ふ。四には輕觸の故に問ふ。五には有情を利樂せんと欲するが爲の故に問ふなり。今は是れ第五なり、專ら諸の有情の類を利樂せんが爲に斯の論を造るが故なり。

「謂はく十七なり」とは、所說の瑜伽師地を總集するに略して十七有り、若し廣く安立せば地位は無邊なり、一一の地の中の分位差別の義も無邊なるが故なり。是の如き一轉は總問總答なり。

第二項　十七地の別名問答の文を牒釋す

【本文】 論に曰く、何等か十七なりや。

嗢拕南に曰く、

五識相應と意と、有尋伺等の三と、
三摩地倶と非と、有心と無心地と、
聞・思・修の所立と、是の如く三乘を具すると、
有依と及び無依と是を十七地と名づく。

釋して曰く、何に緣つて更に何等か十七なりやと問ふや。總數を聞くと雖も未だ別名を了ぜず、故に復た問を爲すなり。嗢拕南とは、先に略頌をもて答へ、地の名を略集して諸を學者に施すを嗢拕南と名づく。五識相應とは、謂はく五識身相應地なり。意とは謂はく意地なり。有尋伺等の三とは、謂はく有尋有伺等の三地なり。三摩地倶とは、謂はく三摩地と倶なるを三摩呬多地と名づく。非とは、謂

釋す。四には攝異門分なり、經中の所有る諸法の名義差別を略攝す。五には攝事分なり、三藏衆要事義を略攝す。此の論は既に是の如き五分有り、何が故に但だ瑜伽師地と名づくるや。初に就て名を立つ、故に失有ること無し。又た一切の法皆是れ瑜伽師地にあらざる無し、瑜伽師は一切の法を用つて依緣と爲すを以ての故に、此の中には存略して且く十七を說く、又た十七地に、具に一切の文義を攝して略ぼ盡す、後の四分は皆十七地中の諸の要文の義を解釋せんが爲めの故なり、亦た瑜伽師地を離れず、是に由つて此の論は十七地を用つて以て宗要と爲す。

第五節　藏攝分齊門

復た通じて諸乘の境等を明すと雖も論を說く者、諸法の性相を問答して決擇する意は、菩薩をして一切に於て皆善巧を得、佛果を修成し、利樂窮無からしめむが爲めなり、是の故に此の論は菩薩藏の阿毘達磨に屬す、菩薩をして勝智を得しめんと欲するが故なり。

第六節　唱本隨說門

第一項　總じて此の論一部の宗要問答を牒釋す

【本文】　論に曰く、云何んが瑜伽師地なりや。

謂く、十七地なり。

釋して曰く、初に「云何んが瑜伽師なりや」と問ふは總じて此の論一部の宗要を問ふなり、問者先に諸經所說の瑜伽師地を聞き、其の義未だ了せざるが故に此の問を爲すなり、謂はく獨瑜伽師地經中に數ば正しく瑜伽師地を修すと說く、月燈經の中にも亦た瑜伽師地を修習すと說けり、是の如く一に非らざるなり、前に廣說せるが如し、或は作論者先に總じて請を受け、論體の五分盡く心中に在

三乘の行者は聞思等に由つて次第習行し、是の如き瑜伽を分に隨つて滿足し、展轉して諸の有情を調化するが故に瑜伽師と名づく。或は諸の如來は瑜伽を證すること滿じ、其の所應に隨て此の瑜伽を持して一切の聖弟子等を調化し、其をして次第に正行を修せしむるが故に、瑜伽師と名づく。

第三項　地の字を釋す

地とは謂はく境界所依と所行、或は所攝の義なり、是れ瑜伽師所行の境界なり、故に名づけて地と爲す、龍馬地の如し、唯だ此の中に行じて外に出でざるが故に、或は瑜伽師此の處所に依て白法を增長す、故に名づけて地と爲す、稼穡地の如し。或は瑜伽師地所攝の智、此に依つて現行し、此に依つて增長す、故に名づけて地と爲す。珍寶地の如し、或は瑜伽師の行此の中に在つて自法を受用す、故に名づけて地と爲す、牛王地の如し。或は諸の如來を瑜伽師と名づく、平等智等の行一切の無戲論界無住涅槃瑜伽の中に在るが故に、是れ彼の所攝なるが故に名づけて地と爲す、或は十七地は一切の瑜伽師に攝屬するが故に、國王地の如し、是の故に說いて瑜伽地と名づく。

第四項　論の字を釋す

諸法の性相を問答し決擇す、故に名づけて論と爲す。瑜伽師地を證得せしめむと欲して此の論を說く、故に以て名と爲す、對法論の如し、或は復た此の論は無倒に伽瑜師地を辯說す、故に以て稱と爲す、十地經の如し。或は復た此の論は此の地に依止す、故に以て號と爲す、水陸華の如し、是に由つて論を瑜伽師地と名づく。

第四節　論體宗緒門

今此の論の體は總じて五分有り、一には本地分なり、略と廣とに十七地に義を分別す。二には攝決擇分なり、十七地の中の深隱の要義を略說し決擇す。三には攝釋分なり、諸經の儀則を略攝し解

德を發すが故に。餘處に復た說く、菩薩所有る殊勝の慧悲平等に雙び轉ずるを名づけて瑜伽と爲す、能く無住大涅槃を證するが故に、是の如き等の說は諸の不共行を名づけて瑜伽と爲す、能く無上の佛菩提を證するが故に、是の如き等の諸經論中に於て一切の行を說て皆瑜伽と名づく、上の所說の四種の義を具するが故なり。

[九]果瑜伽とは、謂はく、一切の果は更ひに相ひ順ずるが故に、正理に合するが故に、正教に順ずるが故に、正因に稱ふが故に、說て瑜伽と名づく、此の果瑜伽は諸果に通ずと雖も、然も諸經論に相に就き機に隨つて種種に異說す。分別義經に說く、力無畏の不共佛法を名づけて瑜伽と曰ふ、能く諸魔を伏し、諸の異論を制すること餘乘に勝るゝが依なり。殊勝經中に說く、佛所證の無住涅槃を名づけて瑜伽と爲す、盡未來際所住無きが故なり。大義經中に說く、如來地の無分別智と及び大悲とを名づけて瑜伽と爲す、自利利他常に盡くること無きが故なり。辯說瑜伽師地經の中に佛地の功德を皆瑜伽と名づく、法界を窮めて斷盡無きが故なり。分別三乘功德經中に三乘の果德を名づけて瑜伽と爲す、皆正理と等く相應するが故なり。讃佛論に說く、三身三德皆是れ瑜伽なり、一切の果德相ひ離れざるが故なり。集義論に說く、果位所攝の有爲無爲の諸功德聚は皆是れ瑜伽なり、等至究竟して和合する位なるが故なり。是の如き等の諸經論中に於て一切の果德を皆瑜伽と名づく、上の義を具するが故に、是の如く聖教を亦た瑜伽と名づく、正理に稱ふが故に、正行に順ずるが故に、正果を引くが故なり。有義は正しく三乘の觀行を取て說て瑜伽と名づく、數數進修して理に合し、行に順じて勝果を得るが故に、境と果と聖教とは瑜伽の境なるが故に、瑜伽の果なるが故に、瑜伽を詮するが故に亦た瑜伽と名づく。是の如く此の論の瑜伽の兩字は尙ほ遍く聖言の大海を搜動す、何に況や具に瑜伽師地を說かんをや恐らくは、受持し難からん、故に且く略して說く。

第二項　師の字を釋す

【九】　果瑜伽を釋す。

を說いて瑜伽と名づく、是の如き正觀は衆行の主なるが故に。海慧經中に三摩地を修するを說いて瑜伽と名づく、心に住し行を發すること此れ最强なるが故に。顯揚論等に信と欲と方便と精進との四法を說いて瑜伽と名づく、作意或は智を說て方便と名づく、此の四通じて一切の行を生ずるが故に、聞所成地に別して九道を攝じて說て 瑜伽と名づく、理を會して 惑を除く位別して勝るゝが故に、謂はく世出世の加行と無間と解脫と勝進との輭と中と上との道なり、修所成地に總じて諸の對治道を修習するを攝じて說いて瑜伽と名づく、略を樂ふ者の爲に總じて修を說くが故に、有る處に說く、諸地所攝を緣ずる無顚倒の智を名づけて瑜伽と爲す、諸地法を緣ずる無顚倒智は、行の中勝るゝが故に。有る處に復た說く、方便と善巧と、或は唯だ方便を名づけて瑜伽と爲す、作意と智とは行を發すこと勝が故に、或は最初に就く、悟を發すこと勝るが故に。功德實性契經中に說く、諸の緣起觀を名づけて瑜伽と爲す、緣起觀の智は生死を出づるに於て最も要たるが故に。正行經の中に正見等の八支聖道を說いて名づけて瑜伽と爲す、涅槃城に趣くに此を勝と爲すが故に。毗奈耶經に說く、戒等を修するを名づけて瑜伽と曰ふ、戒定慧學は因中の勝なるが故に。大義經中に說く、一切の世出世の行を修する分位差別を皆瑜伽と名づく、正行の階位相ひ符順するが故なり。是の如く皆共聲聞の行を說いて名づけて瑜伽と爲す、通じて三乘、證する行の中勝なるが故に。慧到彼岸契經中に說く、空を觀ずる作意を名づけて瑜伽と爲す、大行を發起するに此れ最勝なるが故なり。彼の經に言ふが如し、菩薩の所有る大瑜伽は謂はく空作意なり、菩薩は此の空作意に由るが故に聲聞及び獨覺地に墮せず、乃至能く諸佛土等を淨む、即ち彼の經中復た般若波羅蜜多を說いて勝瑜伽と名づく、大乘の行を導くに此れ殊勝なるが故に、彼の經に言ふが如し、菩薩の所有る諸の瑜伽の中に慧度瑜伽は最上最勝廣說乃至是れ無等等なり。何を以ての故に是の如く般若波羅蜜多は是れ無上瑜伽法と爲すが故に。餘處に說く、此の慧度所攝の無分別定を名づけて瑜伽と爲す、能く一切の勝功

相應す、故に瑜伽と名づく、此の境瑜伽は一切に通ずと雖も、然も諸經論は相に就き機に隨て種種に異說す、或は諸法四種の道理を說いて名づけて瑜伽と爲し、觀待と、作用と、法爾と、證成と、總じて一切の正道理を攝するが故に。或は二十四不相應行の中の一を瑜伽と名づくと說く、因果相稱して乖違すること無きが故に、此の二は並に決擇分等の處處に廣く說くが如し、或は雜法と清淨との無性を說いて名づけて瑜伽と爲す、違を除き順に契ふこと最も勝れたりと爲すが故なり、大梵問契經等に說が如し、諸の瑜伽師は少法として共をして生ぜしむ可く及び滅せしむ可き無く、亦た少法として證得せしめんと欲し、及び現觀せんと欲する無しと觀ず、謂く、一切雜染無性の瑜伽の中に於て、少法として共をして生ぜしむ可く、及び滅せしむ可き無しと觀じ、及び一切清淨無性の瑜伽の中の行に於て少法として證得せしめんと欲し、及び現觀せんと欲すること無しと觀ず。或は究竟清淨眞如を說いて名づけて瑜伽と爲す、理中の最極一切の功德共に相應するが故なり、入楞伽契經中に說くが如し、若し眞義を觀じて分別を除去し、瑕穢を遠離し、能取有ること無く、亦た所取無く、解無く、縛無し、爾の時定に在て當に瑜伽を見るべし、應に疑慮すべからず、大義經中に一法より增して百法に至るを說いて皆瑜伽と名づく、法門は別なりと雖も義違ふこと無が故なり。廣義經の中に蘊・界・處・緣起・諦等を說て皆瑜伽と名づく、一切の境を攝して機宜に順が故に、是の如き等の諸經論の中に於て、一切の境を說て皆瑜伽と名づく、總じて四性を具し四法に順ふが故なり。

[八]行瑜伽とは、謂はく一切行更(たがひ)に相順ずるが故に、正理に稱ふが故に、正敎に順ずるが故に、正果に趣くが故に說て瑜伽と名づく、此の行瑜伽は諸行に通ずと雖も然も諸經論は相に就き機に隨て種種に異說す、辯瑜伽師地經の中の如し、正しく諸行を修するを說て瑜伽と名づく、總じて一切相應の行を攝するが故に。月燈經の中に三十七菩提分法を修するを說いて瑜伽と名づく、此れ一切果に順ずる行の中に於て最も勝たるが故に。大分別六處經中に於て、奢摩他毘鉢舍那を平等に運道する

【八】行瑜伽を釋す。

謂く諸の有情は無始の時より來た、一切法處中の實相に於て無知疑惑し、顚倒僻執して諸の煩惱を起し、有漏の業を發し、五趣に輪廻して三大苦を受く、如來出世して其の所宜に隨て方便して爲に種種の妙法處中の實相を說き、諸の有情をして、一切の法は是の如く是の如く空なるが故に有に非ず、是の如く是の如く有なるが故に空に非ずと知て、諸法の非空非有に了達し、疑惑顚倒僻執を遠離し、其の種性に隨て處中の行を起し、漸次に修滿して其の所應に隨て永く諸障を滅し、三菩提を得、寂滅の樂を證せしむ。佛涅槃の後魔事紛起し、部執競ひ興て多く有の見に著す、龍猛菩薩極喜地を證し、大乘無相の空敎を採集し、中論等を造て眞要を究暢し、彼の有見を除く、聖提婆等の諸大論師、百論等を造て大義を弘闡す、是に由て衆生復た空見に著す、無著菩薩は位初地に登り、法光定を證し、大神通を得て大慈尊に事へ此の論を說かんことを請ひ、理として窮はめざる無く、事として盡さゞる無く、文として釋せざる無く、義として詮せざる無く、疑として遣らざる無く、執として破せざる無く、行として修せざる無く、果として證せざるは無し、正しくは菩薩の爲にし、諸乘の境と行と果等とに於て皆善巧を得、勤て大行を修し、大菩提を證せしめ、廣く有情の爲に常に無倒に說き、兼ねては餘乘の爲にし、自法に依て自分の行を修し自の果證を得しむ、是の如く略して此の論の所因を說く。

第三節　題名解釋門

今說く瑜伽師地論とは名義云何ん。

第一項　瑜伽の二字を釋す

謂く一切乘の境行果等の所有る諸法を皆瑜伽と名づく、一切並に方便善巧相應の義有るが故なり。

[七]境瑜伽とは、一切の境無顚倒の性、不相違の性、能く隨順する性、究竟に趣く性、正理教行果と

【七】境瑜伽を釋す。

第七項　破邪顯正對

復た二緣有り、故に此の論を說く、一には諸法の實相開顯し、問答決擇し、正論を立せんが爲めの故なり。二には一切の妄執を滅除し、問答決擇し、邪論を破せんが爲の故なり。

第八項　三性二諦對

復た二緣有り、故に此の論を說く、一には遍計所執の情有理無と、依他起性、圓成實性の理有情無とを顯了し、增益損減の執を捨てしめむが爲の故なり。二には世間と、道理と、證得と、勝義との法門差別を顯了し、二諦を修して無倒に解せしめむが爲の故なり。

第九項　二四理門對

復た二緣有り、故に此の論を說く、一には隨轉と眞實との二種の理門を開闡し、二藏三藏の法敎をして相違せざることを知らしめむが爲の故なり。二には因緣と唯識と無相と眞如との四種の理門を開闡し、觀行を修するに差別有らしめむが爲の故なり。

第十項　性相行果對

復た二緣有り、故に此の論を說く、一には境界の差別を示現して、諸法の自性と、相狀との位の差別を知らしめんが爲の故に。二には修行の差別を示現して三乘の方便と、根本との果の差別を知らしめむが爲の故なり。

是の如き等の類の所爲の諸緣、處處の經論、種種に異說す。當に知るべし、皆是れ此の論の所爲なり。

第二節　敎起所因門

今此の論を說く所因云何。

復た二緣有り故に此の論を說く、一には或は多く空を說く不了義理に於て、言の如く計著して一切を撥無して有敎を憎背する有り、隨つて、諸法の有相を悟り、經の密意を解り、無の見を捨てしめむが爲の故なり。二には復た多く有と說くを了義經に於て言の如く計著して一切有りと執して、空敎を厭怖する有り。隨つて諸法の無相を悟り、經の密意を解り有の見を捨てしめむが爲の故なり。

第四項　三乘利益對

復た二緣有り、故に此の論を說く、一には菩薩種性を成就せる補特伽羅は、唯だ大敎に依て、遍く諸乘の文義行果に於て巧便智を生じ、一切の障を斷じ、一切の善を修し、佛菩提を證して未來際を窮めて自他の利樂休廢無からしめんが爲の故に。二には二乘の種性を成就せると、及び無種性との補特伽羅亦た大敎に依て各の自乘の文義行果に於て巧便智を生じ、煩惱障を斷じ、諸の蓋纏を伏し自分の善を修し自乘の果を得、三界と諸の惡趣とを出離せしめむが爲の故なり。

第五項　內外迷謬對

復た二緣有り故に此の論を說く、一には或は宿習の無知、猶豫し顚倒して外道小乘の邪敎を執著す。故に大乘に於て信解すること能はざる有り、善く大乘の法相を分別し、其をして信解し了達し、決定して顚倒を離れしめんが爲の故に。二には復た諸の契經の種種の意趣甚深にして解し難きを聞き、其の心迷亂し誹毀して信ぜざる有り、善く開示して信解を生ぜしめ、彼を饒益せしめんが爲の故なり。

第六項　廣略樂欲對

復た二緣有り、故に此の論を說く、一には略言論を樂ひ、勤て修行する者を攝益せんが爲めに衆經の廣要の法義を採集し、略して分別せんがための故なり。二には廣言論を樂ひ、勤めて說法する者を攝益せんが爲めに、一一の法に於て無邊差別の義を開示せしめんがための故なり。

[六]此の論の殊勝なることは蓮華の若く、猶ほし妙寶藏のごとく大海の如し、具に諸乘の廣大の義を顯し、善く其の文を釋して遺有ること無し。

第二節　辨　意　分

此の瑜伽大論の中に於て、我今力に隨て少分を釋す、正法をして常に盡くること無からしめ、諸の含識を利益し安樂せんが爲なり。

第二章　正宗釋義分

第一節　造論所爲門

第一項　法住利益對

今此の論を説く所爲は云何ん。謂く二緣有るが故に此の論を説くなり、一には、如來無上の法教をして久く世に住せしめんが爲の故なり。二には、平等に諸の有情を利益し安樂せんが爲めの故なり。

第二項　教興得樂對

復た二緣有り故に此の論を説く。一には如來甘露の聖教の已に隱沒せる者は、憶念採集して重ねて開顯せしめんが爲めの故に、未だ隱沒せざる者は問答決擇して倍興盛ならしめんがための故なり。二には一切有情界の中に有種性の者は、各ゝ自乘に依て出世の善を修して三乘の果を得、生死を出さしめんが爲の故に、無種性の者は人天乘に依て世間の善を修して人天の果を得、惡趣を脫せしめんがための故なり。

第三項　有空對治對

【六】所釋の論を讃す。

瑜伽師地論釋

最勝子等諸菩薩造る
唐三藏法師玄奘詔を奉じて譯す

【本文】本地分中五識相應地の一

第一章 歸敬辨意分

第一節 歸敬序

第一項 通敬序

[一]天人大覺尊の福德智慧皆圓滿せると、[二]無上文義の眞妙法と、[三]正知受學の聖賢衆とを敬禮す。

第二項 別敬序

[四]無勝大慈氏、普く諸の有情を利樂せんが爲めに廣く衆經の眞要義を採て五分瑜伽を略說せる者に稽首す。

[五]法流妙定力、發起の無著功德の名、能く聖者の無勝海に於いて、最極法の甘露を引出す。美音を餐受して自ら滿足し、復た諸世間を饒益せんが爲めに、無窮の字華の雨を等注して、牟尼の如意樹を榮潤するに歸命す。

【一】佛寶に歸敬す。天人の師たる大覺尊なり。
【二】法寶に歸敬す。
【三】僧寶に歸敬す。
【四】本論師を歸敬す。
【五】發起主を歸敬す。

年、學成り業畢つて踵を旋らし唐に歸り。大唐第二主太宗皇帝貞觀十九年正月二十四日を以て京郊の西に屆る。其の年五月勅を奉じて弘福寺に於て創めて譯場を開き、爾來龍朔三年に至るまで十九年の間、翻出する所の經論都て七十三部一千三百三十卷。唐第三主高宗帝の麟徳元年二月五日中夜玉華寺に在つて入寂す。時に年六十五。我朝の天智天皇三年に當る。今昭和十年に至つて一千二百七十一年前である。

本書は玄奘法師が貞觀二十二年五月十五日、瑜伽論百卷の翻譯を完了した翌年の永徽元年二月一日大慈恩寺の翻經院に於て譯出せられたもので、沙門大乘暉法師の筆受である。

昭和十年二月八日

譯者加藤精神識

瑜伽師地論釋解題

一、本書の梵本と譯本

本書は瑜伽師地論一部百巻の末釋にして、護法菩薩の門人最勝子等の諸菩薩の所造である。本書の梵本は頗る廣多にして、三藏全譯に暇なく但だ總說を翻じて以て一巻十九紙としたのである。故に倫記一上に曰く「三藏の言に依れば釋論を略して譯すれば應に五百巻なるべく、總じて譯すれば八百許りあるべし」と。又增明記一に曰く「眞空法師三藏の言を傳ふ。瑜伽釋は若し具に譯すれば應に五百巻なるべく、若し本釋總合して具に譯せば六百巻許りなるべし」と。兩說少異ありと雖も本書の梵本が如何に廣多なりしかを推知するに足るのである。高麗本には本書の題號の下に「一巻」の二字がある。蓋し本書の全譯にあらざることを示さんとした譯者の微意であらう。

二、本書の造主

最勝子は唯識十大論師の隨一人である。成唯識論述記一本に曰く「九には梵に辰那弗呾羅と云ひ、唐に勝子と云ふ。護法菩薩の門人なり」と。西域記十一に曰く「北印度の鉢伐多國の大都城の側に大伽藍あり、僧徒百餘人あり並に大乘敎を學ぶ即ち是れ昔し愼那弗呾羅（唐に最勝子と言ふ）論師此に於て瑜伽師地の釋論を製す」と。慈恩傳四巻も亦同なり。「等」の字は餘の諸菩薩を等じて衆多の菩薩の會議し研究せし結果であつて、最勝子の獨造にあらざることを明かにしたものである。彼の成唯識論に「護法等菩薩造」と標するが如くである。然るに貞元錄第十一巻に「等諸」の二字を漫りに削除せるが如きは甚しき不注意である。

又瑜伽論七十五に引く解深密經に如理諸問菩薩が解深密菩薩を指して「最勝子」と敬稱せしことを、倫記に釋して曰く、「佛は是れ最勝なり。彼の菩薩は是れ最勝の子なることを明して最勝子と名づく、舊に佛子と云ふ」とあれば今の最勝子の名も亦其の由來する所を知るべきである。

三、譯主と譯時

玄奘三藏の傳は慈恩傳十巻を初め、續高僧傳四五兩巻、開元錄八、貞元錄十一、西域記十二等に詳かであるが、法師は年二十九にして渡天傳敎の志を發して遂に西天に達し、諸の明師に從ひて咸く鴻疑を決す、典籍を訪ひ聖跡を拜して、國を經ること百有餘國、年を積むこと十有七

増賀記について

増賀記に就いて既刊瑜伽部三の脚註に於て、最後に纏めて附加することに約束したが、いざ國譯するとなると、その原典の餘りに粗笨なるを發見し判讀するさへ可成の時日を空費する狀態で到底差迫つた出版期日迄に間に合ひさうもないから殘念ながら、此の機會に附加することが出來なかつた。後日好機を見て増賀記七卷を全譯し瑜伽論研究者の便に供する心算である。

盡・無生智なり、斯より已後を煩惱を斷じて復た應に知るべき無しと爲す。斷究竟とは、謂はく遍く諸の煩惱斷を究竟す。彼れ斷ずるに由るが故に圓滿究竟して心解脫及び慧解脫を證す。

第三節　本母事序辯攝を總結す

是の如く略して此の論の境智相應に隨順する摩呾理迦の所有る宗要を引けり、其の餘の一切は此の方隅に隨つて皆な當に覺了すべし。遍行の一切の摩呾理迦は攝釋分の如く應に其の相を知るべし。

第四節　攝事分全部を總結す

如來の法教の數は限量無し、何ぞ能く窮めて無邊の彼岸に到らん。此の方隅に隨ひ、此の引發に隨ひ、此の義趣に隨うて、諸の聰慧者は餘の一切に於て應に正尋思すべく、應に正覺了すべし。

瑜伽師地論（終）

を對治するなり。上品道とは、謂はく能く下品の煩惱を對治するなり。

（九）對治を解す　復た四種の對治あり、一には厭壞對治、二には斷滅對治、三には任持對治、四には遠分對治なり。

（十）行を解す　復た十六行相あり、謂はく諸諦を觀じて無常等と爲すなり、前に已に辯ぜるが如し。

（十一）修習を解す　復た八種の修習あり、是の如き對治、是の如き行相、是の如き修習は前の定地及び聲聞地の如く應に其の相を觀ずべし。

（十二）有漏無漏法を解す　復た二品ありて一切法を攝す、一には有漏法、二には無漏法なり。此の二法は前の如し、應に知るべし已に辯ぜりと。

（十三）諸果を解す　復た五果あり、一には異熟果、二には等流果、三には離繫果、四には士用果、五には增上果なり。

（十四）因を解す　復た十因あり、一には隨說因、二には觀待因、三には牽引因、四には攝受因、五には生起因、六には引發因、七には定異因、八には同事因、九には相違因、十には不相違因なり。

（十五）緣を解す　復た四緣あり、一には因緣、二には等無間緣、三には所緣緣、四には增上緣なり。是の如き一切の果と因と及び緣とは菩薩地等に已に其の相を辯ぜるが如し。

（十六）補特伽羅を立つるを解す　復た七種の補特伽羅あり、謂はく隨信行等なり、復た六種の阿羅漢あり、謂はく退法等なり、復た八種の補特伽羅あり、謂はく行四向及び住四果の建立なり、應に知るべし聲聞地の如しと。

（十七）遍知を解す　復た六種の遍智あり、一には不定地の有漏諦遍智、二には定地の有漏諦遍智、三には無漏無爲諦遍智、四には無漏有爲諦遍智、五には順下分結遍智、六には順上分結遍智なり。

（十八）究竟を解す　復た二種の究竟あり、一には智究竟、二には斷究竟なり。智究竟とは、謂はく

（二）諸依を解す　一切の異生に復た九依ありて能く諸漏を盡す、何等を九と爲すや。謂はく未至定と若しは初靜慮と靜慮中間と餘の三靜慮と及び三無色となり、第一有を除く。

（三）諦を解す　復た四聖諦あり、能く惑所を盡淨することを爲す。

（四）智を解す　復た十智あり、能く一切の所知の境界を覺す、謂はく法智と類智と若しは世俗智と若しは他心智と、若しは苦等の智と盡と無生智となり。此れ廣く分別することは聲聞地の如し。

（五）加行を解す　又瑜伽師に五の加行あり、一には正性離生に證入せんと欲するが爲め、二には上果を得んが爲め、三には離欲に進まんが爲め、四には轉根せんと欲するが爲め、五には功德を引かんが爲めなり。

（六）三摩地を解す　復た瑜伽の三三摩地あり、一には空三摩地、二には無願三摩地、三には無相三摩地なり。

（七）根を解す　復た三種の一切の行向住果の者の根あり。一には未知欲知根、是れ預流果向を行ずる者の根なり。二には已知根、是れ預流果已上、乃至阿羅漢果向を行ずる者の根なり。三には具知根、是れ阿羅漢果に住する者の根なり。

（八）道を解す　復た九道あり、云何んが九と爲すや。一には世間道、二には出世道、三には加行道、四には無間道、五には解脫道、六には勝進道、七には下品道、八には中品道、九には上品道なり。世間道とは、謂はく此に由るが故に能く世間の諸の煩惱斷を證し、或は斷を證せず能く善趣に往き、或は惡趣に往くなり。出世道とは、謂はく此に由るが故に能く究竟の諸の煩惱斷を證す。加行道とは、謂はく惑を斷ぜんが爲めに加行を勤修するなり。無間道とは、謂はく正しく惑を斷ずるなり。解脫道とは、謂はく斷の無間に心に解脫を得るなり。勝進道とは、謂はく此より後、勝加行を發するなり。下品道とは、謂はく能く上品の煩惱を對治するなり。中品道とは、謂はく能く中品の煩惱

第四目　自性等を解す

又一切の法の一一の自性に第二の自性として得可き無し。又定んで同類の二法一時に相應するある無し、即ち第二の自性無きに由るが故なり。又一法に乖異の相二種の作用あるに非ず。又一切の行は他に依つて轉じて而も自に依らず。又自性と自性と倶なるに非ず、亦た隨轉せず、又即ち此の一刹那の心、此の刹那の心の與めに所縁と爲るに非ず。

第五目　因等を解す

又即ち此の刹那の自性此の刹那の自性の與めに因と爲るに非ず、亦た後生は前生の因と爲るに非ず、亦た同類は異類の因と爲るに非ず、不善を善に望め、善を不善に望むるが如し、而も無記の異熟果の因と作る。

第六目　廣く地等を解す（二頌に十八門あり）

廣く地等を說かん、嗢拕南に曰く、

『初めは諸地と諸依となり、次は諦と智と加行と、三摩地と根と道と、對治と行と修習と、有漏無漏法と、諸果と諸の因と緣と、補特伽羅を立つるとにして、後は遍智と究竟となり。』

（一）諸地を解す　九種の地あり、何等を九と爲すや。一には資糧地、二には方便地、三には觀行地、四には見地、五には修地、六には有學地、七には無學地、八には聖者地、九には異生地なり。先づ應に出世の資糧を積集し、次に漏を盡さんが爲に方便を勤修し、次に隨順決擇分を修する時に諸諦を正觀し、次に能く正性離生に證入し、次後漸く四沙門果を證す。此の中前の三は是れ有學地なり、其の第四果は是れ無學地なり。離生を證し已つて一切世間に漸く昇進する道を名づけて修地と爲し、即ち總じて見を攝す。學と無學地とを聖者地と名づけ、此の餘の一切を異生地と名づく、謂はく若しは未だ加行を修せず、若しは已に加行を修し、若しは已に離欲せるなり。

第三目　成就等を解す

或は一類の補特伽羅有り、善法と及び無記法とを成就するも、不善法には非ざるなり、謂はく諸の聖者の已に欲貪を離れ及び此の異生の種子法を除けるなり。或は一類の補特伽羅有り、不善と及び無記法とを成就するも、諸の善法には非ざるなり、謂はく斷善根の補特伽羅にして種子法を除き、善不善の法を成就することあること無く、無記法には非ず、或は唯だ不善、或は唯だ無記のみ而も得可き者なり。又此の中に於て應に諸法を其の所應の如く若しは得若しは捨するを知るべし、謂はく一類あり、所受を受くるに由るが故に、或は所受を捨するが故に、或は邪推求するが故に、或は正推求するが故に、或は形を轉ずるが故に、或は法爾なるが故に、或は離欲の故に、或は加行の故に、或は退失の故に。或は得果の故に、或は死生の故に而も得捨あり、別解脫律儀等の法の如く彼を受くるに由るが故に得、彼を捨するに由るが故に捨す。若しは諸善法を邪推求するに由るが故に捨し、正推求するに由るが故に得、形を轉ずるに由るが故に苾芻律儀或は苾芻尼律儀を捨し、其の一二形の生ずることを得るに隨ふが故に一切永捨す。法爾に由るが故に世間壞する時能く法爾に所得の靜慮に入る、離欲に由るが故に能く上地の所有る善法を得、加行に由るが故に能く彼に依つて引く所の功德を發し、現在前せしめ、退失するに由るが故に還つて先時の諸の下劣法を得、得果に由るが故に諸の世法を捨て、出世法及び後の明淨の世間善法を得。死生に由るが故に若し下に生ずる時は生得善及び不善無記の諸法を獲、若し上に生ずる時は唯だ善法及び無記法を得。諸有る所捨を其の所應の如く亦た隨つて覺了し、相違あること無く、諸の心心所而も共に相應し、及以び相攝す、卽ち此の刹那の行還つて此の刹那と與なり。又一切の生死の諸行の永斷す可き法無し。又諸行先より未だ曾て生ぜずして欻然として起らしめず。又一切の行皆な刹那に生じ、生ぜる刹那の後必ず停住すること無く。諸行一たび生じ、一たび住し、一たび滅す。

世間と爲す、若し能く此れを治する世俗諦に依りて起す所の俗智及び所引の法を亦た世間と名づく、此れと相違するを出世間と名づく。(十四)若し諸の世間は墮攝法と名づく、有情の器たる欲・色・無色の世間の攝に墮するが故なり。若し出世間は非墮攝法なり、前說の世間の攝に墮せざるが故なり。

(八)道理の差別を明す　云何んが道理の差別を建立するや。謂はく四道理あり、一には相待道理、二には證成道理、三には作用道理、四には法爾道理なり。是の如き道理の差別の分別は聲聞地の如く應に其の相を知るべし。是の如き八種の品類差別及び前所說の異門と體相と釋詞との差別は應に知るべし前に廣略して序せる所、一切事中に能く正に廣く辯ぜるが如し、此に過ぐる辯無しと。

第三項　一頌を擧げて六門を列釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『初めは聚と相攝等となり、其の次は成就等と、自性等と因等とにして、後に地等を廣說す。』

第一目　聚を解す

九法聚あり、一切の法を攝す。何等を九と爲すや、一には善法聚、二には不善法聚、三には無記法聚、四には見所斷法聚、五には修所斷法聚、六には無斷法聚、七には邪性定法聚、八には正性定法聚、九には不定法聚なり。善等法聚は廣く意地に已に其の相を辯ぜるが如し。見所斷法聚とは、謂はく一切の見、若しは見等に依る貪瞋癡慢、若しは惡趣業、若しは諸諦に於て猶豫する疑等なり。修所斷法聚とは、謂はく餘の一切の應に斷ずべき所の法なり。無斷法聚とは、謂はく無漏法なり。邪性定法聚とは、謂はく無間業と及び斷善根となり。正性定法聚とは、謂はく學と無學との所有る諸法なり。不定法聚とは、謂はく餘の非學非無學法なり。

第二目　相攝等を解す

應に此の中の所有る諸法の自性の相攝他性の相應を知るべし。

に差別あるが故に應に知るべし無色の諸法の所有る麁細を建立すと。又有色法無色法は世俗勝義諦の理の了じ易く了じ難きに由るが故に應に知るべし麁細の二種差別すと。微は謂はく極微聚なり、著は謂はく所餘の聚なり、淨は謂はく中有の上地の色聚なり。穢は謂はく餘有の下地の色聚なり。勢用と言ふは、謂はく若し是の處に地大等あらんに、勢用增强し、餘聚と其の物量等しと雖も、而も能く餘に勝れて麁顯にして得可きなり。輭等の品類に差別ありとは、謂はく樂等の諸受、信等の諸法に輭中上の品類の差別あるなり(四)。執受法とは、謂はく諸の色法心心所の爲に執持せられ、彼に託するに由るが故に心心所轉ずるに安危の事を同うするなり。安危を同じうすとは、心心所の任持する力に由るが故に其の色、不斷不壞不爛なり、卽ち是の如く執受する所の色或時は衰損し、或時は攝益するに由りて其の心心所も亦た隨つて損益す。此れと相違するを非執受と名づく。(五)有色と言ふは、謂はく能く方所に據る、無色と言ふは、謂はく方所に據らざるなり、此は所緣の領納流轉には、約して施設し建立す。(六)有見と言ふは、謂はく若し諸色の眼識及び所依等の爲に此彼に有りと示すに堪へ明了に現前するなり、此れと相違するを名づけて無見と爲す。(七)有對と言ふは、謂はく若し諸色の能く他の見を礙へ他の往來を礙ふるなり。此れと相違するを名づけて無對と爲す。(八)有爲と言ふは、謂はく生滅繫屬する因緣あるなり、此れと相違するは應に知るべし無爲なりと。(九)有漏と言ふは、謂はく若し諸法諸漏の所生、諸漏の麁重の隨縛する所にして諸漏の相應、諸漏の所緣の能く諸漏を生じ、去來今に於て漏の依止と爲るなり、此れと相違するは應に知るべし無漏なりと。(十)能く當來の生等の衆苦の與に生因と爲るが故に、現法中に於て有罪性なるが故に名づけて有諍と爲す、此れと相違するを名づけて無諍と爲すと。(十一)內門の自體に愛染して隨ふが故に有愛味と名づけ、此れと相違するを無愛味と名づけ、(十二)外門の境界に愛著して隨ふが故に依耽嗜と名づけ、此れと相違するを依出離と名づく。(十三)若し法の有漏、有諍にして有愛味、依耽嗜。是の如き一切を名づけて

（五）相續の差別を明す　云何んが相續の差別を建立するや。當に知るべし相續に略して四種あり。自他の根と境とに差別あるが故に四の相續を立つ、一には自身相續、二には他身相續、三には諸根相續、四には境界相續なり。二は是れ假りの建立、二は是れ眞實の義なり。

（六）分位の差別を明す　云何んが分位の差別を建立するや。謂はく苦の分位、樂の分位、不苦不樂の分位なり。卽ち是れ能く三受に順ずる諸法なり。

（七）品分の差別を明す　云何んが品分の差別を建立するや。當に知るべし所治・能治の二品の差別を建立すと。謂はく染不染法、下劣勝妙法、麁細法、執受非執受法、有色無色法、有見無見法、有對無對法、有爲無爲法、有漏無漏法、有諍無諍法、有愛味無愛味法、依耽嗜依出離法、世間出世間法、墮攝非墮攝法なり。（一）當に知るべし此の内五の因緣に由りて染法を建立すと。一には三受の中に於て其の所應の如く雜染を爲すが故に、二には能く遍く諸の煩惱品の麁重性を攝受するが故に、三には能く遍く現法當來の非愛の果を攝受するが故に、四には能く遍く連りて結生し相續するが故に、五には能く遍く一切の善法及び所知障に於て智の生ずるを障礙するが故なり。是の因緣に由りて名づけて染法と爲す、是れと相違するは應當に了知すべし。不染法の相なりと。此の不染法に略して二種あり、謂はく善と無記となり。（二）臭爛不淨及び煩惱不淨に由るが故に不淨と名づけ、此の中に於て諸の所有る受は皆な悉く是れ苦なるに由るが故に名づけて苦と爲し、無常性なるに由るが故に不堅と名づく。若し是の如き勝義の道理に由らば性となり是れ不淨、性となり是れ苦、性となり是れ不堅なり、其の性鄙穢なれば名づけて下劣と爲す、此に超過するは應に知るべし勝妙なりと。又相待するが故に下劣勝妙の二相差別す、謂はく色界に待すれば欲界は是れ劣なり、無色界に待すれば色界は是れ劣なり、若し涅槃に待すれば三界は皆な劣なり、是の如き等の類を應に當に了知すべし。（三）微著の差別の故に、淨穢の差別の故に、勢用の差別の故に應に知るべし色趣の麁細を建立すと。輭等の品類

可き無し、此れ前及び後、與に現じて異り無きなり。時分の別とは、謂はく一切の行は唯だ刹那のみ住す、卽ち此の自體を還つて自體に望めて說いて不異と爲し、刹那を過ぎたる後を說いて名づけて異と爲す。彼を種と爲すに由りて此れ生ずることを得るを說いて所因と爲す。若し眼等及び大種等を依と爲して轉ずるに由るを說いて所依と名づく。若し一切の行の別別の功能は說いて作用と名づく。是の如きを名づけて第一の有非有・異非異の性の品類差別を建立すと爲す。

(二)界地の差別を明す　云何んが界地の差別を建立するや。謂はく欲と色と無色との三界の差別なり。欲界と言ふは、謂はく下無間より上他化を越え、魔羅宮に至るまでの其の中の諸行は皆な欲界の煩惱に因りて生ずる所にして、其の三世に於て彼の煩惱の與めに所依止と爲り、彼の品の麁重の隨縛する所にして彼が爲に繫せらる。又欲界の中にては一切の煩惱を全く未だ離欲せず、定地の攝に非ず。色と無色との界は一切の煩惱を一分離欲す、定地の所攝なり。餘の煩惱の相は前の如く應に知るべし。色界と言ふは、謂はく四靜慮と並に靜慮の中間とに十七地あり。無色界とは、謂はく空處等の四無色地なり。

(三)時分の差別を明す　云何んが時分の差別を建立するや。謂はく過去世に於て無間に已に滅せるあり、隣近にして已に滅せるあり、久遠にして已に滅せるあり、未來世に於て無間に將に生ぜんとするあり、隣近にして當に生ずべきあり、久遠にして當に生ずべきあり、現在世に於て刹那現在するあり、衆同分の現在するあり、相續して未だ滅せず現在するあり。

(四)方所の差別を明す　云何んが方所の差別を建立するや。謂はく有色の諸法は處所に據るが故に遠近い方所の差別あることを得、無色の諸法は無色に由るが故に處所に據ること無し。若し色法に依りて生起することを得ば卽ち其の處に於て方所ありと說くも、此は相を轉ずるに由るが故なり、處所に據るが故には非ず、有色の諸法は具に二種に由る。

此の聚を顯了す、是の故に說いて聚集假有と名づく。(二)因假有とは、謂はく未來世に生ず可き法行は未だ生ぜざるに由るが故に實有に非ずと雖も、而も其の因の當に生ず可きあるが故に因假有と名づく。(三)果假有とは、所謂はる擇滅[二]は是れ道果なるが故に無と說く可からず、然れども實有には非ず、唯だ已に一切の煩惱を斷じ、當來世に於て畢竟じて生ぜざるに約して假立するが故なり。(四)所行假有とは、謂はく過去世に已に滅せる諸行は唯だ現前の念所行の境となる、是の故に說いて所行假有と名づく、已に謝滅するが故なり、而も實有には非ず。(五)分位假有とは、謂はく生等の諸の心不相應行なり、前の意地に已に標し辯釋せるが如し、卽ち諸行に於て前後の有及び非有に依りて同類異類相續する分位に假に生等を立つるに由る、此の生等の諸行を離れて外に眞實の體として別に得可きあるに非ず。(六)觀待假有とは、謂はく、[三]虛空・非擇滅等なり。虛空無爲は諸の色趣に待して假に建立す、若し是の處に於て色趣の有るに非ざるを假に虛空と說く、色無の顯はす所の法を離れて、外に別に虛空の實體として得可きあるに非ず、無の所顯を實有と名づくることを得るに非ず。[四]諸行の俱に生起せざるを觀待し、未來世の不生の法の中に於て非擇滅の無生の所顯を立てゝ、假に說いて有と爲す、無生の所顯を說いて實有と爲す可きには非ず。

(3)云何んが[五]勝義有なりや。謂はく其の中に於て一切の名言、一切の施設を皆な悉く永斷し、諸の戲論を離れ、諸の分別を離れたるを善權方便して說いて法性・眞如・實際・空・無我等と爲す、菩薩地の眞實義品第四の所知障淨智所行眞實の如く應に其の相を知るべし。上と相違するは當に知るべし非有なりと。

(4)又四種の別無別に由るが故に應に知るべし異不異の性を建立すと、一には所因の別無別に由るが故に、二には所依の別無別に由るが故に、三には作用の別無別に由るが故に、四には時分の別無別に由るが故なり。若しは所因等の諸法の異相差別得可し、此れ餘に異るなり。若しは異相差別の得

【二】擇滅とは無漏の智慧の簡擇力にて煩惱を斷じたる所に顯はれたる無爲の理を云ふ、卽ち涅槃なり。

【三】虛空とは虛空無爲、非擇滅とは非擇滅無爲なり。

【四】生ずべき諸行の緣闕けて生ぜざる所に非擇滅無爲を立つ、非擇滅無爲とは擇滅無爲の如く簡擇力にて煩惱を斷じて得たる眞如に非ざるが故に非擇滅無爲と云ふ。

(3)勝義有を解す。

【五】勝義有とは離言絕慮の眞如を云ふ、されば今權りに强ひて名づけ眞如と云ひ、實際と云ひ、空と云ひ、無我と云ふのみ。

(4)四種の別無別に由る異不異の性を解す。

又一切の事に要を以て之を言はゞ、總じて五事あり、一には心事、二には心所有法の事、三には色の事、四には心不相應行の事、五には無爲の事なり。

第二目　略して五事と爲して廣く辯ず

云何んが卽ち是の如く略して序する所の事に依りて後に當に廣く辯ずるや。謂はく略して四相に由りて廣く彼の事を辯ず。何等を四と爲すや。一には異門差別の故に、二には體相差別の故に、三には釋詞差別の故に、四には品類差別の故なり。異門と體相と釋詞との差別は攝釋分の如く應に其の相を知るべし。品類の差別に復た八種あり、一には有非有異非異の性の差別を建立し、二には界地の差別を建立し、三には時分の差別を建立し、四には方所の差別を建立し、五には相續の差別を建立し、六には分位の差別を建立し、七には品分の差別を建立し、八には道理の差別を建立するなり。是の如き等の八種の差別に由りて一切の事の品類の差別に於て應に隨つて覺了すべし。

(一)有非有、異非異の性の差別を明す　云何んが有非有・異非異の性の差別を建立するや。謂はく若し略して說かば三種の有あり、一には實有、二には假有、三には勝義有なり。

(1)云何んが實有なりや。謂はく諸の法を詮表するに名の得可きあり事の得可きあり、此の名は事に於て無礙にして轉ず、或る時は轉じ或る時は轉ぜざるには非ず、當に知るべし是れを略して實有を說くと名づくと。色等の諸の法聚の中に於て墉室軍林草木衣食等の相を建立するが如き、相は唯だ此の聚に於て隨轉し、餘に於ては退還す、色等の諸の相は一切處に於て皆な悉く隨轉す、是の故に此の相の所詮は實有なり、當に知るべし餘の相の所詮は假有なりと。

(2)又此の假有に略して六種あり、一には聚集假有、二には因假有、三には果假有、四には所行假有、五には分位假有、六には觀待假有なり。(一)聚集假有とは、謂はく世間に隨順する爲の言說は解了し易きが故に五蘊等の總相に於て我及び有情、補特伽羅、衆生等の想を建立す、此の想は唯だ能く

(1)實有を解す。
(2)假有を解す。

し、二には即ち是の如く略して序する所の事に依りて後當に廣く辯ずべし。

云何んが名づけて先づ略して事を序すと爲すや。謂はく流轉の雜染品の事と及び還滅の淸淨品の事とを序するなり。

第一目　染淨事を明して廣く辯ず

云何んが流轉雜染品の事なりや。謂はく六識身の自性と所依と所緣と助伴との事、若しは蘊・界・處の事、若しは諸の緣起・處非處の事、若しは三受の事、若しは三世の事、若しは四緣の事、若しは諸業の事、若しは煩惱の事、若しは三界の事、謂はく欲界等なり。若しは十有の事、謂はく欲有と色有と無色有と那落迦有と傍生有と鬼有と天有と人有と業有と中有となり、欲の善趣惡趣を別離し招引趣向に差別あるに由るが故なり、若しは十一識住の事、謂はく四識住と七識住と總合して說くが故なり、若しは九有情居の事、經に廣說せるが如し、若しは五趣の事、若しは四生の事、若しは四入胎の事、若しは四の得の自體の事、若しは四食の事、若しは四言說の事、若しは四法受の事、若しは四顚倒の事、若しは苦諦の事、若しは集諦の事、是の如き等の類を名づけて略して流轉雜染品の事を序すと爲す。

云何んが還滅淸淨品の事なりや。謂はく滅諦の事、若しは道諦の事、若しは三摩地の事、若しは諸智の事、若しは此より引く所の諸の功德の事、若しは七正法の事、若しは七正作意觀察の事、若しは三十七菩提分法の事、若しは四行迹の事、若しは四法迹の事、若しは奢摩他・毘鉢舍那の事、若しは四修定の事、若しは三福業の事、若しは三學の事、若しは四沙門果の事、若しは四證淨の事、若しは四聖種の事、若しは三乘の事、若しは四問記の事、是の如き等の類を名づけて、略して還滅淸淨品の事を序すと爲す。是の如き等の事に廣く建立を辯ず、其の所應に隨つて前の所說の彼彼の地の中及び諸の攝分の如く應に其の相を知るべし。

第一節　結　前　問　後

是の如く已に毘奈耶事の摩呾理迦を說けり。云何なるを名づけて摩呾理迦の事と爲すや。謂はく若しは素呾纜の摩呾理迦、若しは毘奈耶の摩呾理迦を總略して一摩呾理迦と名づく、更に別の摩呾理迦無しと雖も、然れども流轉と還滅と雜染と淸淨とを略攝して雜へて說法せんが爲の故に我れ今復た法相を分別する摩呾理迦を說く。

第二節　總じて綱要を標し、嗢拕南を擧げて釋す

嗢拕南に曰はく、

『要らず餘に由り餘を釋す、即ち此を此と釋するに非ず、前に於て略して事を序し、自後當に廣く辯ずべし。』

第一項　頌の前半即ち釋義の方軌を辯ずることを解す

若し諸法の應に他に說くべきあらば要ず餘門を以て先づ總じて標擧し、復た餘門を以て後に別して解釋す、若し是の如くならば正理に順ずと名づく。即ち此の門を先づ總じて標擧して、還つて此の門を以て後に別して解釋するに非ず。先づ總じて云何んが有爲なりやと擧げ、後に別して釋して所謂五蘊なりと言ふが如し、若し是の如くならば正理に順ずと名づく。先づ總じて云何んが有爲なりやと擧げ、後に別して釋して所謂有爲なりと言ふには非ず。是の如き一切を應に隨つて覺了すべし。

第二項　頌の下半即ち序辯の前後を解す

略して二相に由りて應に知るべし法相を分別する摩呾理迦を建立すと、一には先づ略して事を序

の所應の如く發趣の所生、憂悔の所生及び俱所生の所有る煩惱邪欲尋求に於て應に正しく除遣すべく、上の解脫に於て應に正しく了知するべく、第四は唯だ後の上の解脫に於て應に正しく了知すべし、若し能く是の如くならば一切は當に平等平等なることを得べし。

第十一目　三種の邪行を解す

復次に、三學の中に於て當に知るべし略して三種の邪行ありと、謂はく一類の補特伽羅あり、先に涅槃を求め而も出家を樂ひ、出家し已つて後天の妙欲の爲めに愛味に漂はされ、受持する所の戒を善趣に廻向し、唯だ尸羅を護りて便ち喜足を生ず、是れを外結の補特伽羅の增上戒に於ける第一邪行と名づく。復た一類の補特伽羅あり、唯だ戒を護りて便ち喜足を生ぜず、而も能く上の諸の世間隨一の靜定を趣證し、即ち此の定に於て深く味染を生じて進んで上聖諦現觀を求めず、是れを內結の補特伽羅の增上心に於ける第二邪行と名づく。復た一類の補特伽羅あり、是れ其れ有學にして已に諦迹を見たるも、放逸に住するに由りて現法中に於て般涅槃せざるを當に知るべし是れを增上慧に於ける第三邪行と名づくと。

第三節　結して覺了を勸む

是の如く略して此の論の境智相應に隨順する調伏の宗要の摩呾理迦を引けり、其の餘の一切は此の方隅に隨つて皆な當に覺了すべし。

攝事分中[一]　本母事序辯攝

第五章　阿毘達磨の法相を分別する摩呾理迦を標釋す

【一】本母事序辯攝。上來經律二藏の種種分別の摩呾理迦を辯じ已れり。次下半卷は阿毘達磨分別法相の摩呾理迦を辯ず。阿毘達磨(Abhidharma)藏即ち對法藏は法相に依つて問答分別すれば種々の文義之に因つて出現するが故に本母と言ひ、或は餘の經律二藏の要義を生ずるが故に本母と名づく。序とは名を標し、辯とは其の名を辯釋するなり。此の序辯の中に一切諸法の相を攝するが故に攝と名づけ、或は此の文中に能く序辯の義を攝するが故に序辯攝といふ。

能く隨順す、是は能く違逆すと思惟し、既に了知し已つて其の所應の如く正修行し、能く正遠離す、是の如きを當に知るべし正智力と名づくと。若し信解の力は諸の諂詔を離れて少分の許妄分別あること無く、少分の開許せられたる中に於て多分なりと增益して現行を起すに非ず、多分の開許せられたる中に於て少分なりと損減して現行を起すに非ず、其の現行する所不增不減にして、是の如く最初に自ら欣慶を生ず、後に自他をして安樂にして住し、正行を修行せしめ、他を眩惑するに非ず、是の如きを當に知るべし質直力と名づくと。

第十目　五人の品類差別を解す

復次に、毘奈耶に依りて學する所の加行に應に知るべし五の補特伽羅の品類差別ありと、謂はく一類の補特伽羅あり、善說の法と毘奈耶との中に於て出家法に依りて始めて將に發趣せんとし、發趣せんと欲すと雖も仍ほ未だ出家せず、便ち煩惱邪欲尋求を生ず、是の緣を以ての故に遂に出家せず。復た一類あり、既に出家し已つて煩惱熾盛にして故思して罪を犯し、是の因緣に由りて諸の憂悔多くして便ち煩惱邪欲尋求を生ず。復一類あり、既に出家し已つて出家法に於て喜樂を生ぜず、捨の所學に於て將に發趣せんと欲し、及び出家に於て憂悔を發生し、而も是の念を作す、我れ好んで所謂出家と作るに非ずと、彼れは二緣に由りて煩惱邪欲尋求を發生す。復た一類あり、既に出家し已つて命難の因緣にも故思して所學に違越することを起さず、乃至命を盡すまで出家を愛樂し、梵行を勤修す、彼は二緣にて煩惱邪欲尋求を發生するに非ず。是の如き四種の補特伽羅は是れ異生の類なり。復た一類あり、謂はく諸の有學にして未だ解脫を得ず、即ち此を依と爲し、後の第一の心慧解脫に於て通達し昇進し、如實に了知す、是れを第五補特伽羅と名づく。即ち此の第五を前の第四の諸の異生類に望むるに調善にして可愛の有學の解脫は後の解脫に於て通達し昇進するに由つて而も差別あり、即ち此を當に已に諦迹を見たるものなりと知るべし。此の中前の三補特伽羅は其

く思惟し攝取す、質直忍辱柔和を依止と爲し、我を師とし、其の處に於て隨意自在にして、彼れ我が所に於て多く施爲することあるも、而も我れ彼に於て都て所作無からんと。是の如く思惟し攝取す、捷慧にして愛樂し、修福し、同梵行者を以て助伴と爲し、所有る僧事及び其の餘の事を皆な彼をして作さしめ、我れ獨り蕭然として自得して住せんと。是の如くして或は禁戒を毀犯するあり、同梵行者正に詰問する時便ち分明ならず、餘事に假託して所說あり、是の如きを名づけて矯僞を行じ、諂詔を行ずと爲す、處所に此の因緣に由りて諸の鬪諍を起す、餘は所應に隨つて當に其の相を知るべし。

(二)不信を反顯す　是れと相違して五種の法あり、未信者をして轉た不信を增さしめ、已信者をして尋いで還つて變革せしむ。

第九目　力を解す

復次に、毘奈耶に依りて勤學する苾芻は五力を成就し、一切種に於て等意にして正しく所有る加行を行ず。云何んが五力なりや。一には加行力、二には意樂力、三には開曉力、四には正智力、五には質直力なり。若し學を樂ひ、一切身分にて諸學の中に於て正しく善く修學し、又所學に於て最も極めて恭敬し、自ら調伏せんが爲め、般涅槃の爲にするあり、是の如きを當に知るべし加行力と名づくと。若し所犯あれば意樂に由るが故に速かに還つて出離す、是の如きを當に知るべし意樂力と名づくと。若し學處に於て時時に三藏を持つ者に請問する所有る自愛する諸の善男子の修學する所に應じて亦た能く開示す、是の如きを當に知るべし開曉力と名づくと。他より聞き已つて若し其の中に於て是れ眞是れ實なるを無倒に攝受し、若し其の中に於て僞なる毘奈耶像似正法諸の惡言說の法性に違背するを如實に了知し、彼に至りて躬ら請問を申べず、未だ開曉せざる所なりと雖も而も多聞なるが故に佛世尊の遮止したまはず亦た開許したまはざるに於て能く自ら沙門の性に於て是は

には吉祥處を計する見已に永斷せるが故に、五には非有を妄計して有と爲し、有を非有と爲る諸の顚倒の見已に永斷せるが故なり。

[3]軌則圓滿に亦た五種あり、謂はく(1)或は時務に依りて應に作すべき所の事、(2)或は善品に依りて應に作すべき所の事と(3)或は威儀に依りて應に作すべき所の事と(4)世間と及び(5)毘奈耶とに隨順する所有る軌則なり、廣說應に知るべし聲聞地の如し。[4]淨命圓滿に亦た五種あり、謂はく能く矯詐等の五の邪命を起す法を遠離す、聲聞地の如く應に其の相を知るべし。[5]展轉して鬪諍するを遠離する圓滿に略して六種あり、謂はく六種の鬪諍の根を離るゝが故なり、此の中六種の鬪諍の根とは、謂はく忿恨等なり、廣說、經の如し。又六處に依りて應に知るべし六鬪諍の根を建立すと。云何んが六處なりや。一には不饒益の相、二には樂つて己が過を隱し、憍慢し執持す、三には利養恭敬に欲愛現行す、四には增上戒行を毀犯し、五には增上心行を毀犯し、六には增上慧行を毀犯するなり。應に知るべし第一處に依りて第一の鬪諍の根本を建立し、乃至第六處に依りて第六の鬪諍の根本を建立すと。謂はく一類の補特伽羅あり、衆に識知せられ、廣く他處より多く利養を獲、是の因緣に由り毀犯する所あり、所犯の罪に於て樂つて隱藏せんと欲し、他をして己が所犯を知らしむることを欲せず、諸の苾芻あり、既に了知し已つて一に對し二に對し、或は衆多に對して其の犯事を擧ぐ。彼れ此に由るが故に一向に憂慼し、身心を燒惱し、又憍慢に執持せらるゝに由るが故に多く熱惱を生ず、彼れ復た他の衆人の前に對して我を呰責すること勿らんやと、是の如く彼の人先の所犯を隱すを說いて名づけて覆と爲す、又復た憍慢の煩惱を發起す、此の二を合して樂つて己が過を隱し憍慢を執持すと名づけ、是に由りて鬪諍の根本を建立す。復た苾芻あり、恭敬利養に欲愛現行し、他人の多饒なる財寶衆に知識せられ大福祐を具ふるあるを見れば則ち便ち親附し、殷重に承事し、愛するに非ず敬ふに非ず、亦た法を樂ふに非ず、專ら利養恭敬の因緣の爲めにす、是の如

(3)軌則圓滿。
(4)淨命圓滿。
(5)展轉して鬪諍するを遠離する圓滿。

づく、凡夫の趣く所なり乃至廣說。復一類あり、性と爲り慳貪にして慳垢に蔽はれ、幸に種種の養命の資緣あるに而も大に艱辛して以て自ら存活す、是れを第三現法損惱と名づく、凡夫の趣く所なり乃至廣說。云何んが慳垢なりや。謂はく八の慳垢あり、一には宿し慳貪を習ひ、惠施を串はざる慳垢、二には現法に上品に身命を顧戀する慳垢、三には同分友の共住し隨轉する諸の有情の所に於て悲を串習せず、悲心微劣の慳垢、四には田の寡德なるを見て正行を毀犯する慳垢、五には諸の財物に於て難得想を起す慳垢、六には三時に憂悔する慳垢、七には諸の財寶に於て唯だ功德を見て過患を見ざる慳垢、八には邪施に廻向する慳垢なり、當に知るべし是れを八種の慳垢と名づくと。復た一類あり、天趣を愛樂し、求めて天に生ぜんと欲するも、如實に生天の道路を知らず斷食し火に投じ、高巖より墜つる等自ら逼害を加ふ、是れを第四現法損惱と名づく、凡夫の趣く所なり乃至廣說。復た一類あり、淸淨を愛樂するも、如實に淸淨の道路を知らず、苦法を加へて淸淨を得と謂つて無量なる門を以て自ら逼害を爲す、是れを第五現法損惱と名づく、凡夫の趣く所なり乃至廣說。是の如き五種の現法逼惱を、毘奈耶に依りて勤學する苾芻は正遍知し、應に速かに遠離すべし。

第八目　信不信を解す

(一)信を辯ず　復次に、毘奈耶に依りて勤學する苾芻は五法を成就して未生信者は其をして信を生ぜしめ、已生信者は倍增長せしむ。云何んが五と爲すや。一には尸羅圓滿、二には正見圓滿、三には軌則圓滿、四には淨命圓滿、五には遠離展轉して鬪諍するを遠離する圓滿なり。(1)尸羅圓滿に略して十種あり、聲聞地に已に其の相を辯ぜるが如し。謂はく初め善く受持して太だ沈聚せず、太だ浮散せず、乃至廣說。

正見圓滿に略して五種あり、一には增益の薩迦耶見及び邊執見已に永斷せるが故に、二には損減撥無の邪見已に永斷せるが故に、三には取見、謂はく諸の見取及び戒禁取已に永斷せるが故に、四

(1)尸羅圓滿。

(2)正見圓滿。

攝する所の利の義利に此の五支を具へて正念に安住す、無染心を以て應に當に受用すべし、是の如く利養の義利を引攝するを名づけて無罪と爲す。

(二)他身の出罪の義利を引攝すとは、謂はく若し所犯の罪を彼れ實に現行するを是れを眞實と名づく。若し復た自ら我れ能く彼をして不善處を出で善處に安置せしむと知る、是の如きを名づけて能引義利と爲す。若し他の說法し、尊長に敬事し、病等を恭承する正加行の時罪を擧ぐべき罪無きを、是れを時に應ずと名づく。若し彼の罪を擧げんに諸の餘の苾芻共に助伴と爲るを是れを有伴と名づく。此の因緣能く破僧を引くに非ず、是の如きを名づけて第五清淨と爲す。若し引攝する所の出罪の義利に此の五支を具ふれば正念に安住して染汚心無く、慈善友の如く柔輭の言を以て應に他の出罪の義利を引攝すべし。

(三)他の出罪の義利を引攝するが如く僧伽の犯戒を擯斥する安樂の義利を引攝するも當に知るべし亦た爾なりと。而も差別をいはゞ、若し擯斥するに因りて其の擯せらるゝ者能く擯するが與めに命に障礙を爲さず、或は此に因りて僧の居園を壞らず、亦た此に因りて制多を損壞せず、及び餘の同梵行者を損せず、是の如きを名づけて能く義利を引くと爲す、此れと相違するを應に知るべし說いて無義利を引くと名づくと。

(五)損惱遍知を明す　云何んが損惱遍知なりや。謂はく五種の現法の損惱ありて凡夫の趣く所、愚癡の趣く所、智者の離るゝ所にして、實に狂に非ずと雖も、狂の所作の如く乃至唯だ虛誑のみありて稽留し、都べて所有る義利を增長すること無し。云何んが五と爲すや。謂はく一類あり、死亡を傷悼し、無量の門を以て而も自ら煎迫し喪者を傷淪す、是れを第一現法損惱と名づく、凡夫の趣く所なり乃至廣說。復た一類あり、幸に所餘の活き易き方便あるに而も衢路大市鄽の間に於て肢節を分解し、命殆んど盡きんと疑はるゝ邪苦にて己を逼めて以て自ら存活す、是れを第二現法損惱と名

犯あらば多く惡作を生じ、犯に於て出に於て能く善く了知す、其の餘の一類は則ち是の如くならず、若し能く是の如き等の事を遍知するを當に知るべし說いて增減に差別あるが故に彼に差別ありと遍知すと名づく。證得の差別に由るとは、謂はく能く隨信行より俱分解脫を以て後邊と爲る、七種の差別、預流果向より乃至最後の阿羅漢果の八種の差別、諸の是の如き等の補特伽羅の差別を遍知し分別するなり、聲聞地に已に其の相を辯ぜるが如し。觀察の差別に由るとは、謂はく能く罪を擧ぐる補特伽羅は應に善く罪を擧げらるゝ者を觀察して然して後應に擧ぐべく、爲めに憶念を作せ、謂はく擧げらるゝ補特伽羅は我が邊に於て愛敬ありと爲んや否やと觀ぜよ、廣說經の如く應に其の相を知るべし。其の發擧せらるゝ補特伽羅も亦た應に善く能く罪を擧ぐる者を察すべし、是れ愚夫顚狂癡騃にして非法に罪を擧げ、我が所に於て當に損害を作すべしと爲んやと、廣說經の如く應に其の相を知るべし。是れ智者にして狂に非ず騃に非ざる所有る白品と爲んやと、廣說經の如く應に其の相を知るべし。又擧ぐるに堪へたる補特伽羅に於ては應に正しく開擧爲んや否やと觀察すべし。是の如く補特伽羅の所有る差別を觀察するを應に知るべし、說いて補特伽羅の遍知と名づくと。

（四）引攝義理遍知を明す　云何んが引攝義利遍知なりや。謂はく能く略して三種の義利を引攝する有るを遍知す。何等を三と爲すや。一には自身の利養の義利を引攝し、二には他身の出罪の義利を引攝し、三には僧伽の犯戒を擯斥し安樂なる義利を引攝するなり。

（一）自身の利養の義利を引攝すとは、謂はく（1）若し諸の利養の體是れ清淨なるを是れを眞實と名づく。（2）若し諸の利養の體是れ清淨にして而も要用に堪ふるも、所用無きに徒らに多く凡百の資緣を貯蓄するには非ず、是の如きを名づけて能く義利を引くと爲す。（3）若し諸の利養時を過ぎず、受用に堪任するを是れを時に應ずと名づく。（4）若し諸の利養にして其の餘の苾芻亦た現に引攝するを是れを有伴と名づけ、（5）卽ち此の有伴は破僧を引くに非ざれば破僧を離ると名づく。若し引

二には是れ所應作の事業の加行なり。犯罪の究竟を遍知すとは、謂はく是の處に於て方便を施設し、卽ち是の處に於て究竟を得、中間に於て其の退轉有るに非ず、是の緣を以ての故に所犯圓滿す。諸の集麁罪と他勝と衆餘との方便の中に隕墜と惡作とを犯し、彼の方便及び自聚の中に於て究竟することを得、隕墜罪の諸の方便の中に於て亦た惡作を犯す。四種の罪聚を有餘罪と名づけ、他勝罪聚を無餘罪と名づく。若し所犯の罪を有情に由るが故に不積集と名づく。或は復た他に從つて顯發するが故に亦た積集せず、此れと相違するは積集せざるに非ず。若し所犯の罪を已に他に從つて如法に發露し、方便し悔除するを已に顯說せりと名づけ、此れと相違するを未だ顯說せずと名づく。若し所犯の罪を權りに持して當に悔ゆるを期願ありと名づけ、此れと相違するを期願無しと名づく。若し所犯の罪を諸佛世尊別解脫毘奈耶の中に於て建立して犯と爲したまふを制立ありと名づけ、此れと相違するを制立無しと名づく。若し所犯の罪或は一類の補特伽羅に約し、或は復た時に約して決定せず、先には差別無きを總相にして制立す、當に知るべし此の罪を名づけて等運と爲し、此れと相違するを非等運と名づくと。

(三)補特伽羅遍知を明す　云何んが補特伽羅遍知なりや。謂はく五相に由りて應に差別を知るべし、一には行の差別に由るが故に、二には衆の差別に由るが故に、三には增減の差別に由るが故に、四には證得の差別に由るが故に、五には觀察の差別に由るが故なり。行の差別に由るとは、謂はく能く貪等の行に由りて差別あることを遍知するが故なり、彼の差別あることは聲聞地の如く應に其の相を知るべし、衆の差別に由るとは、謂はく能く苾芻苾芻尼等の七衆の別に由るが故に彼の差別ありと遍知するなり。增減の差別に由るとは、謂はく一類の補特伽羅の如き或は貴族にして出家し、或は富族にして出家し、或は顏容端正なり、其の餘の一類は則ち是の如くならず、復た一類の補特伽羅あり、多聞博識にして語具さに圓滿し、大智大福にして淨尸羅に於て堅猛に防護し、少かに所

卷の第一百

攝事分中調伏事擇攝第五の二

第七目　遍智を解す

復次に、毘奈耶に依りて勤學する苾芻は其の五處に於て應に正遍知すべし。云何なるを五と爲すや。一には事遍知、二には罪遍知、三には補特伽羅遍知、四には引攝義理遍知、五には損惱遍知なり。

(一)事遍智を明す　云何んが事遍知なりや。謂はく蘊等の五事は、聲聞地に已に說けるが如し。

(二)罪遍知を明す　云何んが罪遍知なりや。謂はく毘奈耶に依りて勤學する苾芻は五種の相に由りて犯す所を遍知す、一には犯罪の因緣を遍知す、二には犯罪の等起を遍知す、三には所犯の罪事を遍知す、四には犯罪の加行を遍知す、五には犯罪の究竟を遍知するなり。犯罪の因緣を遍知すとは、謂はく或は貪の因緣、或は瞋の因緣、或は癡の因緣に衆罪を毀犯するなり。犯罪の等起を遍知すとは、謂はく或は罪あり、身に由りて等起して語にも非ず心にも非ず、或は復た罪あり、語に由りて等起して身にも非ず心にも非ず、或は復た罪あり、心に由りて等起して身にも非ず語にも非ず、或は復た罪あり、身に由り心に由りて等起して語には非ず、或は復た罪あり、語に由り心に由りて等起して身には非ず。或は復た罪あり、身に由り語に由りて等起して心には非ず。或は復た罪あり、身に由り語に由り心に由りて等起して獨り心に由る所犯の衆罪無し。應に他處に從つて發露し悔除すべく、唯だ當に懇誠に深く自ら防護すべし。苾芻あるが如し、種種の欲尋思等の不善の尋思を發起し、所犯の罪事を遍知す、謂はく犯罪の事に略して二種あり、一には有情數の事、二には無情數の事なり。犯罪の加行を遍知すとは、謂はく所犯の罪に二の加行あり、一には非所應作の事業の加行、

ず、故に仍ほ犯さずと言ふと。爾の時衆僧便ち爲めに事の自性犯たりしや、不犯なりしやと尋求して實を得已るを待ちて當に如法に斷ず、是の如くして諍事便ち除滅することを得。

(5)住處を異にせる衆多の苾芻あり、所犯の罪に於て互に疑諍を生じ、或は有犯と言ひ、或は無犯と言ひ、或は是れ重と言ひ、或は是れ輕と言ふ、別の住處の衆ありて數前を過ぎ、或は彼の衆に望み、此れ慧解多く、三藏を受持せんに、彼れ應に此れに就いて請じて所疑を決し、究竟に到らしむべし、是の如くして諍事便ち除滅することを得。

(6)復た苾芻あり、既に罪を犯し已りて自の惡作の纒に激發せられて遂に憂悴を成し他の擧發せんことを慮り、便ち如法に悔ゆ、此に由りて一切の諍事除滅す。

(7)多くの苾芻ありて互に相ひ擧罪し、各憍慢の爲めに執持せられて展轉し相ひ對して發露することを欲せず、離散を事とし、二部別居し、各是の言を作す、彼れ既に背て來りて我が衆に對して發露悔滅せず、我等何爲れぞ輙ち彼の衆に就て發露悔滅せんと。彼此の部中に各應に一の有智を衆首に推し、共に言ふ所を稟くべし、補特伽羅の同じく他衆に主たるもの、其の所犯を發露し悔滅することを許す、是の如くして諍事便ち除滅することを得。

(8)是の如き諍事に略して四種あり、應に知るべし除滅に亦た四種ありと。云何んが名づけて四種の諍事と爲すや。一には他の擧ぐる諍事、二には互に疑ふ諍事、三には自に擧ぐる諍事、四には互に擧ぐる諍事なり。何等を復た四種の除滅と名づくるや。一には願つて所犯を出して除滅し、二には清淨を施與して除滅し、三には實性を求むるを許して除滅し、四には各各發露して除滅す。

瑜伽師地論卷第九十九

攝事分中調伏事總擇攝第五の一

二〇六七

---

(5)多人語毘尼を明す。

(6)罪處所毘尼を明す。

(7)草覆地毘尼を明す。

(8)四諍四滅相對して辯ず。

する時便ち更に犯すこと無く、更に犯すこと無きが故に是の諸の苾芻は見聞疑に由りて應に重ねて前の所犯の事を擧ぐべからず、是の如くして諍事便ち除滅することを得。

[2]諸の苾芻あり、餘の苾芻の罪を犯せるを見る時節、別に後時に於て彼の罪を犯せる者自ら犯す所を忘れんに其の犯せるを見たる者は彼れの所犯を記し、便ち是の事を擧げて問うて曰く、汝自ら所犯を憶するや不やと、彼れ乃ち答へて言はく、我れ都べて憶せずと。彼れ既に憶せざれば自ら悔ゆ可からず、妄りに我れ憶すと言はゞ、悔ゆる言無く能く惡作を離るゝに非ず。既に他に擧げらるゝが故に他に信順して應に衆僧に從つて憶念して毘奈耶の想及以び清淨を求乞すべし。爾の時衆僧諸の苾芻を信じて彼れに清淨を與ふれば彼の犯罪者は惡作を離るゝことを得。是の諸の苾芻は應に重ねて前の所犯の事を擧ぐべからず、是の如くして諍事便ち除滅することを得。

[3]復た苾芻あり、顚狂に由るが故に衆多の沙門に非ざる法を現行して法に隨轉せず、彼れ此の事に由るが故に犯を成ぜず、復た一類無知の苾芻ありて彼れ非處を犯すことを成ずと謂つて擧發す。諸の苾芻ありて未來を防がんが爲めに憶念することを敎示し、自心をして還つて衆僧に從つて癡ならざると、毘奈耶の想及以び清淨を求乞することを得しむ。彼れ是れを聞き已つて卽ち便ち求乞す。爾の時衆僧應に是の如き補特伽羅は犯を成ぜずと斷じ、僧和合し住して唱へて清淨を與ふべし。無智の苾芻既に是を聞き已つて復た重ねて前の所犯の事を擧げず、是の如くして諍事便ち除滅することを得。

[4]復た苾芻あり、衆僧の中に於て苾芻の罪を擧ぐ、其の能く擧ぐる者は有犯の想を起し、彼の擧げられたる者は無犯の想を起す、無犯想に由りて便ち自ら稱して我れ所犯無しと言ひ、能く擧ぐる者は、長老よ豈曾て是の如き是の如き事を作さゞらんやと云ふ。彼れ遂に誠言すらく、我れ曾て作さゞりきと、能く擧ぐるもの復た云く、彼れ先に已に犯せり、今擧發することを得たれども猶ほ了せ

---

(2)憶念毘尼を明す。

(3)不癡毘尼を明す。

(4)自言毘尼を明す。

又宿しの所作の福の增上力の故に一切の事業の方便加行の意趣技能展轉して昌盛なり、凡そ施爲する所敬順せざる無く、少かに功力を用ゐて多く成辦することあり、是れを第五の宿しの所作の福相の果の勝利と名づく。

是の如き四種の天上の諸天、人中の諸人の所有る止觀勝妙の車輪は闕くる所あるに隨つて其の車轉ぜざるなり。

(三)五斷支を解す　又應に得る所の義に深く信解を生ずべきに依りて(一)師長の前に於て如實に自ら(二)身に勇悍あり(三)に心に勇悍ありて(四)善說と(五)惡說との所有る法義を領解するに堪能なることを顯はす、其の次第の如く應に知るべし五種の斷支を建立すと、一支を闕くに隨つて斷成辦せず。

(四)敬事を解す　又最初に於て應に當に勉勵して大師に敬事すべし、謂はく能く增上戒學、增上心學、增上慧學の所有る法教を宣說すればなり。次に應に其の所說の法に敬事すべし。次に法隨法行を修習する時應に當に增上戒と毘奈耶との相應に依る學處に敬事すべし。次に應に增上心と及び增上慧とに依る教誡教授に敬事し、時時の間に於て財供養及び法供養を修すべし。應に知るべし此の中財と法との供養は、謂はく同じく居止し及び同じく受用するなりと。次に靜慮に於て三摩地を修し、此より無間に隨つて愛味無く、諦理に通達し、諸漏を永盡して放逸あること無し。是の如き七種の敬事の差別次第を應に知るべし。又三相に由りて應に敬事を知るべし(一)能く彼の功德勝利を體とするに由るが故に尊重を起し、(二)體とする所に隨つて悉く身語意の三種の正行を以て恭敬を修し、(三)復た種種なる幢旛蓋等を設けて供養を爲すと。

(五)滅諍を解す[1]　諸の同梵行者にして餘の同梵行者の所犯の衆罪を擧ぐることあらば、即ち現前に於て四目相對して其の實を以てして非實を以てせず、乃至廣說彼れ未だ了せざるに於て正しく解了

(1)現前毘尼を明す。

人天の四輪を建立すと。(1)五種の妙好所住の方處を處所圓滿と名づくと。廣說應に知るべし聲聞地の如しと。(2)正士善友を敎導圓滿と名づく、廣說應に知るべし聲聞地及び菩薩地の如しと。(3)五種の相に由りて自ら正願を發すを正行圓滿と名づく。何等を五と爲すや。一には正敎授に於て能く敬順して取る、二には行に違逆無し、三には如實に自ら顯はす、四には其の敎授師より隨つて獲得する所の精麁の衣服飮食臥具便ち喜足を生ず、五には無間と殷重との二種の加行に於て、斷を樂ひ修を樂ひ乃至四種の苾芻の愛取を對治することを修習す。

(4)又宿しの所作の福は補特伽羅の宿世の善根の增上力の故に應に知るべし五相の果の勝利ありと。謂はく宿し作せし所の福の增上力の故に二種の可愛の果報に安住す、一には內、二には外なり。內の可愛の果報とは、謂はく長壽にして久しく住し、妙色端嚴にして無病少惱、僕に非ず女に非ず、半擇迦に非ず、智慧猛利にして發言を威肅にして大宗葉を具ふるなり。外の可愛の果報とは、謂はく富貴の家に生る、經に廣說せるが如く、大富大翼にして、大侍衞あるなり。是れを第一の宿の所作の福相の果の勝利と名づく。

又宿しの所作の福の增上力の故に善く安住することを得、諸の魍魎、藥叉、非人、守宅神等能く障礙を爲すに非ず、謂はく財位に於て障礙を作さず、或は壽命に於て障礙を作さゞるなり。是れを第二の宿しの所作の福相の果の勝利と名づく。

又宿しの所作の福の增上力の故に性となり善法に於て心能く趣入し修習して怠ること無し、是れを第三の宿しの所作の福相の果の勝利と名づく。

又宿しの所作の福の增上力の故に性となり惡行に於て深く自ら慚に愧じ、惡を作し已れりと雖も時時に猛利の悔心を發起し、此の因緣に由りて已作の惡をして現在に微劣ならしめ、當來の惡に於て能く永に遠離す。是れを第四の宿しの所作の福相の果の勝利と名づく。

(1)處所圓滿を明す。
(2)敎導圓滿を明す。
(3)正行圓滿を明す。
(4)資糧圓滿を明す。

づけて可愛樂法の所對治と爲す。此れと相違して其の白品の三種の因緣に由りて當に知るべし即ち是れ六種の可愛樂法を建立すと。其の第一に由りて三種を建立し、其の第二に由りて第四を建立し、其の第三に由りて第五及以び第六を建立す。

又此の中に於ける所有る他をして愛すべき利益安樂を獲得し、正しく現在前せしむる身等の諸業を無善友と名づく。若し物清淨受用せしむ可きは此の物を名づけて如法利養と爲す。若し物邪命非法の方便に依らずして獲得すれば此の物を名づけて如法所得と爲す。若し物を已に鉢內に置在すれば當に知るべし此の物を墮鉢中と名づくと。若し物を未だ鉢中に置かずと雖も而も將に置かんと欲すれば當に知るべし此の物を鉢所攝と名づくと。若し所受の食偏に精妙ならず、亦た偏に多からず、共に所食を食ひ、顯露にして食して私に密食せず、乃至唯だ腹に充つべき食あれば亦た共に分布して終に故思して隱障の處にて食はず、亦た門を閉ぢず、而も所食あれば他の飢乏して來至希求せんに分給することを得ざることを恐るゝを當に知るべし是れを平等受用と名づくと。聖所愛戒の差別の分別は攝異門の如く應に其の相を知るべく、出世の正見の差別の分別は即ち攝事分に應に其の相を知るべし。

又二相に由りて可樂の性を成ず、一には彼の有德を體として尊重するが故に、二には彼の有恩を荷つて慰意するが故なり。又可樂性に二の差別あり、一には未生を其をして生ずることを得しめ、二には已生を當に倍增廣すべし。應に知るべし此の中尊重增上は、謂はく彼の有德を體とし、慰意增上は、謂はく財法の二の攝なり、彼の二の增上は、謂はく善和合なり、和合增上は謂はく心に擾惱無きなり、貪等の所有る擾惱を遠離すれば名づけて無違と曰ひ和合方便して共に一事を爲すを名づけて無諍と曰ひ、水乳を和同するを一趣性と名づく。

（二）斷を解す 又處所圓滿と敎導圓滿と正行圓滿と資糧圓滿とを所依止と爲して、應に知るべし、

づくと。自の尸羅に於て三時に觀察す、或は初日分、或は中日分、或は後日分に若し犯す無きを見ては便ち歡喜を生じ、晝夜に精勤し隨學して住し、若し犯すあるを見ば卽ち便ち速疾に如法に悔除す、當に知るべし是の如きを審に觀察すと名づくと。時時の間初夜後夜或は晝日分に於て所有る貪等の煩惱を對治することを思惟し修習し、唯だ尸羅の言敎を聽聞するのみにて便ち喜足を生ずるに非ず、當に知るべし是の如きを對治を修すと名づくと。深く犯すことあるは當の不愛の果なりと信じ、深く犯すこと無きは當來の愛果なりと信ず、當に知るべし是の如きを信を任持すと名づくと。又正しき出家を所依止と爲し、餘の四事を作し、正しき請問に由りて終に毀犯せず無知なるが故に犯し、審に觀察するに由りて終に毀犯せず放逸なるが故に犯し、對治を修するに由りて終に毀犯せず煩惱熾盛なるが故に所犯あり、信を任持するに由りて終に毀犯せず輕慢なるが故に犯す、是の如き五種の法に依止するが故に能く戒蘊を防ぐを善く防護すと名づく。

第六目　能く寂靜なるを解す

復次に、毘奈耶に於て勤學する苾芻は五種の寂靜法あるに由るが故に能く諸惡を滅す。云何んが五と爲すや。一には柔和にして共に住す可きこと易く、二には斷、三には斷支、四には敬事、五には滅諍なり。何等か柔和にして共に住す可きこと易きや。謂はく經に說くが如し、略して六種の可愛樂法あり、何等をか斷と爲すや。謂はく諸の人天の所有る四輪なり。何等か斷支なりや。謂はく五斷支なり。何等か敬事なりや。謂はく大師に敬事するなり。廣說乃至放逸あること無し。何等か滅諍なりや。謂はく七滅諍法なり。

（一）共住すべきこと易きを解す　當に知るべし此の中身等に由り依りて同梵行に於て非愛を現行すと。又僧祇の共有の財物に於て不平に受用するなり。又戒見の同分ならざる法あり、此に由り依るが故に共に住す可きこと難く、性となり柔和ならず、心常に展轉して互に相輕構す。是の如きを名

像似正法と名づくと。

復た一類あり、他を損惱し、其の非法を以て財寶を積聚し、有罪の福を作すを當に知るべし亦た像似正法と名づくと。

又即ち彼の能く無義を引く像似正法に於て諸の因緣を以て開示し建立するを當に知るべし亦像似正法と名づくと。是の如き一切の像似正法を應に知るべし皆な是れ違逆學法なりと。

(3)惡友の性相は廣說應に知るべし聲聞地及び菩薩地の如しと。又略說せば、若しは放逸に於て或は惡行に於て、或は下劣の諸善の功德に於て相ひ勸勵するを應に知るべし是の類を總じて惡友と名づくと。

(4)若し諸の昧劣愚癡の種類の所有る猛利なる長時の煩惱を是れを愚癡煩惱熾盛なりと名づく。

(5)若し宿世に於て信等の善法を修習せざるが故に現法中に於て信等微弱にして極めて精懇すと雖も、然も力能の即ち現法に於て涅槃を獲得すること無きを當に知るべし是れを宿世の資糧に闕くる所あるが故に現法中に於て其の力薄弱なりと名づくと。

是れを五種の違逆學法と名づく。

(二)學に隨順する法を解す　此れと相違するは應に知るべし五種隨順學法なりと、彼を成就するが故に毘奈耶に於て勤學する苾芻は能く正しく一切の所學を修集し、是の如き隨順法を成就する者には復た五法ありて能く戒蘊を防ぐ、一には正しく出家す、二には善く請問す、三には審に觀察す、四には對治を修す、五には信を任持するなり。債に厄せられずして而も出家を求むること前に廣說せるが如く、唯だ涅槃を求め、所學を愛樂して出家を求む、當に知るべし是の如きを正しく出家すと名づくと。既に出家し已つて犯無犯及び還淨の中に於て若し苾芻の經律論を持つあれば、其の未だ了せざる所を躬ら往いて決を請すれば彼れ便ち開曉す、當に知るべし是の如きを善く請問すと名

(3)惡友。
(4)愚癡煩惱の熾盛なること。
(5)宿世の資糧薄弱なること。

摩他品なり、唯だ信解作意する是れ毘鉢舍那品なり、唯だ信解作意能く究竟を得と宣說し、自ら亦た習行す、是の如き相行を當に知るべし亦た像似正法と名づくと。

(三)復一類あり、非處惡作を而も思惟せざるを當に知るべし亦た像似正法と名づくと。

復た一類あり、其の讀誦と觀行作意とに於て皆な堪能することありて而も僧事を樂ひ、亦た其の中に於て勝功德を見、他の爲に、宣說するを當に知るべし亦た像似正法と名づくと。

復た一類あり、戒に於て修に於て堪能する所あつて而も惠施に於て勝功德を見、諸方に遊歷し、自の禁戒の遮止せらるゝ處に於て多く毀犯ありて諸の財物を集めて佛法僧に奉るを當に知るべし亦た像似正法と名づくと。

復一類あり、善說の法と毘奈耶との中に於て既に出家し已つて展轉して相ひ引きて、專ら聽聞するを以て其の究竟と爲すを當に知るべし亦た像似正法と名づくと。

復一類あり、諸の苾芻の大族大福にして多く衣等所有る利養を獲るを見、少欲等を捨てゝ其の所に往いて恭敬叙慰し、親を現じ誨喩し、新苾芻の邪心をして動作せしむるを當に知るべし亦た像似正法と名づくと。

復一類あり、如來所說の甚深の空性相應する所有る經典を棄捨し、專ら樂つて世間に隨順する文章呪術を習學して自ら聰明慢を懷くことを察せず、又他をして己が聰敏を知らしめんと欲するを當に知るべし亦た像似正法と名づくと。

(四)復一類あり、暴惡及び諸の犯戒を折伏し、彼の暴惡犯戒に於て不饒益を作さんと欲するが爲に惡思を發起するは當に知るべし亦た像似正法と名づくと。

復一類あり、種種なる矯詐の威儀を攝集するを當に知るべし亦た像似正法と名づくと。

復一類あり、世間の文章呪術を解するを以て所有る利養を多く求め多く獲るを當に知るべし亦た

(三)頌の第三句を釋す、六復次あり。

(四)頌の第四句を釋す、五復次あり。

にして行くるを最も妙善なりと爲すと、是の如きを亦た像似正法と名づく。

又世尊の詭雜住を離れ、諸の言說及び事業を息むるを宣示し稱歎したまへるを聞いて便ち是の言を作す、臥具を棄捨し、寂靜にして閑居し、修習する所無きを極めて美妙なりと爲すと、是の如きを亦た像似正法と名づく。

又佛の、心は世間を將導す、心は一切を營造す、心に隨つて生起する所皆な自在にして轉ずと說きたまへるを聞いて、是の如き等の諸經の義趣に於て如實に知らず、或は一類あり、惡しき取執に由り是の如き言を作す、唯だ一識のみありて生死に馳流す、二無く別無しと、是の如きを亦た像似正法と名づく。

又佛の、持戒の士夫補特伽羅の百味の食百千の衣服を受くることを許したまへるを聞いて障道の妙欲設し此の品類を正に受用する時も亦た障と爲らずとし、或は一類あり、惡しき取執に由りて是の如き言を作す、世尊所說の障道の諸欲に若し習近することありとも障と爲るに足らずと、是の如きを亦た像似正法と名づく。

又佛の、諸の阿羅漢は現法中に於て食、言說、蘊界處等に於て捨てず取らず、如實に知らずと說きたまへるを聞いて便ち是の說を作す、我が佛の說きたまへる所の法を解するが如くんば阿羅漢僧は其の死後に於て覺了する所無しと、是の如きを亦た像似正法と名づく。

復た一類あり、如實に世俗勝義の二諦の道理を知らず、二諦の理に違ひ、是の如き言を作す、諸蘊無我ならば云何んぞ無我諸業を造作して我をして觸證せしむるやと、應に知るべし亦た像似正法と名づく。

復一類あり、本性愚癡にして多く謗毀を行ず、彼れ九種の內の正しき住心に於て如實に知らず、諦の觀行念住の觀行に於て如實に知らず、知らざるに由るが故に他の爲に唯だ信解作意する是れ奢

『初めには法等の五種、次には根等の諸見と、非處と惡作等とにして、後に暴惡戒等なり。』

(一)諸の如來所説の法敎と相似せる文句を以て諸經の中に於て僞經を安置し、諸律の中に於て僞律を安置す、是の如きを名づけて像似正法と爲す。

又增益し或は損減する見に由りて虛事を增益し實事を損減し、此の方便に由りて無常等の種種の義門に於て廣く他人の爲に宣説し開示し、是く如く是の如く自他習行す、是の如きを亦た像似正法と名づく。

又補特伽羅の所有る經典を宣説するに於て邪取し分別して眞實の補特伽羅ありと説く、是の如きを亦た像似正法と名づく。

又た種種の假有の法の中に於て宣説し開示して實有の性と爲す、是の如きを亦た像似正法と爲す。

又一切の戲論を遠離せる究竟涅槃に於て分別して有と爲し、或は非有と爲し、説いて有性或は非有性と爲す、是の如きを亦た像似正法と名づく。

(二)又一類の補特伽羅あり、是の如き説を作す、世尊は根門を密護することを宣示し、稱揚し讚歎したまへり、是の因緣に由りて寧ろ色を視ざらんとし、乃至法に於て意を以て思はざらんとし、繫念して衆色を觀視し乃至意を以て諸法を思惟せず、是の如きを亦た像似正法と名づく。

又世尊の簡靜にして住するを宣示し稱歎したまへるを聞いて便ち是の言を作す、寧んぞ咎無きに責めんや、他を測量せざれど、應に毀るべき者に於て而も呵毀せず、應に讚むべき者に於ても亦た稱讚せず、而も呵毀し稱讚する所あらず、是の如きを亦た像似正法と名づく。

又世尊の和氣軟語を宣示し稱歎したまへるを聞いて便ち是の言を作す、默然戒を受けて都て言説無きを極めて善哉なりと爲すと、是の如きを亦た像似正法と名づく。

又世尊の衣食を節量するを宣示し稱歎したまへるを聞いて便ち是の言を作す、斷食して住し露體

(一)頌の初句を釋す五復次あり。

(二)頌の第二句を釋す、十復次あり。

も與に相應するなり、是の如きを名づけて増上戒障と爲す。云何んが名づけて増上心障と爲すや。十一障あり、當に知るべし名づけて増上心障と爲すと、謂はく數衆と會するを初と爲し、居處を處分するを後と爲す。云何んが名づけて増上慧の障と爲すや。謂はく正法及び說法師に於て恭敬を起さず、正法及び說法師を陵懱し、自己を輕賤し、法に於て慳悋にして他の正法を障へ、正法に背き正法を毀謗せしむ、是の如き等の類を當に知るべし皆な増上慧障と名づくと。云何んが名づけて往善趣障と爲すや。謂はく一あるが如し惡欲邪見にして諸の忿恨多く、乃至廣說、是の如き色類諸の惡趣に順じ、受學し法を轉ずるを當に知るべし、是れを順惡趣障と名づくと。利養障とは、謂はく所行に隨つて未信者をして、更に不信を増さしめ、其の已信者を能く改變せしめ、功德を樂はず、時時の中に施福の業事を精勤し修習せず、他の爲めに引攝する所有る利益安樂を樂はず、是の如き等の類なり。壽命障とは、謂はく謹愼して惡象を遠避せず、廣說乃至、善く災あり疫ある諸の惡國土を遠離せず、又諸の因諸の緣未だ壽量を盡さずして能く夭歿せしむるを遠離せず、是の如き等の類なり。所作事障とは、謂はく能く衣鉢等を營む所有る事業を障礙するなり。是の如き一切を總攝して一と爲し、應に知るべし、說いて利養壽命所作の事の障と名づくと。

(2)云何んが名づけて像似正法と爲すや。謂はく略して二種の像似正法あり、一に似教正法、二には似行正法なり。若し非法に於て是法の想を生じ、非法を顯示して以て是法なりと爲し、他をして中に於て正法の想を生ぜしむ、是の如きの法教は實なるが故に、諦なるが故なりと、是れ正法に非ざるも、而も復た正法に像似し顯現す、是の故に名づけて似教正法と爲す。若し廣く他の爲めに是の如く宣說して他をして受學せしめ、亦た自ら修行し、妄りに法想を起し、諸の邪行を習ひ、而も自ら惰慢して稱して我れ能く是の正行を修すと言ふ。應に知るべし是れを似行正法と名づけ、廣く像似正法を宣說すと爲す。復た中間の嗢拕南を說いて曰はく、

の所作とは具足戒を受くる等。二十衆の所作とは僧殘罪を出す、又は尼の受具等。四十衆の所作とは苾芻尼の僧殘罪を出す所作なり。
(1)障礙。
(2)像似正法。

衣鉢を受持する羯磨、若しは[二二]羯絺那衣を持ち衣を護りて捨てざる羯磨、若しは[二三]結界羯磨、若しは稻穀を淨うする同意の羯磨なり、是の如き等の類の所有る羯磨を當に知るべし是れを無情數の事を所依處と爲る羯磨と名づくと。又此の羯磨に當に知るべし或は[二四]二衆の所作あり、或は四衆の所作あり或は十衆の所作あり、或は二十衆の所作あり、或は四十衆の所作あり、或は合衆の所作ありと。二衆の所作とは、謂はく一の苾芻、一の苾芻に對し三說し別に悔す羯磨にして或は隕墜罪、或は惡作罪等を發露し悔除するなり。四衆の所作とは、謂はく一あるが如し麁罪を犯し已つて四人の前に於て發露し悔除する羯磨なり。十衆の所作とは、謂はく具足を受くる羯磨なり。二十衆の所作とは、謂はく苾芻の衆餘罪を出す羯磨、及び苾芻尼の具足を受くる羯磨なり。四十衆の所作とは、謂はく苾芻尼の衆餘罪を出す羯磨なり。合衆の所作とは、謂はく增長羯磨、若しは恣擧羯磨、或は餘の所有る種類の羯磨なり。是の四羯磨は事の差別に由りて無量種と成る、廣說應に知るべし毘奈耶摩呾理迦の如しと。是の如く所有る羯磨を解了し、毘奈耶に於て勤學する苾芻は羯磨に隨つて行じ、所犯の罪に於て而も善巧を得、罪に於て出離するに亦た善巧を得、自身を避護し、清淨を得て諸の罪過を離れしむ。

第五目　逆順を解す

復次に、毘奈耶に於て勤學する苾芻は應に知るべし五違逆學法有りて應に當に遠離すべく、復た五種隨順學法ありて應に當に受持すべしと。

（一）學法に違逆することを解す　云何なるを五違逆學法と爲すや。一には障礙、二には像似正法、三には惡友、四には愚戇煩惱熾盛、五には宿世の資糧其の力薄弱なるなり。

（１）云何んが障礙なりや。謂はく五障あり、一には增上戒障、二には增上心障、三には增上慧障、四には往善趣障、五には利養壽命所作事障なり。云何んが名づけて增上戒障と爲すや。謂はく一あるが如し或は是れ奴婢なり、或は是れ獲得せるなり、或は言ふ所あり、廣說一切の出家の法を障へて而

【一五】白四羯磨とは一白三羯磨なり、具足戒を受くる等の時に行ふ。
【一六】三語羯磨とは、說戒の時の如き但だ三人ある時は廣く說戒せず、但だ對手に「大德僧聽、我比丘某甲、於戒清淨」等、是の如く三說するを三語羯磨と名づく。
【一七】出家の羯磨とは俗人あつて出家せんと欲する時必ず衆を集めて告白し、然して後剃髮せしむるが如きを云ふ。
【一八】補特伽羅の同意の羯磨とは凡そ事を作さんと欲する時に各個人の同意を得る羯磨なり。
【一九】出罪羯磨とは若し僧殘を犯せば二十僧の中にて羯磨して出罪すべきを云ふ。
【二〇】擧羯磨とは罪を擧ぐる作法なり。
【二一】擯羯磨とは重罪を犯せる者を究竟して衆外に擯出し若し惡行を行じ他家を汚せば聚落外に擯出する作法なり。
【二二】羯祉那（Kathina）。衣は舊に迦絺那衣といふ、功德衣と譯す。
【二三】結界羯磨とは淨地を結する作法なり。
【二四】二衆の所作とは二人對して突吉羅を懺す。隕墮罪とは波逸提を悔す。四衆の所作とは偷蘭等の罪を悔す。十衆

ことを得ば應に知るべし是れを威儀所依と名づくと。若し是の如き所依に依つて住せば終に其の苦惱非聖の無義より引く所の困弊匪宜の爲に自己を損害せられず。

(四)受用を解す　云何んが受用なりや。謂はく五種の不淨受用及び五種の清淨受用あり。云何んが五種の不淨受用なりや。一には窣堵波の物を受用す、重病に遭ふに非ず、設ひ重病に遭ふとも餘の方計あるなり。二には諸の僧祇物を受用す、僧の授與するに非ず、鉢中に墮するに非ず、彼の分攝に非ず。三には他の別人の物を受用す、彼より得るにあらず、彼の許す所に非ざるに意に隨つて受用するなり。四には委信するに非ざる物を受用す、謂はく委信するに非ざる補特伽羅の一切の所有をば、受用すべからず。五には諸の便穢等に染汚せられたる物或は習近するに由りて諸の善法を滅じ不善法を增し、或は習近する時諸の世間をして譏訶を生起せしめ、諸の世間共に厭賤し、未だ信を生ぜざる者を倍不信ならしめ、已に信を生ぜる者を共をして變異せしむる所を受用す。是を五種の不淨受用と名く。毘奈耶に於て勤學する苾芻は應に當に遠離すべし。此と相違するは應に知るべし、五種の清淨受用なりと。毘奈耶に於て勤學する苾芻は應に當に是の如きを受用すべし。不淨受用を遠離し、淨受用に於て隨行する苾芻は能く善く所有の信施を酬報するなり。

(五)羯磨を解す　云何んが羯磨なりや。謂はく一切の羯磨に略して四種あり。一には[一三]單白羯磨、二には[一四]白二羯磨、三には[一五]白四羯磨、四には[一六]三語羯磨なり。此の四羯磨に略して二事ありて所依處と爲る、一には有情數の事を所依處と爲す、二には無情數の事を所依處と爲す。有情數の事を所依處と爲すとは、謂はく[一七]出家の羯磨なり、若しは具足を受くる羯磨、若しは[一八]補特伽羅の同意の羯磨、若しは[一九]出罪羯磨、若しは[二〇]舉羯磨、若しは[二一]擯羯磨、若しは兩安居に受くる十、二十、四十夜等の所有る羯磨なり。是の如く或は有情を攝受せんが爲め、或は有情を折伏せんが爲に羯磨を施設するを是れを有情數の事を所依處と爲る羯磨と名づく。無情數の事を所依處と爲すとは、謂はく

【一三】單白羯磨とは衆僧を集めて但だ白して告知するを云ふ、是れに二種あり、一には有因、謂はく、「說戒の時に「大德僧聽、今白月十五日、布薩說戒」等といふ。二には無因、謂はく「僧忍差某甲、爲教授師白」と說き、白月黑月等の言なきを以て無因と名づく。

【一四】白二羯磨とは一白一羯磨、若しは白二なり。

種の居止する所あり。外道居處とは、謂はく是の處に於て種種の外道の居止する所、謂はく離繫、淨命、波輸鉢多[一]、是の如き等の類なり。雜染居處とは。謂はく是の處に於て[二]一切の羯磨を皆な施設せず、或は但だ一分の羯磨を施設するのみ。無雜染居處とは謂はく是の處に於て具足して一切の羯磨を施設す。又無雜染苾芻の居處は應に知るべし衆會安立し整肅なりと。若し有雜染苾芻居處は應に知るべし衆會安立し混雜すと。諸有る所學を愛樂する苾芻は有雜染苾芻居處に於ては應に故に思擇し、利養を棄捨し、恭敬を棄捨すべし、應に止住すべからず、危難あらんに暫時依附し或は道路を行くに暫時止息し、或は彼の諸の苾芻衆を拔いて不善處より出し、善處に安置せんが爲を除く。苾芻尼衆の所居の處に於ては應に止住すべからず、前說の如き三種の因緣を除く。外道居處も當に知るべし亦た爾なりと。無雜染苾芻居處に於ては正思擇し壽を盡すまで止住すと雖も而も應に常に羈旅の想を懷くべし。若し苾芻あり、是の如き諸の所居の處に住すと雖も應に種種の慮恐する處なりと想を懷くべし、是の如く譏嫌無き處に住すと雖も而も常に諸の有智の同梵行者の爲に譏嫌せらるることを慮恐す。

(三)所依を解す　云何んが所依なりや。謂はく五の所依なり。何等を五と爲すや。一には村田所依、二には居處所依、三には補特伽羅所依、四には諸衣服等資具所依、五には威儀所依なり。若し村城の地方の分所に依つて安住することを得ば應に知るべし是れを村田所依と名づくと。若し園林或は諸の寺院經行處等に依りて安住することを得ば應に知るべし是れを居處所依と名づくと。若し施主と軌範と親教と諫誨し憶念し教授し教誡し正法を說く者とに依りて安住することを得ば應に知るべし是れを補特伽羅所依と名づくと。若し道に順ずる或は麁なる或は妙なる。隨つて獲得する所の衣服飲食と病緣の醫藥と資身の衆具とに依つて安住することを得ば應に知るべし是れを諸衣服等資具所依と名づくと。若し是の處に依つて時時の間に於て身の四威儀を其の所樂の如くして安樂に住する

【一】波輸鉢多。秦師云く、畜愛と翻ず、畜生を愛する外道なりと。測師云く、牛主、或は獸主といふと。
【二】結界なきを以て羯磨を作さず、羯磨（Karma）は事業、所作、作法と譯す、戒法に於てはコンマと讀む。

し已り學處を越すと雖も而も能く悔滅するを極めて善哉なりと爲す、然れば薄伽梵は無量門を以て、起す所の相續を呵毀して蓋と爲し障と爲したまへり、我れ今彼に於て多住し堅執して除遣すること能はずんば極めて善哉なるに非ずと。此れを了知し已つて是に由りて所生の惡作を除遣す。是の如きを名づけて所犯還淨なりと爲す。

第四目　隨行を解す

復次に、應に知るべし略して五の毘奈耶の隨行する所の法有り。毘奈耶に依りて勤學する苾芻は彼を隨行すと。云何んが五と爲すや。一には安住、二には居處、三には所依、四には受用、五には羯磨なり。

（一）安住を解す　云何んが安住なりや。謂はく毘奈耶に依りて勤學する苾芻は應に當に五種の想住に安住すべし。何等を五と爲すや。一には若し聚落に入らば應に當に牢獄に入るの想に安住すべし。二には若し道場に在らば常に當に已に於て沙門の想に住すべし。應に知るべし此の中沙門の想とは、謂はく我れ今に於て色形別異にして俗相を棄捨し、我れ已に[八]壞色を受持する等の事廣說經の如し、審諦に[九]二十二處を觀察す。三には若し飲食する時は常に當に療病の爲にする想に安住すべし。四には若し遠離に處せば眼所識の色、耳所識の聲等に於て應に盲聾瘖瘂等の想に住すべし。五には若し寢息する時は當に保ち難き曠野林中の驚怖せる鹿の想を起すべし。毘奈耶に依りて勤學する苾芻は常に當に是の五の想住に安住すべし。此の想住に於て既に安住し已らんに現に國王の受くる所と爲るに堪へたる衣服飲食臥具を受用すと雖も而も欲樂を受くる行の邊に墮せず。

（二）居處を解す　云何んが居處なりや。謂はく五の居處あり、一には苾芻居處、二には苾芻尼居處、三には外道居處、四には雜染居處、五には無雜染居處なり。苾芻居處とは、謂はく是の處に於て諸の苾芻の[一〇]下中上座の居止する所あり。苾芻尼居處とは、謂はく是の處に於て苾芻尼の前の如き三

【八】壞色とは世の青黃赤白黑の正色を壞りたる、木蘭色の如き雜色を云ふ。袈裟の色なり。

【九】二十二處は第二十卷に出づ。

【一〇】下中上座。無夏より九夏に至る者を下座とし、十夏より十九夏に至る者を中座とし、二十夏より四十九夏に至る者を上座とす。五十夏以上は耆舊長老なり。夏とは九旬の夏安居なり。

忽務を多くせず、是の如きを名づけて第三の因緣と爲す。又喜足に住し、犯不犯に於て能く善く了知して道俗と交遊し縱蕩せず、專ら善品を修し、曾て間隙無し、是の如きを名づけて第四の因緣と爲す。又初修業は癡狂心亂痛惱に逼めらる、是の如きを名けて第五の因緣と爲す。當に知るべし此の五の因緣に由るが故に初より犯さずと。

（三）還淨を解す　云何んが還淨なりや。謂はく一あるが如し所犯の罪に隨ひ即ち便ち五種の惡作を生起す。五支所攝の不放逸行を以て依止と爲して五種の相に由りて彼より生ずる所の五種の惡作を除く。云何んが五種の惡作を生起するや。一には我が淨戒を毀犯せる因緣に由りて後に於て定んで當に深く自ら懇に責め惡作を生起すべし。二には我が淨戒を毀犯せる因緣に由りて定んで當に他の諸天に呵責せられて惡作を生起すべし。三には我が淨戒を毀犯せる因緣に由りて定んで大師及び諸の有智同梵行者の爲に當に共に呵責せられて惡作を生起すべし。四には我が淨戒を毀犯せる因緣に由りて定んで遍き方維に惡名惡稱惡聲惡頌彰顯し流布するに惡作を生起すべし。五には我が淨戒を毀犯せる因緣に由りて身壞して已後必定して當に諸惡趣の中に墮すべきに惡作を生起す。五支所攝の不放逸行は聲聞地の如く應に其の相を知るべし、謂はく（一）前際より倶行し（二）後際に倶行し（三）中際に倶行するもの（四）初時の所作及び（五）倶に隨行するものなり。云何んが五種の相に由りて彼の所生の五種の惡作を除くや。一には世尊所說の正法は皆な因緣あり、亦た出離あり、是の故に所犯は還淨すべし、是に由りて所生の惡作を除遣す。二には彼の無知と放逸と煩惱熾盛なると及以び輕慢とに由りて所犯の罪を犯す、即ち此の無知乃至輕慢を我れ已に斷滅し、所有る正智乃至尊敬を我れ已に生起すれば是に由りて所生の惡作を除遣す。三には當來に犯すこと無き意樂を我れ已に生起し、是に由りて生ずる所の惡作を除遣す。四には我れ已に諸の有智同梵行の所に於て發し悔滅し、是に由りて生ずる所の惡作を除遣す。五には我れ佛の善說の法と毘奈耶との中に於て旣に出家

し事の別に由るが故に諸の所犯の罪は下と中と上との三品の差別を成ずと。（五）積集に由るとは、謂はく一あるが如し、或は一罪を犯し如法に速疾に悔除すること能はず、或は二、或は三、乃至或は五、是の如く應に知るべし積集に由るが故に下品罪を成ずと。此より已後或は十罪を犯し、或は二十を犯し、或は三十を犯し、乃至或は了ず可き數の罪を犯し、如法に速疾に悔除すること能はず、是の如く應に知るべし積集に由るが故に中品罪を成ずと。若し所犯の罪其の數無量にして了知す可からざるを我れ今是の如き量の罪を毀犯す、是の如く應に知るべし積集に由るが故に上品罪を成ずと。

云何んが應作なりや、謂はく若し彼に於て作さざるに由るが故に及び加行の故に便ち毀犯を成ず。此の所應作に略して五種あり、一には村邑に於ける所應作の事、二には道場に於ける所應作の事、三には善品に於ける所應作の事なり。卽ち此の善品の所應作の事に復た二種あり、一には資糧所應作の事、二には清淨所應作の事なり。是の如き資糧所應作の事は聲聞地に十三種の所有る資糧を說けるが如し。是の如き清淨所應作の事は聲聞地に作意を修するを說けるが如し。又城邑に於ける所應作とは、謂はく或は己が衣朋等の事の爲めに聚落に入り、或は復た佛法僧の事同梵行の事の爲め、或は未信をして其をして信を生ぜしめ、其の已に信者を倍增長せしめんが爲めに聚落に入るなり。此れと相違する所有る能く五の應作の事を障ふるは其の所應の如く當に知るべし五種の不應作の事なりと。

（二）無犯を解す　云何んが無犯なりや。謂はく、五の因緣にて所犯無からしむ。何等を五と爲すや。謂はく根門に於て密護して住し、飲食に量を知り、初夜後夜に常に睡眠せず、勝行を勤修し、正知にして住す、是の如きを名づけて第一の因緣と爲す。又沙門に於て其の上品なる精勤顧戀を起し、其の大師諸有る智者同梵行の所に於て其の上品の愛樂恭敬を起し、現行する罪に於て猛利の增上の慚愧を發起す、是の如きを名づけて第二の因緣と爲す。又財物を少くし、事を少くし、業を少くし、

無く憚無く羞恥あること無く、所學を樂はず、輕慢に由るが故に其の所欲に隨つて廣く衆罪を犯す、是の如きを名づけて輕慢に由るが故に所犯の罪を犯すと爲す。當に知るべし此の中無知と放逸との犯す所の衆罪は是れ染汚ならず、煩惱の盛なると及以び輕慢に由りて犯す所の衆罪は是れ其れ染汚なりと。

五の因緣に由りて當に知るべし所犯に下と中と上との三品の差別を成ずと。何等を五と爲すや。一には自性に由るが故に、二には毀犯に由るが故に、三には意樂に由るが故に、四には事に由るが故に、五には積集に由るが故なり。(一)自性に由るとは謂はく他勝罪聚は是れ上品の罪なり、衆餘の罪聚は是れ中品罪なり、所餘の罪聚は是れ下品罪なり。復た差別あり、謂はく彼勝と衆餘とは是れ重品罪なり、隕墜と別悔とは是れ中品罪なり、惡作罪聚は是れ輕品罪なり。是の如く應に知るべし自性に由るが故に諸の所犯の罪は下中上の三品の差別を成ずと。(二)毀犯に由るとは、謂はく無知の故に及び放逸の故に所犯の衆罪は是れ下品罪なり、煩惱盛の故に所犯の衆罪は是れ中品罪なり、輕慢に由るが故に所犯の衆罪は是れ上品罪なり。是の如く應に知るべし毀犯に由るが故に諸の所犯罪は下と中と上との三品の差別を成ずと。(三)意樂に由るとは、謂はく下品の貪瞋癡纏に由る所犯の衆罪は是れ下品罪なり、若し中品に由るは是れ中品罪なり、若し上品に由るは是れ上品罪なり。是の如く應に知るべし意樂に由るが故に諸の所犯の罪は下と中と上との三品の差別を成ずと。(四)事に由るが故なりとは、謂はく相似の意樂を現行すと雖も而も其の事一類に非ざるに由るが故に應に知るべし所犯は下と中と上との三品の差別を成ずと。瞋纏を以て傍生趣の所有る衆生に於て故思して殺害するが如きは隕墜罪を生ず、卽ち是の如き相似の瞋纏を以て或は其の人或は人形狀の父に非ず母に非ざるに於て故思して殺害すれば他勝罪を生ず、無間罪には非ず、卽ち是の如き相似の瞋纏を以つて人の父母に於て故思して殺害するは他勝罪及び無間罪を生ず、是の如く應に知るべ

と相違するを應に知るべし開と名づくと。(五)云何んが行と名づくるや。謂はく略して三行あり、一には有犯、二には無犯、三には還淨なり、是の如き三種を略攝して二と爲す、一には邪行、二には正行なり。應に知るべし有犯を説いて邪行と名づけ。無犯と還淨とを説いて正行と名づくと。

(一)有犯を解す　此の中云何んが所犯の罪を犯すや。謂はく應に作すべきに於て而も作さざるが故に、及び加行の故に、不應作に於て而も反つて作すが故に、及び加行の故に所犯の罪を犯す。又彼れ略して四の因緣に由るが故に所犯の罪を犯す、一には無知の故に、二には放逸の故に、三には煩惱盛の故に、四には輕慢の故なり。(一)云何なるを名づけて無知に由るが故に所犯の罪を犯すと爲すや。謂はく一あるが如し所犯の罪に於て審に聽聞せず、善く領悟せず、彼れ解了無く覺慧あること無く知る所無きが故に其の所犯に於て無犯想を起し、而も衆罪を犯す、是の如きを名づけて無知に由るが故に所犯の罪を犯すと爲す。(二)云何んが名づけて放逸に由るが故に所犯の罪を犯すと爲すや。謂はく一あるが如し、所犯の罪に於て復た解了し、其の覺慧あり亦た知る所ありと雖も而も忘念に住し、不正知に住し、彼れ是の如く念に住せざるに由るが故に知る所無きが如く衆罪を犯す、是の如きを名づけて放逸に由るが故に所犯の罪を犯すと爲す。(三)云何んが名づけて煩惱盛なるが故に所犯の罪を犯すと爲すや。謂はく一あるが如し、其の所犯に於て復た解了し、其の覺慧あり亦た知る所ありと雖も而も彼の本性の貪瞋癡等極めて猛利なるが爲めに、彼れ猛利の貪瞋癡に由るが故に、是の事は應に爲すべからざる所なりと知ると雖も煩惱纏に逼られて自在ならざるが故に衆罪を犯す、是の如きを名づけて煩惱盛なるが故に所犯の罪を犯すと爲す。(四)云何なるを名づけて輕慢に由るが故に所犯の罪を犯すと爲すや。謂はく一あるが如し、所犯の罪に於て復た解了し、其の覺慧あり亦た知る所ありと雖も而も彼の信解極めて下劣たり、彊盛なる宿善の因行あること無し、其の信解極めて下劣なるに由るが故に沙門の性に於て、般涅槃に於て顧戀する所無く、佛法僧に於て敬

からざるに反つて與に依と爲す過失と名づくと。(十三)若し尊教に於て輕觸し、怨み咎め睛を怒らして惡み視、恭敬せずして別解脫經を聽受する等を當に知るべし是を應に恭敬すべきに於て而も恭敬せざる過失と名づくと。(十四)若し未だ具戒を受けざる補特伽羅の前に於て實に人に勝過せる法を得たりと宣示し、或は復た苾芻所犯の麁惡罪を覆藏する等を當に知るべし是れを應に覆藏すべきに於て而も覆藏せず、應に覆藏すべからざるに而も反つて覆藏する過失と名づくと。(十五)若し不淨非法の衣服を受用する等の事あるを當に知るべし是れを應に習近すべからざるに而も反つて習近する過失と名づくと。是の如き所の十五の過失は當に知るべし彼の所犯罪中に於て或は多數或は二或は一ありと。

第三目　攝を解す

(一)五法を開列して毘尼を攝す　復次に、略して五法ありて毘奈耶を攝す。何等を五と爲すや。一には性罪、二には遮罪、三には制、四には開、五には行なり。

(二)徵問して別解す　(一)云何んが性罪なりや。謂はく性是れ不善にして能く雜染を爲して他を損惱し、能く雜染を爲して自を損惱す、遮制せずと雖も但だ現行することあれば便ち惡趣に往き、遮制せずと雖も但だ現行することあれば能く沒門を障ふ。(二)云何んが遮罪なりや。謂はく佛世尊彼の形相の不如法を觀たまへるが故に、或は衆生をして正法を重んぜしむるが故に、或は所作性罪を現行する法に隨順すと見たまへるが故に、或は他を護る心に隨順したまはんが爲めの故に、或は善趣と壽命と沙門の性とを障礙すと見たまへるが故に而も正しく遮止したまへり。若し是の如き等の事を現行することあるを說いて遮罪と名づく。(三)云何んが制と名づくるや。謂はく所作の能く惡趣に往き、或は善趣を障へ、或は如法に得る所の利養を障へ、或は壽命を障へ、或は沙門を障ふる等あり。是の如き等の類を如來は遮制して現行せしめたまはざるが故に名づけて制と爲す。(四)此れ

淨して而して之を受用し、彼の一切に於ては悉く皆な染捨す、或は作淨せずして而も輒く受用する、是の如き等の罪は匱乏に喜足せざる過に由り依つて所犯を制立す。(四)若し親屬に非ざる苾芻尼の所にて衣を受け衣を與へ、或は彼等と共に獨り一處に在り、或は復た非時に諸の苾芻僧の同じく忍許せざるに輒く往きて教授し、或は餘時諸の母邑と道路を共にして行くを除く。是の如き等の類は當に知るべし是れを他に譏嫌せらるる過失と名づくと。(五)若し非威儀にして聚落等に入りて乞食し受用し、坐して如法に手を澡ひ器を滌がず、或は請に因らずして其の食前に於て輒く他舍に入り、或は日を觀ぜずして其の食後に於て邑居に遊履す、是の如き等の類を當に知るべし是れを淨信無き者を倍信ぜざらしめ、淨信ある者を其をして變異せしむる過失と名づくと。(六)若し金銀等の寶を執受し、種種の品類の買賣を營んで林木を種蒔することを爲し、[六]憍賒耶の妙臥具を畜ふることある等を當に知るべし是れを諸の財寶多く諸の事業多き過失と名づくと。(七)若し故に泄精し、或は復た母邑の手等に執觸し、或は媒嫂を行じ、茲に因つて變異の染心に趣入し、或は好の爲めの故に親屬の所に往き上妙の長衣服を追求する等を當に知るべし是れを染著の過失と名づくと。(八)若し無根なるを以て異分の法を假りて他の苾芻を毀り、或は離間人語を作す等の事を當に知るべし是れを他を惱ます過失と名づくと。若し自ら羊毛を持つて三踰繕那を過ぎ、或は重擔を荷ひ、或は人樹を上り過ゆる等を當て知るべし是れを疾病を發起する過失と名づくと。(十)若し和合僧を破壞せんが爲めの故に勤めて勇猛の方便の事を設くる等を當に知るべし是れを善趣に往くを障ふる過失と名づくと。若し與に自ら語らざる等の事を作すを當に知るべし是れを沙門を障礙する過失と名づくと。(十一)若し僧祇の臥具を棄擲して迥露處に置いて捨てて去ることある等、或は邪に受用する等を當に知るべし是れを應に避護すべきに於て正しく避護せざる過失と名づくと。(十二)若し邪見の苾芻勤策と共に居住する等、依止と爲る等を當に知るべし是れを應に依と爲すべ

【七】憍賒耶（Kāuśeyn）は絹衣の名、野蠶より作りたる衣。

補特伽羅に依る、一切差別あること無く皆な還淨すべしと爲すには非ず、是の故に他勝を一向還淨聚の中には立てず。

(三)十五種の煩惱を明す　又若し略して說かば十五種の犯罪過失あり。遍く一切の犯罪聚の中に於て當に知るべし諸の所犯の罪を建立すと。(1)何等か十五なりや。一には事重き過失、二には猛利なる纏の過失、三には匱乏に喜足せざる過失、四には他に譏嫌せらるる過失、五には淨信無き者を倍信ぜざらしめ、淨信ある者を其をして變異せしむる過失、六には諸の財寶多く諸の事業多き過失、七には染著の過失、八には他を惱ます過失、九には疾病を發起する過失、十には善趣に往く沙門を障ふる過失、十一には應に避護すべきに於て正しく避護せず、應に避護すべからざるに反つて避護する過失、十二には應に依と爲すべからざるに反つて與に依と爲り、應に與に依と爲るべきに而も依と爲らざる過失、十三には應に恭敬すべきに於て而も恭敬せず、應に恭敬すべからざるに而も反つて恭敬する過失、十四には應に覆藏すべきに於て而も覆藏せず、應に覆藏すべからざるに而も反つて覆藏する過失、十五には應に習近すべきに於て而も習近せず、應に習近すべからざるに而も反つて習近する過失なり。(2)應に知るべし此の中(一、二)初修業者は四他勝に於て事重き過失ありと雖も、而も猛利なる纏の過失無し、彼の意樂に勃惡無きに由るが故に謂はく沙門に於て顧戀する所無し。若し初業の者は此の法は能く沙門を障ふると了知して命の因緣の爲めに亦た違犯せず、意樂の力強く、唯だ事に依らざるが故に彼には犯無し。所犯を制立することは、要らず意樂に由り强力を增すが故に、若し犯すことありと雖も而も、一念の覆藏心を起すこと無ければ、彼も亦た出づ可く、沙門果に於て仍て堪能することあり。其の餘の一切の他勝を犯す者は、亦た事重き過失あり、亦た猛利の無慚無愧諸の煩惱の纏の過失あり、當に知るべし、彼れは二皆な重きに由るが故に出づべからざる法、及び不般涅槃法を成ずと。(三)若しは衣鉢等の世尊應に持つべしと開許したまへるは作

(1)數を擧げて名を列す。
(2)次第に解釋す。

攝受すと名づくと。(二)是の如く出家して非家に趣き已れば其の爲めに、因緣あり出離あり所依あり勇猛あり神變ある等の甚深の法敎を宣說するを當に知るべし說いて僧をして精懇せしむと名づくと。因緣あり等の諸句の差別は菩薩地に已に其の相を辯ぜるが如し。(三)五種の相に由りて應に知るべし僧をして安樂せしむと名づくと。一には道に順ずる具に匱乏する所無からしむ、二には異法の補特伽羅を擯せしむ、三には善く生ずる所の惡作を除遣せしむ、四には善く諸の煩惱の纒を降伏せしむ、五には善く隨眠煩惱を永滅せしむ。當に知るべし此の中最初の安樂の增上力の故に未だ淨信ならざる者には淨信を生ぜしめ。(五)已に淨信なる者を其をして增長せしめ、第二の安樂の增上力の故に(六)鄙惡なる補特伽羅を調攝し、第三の安樂の增上力の故に(七)慚愧する者をして安樂住を得しめ、第四の安樂の增上力の故に(八)善く現法の諸漏を防護せしめ、第五の安樂の增上力の故に(九)能く當來の諸漏を永滅せしむと。(十)是の如く安樂住を獲得し已つて未得入者を入り易からしむるが故に、多人の梵行をして久しく住せしめんと欲す乃至廣說、皆な應に了知すべし。

(二)略して釋す　又此の一切要を以て之を言はゞ、謂はく正に最初の攝受を顯示し、次に正に攝受し既に攝受し已れば安樂に住せしめ、及び未來の未だ攝受せざる者の入り易き方便を顯はす。是の如きを名づけて第二の差別と爲す。

第二目　聚を解す

(一)五種の罪聚を辯ず　復次に、應に知るべし略して五種の罪聚ありて一切の罪を攝すと。何等を五と爲すや。一には[二]他勝罪聚、二には[三]衆餘罪聚、三には[四]隕墜罪聚、四には[五]別悔罪聚、五には[六]惡作罪聚なり。集麁定まらざるは其の所應の如く、即ち是の如き諸の罪聚の中に入る。

(二)四種の還淨を辯ず　復た四種の還淨罪聚あり。何等を四と爲すや。謂はく他勝を除いて所餘の罪聚住皆な還淨すべきが故に四種の還淨罪聚あり。最初の罪聚は還淨す可しと雖も、然も唯だ二の

【二】他勝罪聚とは即ち四波羅夷罪なり。此の罪を犯さば便ち比丘に非ず。魔の爲に勝たるゝを以て他勝罪と名づく。

【三】衆餘罪聚とは即ち十三僧殘なり。比丘、此の戒を犯さば殆んど死に頻して僅に殘餘の命あり。僧衆に向つて此の罪を懺して餘名を全うするを得。

【四】隕墜罪聚とは即ち三十九十波逸提罪なり。之を犯さば地獄に墮在するを以て此の名を得。

【五】別悔罪聚とは即ち四提舍尼なり。向彼悔と譯す、他の比丘に向つて懺悔すれば即ち除滅を得る罪なり。

【六】惡作罪聚とは突吉羅なり其の罪最も輕し。

卷の第九十九

攝事分中調伏事總擇攝第五の一

第四章　調伏事を標釋す

第一節　結前生後

是の如く已に素呾纜事の摩呾理迦を說けり。

第二節　正しく解釋す

第一項　略して許說を明す

云何んが名づけて毘奈耶事の摩呾理迦と爲すや。謂はく卽ち此の[一]四種の經より外の別解脫經の所有る廣說の摩呾理迦展轉傳來する如來の所說、如來の所顯、如來の所讚を毘奈耶摩呾理迦と名づく。

第二項　一嗢拕南を擧げて利等の十一門を列釋す

此の毘奈耶摩呾理迦の總相の少分を我れ今當に說くべし、嗢拕南に曰く、

『利と聚と攝と隨行と、逆順と能く寂靜なると、遍知と信不信とにして、力等を其の後と爲す。』

第一目　利を解す

(一)廣く解す　如來十種の勝利を觀見したまひ、毘奈耶の中に於て諸の弟子の爲に學處を制立したまへり、謂はく僧伽を攝受し、僧をして精懇せしむ、乃至廣說攝釋分の如く應に其の相を知るべし。

(一)若し能く四大姓等の正信なる出家にして非家衆に趣くを攝受すれば當に知るべし說いて僧伽を

【一】四種の經とは倫記に二說あり、一に四阿含經なり、二に曰く前の契經事の行、處、緣起食諦界、菩提分法の四擇攝なりと。今云く、然らず。第八十五卷の始めに擧げたる別解脫契經と事契經と聲聞相應契經と大乘相應契經となり。

別すと、未だ上位の所修の道に趣かざるが故なり。若し上位に於ては能く順じて五種の隨念を歡喜して他の爲に記別す、是の因緣に由りて當に知るべし一來果證を記別すと、三摩地未だ成滿せざるに由るが故に、離欲道に於て未だ圓滿ならざるが故に、彼の諸天に於て未だ現見せざるが故なり。離欲を求めんが爲めに修習して能く順じて諸法を歡喜し、此の歡喜を所依と爲るに由るが故に輕安を發生し、輕安に由るが故に身樂を領受し、樂を受くるに由るが故に心に正定を得、而も靜定に於て未だ成滿することを得ず。若し上位に於ては六種の隨念を他の爲めに記別す、是の因緣に由りて當に知るべし不還果證を記別すと。阿羅漢果は唯だ出世道なり、乃ち能く所有る隨念を趣證するは唯だ是れ世間なり、是の故に不還果證已上には、更に是の如き隨念の記別無し。又四證淨を預流果の中には、唯だ說いて淨と爲し、餘の學果に於ては圓滿淨と說き、最上果に於ては說いて第一圓滿清淨と爲す。

第三章　契經事の總結

是の如く略して此の論の境智相應に隨順する諸經の宗要の摩呾理迦を引けり、其の餘の一切は此の方隅に隨つて皆な當に覺了すべし。

瑜伽師地論第九十八

攝事分中契經事菩提分法擇攝第四の二

第二目　變異あるを解す

復次に、一向に決定して能く善趣に往き證淨を成就する諸の聖弟子に、猶ほ善趣に住し三種の諸大互ひに違し變異して起す所の重苦の怖畏あり、然れども惡趣の所有る怖畏無し。云何んが三種の重苦の怖畏なりや。一には病苦、二には老苦、三には斷截末摩死苦なり。是の故に說いて其の四大種を變異せしむべしと言ふ、已に四種の證淨を成就せる諸の聖弟子に變異ある可きには非ず。

第三目　天路を解す

復次に、若し第一義清淨の諸天を說いて最勝無有惱害と名づく。身語意に畢竟して惱害の事あること無きに由るが故なり。卽ち是の如き清淨天の性に依りて四證淨を說いて名づけて天路と爲す。又四證淨を所依止と爲る諸の聖弟子は三種門に依りて六隨念を修す。一には奢摩他品の諸の隨煩惱所起の染惱を斷ぜんが爲めに、二には毘鉢舍那品の諸の隨煩惱所起の染惱を斷ぜんが爲に、三には諸の染惱無しと雖も、而も未來に於て當に生起す可き二の隨煩惱を斷ず。當に知るべし此の中惛沈睡眠を奢摩他品の諸の隨煩惱と名づくと。諸欲を欣樂すると俱行する掉擧貪等の過失所生の不善の欲尋伺等の、心をして流散せしむる諸雜染法を毘鉢舍那品の諸の隨煩惱と名づく。又勝義諦の理に由りて得る所の隨念を義威勇と名づけ、世俗諦の理に由りて得る所の隨念を法威勇と名づく。

第四目　明鏡に喩ふることを解す

復次に、譬へば人ありて明鏡を執持して自の面の淨不淨相を觀ることを爲すが如く、是の如く如來の諸の聖弟子も微妙證淨の明鏡を執持して如實に自身の所有る染淨の諸相を觀ることを爲す。

第五目　記別を解す

復次に、若し四種の證淨を成就することあれば唯だ卽ち自の四種の證淨に依りて他の爲に記別し、上位に依らず、能く順じて所修の隨念を歡喜す、此の因緣に由りて當に知るべし預流果證を記

【四】斷截末摩。末摩(mar-man)は梵語にして此れに支節又は死穴と譯す、身中に或は六十四處あり或は百二十處ありと云ふ、水火風の三大の一之に觸るれば劇痛を起して命斷截すと云ふ今は梵漢兼擧して斷截末摩と名づく。

復次に、嗢拕南に曰く、

『證淨を初めに安立すると、變異あるとを先と爲し、天路と明鏡に喩ふるとにして、記別は最も後に居す。』

第一目　證淨を初に安立することを解す

正見を具足せる如來の弟子は略して二法に由りて能く正に澄清なる性を攝受するが故に應に知るべし四種の證淨を建立すと。謂はく(一)沙門の義に攝むる所の信戒(二)能說者に於ける(三)沙門の義に於ける(四)同法者に於ける能く沙門を證得する助伴に於ける所有る淨信は深く根本を固め、餘生の中に於ても亦た引く可からず、虛誑無きが故に澄清性と名づく。及び淨尸羅は其の一切の能く惡趣に往く惡不善の法に於て畢竟不作律儀を獲得す、是の故に亦た澄清性と名づくることを得。應に知るべし此の中淨信に依止して善說の法と毘奈耶との中に於て深く信解を生ずと。此の淨信は澄清なる性なるに由るが故に設ひ餘生に在るも佛の善說の法と毘奈耶とに於て畢竟して轉ずること無し。又諸の惡道の苦を怖畏し、淨戒を受持し、惡行を對治するに由り、此の戒を攝受するに由りて澄清なる性は設ひ餘生に在るも亦た惡を造りて諸の惡趣に墮せず、畢竟無退にして乃至涅槃す。善說の法と毘奈耶とに於て畢竟轉ずること無き所依處なるに由るが故に、畢竟して一切の惡趣に往かざる所依處なるが故に其の用最勝なれば唯だ信戒のみを說いて澄清性と爲す、餘の精進念定等の法には非ず、澄清性に非ず。又此の信戒は是れ其の增上戒定慧學の所依止處なり、信戒は是れ清淨なりと說くに由るが故に義として三學は皆な清淨を得ることを顯はす。是の因緣に由りて唯だ此の二のみを說いて以て證淨と爲す、是れを第二義門の差別と名づく。是の如き證淨善く能く一切の墮界白淨法を滋潤するが故に、滋潤福と名づけ、能く殊勝なる諸の聖道を引くが故に滋潤善と名づけ、能く所餘の煩惱斷を引くが故に能引樂と名づく。

く隨順する慈心の定なるが故に說いて無害と名づけ、沙門の性に於て善く隨順するが故に說いて隨順と名づけ、聖の愛する所の澄淸性に趣くが故に順澄淸と名づけ、終に戒禁取に隨順せざるが故に不隨順と名づけ、同法の者と同分と爲るが故に同色類と名づけ、正しき修習に於て增上心慧を所依處と爲し隨順し轉ずるが故に名づけて順轉と爲す、他を惱まさず饒益し轉ずるが故なり。又正に自苦行を遠離するが故に無熱惱と名づけ、受持する所に於て變悔無きが故に無燒惱と名づけ、諸の毀犯に於て現行せざるが故に、如法に己が所犯を悔除するが故に無悔惱と名づく。是の如きを名づけて增上戒學の所有る差別と爲す。三住を依と爲して當に增上心學と慧學との所有る差別を知るべし、謂はく天住梵住の差別に由りて應に增上心學の差別を知るべく、諸の所有る覺分等の法の聖住の差別に由りて應に增上慧學の差別を知るべし。謂はく四靜慮四無色等を名づけて天住と爲し、四無量定を名づけて梵住と爲し。四聖諦智四種念住乃至道支四種の行迹、勝れたる奢摩他毘鉢舍那四法迹等を當に知るべし一切皆な聖住と名づくと。又四種の若しは行若しは住に於て雜染無き法あり、修觀者をして或は境界に於て退出し遊行し、或は所緣に於て心を靜定に安んじ、諸の雜染を離れ安隱にして住せしむ。云何んが四と爲すや。一には喜受に隨順する境界に於ける諸の雜染と喜の染心とを棄捨し、二には憂受に隨順する境界に於ける諸の染汚と憂の染心とを棄捨し、三には毘鉢舍那品の諸の隨煩惱に於て其の心を淨修し、四には奢摩他品の諸の隨煩惱に於て其の心を淨修す。是の四種の若しは行若しは住に於て諸の雜染を離れ安隱にして法に住す。應に知るべし、四種の安足する處所の所依の法迹は其の所應の如く當に知るべし即ち是れ無貪と無瞋と正念と正定となりと。

第十三項　別嗢拕南第十二を以て證淨を解し、證淨を初に安立する等の五門を列釋す

第二目　淸淨戒の圓滿を解す

復次に、性罪の處に於て能く遠離するが故に當に知るべし是れを淨戒の圓滿と名づくと。能く諸の根門を密護する等淨戒を攝受する所有る善法に於て無間に受持し相續して轉ずるが故に、當に知るべし是れを善法圓滿と名づくと。遮罪處に於て能く遠離するが故に當に知るべし是れを別解脫圓滿と名づくと。又聖所愛戒に依り、若しは蓋等の五種の善巧に依り、及び別解脫律儀に依り世俗の所有る禁戒を受持するは其の次第に隨つて應に知るべし淨戒圓滿等の第二門の差別なりと。

第三目　現行を解す

復次に、淨尸羅に依りて略して二種の所學の差別あり、一には非止所攝所受の尸羅の所有る如法身語の現行所攝の學處を受持す、二には是止所攝所受の尸羅所攝の學處を受持す。此に復二種あり、謂はく或は是れ毘奈耶の所說にして別解脫の所說に非ざるあり、或は是れ毘奈耶の所說にして亦是れ別解脫なるあり。是の故に一切を總略して、三學處ありと言ふ、一には增上現行、二には增上毘奈耶、三には增上別解脫なり。

第四目　學の勝利を解す

復次に、學の勝利は慧に住するを上首と爲し、解脫堅固の念を增上と爲す。三學を修習すれば速に圓滿する等は[一三]攝釋分に廣く辯ぜるが如し應に知るべし。

第五目　學の差別を解す

復次に、具戒に住する等は聲聞地の如し應に知るべし已に辯ぜりと。又卽ち淨戒は一切の犯戒の惡を對治するが故に、根門を密護する所依處なるが故に根門を密護する所依處なるが故に說いて律儀と名づけ、初め善く受くるが故に說いて圓滿と名づけ、後善く守るが故に說いて淸淨と名づけ、愛果を感ずるが故に說いて善と名づけ、染汚無きが故に說いて無罪と名づけ、諸の有情に於て能く善

【一三】第八十一卷。

復次に、嗢拕南に曰く、

『初めは尸羅を尊重すると、清淨戒の圓滿と、現行と學の勝利とにして、學の差別を後と爲す。』

第一目　尸羅を尊重することを解す

學に三種あり、謂はく增上戒學と、增上心學と、增上慧學となり。是の如き三學の差別を建立すること聲聞地の如く應に其の相を知るべし、又略して此の諸の所學の中に於て所有る邪行を應に正しく了知すべく、所有る正行を應に正しく了知すべし。邪行と言ふは、謂はく一あるが如し戒を尊重せず、汎爾に出家し、復た出家すと雖も淨戒を以て其の增上を爲さず、淨戒に於けるが如く定に於ても慧に於ても應に知るべし亦た爾なりと。彼れ無餘罪を犯すことあるべし、彼れに於て世尊說きたまはく、「其は諸の沙門果證に於て無能者と爲らん」と。是の故に當に知るべし彼れは三學に於て一向に毀犯するなり。正行と言ふは三正行あり、謂はく下と中と上となり。下正行とは、謂はく一あるが如し淨戒を尊重し、亦た淨戒を以て其の增上と爲すこと前と相違するも、定に於て慧に於ては尊重を生ぜず、增上を爲さず、此は無餘罪を犯すことあるべからざるも、而も小隨小罪を犯すことあるべし、此に於ては如來は、其は沙門の果證に於て無能者と爲らんと說きたまはず。中正行とは、謂はく戒定に於て皆な悉く尊重し、亦た增上を爲すなり。戒を尊重するが如く毀犯する次第も此の中亦た爾なり、是の故に當に知るべし乃至所有る諸の異生位なりと。上正行とは、謂はく已に諦を見、三種の學に於て皆な悉く尊重し、此れ已に沙門の果證を獲得し、有能無能を思擇するを待たず。是の如き二行を開いて四種と爲す、卽ち此の四種を合して二行と爲す、此の二と四と平等平等なり。當に知るべし此の中若し定學あれば必ず戒學あり、若し慧學あれば必ず定學あるも、戒學ある者は必定して定學慧學あるにあらずと。若し瑜伽師諸學を尊重すれば當に知るべし是れを所作の圓滿と名づけ、其の餘は但だ所作の一分と名づくと。

別あり、謂はく諸の有學は現行の故に離蓋住心、如來と等しと雖も、然も彼れの隨眠は未だ永斷せざるが故に、諸蓋數數心に間つて相續し、數數作意し力を勵して除遣す。如來の諸蓋は畢竟斷なるが故に、諸蓋を離れて住すると彼れの所有の諸蓋を離れて住するとは極めて大なる差別あり、解脱の差別あること無きが如くには非ず。

第七目　作意を解す

復次に、瑜伽を修する師は入出息念を所依止と爲して四念住を修し、如理作意を以て依止と爲し、諸の未斷の內心の所有る非理作意に於て如實に了知して是れを非理なりと爲し、內の所有る如理作意に於ては如實に了知し、是れを如理なりと爲し、既に了知し已つて內の所有る非理作意に於て一向に遠離し、內の所有る如理作意に於て一向に修習す、彼をして永斷滅せしめんと欲するが爲の故なり。又此の中の身等の四法の四大路の如くなるに於ける非理作意は塵土丘の如し、不堅牢の故に、不眞實の故に、迷亂心の故なり、如理作意は四方より來る輿乘車と車緣との如し。身等の四の境界門に轉じて能く彼の塵土丘の如き非理作意を損害して亦た一切相續して清淨ならしむ。

第八目　智無執を解す

復次に、諸の息念を精勤し修習する者は正しく四種の念住を修習するに由りて我等無きが故に平等平等なり。是の身の種類に能く身に於ける如理作意を取る、身の如く無我作意も亦た爾なり、是の故に彼を說いて身の一分と爲す、能く是の如き身念住を修する者は都べて得可らず、身念住の如く廣說乃至、法念住を修するも當に知るべし亦た爾なりと。是の如きは諸佛の念住を修する教なり、外道法中には皆な所有無し。是の故に此の念住を修する教を說いて、一切の外道の所執に非ずと名づく。

第十二項　別嗢拕南第十一を以て學を解し尊重尸羅等の五門を列釋す

に斷滅すべし、而も無常行の中に於て希奇の事ありて入息滅し已つて我が命根住し、乃ち復た出息生ずる時に至ることを得、出息滅し已つて我が命根住し、乃ち復た入息生ずる時に至ることを得と。彼れ是の如き事を攀緣するに由るが故に深心に三世の境に於て發す所の愛恚を厭離し、其の心を淨修す、是れを有上の十六行修と名づく、當に無上を知るべし。

第四目　細を解す

復次に、是の如く入息出息念に住し、細風色を緣じて境界と爲すが故に微細住と名づけ。一切の亂尋伺を隔絶するが故に流散せずと名づけ、廣大なる身心の所有る妙輕安を發生するが故に伏すべからずと名づく。

第五目　身勞を解す

復次に、是の如き入息出息念を修習し、身をして勞無く善く能く奢摩他品の隨煩惱を除遣せしむるが故に、眼をして勞無く善く能く毘鉢舍那品の隨煩惱を除遣せしむるが故に、隨つて涅槃の樂を觀察するに由るが故に隨つて樂を觀ずと名づけ、隨つて第三靜慮地中の樂を領受するに由るが故に領受樂と名づけ、無染にして住するが故に、恐畏無きが故に安樂住と名づく。

第六目　學住を解す

復次に、是の處あるべし、或は一人あり、是の如き念を作す、如來と彼の最極下劣の慧解脫を得たる阿羅漢果と差別あること無しと。謂はく解脫に依りて是の思惟を作す、如來の解脫と慧解脫の阿羅漢果所有の解脫と差別あること無しと。頗し復た人ありて是の如き念を作す、如來の所有の諸蓋を離れて住すると、內法の中に居る最極下劣の若しは諸の有學、若しは諸の異生、精進力、其の五蓋を伏斷して住するを離蓋住と名づけ、此の離蓋住と彼の離蓋に由つて住する、解脫の如く差別あること無しと爲んや、差別ありと爲んやと。應に知るべし是の如き二の離蓋住に極めて大なる差

は未だ定を得ざるに心定を求めんと欲し、及び定を得已つて倍復た增長せんとするに於て當に知るべし一切能く障礙を爲すと。奢摩他品の諸の隨煩惱に染汚せらるる時身の惛沈を發し、心の下劣を生ず。正しく入出息念を修習するに由りて身心輕安にして能く惛沈下劣の俱行する身心の麁重をして皆な悉く遠離せしむ。毘鉢舍那品の諸の隨煩惱に染汚せらるる時種種の尋伺妄想を發生す、謂はく欲尋伺等の不正なる尋伺及び無明分の尋伺より起る所の諸の欲想等の種種の妄想なり。正しく入出息念を修習するに由りて、尋伺等をして悉く皆な靜息せしめ、彼の無明分の諸の妄想を對治せんと欲するが爲の故に純ら明分の想を修して速に圓滿することを得しむ。

第二目　果を解す

復次に、入出息念を正勤修習する諸の瑜伽師は過去の諸行を緣ずる尋伺の能く無間に生ずる所の等持をして間缺あらしむる者に於て速に損減することを得しめ、未來の諸行を緣ずる尋伺の能く無間に生ずる等持をして間缺有らしむる者に於て速かに止息を得しめ現在の諸行を緣ずる尋伺の能く無間に生ずる所の等持をして間缺あらしむる者に於て速に寂靜を得しむ。又若し略說せば能く六種の結を永斷するに由るが故に當に知るべし二種四種及以び七種の諸果の勝利を建立すと、經に廣說せるが如し。云何が六結なりや。謂はく下分と上分とに順ずる二結と、見道と修道との所斷の二結と、若しは起、若しは生の二分の位の結なり。是の如き別別を當に知るべし總じて六種の結ありと說くと。其の次第の如く二種四種七種の諸果の勝利を建立す。

第三目　欲を解す

復次に、入出息念を修習する差別に略して二種あり、一には有上、二には無上なり。其の有上とは、謂はく一あるが如し、獨り空閑に處し、靜定心を以て如理に命根は入息出息に繫屬すと觀察すらく若し我れ入息の後に於て出息あること無く、或は出息の後入息無くんば是の如き命根は卽ち應

黑闇品に墮在するが故に名づけて黑と爲す。惡趣に往くが故に說いて無義と名づく。不善性なるが故に說いて下劣と名づく。現法中の所有る怖畏及び怨憎を生ずるが故に說いて有罪と名づく。諸有る智者の譏毀する所なるが故に、遠離する所なるが故に應に遠離すべしと名づく。

第四目　沙門と婆羅門とを解す

復次に、第一義に依る所有る沙門是の如き八支聖道を安立するを沙門の義と爲す、此の義の爲の故に善說の法と毘奈耶との中に於て假名の出家にして沙門の性を受く、又此れ畢竟して失壞すること無きが故に第一義と名づく、其の假名の者は卽ち是の如くならず。諸有る此の第一義の沙門の性を成就する者を當に知るべし亦た勝義の沙門と名づくと。又彼れは此の沙門果を追求して貪瞋癡等畢竟して斷ずる義あり。是の故に彼を說いて沙門の義と名づく。此の沙門の義に復た二種あり、一には無差別總相にして建立し、二には若しは所作あり。若しは所作無きには行向住果の差別を建立す。是の如き一切に總じて四種あり、一には沙門性、二には是沙門、三には沙門義、四には沙門果なり。其の婆羅門の差別の道理も當に知るべし亦た爾なりと。

第十一項　初嗢拕南第十を以て息念を解し、障隨惑尋等の八門を列釋す

復次に、嗢拕南に曰はく、

『障・隨惑・尋等と、果と欲と細と身勞と、學の住と及び作意とにして、智無執を後と爲す。』

第一目　障隨惑尋等を解す

入出息念を修習する差別に十六行あり、廣く義を分別すること[三]聲聞地の如く應に其の相を知るべし。又勤めて修行する諸の瑜伽師は是の如き入出息念を修習し、爾の時應に五の障礙の法を知るべし、一には其の外緣に於て其の心散亂し、二には入出の息に轉た艱難する所あり、三には掉擧惡作の纒現在前す、四には惛沈睡眠の纒現在前す、五には樂つて道俗と共に相雜住す。是の如き五法

【三】第七十七卷。

勝なりと爲す、二には內力の中に於ては正思惟の力を最も殊勝なりと爲す。當に知るべし此の中諸の障礙を離れ、先づ福業を修して衣食等に於て匱乏無き等を餘の外力と名づけ、正思惟に相應する想を除ける外の餘の斷の支分を餘の內力と名づくと。外の善知識とは、謂はく彼に從つて無上の正法を聞くなり、此れに由るが故に、他に從つて音を聞くと名づく。內の正思惟とは、謂はく此の無間に能く正見を發すを上首の道と爲す。

第二目　淸淨差別を解す

復次に、彼の正見等の若し有學に在るは無漏に由るが故に說いて淸淨と名づけ、若し無學に在るは相續して淨きが故に說いて鮮白と名づけ、若し世間に在るは無量の外道の見に隨ふ諸の惡邪行を遠離す、是の故に說いて塵點あること無しと名づけ、塵點より起る所の後有の諸の業雜染を遠離す、是の故に說て隨煩惱を離ると名づく。一切の八聖道支を略說せば二處の所攝なり、一には世間、二には出世間なり。其の世間は、三漏[九]四取の隨縛する所なるが故に苦を盡すこと能はざるも、是れ善性なるが故に能く善趣に往く。出世間は、彼れと相違して能く衆苦を盡くす。又正見等の八正道支は廣く義を分別すること[一〇]聲聞地及び攝異門分の如く應に其の相を知るべし。[一一]七種の定具は三摩呬多地に已に說けるが如し。

第三目　異門を解す

復次に、正見を首と爲す八正道支は正理に會するが故に說いて名づけて法と爲す。能く一切の諸の煩惱を滅するが故に毘奈耶と名づく。諸の惡法を去ること極めて懸に遠きが故に、一切の聖賢共に祖とし習ふが故に說いて名づけて聖と爲す。能く隨順すれば諸の善趣に往くが故に說いて名づけて善趣と爲す。涅槃の故に說いて應修と名づく諸有る智者の稱讚する所なるが故に說いて善哉と名づく。此れと相違すれば應に知るべし卽ち是れ邪見を首と爲す八邪道支なりと。所有る差別は無明

【九】四取とは(一)欲取、五塵を食欲取著す、(二)見取、我見邊見等を妄計取著す、(三)戒取、非理なる禁戒を取著修行す、(四)我語取、我見等より生ずる說を取著す。
【一〇】第二十九卷。
【一一】七種の定具。倫記に有釋に云く、八正道の中に正定を除ける餘の七道支なりと。麗本には「七種の定因具」とあり。

の煩惱隨眠あり、若しは利養を希求し、若しは活命を希求し、若しは諸の欲愛、若しは諸の有愛、若しは虛妄分別に隨つて起す所の四種の欲貪、一には美色貪、二には形貌貪、三には細觸貪、四には承事貪、是の如きは能く所有る非理の過患を生起せしめ、及び其の心をして越路して轉ぜしむ。謂はく四種の彼れを對治するが故に其の所應に隨つて二十一想と倶行して覺支を修する差別あり。一種の障を對治せんが爲の故に無願行想と無常想より乃至一切世間の不可樂想とを修し、一種の障を對治せんと欲するが爲めの故に空行想と苦無我想とを修し、所餘の煩惱隨眠の障を斷滅せんと欲するが爲の故に三界に於ける無相行想を修し、利養を希求すると及び欲愛とを對治せんと欲するが爲の故に諸欲の中に於て過患の想を修し、活命を希求すると及び有愛とを對治せんと欲するが爲の故に死想を修習し、虛妄分別に隨逐して起る所の四欲貪を對治せんと欲するが爲の故に、不淨想を修するを初めと爲し、乃至觀空想を後と爲す。又此の一切青瘀想より乃至觀空想は當に知るべし皆な是れ不淨想の攝なりと。又此の中に於て青瘀想を初と爲し、降脹想を後と爲して美色貪を對治し、食噉想と分赤想と分散想とは形貌貪を對治し、骸骨想と骨鎖想とは細觸貪を對治し、無心識空を觀ずる有尸想は承事貪を對治す。又此の中に於て慈を修し、最極は遍淨に至る等は三摩呬多地の如く應に其の相を知るべし。

第十項　別嗢拕南第九を以て八正道支を解し、內外力等の四門を標釋す

復次に、嗢拕南に曰はく、

『初めは內外力と、淸淨差別と、異門とにして、沙門後は婆羅門なり。』

第一目　內外力を解す

若しは內若しは外の一切の力の中に八支聖道を生起せんと欲するが爲に二種の力あり、所餘の力に於て最も殊勝なりと爲す。云何なるを二と爲すや。一には外力の中に於ては善知識の力を最も殊

切の清淨の法軍を率ゐて能く無相安隱の住處に趣く、此の義に由るが故に其の捨覺支は軍將寶の如し。

第六目　住を解す

復次に、諸の修行者七覺支を得ることは譬へば大王の妙衣篋ありて三時に受用し、三分に安住するが如し。彼の七覺支も當に知るべし亦た爾なりと。三時と云ふは、謂はく初日分時と中日分時と後日分時となり。三分と言ふは、謂はく奢摩他品と、毘鉢舍那品と及び其の俱品となり。初分中に於て四覺支に住し第二分中に四覺支に住し、第三分中に具足して七種覺支に安住す。諸の修行者未だ曾て唯だ一覺支又七覺支に安住せざるを、諸の外道に於て怨憎無きが故に、違競無きが故に、恒に利益する意樂を懷いて轉ずるが故に、一切の煩惱を皆な離繫するが故に說いて怨無く敵無く害無く灾患あること無しと名づく。若し修行者七覺分に於て時に隨つて現前し、量に隨つて現前するを說いて名づけて住と爲し、若し時に退出するを說いて名づけて滅と爲す。是の一切に於て如實に了知す、彼れ是の如く正知にして住するに由るが故に罪無き住と名づく、愛味あること無く、心に味染を離る。

第七目　修を解す

復次に、二十一種の想と俱行して諸の覺支を修する者は、當に知るべし略して二の因緣に由るが故なり、一には相應し俱行する義に據り、二には無間に俱行する義に據るなりと。無常等の想と俱行して修し、乃至死想と俱行して修するは相應する義に據り、不淨等の想と俱行して修し、乃至觀空の想と俱行して修するは無間の義に據る、悲等と俱行して修するも應に知るべし亦た爾なりと。又過去未來現在の一切行中に於ける諸行の愛染若しは懶惰懈怠若しは薩迦耶見已に斷滅すと雖も習氣隨縛して我慢現行し、若しは味を貪る愛若しは世間の種種なる妙事に於ける欲樂貪愛若しは所餘

復次に、初中後に於て一支を闕くに隨つて如實なる覺をして圓滿を得ざらしむ。其の色類の所依、能依、流轉、安立の如きは、其の生起するに隨つて漸次にして説く。當に知るべし此の中念は所依たり、擇法は能依なりと。餘は所應に隨つて、當に知るべし亦た爾なりと。

第五目　安樂を解す

復次に、若し苾芻ありて諸の覺支に於て方便修習し、四の因縁に由りて其をして安隱にして住することを得ざらしむ。何等をか名づけて四種の因縁と爲すや。一には一切の煩惱の品類の麁重を皆な未だ離れざるが故に、二には奢摩他品の諸の隨煩惱現在前するが故に、三には毘鉢舍那品の諸の隨煩惱現在前するが故に、四には道未だ調善ならざるに而も乘馭するが故なり。此れと相違する四種の因縁は其をして安穩にして住することを獲得せしむ。此の二種に於て善巧なる苾芻は如實に了達して正知にして住す。諸の作意に由りて加行あるが故に精進太だ過ぎたり、又前後に增減あるに由るが故に運轉すること等しからず。此の二縁に由りて當に知るべし名づけて道調善ならずと爲し、此れと相違する二の因縁の故に道調善なりと名づくと。轉輪王の四洲渚に於て大自在を得て獲る所の七寶の如く、是の如く心王の四聖諦に於て大自在を得て獲る所の眞淨なる七覺支寶も當に知るべし亦た爾なりと。謂はく奢摩他毘鉢舍那の雙品運轉するに於て、一切の煩惱を降伏し、怨に勝つ、此の義に由るが故に初の念覺支は猶ほし輪寶の如し。所知の境相は其の量無邊なり、能知の智體も亦隨つて廣大なり、此の義に由るが故に擇法覺支は猶ほし象寶の如し。此に依りて速かに能く乃至彼の所行の所に往き、殊異なる勝處を得、此の義に由るが故に精進覺支は猶ほし馬寶の如し。意を悅ばし罪無きを最も殊勝なりと爲す、此の義に由るが故に其の喜覺支は猶ほし女寶の如し。身心暎徹にして堪能する所あり、此の義に由るが故に輕安覺支は神珠寶の如し。能く一切の欣求する所の事を辦ず、此の義に由るが故に其の定覺支は藏臣寶の如し。能く一切の染汚の法軍を摧き、能く一

と爲し、或は許して無と爲ることを皆な正に了知し、無爲法乃至有頂の皆な是れ有上なるに於ては能く正に了知して是れを有上と爲し、涅槃の無上なるを如實に了知して是れを無上と爲す、是の如きを名づけて如理通達と爲す。又四念住を以て依止と爲し、靜定心に由り、七覺支に於て正に修習し已つて明解脫に於て究竟して作證す、是の如きを名づけて眞實の證を得と爲す。若し彼の自愛する諸の善男子にして惡說の法と毘奈耶とに趣入するは是の四處に於て皆な得ること能はざるが故に稽留と名づく。

第九項　別嗢拕南第八を以て七覺分を解し、立等の七門を標釋す、

復次に、嗢拕南に曰はく、

『立と差別と、食と漸次と、安樂と住とにして、修は後に居す。』

第一目　立を解す

奢摩他毘鉢舍那の倶品の差別に由りて覺支を建立することは[七]聲聞地の如く應に其の相を知るべし。

第二目　差別を解す

復次に、自性の差別の故に、及び所緣の因緣の相差別の故に應に知るべし七覺支の十四種差別す、所緣因緣の相を廣く分別する義は[八]三摩呬多地及び聲聞地の如く應に其の相を知るべしと。

第三目　食を解す

復次に、能く覺支に隨順する法の中に於て略して二種の無倒作意あり、當に知るべし總じて覺支の與に食と爲ると。何等を二と爲すや。一には正作意、二には數作意なり。此れと相違するは當に知るべし食に非ずと。

第四目　漸次を解す

【七】第二十九卷。
【八】第十一卷。

善を修習す、謂はく念住と、正斷と、神足と、根と、力と、覺支と、道支となり。

第五目　有學を解す

復次に、諸佛如來は自利行と及び利他行とに依りて已れと諸の弟子と差別あることを顯はさんと欲するが爲めの故に是の如き言を說きたまへり、「諸の有學の者は五力を成就し、唯だ如來のみ有つて十力を成就したまふ」と。若し有學の五力を成就し自利行を行ずることある諸の聖弟子は最上阿羅漢果を獲得し、此れより無間に一切の自義皆な究竟することを得。如來は阿羅漢を獲得し已つて十力を成就し、利他行を行じ、卽ち利他を用て以て自義と爲す。設し是の時に於て一切の化する所の其の事究竟すれば無餘依般涅槃界に入る、當に知るべし爾の時、所作の事に於て方に圓滿を得と。若しは修行する所の阿羅漢の行、若しは利他の爲にする卽ち自義の行なり。此の二の因緣もて諸の弟子に於て皆な殊勝なりと爲す。如來の十力は[六]菩薩地に已に廣く分別せるが如し。

第六目　質直を解す

復次に、若し自ら無諂無誑を愛し、其の性質直なる補特伽羅あり、自義を證せんが爲に四種の相あり、若し惡說の法と毘奈耶とに依らば便ち稽留あり、善說の法と毘奈耶とに依らば乃ち稽留無し。云何んが四相なりや。一には說正法教、二には教授教誡、三には如理通達、四には得眞實證なり。聞く所の正法は是れ諸の勝解の所依止處なり、能く無因・惡因を遠離するに由りて理に稱ふ正因の義を開示するが故に、諸有る無倒の教授教誡善く能く斷の加行の教の文義に攝むる所の無顚倒の法に隨順すれば能く前の如く勝解の所依處の法を證得せしむ。若し自愛する諸の善男子あり、已に調ひ相續し堪能する所ありて內の法・毘奈耶の中に來入し、正しく宣說することを得、正しく開悟することを得、便ち能く速疾に趣向し勝進し、如理に應に通達すべき所に通達し、亦た能く實に眞の應に證すべき所を證す。謂はく四念住を以て依止と爲し、有爲法に於て諸の聰慧なる者共に許して有

【六】第四十九卷。

て修する所の梵行に於て此の法若しあらば便ち梵行を壞せんと、是れを第三處思擇力と名づく。是の如く羞恥するは當に知るべし三處を以て増上と爲すと、一には世増上、二には自増上、三には法増上なり。

第二目　覺慧等を解す

復次に、自利行及び利他行を増上と爲すに由るが故に當に知るべし四種の力ありと建立すと。一には覺慧力、二には精進力、三には無罪力、四には攝受力なり。能く現法涅槃に往くを名づけて自義と爲し、能く人天の善趣に往くを亦た自義と名づく。當に知るべし此の中第一の自義に依りて覺慧精進の二力を建立し、是の二力に由りて能く方便ありて正勤を發起すと。第二の自義に依りて無罪力を立て、此の三力に由りて一切の自義皆な究竟することを得。利他を樂ふ者は他義なり、有餘の此の増上に由りて攝受力を立つ。當に知るべし攝事は[四]菩薩地に已に其の相を辯ぜるが如しと。

第三目　國等及び諸王を解す

復次に、國及び王、若しは男若しは女、若しは夫若しは妻、若しは愚若しは智、若しは居家に處する若しは出家衆に、當に知るべし十種の力ありと建立すと。謂はく諸の國王には自在力あり、是の如き等の力は廣說、經の如し。

第四目　阿羅漢を解す

復次に、諸の阿羅漢は[五]八力を成就して、如實に領受して貪瞋癡等永盡して無餘なり、諸惡を造らざるが故に諸善を修習す、謂はく心遠離出離の般涅槃に趣向するが故に後有を厭背し、厭背の因縁にて惡業を造らず。又諸欲を見ること猶ほし一分の熱炭火の如くなるが故に諸欲厭背し、厭背の因縁にて惡業を造らず。此の二力に由りて諸惡を造らず、惡を造らざるが故に復た六門に由りて諸

【四】第四十三卷。

【五】八力とは、惡業を造せざるに二力あり、一には後有を厭背するが故に造らず、二には諸欲を厭背するが故に造らず。修養に六力あり道品七位の中に根と力とを合して一門とするが故なり。

此の慧は若しは初にも若しは後にも多く所作あるが故に慧根を最も殊勝と爲すと說く。

第四目　外の異生品等を解す

復次に、若し諸佛の無上菩提に依りて得る所の正信、乃至正慧、此の世間に於ても亦たあること無き者は、當に知るべし此れ外の異生品に住すと。卽ち此の法に於て唯だ世間のみあるも、出世無き者は、當に知るべし此れ內の異生品に住すと、外の異生には非ず。若し此の法に於て出世あるは、當に知るべし、一切の別住なりと、餘品は彼の品類に非ず。

第八項　別嗢拕南第七を以て五力を解し、思擇等の六門を標釋す

復次に、嗢拕南に曰はく、

『思擇と覺慧等と、國等及び諸王と、阿羅漢と有學とにして、質直を最も後と爲す。』

第一目　思擇を解す

略して一切の現法後法の諸の惡行の中に於て深く過を見已つて能く正しく思擇して諸惡行を息め、諸善行を修するを思擇力と名づく。當に知るべし此の力能く二事を成ずと、一には能く人天の善趣に往く、二には能く現法涅槃に往く。又此れ能く修習力の與に攝せられ、諸の念住を修めて所依止と爲す、此れを依と爲すに由りて能く正しく四念住等の菩提分法を修習す、當に知るべし此の修を修習力と名づくと。又思擇力能く三處の羞恥の與めに伴と爲る。何等を名づけて三處の羞恥と爲すや。一には他處羞恥、謂はく是の思を作す、若し我れ惡を作さば當に世間の他心智ある諸佛世尊、若しは聖弟子、若しは諸天衆にして佛敎を信ずる者の爲に共に呵毀せらるべしと、是れを第一處思擇力と名づく。二には自處羞恥、謂はく是の思を作す、若し我れ惡を作さば定んで當に己の爲に深く呵毀せらるべし、何ぞ善人ありて斯の惡行を爲さんやと、是れを第二處增上力と名づく。三には法處羞恥、謂はく是の思を作す、我れ若し惡を作さば便ち障礙を爲すなり、善說の法と毘奈耶との中に

ば、是の如き六根各別の所行、各別の境界たるや、然も此の六根のみ唯だ能く自所行の境を領受す、誰か能く是の如き六根所行の境性を領受せんやと。當に知るべし、此れ縁起の道理を了達すること能はざるに由るが故に諸行に於て邪分別を起すなりと。縁起の理とは、謂はく若しある時瑜伽を修する師、內の六根に於て如理に攀縁し、精勤加行し、四念住を修し、卽ち爾の時に於て此の四念住にて六根の所行の境性を領受す、卽ち此れ彼に於て淸淨に由るが故に名づけて出離と爲す。又卽ち四念住を勤修するが故に初めて諦理に達し七覺支を得、卽ち爾の時に於て此の諸の覺支眞なるが故に、實なるが故に念住の所行の境性を領受す。又覺支を修習する因縁に由りて明脫を起し、卽ち爾の時に於て是の如く明脫し、覺支を領受し已つて善く修習し、此れより已後復た應に所行の境性を修すべからず。如實に已に一切の煩惱を斷じ、卽ち爾の時に於て諸の煩惱斷滅せる涅槃に於て增上慢を離る。卽ち增上慢を遠離するに由るが故に此れ現に實に究竟の明脫あり。如實に領受し已つて明脫の所行の境性を得、此に由りて一切の所有る有爲法を出離するが故に當に知るべし明脫も亦た出離を得と。涅槃の中に於て能取所取の二種の施設皆な所有無く、一切の戲論永に滅離するが故に是の故に乃至諸の有爲法の展轉して問答し施設することを得可き能取と所取との言論の差別、究竟涅槃の無爲法中の一切の問答言論の差別皆な不如理なり、是の故に當に知るべし無我の中に於ては應に正に唯だ雜染あるのみ、唯だ淸淨あるのみなりと顯示すべしと。

第三目　慧根乃至安住を解す

復次に、若し黠慧にして諸根猛利の種類の士夫補特伽羅あり、思擇力に由りて諸法を如理に作意し思惟し、乃ち涅槃に於て正しき信解を得、此に由りて增上し發勤精進す。此の增上の故に能く身等の所縁の境界に於て正念に安住す。此の增上の故に能く所縁に於て心をして一趣ならしむ。此の增上の故に一切法に於て如實に了知し、如實に觀見し、是の因縁に由りて能く究竟に到る。是の故に

た是の如し。又諸の聖者の時を變ずる神通は順現法受業を轉變して順後法受業を成ぜしめ、及び順後法受業を順現法受業と成さしむること能はず。

第七項　別嗢拕南第六を以て五根を解し安立等の四門を標釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『安立と所行の境と、慧根を最勝と爲すなり、當に知るべし後は安住と、外の異生品等なり。』

第一目　安立を解す

略して六處の增上義に由るが故に當に知るべし二十二根を建立すと。何等を六と爲すや。一には能く境界を取る增上なる義の故に、二には家族を繼嗣する增上なる義の故に、三には活命の因緣各別の事業加行の士用の增上なる義の故に、四には先世の諸業の作す所の愛・不愛の果を受用し及び新業を造る增上なる義の故に、五には世間に趣向する離欲の增上なる義の故に、六には出世に趣向する離欲の增上なる義の故なり。當に知るべし此の中、眼根を最初とし、意根を後と爲す是の如き六根は境界を取るに於て增上の義あり。男女の二根は能く家族子孫を繼嗣するに於て增上の義あり。命根の一種は命を愛する者の活命の因緣各別の事業加行の士用に於て增上の義あり。樂を最も初と爲し捨を其の後と爲す是の如き五根は其の先業の所作の愛・不愛の果を受用し、及び新業を造るに於て增上なる義あり。信を最初と爲し慧を其の後と爲す是の如き五根は能く世間に趣向する離欲に於て增上の義あり。未知當知と、已知と、具知との三無漏根は能く出世に趣向する離欲最極究竟に於て增上の義あり。一切世間の現見する所の義は其れ唯だ此の量のみなり。當に知るべし是の義の能く究竟する者は此の二十二根を出づること無し、故に一切の根は二十二の攝なり。

第二目　所行の境を解す

復次に、或は一類あり、是の思惟を作す、若し內我の六根門に託して六境界を行ずること無くん

所聞の法の如く、所得の法の如く、獨り空閑に處し、思惟し籌量し、審諦に觀察す、此の因緣に由りて漸次に勝三摩地を生起す、當に知るべし是れを觀増上三摩地と名づくと。

復差別有り、謂はく四門に由りて三摩地を起す。一には前の如く他に從つて猛利の樂欲を生起し、正法門を聞くに由る。二には他に從つて無倒なる教授教誡を獲得し、無間殷重に加行を發起し、未だ根本の勝三摩地に入らざるに趣入せんと欲するが爲の正しき教授門に由る。三には已に根本の勝三摩地に入り、轉た所餘の上位の勝三摩地を得んと欲するが爲の心喜樂門に由る。四には多聞聞持し、自ら能く法に於て如理に觀察する平等觀門に由る。當に知るべし此の中第一門に由りて欲増上三摩地を起し、第二門に由りて精進増上三摩地を起し、第三門に由りて心増上三摩地を起し、第四門に由りて觀増上三摩地を起すと。所餘の義を分別し及び斷行を分別することは[三]聲聞地の如く應に其の相を知るべし。

第五目　神足を解す

復次に、諸の神足を修するを以て依止と爲して能く正に諸聖の神通を引發す、外道の諸の神足を修めて能く正に諸聖の神通を引發することあること無し。又諸の聖者は所有る最勝なる神通を引發し、願樂する所に隨つて諸の壽行を延ぶ、或は一劫、或は一劫餘に住す、謂はく一劫を過ぎたる不淨種姓の補特伽羅を名づけて物類と爲す、當に知るべし此の類は唯だ內法に住するのみなりと。又諸の聖者の變化神通は其の四事に於て變化すること能はず、一には根、二には心、三には心所有法、四には業及び業異熟なり。又諸の聖者の性を變ずる神通は、順樂受業を轉變して自性をして改めて順苦受と成さしむること能はず、順樂受を順苦受に望むるが如く、順苦受業を順樂受に望むるも應に知るべし亦た爾なりと。若し業の能く順非苦樂受なるは當に知るべし畢竟して順非苦樂なりと。又諸の聖者の住持する神通は順非苦樂受業を住持するを無受と成さしむること能はず、餘も亦

【三】第二十九卷。

と能はず。惛沈睡眠と倶行する欲等に由りては奢摩他品に於て雜染に任せしめ、亦復た能く諸の奢摩他をして皆な悉く滅沒せしむ。掉擧と倶行する欲等に由りては毘鉢舍那品に於て雜染に任せしむれども、而も毘鉢舍那をして一切滅沒せしむること能はず。妙欲の散動と倶行する欲等は毘鉢舍悉品に於て雜染に任せしめ、亦た一切の毘鉢舍那をして皆な悉く滅沒せしむ。(三)毘鉢舍那品の所縁の境とは、謂はく前後の想なり、此の想の分別は[二]聲聞地の如く應に其の相を知るべし。(四)奢摩他品の所縁の境とは、謂はく上下の想なり、此れ亦た前の如く應に其の相を知るべし。(五)倶品の所緣の境とは、謂はく光明想なり、彼れ倶品に於て動搖に由るが故に諸の光影と倶行する心あり。修又欲等と餘の懈怠と相應するが如くに非ざるを說いて懈怠倶行すと名く。精進も亦た爾なり、懈怠共に相應する義あることを得、然れば卽ち精進慢緩に墮在して正に發勤精進せず、相續するを說いて懈怠倶行と名づく。又此の五相に當に知るべし總じて一切種の修を攝すと、等持を樂ふ者は此に由りて等持を速に成滿することを得。

第四目　異門を解す

復次に、五解脫處に於て其の所應の如く當に欲等の增上する四種の三摩地を知るべし。若し苾芻あり、淨意樂及び猛利の欲に依りて最勝なる通慧を證得せんと欲するが爲に諸の如來及び佛弟子に從つて殷重に恭敬し、正法を聽聞し、聞より無間に漸次に勝三摩地を證得す、當に知るべし是れを欲增上三摩地と名づくと。復た苾芻あり、所聞の法の如く、所得の法の如く大功用を起し、大精進を發し、或は正に他の爲に宣說開示し、或は勝妙の音詞を以て讀誦し、此れより無間に漸次の因緣に能く隨つて勝三摩地を獲得す、當に知るべし是れを精進增上三摩地と名づくと。復た苾芻あり、諸の賢善の三摩地の相に於て善く取り、思惟し靑瘀等乃至骨鎖を觀じて以て邊際と爲し、此の所緣に由りて次第に勝三摩地を生起す、當に知るべし是れを心增上三摩地と名づくと。復た苾芻あり、

【二】第二十八卷。

第二目　力を解す

復次に、應に知るべし四種神足を建立することは[1]聲聞地に已に廣く分別せるが如しと。若し略して說かば、四種の力に由りて心を持して定ならしむ、是の故に四種神足を建立す。云何んが四と爲すや。一には淨意樂力、二には勤務力、三には心喜樂力、四には正智力なり。當に知るべし此の中第一力に由りて三摩地に於て樂欲を發生し、證得せんが爲の故に修習し勤務し、第二力に由りて最初の住心其をして定に安んぜしめ、第三力に由りて已住の定心を復た散動すること無く、外に於て更に復た飄轉せしめず、第四力に由りて等持の所治の煩惱を觀察し、斷と未斷とに於て如實に了知し、又等持の入・住・出の相に於て能く善く了別すと。是の如く復た奢摩他等の所有る諸相、若しは奢摩他毘鉢舍那の諸の隨煩惱及び隨煩惱の能對治等を皆な如實に知る。等持を樂ふ者等持の中に於て但だ爾所の等持の作事あり、此れを除きて更に若しは過若しは增無し。

第三目　等持を修することを解す

復次に、五の因緣に由りて當に神足を略して修習する相を知るべし。一には奢摩他品の隨煩惱を遠離するに由るが故に、二には毘鉢舍那品の隨煩惱を遠離するに由るが故に、三には毘鉢舍那品の所緣の境界に於て心を繫縛するが故に、四には奢摩他品の所緣の境界に於て心を繫縛するが故に、五には俱に二品の所緣の境界に於て心を繫縛するが故なり。應に知るべし此の中（一）奢摩他品の隨煩惱とは、謂はく懈怠と俱行する欲等と及び惛沈・睡眠と俱行する欲等となり。當に知るべし懈怠と俱行する欲等は是れ惛沈睡眠と俱行する欲等の所依止の性なりと。（二）毘鉢舍那品の隨煩惱とは、謂はく掉擧と俱行する欲等と及び妙欲の散動と俱行する欲等となり。當に知るべし掉擧と俱行する欲等は是れ妙欲の散動と俱行する欲等の所依止の性なりと。又此の中に於て懈怠と俱行する欲等に由りて奢摩他品に於て雜染に任せしむれども、然も諸の奢摩他をして皆な悉く滅沒せしむるこ

【一】第二十九卷。

るが如く、彼に於て生ずる所の如理作意は正しく稲穀麥穗を祈願するが如し。當に知るへし欲界は是れ定地ならざること猶ほし其の皮の如く、色無色界は倶に是れ定地なること猶ほし其の肉の如く、無明は血の如しと。三界の中に於て三種の漏に由りて淋漏の義あるなり。

第八目　成就を解す

復次に、先の所說の如き所有る貪等の種種無量の惡不善法を、二の因緣に由りて若し成就する者は四種の念住を修習すること能はず、是れ一切汎く成就する者には非ず。云何んが二と爲すや。一には貪尋の纏現前することあるが故に、二には此の纏に於て過を見ざるが故なり。纏現在前せば雜染心なるが故に修習すること能はず、暫らく遠離すと雖も性染著するが故に戀すること無きに非さるが故に能く貪等に隨順する諸法に於て其の心散動し、常に逐うて漂淪し、種種なる尋思は恒に隨つて擾亂す、是の故に念住を修習すること能はず。若し爾らざる者は諸有る其の性深く染著せざれども皆な應に念住を修習すること能はざるべし。若し是の如き者は能く四念住を修することあるべき無し。

第六項　別嗢拕南第五を以て四正斷四神足を解し、勇等の五門を標釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『勇と力と等持を修するとにして、異門と神足とは後なり。』

第一目　勇を解す

應に知るべし四種の正斷を建立することは聲聞地に已に廣く分別せるが如しと。此の中、勇の第五句を宣說せん。云何んが勇と名づくるや、謂はく前說の如く堪能忍受し、發勤精進する所生の衆苦、諸の淋漏苦、界不平苦、他の麁惡なる言、損惱等の事の所生の衆苦は、此の因緣にて正斷を修習する加行を退捨するに非ざるが故に名づけて勇と爲す。

復次に、四念住に於て殷重に修習することは聲聞地の如く應に其の相を知るべし。繫屬魔とは、謂はく欲界に在り、此れ不還果にて卽ち能く超度す。繫屬死とは、謂はく欲界より乃し有頂に至る、此れ阿羅漢にて乃ち能く超度す。清淨ならざる諸の有情と言ふは、謂はく諸の異生なり、清淨と言ふは、謂はく諸の有學なり。鮮白と言ふは、謂はく諸の無學なり。復た三種あり、(一)證淨なり、(二)未清淨者を能く清淨ならしむ、(三)已清淨者を能く鮮白ならしむ。當に知るべし此の中、上の諸の有學を說いて清淨と名づけ、下の諸の有學を不清淨と名づくと、彼れ修道未だ清淨ならざるに由るが故なり、餘は前說の如し。

第五目　漸次を解す

復次に、四念住を修するに應に知るべし略して五種の漸次ありと。一には信增上力清淨出家、二には戒律儀、三には根律儀、四には樂遠離、五には蓋清淨なり。諸の在家者は復た數數諸の念住を修し、淨信を獲得し、諸蓋清淨なりと雖も、然も學處を闕かば當に知るべし所修圓滿なることを得ずと。

第六目　戒圓滿を解す

復次に、三の因緣に由りて具戒の苾芻は當に禁戒淨命の圓滿を知るべし。云何んが三と爲すや。一には所行圓滿、二には攝取圓滿、三には受用圓滿なり。所行圓滿とは、謂はく賣買より乃至害縛・斷截・撾打・揣摩等の事皆な悉く遠離するなり。攝取圓滿とは、謂はく象馬等を攝取する事乃至生穀等を攝取する事に於て皆な悉く遠離するなり。受用圓滿とは、謂はく衣僅に身を蔽ひ、食纔に腹に充つれば便ち喜足を生じ、餘の長物非時食等に於て皆な悉く遠離するなり。

第七目　穗を解す

復次に、身等の四法は四大路の如く、彼に於て生ずる所の非理作意は邪にして稻穀麥穗を祈願す

此の中、前の如く親近等に由りて諸の煩惱を斷ずるを當に自護と名づく。此より已後、斷を因と爲すに由りて他等を惱まさざるを當に護他と名づく。應に知るべし此の中無瞋・無害は是れ無惱の義なりと。緣無きに而も利樂の二心を起し、緣無きに而も慈悲の二心を起す、當に知るべし此の如きは是れ哀愍の義なりと。哀愍に由るが故に他を惱まさず、是の故に當に知るべし一切の哀愍と彼れと相違すと。

第二目　住雪山を解す

復次に、應に知るべし雪山を佛の善說の法と毘奈耶とに喩ふと。此の中、略して三分の得可きあり、一には無學地、二には有學地、三には異生地なり。獼猴を彼の非理作意の諸の相應の心に喩へ、獵人を魔に喩ふ。無學地に於ては俱に行くこと能はず。有學地乃至不還に於ては唯だ非理作意相應の獼猴の喩の心、獨一能く往くあるのみ、獵人の喩の魔の能く行く所に非ず。異生地に於ては二俱に能く行く。又諸の愚夫は要ず餘境を觀、能く餘境を出で、餘境を追求し、餘境に縛せらる、是の故に境に於て解脫を得ず。

第三目　勸勉を解す

復次に、正法に於て(一)聽聞し、(二)受持し、(三)義理を觀察し(四)法隨法行するに由りて其の次第の如く應に知るべし勸化の四義を安立すと。復た三法あり、尙ほ能く一切の勝妙なる婬欲貪の纏を斷除す、況んや鄙劣なる諸の欲貪の纏をや。何等を三と爲すや。一には精進力、二には不放逸力、三には對治力なり。精進力に由りて其の已生の者を堅住せざらしめ、餘の二力に由りて其の未生の者を生ずることを得ざらしむ。是の如く行者は正行を勤修す、已生の惡を斷除せんと欲するが爲の故に、及び未生の者を生ぜざらしむるが故なり。

第四目　聚處淨を解す

卷の第九十八

攝事分中契經事菩提分法擇攝第四の二

第五項　別嗢拕南第四の半頌を以て四念住の中の邪師等の八門を標釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『邪師と雪山住と、勸勉と繫屬淨と、漸次と戒圓滿とにして、穂と成就とを後と爲す。』

第一目　邪師を解す

諸の外道あり、弟子衆に於て自ら立ちて師と爲り、專ら利養を求め、專ら恭敬を求め、專ら自利を求め、緣に遇うて和合す。族姓子ありて共に投じて出家す、因つて謂ひて曰く、「汝と我れと先づ一切の資身の衆具の共に受用す可きもの無し、汝應に我が爲に他處に往詣し、我が德を褒讚し、我が失を掩藏すべし、我れも亦た汝が爲に是の如き事を行ぜん、我等二人迭ひに相依護し、當に諸王若しは王と等しきもの乃至一切の大商主の邊に於て多く利養及び恭敬を獲べし」と。若し是の言を作す諸の外道の師を自利を專らにすと名づく、然れども其の弟子は便ち抗言を發す「此の見を爲すこと勿れ」と。是の如く護る者は未だ自護と名づけず、惡趣に往く失あり、若し此の失を防ぐを乃ち自ら護ると名づく。「是の故に汝應に前の如く自ら護るべし、我れ亦た當に自ら別に餘を護ることを爲すべし、我れ既に汝を護ること能はず、汝亦た我れを護ることを須ひず」と。此の義の中に於て當に知るべし弟子は是れ如理語の者なり、是れ聰慧者なりと、當來を重んずるが故なり。應に知るべし其の師は是れ非理語者なり、是れ愚癡者なりと、現在を重んずるが故なり。復た雜染ありて他を觸惱す、雜染に由るが故に自護すること能はず、此れに由りて他を惱ませば護他と名づけず。

解脱を得。既に解脱し已つて心に歡喜を生じ、此れより已後、猛利の厭を起し、猛利に厭うて後に無常想を得、大犂を見るが如く諸行の塊を發き、便ち聖諦に於て如實に現觀し、其れを以て涅槃に依止し依附す。又即ち有學にして觀察作意し、勝法の境に於て淨相を思惟するも、未だ貪の隨眠を永斷せざるに由るが故に貪纏率爾に生起し現前せんに、尋いで復た彼に於て深く過患を見、此の纏及び隨眠を斷ぜんと欲するが爲に無相定に入る。是の如く能く餘の未斷法を斷じ、定より起ち已つて如實に一切已に斷ぜりと了知し、微妙なる解脱の喜樂を領受し、如實に自己を觀見す。大智力を成就するが故に名づけて彊盛と爲す、諸の魔維品は其の力羸劣なり。

第六目　大果利を解す

復次に、四念住を修するによつて引く所の功德は當に知るべし能く最勝增上究竟の果を感ずるが故に大果ありと名づくと。當に知るべし能く最勝增上なる樂の勝利を感ずるが故に大利ありと名づくと。

瑜伽師地論巻第九十七

れ今、何をか思惟する所ぞ、云何んが思惟するやと、奢摩他に攝受する所の心をして奢摩他の所治の身心の惛沈下劣の爲に惱亂せしめられ、復た我れ今、何をか思惟する所ぞ、云何んが思惟すと、奢摩他に攝受する所の心をして彼の法の爲に惱亂せられざらしむ。若し彼の苾芻是の如き自心の相貌を取らず、但だ自ら此の隨煩惱染汚心を了知し已らば便ち外緣に於て淨妙相を取り、是れを因と爲すに由りて能く蹔時現在の現前の隨惑を除遣すと雖も、然も後時に於て若し復た前の如く心を內聚に攝むれば還つて是の如き隨惑の爲に惱まされて靜定を得ず、先の如く自心の相を取らざるが故なり。是の因緣に由りて隨煩惱の爲に數數擾亂せられ、又欣求する所の義を得ること能はず、復た憂愁の爲に損惱せられ、又長時を經て內心の寂止を獲得すること能はず、奢摩他・毘鉢舍那を先と爲すに依りて清淨なる增上第一の正念正知を獲得すること能はず、內心の寂止を獲得せざるに由るが故に四の增上心の現法樂住を得ること能はず。增上第一の正念正智を獲得せざるに由るが故に先に未だ得ざりし所の無上安隱究竟の涅槃を得ること能はず。上と相違するは應に知るべし卽ち是れ一切白品なり、乃至先に未だ得ざりし所の無上安隱究竟の涅槃を獲得すと。此の中典廚を瑜伽に譬へ、師主を卽ち內に於ける奢摩他所攝受の心に譬へ、其の餚饍の味を相を執取するに喩へ、上妙の衣食を內に於ける心の奢摩他等に喩ふ。當に知るべし黑品は諸の愚夫に喩へ、所有る白品は諸の智者に喩ふと。

第五目　諸纏を解す

復次に、諸の苾芻あり、諸の念住に於て正勤修習す、而も是れ異生にして或は勝妙可愛の境界正に現在前するあり、或は復た獨處して諸の相狀を得、失念するに由るが故に不如理の想を以て依止と爲して率爾に猛利の貪纏を發起す。彼れ此の纏に於て深心に厭恥して、自身厄難極めて鄙穢なる處に墮するが如く謂ひ、猛利に遠離を思ふ心を發起す。是の如き行に由りて便ち彼の纏に於て心に

上勤めて未だ得ざる所を求め得ざれば此れを聖法毘奈耶の中に於て大士と名づけず、何を以ての故にとならば其の心未だ善解脱を得ざるが故なり、此れと相違すれば大士と名づくることを得。

第三目　前後に差別ある解す

復次に、諸の苾芻あり、身等の境に於て精勤して循身等の觀に安住し、九行相を以て其の心を安住せしめ、心をして内聚せしむ。當に知るべし此の心、奢摩他の所治の身心の惛沈下劣なるに於て解脱を得ず、解脱せざるが故に此の聚心に依りて身中の諸の惛沈の性を生起し、心中の諸の下劣の性を生起す、若し念住に於て善く心を安住せしめ、如實に此の生起する所の隨煩惱を了知し已つて便ち内聚より還つて其の心を收めて外に在る淨妙なる境相に安置す、謂はく佛等の功德行緣に於て心を持して住せしむ。此れを緣ずるに由るが故に歡喜を發生し、廣說乃至、妙擧門に由り所緣の境に於て心をして定を得しめ、奢摩他の所對治の諸の隨煩惱より解脱することを得。此れより已後如實に了知し、隨煩惱に於て心解脱を得。此の義の爲の故に祈願し、外に於て此の義を得已つて還つて復た前の如く心を内聚に攝めて而も其の諸の隨煩惱の爲に惱亂せられず。心内聚し已つて祈願に由らずして、自然に如實に了知し、外心に於て解脱を得、彼れ外緣の行相の尋思に於て制伏する所あり。其の加行ありて運轉す可きこと難きも、皆な自在に解脱することを得て棄捨して安樂にして住し、已に勝奢摩他を成辦することを得。是の如く彼れ四種の念住に於て善く心を安住せしめ、能く正しく前後の差別を了知す。又應に知るべし此の補特伽羅先に已に毘鉢舍那を修行して毘鉢舍那を以て依止と爲し、奢摩他に於て瑜伽の行を修すと。

第四目　取相を解す

復次に、諸の苾芻あり、諸の念住に於て加行を勤修し、毘鉢舍那を以て依止と爲し、奢摩他に於て樂つて觀行を修す。彼れ即ち應に内の奢摩他所攝の自心に於て是の如き相を取るべし、謂はく我

名づく、一には如理作意の如實智に由るが故に、二には三摩地の如實智に由るが故なり。此の慧無間に如實智に由りて當に究竟することを得べし。

第五目　起修を解す

復次に、諸の苾芻あり、三の對治に於て所欲に隨ふことを得、艱難無きことを得、阻礙無きことを得、謂はく(一)無常相若しは(二)仁慈觀、若しは(三)無相定なり。彼れ是の如き三種の對治に由りて其の所應に隨つて前の所說の如く可意等の身等の境界に於て厭逆想不厭逆想に住し、彼の二種を棄てて捨念にして正知す。此の因緣に由りて當に知るべし名づけて善く念住を修すと爲すと。

第四項　別嗢拕南第三を以て四念住の中の諸根等の六門を解す

復次に、嗢拕南に曰く、

『先には諸根と愛味と、前後に差別あると、取相と及び諸纒とにして、大果利を後と爲す。』

第一目　諸根を解す

三種の根ありて諸の念住の一切の善聚に於て障礙を爲すが故に當に知るべし說いて不善法聚と名づくと。何等を三と爲すや。一には惡行根、能く當來に惡趣の苦に任せしむ。二には尋思根、能く現法をして不安の苦に任せしむ。三には根根、惡行根及び尋思根の與めに根本と爲るが故に說いて根根と名づく。應に知るべし此の中諸の貪瞋癡の三不善根は能く身等の惡行の與に根と爲り、欲等の三想は能く欲等の尋思の與めに根と爲り、欲等の三界は當に知るべし能く貪等の三根及び欲想等の三根の與めに根と爲るなり。

第二目　愛味を解す

復次に、諸の苾芻あり、四念住に於て加行を勤修し、世間道を以て欲界の愛を離れ、廣說乃至第一有定に具足して安住し、即ち此の定に於て多く愛味を生じ、即ち此の定に於て喜足の想を生ず。

【六】欲等の三界とは欲、恚、害の三界なり。

第三目　修持障の自性を解す

復次に、諸の念住を修する若しは略若しは廣は聲聞地の如く應に其の相を知るべし。又此の念住を修習する道理は今の世尊世に出現したまひて方に始めて宣說したまひ今の聖弟子適初めて修習するには非ず、然も過去無始時より來た諸の念住に於て修習し流轉し、未來世に於ても當に知るべし修習すること亦た窮盡すること無しと。又是れ過去未來現在の世出世間の無量の善法の生起する依處なるが故に是の如き四種の念住を說いて名づけて善聚と爲す。又能く是の如き善聚を障礙するが故に五蓋を說いて不善聚と名づく。又身等の四の所知の法の無邊の別に由るが故に如來の智慧の彼に於て無礙なるも亦た邊あること無く、無智邊なるが故に如來所說の無上の法教も亦た邊あること無し。是の如き法教は二緣の所顯なり、一には文に由るが故に、二には義に由るが故なり。義の差別門に數量あること無く、法教の文句開顯する義門も亦た數量無し。此の文句に於て重ねて宣說せず、無邊に展轉して辯才盡くること無し。是の故に如來は希奇未曾有の法を成就し、善く能く所有る法教を宣說し、一義の中に於て能く無量の巧妙なる文句を以て方便開示して而も重說せず。又聖教に於て宗義趣の智を善く成就するが故に名づけて趣有りと爲し、倶生の聞思所成の妙慧を善く成就するが故に名づけて意有りと爲し、定を成就するが故に名づけて念有りと爲し、諦に通達するが故に名づけて慧有りと爲す。當に知るべし此の中初の一は總標なり、後の三は別釋なりと。

第四目　斷を解す

復次に、諸の茲芻ありて身等の法に於て先づ聞思に由りて如理作意し、唯だ身等の法のみある觀に安住し、一切法は無我の性なりと知り已つて唯だ此の聞思の作意のみに於て喜足を生ぜず、唯だ上、定心解脫を希求す。定を求めんが爲の故に遠離處に住し、唯だ身等を緣ずるのみ。九の行相を以て其の心を安住せしめ、心内をして寂ならしむ。二の因緣に由りて四念住を起すを善く發起すと

種の世法を以て所依處と爲し、洪は餘の四の世法を以て所依處と爲し、四念住に於て加行を勤修し、思擇力に依りて愁洪を超度す。世間の修習力に依るが故に欲愛を離れ憂捨することを得、出世間の修習力に依るが故に一切の薩迦耶の苦を超度するに由りて亦た能く八支聖道の果の眞實の妙法を證得す。一切の有情は、當に知るべし、皆な思擇修習の二種の力に由るが故に一切種の究竟清淨を得と。

第二目　如理緣起を解す

復次に、若し身等の四種の所緣に於て種種の非理作意を發起し、即便ち四種の念住に違背す。此に違背するが故に即便ち如理作意に違背す、謂はく聖如理に無間に能く正見支等の所有る聖道を生ず。此に違背するが故に即便ち一切の聖道に違背し、道に違背するが故に便ち道果の甘露究竟の涅槃に違背すと爲す。又瑜伽師は身等は因緣より生ずと了知し已つて復た三世の身等の諸の諸法に於て無常觀に住す。是の如き無常觀に住するに由るが故に、諸の後有に於て終に後有愛に依止して住せず。又現法の中一切行の若しは內若しは外に於て都べて我及び我所を執取せず。又未來に於ては當に知るべし集法に安住して隨觀すと、過去世に於ては當に知るべし滅法に安住して隨觀すと、現在世に於ては生じ已るや無間に盡滅する法なるが故に當に知るべし集滅法に安住して隨觀すと。彼れ最初に身等の法に於て緣生の性なりと觀ずるに由りて無常に悟入す。是の如き無常の性に悟入し已つて諸の愛見の雜染等の處に於て多く修習して住し、淨く其の心を治し、是の如く作意して方に圓滿することを得。此を依と爲すに由りて能く隨つて究竟して漏盡を獲得す。又一切の法は要を以て之を言はば、謂はく善と不善となり若しは雜染品と若しは清淨品となり。當に知るべし此の中諸の雜染品は皆な非理作意を用て集と爲し、諸の清淨品は皆な如理作意を用て集と爲し、是の如き一切を總略して說いて作意を集と爲すと名づく。

に能く此の處の定に入る、中に於て唯だ此の一の趣行あり、又此の中に於て我所何ぞ當に有らざるべきとは。謂はく生等の苦に由るが故に我に苦ありと說く。我何ぞ當に有らざるべきとは、謂はく卽ち生等の苦を以て我と爲るなり。是の如き樂欲心を發生し已つて正勤加行し、正に加行し已つて前後の所有る差別を獲得す。是の因緣に由りて復た決定を得、謂はく我は當に有らざるべし、我所は當にあらざるべしと。若し今の所有とは、謂はく今の現法に造作し增長する所有る新業なり。若し昔の所有とは、謂はく諸の故業なり。彼れ此の一切の所有る異熟果に於て皆な願求せず、一切棄捨して顧戀すること無きが故なり。

第三項　別嗢拕南第二を以て四念住の中の安立、邊際、純等の五門を標釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『(一)安立・邊際・純と、及び(二)如理緣起と、(三)修持障の自性と、(四)斷を說くとにして(五)起修は後なり。』

第一目　安立邊際純を解す

此の中四念住を初と爲し、道支を最後と爲す三十七種の菩提分法を安立す。若しは略若しは廣は聲聞地の如く應に其の相を知るべし。又四念住に由りて應に一切の所知の事の邊際を知るべく、所知の事の邊際に由るが故に復た應に智の事の邊際を了知すべし。又四念住は欲精進等に由りて加行を修習して方に圓滿することを得、應に知るべし此の四種の念住を除いて更に餘の不同分の道或は所緣の境あること無しと。此の道此の境に由りて能く諸漏を盡し、涅槃を獲得す。第二の淸淨道無きに由るが故に純ら一の能趣の正道あるのみなりと說く。又此の純一の能趣の正道は二の因緣に由りて能く有情をして究竟淸淨ならしむ、一には思擇力に由るが故に、二には修習力に由るが故なり。此の中愁とは、謂はく染汚憂なり。言ふ所の泆とは、謂はく悼と俱行する欲界の染喜なり。愁は四

無邊處に至る、是の故に當に知るべし、乃至此の處に無動を建立すと。卽ち此の一切の所有を緣ずる定を皆な有上想と名づけ、此れより已上無所有を緣ずる定を當に知るべし名づけて無上想定と爲し、此れより已上を復た非想非非想處定と名づく。故に三分に由りて三行を宣說し、三種の門に由りて諸の聖弟子は欲等を厭壞し、既に厭壞し已つて漸次に能く乃至識無邊處定に入る、是の故に能く三種の無動處に趣く行を建立す。又若しは色想、若しは無動想にて諸の下地に於て深く厭壞し已つて能く無所有處定に入る、是れを第一の能く無所有處に趣く行と名づく。又卽ち此の處は是れ無漏道を修習する邊際なり。此の無漏道に復た二種あり、一には有上、二には無上なり。有想定の其の有上の者の如きは無常行と俱なり、其の無上の者は無我行と俱なり。有上行に由りて其の下地に於て深く厭壞し已つて此の處の定に入り、無上行に由りて下に於て上に於て一切の法の中に無我を思惟して能く無漏の無所有處定に入る。此の無上行を當に知るべし名づけて第二の趣行と爲すと。此の第二の趣行に、復た二行に由りて差別あるが故に二種を建立す。云何んが二行なりや。謂はく能依所依の智差別するが故なり。此の中能依の無我智とは、謂はく諸の所有る若しは有情界、若しは我が已身、中に於て都べて我の所屬の處無し、謂はく地の方域なり、我の所屬の者は、謂はく諸の有情なり、我の所屬の事は謂はく或は父、或は母、或は伴、或は主、是の如き等の類なり。彼れ我に於て所屬の處に非ず、所屬の者に非ず、所屬の事に非ざるが如く、是の如く我れも亦た彼れに於て所屬の處に非ず、所屬の者に非ず、所屬の事に非ざるなり。此の中所依の無我智とは、謂はく諸の世間は空にして常及び我、我所あること無く、此の中都べて常、我、我所として眞實に得可き無し、唯だ諸法のみあり。是の如く世間既に悉く是れ空なり、當に復た誰あつて所屬の處あり、所屬の者あり、所屬の事あるべきや。是の故に當に知るべし前の無我智は是れ其の能依なり、後の無我智は是れ其の所依なりと。非想非非想處には無漏道無し、唯だ無所有處を厭壞する想に由るが故

生ずる所の貪欲の因緣、二には諸欲の能く苦受に順ずる境界の爲に生ずる所の瞋恚の因緣、三には諸欲の能く不苦不樂受に順ずる境界の爲めに生ずる所の無明憤發の因緣なり。又た此の諸欲を當に三處に於て應に過患を觀ずべし、一には自性の故に、二には所緣の故に、三には助伴の故なり。自性の故とは、謂はく虛妄分別より生ずる所の貪愛なり。所緣の故とは、謂はく若しは內若しは外の五種の色境なり。助伴の故とは、謂はく非理作意相應の倒想なり。(2)又上の欲を離るゝ勝方便の心を說いて廣大と名づく、何を以ての故にとならば彼の上地は轉た上り轉た勝るゝに由るが故に彼の心を修するを說いて廣大と名づく。若し能く下地の世間を厭離するは當に知るべし定んで無常等の行を以て厭壞し制伏すと。其の上地の應に得べき所の處に於ては當に知るべし亦た暫時の方便を以て寂靜の想を起して其の心に住持すと。又我れ已に是の處所に於て具足して安住することを得たりと信解を生ずる者は當に知るべし彼れ加行道の中に於て淨信を修習し、是の處所に於て淨信心を生ずと。此の淨信の增上力に由るが故に精進、念、定、慧等を修習し、初靜慮より漸次に乃至識無邊處の諸の無動定皆な能く證入す。又其の慧に由りて是の勝解を起す、謂はく我れ已に能く是の如き定に入る、此れ即ち能く識無動處の所有の生果を感ずと。若し現法中にて般涅槃せず、或は進求して上地に往かざれば彼れ當來に於て決定して應に此の無動處に往くべし。又三緣に由りて是の諸地に於て當に知るべし建立して無動處と爲すと。謂はく(一)外の欲等の散動斷ずるが故に初靜慮を立てゝ無動處と爲す。(二)尋伺喜樂の色界地の中の諸動斷ずるが故に第四靜慮を立てゝ無動處と爲す。(三)有色有對の種種の別異の想動斷ずるが故に空無邊處識無邊處を立てゝ無動處と爲す。第二第三靜慮中の後後の所有る諸動斷ずるが故に當に知るべし亦た無動處と名づくることを得と。識無邊處は空無邊處の外門の緣動遠離することを得るに由るが故に當に知るべし建立して無動處と爲すと。要を以て之を言はゞ、所有る定に動搖無きに緣るが故に皆な無動と名づく。此の定の邊際の極は識

(2)後有の雜染を觀ずることを明す。

(一)略して二種の雜染を對治することを對辯す　復次に、諸の聖弟子の已に諦跡を見たるも、未離欲者は應に知るべし略して二種の雜染ありと、謂はく欲雜染と後有雜染となり。此の二種に於て諸の聖弟子は應に勤めて加行し、淨く其の心を修すべし。諸の聖弟子欲雜染を斷除せんと欲するが爲めの故に方便を勤むる時漸く三行に依る、謂はく(一)無動に趣く行、(二)無所有處に趣く行、(三)無動無所有非想非非想處定に證入するなり。此れ斷對治に由るが故に、及び遠分對治の故なり。欲雜染を超度し。或は後有の雜染を斷除せんが爲めに方便を勤むる時已に欲界の愛を離れたるも、未だ色界の愛を離れず、謂はく我所何ぞ當に有らざるべき、我何ぞ當に有らざるべき、我當に有らざるべし、我所當にあらさるべし、若しは今の所有、若しは昔の所有の是の如き一切を我れ皆な棄捨すと。彼れ正に能く後有を斷ずる所有る差別の對治道を修習し已つて色界の愛を離れ、乃至能く非想非非想處定に入る。若し現法中にて其の上の捨に於て多く愛味を生ずれば般涅槃せず、彼れ現法に於て全く一切の所有る後有の雜染を解脫せず。若し上の捨に於て愛味を生ぜざれば彼れ現法中にて能く般涅槃し、能く全く所有る一切の後有の雜染を解脫す。當に知るべし此の中若しは欲雜染を對治せんが爲めの故に對治道を修し、漸次に乃至能く第一有定に入り、若しは後有の雜染を對治せんが爲めに對治道を修し、漸次に乃至能く第一有定に入る、是の如き二種を共解脫と名づくと。諸の聖者、非聖の異生に皆な有るべきに由る、是の故に此の解脫を聖解脫と名づけず。若し一切の乃至有頂の薩迦耶の苦に於て如實に知り已つて有頂を超度し、現法中に於て一切の所有る雜染を永斷すれば、是の如き解脫は唯だ諸の聖者のみ方に能く獲得す、故に此の解脫を聖解脫と名づく。是の如き一切に總じて五處あり、一には趣無動行、二には趣無所有處行、三には趣非想非非想處行、四には現法涅槃、五には聖解脫なり。

(二)義に隨つて廣く辯ず　(1)復た三種の諸欲の過患あり、一には諸欲の能く樂受に順ずる境界の爲に

(1)欲雜染の過患を明す。

を離れて暫時勝上なる樂住を獲得すと雖も、而も復た當來に更に還つて殺生等の事を造作し、諸の惡趣に往く、我等定んで當に能く殺生等の事を造作せざるべし、乃至廣說諸の非法行不平等行を我等は定んで當に能く造作せざるべしと、是れを聖法毘奈耶の中の永に損害する門と名づく、謂はく能く惡趣に往く行を損害す。是の如く諸佛及び佛弟子は能く實に遍く永に損害する門の所有る差別を遍知するなり。

（二）餘の四門を釋す　又卽ち是の如き諸の聖弟子は所餘の未斷の善趣に行く行を超度せんと欲するが爲に此の聖弟子は先に作す所に於て喜足を生ぜず、上の漏盡くるに於て欣樂欲を起し、正願心を發し、彼の所得の諸の世俗道に於て審に過患を觀る、謂はく彼は究竟して苦を離るゝこと能はずと、是れを第一の善趣に往く行を超度せんと欲するが爲に心願を發す門と名づく。心願を發し已つて普く一切の善趣の後有に生ずる所の愛味に於て、深く過患を觀ること險惡の道心に厭離を生ずるが如し、寂靜の現法涅槃を欣慕し、正に方便を修し、是に由りて先の所得の如き涅槃に趣く行に進趣す、是の如きを名づけて能進趣門と爲す、彼れ修道に由り漸次に離欲し、乃至能く第一有の定に入る。若し上の捨に於て多く愛味放逸の因緣を生ぜば現法中に於て般涅槃せず、但だ上行不還果の者と名づく。是の如きを名づけて後の上行門と爲す。若し復た彼に於て深く過患を觀、上の捨の中に於て愛味を生ぜざれば彼れ現法に於て能く涅槃を證し、有餘依般涅槃に依る、是の如きを說いて名づけて般涅槃門と爲す。是の門に由るが故に如實に自ら般涅槃し、一切の善趣に往く行を超度すと了知し、他の超度に於て亦た正に遍知す、所謂諸佛と及び佛弟子となり。此の中初の一の永損害門は當に知るべし惡趣に往く行を超度すと。後の心願を發すと進趣と上行と涅槃との四門は當に知るべし善趣に往く行を超度すと。

第八目　二染を解す

第七目　超を解す

復次に、惡趣に往く行、善趣に往く行の超度差別に當に知るべし略して五門の不同ありと。此の五門に由りて自の超度に於て如實に了知し、他の超度に於て亦た正に遍知す、所謂諸佛及び佛弟子なり。

(一)第一門を釋す　云何んが名づけて惡趣に往く行と爲すや。謂はく諸の外道所有の一切の薩迦耶見を以て根本と爲し、諸の惡見趣並に彼の所緣並に彼の所依を以て依止と爲して發生する種種の惡欲及び害若しは殺生等の所有る無量の惡不善法なり、經に廣說せるが如し、乃至所有る諸の非法行不平等行を以て最後と爲す。能く險惡處に往き、能く那落迦に往き、能く諸の惡趣に住する差別生起し、若しは彼に往くを惡趣に生ずと名づけ。彼の因所感の非愛の諸の果異熟を領受する、是の如きを名づけて惡趣に往く行と爲す。此に於て多聞の諸の聖弟子は若しは彼の所緣に諸の見趣を生じ、若しは自の所依に執著を起さしめ、若しは諸の所有る能く一切の險惡趣に往く等の諸の惡欲等、廣說乃至諸の非法行不平等行を以て最後と爲し、若しは彼に住し、非愛の險惡等の果を領受す。是の如く一切如實に我我所に非ずと隨觀す、謂はく是の中に於て決定して我無く亦た我所無しと。是の如く觀じ已つて當に聖諦に於て現觀を得る時彼の諸の見趣の隨眠の根本皆な永拔するが故に說いて名づけて斷と爲す、其の餘の一切畢竟して續かず。此の聖弟子は彼の見趣を以て根本と爲る所有の能く險惡處に往く等に於て定んで作すこと能はず、定んで險惡處等に往くこと能はず、是れを第一の惡趣に往く行をば永に損害する門と名づく。是の因緣に由りて能く自內に於て如實に我を離れて聖に等しと了知す。所餘の異生は復た能く世間道を以て能く惡趣に往く不善及び惡趣等を超度して四種の現法樂住を獲得し、或は諸色を超過せる無色の寂靜解脫を得ることありと雖も、然も其れ究竟して諸の惡趣等の後相應す可きを損害すること能はず。是の故に彼の流極めて能く欲色界の愛

第三の補特伽羅は先に外法に於いて純ら因行を習し、現法中に於て當に知るべし一向に多く放逸を行ずと。是の如き三種の補特伽羅復た餘の三の補特伽羅あり、上と相違して應に其の相を知るべし。此の中第一の補特伽羅は先に外法に於て純ら因行を習ひ、現法中に於て先づ放逸ならず、後放逸を行ず、第二の補特伽羅は先に內外に於て俱に因行を習ひ、現法中に於いて專ら放逸を行ず。第三の補特伽羅は先に內法に於いて純ら因行を習ひ、現法中に於て當に知るべし一向に不放逸を修すと。又此の中に於て先世所習の善不善の因は猶ほし種子の如し、今世の善說の法と毘奈耶とは其の先世の諸善の種子に於て猶ほし良田の如く、彼の先世の不善の種子に於ては猶ほし瘠田の如し。是れと相違して今世の惡說の法と毘奈耶とは其の先世の不善の種子に於ては猶ほし良田の如く、彼の先世の諸善の種子に於て猶ほし瘠田の如し。又彼の先世の增上力にて今の善法の起ること猶ほし光明の如し、彼の一切の無明の闇の如き諸の不善法の與に能對治と爲り、彼の不善法は彼の一切の猶ほし光明の如き所有る善法の與に所對治と爲る。是の如く先世の諸の不善法は熱ある炭の如し、能く身心を燒く義あるに由るが故なり、今世の惡說の法と毘奈耶とは乾ける葦舍の如し。又彼の先世の所有る善法は熱ある炭の如し、能く煩惱を燒く義あるが故なり。今世の善說の法と毘奈耶とは乾ける葦舍の如し。又彼の先世の所有善法を今の惡說の法と毘奈耶とに處すれば損減するに由るが故に猶ほし冷地石器に置在して熱無き炭の如くなるが如し。又彼の先世の諸の不善法を今の善說の法と毘奈耶とに處すれば斷滅するに由るが故に猶ほし冷地石器に置在して熱無き炭の如くなるが如し。

(二)佛智を明す　此の中諸の如來は大士の無上なる根勝劣智力に由り其の先世の善不善の因より習成する所の根に於て其の所應に隨つて如實に了知し、又現法の染淨門に於て轉じ、當來染淨の諸法を生起するを亦た所應に隨つて如實に了知したまふが故に甚奇希有を成就すと言ふ。

第六目　數取趣を解す

（一）六の補特伽羅を明す　復次に、其の六種の補特伽羅に於て染淨の法に依り如來所有の大士の根智と及び當來法の生起する智轉ず。云何なるを六の補特伽羅と名づくるや。謂はく一類の補特伽羅あり、先の餘生中に佛善說の法と毘奈耶とに於て淨信を獲得し、廣說乃至、正直の見を得たるも、彼れ今生に於て惡說の法と毘奈耶との中に於て不善士に近づき不正法を聞き非理作意し、現法中に於て最初に諸の邪見愛の諸業の雜染を生起す。彼れ爾の時に於て前生の所有る善法及び現法の中の諸の不善法を成就す。復た後時に於て善說の法と毘奈耶との中に於て善士に親近し、法を聽聞し如理作意し、即ち先の因に由りて惡說の法と毘奈耶とを棄捨し、惡說の想諸の不善法に於て染著を生ぜず、速に能く遣滅し、此れ當來に於て淸淨の法を成ず、是れを第一の補特伽羅と爲す。復た一類の補特伽羅あり、先に餘生の中にて倶に二の法と毘奈耶との行を行じ、彼れを因と爲るに由りて現法中に於いて善法及び不善法を成就し、彼れ今生に於いて最初に前の如く善說の法に於て乃至如理作意を獲得し、現法中の諸の不善法に於て舊をして滅沒し新を復た生ぜざらしめ、諸有る善法に舊をして增長し、新を復た更に生ぜしむ。諸の先の所有る不善未だ斷ぜず、隨眠隨逐するも、今一切に於いて皆な能く斷除し、無放逸にして住し、此れ當來に於いて淸淨法を成ず。復た一類の補特伽羅あり、先に餘生中にて唯だ外の行を行じ、彼れ今生に於いて是れを因と爲るに由り出家を串習するが故に、邪見を串習するが故に善說の法と毘奈耶との中に於て緣の和合するに遇うて出家を得。既に出家し已つて復た邪見を生じ、自の見取に住し無間業を造り、亦た善根を斷じ、一向に諸の不善法を成就し惡趣決定す、是れを第三の補特伽羅と名づく。是の如き三種の補特伽羅は當に知るべし第一は先に內法に於て純ら因行を習ひ、現法中に於て先づ放逸を行じ、後に放逸ならずと。第二の補特伽羅は先に內外に於て倶に因行を習ひ、理法中に於て當に知るべし一向に不放逸を行ずと。

る如法平等の行に、能く善趣に往く善の身語意業を攝するを說いて平等と名づけ、所有る非法不平等の行に、能く惡趣に往く不善の身語意業を攝するを不平等と名づくと。又此に住して若しは生じ、若しは長じ能く後際の所有る衆苦を生ずるを說いて名づけて有と爲し、其の前際より現法中に於て死滅の苦あるを說いて名づけて無と爲す。餘の出沒等は應に知るべし前に已に廣く分別せるが如しと。

第五目　梵行を解す

復次に、諸の外道の輩は不正法を聞きて增上して生ずる所の不如理想を依止と爲すが故に無明所生の諸受を發起し、此れを依と爲すに由りて諸漏を發生し、而も諸の外道は是の諸漏に於て如實に知らず、亦た無明觸所生の受に於て如實に知らず、亦た諸の不正法を聽聞し、增上して生ずる所の所有る邪想に於て如實に知らず。是の三處に於て實に知らざるが故に欲求を發起し、有求を發起し、亦た復た邪の梵行求及び無有求を發起し、彼れ諸欲に於いて如實に知らず、後有の業に於て如實に知らず、其の衆苦に於て如實に知らず。此の中前の五は是れ集諦處なり、最後の一種は是れ苦諦處なり。是の如き外追は此の集諦及以び苦諦に於いて如實に知らず。又即ち此の集諦苦諦に於て略して二相に由りて如實に知らず、一には雜染の故に、二には清淨の故なり。此の中雜染に復た四相あり、一には自性の故に、二には因の故に。三には果の故に、四には因果差別の故なり。此の中清淨に復た二種あり、一には集苦滅す、二には滅に趣く行なり。彼れ是の如き四聖諦中に於て智を闕乏して菩提分法を修習すること能はず。是の因緣に由りて彼れの修行する所の所有る梵行を名づけて最極究竟と爲すことを得ず、即ち此の緣に由りて究達と名づけず、漏を盡さざるが故なり。內法に住する者は彼れと相違し、所修の梵行最極究竟なれば名づけて究達と爲す、諸漏を盡すが故なり。

後の聖諦現觀の妙智の與に上首と爲りて轉ず、是の故に彼の定を說いて上首と爲す。又聖諦の諸の現觀の中に於て慧を最勝と爲す、謂はく能く餘無く諸漏を永盡す、是の故に彼の慧を說いて最勝と爲す。又一切の漏永盡するに由るが故に究竟の明觸より生ずる受と俱行する解脫を獲得す。卽ち此の解脫は一切の學所攝の法に由りて數數隨得するに非ず、唯だ頓に得るに由る。此の解脫を一切の樂の中にて最第一と爲すに由り、無罪性なるが故に、是の故に彼を說いて卽ち解脫を用て以て堅固と爲す。又彼の是の如き善解脫心、若しは諸の明觸所生の受等、若しは學所攝の所有る諸法幷に所依身は無餘依般涅槃界に於て任運自然に究竟寂滅す、是の故に彼を說いて皆な涅槃を以て其の後際と爲す。應に知るべし此の中增上を爲さんと欲して淨戒を受持するを增上戒學と名づけ、觸受の增上の心慧に依止して方便の所有る作意若しは念若しは定幷に其の加行を任持するを增上心學と名づけ、慧を最勝と爲るを增上慧學と名づくと。是の如きを應に知るべし名づけて三學と爲し、及び彼の依持する解脫堅固是れ有餘依涅槃界第一の學果なり、涅槃の後際は是れ無餘依般涅槃界第二の學果なりと、是の如く學及び學果を略說して一切の法を攝せり。

(二)學と學の果との能證の資糧と治とを辯ず　又此の諸學及び諸學果の能證の資糧は、當に知るべし八種の過患を對治し九想を修習するなりと。云何んが名づけて八種の過患と爲すや。所謂(一)利養恭敬に耽著すると、(二)一切の後有の諸行を愛藏すると、(三)懈怠懶惰と、(四)薩迦耶見と、(五)美味に貪著すると、(六)諸の世間の種種なる妙事に於て欣欲する貪愛と、(七)放逸に依止する惡行の方便と、(八)邪願に依止して梵行を修習するとなり。云何んが名づけて九想を修習すと爲すや。一には出家想を修習し、二には無常想を修習し、三には無常苦想を修習し、四には苦無我想を修習し、五には食を厭逆する想を修習し、六には一切世間不可樂想を修習し、七には死想を修習し、八には世間の平等不平等想を修習し、九には有無出沒過患出離想を修習す。應に知るべし此の中所有

を證す。是の如き五法は四の因緣の顯發する所に由る、一には他教に由るが故に、二には教の增上力の自內證の故に、三には倶生の尋思勝れたる辯才の故に、四には先に串習せるに由り倶生の功德と相應することを獲得する善男子なるが故なり。略して二種の補特伽羅ありとは、雙べて二種を標し、是の如き二種の者に二種を分別して此の二を勝者と爲す、當に知るべし二種の差別を簡擇すと。

(二)七善法を修するに因つて二の勝利を得ることを明す　七の善法を修して二の勝利を得。謂はく(一)現法中にて輕安の樂を得、境の實性を覺り、勝れたる喜を發生し、(二)是の因緣に由りて多く喜樂に住し、是に安住し已つて能く如理に思ひ、速疾に證得して諸漏永盡す。

第四目　一切法を解ず

(一)學と學の果とに一切法を攝することを辯ず　復次に、菩提分法を修する增上に依りて善說の法と毘奈耶との中に於いて略して諸學及び諸學の果に由りて一切の法を攝す。云何んが諸學なりや。謂はく三種の學なり、一には增上戒、二には增上心、三には增上慧なり。云何んが學果なりや。謂はく有餘依及び無餘依の二涅槃界なり。當に知るべし此の中一切法とは、謂はく善法欲清淨の出家・涅槃を證せんが爲めに先に戒を受持し、是に由りて漸次に乃至究竟の涅槃を獲得す、是の故に一切の諸法は欲を根本と爲すと宣說す。又淨戒に依りて正法を引求し、多聞を攝受し、正法を聞く增上力に由るが故に能く速に增語を證する明觸を集む、是の故に彼を說いて以て觸集と爲す。又彼れ皆な明觸所生の諸受に流趣し、乃至有餘依般涅槃界を其の後際と爲るが爲め、安樂を求めて發起するが爲めの故に、此の樂は一向無罪の性なるが故に、是の故に彼の學の所攝の法を說いて受流趣と爲す。又彼れ所有る明觸及び明觸に依りて生ずる所の諸受を求むるが爲めに聞思修所成の作意を起す、是の故に彼を說いて作意生と爲す。又爾の時に於いて四念住に於て觀品の念に由りて觀を以て依と爲し、內心の止の與に其の增上と爲る、是の故に彼の念を說いて增上と爲す。又念增上して奢摩他を趣し、

首に至らんに若し聽許せされば則ち應に入るべからず、或は入ることを得已つて若し聽許せざれば應に自ら專ら座に就きて坐すべからず。應に是の如く坐すべしとは、謂はく應に一切の身分を寛縱にすべからず、乃至廣說。應に是の如く語るべしとは、謂はく五種の語なり。一には應時語、二には應理語、三には應量語、四には寂靜語、五には正直語なり。應に是の如く默すべしとは、謂はく五時に於て應に當に宴默すべし、謂はく(一)或は紛擾するが故に、(二)或は相誹撥するが故に、(三)或は違諍して住するが故に、(四)或は延請するが故に、(五)或は談論するが故に、言終るを待つが爲めの所以に宴默す。云何んが應時語なりや。謂はく紛擾し或は遽に尋思し或は聞くことを樂はず或は正しき威儀に安住せざるに非ざる時而も所說あるなり。又應に先づ初時に作す所を序し、然して後に讃勵して正しく言說を起すべし、又應に他の語論の終に已るを待ちて方に言說を起すべし。是の如き等の類の一切を當に知るべし應時語と名づくと。云何んが應理語なりや。謂はく四の道理に依りて能く義利を引き、實に稱つて語るを應理語と名づく。云何んが應量語なりや。謂はく文句周圓し、爾所の語に齊りて決して所須あらんに但だ爾所のみを說いて不增不減にして、雜亂し無義の文辭を說くに非ず、是の如き等の類を應量語と名づく。云何んが寂靜語なりや。謂はく言高疎ならず、亦た諠動ならず、身奮發すること無く、口に咆勃せずして而も所說あるを寂靜語と名づく。云何んが正直語なりや。謂はく言に詭詐無く、虛構に因らずして而も所說あり、諂曲を離るるが故に發言すること純質なり、是の如きを當に知るべし正直語と名づくと。已が信等の善法無き所に於て上慢を起さず、謂はく自の有の爲めに其の狹小なるに於て亦た增益して以て廣大と爲さず、唯だ實に有り乃至所有に於て如實に了知して自ら稱して有りと言ふが故に自知と名づく。又(一)信を先と爲して淨戒を受持し、(二)持戒を先と爲して多聞法を求め、(三)此を先と爲るに由りて諸の過失を捨て、普へ一切の資財身命に於いて顧戀する所無く、(四)此を先と爲るに由りて心に靜定を得、(五)如實智

一切の道果集成する所なるが故に善き修道と名づく。異生と及び諸の有學の如きに非ざるが故に寂の依處成就して第一なり。問ふ、何の因緣の故に唯無學に在りて四種の依處を說いて第一と爲し、異生と及び有學位に在るには非ざるや。答ふ、此の位中に在りては微細なる淋漏も亦知る可からず、況んや中上なるあるをや。異生地に在りては淋漏彌多く、有學位の中には少しくありと知るべし。此の中何等をか名づけて淋漏と爲すや。應に知るべし前の如き諸の動擧等を說いて淋漏と名づくと。彼の一切に於て皆な永斷せるが故に、圓滿なる牟尼の性に趣向するが故に、牟尼なり最極寂靜なりと名づく。又已に當來の因を永害せるが故に、初中後の生老死苦に於て永に止息せるが故に、現法の行ずる時は諸の世法に於て四種の貪愛永に寂靜なるが故に四種の瞋恚永に寂靜なるが故に、又住する時に於て不悅諠雜永に寂止するが故なり。

第三目　喜樂を解す

（一）七正法の因緣を辯ず　復次に、所有る菩提分法を修し圓滿增上するに依り七の因緣に由りて當に知るべし七種の正法を建立すと。何等を七と爲すや。一には聞所成の作意の所緣なるが故に、二には思所成及び修所成の作意の所緣なるが故に、[五]三には卽ち此の三種の作意の加行の時差別するが故に、四には財を受用し遍く財を受用するに於て善く通達するが故に、五には受用する財法を時時の間に於いて他より得るが故に、六には究竟する時に於いて內に上慢を離れて失壞すること無きが故に、七には亦た他所に於いて增上慢を離れて失壞すること無きが故なり。此の中諸の止と擧と捨との相に依りて修習し時を知ることは聲聞地及び三摩呬多地に已に其の相を辯ぜるが如し、食飲等の義は聲聞地の如く應に差別を知るべし。又此の中に於いて受用する財とは、謂はく刹帝利婆羅門長者等の衆に於てなり。受用する法とは、謂く沙門衆に於てなり。我れ應に是の如く行ずべしとは、謂はく善く身を護り、善く諸根を守り、善く正念に住するなり。應に是の如く住すべしとは、謂はく門

【五】是れに由りて時を知ることを立つ。若し掉擧を起す時は卽ち止定を以て能く調伏し、若し惛沈を起す時は卽ち慧擧を以て能く之を調伏し、若し無明を起す時は捨を以て能く之れを伏するが故に。

を縁と爲して起る貪に於て已に遠離せるに由るが故に清淨なることを得と名づくるも、而も隨眠に於て未だ永斷せざるが故に餘の上位の應に更に修治すべきあり。此れより已後十八意行に於て無倒に觀察し、倶に心法に於て同時に循心法觀に安住し、彼れ是の思を作す、此の十八意行の最第一は、謂はく諸の所有る寂靜解脫なり、諸色を超過して無色に在りと。能く捨に順じて起る諸の意行に於て、復た是の思を作す、若し我れ此の勝妙の意行に依りて清淨なる捨、若しは定に於て若し耽著を生じ係憶せば此に因りて我が心便ち雜染を成ぜんと。是の如く知り已つて捨てて憶せず。是れを心に於て循心觀に住すと名づく。復た諸處に於て無常性なりと觀ず、是を法に於て循法觀に住すと名づく。彼れ爾の時に於て三想定及以び非想非非想處所有の諸行餘の第一有に於て已に貪を離るるが故に想界及び行界の貪に於て亦た遠離することを得と名づく、餘は前說の如し。(2)是の如く彼れ正加行に攝する異生地中に於て淨く心を修し已つて證會せんと欲するが爲めに心解脫を學し、復た一切の身受心法に於て唯だ法のみありて都べて我あること無しと觀じ、一切の有に於て深心に厭捨して加行を起さず、謂はく我當に有るべし、或は我當に無かるべしと、如實に此の中に有者無者あること無しと了知す。彼れ是の如く如實に知るに由るが故に漸く見修所斷の三漏に於て心解脫を得、盡智を得るが故に一切の當來の諸受復た流轉せず、此れ流轉せざるは身の滅するに由るが故なりと觀察す。彼れ爾の時に於て諸漏盡くるに依りて獲る所の盡智を最第一と爲す、有學の異生の諸慧の依處は猶ほ垢あるが故に、今此の所得の定は垢無きが故なり。又即ち此の慧にして諸の煩惱斷ぜる滅諦の中に於て寂靜の行を以て攀緣して住すれば暫時失念するも亦た動ずること能はず。是の如き所有る心慧解脫は妄念の爲めに陵雜せられず、前の異生と及び有學位の如きは彼れ尙ほ忘失の法あるを以ての故に諦圓滿せず、無學位に在りては一切時に於て如實の性なるが故に其の諦圓滿す、故に諦の依處成就して第一なり、能く一切の依事を棄捨するに由るが故に捨の依處成就して第一なり、

(2)學無學人の四念住觀を作すことを明す。

の依處は斷の未だ圓滿せざるを能く圓滿せしむ。爾所の處に齊(かぎ)つて諸の瑜伽師は所應作に於て皆な究竟することを得、謂はく未證に於ては初めに、由つて能く證し、未來の苦に於ては第二にて能く捨て、現法樂に於ては第三にて能く住し、上の斷滅の未だ圓滿せざる所に於ては第四にて能く滿ず是の如く一切四の依處に由りて應に當に了知すべし。此の中先に獲得せる所の聖道を寂靜道と名づく、上位の煩惱の事を斷ぜんが爲の故なり。正しく修習する時其の事斷に於て倍趣かに增益し、煩惱斷に於いて防ぎて未だ退くことを得ず。

(二)問答して通じて三門を以て沙門の義を攝することを明す　(1)此の中云何んが智に由りて所知の境界を觀察し、應に證すべき所を證するや。謂はく正しく加行する異生地の中にて正行する異生の補特伽羅は內外の別に由りて〔四〕五界を觀察し、所有の身に於て循身觀に住す、謂はく心解脫及び慧解脫を增上せんが爲の故に、彼れ是の如き如理なる加行を起し、諸界の中に於いて唯界想觀に住し唯だ界のみありて都べて我あること無し、思擇力に依りて諸の色界に於て已に貪を遠離したるも、而も所緣に於ては猶ほ未だ斷ずること能はず。未來世に於て希望せざるが故に、現在世に於いて耽著せざるが故に已に貪を離れたりと名づけ、未だ彼の隨眠を永害すること能はざるが故に所緣に於ては猶ほ未だ斷ずること能はずと名づくれども。彼れ其の貪に於て已に遠離せるが故なり。心解脫を、增上力と爲し貪を遠離するに由るが故に心淸淨なることを得、而も所緣に於ては未だ斷ずること能はざるが故に餘の上位の應に更に修治すべきあり。此より已後六觸處の所攝の境界に於て無倒に觀察し、諸受の中に於て循受觀に住す。彼れ前說の如く思擇力に依りて諸受界に於て亦た貪を遠離し、緣生は無常性なるが故なりと歷觀す。卽ち前說の如く所緣に於ては猶ほ未だ斷ずること能はず。彼れ無明に於て已に遠離するが故に、慧解脫を、增上力と爲し諸の明觸所生の如理作意と相應するに依る所有る善受に由りて一切の受所生の雜染に於て厭捨して住す、無明觸所生の受を對と爲して起

(1)凡夫の四念住觀を作すことを明す。

【四】五界とは地水火風空の五界なり。

地、三種の補特伽羅に由り當に知るべし、普く諸の沙門の義を攝すと。云何んが三處なりや。一には境、二には智、三には證なり。云何んが三地なりや。一には正加行攝異生地、二には有學地、三には無學地なり。云何んが三種の補特伽羅なりや。一には正加行異生補特伽羅、二には有學補特伽羅、三には無學補特伽羅なり。

(1)云何んが境と名くるや。謂はく【二】地等の六界は【三】六觸處の與に所依の體と爲り、此の六觸處は十八意行の與に所依の體と爲り、十八意行は能く心を雜染す。(2)云何んが智と名くるや。謂はく心淸淨は增上の慧の依處なり。(3)云何んが證と名くるや。謂はく卽ち慧の依處の增上若しは諦の依處、若しは捨の依處、若しは寂の依處なり。

(一)云何んが慧の依處なりや。謂はく慧を依處と爲して正しく加行する異生地の中に於て正に善法を修するを因緣と爲すが故に能く放逸なること無く有學地に入る、若しは慧を依處と爲して阿羅漢を證し、無學地の中に盡智を得るが故に如實に我が生盡くる等を了知し、若しは學無學の出世智の後の諸の世間慧なり。云何んが諦の依處なりや。謂はく已に八支聖道を獲得し、諸の煩惱を斷じ、此の依處に由りて當來の衆苦畢竟して生ぜず、此に由りて畢竟して忘失すること無きが故に諦の依處と名づく。云何んが捨の依處なりや。謂はく彼の事を斷じ、此の依處に由りて已斷の事に於て雜染無の行無く現法樂住するなり。云何んが寂の依處なりや。謂はく所餘の結事を斷滅せんが爲に方便勤修し、已に得たる如き道を此を依處と爲して所餘の結及び所餘の事に於て能く捨てゝ餘し。

(二)是の如き一切は要を以て言はば證を得んと欲するが爲の故に其の智を修し、既に證を得已つて便ち聖道及び聖道の果を獲るなり。果に二種あり謂はく煩惱斷と及び事斷となり。此の中一種は未だ證せざる所を證し、第二の依處は未來の苦を捨て、第三の依處は能く隨つて習近し現法樂住し、第四

(1)境を明す。
【二】地等の六界とは、地、水、火、風、空、識の六界なり。此の中前五界は眼等の五觸處の與めに所依となり、識界は意觸處の與めに所依となる。
【三】十八の意行。六憂、六喜、六捨なり。
(2)智を明す。
(3)證を明す。
(一)問答して四依處を別解す
(二)總じて分別す

に覺悟すべきをや。是の故に彼れ自師の宗に於て智增上なることを得と雖も而も實には知ること無く無明趣に墮す、是れを第四の外の隨煩惱と名く。內法に住する者は是の一切に於て皆な能く解脫す。

(三)內法の弟子と外道の弟子と品類不同の因緣を解す　云何んが內法の弟子と外道の弟子と品類同じからざるや。謂はく外道の弟子は或は有見常邊に墮し、或は無見斷邊に墮し、長夜に積集し、深く藏護を起し、聞に由りて親近し、思に由りて染著し、修に由りて染著す。內法の弟子は處中の行を行じて二邊を遠離す。

(四)內法の大師と外道の師と品類不同の因緣を解す　云何んが內法の大師と外道の師と品類を同じうせざるや。謂はく外道の師は一切の取に於て同じく斷遍知論を宣說すと雖も而も諸取に於て正しき斷遍知を施設すること能はず、彼れ本出家し欲を捨つるを契ふに由るが故に欲取に於て斷遍知を立つるも、自見と自戒と我語とには非ず。若し他の諸餘の沙門婆羅門と等しきことあるも見は同分にあらず、戒禁は同分なり。彼れ見取〔見〕に於て亦た能く分に隨つて斷遍知を立つるも、戒禁と我語との二取には非ず。若し戒禁あるも亦た同分にあらず、戒禁取に於ては亦た能く分に隨つて斷遍知を立つるも、其の我語取は一切時に於て一切の外道に悉く皆な共にあり、是の故に外道は自に於ても他に於ても我語取の中に皆な斷遍知論を施設せず。又彼れ能く分に諸取を捨つと雖も而も當來に於て還つて復た能く取る、未だ永斷せざるが故なり。是の如き外道は諸取の中に於て未だ全く斷ぜざるが故に、未だ永斷せざるが故に究竟することを得ず。內法の大師は當に知るべし一切上と相違すと。是の如く應に知るべし內法の大師と外道師と品類を同じうせざることを。

第二目　沙門の義を解す

(一)三門を開いて沙門の義を攝することを明す　復次に、四念住の修習の增上に依り略して三處、三

り。是の四沙門の若しは略若しは廣は[1]聲聞地に已に其の相を辯ぜるが如し。內法の道とは如何なるを道と爲すや。謂はく八支聖道なり、若の處には八支聖道を施設し、是の處には汚道を施設し、後の四種の沙門と爲す、若し其の道ありて自ら邪行を行ずるは道を生ずる器に非ず、是の因緣に由りて汚道あるべし、是の故に外法には尙ほ汚道すら無し、況んや餘あることを得んや。內法の究竟とは云何んが究竟なりや。謂はく諸取を斷じ、諸取斷じ已つて當來畢竟して復た相續すること無きなり。云何なるを名づけて四處に依止すと爲し、云何なるを復た四證智を得と名くるや。謂はく四處とは、一には三結永斷せる蘇息の處、二には退墮する無き法の勢力の處、三には定んで菩提に趣く種類の處、四には極七反有の隨行する處なり。此の四處に依り佛法僧に於て及び淨戒に於て證淨智を得。

（二）四種の外の隨煩惱を解脫する因緣を解す　云何なるを名づけて四種の外の隨煩惱を解脫すと爲すや。一には現法の外の隨煩惱を解脫し、二には後法の外の隨煩惱を解脫し、三には展轉して互に相違戾して作す所の外の隨煩惱を解脫し、四には諸の聖諦に於て宣說すること能はず覺悟すること能はずして作す所の隨煩惱を解脫す。當に知るべし此の中諸の外道類は念住を闕くが故に其の念忘失して正知にして住せずと。諸受の或は樂、或は苦、或は非苦樂を領納して樂に於ては染を起し、苦に於ては恚を起し、非苦樂に於ては愚癡を發起す、是の如きを名づけて第一の現法の外の隨煩惱と爲す。彼れ是の如き染恚癡に由るが故に受を以て緣と爲して後有の愛を生じ、愛を以て緣と爲して諸取を發生し、愛取あるが故に取を以て緣と爲して有を成辦し、廣說乃至、純大苦聚積集し增長す、是の如きを名づけて第二の後法の外の隨煩惱と爲す。又諸の外道の薩迦耶見を以て根本と爲る種種なる見趣の意各別なるが故に彼此展轉して互に相ひ違戾す、是れを第三の外の隨煩惱と名づく。又諸の外道遍く一切の四聖諦の中に於てすら尙ほ能く其の教を施設することあること無し、況んや當

【一】第二十九卷。

卷の第九十七

攝事分中契經事菩提分法擇攝第四の一

第四節　契約事の中の菩提分法擇攝を明す

第一項　總嗢拕南一頌を以て十門を標す

是の如く已に緣起と食と諦と界との擇攝を說けり、菩提分法の擇攝を我れ今當に說くべし總の嗢拕南に曰く、

『念住と正斷と、神足及び根と力と、覺と道支と息念とにして、學と證淨とを後と爲す。』

第二項　別嗢拕南第一を以て四念住の中の沙門等の八門を標釋す

別の嗢拕南に曰く、

『沙門と沙門の義と、喜樂と一切の法と梵行と數取趣とにして、超と二染とを後と爲す。』

第一目　沙門を解す

四念住の修習の增上に依り、四の因緣に由りて應に知るべし內法に沙門の道あり、及び究竟あり、外法には決定して沙門の道無く、亦究竟も無しと。當に知るべし他論の諸の沙門の道及以び究竟は一切皆な空なりと。云何なるを名づけて四種の因緣と爲すや。一には四處に依止して四證智を得るが故に、二には四種の外の隨煩惱を解脫するが故に、三には內法の弟子と外道の弟子と品類を同じうせざるが故に、四には內法の大師と外道の師と品類を同じうせざるが故なり。

(一)四處に依止して四證智を得る因緣を解す　云何なるを名づけて內法の沙門と爲すや。謂はく諸の沙門に略して四種あり、一には勝道沙門、二には論道沙門、三には命道沙門、四には汚道沙門な

中有に於て般涅槃する者をして暫爾安住せしむ、此の愛若し斷ずれば卽ち爾の時に於て其の識謝滅す。復た二種の意所生の身あり、一には色界の意所生の身、二には無色界の意所生の身なり、謂はく定地の意門の方便に由りて能く二の生身を集成するが故なり。又諸の如來に略して二種の善く他を避くる論あり、一には能く、定んで應に記すべからず不定の論を作すを避け、二には能く決定して應に記すべく不定の論を作すを避く。喜樂と色等との義別を說くが如く是の如く喜樂と取等との義別も、應に知るべし亦た爾なりと。

瑜伽師地論卷第九十六

攝事分中契經事緣起食諦界擇攝第三の四

請問する者に應に與に言ふべからず、四の因緣に由りて能く記別する者に應に與に言ふべからず。前の四種とは、一には現量に於て、二には理に應ずるに於て、三には其の因に於て、四には非因に於てす。謂はく等しく示現する時而も領解せず、比度分別し正に施設する時而も領解せず、汝自ら修行して自然に當に了ずべしと而も領解せず、正智の論者親しく自ら演說するに此の至教に由るも亦た領解せず、是の故に此の能く請問する者に於ては應に與に言ふべからず。後の四種とは、謂はく一切の行は皆な是れ無常なり、一切の諸法は皆な我あること無し、一切の生處は皆な樂ふ可からず、淨不淨の業は終に失壞すること無しと、是れ一向記なり。故思の造業は當に苦を受くべし、此は一向に非ず、捨を獲得すれば、現法中に於て定んで般涅槃す、亦た一向に非ず。若し有るが問うて言く、業を造作し已つて善趣に往くや不やと。應に反詰して云ふべし、汝何れの業を問ふやと。若し有るが問うて言く、道を修習し已つて涅槃を得るや不やと。應に反詰して云ふべし。汝何れの道を問ふや、是れ世間と爲んや出世間と爲んやと。置記論とは、謂はく一切の所有る見趣に依る。是の如き四種にて正しく問者に答ふるを善く能く記すと名づく、應に與に言ふ可し、此れと相違するは應に與に言ふべからず。

第七目　記別を解す

復次に、諸佛如來に二の記別あり、一には共外道、二には不共なり。共外道とは、諸の弟子の當に生ずべき處等を記するなり。不共と言ふは、終に記別せざるなり。生ある者には等しく二の識火の熾然なる所依あり、一には微細愛、二には麁、名色なり。欲色二界の愛より生ずる所の識は名色を依と爲し、愛若し止息すれば乃し壽量に至るまで其の識相續し隨轉して住す。若し無色界の愛より生ずる所の識は但だ其の名を緣として住立することを得、愛若し斷滅すれば乃し壽量に至るまで其の識相續し隨轉して住す。又色界に於ては此の愛を依と爲して中有の識を生ず、卽ち愛を依と爲して

第五目　差別を知ることを解す

復次に、遍く、應に遍知すべき事を了知するに由りて其の苦諦に於て遍き解脱を得、其の集諦に於て勝れたる解脱を得、其の滅諦に於て能く正に作證し、其の道諦に於て能く正に修習す。正に苦邊に於て能く隨得すとは、謂はく苦諦に於て遍き解脱を得るなり。諸漏盡くるに於て能く隨得すとは、謂はく集諦に於て勝解脱を得るなり。應に厭ふべく應に離るべく應に解脱すべしとは、謂はく滅諦に於て能く正に作證するなり。無常等に於て隨觀して住すとは、謂はく道諦に於て能く正に修習するなり。又十相に由りて應に當に境事の差別を了知すべし、一には已に生ぜる諸行命根に繫屬して住する因の差別、二には有色無色の諸行展轉して相依り住立し流轉する差別、三には無色の諸行無常の法性の入門の差別、四には心の諸の雜染の依處の差別、五には一切の諸行一切の品類は總て皆な是れ苦なる差別、六には淨不淨の業果を受用する門の差別、七には喜樂ある識の所行の邊際の差別、八には愛恚の依處の差別、九には喜樂を執藏する有情の生處に安住する邊際の差別、十には惡趣に墮し往く依處の邊際の差別なり。又清淨品の應に得べき應に修すべき事增上なるが故に當に知るべし餘の十種の差別ありと。一には善法を無間に修習し增上無逸なる差別、二には心慧解脱の依止の差別、三には勝れたる三摩地の邊際の差別、四には一切境に於て其の心を繫縛する邊際の差別、五には解脱の方便の差別、六には解脱の差別、七には眞義を等覺する差別、八には現等覺の後三學の中に於て受學する差別、九には正學已學の現法樂住の差別、十には聖神通を證し廣く行ずる差別なり。

第六目　請問を解す

復次に、即ち上の所說の如き差別に依りて應に問論を生ずべし。標擧とは、謂はく未だ了ぜざる義理に由り、記別とは、謂はく已に了ぜる義理に由る。當に知るべし此の中四の因緣に由りて能く

上乃至有頂に在り。一切の受無きを亦たは寂靜と名づく、謂はく滅定に在り。然るに佛世尊は第一義に約して三種の最も寂靜なる樂ありと說きたまへり。謂はく諸の苾芻の心(一)其の貪に於て離染解脫し、其の貪に於けるが如く、(二)瞋に於ても(三)癡に於ても當に知るべし亦た爾なりと。是の如き一切を總じて三樂と爲す、一には應遠離樂、二には應修習有上住樂、三には最極究竟解脫無上住樂なり。應遠離樂とは、謂はく諸の欲樂なり。應修習樂とは、謂はく初靜慮乃至有頂(天)の諸の所有る樂なり。有上住樂とは、謂はく滅盡定なり此れを亦たは名づけて應修習樂と爲す。最極究竟解脫無上住樂とは、謂はく前說の如き三の最勝なる樂なり、樂を受くるに據りて說くに非ず、滅盡定を以て樂ありと爲す、然れば受を斷ぜる樂を說いて名づけて樂と爲したまへり。又勝住の樂と樂と相似たり。又卽ち此れに依りて樂の得可きあるを說いて名づけて樂と爲す、謂はく一あるが如し此の定より起ちて領受する所ありて是の如きの言を作す、我れ已に多く是の如き是の如き色類の最勝寂靜の樂住に住すと。此れに依るに由るが故に說いて樂ありと名づく。

第四目　見等を最勝となすことを解す

復次に、若し苾芻ありて是の如き色類の見、聞及び樂、想、有に依止して無間に諸漏永盡を隨得す。當に知るべし此の見を最勝見と名づけ、乃至此の有を最勝有と名づくと。無我の見に從つて更に其の餘の勝れたる見、謂はく無常の見を尋求せず、卽ち此の無間に漏盡を隨得す、是の故に此の見を最勝見と名づく。此の見に依止して復た四門に由りて方に能く諸漏永盡を隨得す、一には或は他より正法を聽聞す、二には或は四の現法樂住に依る、三には或は三種の想定に依止するなり、謂はく空無邊處より乃し無所有處に至る、四には或は天有、或は人有に在り。是の故に此の聞を其の餘の聞に於て、此の樂を其の餘の樂に於て、此の想を其の餘の想に於て、此の有を其の餘の有に於て說いて最勝なりと爲す。

たは境界を緣ずと爲し、愚癡所攝の無明を亦た其の緣と爲す。是の如き一切の不正思惟及び相續に墮する彼の品の煩惱を以て其の集と爲し、此れ滅するに由るが故に、彼れも亦た隨つて滅す、正見等の道を當に知るべし說いて能く滅に趣く行と名づくと。

第二目　劣等を解す

復次に、遠離の喜に於て身に作證し住する諸の聖弟子は能く[四]五法を斷じ、能く[五]五法を修して圓滿することを得しむ、應に知るべし、[六]前の三摩呬多地に廣く其の相を辯ぜるが如しと。又喜樂捨の劣と中と勝品とは、謂はく欲界と及び四靜慮とに在り、其の所應の如く當に其の相を知るべし。又第四靜慮地に在りては一切の過患を捨て皆な遠離するが故に善清淨なりと名づく。若し此の上の捨は復た立てて勝れて愛味無しと爲すべし。

第三目　諸受相の差別を解す

復次に、十種の相に由りて當に諸受の所有る差別を知るべし、一には勝義差別、二には流轉所依差別、三には自相差別、四には盡所有性差別、五には自相品類差別、六には流轉門差別、七には雜染門差別、八には所治能治差別、九には時差別、十には刹那展轉生起差別なり。此の中或は開覺すること無き者ありて是の如きの言を作す、受は唯だ二あるのみ、一には苦、二には樂なりと。復た不苦不樂ありと說くと雖も然も唯だ苦樂のみなり、性として顯はす所無し、是の故に世尊卽ち是の如き苦樂寂靜なるに依りて假設して有りと爲したまへり。世尊彼を開曉せんと欲するが爲の故に是の如き言を說きたまへり、樂に二種あり、所謂欲樂と及び遠離樂となり。此の遠離樂に復た三種あり、一には劣樂、二には中樂、三には勝樂なり。劣樂とは、謂はく無所有處已下なり、中樂とは、謂はく第一有なり、勝樂とは、謂はく想受滅なり。既に是の理あれば樂受を亦たは說いて寂靜と爲すことを得、謂はく初、二、三靜慮の中に在り。非苦樂受を亦たは寂靜と名づく、謂はく第四靜慮已

【四】五法を斷ずとは倫記に曰く欲惡不善法等を斷ず。
【五】五法を修すとは倫記に二義あり、一に曰く初靜慮の中の五支二に曰く欲所引の喜と憂と不善所引の喜と憂と捨となり。
【六】第十一卷。

て已に寂靜なることを得、是の因緣に由りて尋も亦た寂靜なり、唯だ觸のみ獨一未だ寂靜なることを得ず。若し勝妙の境現在前する時は諸の染汚の觸便ち復た生起す。若し諸欲に於て已に貪を離れたる者は當に知るべし一切皆な寂靜なることを得と、是れを一種の義門の差別と名づく。復た一類あり、諸欲の中に於て未だ貪を離れざる者は諸欲の所有の貪欲に於て未だ永斷せざるに由るが故に、諸の尋、染の觸未だ永斷せざるが故に、是に由りて一切皆な未だ寂靜ならず。若し諸欲の貪欲に於て已に斷じて初靜慮を證すれば欲已に寂靜にして尋未だ寂靜ならず。初靜慮に於て已に貪を離れたる者乃至非想非非想處に未だ貪を離れざる者は二已に寂靜にして觸未だ寂靜ならず。有頂を超過すれば一切寂靜なり、是れを第二の義門の差別と名づく。

(2)若し諸の外道にして能く世間の定に入り、邪見乃至邪解脫智を具足せる者は彼れを緣と爲るに由りて諸受を生起し、彼に於て染著し、又彼の品の煩惱隨縛に由り、即ち是の如き寂靜ならざる緣に由りて諸受生起す。若し內法に住し能く世間の定に入り、正見乃至正解脫智を具足せる者は彼を緣と爲るに由りて諸受を生起し、彼に染著し、又彼の品の煩惱隨縛に由り、即ち是の如き寂靜ならざる緣に由りて諸受生起す。又內法に住し、能く出世定に入る者若し向道に依りて轉じ、自事未だ究竟せざるに、所有る諸欲未得を得と爲し、未證を證と爲し、未觸を觸と爲し、是の希望を作す、我れ是の處に於て何れの時か當に得べしと、廣說前の如し。彼れ未だ寂靜ならず、是れを緣と爲るに由りて彼れ爾の時に於いて諸受生起す。若し自事に於て已に究竟することを得れば彼の欲寂靜なり、寂靜の緣に由りて便ち第一の寂靜無上の諸受生起することあり、彼れ一切の所有る諸受の出離の方便に於て如實に了知す。是の故に前の如く第一義の諸の沙門の中に於て許して沙門と爲し、諸の梵志の中に許して梵志と爲す。若し了知せざれば彼の一切に於て皆な忍許せず。當に知るべし此の中一切の諸受差別あること無く皆な觸を緣と爲し、又即ち此れ欲を緣じ、亦たは尋を緣ずと爲し、亦

(2)外道內法に約して以て諸受の生起を辯ず。

は此より已上乃至非想非非想處に未だ貪を離るることを得ざる諸の外道衆の能く世間の定に入り、邪見乃至邪解脱の智を具足せる者、八には內法に住する衆にして能く世間の定に入り、正見乃至正解脱の智を具足せる者、及び內法に住する衆にして能く出世の定に入る者なり。此の八衆能く諸受を領納するに依りて遍知するに由りて應に知るべし普く諸の有情衆を攝すと。

(二)廣く諸受の生起を辯ず　(1)又在家衆、或は出家衆にして諸欲の中に於て未だ貪を離れざる者は三の因緣に由りて諸の染汚の受生起することを得、一には染著力に由り、二には作意力に由り、三には境界力に由る。當に知るべし此の中諸の在家の者は諸欲を追求し、受用の爲の故に欲樂を發生するは染著力に由り、卽ち此の非理に先時に曾て領受せる所を思惟するは作意力に由り、現前の境に於て現在に受用するは境界力に由る、應に知るべし是の如き補特伽羅の欲尋觸の緣は現行するに由るが故に皆な寂靜ならず、此を以て緣と爲して三受を發生すと。又最初の染汚の欲尋觸現行するに由るが故に彼の緣所生の諸受を領納す。若し彼れ生じ已らんに染著して捨せず、亦た除遣せざれば、是の如く彼の受は長時に相續し隨轉して絕えず寂靜なることを得ず、寂靜ならざる緣長時に相續して諸受を領納す。又彼の欲等は其の最初より長時に相續し恒に現行するに由るが故に、彼の緣、彼の品所有る煩惱は相續に墮在して未だ永斷せざるが故に卽ち說いて名づけて不寂靜緣と爲す、是れを第二の義門の差別と名づく。若し諸の出家にして未だ貪を離れざる者は諸欲に於て能く棄捨するに由るが故に其の染著力に攝受する所の欲は寂靜なることを得と雖も作意と境界との力に攝受する所の若しは尋、若しは觸而も未だ寂靜ならず。是の因緣に由りて彼れ獨處に於て尋の對治に於て未だ善修せざるが故に、一切の離欲皆な未だ作さざるが故に、曾受の境に於て非理に作意し、尋思現行し、諸の勝妙の現前の境界に於て觸の現行するあり。若しは尋思に於て深く過失を見、彼の對治に於て已に善修せるが故に、一切の離欲未だ盡くし作さざるが故に欲は前に說ける如くにし

(1)在家出家に約して諸受の生起を辯ず。

ち此の語言は、若し正に初靜慮定に證入すれば卽ち便ち寂靜なり。又麁なる尋伺能く語言を發す、諸の未だ定を得ず、或は已に得て還つて定より起ちて能く語言を發するあり、正しく定に在るに非ず。正しく定に在る者は微細なる尋伺隨つて轉ずることありと雖も而も所有る語言を發すること能はず、是の故に此の位を說いて一切の語言寂靜なりと名づけ、是れを第二の義門の差別と名づく。

又瑜伽師は貪瞋癡に於て深く過患を見、貪瞋癡等の離繫せる諸受に安住し領納し、貪瞋癡等を數數遍知し、數數斷滅するが故に其の心貪瞋癡に於て染を離れ解脫すと說く。

第九目　觀察を解す

又七行に由りて諸受の中に於て受の七相を觀ず、謂はく(一)諸受の自性の故に、(二)現在の流轉還滅の因緣の故に、(三)當來の流轉の因緣の故に、(四)當來の還滅の因緣の故に、(五)雜染の因緣の故に、(六)淸淨の因緣の故に、及び(七)淸淨の故なりと觀ずるなり。

第十二項　別嗢拕南第四を以て受の生起等の七門を標釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『受の生起と劣等と、諸受の相の差別と、見等を最勝なりと爲すと、差別を知ると問と記となり。』

第一目　受の生起を解す

一切の有情の應に斷ずべき諸受は略して三緣に由りて生起することを得。一には欲緣なり、謂はく未來世に於てす、二には尋緣なり、謂はく過去世に於てす、三には觸緣なり、謂はく現在世に於て現前する境界なり。

(一)有情衆を明す　云何んが名づけて一切の有情と爲すや。謂はく有情衆に略して八種あり、一には在定衆、二には出家衆、三には諸欲に於て未だ貪を離れざる衆、四には諸欲に於て已に貪を離れたる衆、五には初靜慮に於て未だ貪を離れざる衆、六には初靜慮に於て已に貪を離れたる衆、七に

相應し領納す、謂はく生等の苦に由るなり。是の如く彼れ現法の所有る上品の苦に由るが故に、及び現法の諸の雜染に由るが故に、亦後法の所有る苦に由るが故に、是の諸處の受に由りて其の染惱を受く。心解脫する者は應に知るべし一切上と相違すと。此の差別をいはゞ具に三受を領す。又若し受あり、依止の中に於て生じ已つて破壞し消散して住せず、速かに遷謝に歸して多時を經ず、相似し相續して流轉すれば應に此の受は猶ほし旋風の若しと觀ずべし。若し諸受あり少時經停し、相似し相續して速かに變壞せずして流轉すれば應に此の受は客舍の羇旅の色類の如しと觀ずべし。又彼の諸受の自性の所依の染淨の品別を當に知るべし受の品類の差別と名づくと。味ある受は諸の世間の受なり、味無き受は諸の出世の受なり、依耽嗜の受は妙五欲に於ける諸の染汚受なり、依出離の受は卽ち是れ一切の出離遠離より生ずる所の諸の善の定不定地と倶行する諸受なり。

第七目　受の道理を解す

又諸の苦受は一切衆生現に是れ苦なりと知り、成立することを假らず、所餘の二受は二の因緣に由りて應に是れ苦なりと知るべし。非苦樂受及び能く此の受に隨順する諸行は無常に由るが故に應に是れ苦なりと知るべし、所有る樂受及び能く此の受に隨順する諸行は變壞法なるが故に應に是れ苦なりと知るべし。此の道理に由りて當に諸受は皆な悉く是れ苦なりと知るべし。

第八目　受の寂靜を解す

又彼の諸受に應に知るべし略して三種の寂靜ありと。一には上の定地に依止するに由るが故に下地の諸受皆な寂靜なることを得、二には暫時現行せざるに由るが故に寂靜なることを得、三には當來究竟して轉ぜざるに由りて寂靜なることを得るなり。當に知るべし此の中暫時行ぜざるを名づけて寂靜と爲し、其をして究竟して行ぜざる法を成ぜしむるを名づけて止息と爲すと。言論を樂ふ者は廣く言論を生じ、染汚なる樂欲展轉して種種なる論を發起するを說いて名づけて語言と爲す。卽

又諸の樂受は變壞する法なるが故に、貪の依處なるが故に、貪は是れ當來の衆苦の因なるが故に、此に因りて應に樂受を觀じて苦なりと爲すべし。諸の苦受の若きは現在前する時惱害する性なるが故に毒箭に中りて未だ拔くことを得ざるが如し、此に由りて應に苦受は箭の如しと觀ずべし。非苦樂受の已に滅壞せる者は是れ無常なるが故に、正に現前する者は是れ滅法なるが故に、二に於て更に續いて能く隨順するが故に、此に由りて應に非苦樂受は性是れ無常なり性是れ滅法なりと觀ずべし。是の如く受に於て生ずる所の正見にて能く隨つて諸有る所受は皆な悉く是れ苦なりと悟入す。

第四目　受の染を解す

樂受の中に於ては貪の隨眠あり、苦受の中に於ては瞋の隨眠あり、非苦樂に於ては無明の隨眠あり、是れを受に於て起す所の雜染と名づく。樂等の所有る諸受現前する分位に於て一切未だ煩惱隨眠の隨眠する所を斷ぜずと雖も、然も彼の各別の所行の諸纒を緣ずるに由りて生起する此の後の睡眠煩惱の隨縛を卽ち彼の相續に於ける隨眠と名づく。諸の隨眠を永害せんと欲するが爲の故に梵行を熟修す、唯だ諸纒を遣るが爲のみの因緣には非ず。

第五目　數取趣を解す

思擇力無き補特伽羅は苦受を受くる時、心極めて憂悴す、卽ち此の苦受若しは身若しは心に現前し領納すれば所餘の樂受・非苦樂受未だ斷ぜざるに由るが故に而も相應すと說き、是の故に名づけて圓滿なる冥闇の受坑を現見するに其の底を得難しと爲す。思擇力ある補特伽羅は應に知るべし一切上と相違すと。

第六目　轉の差別を解す

又諸受に於て心未だ解脫せざる補特伽羅は但だ苦受に於て圓滿に領納すること猶ほし一人の二の毒箭に中るが如し、二の毒箭とは卽ち三受に喩ふ。或は染心に領納す、謂はく貪瞋癡に由る、或は

れぱなり。謂はく能く轉輪王の身、或は帝釋の身、或は魔羅の身、或は大梵の身を感得し、彼に第二無く、更に餘の補特伽羅の或は男或は女の其れと等しき者あること無し。涅槃に趣く行は當に知るべし能く一切の有情の最勝法性を證すと、謂はく聲聞の菩提、獨覺の菩提、無上の菩提なり。諸佛如來を彼の一切に於て最も殊勝と爲す、一切の三千大千世界の補特伽羅に與に等しき者無し。又餘の所有る菩提の劣れる功德に安住する者諸の世間に於て增上なる位を得るすら尙ほ殊勝と爲す、何に況んや如來をや。彼れ復た云何ん。謂はく是の處に於て正見具足せる補特伽羅は現行すること能はず、諸の異生類は現行するに堪任す、當に知るべし一切は經に廣說せるが如しと。

第十一項　別嗢拕南第三を以て自性等の九門を標釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『自性と因緣と、見と染と數取趣と、轉の差別と道理と、寂靜とにして後は觀察なり。』

第一目　受の自性を解す

諸受の自性は應に當に了知すべく、諸受の因緣は應に當に了知すべく、受に於ける正見は應に當に了知すべく、受に於ける雜染は應に當に了知すべく、能く受を受くる補特伽羅の思擇と不思擇との二力の差別に於て應に當に了知すべく、是の如く受に於て解脫し解脫せざる流轉の品別を應に當に了知すべく、諸有る所受皆な苦なる道理は應に當に了知すべく、諸受の寂靜にして止息する差別を應に當に了知すべく、受に於て一切の受相を觀察することを應に當に了知すべし。略して三受を說く、是れ受の自性なり。

第二目　受の因緣を解す

三の品類の觸は是れ受の因緣なり。

第三目　受の見を解す

すと、謂はく欲界と色界と無色界となり、前の所說の如し。內を出離せず出離する義なるが故に當に知るべし有餘の三界を建立すと、謂はく色界と無色界と滅界となり。又卽ち此の內外の二事の出離の增上に由りて正法或は不正法を聽聞し、如理に思惟し、或は不如理に思惟す。依處の三種の言事差別する義なるが故に當に知るべし有餘の三界を建立すと、謂はく過去界と未來界と現在界となり。又所知の諸苦煩惱の多中少の義に由りて當に知るべし有餘の三界を建立すと、謂はく劣界と中界と妙界となり。若し上苦と及び上煩惱とあれば是れを劣界と名づけ、若し中苦と及び中煩惱とあれば是れを中界と名づけ、若し少苦と及び少煩惱とあれば是れを妙界と名づけ、是の如く遍く劣中妙界を知る。又此の因緣を遠離する義に由り、及び此の對治を修習する義に由りて當に知るべし有餘の三界を建立すと、謂はく善界と不善界と無記界となり。又善清淨を修する差別に由り缺縛の義なるが故に、無縛の義なるが故に、具縛の義なるが故に當に知るべし有餘の三界を建立すと。謂はく學界と、無學界と非學無非學界となり。又卽ち彼の有學無學と、諸の愚夫と若しは共じ共ぜざる世出世の法を成就する義に由るが故に當に知るべし有餘の二界を建立すと、謂はく有漏界と無漏界となり。又卽ち彼の世出世間の若しは常無常、有上無上の差別の義に由るが故に當に知るべし有餘の二界を建立すと、謂はく有爲界と無爲界となり。一切皆な涅槃に趣向せんが爲めに悉く涅槃を以て其の後際と爲し、梵行を熟修す、是の故に此れを過ぎて復た界を立つること無し。諸處、緣起及び處非處の所有る善巧は聲聞地に已に其の相を辯ぜるが如し。又若し略して處及び非處の善巧の相を說かば、謂はく或は五趣に趣く行に依止し、或は復た涅槃に趣く行に依止するなり。此の一切行に略して三種あり、謂はく劣と中と勝となり。惡趣に趣く行を說いて名づけて劣と爲し、善趣に趣く行を說いて名づけて中と爲し、涅槃に趣く行を說いて名づけて勝と爲す。所以は何んとならば、善趣に趣く行は此を最も極と爲す、更に餘行無く、唯だ此れ能く所有る世間の最極圓滿なるを感ず

す。內差別苦とは、謂はく界相違する疾病の因緣を名づけて災患と爲し、所愛の變壞所欲の匱乏に染を生じて心を惱ますを名づけて擾惱と爲す。是の如きを名づけて內の增上に由りて生ずる所の衆苦と爲す。此れ復た前の如く應に知るべし或は已に遭へる所の苦、或は當に遭ふべきを恐れて怖畏を生ずる苦ありと。時差別苦とは、謂はく卽ち是の如き諸の品類の苦の過去の已有、未來の當有、現在の今有、是の如きを總じて時差別苦と名づく。身差別苦とは、謂はく自ら邪行を習行するを因と爲し、能く己をして苦しましめ、是の因緣に由りて他正行すと雖も亦た能く苦しましむ、是の如きを名づけて身差別苦と爲す。當に知るべし此の中前の三を名づけて唯だ能く自の義利無き行を引くと爲し、後の一を名づけて亦た能く他の義利無き行を引くと爲すと。云何んが四處に善巧を得ざるや。謂はく(一)諸界(二)諸處(三)緣起(四)處非處の中に於て皆な了達せず。上と相違するは當に知るべし卽ち是れ聰慧の二相なりと。

(二)義に隨って分別す　又無色の意處の所依所緣の自類の流轉する差別に由りて當に知るべし建立するに十八界あり、五色處に由りて運轉し驅役する所依の體性の差別を安立すと。當に知るべし有餘の六界を建立し、所依の體性の差別を安立すと、謂はく地等の四なり。運轉する所依の體性の差別は卽ち是れ空界なり、驅役する所依の體性の差別は卽ち是れ識界なり。染淨品の想及び尋思の所依の義に由るが故に當に知るべし有餘の六界を建立すと、謂はく欲と恚と害と並に彼の對治となり。貪と瞋と癡と縛との所依の義なるが故に當に知るべし有餘の六界を建立すと、謂はく苦と樂と憂と喜と捨と無明となり。若し非理の作意思惟有らば卽便ち邪想尋思を生起し、若し如理の作意思惟あらば卽ち便ち正想尋思を生起す。又三界と染淨の二品とに遍く行ずる義に由るが故に當に知るべし有餘の四界を建立すと、謂はく名所攝の受等の四蘊なり。又所染所淨に由り淸淨卽ち此れ不淨なり、淸淨の增上は前に所說の如し。外を出離せず出離する義なるが故に當に知るべし有餘の三界を建立

竟の出離に非ず、欲界無色界の中を色界に望むるも當に知るべし亦た爾なりと。若し諸の有爲皆な悉く寂滅なれば、當に知るべし是れを畢竟の出離と名づくと。是の如く畢竟の出離に非ず出離する義なるが故に當に知るべし三界の差別を建立すと。增上慢無しとは、謂はく遍知に由りて當に知るべし五種六種諸の出離界を建立すと、三摩呬多地に已に其の相を辯ぜるが如し。

第六目　寂靜を解す

復次に、若し諸の苾芻專ら寂靜を樂ひ止觀を勤修すれば略して五相に由りて當に知るべし其の心解脫を得と名づくと。一には奢摩他にて其の心を熏修し、毘鉢舍那に依りて奢摩他品の諸の隨煩惱を解脫す。二には毘鉢舍那にて其の心を熏修し奢摩他に依りて毘鉢舍那品の諸の隨煩惱を解脫す。三には二種等しく運んで心の隨惑を離れ、一切の見道所斷の所有る諸行を解脫す。四には卽ち此れに由るが故に一切の修道所斷の所有る諸行を解脫し、有餘依涅槃界に住す。五には一切の苦依の諸行を解脫し、無餘依涅槃界に住す。善說の法と毘奈耶との中に於て略して二種の師及び弟子の甚希奇の法あり、一には平等の見に隨起する言說、二には最勝の見に隨起する言說なり。是の如き二種は外道法中に都べて得可からず、所作差別するが故に、涅槃を遠離するが故なり。

第七目　愚夫を解す

(一)愚智の相を解す　復次に、世間の愚夫に略して二種の愚夫の相あり、一には樂習せる行能く自他の義利無き行を引く、二には四處に於て善巧を得ず。當に知るべし能く義利無き行を引くに四種の相ありと。云何んが四と爲すや。謂はく能く四種の苦を生起するが故なり、一には他差別苦、二には內差別苦、三には時差別苦、四には身差別苦なり。他差別苦とは、或は疫癘あり、謂はく非人の作なり、或は災害なり、謂はく人の所作なり、或は已に遭へる、或は當に遭ふべきを恐れて未だ遭はざる所に於て而も怖畏を生ずあり。是の如きを名づけて他の增上に由りて生ずる所の衆苦と爲

て生ずる所の衆苦、[三]界相違する等より生ずる所の衆苦も敗壞すること能はざるを任持界と名づく。若し下劣に於て喜足を生ぜざれば出離界と名づく。乃至命在らんに常に無間殷重なる加行を修するを勇猛界と名づく。是の如き一切を應に當に了知すべし、謂はく彼の諸界及び盡所有の諸の品類界なり。

第四目　差別性を解す

復次に、諸界の中に於て略して二種の界の差別性あり。云何なるを二と爲すや。一には他類差別性、二には自類差別性なり。他類差別性とは、謂はく眼界の異り、色界の異り、眼識界の異り、是の如く乃至意識界の異りなり。自類差別性とは、謂はく卽ち彼の界の或は苦受に順じ、或は樂受に順じ、或は不苦不樂受に順ずるなり、是を緣と爲るに由り、能く三受を生ず。

第五目　安立を解す

復次に、四因緣に由りて當に知るべし、三種の三界、二の出離界を建立すと。云何なるを四と爲すや。一には外を出離せず而も出離するが故に、二には內を出離せず而も出離するが故に、三には畢竟の出離に非ず而も出離するが故に、四には增上慢無きが故なり。當に知るべし此の中外の五妙欲の貪を用て緣として欲界を建立すと。卽ち此の界を出離する義に由るが故に色界の最初の靜慮を建立し、尋喜樂を出離する義に由るが故に此の上の三種の靜慮を建立し、色有對の種種なる性の想を出離する義に由るが故に空無邊處所攝の無色界を建立し、空識無所有の想を出離する義に由るが故に此の上の所攝の無色界を建立す。是の如く外處を出離せず出離する義なるが故に當に知るべし三界の差別を建立すと。又色界の中には六處を具足し內處圓滿し、無色界の中には五有色處を皆な已に超越して唯だ餘の意處のみなり、滅界の中に於ては一切の六處皆な已に超越せり。是の如く內處を出離せず出離する義なるが故に當に知るべし餘の三種の界を建立すと。又色界の中は是れ畢

【三】界相違。界とは地水火風の四界の不平等不調なるを云ふ。

に由るが故に燒惱ありと名づく。是の如きを名づけて現法の過患と爲す。卽ち此の因に由りて當來世に於て諸の惡趣に生ず、是の如きを名づけて後法の過患と爲す。又若し其の受る所の學處に於て堅固に執することあれば當に知るべし彼に於て乾ける葦舍の如く、所依止の中の所有る能依は蟲の如しと。善法は邪想の火を其の中に擲置するに由りて、能く焚滅するが故に、當に知るべし卽ち此の補特伽羅の所有る蟲の如き一切の善法は皆な燒害せらると。此れと相違するは堅執無きが故に當に知るべし功德善法を退失すと。此れと相違するは其の所應の如く當に知るべし出離と無恚と無害との想等差別すと。又是の中に於て聞思修の慧は能く黑品に堅固なる執無からしめ、能く[二]白品に堅固なる執あらしむ。若し此の三種の妙慧闕くることあれば能く黑品に堅固なる執あらしめ、能く白品に堅固なる執無からしむ。

第三目　希奇を解す

復次に、如來に二の甚希奇の法あり、一には一切諸法には皆な我あること無しと顯示し、二には一切の有情の自作他作には皆な失壞無しと顯示したまふ。此の中略して二種の有情あり、一には在家品、二には出家品なり。在家の有情は財寶を求めんが爲に初めて加行を興すを發起界と名づく。卽ち此の中に於て若し未だ獲得せざれば精進に順ずるに由つて、障礙の因緣諸心勇悍にして卽ち彼を望むを勢力界と名づく。若し已に獲得せば、蚊虻等の所有る災害に精進して順ずるに由り障も轉ぜしむること能はざるを任持界と名づく。卽ち此の諸界にして自の方所より餘の方所に至り、未だ擯捨せざるより已に擯捨せるに至るを出離界と名づく。卽ち彼の有情にして財寶の爲の故に倶に二處に於て無間殷重なる加行無緩なる加行を起すに由るを勇猛界と名づく。出家の有情にして先づ出家を樂ひ出家を求むるが故に決定欲を生ずるを發起界と名づく。出家品に依り應に得べき所の廣大なる善法に於て怯劣あること無きを勢力界と名づく。種種なる淋漏より生ずる所の衆苦、發勤精進し

【二】三藏解して曰く、聞思修の慧を堅固執と名づく。能く前火を治す。前の火を執る人、聞思修の堅固執なくして功德を退失す。今此れと相違す。

するが爲の故に循身念を修し、有色身に於て無常の性を觀じ、身の染著に於て淨く其の心を修め、自身に隨ふ諸受の分位に於て無常門に由りて無常の性を觀ず。如實に諸の名色を了知するが故に便ち諸漏に於て心解脫を得、身壞し已つて當來の諸受皆な悉く斷滅すと觀ず。又其の身に於て當に壞すべき想に住し、乃至命在らんには常に能く離繫せる諸受を領受す。此の如きを名づけて修習力に依りて隨眠を捨離すと爲す。當に知るべし此の中貪恚癡等は當來世の生等の諸苦をして和合し繫縛せしめ、亦た現法に業雜染を起らしめ、亦た未來の染事を欣求し、過去に已に捨てたる所の事を執取し、現在に正に現前する事に耽著せしむ。意の很るを遠と名づけ、言の很るを諍と名づけ、三に由りて損惱するを說いて名づけて害と爲す。無常を觀ずる等は聲聞地に已に其の相を說けるが如し。

(三)欲恚害に依りて二種の過患を發起することを明す　復次に、不淨、慈悲修の所對治の欲貪、恚害未だ永斷せざるが故に諸の依止の中の彼の品の麁重は猶ほし種子の如く能く彼を生ずるが故に、其の所應の如く說いて欲貪及び恚害界と名づく。此あるに由るが故に欲、恚害に順ずる境現前する時不如理作意の思惟に依りて三種の境に於て能く非理なる相好を取る想生ず。此の想生じ已つて堅執するに由るが故に當に知るべし二種の過患を發起すと、一には現法、二には後法なり。此の中云何なるを名づけて堅執すと爲し、云何なるを名づけて現法の過患と爲し、云何なるを名づけて後法の過患と爲すや。若しは已生の想增上力に由り前の如く相似して欣欲し分別する所有る熱惱の尋求生起す、是の因緣に由りて想を堅執すと名づく。又尋求する時其の三處に於て諸の有情に於て邪行を發起し此を因と爲るに由り或は堪能ありて能く現法の所有る憂苦を生ず、此の因緣に由りて說いて苦ありと名づく。或は堪能無く、然も卽ち彼れ現在前するに由るが故に匱乏ありと名づく。又此の苦あり及び匱乏有るは二を用て緣と爲す。一には他の手、塊、刀、杖及び麁言等を用て增上緣と爲す、是の緣に由るが故に災害ありと名づく。二には內の雜染にして住するを用て增上緣と爲す、是の緣

相惱害す。是れを第三の忍見の依に由ると名づく。此の中第二の一切忍せざる補特伽羅は前の一切の忍せざる者に於て見て亦た喜樂せず、解を求むる心に住し、他所、謂はく善說の法と毘奈耶との中の佛と佛弟子とに往詣し、如實に己を顯はして言はく、我れ一切皆な忍受せずと。佛と佛弟子とは彼の人解を求むる意ありて覺慧猛利にして堪任の性を具せりと了知し、卽ち其の心を以て彼の心を念じ已つて、遂に前の補特伽羅に依りて反詰して曰く、汝卽ち此に於て都べて忍見せず亦た忍せざるやと。彼れ便ち如實に唯だ然りとして答ふ。如來遂に此の正法の中の諸の弟子衆に擧げて彼を讃勵して告げて言はく、汝多人と相似す、我等一切は諸の見趣に於て並に忍見せず皆な忍受せず、汝若し爾らば此の如き人は衆の纒と隨眠との一切の見の依皆な永斷せるが故に當來世に於て諸見雜染堪能する所無し、汝今彼れと竟に差別無し、是の如き輩流は極めて尠少と爲す、汝は此よりも少し、轉た更に少しと爲す、若し一切の纒及び隨眠に於て都べて忍見せず能く永斷する者は彼れ一切に於て畢竟じて執無しと。是の如く如來と如來の弟子とは方便して彼の外道の弟子をして正智見に於て希欲を發生せしむ。竊に是の念を作す、我れ竟に如來の弟子能く是の如き纒及び隨眠を斷ぜることを知らずと。如來は彼れ正智見に於て希欲を生ずと知り已つて更に復た彼の希欲の心を策發したまふに其れ遂に承受す。如來彼をして思擇と修習との二の對治力に依止して一切の纒及び隨眠を永斷せしめんと欲するが爲に法要を宣說し、其をして無倒なる智見を獲得し、餘の此の正法に安住する者の如く能く一切の纒及び隨眠を捨てしめたまふ、所謂彼の諸見の依を思擇し、能く展轉して互に相ひ乖背せしむ、是の因緣に由り違諍惱害し能く自他の一切の無義を引く。諸の聖弟子は彼の一切に於て皆な執取無し、設ひ來つて問ふことあるも亦た記別せず、是の如き諸の過患を觀察し已つて思擇力に依つて諸纒を捨離す。此の因緣に由りて彼の見の依に於て能く永く捐棄し、餘の見の依に於て正見に由るが故に亦たあること無からしむ。是の如く諸纒を永斷し、隨眠を拔かんと欲

（二）三種の忍見の依に由る差別を明す

復次に、外道、外道の弟子の各別の見趣に處して廣く施設する中に於て、略して三種の忍見の依に由る差別得可きあり。此の正法に依りて能く纒及び隨眠を永捨せしむるが故に彼をも亦た隨つて捨て、餘も亦た執無く、彼れ現法中に於て他と違諍忿競して住するに由りて能く自他の一切の無義を引くと了知し、既に是れを知り已つて彼の隨眠を捨つ。此を捨つるに由るが故に所餘の隨眠及び餘の此に因る所有る諸纒畢竟して執無し。外道各別の見趣に處して廣く施設するに於てとは、謂はく世間の若しは常、無常、廣說乃至、如來の滅後の非有非無を執する中に於て、一類の外道の弟子性と爲り遲鈍にして、如如の自師或は他の教導是の如く是の如く審に思量せず、唯だ此のみ諦實にして餘は皆な愚妄なりと取執し堅著せんに、彼れ一切の各別の見趣に於て悉く皆な忍受す、是れを第一の忍見の依に由ると名づく。復一類の外道の弟子あり、性となり是れ中根にして遲鈍に非ざるも、自然に法に於て猛利に推尋し觀察すること能はず、亦た言に隨つて便ち信解を生ぜず、而も展轉して相違する見趣に於て隨つて一を喜樂し、彼れ一類の見趣に於ては忍受し、餘の一類に於ては而も忍受せず、是れを第二の忍見の依に由ると名づく。復一類の外道の弟子あり、性となり是れ利根にして彼れ能く自然に法に於て猛利に推尋し觀察し、諸の見趣の惡施設に由るが故に彼れ一切は皆な理に應ぜずと見、見已つて一切都べて喜樂せず。此の因緣に由つて諸の見趣に於て皆な忍受せず。此に復二の補特伽羅あり、一には邪見行、性となり堪能無く、解を求むる意無し、二には正見行、性となり堪能あり、解を求むる意あり。此の中第一の一切忍せざる補特伽羅は卽ち是の如き非理の比量に由り、善說の法と毘奈耶との中に於て審に思量せず、執して非理と爲し、賢聖を誹謗し、無有の見を起し、又一切の各別の見趣に於て皆な忍受せず、方便して彼をして依仗する所無からしめ、亦た滅壞せしめ、宗承する所無く而も妄りに分別計度して、依仗する所無くして、引く所の見趣を顯示し、常に一切の各別の見者と共に違諍を興し、互に

く。謂はく(一)一類あり、劣れる欲界に於て人中の快樂乃至他化自在天の生を獲得せしめんが爲に能く彼の果を感ずる諸行を宣說す。(二)復た一類あり、中の色界に於て梵世間等の衆同分の生を獲得せしめんが爲に能く彼の果を感ずる諸行を宣說す。(三)復た一類あり、妙なる無色に於て乃至非想非非想處の衆同分の生を獲得せしめんが爲に能く彼の果を感ずる諸行を宣說す。是の如く彼れ劣界を緣と爲すと說くを名づけて劣語と爲し、中界を緣と爲すを名づけて中語と爲し、妙界を緣と爲すを名づけて妙語と爲す。彼の諸の弟子是の法を聞き已つて還つて是の如き差別の想解を起す、是の如き想解を亦たは劣想、中想、妙想と名づく。如如其の想は是の如く是の如く忍樂を發生し、是の如く忍樂は劣見、中見、妙見を發生す。彼れ是の如き諸の忍樂と見とに由りて便ち彼彼の差別の生處に於て信解し忍可し、執して最勝なりと爲し、彼れと相應する業を造作し增長す、是の如き信解を名づけて劣願、中願、妙願と爲す。當に知るべし此の三の說者行者も亦た說いて名づけて劣中妙品の補特伽羅と爲す。又彼の說者及以び行者亦た傳へて他の爲に是の如き劣中妙の法と彼れ亦た是の如き類の生を獲得することとを宣說す。又卽ち此の生に前後相待して差別あるが故に諸界の劣中妙の別を安立す。是の如き三種を若し涅槃に待すれば一切皆な是れ劣界の所攝なり。若し諸の如來は勝義に由るが故に妙界を緣と爲して但だ妙語を說きたまふ、餘法の差別は應の如く當に知るべし。若し諸の聖者の所有る行趣は應に知るべし皆な現法涅槃の爲めにすと。先に外道あり、彼れ命終し已つて此の間に來生し、因增長するが故に衆緣和合し、善說の法と毘奈耶との中に於て暫らく出家することを得るも、彼れ先世に外道の妄見に迷亂せられたるに由るが故に今時の大無明界を集成し、此を因と爲るに由りて其の涅槃及び大師の所に於て疑惑を生起し、正しき法と及び毘奈耶とを退失し、還つて外道の諸の惡說の法に歸す。彼れ先世に數習する因力に由りて還つて復た是の如き劣語を宣說す、乃至廣說、前の所說の如く一切應に知るべし。

の所治に待して能治を施設し、彼に待するに由るが故に能く此の中に於て正覺の轉轉ず。有量狹小なる境を緣ずる識を以て緣と爲るに由るが故に識無邊處を施設し、少所有を以て緣と爲るに由るが故に無所有處を施設し、一切の有の最勝現前するを以て緣と爲るに由るが故に非想非非想處を施設して有の無上と爲し、薩迦耶〔見〕の所有る相應の諸煩惱斷ずるを以て緣と爲るに由るが故に滅界を施設して滅の無上と爲す。當に知るべし有頂は是れ有の無上なり、滅は諸法に於て皆是れ無上なりと。又有想定を名づけて有行と爲す、七界の中に於て次第して乃し無所有處に至るまでの一切皆な是れ有想定なるが故なり。皆定を行ずるに由つて隨順し獲得す、謂はく明相と光明想とを取り俱に三摩地を修し、隨順して、光明想定を獲得す。是の如く淸淨と虛空と識無邊との想、無所有の想を取るに由るも當に知るべし亦た爾なりと。非想非非想處は無相作意の方便に由りて想の極細に趣入するが故に取りて第一と爲す。諸有る寂靜に勝解を起す時隨順して、第一有定を獲得し、一切の相に於て思惟せざるが故に、無相界に於て正思惟するが故に、薩迦耶滅して無相に由るが故に隨順して滅定滅界を獲得す、是の如き二種は定を行ずるに由りて隨順し獲得せず。又色無色界の所有る貪を永害するに由るが故に、下屈せざるが故に、高擧せざるが故に、解脫し住するが故に、解脫に住するが故に、是の如き諸定は所欲に隨つて力あつて調柔自在にして轉ずることを得、是の如きを名づけて隨つて諸界を得ると爲す。又此の諸界能く隨つて八解脫定を獲得す、當に知るべし初界は能く隨つて第一第二の二解脫定を獲得し、其の第二界は能く隨つて第三の解脫勝靜慮定を獲得し、其の餘の五界は其の次第の如く能く隨つて五解脫定を獲得すと。

第二目　見相を解す

（一）外道の弟子をして三處の中に於て昇進することを得しめんがために法要を說くことを明す　復次に、諸の外道の輩は弟子をして三處の中に於て昇進することを得しめんと欲するが故に略して法要を說

明界に隨ふ所の六處の諸界を緣と爲して無明觸を起し、此の無明觸を以て緣と爲るが故に諸の境界に於て不如理に相好を執取する所有る諸想を起し、此の想を緣と爲て諸の境界に於て希欲を發起し、希欲を緣と爲して彼の法に隨ひ多く隨ふ尋思を起し、彼の法に隨ひ多く隨ふ尋思を以て緣と爲るに由るが故に思慕愁憂して所作の身心の熱惱を發起し、身心の熱惱を以て緣と爲るが故に諸の境界に於て種種なる品類の思求差別す、皆な了知すべし。是の如きは當に知るべし欲求に依るが故に諸界を安立するなりと。

第十項　別嗢拕南第二を以て三七界の相攝等の七門を標釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『三七界の相攝と、見想と希奇と、差別の性と安立とにして、寂靜と愚夫とは後なり。』

第一目　三七界の相攝を解す

界に三種あり、一には色界、二には無色界、三には滅界なり。復た七界あり、一には光明界、二には清淨界、三には空處界、四には識處界、五には無所有處界、六には悲想非非想處界、七には滅界なり。當に知るべし此の中其の色界に由りて光明界及び清淨界を攝し、無色界に由りて四無色を攝し、其の滅界に由りて還つて滅界を攝す。又諸の色貪は見に由り受に由りて顯發する所なるが故に遍く一切の色界地中に於て光明及び清淨界を安立す。又是の如き七界の遍知に於て應に當に了知すべく、得の方便に於て應に當に了知すべく、即ち其の得に於て應に當に了知すべく、得の所爲に於て應に當に了知すべし。是の如き諸界の所有る遍知をば四の因緣に由りて應に當に了知すべし、謂はく相違ある所治と能治と而も相待するが故に、狹小と無量と而も相待するが故に、有及び非有と而も相待するが故に、有上と無上と而も相待するが故なり。黑闇を緣として光明を施設し、不淨を緣として清淨を施設し、色趣を緣として虛空を施設す、是の如きを名づけて相違ありと爲すが故に彼

第三目　似轉を解す

復次に、是の如き諸界は勝解力の集成する所に由る。先の惡勝解は惡界を集成し、先の善勝解は善界を集成し、集成する所に隨つて還つて是の如き相似の有情と法を同じうして轉ず、謂はく相ひ往來し、聚を同じうし住を同じうし見を同じうし意を同じうし勝解相似す。是に由るが故に有情の諸界共に相ひ滋潤し、相似して轉ずと言ふ。

第四目　三求を解す

復次に、梵行求の增上力に由るが故に先づ說に信を起し、次に尸羅に於て受學して轉じ、次に現行の所有る過罪に於て自を觀じ他を觀じて羞恥を生じ、次に善法に於て無間に修習し、發勤精進し、久しき所作及び久しき所說に於て能く忘失すること無く、是の二を依と爲して心をして定を得しめ、心の定に由るが故に如實智を得。是の如きは且らく信の增上力を說けり、漸次に三種の所學を修習す、一には增上戒、二には增上心、三には增上慧なり。是の如き三學は勝れたる資糧道なり。謂はく世の正見と好んで惠捨を行ずると、養ひ易きと滿し易きと、少欲と喜足と及び四攝事となり。其の養ひ易き等の句義の差別は聲聞地に已に其の相を說けるが如し。是の如きを當に知るべし梵行求已に圓滿なることを得たりと名づくと。是の如き梵行求を成就せる者は還つて此の界の諸の有情類と共に相滋潤し相似して轉ず。此の界を離れたる者は還つて此の界を遠離せる有情と共に相滋潤し相似して轉ず。當に知るべし此の中果は因に依り、因は果に依るに非ざるが故なりと。無明界に隨ふ所の六處の諸界を緣と爲るに所依別なるが故に無明觸の種種の品類を起し、其の無明觸の種種の品類を以て緣と爲るが故に無明觸所生の諸受の種種なる品類を起し、其の無明觸所生の諸受の種種の品類を以て緣と爲るが故に無明觸所生の諸受を緣とする貪愛を起し、愛を緣と爲るが故に而も其の取、廣說乃至、大苦蘊の集あり。當に知るべし是れを有求に依るが故に諸界を建立すと名づくと。又無

卷の第九十六

攝事分中契經事緣起食諦界擇攝第三の四

第八項　第二の總嗢拕南半頌を以て三門を列して界擇を明す。

復次に、總の嗢拕南に曰く、

『總義等と光等とにして、受等を最も後と爲す。』

第九項　別嗢拕南第一を以て總義等の四門を標釋す

別の嗢拕南に曰く、

『總義と自類の別と、似て轉ずるとにして後に三求なり。』

第一目　總義を解す

當に知るべし諸界に略して二種ありと、一には住自性界、二には習增長界なり。住自性界とは、謂はく十八界自相續に墮し、各各決定する差別の種子なり。習增長界とは、謂はく則ち諸法の或は是れ其の善、或は是れ不善餘生の中に於て先に已に數習して彼をして現行せしむるが故に今時に於て種子彌盛に依附し相續す。是を因と爲るに由り蹔らく小緣に遇ふも便ち能く現起して定んで轉ず可からず。

第二目　自類の別を解す

復次に、要を以て之を言はゞ界の種種十八得可しと雖も然も一一の界の業趣有情の種種なる品類に差別あるが故に當に知るべし無量なりと。譬へば世間の[一]大惡叉聚の如し、此の聚の中に於て多くの品類あり、種類一なるが故に說いて一なりと爲すと雖も而も無量あり。是の如く其の一一の界の中に於て各無量の品類差別あり、種類一なるが故に各一と說くと雖も而も實には無量なり。

【一】大惡叉聚。三藏の云く惡叉(Akṣa)は果實の名、形無食子に似て非なり、一には染料と爲し二には押して油を取るもの家家蓄く一聚多聚あり。

一日夜に於て乃至盡壽まで所有る尸羅を能く正に受學す、是の如きを總じて惠施し福を作し齋を受け戒を學すと名づく。十業道とは、謂はく二三〔三〕等の差別なり、宣說すれば乃至聞思の慧に由りて彼れと相應する所有る作意に於て正に多く修習せしめんが爲なり。又諸の有情は惡趣に生じ已つて解脫すべきこと難く、善趣は生じ已つて速疾に乖離す、當に知るべし、是れを有暇の圓滿甚だ得難しと爲すと名づくと。又諦を見るが故に差別あること無き正見生起す、過去世に於ては已に生起せりと名づけ、現在世に於ては今生起すと名づけ、未來世に於ては當に生起すべしと名づく、前の所說の如く若しは習ひ若しは修し若しは多修習す、其の義應に知るべし。若し世間の正見は應に隨つて防護すべく若し有學の正見並に其の斷果は應に隨つて觸證すべく、若し無學の正見並に自の離繫果は應に隨つて作證すべし。正見を說くが如く是の如く乃至解脫智も應に知るべし亦た爾なりと。

瑜伽師地論卷第九十五

攝事分中契經事緣起食諦界擇攝第三の三

〔三〕二三等。倫記に二釋あり、(一)二とは作無作の二業、三とは身口意の三業なり、(二)二種の三業の義、身口意の三業と福・非福・不動の三業となり。

諦現觀の所有る資糧の善有漏法を亦た得難しと爲す、謂はく父母に於て恩養を識る等の諸の善業道の有暇の圓滿を亦た得難しと爲す。又世間の初の正見等乃至解脱智を後邊と爲る十種の正法あること亦た得難しと爲す。是の如き諸法は即ち是れ有學、即ち是れ無學なり。當に知るべし此の中善く恩養を知る所有る士夫補特伽羅は如實に一切の父母には皆な應に孝養すべしと了知し、是の如く知り已つて其の父母に於て勤めて孝養を修す、是れを善く父母の恩養を識ると名づく。又已利を樂ふ所有る士夫補特伽羅は他の有德の一切の沙門及び婆羅門に於て如實に是れ福田なりと了知し已つて其の所應の如く勤めて供養を修す、是れを善く所有る沙門若しは婆羅門を知ると名づく。又貪惰無き所有る士夫補特伽羅は諸の妻子及び奴婢等の一切の親屬に於て如實に彼れ既に我れを以て室と爲し歸と爲す、我れ若し樂あれば彼も亦た隨つて樂しみ、我れ若し苦あれば彼れも亦た隨つて苦しむと了知し、是の如く知り已つて時時の間に於て正に飲食衣服を以て給賜し、復た病緣の醫藥を以て攝受し、彼の義利に於て自然に勇勵にして爲に施造し、一切に於て彼の憶念を求むるに非ず、稟となり忠平にして好んで等しく分布し、亦た婬佚して財寶を損費せず、非處に於て毘奈耶を生さず、亦た非處にして憤發を興さず、諸の耆長及び尊重の處に於て正に善く隨つて轉ず、是の如きを名づけて善御の家長、善く能く自他の義利を造作すと爲す。諸の施爲する所皆な正法を以てし、非法を以てせず、現法中にて他の惡行を作すに於て深く過患を見る、謂はく或は殺し、或は縛し、或は罰し、或は退き、或は譏毀せられんに正しく思擇し已つて終に現行せず、是の如きを名づけて此の世の罪に於て深く怖畏を見ると爲す。又惡行を造り已れば其の後世に於て悪趣の苦を感じ、及び所餘の匱乏等の苦を感ずと正觀見し、正しく思擇し已つて終に現行せず、是の如きを名づけて他世の罪に於て深く怖畏を見ると爲す。又時時の間に能く正しく施福の業事を受學し、種種なる差別の福行を造作す、所謂看病し、佛法僧に事へて躬ら執當を爲す、是の如き等の類を作福行と名づく。

是れ預流なり、二には處中、即ち餘の有學なり、三には逆流、道行圓滿なり。其の所欲に隨つて皆な能く造作し、已に聖諦を見たる、補特伽羅は所有る慢所作の苦、慢所成の苦を永斷す。是の因緣に由り諸苦少かに在りて多分は已に斷ず、謂はく諸の有學及び阿羅漢なり。慢所作、所成の衆苦の如く是の如く、諸の愛の身語意業貪瞋癡等所生の衆苦も當に知るべし一切皆な少分ありて多分は已に斷ぜること、譬へば礫石及び大雪山の如しと。是の如き諸慢所作、所成の所有る衆苦を若しは餘若しは斷ずるも當に知るべし亦た爾なりと。大池沼の其の水盈滿せるは、中より二滴三滴を沾し引くに、大池沼に依る水尙ほ甚だ多きが如く、是の如く無色〔界〕愛所生の苦の若しは餘若しは斷も當に知るべし亦た爾なりと。大陂湖の如く、餘は前說の如く、是の如く色界愛所生の苦の若しは餘、若しは斷も當に知るべし亦た爾なりと。又大海の如く、除は前說の如く、是の如く欲界の愛所生の苦の若しは餘、若しは斷も當に知るべし亦た爾なりと。又大雪山若しは諸の金山、若しは蘇迷盧及び大地の喩、又六種礫石の喩、又泥團の喩あり、餘は前說の如し。是の如く身業語業意業、貪瞋癡等所生の衆苦の若しは餘、若しは斷も當に知るべし亦た爾なりと。是の如く多苦已に遠離せるが故に、少苦在るが故に當に知るべし聖諦の如實の觀には大義利ありと。謂はく諸の有學は最も極めて七たび人天に生ずる苦あるも、諸の惡趣に在る苦をば皆な已に越度せり、若し諸の無學は唯だ現法の所依の苦の在るありて餘の一切の苦を皆な已に越度せり。

第十二目　難得を觧す

復次に、若し是の身に住して諦現觀に入るは當に知るべし此の身を最も得難しと爲すと。又聖は明眼にて諦を見、有學は轉た甚だ得難し。又聞思修所成の妙慧を亦た得難しと爲す、此の慧に由るが故に善說の法と毘奈耶との中に於て其の次第の如く觧了し、勝了し及以び求了す。觧了する時に於て能く審に分別し、勝了する時に於て能く勝觧を生じ、決了する時に於て法に於て入證す。又

復次に、或は一類あり、諸の聖諦に於て善巧を得ず、黒黒異熟業を造作し增長し已つて能く那落迦、傍生、鬼趣を感ず。此の業に由るが故に譬へば杖根を擲つが如く那落迦の中に墮し、傍生趣の端に墮し、餓鬼界に墮す。是の如き一類は黒白黒白異熟業を造作し增長し已つて此の雜業に由りて譬へば杖を擲つが如く或は惡趣不清淨の處に墮し、或は善趣の少清淨の處に墮す。是の如き一類は白白異熟業を造作し增長し已つて此の業に由るが故に五趣の生死の諸業に隨逐せらるる處に生在し壽盡き業盡きて、卽ち還つて彼の色無色界より沒し已つて五趣の生死に退墮すること五輻輪の旋轉して住せざるが如し。若し有は他の爲に世間道を說き、乃至能く有頂に上昇すと雖も、當に知るべし此の說は第一義に上昇せしむる敎に非ず、何を以ての故にとならば是の如き上昇は畢竟に非ざるが故なり。若し諸の如來所說の聖諦と相應する言敎は當に知るべし此の敎は是れ第一義に上昇せしむる敎なりと。何を以ての故にとならば是の如き上昇は是れ畢竟なるが故なり。又若し諸の世俗智を得、乃し有頂に至るに由りて聰慧と名づくる者は、第一義に說いて聰慧と名づくるに非ず、前說の如くなるが故なり。若し諦智に由りて聰慧と名づくる者は是れ第一義に名づけて聰慧と爲す、前說の如くなるが故なり。

第十一目　大義を解す

復次に、其の四種の聖諦智の中に於て初の聖諦智は能く聖諦に入り、漸次に現觀するは譬へば本足の如く、第二諦智は譬へば牆壁の如く、第三諦智は下の層級の如く、第四諦智は上の寶臺の如し。又卽ち是の如き四聖諦智は四階隥の如く能く大智慧殿に上昇せしむ。又卽ち是の如き四聖諦智は四桄梯の如く能く解脫寂滅に陞上せしむ。當に知るべし此の中三種の愛あり、譬へば三槍の如し、諸の羂魔羅、執持して生死の大海を撓攪し、彼の生を受くる諸の有情類をして隨つて廻轉せしむ。是の如き三種の魔羅の愛槍も彼の三種の有情をして隨つて廻轉せしむること能はず。一には勁銳、劫と

此の中二緣に由るが故に名づけて諦と爲すことを得。一には法性の故に、眞實の義に由りて說いて名づけて諦と爲す、二には勝解の故に、卽ち此の眞實の義中に於て諦の勝解を起すに由りて說いて名づけて諦と爲す。一切の愚夫は但だ法性に由りて名づけて諦と爲すことを得るも、勝解には非ざるが故なり。若し諸の聖者は倶に二種に由りて名づけて諦と爲すことを得るが故に偏に此を說いて名づけて聖諦と爲す。又修慧に由りて諸諦の中に於て內證の現量の諦智を獲得し、亦た證淨なることを得。是の因緣に由りて諸諦に於て實に疑惑を遠離し、諦智と證淨なると更互に相依り、若し一ある處には必ず第二あるなり。

第九目　過を解す

復次に、若し沙門或は婆羅門あつて、聖諦智に於て而も未だ相應せず、諸の聖諦に於て未だ現觀を成ぜざるは當に知るべし略して四種の過患ありと。何等を四と爲すや。謂はく(一)能く下分の惡趣に往いて生ずる本行の中に於て深く愛樂を起し、彼の相應の業を造作し增長し、此に由りて顚墜して惡趣の坑に生ず。(二)又た欲纒に於て人天の兩趣業多の煩惱に常に燒煮せられて生ずる本行の中に於て深く愛樂を起し、彼の相應の業を造作し增長し、此の因緣に由りて旣に彼に生じ已つて大に熱惱を生じ、常に燒然せらる。(三)又た此の上の色無色纒の所有る相應、前の所說の如き無明昏闇及び諸の瞖瞙より生ずる本行の中に於て廣說乃至、生闇に墮す。(四)又境界を受用する涅槃道を退失するに由るが故に、其の中間に於て三種の世界に生ずるが如く中間に三種の妄見の黑闇に墮在す。一には常見、二には斷見、三には現法涅槃見なり、此の因緣に由り三界に墜墮し、黑闇處に生ず。是の如き自の妄見を攝受するが故に、邪の無明の闇に覆障せらるるが故に、如實に前の如き五支に攝受する所の斷を觀じ、是の因緣に由りて應に知るべし如實に諸諦を顯示すと。

第十目　黑異熟等を解す

已つて當に何れの所にか往くべきと思惟す。或は世間を思ふ、謂はく世間は常なりと、乃至廣說、是の如く或は謂はく世間は有邊なりと、乃至廣說、或は有情を思ふ、謂はく命卽ち身なりと、乃至廣說、或は有情の業果異熟を思ふ、謂はく妄りに此れ作なり此れ受なりと思惟す、乃至廣說、或は復た諸の靜慮者、靜慮の境界を思惟し、或は諸佛、諸佛の境界、如來の滅後の若しは有若しは無を思ふ、乃至廣說、彼れ世俗勝義の善巧に由り、是の一切に於て二の因緣の故に應に思惟すべからず、一には思惟する所緣の境に非ざるが故に、二には其の事に所有無きに由るが故なり。若し思ふ境事に非ざるを思求することあり、或は所有無き事を思求することあらば、是の如き一切は皆な所得無し、唯だ心をして轉た迷亂を增することあるのみ。若し此の中に於て正理の如くならず、强ひて思惟する者は一類の宿因の力に由り、或は厭離を起し、或は厭離と相應する作意を起し、實の境界を緣じて其の中間に於て暫時現行することありと雖も、而も復た彼に於て見て過患なりと爲して不實の想を生ず。是の如く世間等の法を思惟し、能く無義を引く。邪尋思とは、當に知るべし卽ち是れ欲等の尋思なりと。邪戲論とは、復た六種あり、謂はく(1)顚倒戲論(2)唐捐戲論(3)諍競戲論(4)他に於て勝劣を分別する戲論(5)工巧養命を分別する戲論(6)世間の財食に耽染する戲論なり、是の如き一切を總じて放逸と名づく。

(二)　對治を辯ず　此の放逸を斷除せんと欲するが爲の故に如來親しく自ら敎誨する者の爲め、化を受くるに堪へたる補特伽羅にして聞き已つて速に能く諸の放逸を斷ずるが爲め、世尊の弟子是の如き聖諦現觀の四種の障礙を斷ずるが爲に、三の行相に由りて聖諦を任持す。何等を三と爲すや。一には聞慧に由りて其の文を任持し、二には思慧に由りて其の義を任持し、三には修慧に由りて其の證を任持す。此の中、聞慧は其の所聞の如く能く正しく是れ苦聖諦なりと任持す、乃至廣說。又思慧に由りて其の義を任持す、謂はく諸の聖者、其れ是の諦を知るが故に聖諦と名づく。當に知るべし

謂はく若し沙門喬答摩種は是れ一切智ならば何故に問ふことあるに一類には能く記し、一類には記せざるやと。是の如き不信を斷除せんと欲するが爲の故に復た說いて言はく、「我が所覺の法は無量無邊なり、譬へば大地の諸の草木の葉の如し、他の爲に說く者は少くして言ふに足らず、譬へば手中の〔一〕升攝波葉の如し、多分は能く無義利を引くが故に、少分は能く有義利を引くが故なり」と。當に知るべし此の中知らざるが故に而も記別せざるに非ず、但だ能く無義利を引くに由るが故に而も記別せざるなり。

(二)上慢と言ふは、謂はく卽ち彼の諦現觀中に於て增上慢を起す、是の如き上慢を斷除せんと欲するが爲の故に復た說いて言はく、「人遠きに在り、箭を以て箭を射るに筈筈遺す無きを甚だ希有なりと爲すが如し、或は復た一毛を析きて百分と爲し、毛を以て毛を穳すに端端落ちざるは、極細なるを以ての故に是の事復た難し、聖諦に通達すること轉た彼よりも難し、所以は何ん、卽ち其の能取の作意を以て還つて卽ち能取の作意に通達するに由る」と。是の如くにして方に能緣所緣平等平等にして無漏智生ずることありて諦理に通達す。是の故に此の事最も細にして最も難し、箭箭筈を射、毛毛端を穳すも則ち是の如くならず。

(三)待時と言ふは、謂はく所作に於て推して後時を待つなり、是の如く時を待つことを斷滅せんと欲するが爲の故に世尊、「墜つること無き人身は甚だ得難しと爲す」と說きたまひ、復た盲龜を引き以て其の事に況す。

(四)云何んが放逸なりや。謂はく略して言はば、若しは邪思惟、若しは邪尋思、若しは邪戲論、是れを放逸と名づく。當に知るべし若し應に思ふべからざる處に於て强ひて思惟するを邪思惟と名づくと。謂はく或は我れ過去世に於て曾て有りしと爲んや、乃至廣說、未來世に於て內に於て猶豫して我れ是れ誰とかせん、誰れか當に是れ我れなるべき、今此の有情何れより來り、是より沒し

〔一〕升攝波葉は西國の樹名、此方の胡椒樹に似たり、如來は阿難に對して顯智の無盡なるに喩へたまふ。

れ聽聞し、思惟し、籌量し、審諦に觀察す、諸の沙門婆羅門の者は當に知るべし卽ち是れ諸の外道の輩なりと。又卽ち一切の四聖諦智漸次に集成するを諦現觀と名づく、隨つて一を闕くに非ず。此の諦現觀は猶ほし餚饍の如し、諸の聖弟子の無上の壽命は皆な此に依りて活す、欲を受くる者餚饍を食用するが如し。苦等の諦智にして餘の三智を闕くは[二]畎彌葉の如し、當に知るべし餘は[三]婆羅枝葉に似たりと。四聖諦智は漸次に集成して一切圓滿す。又諸の諦智と喜樂と俱に眞義を覺するが故に、能く身心をして極輕安ならしむるが故に諦現觀と名づく。那落迦の中に生ずるに略して二苦あり、一には燒燃苦、二には治罰苦なり。諦智を闕くに由りて斯の二苦を獲、此れ無量に猛利なる大苦を生ず、聖諦智に由りて皆な能く超越す。是の如き諦智は假使ひ其の燒燃と治罰との猛利なる大苦に因りて、現法中に於て一身滅壞すること而も得可き者なるも應に踊躍歡喜を生じて忍受すべく、縱ひ百身を毀つも、尙ほ應に歡喜すべし、況んや乃ち唯だ一のみなるをや。

第八目　障を解す

（一）四障を辨ず　復次に、若し有るが聖諦現觀を修する爲には當に知るべし略して四種の障礙ありと。何等を四と爲すや。一には不信、二には上慢、三には待時、四には放逸なり。（一）不信と言ふは復た三種あり、一には諦現觀に於て信解を生ぜず、二には僧の善行に於て信解を生ぜず、三には佛の菩提に於て信解を生ぜず。初の不信を斷除せんと欲するが爲の故に世尊自ら現量所證の聖諦現觀を引いて、諸の弟子に告げて言はく、「我れ已に四聖諦の理に於て現觀を得たるが故に無上正等菩提を證覺す」と。第二の不信を斷除せんと欲するが爲の故に復た說いて言はく、「我れ昔汝が輩と長世に久しく流轉す、未だ正思惟し眞諦を覺悟せざるに由る、我れ今汝等と正見に由りて通達し、通達するを以つて因と爲し生死流轉を盡す」と。彼の因緣盡くるが故に、今より後有無く、唯だ最後身のみを餘して任持して滅せざらしむ。第三に佛の菩提を信ぜざれば、是の如き相轉ず、

【二】畎彌葉。景、達の云はく、西國に畎彌樹あり、枝葉參差して一一相當らず、或は一、或は二乃至六七葉なり、四諦の相隨つて一を缺き二を缺き三を缺くに喩ふ。
【三】婆羅枝葉は四四相當る四諦智集成圓滿なるに喩ふ。又曰く婆羅枝葉は圓滿共足す。

に於て、復た作す所あり、應に當に遍知すべく、廣說乃至、應に當に修習すべく、此に由りて觀ずるが故に說いて見位と名づく。無學地に於て如實に我れ已に遍知し、我れ已に永斷し、我れ已に作證し、我れ已に修習すと解了するを現觀位と名づく。復た差別あり、謂はく諸の無學の盡・無生智所攝の一切の極解脫智を說いて智位と名づけ、卽ち此の無學の極解脫智を說いて智位と名づけ、卽ち此の無學の極解脫智所引の正見を說いて見位と名づけ、預流果より乃し究竟に至る、當に知るべし、所有る一切の學慧を現觀の位と名づくと。

第七目　業を解す

復次に、應に知るべし諦智に略して六種の作業及び相ありと。謂はく此の諦智は是れ能く衆苦の前行を永滅す、日將に出でんとするに先づ明相を現ずるが如し。正に苦を盡すとは、謂はく初の見諦所斷の衆苦に苦邊を作す者なり、謂はく阿羅漢所斷の衆苦なり。又此の諦智は是れ能く大無明の闇を對治すること日の光明の能く世間の所有る大闇を破るが如し。又一あるが如し、已に諦智を證し、三結を永斷し、此れより無間に失念に由るが故に暫く欲貪瞋恚の爲に染せらる。彼れ爾の時に於て、不放逸に依りて初靜慮に入り、諦智を觸するに由りて不還果を得。是の如く漸次に非想非非想定に入ると雖も而も外凡と其の差別あり、已に不退法を證得するに由るが故なり。是の如く諦智には廣大の用あり、廣大の果あり、此の中、所有る過去の諸行を說いて已生と名づけ、現在の諸行を說いて正生と名づけ、未來の諸行を說いて當生と名づけ、是の如き一切を總じて集法と名づく。卽ち此の一切は無常滅、或は已滅あり、或は向滅あり、或は當滅あるに由つて總じて滅法と名づく。又諦智に於て已に證得せる者は大なる石樓の已に善く雕飾せるは八方の猛風も傾動すること能はざるが如く、一切の異論も移轉すること能はず、所有る悟解は他の緣を假らず、他の面を視ず、彼れ將に何と說かんとするか、我れ當に聽受すべしと。他の口を觀ず、適つて語を出し已らば尋いで我

て除愈することを得るが如く、道諦は病を除き已つて後に生ぜざらしむるが如し。諸有る病者良醫の所に詣り、但だ應に爾所の正法を尋求すべく、諸有る良醫も亦た但だ應に爾所の正法を授くべし、是の故に更に第五の聖諦無し。諸佛如來は大愛の箭を拔く無上の良醫なり、亦た但だ爾所の正法を宣說したまふ。

第五目　相を解す

復次に、聖諦智に背いて現觀を成ぜざる諸有る沙門若しは婆羅門は當に知るべし略して十相の過患ありと。謂はく(一)勝義ある諸の沙門等の意に彼を許して沙門等と爲さず、(二)言にも亦た數へて沙門等と爲さず、(三)諸の後有の生等の衆苦に於て皆な未だ解脫せず、(四)諸の惡趣に於て亦た未だ解脫せず、(五)能く正しき所學の處を棄捨するに堪へ、(六)能く諸の出世間の人に過ぎたる勝法を證するに堪へず、所謂る聖道の道果涅槃なり、(七)善趣に向ふが故に能く學・無學を除ける餘外の福田を尋訪するに堪へ、(八)苦苦を超えて更に不還果に於て堪能する所無く、現法中に於て、(九)悟解を究竟し、(十)一切の有餘依の苦を解脫するに堪能する所無し。此れと相違するは當に知るべし卽ち是れ諦智に背かずして現觀を成就する所有る沙門若しは婆羅門の十相の功德なりと。

第六目　處を解す

復次に、諦智に趣向し、正覺を樂ふ者は應に當に了知すべし四聖諦の增上緣力に依りて所依處を得、彼の方便を得と。應に是の處を知るべし、善說の法と毘奈耶との中に於て淨信に出家するを依處を得と名づくと。若しは四沙門果に攝受する所の聲聞の菩提、若しは諸の獨覺の所有の菩提、若しは諸の如來の無上菩提、是の如き三種は當に知るべし前の所說の如き三周の正轉を得と名づくと。其の次第に隨つて智・見・現觀を方便を得と名づく。應に知るべし諦現觀に入る時に於て如實に是れ苦聖諦なり乃至廣說、是れ道聖諦なりと了知するを說いて智位と名づくと。此より已後、諸諦中

其の無學の眞の聖慧眼なり。(三) 所得を得とは、謂はく無上正等菩提を得るなり。(四) 他の相續を樹て自證に於て信解を生ぜしむとは、謂はく長老阿若憍陳〔如〕の如し、世尊の所より正法を聞き已つて最初に四聖諦法を悟解し、又問に答へて言はく、我れ已に法を解せりと、此より已後前の所說の如く行相を究竟す。五に皆な阿羅漢果を證得し、解脫處に生じ、最後に他をして他の所證に於て信解を生ぜしむとは、謂はく長老阿若憍陳〔如〕の如し、世間の心を起し、我れ已に法を解し、如來知り已つて世間の心を起し、阿若憍陳〔如〕已に我が法を解すと、地神知り已つて聲を擧げて傳告し、刹那、瞚息、須臾を經て其の聲展轉して乃し梵世に至る。當に知るべし、世尊所解の法を轉じて阿若憍陳〔如〕の身中に置き、此れ復た隨つて轉じて餘の身中に置き、彼れ復た隨つて轉じて餘の身中に置くと。是の展轉し隨轉する義を以ての故に說いて各づけて轉と爲し、正見等の法の所成の性なるが故に說いて法輪と名づけ、如來應供は是れ梵の增語もて彼れ轉ずる所なるが故に亦た梵輪と名づく。

(二) 四種の瑜伽を明す　復次に、四聖諦に於て未だ現觀に入らざるもの、能く現觀に入るに當に知るべし略して四種の瑜伽ありと、謂はく未だ得ざりし所の法を證得せんが爲に(一)淨信增上し、(二)厚欲を發生し、(三)厚欲增上し、(四)精進熾然なり、熾然なる精進に善方便あり。淨信と言ふは、謂はく正しき信解なり。言ふ所の欲とは、謂はく所得を欲するなり。精進は前の如く略して五種あり、(1)勢あり(2)勤あり(3)勇あり(4)堅猛にして、(5)其の軛を捨てざるなり。善方便とは、謂はく不放逸を修習するが爲の故なり。忘失する相無きを說いて名づけて念と爲し、諸の放逸の所有る過患に於て了別する智相を說いて正知と爲し、此の二所攝を不放逸と名づく、諸の染法に於て心を防守するが故に、常に能く諸の善法を修習するが故なり。

(三) 諦相を明す　復次に、苦諦は諸の疾病の如く、集諦は病を起す因の如く、滅諦は病生じ已つ

るが故に說いて瞖瞙と爲す。三人あるが如し、第一は盲瞽、第二は閇目、第三は瞖瞙微かに其の眼を覆ふ。此の中第一は全く所見無く、第二は少分所見あるに似たり。第三は見ると雖も眼不淨なるが故に眞色を見ず。是の如き三愛は其の次第に隨ふ、冥闇と昏昧と及び瞖瞙とも當に知るべし亦た爾なりと。

第四目　得を解す

（一）五相に由るが故に證得することを明す　復次に、五種の相に由りて法輪を轉ずる者を當に知るべし名づけて善轉法輪と爲すと。一には世尊菩薩たりし時、所得の所緣の境界を得んが爲に、二には所得の方便を得んが爲に、三には自の應に得べき所を證得し、四には得已つて他の相續を樹て、自證に於て、深く信解を生ぜしめ、五には他をして他の所證に於て深く信解を生ぜしむ。當に知るべし此の中（一）所緣の境とは、謂はく四聖諦なり、此の四聖諦の安立する體相は前の如く應に知るべし、若しは略若しは廣は聲聞地の如し。（二）方便を得とは、謂はく卽ち此の四聖諦の中に於て三周に正に十二相智を轉ず。最初の轉とは、謂はく昔し菩薩現觀に入る時に如實に是れ苦聖諦なり、廣說乃至、是れ道聖諦なりと了知し、中に於ける所有る現量の聖智は能く見道所斷の煩惱を斷ず、爾の時を說いて聖慧眼を生ずと名づく。卽ち此れは去來今世に依りて差別あるに由るが故に其の次第の如く智、明、覺と名づく。第二の轉とは、謂はく是の有學は其の妙慧を以て如實に我れ當に後に於て猶ほ所作あるべく應に當に未知の苦諦をば遍知すべく、應に當に未斷の集諦を永斷すべく、應に當に未證の滅諦を作證すべく、應に當に未修の道諦を修すべしと通達す。是の如く亦た四種の行相あり、前の如く應に知るべし。第三の轉とは、謂はく是の無學は已に盡智無生智を得たるが故に言く、所應作を我れ皆な已に作せりと。是の如く亦た四種の行相あり、前の如く應に知るべし。此の差別をいはば、謂はく前の二轉の四種の行相は是れ其の有學の眞の聖慧眼なり、最後の一轉は是れ

んで有らんと。猛利に思求する四種の相の愛を、應に知るべし、說いて上品の有愛と名づくと。此の五種の愛の自性の差別は所依の內處の別あるに由るが故に十八種の愛行の差別を說く、其の外處に於ても當に知るべし亦た爾なりと。此の差別をいはば、謂はく彼の內の六處の中に於て我を計し慢を起すが如く是の如く、色に於ても計して、我所と爲して慢を起す、謂はく此の色に於て我れ自在に轉ずと。是の如く乃至諸法の中に於て計して我所と爲して慢を起す、謂はく此の法に於て我れ自在に轉ずと。餘は所應に隨つて前の如く應に知るべし。是の如きの十八幷に前の愛行を合して說かば總じて三十六種の愛行の差別あり。

（四）云何なるを名づけて時分の差別と爲すや。謂はく卽ち是の如き三十六行に各過去、未來、現在の三世の差別あり。是の如きを名づけて四の因緣に由りて差別あるが故に愛行に合して一百八種ありと爲す。又此の中に於て差別の相無く、凡そ諸の所有る染汚し希求するを皆た名づけて愛と爲す。又卽ち此の愛は集諦の攝なるが故に說いて名づけて因と爲す。津潤する性なるが故に、生死の流に順つて漂轉するが故に名づけて流潤と爲す。諸の境界に於て、執著する性なるが故に名づけて著境と爲す。能く生じ已つて五取蘊に依ること癰病等の如くにして所有る衆苦の與めに因緣と爲るが故に說いて癰根と名づく。制伏し難きが故に說いて流溢と名づく。微細に現行して魔に縛せらるゝが故に說いて纖繳と名づく。上、有頂に至り高く標出するが故に說いて條幹と名づく。飽くこと無からしむるが故に說いて枯渴と名づく。又卽ち是の如き所說の相の愛は衆生を纏ふが故に說いて名づけて礙と爲し、隨眠に由るが故に說いて名づけて覆と爲す。卽ち是の如き纒及び隨眠に由りて上品を成ずるが故に說いて上聳と名づけ、其の中品及び軟品を成ずるが故に說いて發起と名づく。欲界の愛の若きは所知の境に於て迷惑せしむるが故に說いて冥闇と爲し、色界の愛の若きは所知の境に於て迷惑せしむるが故に說いて昏昧と爲し、無色〔界〕の愛の若きは所知の境に於て迷惑せしむ

(二)云何なるを名づけて所依の差別と爲すや。謂はく愛は五種の我慢に依止す。何等を名づけて五種の我慢と爲すや。謂く(1)我見に於て未だ永斷せざるが故に是の如き我慢現行することあるを得、其の六〔根〕處に於て我を計して慢を起す。(2)乃至未だ衰老の爲に損せられず、諸行相似相續して轉ず、是の思惟を作さく、是の我昔の如しと。(3)彼れ若し復た衰老の爲に損せられ、或は一時に於て好色を成就し、或は一時に於て惡色を成就し、或は一時に於て大力、安樂、辯を成就し、或は一時に於て乃至辯無し。彼れ若し好色・大力・安樂・辯を成就する時は是の思惟を作さく、我れ今美妙なりと。(4)若し此れに違へば是の思惟を作さく、我れ美妙なるに非ずと。(5)若し衰老の爲に損敗せらるゝ時は是の思惟を作さく、我れ今變異すと。

(三)云何なるを名づけて自性の差別と爲すや。謂はく此の五種の我慢を依と爲して有愛及び無有愛を發起す。又彼の有愛は軟中上品差別して轉じ、其の無有に於ては審かに思擇するに由りて方に能く愛を起す、意樂に由りて任運にして住するに非ず、是の故に中に於て三品の差別の建立あること無し。當に知るべし此の中に(1)軟の有愛とは、謂はく當來に於て我が當有を願ふ。卽ち六處に於て我が當有を願ふと。卽ち是の如き類にして我が當有を願ひ、同類の生有に於て希求するが故なり、是の如き類に異りて我が當有を願ひ、異類の生有に於て希求するが故なり。若し先の自體是れ可愛ならば彼れと相應することを願ふが故に善業を造り是の思惟を作す、我が當有是の如き種類にして今の所有の如くならんことを願ふと。若し先の自體不可愛ならば彼れと離隔を願ふが故に善業を造り是の思惟を作す、願くは我が當有是の如き種類にして今の所有に異らんことをと。(2)中の有愛とは、謂はく無有に於て希欲を生ぜず、彼れを治せんが爲の故に我れ有ることを得んと願ひ、卽ち六處に於て我れ有ることを得んと願ふなり、前の所說の如し。卽ち是の如き類は我れ有ることを得んと願ひ、是の如き類に異りて我れ有ることを得んと願ふなり。是の如き一切は應に知るべし皆な中品の有愛と名づくと。(3)上の有愛とは、謂はく卽ち是の如き行相差別に是の念言を作す、願くは我れ定

功徳を觀ず、彼れ爾の時に於て二因緣に由りて多く所作あり、一には其の妙慧に由りて大師の敎に於て諸漏を盡さんが爲に能く淨く第四靜慮を修治するが故に、二には薩迦耶に於て心增上にして捨するが故なり。此に齊りて名づけて始修業地究竟成滿すと爲す。是より已後修習する所に於て喜足を生ぜず、已作辨地に趣入せんと欲するが爲に循身念を修し、造色の身は草木泥の如しと觀じ、及び彼れより生ずる所の餘の非色の法に、如實慧を以て緣起に通達し、能く隨つて如實諦智に趣入し、旣に入ることを得已つて上の修道に依りて去來今の諸根の境界に於て能く厭患を起し、乃至解脫し、能く如實に我れ已に解脫すと知る、是の如きを名づけて已作辨地と爲す。循身念を修して生ずる所の善法は、謂はく色身は草木泥の如しと觀じ、想是の如くして無色の諸法を觀察し、眞實なる妙慧もて緣起に通達し、能く隨つて四聖諦智に趣入し、修道の中に於て能く厭患と離欲と解脫と解脫知見とを起す。是に齊りて名づけて大師の敎に於て其の妙慧を以て所應作の事を皆な已に作し訖ると爲す。所以は何んとならば、一切の自義皆な已に究竟し、此より已後更に所作無し、作し已れるに於て復た分別すべきに非ず。若し作し已つて餘時に退失して當に更に作すあることあらば此の作は作なりと雖も畢竟作に非ず、諸の異生の世間道を以て解脫を得るが如し。此の中先の始修業地の若きは有漏の善法なり、後に有る所の已作辨地の若き無漏の善法なり。是の如き一切は其の所應に隨つて當に知るべし皆な四聖諦の攝に入ると。

第三目　集諦を解す

復次に、四の因緣に由りて應に集諦所攝の百八の愛行を正了知すべし。一には內外の差別に由るが故に、二には所依の差別に由るが故に、三には自性の差別に由るが故に、四には時分の差別に由るが故なり。(一)云何なるを名づけて內外の差別と爲すや。謂はく內外の六處を依と爲すに由りて諸の愛行を起す。

內の大種に於て不淨想若しは無常想、無常苦想、苦無我想を修す。生起する所の受等の諸法に於て大種の身に依りて無常想を修し、貪瞋癡を離る。是の如き觀品の無量の善法は始修業地にて正に循身念を修習するに由るが故に皆な生起することを得。

(三)云何なるを止と名づけ、云何んが止品の善法を生起するや。謂はく循身念を修習するに由るが故に、觀を以て依と爲して如理に止を修す。又言はく、止とは、謂はく其の內に於て正しく安住する心なり。止品の善法とは、謂はく是の如き正思擇力を得て攀緣するなり。鋸を沙門の教授、怨家所に於て正に忍辱を修するに喩ふ。又卽ち彼を緣じて無倒に慈を修し、既に忍慈に攝受せらるるに由るが故に戒淸淨なることを得、戒の淨なるを觀ずるが故に是の思惟を作す、我れ今已に大師の聖敎に於て微かに所作ありと。是の因緣に由りて憂悔する所無く憂悔無きが故に深く歡喜を生じ、廣說乃至、三摩地を得、彼れ爾の時に於て靜定心に由り、乃至第四靜慮を獲得す。此の三摩地の行拘執するが故に未だ雙運して無功用に轉ずること能はず、未だ善淸淨ならず。其をして善淸淨ならしめんと欲するが爲の故に前說の如き、四支所攝の不放逸行を修し發勤精進して怯弱あること無し乃至廣說、彼れ後時に於て第四靜慮淸淨鮮白なり。若しは復た其の靜定の愛味の爲に其の心を漂轉せられ、定に於て正捨にして住すること能はず、滅涅槃に於て寂靜を觀ぜず、彼れ乃ち佛、或は法或は僧に深く厭恥を生ずるに依りて是の念言を作さく、我れ如來大師の佛寶、法と毘奈耶との善說の法寶、無倒に善行を修習する僧寶に依るに所得無しと爲すと。所得あるに非ざるは是れ其の惡得にして善得と爲すに非ず、薩迦耶に於て愛藏して住し、滅涅槃に於て寂靜を觀ぜざるも、彼れ內心善く調柔なるに由るが故に纔かに厭恥を生じ、便ち能く沙門の義を引く平等妙捨に安住す。滅涅槃に於て能く寂靜を觀じ、是の如き止品の善法を生起す。所謂る忍慈、尸羅淸淨、無悔、歡喜にして廣說乃至、三摩地の四支の所攝の不放逸行を得、沙門の義を引く平等善捨にして、滅涅槃の寂靜の

【一】鋸の喩に倫記に兩釋あり、(一)行者鋸を用ふれ其身を鋸ること猶ほ能く思うて怨を報ぜざるが如し(二)鋸には木を斷る用あつて齒を挫かざる無し刀劍に同じからず、忍を修する時亦復た是の如し怨を以て忍辱の齒を挫くべからざるなり。

境なり。其の能知の智は亦た所知の境なり。是の故は諸智と俱行する善法は四聖諦の中に攝在せざること無し。彼れ復た循身念を修習するが故に觀品と止品との所有る善法と始修業地と已作辦地と總じて生起することを得。(一)云何なるを名づけて循身念を修すと爲すや。謂はく若しは始修業地に住し、如理に若しは內、若しは外の諸の大種の色を攀緣して境と爲して正念し、或は復た他の愛と非愛との增語有對の觸現行する時に由り、如理に觸受想行と及び諸識とを攀緣して境と爲して正念し、或は若しは已作辦地に如理に諸の所造の色を攀緣して境と爲して正念し、或は復た如理に作意及び彼より生ずる所の受想行識を攀緣して境と爲して正念す、是の如き一切を略攝して名づけて循身念を修すと爲す、當に知るべし此の念或は色身を緣じ、或は名身を緣ずと。

(二)云何んが觀と名づけ、云何んが觀品の善法を生起するや。謂はく內外の諸の大種の色及び所餘の蘊に於て正しく決擇する慧を說いて名づけて觀と爲す。若し有は初め無倒に聚を分析する想を修習するより、外の大種に於て劫盡くるを觀ずるに由りて無常想を修し、內の大種の合成する所の身に於て唯だ食の漸漸に不淨なるを觀ずるに由りて不淨想を修し、愛より生長する所の性及び後際に於て、老死する法性を觀ずるに由りて無常想と及び苦想とを修す。若し此の身に於て一切の愚夫は如實に體是れ無常苦なりと了知すること能はざるが故に、或は執して我と爲し、或は我所を執するなり。卽ち此の身に於て多聞を具足せる諸の聖弟子は如實に知るが故に所執あること無し、是れ卽ち能く苦無我想を修するなり。此の無我想は其の身に於て唯だ界のみありとする想に由る、此の想あるが故に若しは復た他愛と非愛との增語有對の諸觸現行するに由る。非愛と言ふは卽ち是れ手足杖塊等彼に觸るれば則ち此れ及び此れを緣と爲す所有る受等の無色の諸行に於て正に無常を觀じ愛を離れ恚を離れ、唯だ界のみ有りと觀じ、心此の身を緣じて正しく安が住する故なり、是の如きを亦たは愚癡を遠離すと名づく。是の如く所有る聚を分析する想は外の大種に於て無常想を修し、

當に聖諦に於て現觀に入る時、見所斷の所有る諸漏に於て皆な解脫を得。此の事を得已つて上の修道所斷の諸漏に於て、餘無く永に斷滅せしめんが爲の故に精勤して四種の因緣を修習す。何等を四と爲すや。一には善く身を護るが故に、二には善く根を守るが故に、三には善く念に住するが故に、四には先の所得の如き出世間道を世間の出沒に達せる妙慧を以て多修習するが故なり。善く身を護るとは、謂はく正しく安住して惡象を遠避す、乃至廣說、聲聞地の如し、遠避するに由るが故に諸漏盡くすに於て障礙あること無し。善く根を守るとは、謂はく正しく安住して諸の可愛の現前の境界の非理なる淨相に於て、能く正しく遠離して如理に彼の不淨相を思惟するなり。善く念に住すとは、謂はく四處に住するなり。一には受用する衣服等を思擇する處に安住す。二には能く正に、靜に處するに現行する惡尋思を除遣する處に安住す。三には能く正に、發勤精進して、所生の疲倦、疎惡不正の淋漏等の苦、他の麁惡の言所生の諸の苦、界不平等所生の苦を忍受する處に安住す。四には所修の道に於て不放逸に依り雜住すること無き處に安住す。正に是の如き四處に安住するを善く念に住すと名づく。彼れ是の如く善く身を護るに由るが故に、善く根を守るが故に、善く念に住するが故に、先に得たる所の如き出世間の道を善く修習するが故に修所斷の所有る諸漏に於て皆な能く解脫し、及び隨つて最極究竟を證得す。

第二目　疑を解す

(一)外執を遮す　復次に、若し說いて此の四聖諦は唯だ是れ境界なり、或は其の我あり、或は有情ありて此の聖諦を緣じて諸の善法を修すと言ふことあらば應に彼に告げて言ふべし、是の說を作すこと勿れと。所以は何んとならば、諸有る無量の世出世間の善法の生起するは一切皆な四聖諦の攝に歸すればなり。

(二)正義を知ることを勸む　當に知るべし諸法に略して二種あり、一には能知の智、二には所知の

故に士用果を得るを等生者と名づけ、或は自見に由り、或は他見に由りて隨つて言說を起し、是の如く或は自の聞・覺・知に由り、或は他の聞・覺・知に由りて隨つて言說を起すを能說者と名づけ、或は妻子及び奴婢等の所有る家屬に於て其の所應に隨つて敎敕を施設し、其の處に住せしむ、是の如きを亦復た能說者と名づけ、或は復た當來の業の果已に生ぜるを能受者と名づけ、或は現法に於て諸の士夫の果の已に現に等生するを等受者と名づけ、或は過去の彼彼の生中に於て種種の善・不善業を造作し、今現法に於て種種の彼の果異熟を領受するを領受者と名づけ、或は乃至壽量滅盡して便ち夭喪し、能く此の蘊を捨て能く餘蘊を續くるあり、若し此れに異る者には既に我あること無し、云何んぞ上の所說の如き諸の所作の事を成ずることを得んと、是れを第六の正理の如くならざる作意思惟の所攝の見處と名づく。是の如き諸見は且らく說かば皆な薩迦耶見を以て其の自性と爲し、能く其の餘を生ず。薩迦耶見を以て根本と爲す所有る見趣なるが故に見處と名づけ、能く能取の眞實微妙なる慧を障礙するに由るが故に見稠林と名づけ、善法を損するが故に見曠野と名づけ、他を勞役するが故に見厭背と名づけ、求めんと欲して求むることあり、行歷する所なるが故に見行歷と名づけ、他の論を詰責し、已が論を免脫せんとして動搖するが故に見動搖と名づけ、能く善く後有の苦を結構するが故に名づけて見結と爲す、是の如き諸の邪行を習行する者は現法中に於て未だ現前せざる漏をして起り現前せしめ、既に現前し已れば下品に依りて其の中品を起し、中品に依りて其の上品を起し、此れを因と爲すに由りて當來の老病死等の一切の苦法を生起す。是の如く當に知るべし如理及び不如理なるに於て實に知らざるに由るが故に苦諦集諦の雜染を造作すと。

(2)此れと相違して正法を聽聞し、正勝辯を起し、其の如理に於ては不如理なる顚倒妄想無く、其の如理に於て如實に是れ其れ如理なりと了知す、廣說乃至、應に思惟すべきに於ては顚倒の法無く能く正思惟す。此の因緣に由りて三世の行幷に其の所取及以び能取に於て如實に我我所無しと隨觀し、

(2)如理を釋す。

頌等乃至廣說解了すること能はず、而も思惟せず、是の如きを亦た非理作意と名づく。此の作意に由るが故に寂靜を欲せず、調伏の爲めにせず、涅槃の爲めにせざるが故に非理と名づく。又復た不正法を聽聞するが故に、三言事の增上緣力に依りて過去未來現在の計我の品類を顯示す。即ち是の如き增上力に由るが故に三世の境に於て不如理なる作意思惟を起す、謂はく過去に於て分別して我は或は有なり、或は無なりと計す。未來現在も當に知るべし亦た爾なりと。彼れ既に是の如く正理の如くならず作意思惟し、或は所取の事を緣じ、或は能取の事を緣ず、此れ不如理作意思惟なり。或は諸行に即して我有りと分別し、或は諸行に離れて我有りと分別す。彼れ計する所に於て決定を得る時若しは所取の事を緣じて分別して我と爲し、或は常見を成じ、此の見に由るが故に是の思惟を作す、我は有なり、其の我は現法中に於て是れ實なり是れ常なりと。或は斷見を成じ、此の見に由るが故に是の思惟を作す、我は無なり、其の我は現法中に於いて是れ實なり是れ常なりと。若しは能思取の事を緣じて有我の見を計して分別して我と爲し、是の思惟を作す、彼れ今我を以て我を觀察すと、或は謂はく我が我は先有、今無なりと。是の思惟を作さく、我れ今我を以て無我を觀察すと。或は復た即ち能取の事を緣じて無我の見を計して現法中に於て其の無我を以て分別して我と爲し、是の思惟を作す、我れ今其の無我を以て昔曾の有我を隨觀すと。是の如く且らく所取能取の差別の五相をば正理の如くならずして作意思惟する五種の見處を說く、謂はく即ち三世の所有る諸行に有我を分別す。又復た正理の如くならざる比度作意に由りて諸行を離れて有我を分別し、彼れ謂はく、是の如き所計の實我は或は自ら能く後有を感ずる業を作るを能作者と名づけ、或は他の作さしむるを等作者と名づけ、或は自ら能く現法の士用を起すを能起者と名づけ、或は他の起さしむるを等起者と名づけ、或は自己後有の業を作るが故に、或は他のもの後有の業を作らしむるが故に果異熟を感ずるを能生者と名づけ、或は自ら能く現の士用を起すが故に、或は他のもの現の士用を等起するが

卷の第九十五

攝事分中契經緣起食諦界擇攝第三の三

第七項　別嗢拕南第六を以て如理等の十二門を標釋す

復次に、嗢拕南曰く、

『(一)如理と(二)攝と(三)集諦と、(四)得と(五)相と(六)處と(七)業と(八)障と、(九)過と(十)黑の異熟等と、(十一)大義とにして、後は(十二)難得なり。』

第一目　如理等を解す

(一)略釋　若し諦智の增上に於ける如理及び不如理を如實に知らざれば漏を盡くすこと能はず、此れと相違して如實に知るが故に能く諸漏を盡くす。當に知るべし此の中、不正法を聞き、寂靜の爲めにせず、調伏の爲めにせず、涅槃の爲めにせずして、起す所の諸智を不如理と名づけ、正法を聽聞し、上と相違するは當に知るべし如理なりと。

(二)廣釋　[1]又此の中に於いて惡說の法に住する補特伽羅は此の正法の佛、佛弟子の眞善なる丈夫に於て瞻仰することを樂はず。別解脫尸羅律儀に於て根門を密護して正知にして住す、是の如き等の類の賢聖法の中に於いて自ら調伏せず、受學し轉ぜず、諸の聖諦に於て聞思修もて照了し通達すること無し。又卽ち彼の諸の惡說の法と毘奈耶との中に於て不正法を聞き、邪勝解を起し、不如理に於て如理〔なりとする〕顚倒妄想を生起し、不如理に於て如實に是れ不如理なりと知らず。又正法の如理を聽聞するに於て如實に是れ其如理なりと知らず、知らざるに由るが故に諸の所有る惡說、惡解に於て縛ありて脫無しと應に思惟すべからず、顚倒の法中において解了すること能はず、而も故に思惟し、諸の所有る善說、善解の〔解〕脫あり縛無く、應に思惟すべき無顚倒法、所謂契經及び應

(1)不如理を釋す。

種なる煩惱の相貌を變生し顯現せしむ。當に知るべし是の如き補特伽羅は喜貪未だ斷ぜず、譬へば其の地の能く種種の彩畫の爲めに所依處と作るが如しと。已に喜貪を斷ぜる補特伽羅は魔其の所に詣るも前に廣說せるが如し。當に知るべし是の如き補特伽羅は喜貪を已に斷ず、猶ほし虛空の種種なる煩惱の影畫の爲めに所依處と作るに非ざるが若し當に知るべし是れを諸食の中に於て憙貪未だ斷ぜざるものゝ其の次第の如き所有る過患と名づくと。當に知るべし是れを諸食中に於て憙貪已に斷ぜざるものゝ其の次第の如き所有る功德と名づくと。

瑜伽師地論卷第九十四

識を以て是の因緣に由りて身命を顧みず、是の如く如理に四種の食に於て審正に觀察し、審觀を〔所〕依と爲して能く現法に於て諸食を斷じ、食永斷するが故に當來後有の苦際に至ることを得るなり。

第五目　雜染を解す

復次に、若し如實に此の四食を觀ぜざれば便ち喜貪の爲めに染汚せらる。若し是の二の爲めに染汚せらるゝ者は當に知るべし二種の過患を希求すと、一には當來、二には現法なり。四食の中に於て有漏の意會思食の因緣にて專注し希望すると倶行する喜染を喜と名づけ、樂受に隨順する觸食の因緣にて能く喜樂に隨順する諸食に於て多く染著を生ずるを貪と名づく。此の二の煩惱は現法中に於て能く識を染〔汚〕し、其をして四種の識住に安止せしめ、當來後有の種子を增長す。既に增長し已て後有の生等の衆苦を生起す。當に知るべし是れを憙貪二種の煩惱所作の當來の過患と名づくと。彼れ是の如く四食中に於て憙貪二種の煩惱に安住するに由りて、便ち現法に於て諸の塵染あり、塵染に由るが故に食若し變壞すれば現法中に於て便ち悲歎愁憂を生じ、萎頓懷慼して住す、當に知るべし是れを憙貪二種の煩惱所作の現法の過患と名づくと。

第六目　頌の等の字を解す

復次に、諸有る此の四種の識中に於ける憙貪未だ斷ぜず、彼の六〔根〕處に有識の身を攝すること猶ほし臺觀の六處の窻牖の如し。能く境を緣ずる。煩惱の日光の與めに入る依處と作る、是の光は此に於て或は上地に住し、或は下地に住す。既に住することを得已つて前の所說の如く四識住に於て能く識を染し當來後有の衆苦を生起す。若し能く是の如き憙貪二種の煩惱を斷ずることあらば彼れと相違して境を緣ずる煩惱すら尙ほ起ることを得ず、況んや此に依りて入りて當に住することを得べけんや。又復た若し補特伽羅にして憙貪未だ斷ぜざるあらば、便ち魔羅其の所に來詣するが爲めに、其の種種の猶ほし彩色せるが如き可愛の境界を以て是の如き補特伽羅を彩畫して其をして種

復次に、三食を因と爲して能く三種の內苦をして生起せしむ、一には界不平等にして生ずる所の病苦、二には欲し希求する苦、三には求めて允らざる苦なり。初めの苦は段食を因と爲し、第二の苦は觸食を因と爲し、第三の苦は意會思食を因と爲すなり。段食の因緣は內の病苦を生ず、是の故に苾芻は當に段食は子の肉の如しとの想を觀ずべく、應に貪著すべからず。樂受に隨順する觸食の因緣は能く內の欲し希求する苦を生ず、是の故に苾芻は當に彼の六種の觸處に順ずるは皮無き牛の如しと觀ずべし、應に是の觀を作すべし、若し我れ六種の觸處に依り種種なる欲し求希する貪を發起し、便ち諸色に依止して住することを爲す、色に依止するが故に我れをして種種なる諸惡不善の尋思を發起せしむること皮無き牛の觸處、諸蟲の唼食する所となり多く衆苦を生じ、安隱に住せさるが如しと、是の如く觀じ已つて初の觸處に於て深く過患を見、無染にして住す。色に依るが如く是の如く、聲香味觸法に依るも當に知るべし亦た爾なりと。初の觸處に於て深く過患を見、無染にして住するが如く、是の如く乃至第六の觸處に於ても當に知るべし亦た爾なりと。有漏の意會思食の因緣は能く內に求めて允らざる苦を生ず、是の故に苾芻は當に有漏の意會思食は一分の火の如しと觀じ、是の如く求むる所允らざれば能く身心の大熱惱を引くが故なりと觀察すべし。彼れ是の如く正觀察し已つて終に衣食等の事を希望して他家に往詣せず、是の故に求むる所允らざるより生ずる所の苦の爲めに觸せられず、其の心坦然として安樂にして住す。是の因緣に由りて應に是の如き三食を正觀察すべし、所謂段と觸と意會思との食なり。卽ち是の如き三食の因緣に由りて所說の如き識に依る內苦を生ず、是の故に苾芻は當に識食は三百の鉾の鑽刺する所なるが如しと觀ずべし。所以は何んとならば、段食の因緣は能く非一種種衆多なる品類の病苦をして識に依りて起らしめ、樂受に隨順する觸食の因緣は能く倍增欲し希求する苦をして識りて起らしめ、有漏の意會思食の因緣は能く種種の求めて允らざる苦をして識に依りて起らしむ、是の如く行者は識食中に於て諸食は

ならば、若し、識あり生じ已つて安住す、體是れ眞實の補特伽羅にして能食者と名くと說かば、應に識を立てゝ其の食性と爲すべからず。未だ曾て補特伽羅有つて、還つて自ら能く食するを見ず、補特伽羅の一相續の中に定んで二識同時に安住すること無し。是の故に識を立てゝ、體是れ眞實の補特伽羅にして能食者と爲るは道想に應ぜず。是の故く理に應ぜざることあるに由るが故に若し是の問を作さく、誰れか識食を食するやと。當に知るべし此の問を非理なる問と爲すと。若し是の問を作さく、誰れか是れ能く識食を食する因緣なりやと。當に知るべし此の問を如理なる問と爲すと。能く緣起の理に悟入せしむるが故に復た二有あり、一に生有、二には業有なり、若し當來の後有生起する爲めに、今の現法中の諸の業煩惱所隨逐の識を因と爲して能く當來の生有を引く、卽ち彼れ曾て前行の業性ありしを說いて業有と名づく。現法中に於て此の有あるが故に能く當來の生有所攝の後有をして生起せしめ、命終時に於て前際の六處纔かに無常にして滅すれば後際の六處尋いで復た續生す、卽ち此の六處の識を先時に於ては能引緣と爲し、復た今時に於ては結生緣と爲す。是の如く識母胎に入るが故に名色あることを得、名色を緣として便ち六處あり。無明界所隨の六處を以て緣と爲るに由るが故に相似の觸あり、漸次に乃至取と爲るが故に後際に業をして轉じて其の有を成ぜしむ。是の如き諸法は先に未だ曾て有らず、一切新に別別の緣より起る、當に知るべし此の中都べて觸者乃至有者無しと。能く所觸あり乃至有あるは唯だ諸法あるのみ、別して所食に名づけ、別して能食に名づく。是の故に因果に諸行に墮在し、相續し流轉して斷絕あること無し。其の先際の業有に由りて後際の生有に往趣し、復た後際の業有に由りて還つて先際の生有に趣く。是の如く緣起輪廻して絕えず、此の世間より彼の世間に往き、彼の世間より此の世間に還る。是の故に唯だ法のみ能く法を引く義なるを當に知るべし此の中に說いて食の義と爲すと。

第四目　極多の諸過患を解す

住することを得と雖も然も本と愛を縁と爲るに藉るが故にあり。又愛あるが故に現法中に於て諸の食身に依り三種の門に由りて業惑を滋長し、能く業惑の常に隨逐する所の有取の識を辦じ、現法中に於て後有を攝受す。是の故に一切の有を求むる有情は四食の所攝益に由ると雖も、然も復た愛を縁と爲るに藉るが故にあり。又即ち此の愛は現法中に於て無明觸所生の諸受を縁と爲るに由るが故に起り、此の無明觸所生の諸受は無明觸を縁と爲るに由るが故に起り、此の無明觸は先に串習せる諸の無明界所隨の六處を縁と爲るに由るが故に起る。此の六處の後更に餘因無く、現法中に於て唯だ此の六處展轉して相依る、有色の諸根は識に依止し、識は亦た識の執受する所の有色の諸根に依止す。此の因縁に由り六處已後更に所說無し。或は復たある時は正法を聽聞するを外の支力と爲し、如理に作意し、正勤修習するを內の支力と爲し、是の因縁に由りて正見生起し、正見生ずるが故に能く無明を斷じ、能く明を生じ、彼の現法中の諸の無明界所隨の六處を皆な除滅することを得。明界所隨の六處生ずることを得るを名づけて轉依と爲す。彼の品の麁重皆な止息するが故に六處既に滅し、漸次に乃至愛亦た隨つて滅し、愛滅するに由るが故に諸食亦た滅し、能く後有を取る諸法滅するが故に當に知るべし後有も亦た復た隨つて滅すと。是の故に應に知るべし明に處する者は後有を求めずと。

第三目　食の義を觀察することを解す

復次に、少法として生じ已つて安住することあること無し、亦た我の能食所食あること無し。此の因縁に因つて彼れ何をか食と名づくるや。然も唯だ未生の諸法の與めに生縁と作る理に約し、唯だ法の法を引くのみを說いて食の義と爲す。但だ法に由りて假に其の識の上に於て假想に補特伽羅を施設し、此の四食に望めて說いて食者と爲す。世間の言說に隨順せんと欲するが爲に、世俗諦に約して是の如き補特伽羅あり、能く四食を食すと說くも、勝義〔諦〕に約するに非ず。所以は何んと

能く一切の可愛の境に於て專注し希望するが與めに食と爲り、專注希望に由るが故に便ち能く諸根大種を長養す。能く諸根大種を執受する識に由るが故に彼の諸根大種並に壽並に煖と識とをして身を離れざらしむるを因と爲して住す、是の故に識を說いて彼の住因と名づく。彼れ住するに由るが故に氣力、喜樂、專注、希望は彼に依つて轉ず。是の如き四食能く已生の有情をして安住せしむ。是の因緣又段〔食〕に由るが故に而も氣力あり、氣力あるが故に諸根大種皆な增長することを得。是の因緣に由りて諸有る身命を顧戀する愚夫は此の義の爲の故に追求する所有り、追求する時に於て種種新なる善惡の業を造作し亦た增長せしめ、又能く種種の煩惱を增長す。段を說くが如く觸と意會思とも其の所應に隨つて當に知るべし亦た爾なりと。此の三門に由りて能く後有の業煩惱の識を集む、此れ現法に於て業煩惱ありて隨逐する所なるが故に其の有取を成じ、便ち能く當來の後有を攝受す。是の如く四食は後有を求め後有を愛樂せしめ、其の後有に於て未だ能く斷ぜざる者は能く後有を攝し、後有を隨攝す。又諸の段食は欲界の天に在りては之を名づけて細〔食〕と爲す、或は中有と母腹と卵殼とに處する〔ものの段食〕も當に知るべし亦た爾なりと。欲界の餘位の段食を麁〔食〕と名づく。觸〔食〕と意會思〔食〕と及以び識食との無色界に在るは當に知るべし細〔食〕と名づけ、餘處〔に在る〕を麁〔食〕と名づくと。有色を〔所〕依と爲るは分別し易きが故に、無色を〔所〕依と爲るは分別し難きが故なり。又此の諸食は當に知るべし異れる麁細の義門ありと、謂はく若し能く已に生ぜる有情をして安住することを得せしむる者を說いて名づけて麁〔食〕と爲し、有を求むる諸の有情を攝益する者は當に知るべし是れ細〔食〕なりと。是の如く應に四食を安立することを知るべし。

第二目　因緣を解す

復た次に、上の所說の如き諸根の大種は集諦の攝に由り愛を先として生じ、彼をして增長することを得しめんと欲するが爲めの故に四食を追求す。此の道理に由りて已生の有情は四食に由りて安

分とを應に當に斷じ已つて樂速通に依るべしと了知し、正勤修集して此より無間に諸漏を永盡し、現法中に於て無造究竟の涅槃を獲得し、身壞して已後無餘依般涅槃界を證す。是の如き七種の清淨を〔所〕依と爲して漸次に修集し、乃至諸漏永盡の無造涅槃を獲得す。當に知るべし此の中是の如き七種の清淨に於て一切具足し、前次に修集するに由りて方に乃ち無造涅槃を證得す、隨つて一を闕くに非ずと。是の故に應に、是の如き一切を求め、世尊の所に於て梵行を熟修し、隨つて一を求むるに非ざるべし。又佛世尊は此の因緣に由りて、亦た具さに是の如き一切を施設したまへり、無造涅槃を證得せしめんが爲めにして、隨つて一をも捨つるに非ず。又此の中に於て一一の說に依る、唯だ此のみに由るに非ず、亦た此を離るるに非ずして能く無造究竟の涅槃を獲るなり。是の如く應に此の中の緣性緣起の甚深なるを知るべし。

第六項　別嗢拕南第五を以て安立等の六門を標釋す

復次に嗢拕南に曰く、

『安立と因緣と、食の義を觀察すると、極て多き諸の過患とにして雜染等を後と爲す。』

第一目　安立を解す

四種の法ありて現法の中に於て最も能く諸根大種を長養す。云何んが四と爲すや。一には氣力、二には喜樂、三には可愛事に於て專注し希望す、四には氣力、喜樂、專注、希望の依止する所の諸根大種並に壽並に煖安住して壞せず、是の如き四法を其の次第に隨つて當に知るべし。別に四法を用て食と爲す、一には段〔食〕、二には順樂受觸〔食〕、三には有漏意會思〔食〕、四には能く諸根大種を執する識〔食〕なり。當に知るべし此の中段〔食〕は現法の氣力の與めに食と爲り、氣力に由るが故に便ち能く諸根大種を長養す。能く樂受に順ずる諸の有漏の觸は能く喜樂の與めに食と爲り、喜樂に由るが故に便ち能く諸根大種を長養す。若し意地に在りて能く境に會する思を意會思と名づく。

還品に依りて因の無漏の所有る諸法あり、又因苦の因緣の諸漏又彼の諸謂の所依止の性にして無明觸所生の諸愛あり、又因法住立する因緣あり、卽ち現法の中に煩惱斷ずる者には唯だ依緣のみあり。

(三)七清淨に依つて漸次に修集することを解す　又復た七種の清淨に於て漸次に修集するに依りて無造究竟の涅槃を得と爲す、應に知るべし是の如き緣生緣起に隨順する甚深の言敎を宣說するなりと。云何なるを名づけて七種清淨と爲すや。一には戒清淨、二には心清淨、三には見清淨、四には度疑清淨、五には道非道智見清淨、六には行智見清淨、七には行斷智見清淨なり。云何なるを名づけて是の如き清淨を漸次に修集すと爲すや。(1)謂はく苾芻あり、具足尸羅に安住し、別解脫律儀を守護す、廣說應に知るべし聲聞地の如しと。(2)彼れ是の如き具尸羅に由るが故に便ち能く悔ゆること無く、廣說乃至心に正定を得、漸次に乃至具足して第四靜慮に安住す。(3)彼れ既に是の如き定心を獲得し、漸次に乃至質直調柔にして安住し動ぜず、漏盡智通を證得せんが爲めに心定んで、四聖諦に趣向して現觀に證入し、見所斷の一切の煩惱を斷じて無漏の有學の正見を獲得す。(4)正見を得るが故に、能く一切の苦集滅道及び佛法僧に於て疑惑を永斷し、畢竟斷ずるに由りて猶豫を超度するが故に度疑と名づく。(5)又正見の前行の道に於て如實に了知して是れを正道と爲す、此に由りて能く見所斷と後の修所斷との惑を斷じ、又邪見の前行の非道に於て如實に了知する、是れを邪道と爲す。(6)道と非道とに於て善巧(智)を得已つて非道を遠離して正道に遊び、又道に隨つて四種の行迹に於て如實に了知す。何等をか四と爲すや。一には苦遲通、二には苦速通、三には樂遲通、四には樂速通なり、是の如き行迹を廣く辯ずること應に知るべし聲聞地の如しと。(7)此の行迹に於て如實に最初の行迹は一切應に斷ずべし、超越の義の故なり、煩惱の離繫の義に由るが故には非ずと了知し、如實に第二第三の苦速樂遲の二種の行迹の一分は應に斷ずべしと了知し、是の如く如實に初の全と及び二の一

(1)戒清淨を修集するを明す。
(2)心清淨を修集するを明す。
(3)見清淨を修集するを明す。
(4)度清淨を修集するを明す。
(5)道非道智見清淨を修業することを明す。
(6)行智見清淨を明す。
(7)行斷智見清淨を明す。

第五目　來往を解す

復次に、當に知るべし略して二種の雜染ありと、一には業愛雜染、二には妄見雜染なり。此の二の雜染は二品に依る、一には在家品、二には出家品なり。應に知るべし此の中業愛の雜染より造作する所なるが故に思の所作と名づけ、妄見の雜染の邪計起るが故に計の所執と名づくと。此の中異生の若しは在家品若しは出家品は二の雜染を具へ、諸纒に由るが故に、及び隨眠の故に、彼の所緣に因り四識住に於て心をして諸の雜染を生ぜしめ已つて後有を招集し、循環往來して解脫を得ず。有學は迹を見て妄見雜染を已に斷ぜるが故に唯だ我慢の依處たる習氣のみありて尙ほ餘有るが故に新業を造らず、後有の業愛の雜染を欣ばず、諸纒の能く雜染を爲すあること無きも、唯だ隨眠依附し相續して能く雜染を爲すのみあり、彼の所緣に因り諸の識住に於て其の心を雜染し、後有を招集す。若し諸の無學は二種の雜染の纒及び隨眠を皆な永斷するが故に卽ち現法中諸の識住に於ける其の心の雜染及與び當來所招の後有は一切皆な無し。

第六目　佛の順逆を解す

(一)正しく佛の順逆を解す　復次に、過去の諸佛は菩薩たりし時如理に緣起法を思惟し已つて無上正等菩提を證覺し、今の薄伽梵も亦た緣起に於て正思惟し已つて無上正等菩提を證覺す。過去佛の如きは菩提を得已つて卽ち緣起の作意攀緣順逆の道理に於て方便し隨修して、現法樂住し已つて安樂に住したまへり、今の薄伽梵も亦た復た是の如し。彼れ無量なりと雖も、世間の七劫と相似するを說くが如くなるが故に唯だ七〔佛〕と說く、是の如き無上正等菩提すら尙ほ猶ほ如實に緣起を知るが故に未證を能く證し、證し已つて現法樂住を獲得す、況んや餘の下劣の所有る菩提をや。又如實に緣起に攝受する五支を等覺せんが爲めに斷の方便を爲す、前の如く應に知るべし。

(二)總じて緣起支を解す　又此の緣起の總略の義をいはば、謂はく轉品に依りて因の諸苦あり、又

第三目　受智を解す

復次に、略して二種の明觸より生ずる法に由りて其の緣生の一切行の中に於て四諦の理に依り現觀に趣入す。云何んが二と爲すや。一には所緣を領納するを性と爲るに由りて明觸より受を生ず、二には所緣を揀擇するを性と爲るに由りて明觸より慧を生ず。當に知るべし此の中十一支に於て四諦を安立し、此の一一の支諦に依りて[二]四十四事を建立す、卽ち明觸所生の諸受に依りて是の如き四十四種の受事の差別を宣說し。卽ち明觸所生の諸慧に依りて是の如き四十四種の智事の差別を宣說す。此の中後際に作す所の老死〔支〕は唯だ果にして因には非ず、其の前際に於て發す所の無明〔支〕は唯だ因のみにして果には非ず、其の餘の有支は亦たは因、亦たは果なり。三時の遍智に差別あるが故に、前の所說の如き〔三時の〕決定の遍智に差別あるが故に、法住智所攝の能取の智の無常性に差別あるに由るが故に當に知るべし[三]七十七種の智事の差別を建立すと。是の如く諸諦の一切の行相を歷觀し、此より無間に諦現觀に入り、漸次に修習し、乃至阿羅漢果を獲得することを顯示す。

第四目　流轉を解す

復次に、三種の相に由りて緣生の行に於て應に正に流轉の漸次を了知すべし。何等をか三と爲すや。一には因增益するが故に、二には果生起するが故に、三には果增集するが故なり。是の如き一切を略攝して一と爲し、總じて諸法と名づく、若しは增し、若しは生じ、若しは集る。因果滅するに依りて其の所應の如く當に知るべし說いて若しは減じ、若しは滅し、若しは沒すと名づくと。是の如き意趣の差別の道理は法性に違はず。復た別義あり、初中後際時差別するが故に、欲色無色界差別するが故に其の次第の如く若しは增し、若しは減じ、若しは生じ、若しは滅し、若しは集り、若しは沒す、應に正了知すべし。

【二】四十四事。十一支に各四諦を立つるが故に四十四諦を得。

【三】七十七種の智。十一に各各に四諦智と徧智と決定の徧智と法住智との七智を立つるが故に七十七智を成ず。

『滅あると若しは沙門、婆羅門の受智と、流轉と來往とにして、佛の順逆を後と爲す。』

第一目　有滅を解す

諸の學にして迹を見、滅ある寂靜なる涅槃に於て他に隨はず、內の聖慧眼を信じて自ら能く觀見すと雖も、然も猶ほ未だ身を以て觸證すること能はず、譬へば人あり熱竭に逼まられ、馳せて深井に詣り、肉眼を以て井中の諸の塵穢を離れたる淸冷なる美水を現見し並に水器に給すと雖も、而も此の水に於て身未だ觸證せざるが如し。是の如く有學〔の者〕聖慧眼〔もて〕求むる所の後の煩惱斷じ、最極寂靜を現見すと雖も、而も此の斷に於て身未だ觸證せざるなり。

第二目　沙門婆羅門を解す

復次に、諸の沙門若しは婆羅門あり、貪瞋癡に於て餘無く斷滅するもの眞の沙門の義、婆羅門の義を全く未だ證得せず、而も諸の世間のもの沙門の想、婆羅門の想を起し、彼も亦た自ら是れ眞の沙門なり眞の婆羅門なりと稱す。世間のもの彼れに於て是の想を起すと雖も然も彼は但だ是れ世俗の沙門及び婆羅門にして第一義には非ず、若し第一義の諸有る沙門及び婆羅門は皆な彼を沙門及び婆羅門なりと爲るを忍許せず。所以は何んとならば彼れ如實に諸の雜染の法と雜染の法の因とを了知すること能はず、亦た如實に彼の滅、彼の滅に趣く行を了知すること能はざるに由ればなり。雜染法とは、謂はく老死支所攝の衆苦と及び生支となり。雜染法の因に復た二種あり、一には愛所作、二には業所作なり。愛所作とは、謂はく緣起の逆次の道理に由る有と、取と、愛支となり、若しは無明觸所生の諸受〔支〕、若しは無明觸及び無明界に隨ふ所の六處〔支〕なり。業所作とは、謂はく緣起の逆次の道理に由る名色と、識と、行と〔支〕及び卽ち彼れに於て如實に知らざるなり、法住智の如く尙ほ未だ了すること能はず、況んや當に彼の諦現觀の時の如く能く遍く了知すべけんや。或は修道の如く未だ遍く了知せず、無學地の如く未だ超越すること能はざるなり。

正に流轉は是の因緣に由ると觀じて善決定を得て疑惑あること無く、內に眞實を證す。若し是の處に於て多聞の諸の聖弟子ありと說かば當に知るべし此の中には是れ諸の異生なりと。若し是の處に於て唯だ其の諸の聖弟子あるのみなりと說かば、當に知るべし此の中には已見諦〔理〕と說くと。

第十目　苦惱を解す

復次に、正法の中に於て略して三種の補特伽羅ありて猶ほ苦惱ありて安隱に住せず。云何んが三と爲すや。謂はく一あるが如し、善說の法と毘奈耶との中に於て涅槃を求めんが爲めに涅槃に趣向し、家法を棄捨し、非家に趣き、旣に出家し已つて唯だ能く所有る禁戒を受持し、便ち喜足して住し、時時に於て轉ぜず、進んで增上心學、增上慧學を修習し、彼れ先時の居家の所有る受用せし境界を捨つるも、未だ無上なる安隱を隨得し、涅槃道を證すること能はず、中間に處在して猶ほ苦惱ありて安隱に住せず、是れを第一の補特伽羅と名づく。復た一あるが如し、唯だ所受の禁戒に於て喜足し安住せざるのみならず。然も其れ未だ異生地を超ゆること能はざるに由るが故に。一切法に於て他に緣藉するが故に常に他の面を視、常に他の口を觀る、何ぞ當に如實に所知を知り所見を見るべけんや、恒に他の所に於て正法の敎授敎誡を聞くことを求むと雖も然も其の自心に疑あり、惑あり、猶ほ苦惱ありて安隱に住せず、是れを第二の補特伽羅と名づく。復た一あるが如し、是れ學にして迹を見、放逸にして住し、現法の中に於て究竟の涅槃を證得するに堪へず、能く第二の有體生起の因を攝受するあり、第二住あれば猶ほ苦惱ありて安隱に住せず、是れを第三の補特伽羅と名づく。是の如き三種の補特伽羅に復た三異の補特伽羅あり、諸の快樂ありて善く安隱に住す、謂はく阿羅漢は一向に樂住するなり。

第五項　別嗢拕南第四を以て有滅等の六門を標釋す

復次に、嗢拕南に曰はく、

に値ひたてまつることを得る圓滿なり。增上意樂の圓滿とは、謂はく一あるが如し般涅槃に於て極淨に修治する增上なる意樂にして方に乃ち出家し、債主及び諸の怖畏の爲めに逼迫せらるゝに非ず、乃至廣說。當に知るべし是の如くにして出家する者を善出家と名づけ、聖處に生ずと。根圓滿とは、謂はく一あるが如し、眼耳缺くること無く、半擇迦に非ず、支分を缺かず、是の如く根に缺くること無きことを得るに由るが故に善說の法と毘奈耶との中に於て出家するに堪任し、正法を說く時に能く聽受するに堪能なり。智圓滿とは、謂はく一あるが如し、性となり愚戇ならず、下品の愚癡の障あること無きが故なり。亦た瘖瘂ならず、中品の愚癡の障あること無きが故なり。手を言に代ふるに非ず、上品の愚癡の障あること無きが故なり。三種の智の愚癡の障を離るゝが故に力能ありて善說惡說の所有る法義を解するなり。卽ち聖處に於て佛出世あるに値ひたてまつることを得る圓滿とは、謂はく今の時薄伽梵釋迦牟尼世に出現したまふ、是れを如來應正等覺と爲す、乃至廣說。若し廣く解釋することは應に知るべし前の攝異門分の如く、正法を宣說し、寂靜に趣く等も廣說前の如しと。當に知るべし此の中聖處に生ずるが故に名づけて善來、善得出家と爲し、根缺くること無きが故に、愚戇ならざるが故に、瘖瘂ならざるが故に、亦た手を以て其の言に代へざるが故に、善具足せる人身を獲得すと名づく。

第九目　猶豫を解す

復次に、其れ緣生の諸行の流轉に於て觀行を修する者に略して二種の猶豫を作す法あり。云何が名づけて二と爲すや。一には無因論を說くことを承習し、二には惡因論を說くことを承習す。此の中無因論を承習する者は一切種皆な所因無しと觀じ、便ち疑惑を生ず、云何んが諸法因無くして轉ずやと。其の惡因論を承習することある者も亦た疑惑を生ず、云何んが彼の不相似の因と不稱理の因とに由りて諸法の轉ずることありやと。若し多聞の諸の聖弟子ありて二種の非眞實論を遠離し、

證して退失する時無く能く自義と、他義と、倶義とを辦ず。云何なるを名づけて能く自義を辦ずと爲すや。謂はく出家し已つて其の二相に由りて說いて果ありと名づく。一には煩惱の離繫を證得する究竟涅槃なり。謂はく離繫果なり。二には能く世間の勝樂を起すなり。謂はく善趣に往く樂の異熟果なり。云何なるを名づけて能く他義を辦ずと爲すや。謂はく廣く他の爲めに法要を宣說し、其をして能く世間の善趣に往き、涅槃を究竟せしむ。云何なるを名づけて能く倶義を辦ずと爲すや。謂はく自ら淨福田を修治し、性となり淨信の邊より得る所の如法なる衣服等の事を受用するに堪任し、此の受用に由りて已が身を攝養し、其をして能く一切の善品に順ぜしめ、又能く他をして已に作せる所に於て大果報を得しむ。謂はく當來に於て善趣に往くが故に大勝利を得。謂はく當に財寶僕從皆な圓滿することを獲得すべきが故に大榮盛を得しむ。謂はく當に壽命、色力、樂、辯才等自ら圓滿することを獲得すべきが故に大修廣を得。謂はく卽ち上に得る所の三處に於て長時に隨逐して無間斷なるが故に。

(二)四種の相に由つて善說法と名づくることを明す 四種の相に由りて應に知るべし世尊所說の聖敎を善說法と名づくと、一には能く寂靜に趣き、能く有餘依涅槃界を證得せしむるが故に、二には能く般涅槃し能く無餘依涅槃界を證得せしむるが故に、三には能く菩提に趣き能く聲聞〔の果〕、獨覺〔の果〕、菩薩〕の無上正等三菩提を證得せしむるが故に、四には、善逝の分別最も極めて究竟して現量に顯はす所、無上なる大師の開示したまふ所なるが故なり。

第八目　生處を解す

復次に、四の圓滿を具へて能く聖處に生ず、若し隨つて一有つて此の圓滿を成じ、善說の法と毘奈耶との中に於て正に修行する時を名づけて善來善出家者と曰ふ。云何なるを名づけて四種圓滿と爲すや。一には增上意樂圓滿、二には根圓滿、三には智圓滿、四には卽ち聖處に於て佛の出世ある

て十力四無所畏、是の如き等を成就したまふを大師圓備と名づく。(二)云何なるを名づけて聖教圓備と爲すや。謂はく自ら稱言して、「我れ今已に大仙の尊位に處し、能く梵輪を轉ず」と、大衆中に於て正に師子吼し、一切の順逆の緣起寂滅涅槃、是の如き等を開示したまふを聖教圓備と名づく。(三)云何なるを名づけて聖教易入圓備と爲すや。謂はく此の聖教の所有る文句は其の性明顯にして其の義甚深なり、此の聖教は能く正に諸の甚深の義を開發するに由るが故に文句を說くこと其の性明顯にして其の義甚深なり、是の如きを名づけて聖教易入圓備と爲す。(四)云何なるを名づけて證得自義無上圓備と爲すや。謂はく沙門或は婆羅門の、如來所に於て能く正に通慧を開覺して勝と爲すもの無し、是の故に他の自義の所應の義、所應覺の義を證得するに於て唯だ如來所說の法教のみありて妙と爲し上と爲す、若し此れを過ぎては言辭の路絕す、是の如きを名づけて證得自義無上圓備と爲す。(五)云何なるを名づけて一切如理無間宣說圓備と爲すや。謂はく諸の如來所說の法教は普く一切の人天の爲に〔なる教〕開示し無倒に一切法を開示し、師捲を作さず遺〔漏〕無く開示したまふ、是の如きを名づけて一切如理無間宣說圓備と爲す。(六)云何なるを名づけて有聖言將圓備と爲すや。謂はく能く一切の癡惑を斷じ、及び能く一切の善根・一切の善法の所依たる大信を生起し、現量の安足の所を得可き大師現前することあり、是の如きを名づけて有聖言將圓備と爲す。諸の聽慧の者は正に此の六圓備を觀じ、現前に能く勤精進して住することを發起するに足り、三學中に於て增上戒に依りて瑜伽を修習し、增上心に依りて不放逸を修し。增上慧に依りて大師の教に於て瑜伽行を修す。若し懈怠心に安住する者あらば當に知るべし二種の過患を希求すと。一には現法の當來に能く衆苦を生ずる一切の煩惱雜染を希求し憂苦して安隱に住せず、二には希求して所有る未證已證の一切の善法を退失し、善趣涅槃の大義〔利〕を能く引き能く住するを退失す。此れと相違して勤精進する者は當に知るべし二種の勝利を希求すと。此の精進は諸の善法に於て未だ證せさるを能く

るべし卽ち是れ三學の中に於て如實に正に一切の白品を行ず、廣說乃至當來の疾病、衰老及以び夭殁を超越すと。

第六目　法住智及び涅槃智を解す

復次に、若し茲芻あり、淨尸羅を具し、別解脫清淨律儀に住し、増上心學の増上力の故に初靜慮の近分所攝の勝三摩地を得て以て依止と爲し、増上慧學の増上力の故に法住智及び涅槃智を得、此の二智を用つて以て依止と爲し、先の四種の圓滿に由りて遠離受學し轉ずる時、心をして一切の煩惱を解脫し、阿羅漢を得、慧解脫を成ぜしむ。此の中云何んが法住智と名づくるや。謂はく一あるが如し、緣性緣起の無倒の敎を聽聞し隨順し已つて緣生の行に於て因果の分位に異生地に住し、便ち能く如實に聞思修所成の作意を以て如理に思惟し、能く妙慧を以て苦は眞に是れ苦なり、集は眞に是れ集なり、滅は眞に是れ滅なり、道は眞に是れ道なりと悟入し信解す、諸の是の如き等の其れの如き因果安立の法の中の所有の妙智を法住智と名づく。

又復た云何なるを涅槃智と名づくるや。謂はく彼れ法爾に若し苦集滅道に於て其の妙慧を以て是れ眞に苦集滅道諦に悟入信解する時、便ち苦集に於ては厭逆の想に住し、滅涅槃に於ては寂靜の想を起す、所謂る究竟、寂靜、微妙にして一切の[二五]生死の所依を棄捨すと、乃至廣說。是の如く彼の法住智に依止し、及び苦若しは苦の因緣に於ては厭逆の想に住し、便ち涅槃に於ては能く妙慧を以て悟入し信解し、寂靜等と爲すに因りて、是の如き妙智を涅槃智と名づく。

[二六]復次に、善說の法と毘奈耶との中に於て諸の聰慧なる者は正に六種の圓備を觀じ、現前に能く勤めて精進して住することを發起するに足れり。云何なるを名づけて六種の圓備と爲すや。一には大師圓備、二には理敎圓備、三には聖敎易入圓備、四には證得自義無上圓備、五には一切如理無間宣說圓備、六には有聖言將圓備なり。（一）云何なるを名づけて大師圓備と爲すや。謂はく諸の如來にし

に語り教授し教誡するに堪へず、彼れ既に自然に法として自ら制する無しと。又賢聖の爲に棄捨せられ、其の內心に於て恒に寂靜ならず、外の身語意猥雜にして住し、勃惡貪婪にして强口憍傲す。是の如き事に於て罪過を見ず、多く毀犯する所をば如法に悔いず、數習するに由るが故に漸次に一切の尸羅を毀犯す。當に知るべし是れを所有る增上戒學に依止して諸の邪行を起すと名づくと。此れと相違するは當に知るべし卽ち是れ所有る增上戒學に依止して起す所の正行なりと。

云何んが名づけて所有る增上心學に依止して諸の邪行を起すと爲すや。謂はく行ずる時に於て正理の如くならず、境界の諸相隨好を執取し是の因緣に由りて妄念を發起し、卽ち其の中に於て過患を觀ず、煩惱を生じ已つて堅く執して捨てず、是の因緣に由りて正知に住せず、或は住する時に於て遠離處に居りて第二あること無し、卽ち妄念を以て正知にして住せざるを所依止と爲して心外に馳散す。是の如きを名づけて所有る增上心學に依止して諸の邪行を起すと爲す。此れと相違するは當に知るべし卽ち是れ所有る增上心學に依止して起す所の正行なりと。

云何んが名づけて所有る增上慧學に依止して諸の邪行を起すと爲すや。謂はく一あるが如し、近き聖賢を離れ、近き惡友に依りて不正法を聞き勝解を因と爲して正理の如く諸法を思擇せず、諸の惡欲及び諸の惡見に於て憙樂して受行し、或は廣大なる所覺所得の微妙の法の中に於て而も自ら輕蔑す。是の如きを名づけて所有る增上慧學に依止して諸の邪行を起すと爲す。此れと相違するは當に知るべし卽ち是れ所有る增上慧學に依止して起す所の正行なりと。

此の中異生の補特伽羅は是の如き三種の學中に依止して起す所の邪行にて能く異生地を超ゆるに堪ふることあること無し。無倒に正性離生に趣入すれば三結を永斷するも、三種の結を永斷せざるに由るが故に能く修道に依止して阿羅漢を得、現法の中に於て餘無く貪瞋癡等の一切の煩惱を永斷し、當來の疾病、衰老及以び夭歿を超越するに堪ふることあること無し。此れと相違するは當に知

の故なり。又此の中に於て自ら憍慢無し、是れを第三の斷の總記別と名づく、謂はく、餘の增上慢あること無きが故なり。是の如く總じて說くに六の記別あり。

第五目　不愛樂を解す

復次に、三種の法あり、是れ諸の世間の愛する所、樂ふ所なり、內に依りて說く、一には勢力、二には妙色、三には壽命なり。復た是の如き三法を違害して能く所治の愛樂すべからざる三種の別法を引くあり、一には疾病、二には衰老、三には夭歿なり。若し三學に於て邪行を起す時は便ち疾病、衰老、夭歿を超越するに堪任せず、若し三學に於て正行を起す時は便ち能く是の如き三事を超越す。云何んが三學なりや。一には增上戒學、二には增上心學、三には增上慧學なり。云何んが名づけて所有る增上戒學に依止して諸の邪行を起すと爲すや。謂はく一あるが如し、初學中に於て毀犯する所あり、或は自を觀じ、或は他を觀じて羞恥あること無く、既に自ら無羞恥に安住し已つて便ち一切の惡不善法に於て自ら防護せず、既に彼の法に於て自ら護らず、已に佛法僧に於て恭敬を起さず、諸の所學の教授敎誡に於て都べて敬忌すること無し。是の因緣に由りて若し此の事に於て他のもの正に揀擧すれば便ち彼の言を忍受すること能はず、自ら亦た彼に於て默して與に語らず。處非處に於て能く正に揀擧する補特伽羅をば憎背し遠避し、邪行を行じ已が法に同じき者に於ては親近し交遊し、好んで共に安止す。惡友と共に安止するに由るが故に諸の賢聖に於てすら尙ほ憎背を生ず、況んや當に彼れに詣りて躬ら敬覲を申ぶべけんや。設ひ復た彼に往いて僞に正法を說くとも聖を憎背するが故に而も聞かんと欲せず、設し蹔く耳を屬するも心に敬順すること無く、唯だ違諍を懷くのみにして知解の爲にせず、而も聽聞することあるとも處非處に正行を分別する諸の智論の中に於て安住することを樂はず、彼れ內に違諍の心を懷くに由るが故に聽聞することありと雖も而も信受せず、亦た依行せず。又諸の賢聖は默して與に語らず、是の思惟を作す、是の如き行者は與

て辭辯竭むこと無し。復た是の如き差別の種類を以て如實に宣說す、彼は是れ有爲の思の造作する所にして動轉し、羸頓して病の如く癰の如しと、乃至廣說。

第四目　解を解す

復次に、當に知るべし具に諸の阿羅漢を辨するに、略して六種の記別の所辨あり、一には有異門の記別、二には無異門の記別、三には智の記別、四には斷の記別、五には總の記別、六には別の記別なり。有異門の記別とは、謂はく一あるが如し、或は他のもの請問し、或は復た自然に他をして佛の聖教に於て多く恭敬を起さしめんと欲するが爲の故に是の如く記す、我れ今に於ては一の疑惑無しと。無異門の記別とは、謂はく是の記を作す、我が生已に盡きぬと、乃至廣說。智記別とは、謂はく有るが問うて言はく、云何にして知るが故に、云何にして見るが故なりやと、彼の生已に盡くれば便ち記別して言はく生緣盡くるが故に彼の生已に盡くと、是の如き相を以て自己の善解脫智所攝の盡智を記別するを智の記別と名づく。又卽ち此に於ける別の記とは、謂はく卽ち彼の因緣の有を記別し、又復た彼の生の因緣の因緣の諸取を記別し、又復た此の諸取の相を記別し、如實に知るが故に、如實に見るが故に取をしてあること無からしむ。總の記別とは、謂はく卽ち此の一切の所說に於て、所有る諸受は皆な苦なりと了知し、既に了知し已つて彼の生をして盡くさしむ、是の如く記する者を總の記別と名づく。斷の記別とは、謂はく卽ち彼の內の辨說に由るが故に一切の貪愛の因緣皆な盡くと、是の如く記する者を斷の記別と名づく。此の斷の記別は卽ち前說の別記別と名づくるが如し。此の總の記別は當に知るべし略して三種の行相に由ると。謂はく薄伽梵の所說の諸結は我れには皆なあること無しと、是れを最初の斷の總記別と名づく、謂はく諸有る結皆な永斷するが故なり。又我れ是の如き正念に安住す、我れ此の正念に安住するに由るが故に一切の貪憂惡不善法をば能く畢竟じて心に漏せさらしむと、是れを第二の斷の總記別と名づく、謂はく恒住

乃至無明を邊際と爲すが故に此を過ぎて更に緣生の因無く、唯だ此に由ると觀じ自義を觀ずること究竟す。

第三目　實を解す

復次に、略して三種ありて現法中に於て眞實に寂滅し、乃至壽量未だ永く止息せずして恒に相續して所知の境事に轉ず。彼の有學の正に修行する時に於ては學性を施設し、彼の無學に於ては是の思惟を作す、我れ一切をば盡して復た當に盡すべきにあらずと、盡・無生智の思擇する所なるが故に思擇法と名づく。云何んが三と爲すや。一には六處、二には六處、觸に緣たり、三には觸、受に緣たるなり。當に知るべし此の中所有る多聞の諸の聖弟子は領受する所に隨つて即ち彼の受に於て如實に遍知すと。又即ち彼に於て厭離し、滅せんと欲して正行を勤修す。又能く如實に彼の受は觸に引生せられ、觸は復た彼の六處に由りて引生せられ、即ち彼の觸の引因たる六處を了知し、厭離し滅せんと欲して正行を勤修す。又彼の受と觸と及び六處とに於ける一切の實事を略攝して一と爲し、一切は無常に由つて滅すれば滅法と名づくと了知し、已に現法の中に於て此の一切の三種の實事無常滅法なるに於て前の如く修行し遠離し滅せんと欲す、此の正行に由りて學常委なりと名づく。又此の正行を修行するに由るが故に造作する所無く究竟して解脫す、是の故に說いて擇法常委なりと名づく。曾て未だ得ざる所、曾て未だ證せざる所を證得せんと欲するが爲に無間殷重なる方便を修行するを學常委なりと名づく。所有る現法樂住に於て退失あること無きが爲に無間の所作、殷重の所作、是れに由りて說いて擇法常委なり等と名づく。一切の事法を說く增上の名句文身を名づけて[一]法界と爲す。諸有る無礙解を獲得するが故に名句文身は欲に隨つて自在なり、是の故に說いて善く法界に達すと名づく。法界に於て善く通達するに由るが故に即ち是の如き眞實なる想義に於て更に餘名を以て其の所樂に隨つて差別して宣說す、乃至能く七日七夜或は彼の量を過ぐるに於

【一】名句文身を法界と名づくるに倫記に三說あり、(一)名句文は淸淨法界より等流するが故に能生の因に從つて法界と名づく、(二)名句文な修するに依つて能く法界を證す、故に法界と名づく、(三)名句文は法界を詮顯するが故に法界と名づく。

を作す、我れ亦た唯だ根と境界と識とに依りて假に自作・他作・倶作にして若しは苦、若しは樂なりと名づく、而も實我に於て都べて所執無し、汝此の中に於て邪執著あるが故に隨ひ許さず、所以は何ん。若し執著あらば卽ち雜染と爲し、若し執著無くんば卽ち淸淨と爲せばなり。云何んが名づけて若し執著あらば卽ち雜染と爲すと爲すや。謂はく彼の世間の不聰慧者若し前際に於て執著する所あらば、無明は行に緣たり、廣說前の如し、便ち中際の苦樂雜染に於て、若しは中際に執著する所あるに於ても彼亦た前の如し、當に後際の苦樂雜染に於てすべし。云何んが名づけて若し執著無くんば卽ち淸淨と爲すと爲すや。謂はく聰慧なる者若しは前際に於て或は中際に於て諸行に於て我我所を執せず、彼れ前際に於て諸受の因滅し已つて般涅槃し、或は後際に於て諸受の因滅して當に般涅槃すべし。是れを第三の有執無執雜染淸淨の記と名づく。

第二目　見圓滿を解す

復次に、若し無因惡因を棄捨し、因生法の五種の因の中に於て正見を獲得することあらば見圓滿と名づく。(一)此の正しき法と毘奈耶とに於て轉ず可からざるが故に、(二)亦た名づけて正直見を成ずと爲すことを得、涅槃に於て意樂淨なるに由るが故に、(三)亦た佛の證淨を成就すと名づく、所知の境に於て智淸淨なるが故なり、此の三緣に由り其の次第の如く正法に於て趣向し親近し及與び正證すと名づく。云何んが名づけて因より生ずる法の五種の因と爲すや。一には惡趣の因、謂はく諸の不善及び不善根なり。二には善趣の因、謂はく一切の善及び諸の善根なり。三には識住に於て識をして住せしむる因、謂はく四種の食なり。四には現法後法雜染の因、謂はく一切の漏なり。五には淸淨の因、謂はく諦緣起なり。若し此の諸因の自性に於て如實に是れ其の自性なりと了知し、此の因緣に於て如實に是れ其の因緣なりと了知し、因緣の滅に於ては如實に眞實に是れ滅なりと了知し、滅に趣く道に於て如實に眞實に是れ道なりと了知するを見圓滿と名づく。緣生の事

巻の第九十四

攝事分中契經事縁起食諦界擇攝第三の二

第三項　別嗢拕南第三を以て觸縁等の十門を標釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『觸縁たると見の圓滿と、實と辨と愛樂せざると、法住智と精進とにして、生處等を後と爲す。』

第一目　觸縁を解す

一切の觸の受有に縁たる中に於て若しは諸の沙門或は婆羅門にして無因・惡因論を宣說する者は前の如く詰問す、此れ作なりや此れ受なりやと、乃至廣說。正法に安住する大師の弟子は若しは勝若しは劣、略して三種の無倒の記別あり、一には自宗を開する記、二には他宗を伏する別、三には有執無執雜染清淨の記なり。當に知るべし此の中彼の所問に於て無差別に記すとは、謂はく諸の苦樂は皆な縁より生ずとは是れ我が宗致なりと、斯れを則ち名づけて自宗を開する記と爲す。若し彼の問に於て是の如き記を作す、諸の苦樂は自作なり、他作なり、俱なり、非俱作なり、無因にして生ずと計するは一切處に於て觸に由りて受を生ず。何んぞ自他作等を妄計することを用ゐんや。若し觸の受に因たること現に不可得にして更に餘因を求めば巧妙なりと爲す可し、然れども觸の受に因たること既に現に得可きが故に、餘因を求むるを巧妙なりと爲すに非ずと、是の如く記〔別〕する者を是れを則ち名づけて他宗を〔折〕伏する記と爲す。所以は何ん。二の因縁に由りて彼れ摧伏せらる、一には唯だ根境識の合を除いて餘の作者を顯示すること能はざるが故に、二には一切世間の現量の如理に得る所の觸の因縁を誹撥すること能はざるが故なり。又彼れ自宗を立つること能はざるが故に、亦復た他宗を破すること能はざるが故に摧伏せらると名づく。若しは彼の問に於て是の如き記

作用無きが故に自作の苦樂を此れ受け此れ領することは道理に應ぜず、又彼の有餘の作者の有情は不可得なるが故に餘の受・餘の領は道理に應ぜず、受の渇愛する所他の受を攝受するも亦た理に應ぜず。諸の縁あるが故に諸受生ずることを得るが故に無因生も亦た理に應ぜず。是の故に前の三種の惡因論の邊・後の一種の無因論の邊を遠離し、前の如き中道行の敎を覺了し、正行を勤修し能く衆苦を盡す。

瑜伽師地論卷第九十三

轉ずるに由る、此の見に非ざる者は應に解脫すべきが故なり。是の如きの二の邪見の邊を遠離し、唯だ因果を見るを中道行と名づけ所知の眞如を如實性と名づけ、能く眞如を知るを無倒性と名づく。諸行あるに於て假に有を施設す、謂はく是れ諸行なり、諸行彼に屬するなり。若し勝義に依つて有是の如くならば彼の一切の行の若しは滅、若しは斷を云何んが此は是れ諸行なり或は行彼に屬すと說く可けんや。爾の時に於て是の如き二種得べからざるに由るが故なり。

第六目　分別を解す

復次に、二の因緣に由りて當に知るべし所有る緣起の一切種の相を施設すと、謂はく總じて標擧し、或は別して分別す。云何んが二と爲す。一には如所有性の故に、二には盡所有性の故なり。云何んが如所有性なりや。謂はく無明等の諸の緣生法漸次に因果體性に相ひ稱ひ、及び此の因未だ斷ぜざるものあるが故に彼の果未だ斷ぜざるものあり、此れ未だ因生を斷ぜざるが故に彼れ未だ果生を斷ぜず、是の如きを名づけて如所有性と爲す。云何んが盡所有性なりや。謂はく無明等の諸の緣性の行一切種の相、彼の無明の如きは是れ前際の無智なり、乃至廣說。差別の體相、廣く名を分別することは應に知るべし前の攝異門分の如しと。建立分別は前の如く應に知るべし、是の如きを名づけて盡所有性と爲す。即ち是の如き如所有性・盡所有性に依り若しは總じて標擧し、若しは別して分別す、先づ總じて標擧するを說いて名づけて初後と爲し、即ち此に於て復た廣く開示するを說いて分別と名づく。

第七目　自作を解す

復た次に、二の因緣に由りて自作の苦樂をば施設す可からず記別す可からず、是の如く他作・俱作・俱非所作・無因にして而も生ずるも當に知るべし亦爾なりと。云何んが二と爲すや。一には諸行は前の所說の如く作用無きが故に、二には有餘の作者の有情不可得なるが故なり。此の中の諸行は

の如く廣說、應に知るべし。又彼の緣起は無始の時より來た因果展轉し流轉相續す。如來は此の流轉の實性に於て現に等覺し已つて微妙智を以て正言詞を起し、方便して生非作を開示したまふ。當に知るべし此の中、無始の時より來た因果展轉する法住・法性彼と相應する名句文身に由りて解了せしめんが爲に隨順して法住法界の種性の依處を建立すと。

第四目　此の作等を解す

復次に、二の因緣に由りて此の作、此の受、餘の作、餘の受をば應に記別すべからず。云何んが二と爲す。一には因果を一に相ひ屬するが故に、諸行相續して前後異なるが故なり。二には所餘の作者受者は不可得なるが故なり。若し此の論に於て不受不執にして中道の行を以て唯だ因果の如くにして而も正に記別するは亦た過失無きなり。

第五目　大空を解す

復次に、一切の無我にして差別あること無きを、總じて名づけて空と爲す、謂はく補特伽羅無我及び法無我なり。補特伽羅無我とは、謂はく一切の緣生の行を離れて外に別に實我あること不可得なるが故なり。法無我とは、謂はく卽ち一切の緣生の諸行の性は實我に非ず是れ無常なるが故なり。是の如き二種を略攝して一と爲し、彼の處を說いて此れを名づけて大空と爲す。謂はく若し世俗の言說を離れたる妄見を依と爲すことあらば是の如きの見を起し是の如きの論を立つ、謂はく別物の緣生法に異なるあり、或は緣生法彼に異にして彼に屬すと、此れ妄見に依る、梵行に住するには非ず、何を以ての故にとならば是の如き見は初の空所治の見に依止して轉ずるに由る、此の見に非ざる者は應に解脫すべきが故なり。或は復た名色所攝の緣生法の中にて前說の如き三種の妄見に依りて是の如きの見を起し、是の如きの論を立つ、命は卽ち是れ身なりと乃至廣說。是の如きは亦た梵行に安住するに非ず、何を以ての故にとならば是の如き見は第二空の所治の見に依つて

達と名づく。盡所有・如所有に由るが故に其の次第に隨つて彼れ爾の時に於て聞思の慧に由るを正法に趣くと名づけ、修慧に由るが故に正法に近づくと名づけ、諦に通達するに由るを正法を證すと名づく。又趣に由り正法に近づくに由るが故に源底に到ると名づけ、正法を證するに由るが故に遍く源底に到ると名づく。又有學の慧を世間に入りて出沒する妙慧と名づく、此れ無漏なるが故なり。聖の相續の中にして得べきが故に名づけて聖慧と爲し、一切の煩惱及び諸苦を能く盡し能く出づるが故に出離慧と名づけ、最極究竟して能く通達するが故に決擇慧と名づく。彼れ既に是の如き妙慧を成就し、復た是の思を作さく、我れ當に進んで後の諸の所有る一切の煩惱を斷ずべしと。卽ち此の事に於て多修習するが故に修道の中に於て餘の煩惱を出で、一切の苦を盡す。是の如く初業地より乃至阿羅漢果を獲得する所有る正道を顯示す。

第三目　法爾を解す

復次に、二の因緣に由りて諸の緣起及び緣生法に於て二分の差別の道理を建立す。謂はく所流轉の如くなるが故に、及び(二)諸の所流轉なるが故なり。當に知るべし此の中、十二支の差別の流轉ありと。彼れ復た其の所應の如く理に稱つて因果次第に流轉す。又此の理に稱ふ因果、次第に無始の時より來た展轉して安立するを名づけて法性と爲し、現在世に由るを名づけて法住と爲し、過去世に由るを名づけて法定と爲し、未來世に由るを法如性と名づけ、無因の性に非ざるが故に如性と名づけ、不如性に非ず如實の因性なるが故に實性と名づけ、如實の果性なるが故に諦性と名づけ、所知の實性なるが故に眞性と名づけ、如實智の依處の性なるに由るが故に無倒性と名づけ、顚倒の性に非ず彼の一切の緣起相應の文字に由りて依處の性を建立するが故に此れを緣起の順次第の性と名づく。又此の二種に善巧多聞なる諸の聖弟子は三世の中に於て如實に了知し、一切の非理作意を遠離し、諸の聖諦に於て能く現觀に入り、諸の外道の諸の見趣の中に於て能く離繫を得、前の趣等

身あること無し、是れを卽ち名づけて後際の差別と爲す。問ふ、何に緣つて智者は智者の性を成ずるや。答ふ、現法の中の所有る集諦に於て、及び後際の所有る苦諦に於て皆な離繫するが故なり。問ふ、何に緣つて愚者の性を成ずるや。答ふ、彼の二を斷ずるに於て力能無きが故なり。曾し聖敎を習へるを名づけて智者と爲す、先に已に智の資糧を尋求し、諸の梵行を攝めたるが故なり。其の聖敎に於て曾て未だ修習せざりしを名づけて愚者と爲す、彼れと相違するが故なり。當に知るべし是れを智者と愚者との前際の差別と名づくと。

第二目　世俗勝義を解す

復次に、諸の緣起に於て善巧多聞なる諸の聖弟子は如實に世俗・勝義の二諦の道理を了知し、如實に知るが故に現法の中の有識身等の所有る諸法に於て無我を了知して終に彼を執して我我所と爲さず、勝義に於て善巧を得るに由るが故に是の邪執無し。諸行に墮し、相續する自業の作す所の有情に於て如實に了知して展轉して作す所能作者有ること無く、亦作さざるに吉祥の義あること無しと了知し、是を了知し已つて遂に正しく勤修して煩惱を離繫し、世俗に於て善巧を得るに由るが故に所有る不實を增益し實事を損減することを遠離す。彼の現法の中にて有識身に於て先に造作せる所、思ひ祈願する所、思ひ建立する所は誓願に由るが故に、卽ち聞思所成の妙慧、緣起の善巧を以て所依止と爲して奢摩他毘鉢舍那の修所成の行を用て能く隨つて悟入す。又識・觸・受・想・思の身に於て歷觀して苦と爲す。又愛身の差別に於て觀ずる時當に知るべし卽ち是れ集諦を觀察すと。彼れ二諦に於て生滅の智あり、如實に了知す、因集に由るが故に其の所集の如く、因滅に由るが故に其の所滅の如しと。謂はく定地の世間の作意に由り、是の如き作意の因緣を修習して諦現觀に入る。彼れ先時に於て世間の集及び世間の滅に於て聞思の慧に由るを說いて善見と名づけ、亦たは善知と名づけ、修慧に由るが故に善思惟と名づけ、今聖諦に於て現觀に入る時を名づけて善了すと爲し、亦たは善

名づけて諸の緣起に善巧なる妙智を以て能く隨つて悟入せんに、離繫の有情にして而も繫縛ありて了知し難き性なりと爲す。[4] 云何んが名づけて有繫の有情にして、而も繫縛を離れて了知し難き性と爲すや。謂はく名聞ある諸の聖弟子は明觸所生の受に觸對するが故に現法の中に於て實我を得ず亦た施設せず、身壞して已後亦た彼の七識住の中に於て一切の有情衆を施設せず、已にして復た其の下の續生する識處に於て、又復た彼れの生起する處に於て、彼れ識住に於て及び [二] 二處に於て諸の緣起の聖諦の道理を以て如實に觀ずる時阿羅漢の或は慧解脫或は俱解脫を成じ、八解脫、靜慮、等至を具す、彼れ現法に於て現見すべき生老死ありと雖も、然も彼れに從つて離繫を得と名づく。復た現見するに諸受を領納すと雖も然も受に於て離繫を得と名づく、復た現見するに識・名色ありと雖も然も彼に於て離繫を得と名づく。是の如きを名づけて諸の緣起に善巧なる妙智を以て如實に了知せんに、[三] 有繫〔縛〕の有情にして而も繫縛を離れて了知し難き性なりと爲す。此の四相に由りて應に知るべし緣起を名づけて甚深なり最極甚深なりと爲すと。

第三項　別嗢拕南第二を以て異等の七門を標釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『異と世俗勝義と、法爾と此の作等と、大空と分別とにして、自作を其の後と爲す。』

第一目　異を解す

此の正しき法と毘奈耶との中に於て復た愚と智と倶に前際より中際に至り並に二種の根本煩惱に由り是の如き有識の身を集成し、此の身を緣として外の所有る情非情數の名色所攝たる所緣の境界に於て三受を領納すと雖も、然も其の智者は彼の一切の前中後際に於て彼の愚者と大に差別あり。當に知るべし此の中其の中際に於て差別ありとは、謂はく二種の根本煩惱に由りて是の如き有識の身を集成し、現法の中に於て此の二皆な斷ず。此の二を斷ずるが故に當來世に於て復た彼の識所隨の

(4) 第四相を釋す。

【二】 二處とは（一）三惡道（二）第四靜慮及び有頂なり。

【三】 佛弟子資糧位に於て已に我見を伏す、故に繫縛を離ると云ひ、未だ隨眠を斷ぜざるが故に繫縛ありと云ふ。

き一切の三種の門に由りて起す所の我見は皆な理に應ぜず。所以は何ん。三種の受は皆な無常なるを以ての故なり。其の所計の我も應に亦た無常なるべし、是の故に彼の見の三受を我と爲すは道理に應ぜず。又第四靜慮已上の都べて樂受無きに於ては其の中亦た能く樂を受くる者無し、我は彼に於て樂受に由るが故に受法ありと名づくと計するは道理に應ぜず。又第四靜慮已上、無色定等に於ては彼の所計の我には應に覺受無かるべし。彼れ寂靜なる定所生の受に由りて我慢を發起し、我れ寂靜なりと謂ふ、此の慢應に無かるべし、然るに此の慢あり、是の故に此の計も亦た道理に應ぜず。當に知るべし是の中若し諸の緣起は甚深に非ずといはば彼れ應にあること無かるべしと、是の如きは無智のもの妄計して內法を失壞するなり。多聞の諸の聖弟子は明觸所生の受に觸對するが故に一切の所起の我見は皆理に應ぜずと了知す。是の故に諸法の無我を觀見し、彼れ世俗と及び勝義諦とに於て皆な善巧を得、前說の如き如來の滅後若しは有若しは無乃至非有非無に於て皆な執著せず、是の如き事に於て心解脫を得。設し來りて是の如く有と爲んやと問ふことあるも、其の所應の如く而も記別せず。是の如く無なり俱なり及び俱非なりと爲んやといふも、皆な所應の如くにして而も記別せず。是の如く彼れ妙智を先と爲すに由りて而も記別せず、或は謂つて是れ知ること無しと言ふことあらば、當に知るべし此は是れ極大無智なり、極大邪見なり。又彼の是の如き見行の外道現法の中に於て前說の如き三種の妄見に依りて、或は我は是れ其れ有色なりと施設し、或は我は是れ其れ無色なりと施設し、或は我は以て狹小と爲すと施設し、或は我は以て無量なりと爲すと施設す。現法の中にて我は是れ眞に得可しと妄分別して見を起して施設するが如く、是の如く當來に分別して見を起して他の爲に施設するも當に知るべし亦た爾なりと。多種に我を妄分別するありと雖も、然も唯だ一類の薩迦耶見の隨眠所繫にして未だ彼れを斷ぜざるが故に、下劣の諸の世俗道に由りて漸く繫縛を離れ、乃し有頂に至ると雖も當に知るべし卽ち彼れを猶ほ繫縛と名づくと。是の如きを

と爲す。應に知るべし先業所引の名色と識と展轉して相依り、展轉して緣と爲ること是の如しと。當に知るべし識は名色に緣たるを以て後邊と爲し、所有る有支の老死に隨ふ相は前の所說の如く其の所應に隨つて緣の體性ありと、是の如きを名づけて微細の因果は了知す可きこと難しと爲し、了知し難きが故に當に知るべし緣起を名づけて甚深なり最極甚深なりと爲すと。[2]云何んが無我は了知す可きこと難きや。謂はく諸の因果に緣起を安立し、爾所の事に齊りて遍く一切の有情衆の中に於て無差別なる有情の增語を起す、即ち此の增語は應に知るべし是れ路なりと。此の處に依りて所有る言辭轉じて各異の有情衆の別を施設す、謂はく鳥、魚、蛇、蠍、人、天等の類なり。又各異の名字の差別を立つ、謂はく鸚鵡、舍利、孔雀、鴻鴈、多聞、持國、增長、醜目、舍利子、[一〇]極賢善、給孤獨、[一一]一切義成等の名字の差別なり。爾所の事に齊りて諸の世俗の言說の士夫に於て言論ありて轉ず、謂はく、諸の所有る受の若しは明觸所生、若しは無明觸所生、若しは非明非無明觸所生、是の如き一切は名色と俱なり。若し諸の名色餘無く永滅せば、所有る諸受生ずること得べきこと無し、當に知るべし是れを無我の緣起は了知す可きこと難しと名づくと。[3]云何んが離繫の有情にして而も繫縛ありて了知し難き性なりや。謂はく外道の如く無明觸所生の受に觸對し、三門に由るが故に其の無我の緣生の諸行に於て有我を分別して見を起し施設す。云何んが三門なりや。一には欲界に於て未だ離欲を得ず、欲界繫の三種の受の中に於て一分を妄計して明の我所と爲し、一分を妄計して受者の性と爲し、有我を分別して見を起し施設す。二には欲界に於て已に離欲を得るも第三靜慮に未だ離欲を得ず、唯だ樂受に於て有所得を計し、即ち此を妄計して明の我所と爲し、此の受の外に別に實我あり、是れ能受者なりと計し、見を起して施設す、謂はく即ち此の我は是れ受法あり、即ち彼の受を用つて其の受を領納すと。三には第三靜慮已上の不苦不樂の微細なる諸受に於て通達すること能はずして有我を分別す、謂はく諸受の都べて受者に非ざるに於て見を起して施設す。是の如

(2)第二相を釋す。

【一〇】 極賢善とは梵に蘇跋陀羅(Subhadra)と云ふ、佛の最後の弟子の名。

【一一】 一切義成は梵語、薩婆悉達(Sarvārtha-Siddha)の譯、釋尊の太子時代の名なり。

(3)第三相を釋す。

も生の生ずるあり、生既に生じ已つて唯だ當に後時の老死に希待すべし。當に知るべし此の中、生の因緣を亦は名づけて生と爲し、因緣の所起も亦た生と爲すと。前生あるが故に而も後生あり、後生あるが故に而も老死あり。此の中、前生は是れ後生の因なり、亦た老死の緣なり、後生は唯だ是れ老死の緣なり。是の如き一切を總攝して一と爲し、略說して名づけて生は老死に緣たりと爲す。當に知るべし是れを初めの老死支に緣の體性ありと名づくと。生死を說くが如く是の如く有支取支の安立も當に知るべし亦た爾なりと。取の差別をいはゞ、謂はく無差別の欲貪を取と名づく。取の差別の安立に四あり是の如きの愛支は或は[八]求欲門に諸業を發起し或は[九]求有門に諸業を發起す。此の二業門の所有る諸愛は當に知るべし愛非愛の受に歸趣すと。又卽ち此の愛は六處門に生じ、所起の無明觸所生の受を緣と爲すが故に轉ず。復た餘受あり此の愛の緣に非ず、謂はく明觸所生及び非明非無明觸所生なり。又卽ち此の受は當に知るべし一切皆な相似の觸を用て其の緣と爲すと。此れ復云何ん。謂はく明と無明と、相應するは是れ增語觸なり、此れと相違するは是れ有對觸なり。又此の明觸及び無明觸に隨ふ所の增語觸は、其の所應の如く當に知るべし彼れ正法或は不正法を聽聞するを用て所緣の境に於て、若しは正若しは邪の聞思修の智と相應する諸の名を以て其の緣と爲し、非明非無明觸所攝の有對觸は、當に知るべし彼は若しは內若しは外の諸色を用て緣と爲すと是の如きを總じて名色は觸に緣たりと名づく。又卽ち六處を略して二分と爲す、謂はく名と及び色となり、觸の與めに緣と爲る。當に知るべし此の中意處の非色と餘の非色の諸法と相應する是の如きの一分を說いて名づけて名と爲し、諸の餘の色處を總じて一分と爲し、說いて名づけて色と爲すと。又此の名色は現法の中に於て續生する識を緣と爲すに由つて牽引し、及び能く執持して散壞せざらしむ。又卽ち此の識續生し已つて後に名色に依りて住し或は同時に於て、或は無間に生じ、彼れに依りて轉ずるが故に現法に於ても此れ亦た彼の名色を用て緣

【八】求欲門とは外の五欲を求むるなり、又は欲界の生を求むるなり。
【九】求有門とは內の有根を求むるなり、又は色界無色界の生を求むるなり。

惟を作す、「若し、我が所證に所有無くんば他の所證も亦た應にあること無かるべし」と、是の如く便ち聖を謗る邪見を生じ、惡趣の因を受け、大衰損を獲るなり。[七]云何んが前の如き聖說甚深なりや。謂はく能く、甚深なる緣起、究竟の涅槃、三相相應する有爲無爲の體相の差別、有爲は無常なり、無爲は常住なり、諸行は皆な苦なり、涅槃は寂靜なり、一切の有爲は總て唯だ是れ苦のみ及び唯だ苦因のみなり、一切の無爲は總て唯だ衆苦及び因永滅せりと開示したまへるなり。若し諸の苾芻の現法の中に於て涅槃を得る者は後有の衆苦の因道を永斷して當來世の所有る苦果をして究竟して轉ぜざらしめ、無餘依般涅槃に入る時後苦續かず、先因所引の現在の苦依は任運にして滅し、苦の邊際に至る。此の中都べて先の流轉する者無く、亦た今に於て般涅槃する者も無し。若し能く是の如き義を開示する言をば當に知るべし名づけて前の所說の如き聖說甚深なりと爲すと。

第十目　甚深を解す

(一)略釋　復次に、緣起の本性は最極甚深なれども、而も一あつて能く開示して淺からしむ、當に知るべし此は二の因緣に由るが故なりと、一には大師善く開示したまふに由るが故に、二には卽ち此の補特伽羅微細に審悉なる聰敏博達の智を成就するに由るが故なり。若しは說き若しは聽く、是の諸の句義は應に知るべし前の攝異門分の如しと。

(二)廣釋　當に知るべし此の中諸の緣起法は略して四相に由りて最極甚深なりと。何等を四と爲すや。一には微細の因果は了知し難きに由るが故に、二には無我は了知し難きに由るが故に、三には離繫の有情にして而も繫縛ありて了知し難きに由るが故に、四には有繫の有情にして而も繫縛を離れて了知し難きに由るが故なり。(1)云何んが微細の因果は了知す可きこと難きや。謂はく聖諦の道理を觀察するに依る、始め老死より乃し識の名色に緣たる所有る有支に至るまで緣の體性あり。云何んが名づけて緣の體性ありと爲すや。謂はく是の中に於て因緣生あり、未だ永斷せざるが故に而

【七】景師は以下の文を以て第十甚深門に屬し復次緣起以下を重ねて甚深を解すといふ。餘師は多く前文に屬す、今之に從ふ。

(1)第一相を釋す。

上慢の者なり。若し有學に於ける增上慢の者は彼れ他に告げて言はく、「我れ已に疑を渡り、三結を永斷し我れ所證の有學の解脫に於て已に猶豫を離れ、已に毒箭を拔き、已に能く薩迦耶見を以て根本と爲す一切の見趣を永斷せり」と。若し無學に於ける增上慢の者は彼れ他に告げて言く、「我れに上あること無し、應に作すべき所の事應に決擇すべき所をば我れ皆な已に作せり」と。是の如き二種は或は緣起に依り、或は涅槃に依る。又聖說に依りて說を起す時謂はく、「甚深にして世間を出離せる空性と相應する緣性緣起の順逆等の事を說く」と。其の所說に於て覺了すること能はず、隨つて悟入せず、此の二種の因及び緣に由るが故に如實なる覺に於て狐疑を發起し、自相續の煩惱永斷して涅槃を作證するに於て亦た猶豫を生ず。所以は何ん。有學に於ける增上慢の者は我我所を計して常に隨逐せられ隨入し作意するも、微細の我慢、間無間に轉じて了達すること能はず、又奢摩他を住持し相續して麁なる煩惱を防ぎて雜亂せざらしむ、是の因緣に由りて、彼れ未得に於て已得の想を生じ、未防護に於て已護の想を生じ便ち他に告ぐるに由るなり。又無學に於ける增上慢の者は彼れ自ら謂つて言く、「我れ已に寂靜なり、我れ已に涅槃せり、我れ已に離愛せり、我れ已に離取せり」と。此の未斷の微細現行の諸の增上慢に於て了達すること能はず、未得の所に於て已得の想を生じ、未防護に於て已護の想を生じ、便ち他に告ぐ。又無學に於ける增上慢の者は當に知るべし決定して先づ有學に於て增上慢を起し、實義あること無しと。諸の有學の者は上の無學に於て增上慢を起す、所以は何ん。彼の相續の煩惱現行して是の如く心を纏ふこと堅牢にして住し、此の因緣に由りて所未得に於て已得の想を生じ、增上慢を起して堅固に執著して多時を經て住し、或は他に告ぐるには非ず唯だ失念することあり、狹小に暫時煩惱現行し、尋いで復た通達して速に能く遠離するなり。又彼れ是の如く或は先時に未だ得ざる所に於て得たりとする增上慢を起すに由るが故に、或は今時其の所得に於て疑惑を生じ、猶豫して期心を壞するに由るが故に便ち憂慼を生じて是の思

復次に、五種の相に由りて正に勤めて方便して緣起を觀察し、能く衆苦を盡し、能く苦の邊を作す。何等を五と爲すや。一には諸の緣生法の生起する因緣を觀察し、二には彼の滅の因緣を觀察し、三には如實に能く彼の滅に趣く正行を了知し、四には法隨法行を修行し、五には證に於て增上慢を離る。是の如きを名づけて善く觀察を起し、及び果成滿すと爲す。始め未來の因緣に依る苦より逆次に乃し識の名色に緣たるに至るまで四種の相に由りて觀察し通達し正行を修習す。謂はく二相に由りて當來を觀察す、(一)因あるが故に果あり、(二)因無きが故に果無しと。既に觀察し已つて因無きに通達し、正行を修するに由り、既に通達し已つて隨つて正に法隨法行を修行す。又正に現法の中に於て無明を緣と爲す福及び非福、不動の新業の因法あるが故に福、非福、不動の業行に隨つて果識等あり、彼れ非有なるが故に此も亦非有なりと觀察し、既に觀察し已つて前の如く通達し、及び正に修行し、正に修行する時無明を緣と爲す新業を造らず、故業は觸し已れば速に能く變吐し、現法の中に於て前の如き現見の聖道、道果の涅槃を證得す。彼れ爾の時に於て譬へば陶師の如し、煩惱の火を擧げ、隨眠烝熱し、隨つて有識身の熟烝せる熱瓮を極めて清涼なる涅槃の岸上に置き、一切の煩惱の烝熱を離れしむ。又瓦の如き有識身をして攝依して清涼を得しむ。應に知るべし前の如く所有る身の邊際の受を領受し乃至廣說未だ捨命せざるより來た常に恆住に處し、終に阿羅漢果を退失せず、亦た無明の緣たる行を造ること能はず。云何んが證に於て增上慢を離るゝや。謂はく彼れ爾の時能く緣起を緣ずる妙善清淨智見を成就して是の思惟を作す、勝義諦に依りて流轉する者無く、涅槃の者無し、唯だ彼彼の法ありて生ずるが故に彼彼の法をして生ぜしめ、彼彼の法滅するが故に彼彼の法をして滅せしむ 。

第九目　上慢を解す

復次に、略して二種の增上慢の者あり、一には有學に於ける增上慢の者、二には無學に於ける增

解脱を得るが故に畢竟の若しは有餘依、若しは無餘依の二涅槃界に安住す。

第七目　思量の際を解す

復次に、緣起法に於て善巧なる苾芻は三種の相に由りて其の三際に於て能く正に思量し正に能く苦を盡す。云何んが三相なりや。一には苦の依處、二には苦の因緣、三には苦の因緣依處なり。是れを三相と名づく。云何んが三際なりや。一には中際、二には過去際、三には未來際なり。是れを三際と名づく。當に知るべし此の中內身は苦の依なり、是れ寒熱等及び病死等の衆苦の差別の現法生起の所依處なり。何を以ての故にとならば此あるに由るが故に、所依の身に於て彼れ生ずることを得るが故なり。外の父母等の親屬、朋黨は苦依を攝受す、是れ供侍等にして刀杖を執持するを以て後邊とするは憂愁歎等の衆苦の差別の所依止なり。何を以ての故にとならば前說の如くなるが故なり。此の二種の依は愛を攝受するを用て以て其の因と爲し、集愛を以て此の依生起するに由つて、苦の因緣と名づく。又卽ち此の愛は可樂の妙色の境界に依止するを以て依處と爲して、方に乃ち生ずることを得、彼を說いて苦の因緣の依處と名づく。又諸の所有る現在の境界は貪瞋癡の火の熱惱を因と爲して燋渴を生ぜしめ、是に由りて遂に飲む、譬へば毒を雜へたるものゝ可樂なるが如く、妙色の所緣の境界は甘美の飲なり。棄捨すること能はず轉た渴愛を增す、渴愛に由るが故に當來の依あり、當來の依の故に便ち衆苦あり。是の如く當に知るべし第一義に由りて名づけて死に趣くと爲すと。卽ち是の如き現在の道理に由りて應當に去來の道理を了知すべし、當に知るべし是れを能く中去來際を正思量すと名づく。又卽ち四種の言說に依止して應に一切所依の三量を知るべし、二種の言說を若しは見、若しは知るは是れ現量に依り、若し言說を覺るは是れ比量に依り、若し言說を聞くは至敎量に依るなり。

第八目　觀察を解す

實に覺るに緣るが故に見甘露と名づけ、盡・無生智を所依止と爲して有餘依涅槃界を證するが故に身證と名づけ、妙甘露界を得、具足して安住す。

第六目　微智を解す

[六]復次に諸の愚夫外道の種類あり、能く四大種の身は麁なり無常性なりと觀見すと雖も、此の身は久しく住立すと雖も而も增減あり、死時、生時、捨取ありと觀ずるに由るが故に便ち其の身に於て能く厭ひ能く離れ能く勝解を起す。世間道を以て欲界の欲を離れ、色界の欲を離れて、極は有頂に至るも、然も彼れ身に於て當に知るべし仍ほ未だ解脫を得ずと名づくと。所以は何ん。彼彼の所得の定中に於て、其の識を瑩磨し執取して我と無し、雜染にして住するに由る。復た後時に於て壽盡き業盡くれば還退して下に生ず、緣起に於て不善巧なるを以ての故なり。諸の聖弟子は緣起に於て已に善巧を得て而も但だ四大種の身は細なり無常性なりと隨觀すと雖も未だ卽ち識は無常の性なりと觀察せず。所以は何ん。四大種の身は久時を經て住すれば常相は得可く、剎那に相似し相續して隨轉するも其の無常性得可きこと難きが故なり、識に無常の相麁顯にして得可く、剎那剎那の所緣易脫し、其の相轉變して無量の品類差別あるが故なり。卽ち此の識は無常の性相にして無量の品類麁顯にして得易しと雖も、然も復た說いて最極微細なりと名づく。當に知るべし其の性識る可きこと難きが故に、入るべきこと難きが故なりと。所以は何ん。唯だ是れ慧眼の所見の境なるが故なり。四大種の身に增あり減あり捨あり取ありて其の無常の性すら尙ほ非理と爲す肉眼の境界なり、況んや其の餘の眼の緣起善巧をや。諸の聖弟子は復た最極微細の識の無常性に悟入せんと欲し、卽ち緣起に於て如理に思惟す。能く自の相續に墮し觸より生起する所の諸受の分位差別の性を分別するに由るが故に便ち能く識の無常性に悟入す。彼れ既に是の如き智見を成就し、漸次に受の所依止の身、因る所の諸觸及び餘の一切の名所攝の行に於て皆な能く厭離して勝解を生じ、亦た解脫を得。

【六】微智を解す。微智とは外道に對して佛弟子の微細の智を云ふ。

の作意を以て四諦を歴觀し、又正見を以て諸諦の中に於て現觀に入ることを得、次第に方便して無上正等菩提を證覺し、現見に方便して無漏の有學無學の善淨なる智見を獲得したまへり。此の義の爲の故に三大劫阿僧企耶に於て一切の難行の行を修行し、今此の義に於て皆な已に證得し、利他の爲の故に世間の諸の人天を哀愍するが故に、能く聖法に入るに堪へたる者あるに隨つて四聖諦を開き、等覺を生ぜしめたまへり。

第五目　聖教に攝することを解す

復次に、佛世尊の教は三處の所攝なり。何等を三と爲すや。一には善建立の諸の緣生法は無作用なるが故に、二には彼れ利他の行に依るが爲の故に、三には彼れ自利の行に依るが爲の故なり。此の中善く建立の諸の緣生法は無作用なるが故にとは、謂はく後際の苦より現法前際の苦集を過觀するに名色は識に緣たり、識は名色に緣たり、譬へば束蘆の展轉して相依りて住立することを得るが如し。其の中間に於ける諸の緣生法は皆な自作に非ず、亦た他作に非ず、自他作に非ず、無因生に非ず、是の如く施設するを善建立の諸の緣生法は無作用なるが故なりと名づく。所以は何ん。無常の諸行は前際に無きが故に、後際に無きが故に、中際に有りと雖も唯だ刹那なるが故に作用動轉す、第一義に約するに都べて所有無し。但だ世俗に依りて暫らく假に施設す、是の如き施設は如實にして無倒なり。是の故に說いて此を善建立と名づく。即ち是の如き善建立性に依り、諸の緣起に依りて他の爲に聖諦の法教を宣說するを、彼れ利他行に依るが爲の故なりと名づく。即ち此を依と爲し自ら能く聖諦現觀に趣入して法隨法行し、又能く現法涅槃を證得す、當に知るべし是れを彼れ自利行に依るが爲の故なるを用ふと名づくと。又先に智慧の資糧を積集せる諸の弟子衆は猛利なる俱生の慧を成就するが故に名づけて聰慧と爲し、教智を具するが故に名づけて明了と爲し、證智を具するが故に善調伏と名づけ、他緣に由らずして自ら法を覺るが故に無所畏と名づく。涅槃に於て如

大苦火聚と爲り、邪法を攝受し聽聞せる邪法を先と爲し聞思修慧所引の邪行は、譬へば乾薪、乾草及び乾牛糞を積集するが如し。是の因緣に由りて苦火聚をして長時に熾然せしめ、斷絕有ること無し。

第四目　重ねて諦觀を解す

復次に、世尊在昔菩薩爲りし時、菩提座に處し、緣起門に依り逆次にして入りたまへり、先づ後際を緣じて老死の苦諦乃至其の愛を如理に思惟し、是の如く後際の苦諦及び後際の苦の所有る集諦を觀察し、未だ喜足を爲さず、遂に復た後際の集諦因緣所攝の現在の衆苦を觀察したまへり、謂はく遍く受と觸と六處と名色と識とを逆觀したまへり、當に知るべし此の中、未來の苦は是れ當の苦諦なりと觀じ、彼の集因は是れ當の集諦なりと觀じ、未來世の苦の集諦は誰に由りて有るやと觀じ、先の集より生起する所の識を邊際と爲すに由ると知り、現法の苦有るは旣に先の集より生起する所なりと知りて、應に復た此れ云何にして有りやと觀ずべからずと。是の故に世尊昔し菩薩たりし時當來の所有る苦集を觀ぜんが爲に現在の苦乃至作意相應の心識を觀じて復た轉還したまへり。又漸次に彼の後際の集諦の依處を觀ずと爲す。後際の苦諦の所依止の處は當に知るべし後際の集諦なりと、故に乃し識に至りて復た還つて上に順じたまへり。是の如く順逆に緣起の苦集を如理に觀察し、此より無間に滅諦を觀ぜんが爲め、始め老死より逆に次第して入り、乃し無明に至る。何を以ての故に觀察すること是の如くなりや。現在の苦諦を云何にして一切皆な悉く盡滅するや。謂はく無明を緣と爲る新業の行を造作せざるが故なり。是の如く三聖諦を歷觀し已つて次に更に此の滅聖諦は何の道、何の行にして能く證得するやと尋求したまへり。前に說けるが如き宿住隨念に由り昔し諸漏永盡することを求めんが爲にせし世間の正見を憶ひ、敎授する者の如く現在前に是の思惟を作さしむ、「我れ今先舊の正道にして古昔の諸仙の同じく遊履せし所を證得せん」と、是の如く但だ世間

是の如き苦樹長時に安立す。當に知るべし是の如き補特伽羅は苦樹をして展轉して滋茂せしめんと欲するなりと。此の中白品は前の如く應に知るべし。

第三目　諦觀を解す

復次に、世尊在昔菩薩爲りし時、前所得の諸の世俗道及び世の諸師を棄て菩提座に處し他の有情を悲愍し利せんと欲するを以て上首と爲すが爲に自ら諸諦に於て正しき觀察を起したまへり。爾の時、苦諦を歷觀せんと欲するが爲に、老死支は苦諦の所攝なるに由るが故に、緣起に於て逆に歷て觀察したまへり。當に知るべし此の中、三種の相に由りて其の老死に於て如理に觀察すと。一には細なる因緣を觀察するが故に、二には麁なる因緣を觀察するが故に、三には非不定を觀察するが故なり。生を感ずる因緣を亦たは名づけて生と爲し、卽ち生の自體を亦たは名づけて生と爲す、前の生は是れ細なり、後の生を麁と爲す。此の中前は細生有るが故に、而も老死ありと觀じ、亦た後の麁生の緣に由るが故に老死あることを得と觀ず、當來の老死は細生を因と爲し、現法の老死は麁生を因と爲す。云何んが名づけて非不決定と爲すや。謂はく卽ち彼の生處の所攝なる二種の生體を除いて、餘は定んで能く老死の果を與ふること無し。老死を觀ずるが如く生と有と取と愛とにおいても各二種に由りて如理に觀察すること當に知るべし亦た爾なりと。是の如きを名づけて始め老死より次第に苦集二諦の緣起の道理を逆觀すと爲す。應に知るべし此の中集諦に順ずる法は猶し燈炷の如しと。卽ち此の集諦は膏油等の如く苦諦は燈に類す、諸の非聰慧の補特伽羅を油を灌ぎ並に炷を集むる者に譬ふ、是の如くにして苦燈長世に燒然す。當に知るべし白品は此れと相違す、謂はく善く方便して滅道諦を觀ずと。復た二種の補特伽羅あり、何等をか二と爲すや。一には唯だ自を行じて利益行に非ず、謂はく但だ己が集炷に於て油を灌ぎ、一の苦燈をして相續し久しく住せしむるなり。二には復た餘の補特伽羅あり、兼ねて自他の無量なる大衆に行ぜしむ、利益行に非ず、自他を然く

修す。是れを廣く三種の相に由りて緣起を建立することを說くと名づく、謂はく前際より中際流轉し、其の中際より後際流轉し、復た中際の流轉に於て清淨なるなり。

第二目　苦聚を解す

復次に、九相を安立して後有の苦樹能く當有を生ず、謂はく世間の非聰慧の者ありて現法中所造の[五]新業の小苦樹の如くなるに於て、若し彼の世間の非聰慧の者能く諸漏に隨順する處所に於て(一)現在世に依りて隨觀し愛味し、(二)過去世に依りて深く顧戀を生じ、(三)未來世に依りて專心に繫著し、(四)是の如く住し已らんに、先に未だ斷ぜざりし所の一切の貪愛は數習するに由るが故に轉た更に增長し、(五)此の非聰慧の補特伽羅是の如き後有の小樹をして復た滋茂を加へしめんと欲し、(六)貪愛の水を以て恒に漑灌して前の所說の如き能く當來を感ずる取の所得の果をして漸次に圓滿せしめ、(七)若しは多聞の諸の聖弟子あり、有漏の能く當來を感ずる諸業の小樹を造ると雖も、然も能く煩惱に順ずる諸行に於て無倒に生滅の法性ありと隨觀し、(八)斷と無欲と及以び滅界とに於て無倒に是れ寂靜の性なりと隨觀し、(九)彼の業を損減して增長せしめず、其の愛水をして亦た皆な消散せしむるが故に聰慧の者は後有の小樹を滋榮することを欲せず、便ち其の愛を斷じ、愛の取に緣たる等、損壞す。是の如く後有の小樹すら尙ほ一切皆な所有無からしむ、何に況んや其をして後更に增長せしめんや。復た更に一の補特伽羅の已に自體を生ぜるあり、諸の先の所有る造作し增長せる順後受業にて現法中に於て其の爲に繫せらる。卽ち彼の自體及び先の所造の順後受業を總攝して一と爲し、說いて後有は大苦樹の如しと名づく。若し能く諸の煩惱に順ずる法に於て前の如く乃至專心に繫著す。是の如く住し已らんに彼の先の所造の順後受業は直下の根の樹をして蓊茂せしむるが如く、現法中に於ける彼の愛煩惱は傍注の道の樹をして潤澤せしむるが如し。此を以て因と爲し、惑と業行と一切の種子識とに隨つて當來世に於て正に續生せしむる時、名色に住し、

【五】新業の小苦樹とは現世に造れる業を云ふ、先業は種の時久しきを以て大苦樹と云ふに對し新業を小苦樹と云ふ。

如理に思惟す、若し彼の因に於て、若しは彼の滅若しは滅に趣く行に於て如理作意し、彼を思惟するが故に正見を發生す。又諸諦に於て漸次に有學無學の清淨智見を獲得す。彼れ是の如き智見力に由るが故に能く餘無く無明及び愛を斷ず。彼れ斷ずるに由るが故に、卽ち彼の所緣を如實に知らざる、諸の無明觸所生の諸受も亦復た隨つて斷ず。此れ斷ずるに由るが故に現法の中に於て無明を離るるに由りて慧解脫を證す、又無明觸所生の諸受、心中に相應する所有る相應の貪愛煩惱は彼れ其の心に於て亦た離繫を得、貪を離るるに由るが故に心解脫を證す。又卽ち彼の無明滅するに由るが故に諸有る無明猶ほ未だ斷ぜざる時、後際に於て應に生ずべき行識乃至諸受皆な生ずることを得ず、不生法を成ずるに依る、是の故に說いて言はく、「無明滅するが故に諸行隨つて滅し、次第に乃至異熟所生の諸觸滅するが故に、異熟所生の諸受隨つて滅す」と。又現法中の無明滅するが故に無明觸滅し、無明觸永滅することを得るに由るが故に無明觸所生の受滅し、無明觸所生の諸受永滅することを得るに由るが故に愛も亦た隨つて滅し、愛滅するに由るが故に前說の如き名所有の取等乃し損惱するに至るを以て後邊と爲す、諸行皆な滅して不生法を成じ、現法中に於て是の如き諸行皆な流轉せず、流轉せざるが故に現法の中に於て有餘依涅槃界に住するを名づけて現法涅槃を證得すと爲す。彼れ爾の時に於て識は名色に緣たり、名色は識に緣たり、有餘未だ滅せざるを而も說いて清淨鮮白なりと名づくることを得、乃至有識身住して未だ滅せず、彼れ恒に離繫せる諸受を領受して繫縛あること無し。彼の有識身乃至先業所引の壽量恒に相續して住す、壽量若し盡れば能く識を執持して所執の身を捨て命根をも亦た捨つ、此より已後所有る命根餘無く永滅して都べて所有無し。又彼の諸識と一切の受とは此の位の中に於て任運にして滅す、先因滅するが故に餘更に續かず、亦た餘無く滅す、此の道理に由りて無餘依般涅槃界と名づく。究竟寂靜にして常に妙跡に住す、此の義の爲の故に常に涅槃に隨ひ、常に涅槃を以て其の究竟と爲し、世尊の所に於て梵行を熟

が故に二種の果に於て愚癡を發起す。彼れ内の異熟果の中に愚癡あるに由るが故に能く如實に當來後有の生苦を了知せず。此の前際後際の無明の增上力に由るが故に前の如く諸行を造作し增長す。此の新業に由りて識を熏變するが故に現法の中に於て業に隨つて行ず。是の如く無明を緣と爲すを以ての故に諸行生ずることを得、行を緣と爲すが故に識をして轉變せしむ。當に知るべし此の識は現法の中に於ては但だ是れ因性にして當に生ずべき諸識の果を攝受するが故に一切に就いて相續するに約して名と爲し六識身と說く。又卽ち此の識は當來後有の名色の種子の隨逐する所なり。名色の種子は復た當來後有の六處の種子と爲りて隨逐し、六處の種子は復た當來後有の諸觸の種子と爲りて隨逐し此の觸の種子は復た當來後有の諸受の種子と爲りて隨逐す。當に知るべし是れを其の中際に於ける後有の引因は識を先と爲し受を最後と爲すに由ると名づくと、遍く能く諸の自體を牽引するが故なり。是の如く先の異熟果の愚に由り、後有を引き已つて復た第二の境界所生の增上果の愚に由り、境界の受を緣じて貪愛を發生し、此の愛に由るが故に或は諸欲を求め、或は諸有を求む。又欲取を取り、或は見と戒禁と我語との取を取り、諸取を取り已つて愛取和合して先の引因を潤して轉ずるを名づけて有と爲す。是れ當に生起すべき因の所攝なるが故に此の有の無間に既に命終し已つて其の引因の所引の如く諸の行識を最初と爲し受を最後と爲す。或は漸次に生じ、或は復た頓に生ず、是の如く應に知るべし。現前の中に於て初めには無明觸より生ずる所の受を用つて緣と爲して愛を生じ、愛を緣と爲すが故に次に取を生じ、取を緣と爲すが故に其の有を轉成し、有を緣と爲すが故に當生、生ずることを得、生を緣と爲すが故に老病死等の衆苦差別して次第に現前す。當に知るべし此の中或は處所の生處現前するあり、或は處所の種子隨逐するありと。是の如く中際の無明は行に緣たり、受は愛に緣たる等は能く後際緣起の諸行を生ず。(3) 若し現法の中にては他より聞法し、或は先世に於て已に資糧を集め、彼を因と爲すに由りて能く【四】二種の果性の諸行に於て

(3)後問に答ふ。
【四】 二種の果性とは三解あり(一)中際と後際(二)未來の生と老死(三)牽引因の果と生起因の果なり。

生ずることを得、生じ已つて漸次に母の腹中に於て因識を緣と爲して續いて果識を生じ、隨轉して絕えず、所有る羯邏藍等の名色の分位を任持し、後後殊勝にして、始め胎藏より乃ち衰老に至る。又卽ち此の識當に續生すべき時能く生を感ずる業、異熟果を與ふ。異熟生の識は復た名色に依り相續して轉ず、謂はく眼等の六根に依りて轉ずるが故に是に由りて說いて名色は識に緣たりと言ふ。俱生の五根を說いて名づけて色と爲し、無間滅等を說いて名づけて名と爲す。其の所應に隨つて能く六識の與に所依止と作る、識彼れに依るが故に乃至命終まで數數隨轉す。又五色根の根は大種に依り、根處の大種所生の諸色及び諸餘の名は彼れ所有る根等を執持するに由つて相續に墮在して流轉して絕えず、此の二を總じて隨轉の依止と名づく。是れに由るが故に識は名色に緣たり、名色は識に緣たり、現在世に於て猶ほし[三]束蘆の相依るが如くにして轉ずと言ふ、乃至壽住する是の如きを名づけて其の前際より中際緣起して諸行生ずることを得と爲し、其の中際に於て生じ已つて隨轉す。當に知るべし此の中胎生のものに依りて轉ずる次第を說く、卵生濕生は母腹に在るを除くと。餘の差別の有色の有情あり、欲色界に在りて化生を受くる者は初生の時に於て諸根圓滿し、餘と差別す、無色界に在る諸有情類の識は名と及び色との種子に依り、名と及び色との種は識に依つて轉ず。彼の識の中に色の種あるに由るが故に色間斷すと雖も後當に更に生ずべし、是の如きを名づけて、此の中の差別と爲す。福業に由るが故に欲界の人天の兩趣に生じ、罪業に由るが故に惡趣の中に生じ、不動業に由りて色無色に生ず。

[1]**(二)中際より後際を生じ或は淸淨に趣くことを解す**　云何んが名づけて、其の中際より後際緣起して諸行生ずることを得と爲し、云何んが生ぜず、生ぜざるに由るが故に淸淨を證得するや。[2]謂はく彼れ是の如く中際に於て補特伽羅を生じ、先業所得の二果を領受す、一には內の異熟果を領受し、二には境界所生の受の增上果を領受す。彼れ不正法を聽聞するに由るが故に、或は先世の串習力に由る

【三】束蘆とは三本の蘆を三方より立てかくるに互に鼎立して三本共に倒れざるを云ふ。

(1)二門を發起す。

(2)初問に答ふ。

卷の第九十三

第三節　契經事の中の緣起、食、諦、界、擇攝を明す

攝事分中契經事緣起食諦界擇攝第三の一

第一項　第一の總嗢拕南一頌を以て六門を標す

是の如く已に處の擇攝を說けり、緣起と食と諦と界との擇攝を我れ今當に說くべし、總の嗢拕南に曰く、

『立等と、二諦等と、觸を以つて緣と爲す等と、滅ある等と、食等とにして、最後は如理等なり』

第二項　別嗢拕南第一を以て立等の十門を標釋す

別の嗢拕南に曰く、

『立と苦聚と諦觀と、聖敎を攝すると微智と、思量の際と觀察と、上慢と、後は甚深なり。』

略して三相に由りて應に緣起の差別を建立することを知るべし、一には前際より中際生ずることを得、二には中際より後際生ずることを得、三には中際に於て生じ已つて隨轉し、及び淸淨に趣く。

(一)前際より中際を生じ及び中際より生じ已つて流轉相續することを解す　此の中云何んが其の前際より中際生ずることを得、及び中際に於て生じ已つて隨轉するや。謂はく一あるが如し、宿し非聰慧の無明を緣と爲して罪福不動の身語意業を造作し增長し、此を緣と爲すに由り業に隨つて行識乃至命終まで隨轉して絕えず、能く後世に續生する識の因と爲り、是の如く展轉して內外の愛ありて識果を生ずる時能く助伴と爲り、現前して起り、旣に命終し已つて前際の因に由りて現在世に於て自體

【一】緣起等。緣起とは十二緣起、食とは四食、諦とは四諦、界とは十八界なり。

【二】中際とは現在の十因即ち無明乃至有なり後際とは未來の二果即ち生老死を生ず、因果合して十二緣起なり。

ては其の過患を示して厭離を生じ、漸次に修學して乃至第四靜慮に證入せしめ、所有る尋思の依止たる耽嗜方に能く內に於て究竟寂靜にして、自ら惱無からしめ、他をして攝取せしむ、當に知るべし是れを時時の間に於て正法を聽聞して常に懈廢すること無しと名づくと。云何んが二相にて諸弟子衆の其の德圓滿するや。謂はく諸の弟子最初に大師の所見を忍受す、謂はく諸法の中の空無我の見なり。是の因緣に由りて諸法の中に於て我を增益して邪執著を起さず、亦た世俗の道理を毀壞せず。勝れたる意樂の故に隨從する所無く、言說に隨ふが故に亦た遠離せず。是れを第一の諸の弟子衆の其の德圓滿すと名づく。又彼れ見に於て旣に忍受し已つて能く正しく法隨法行を修行し、四の法攝に由りて攝受せらるゝ時若し彼の諸法に苦あり害あらば、如實に了知して能く速かに斷滅す。若し彼の諸法に苦無く害無くんば如實に了知して能く速かに作證す。是れを第二の諸の弟子衆の其の德圓滿すと名づく。是の如く大師及び弟子衆の攝受する所の諸佛の聖敎は當に知るべし一向に無染淸淨にして諸の聰慧の者の歸趣する所なりと。

瑜伽師地論卷第九十二

量の法教に於て、能く了知し已つて未だ聞の彼岸に到ることを得ず、若し以て其の彼岸に到ることを得るは要ず法隨法行を修行し、出離を證得するが爲なり、受持するが爲には非ず。是れを了知し已つて如理に法隨法行を修行するなり、但だ隨說の音聲語言を以て究竟と爲すに非ず。是れを第一の諸の弟子衆の其の德圓滿すと名づく。此の如く法隨法行を修行し、下劣を以て喜足を生ぜず、要ず當に賢敏なる丈夫の所趣の地に往趣すべく、定んで當に彼の所應得を獲得すべし、是れを第二の諸弟子衆の其の德圓滿すと名づく。

第十四目　師弟圓滿を解する中の後番

復次に、善說の法と毘奈耶との中に於て復た三相に由りて應に大師の其の德圓滿すと知るべく、又二相に由りて應に弟子の其の德圓滿すと知るべし。云何んが三相にて應に大師の其の德圓滿すと知るべきや。謂はく佛世尊、諸弟子の爲めに最初に二邊を遠離する中道の正行を施設したまふ、是れを第一の師德の圓滿と名づく。又聖教に於て未だ信を生ぜざる者、毀犯ある者をば正しき方便を以て聖教に入りて諸の毀犯を離れしむ、是れを第二の師德の圓滿と名づく。又聖教に於て已に入ることを得たる者を四の法攝に由りて正しく之を攝受す、是れを第三の師德の圓滿と名づく。云何んが名づけて四種の法攝と爲すや。一には祕密に於て其の如法・閑靜の教授を以て之に教授して非法を以てせず。二には違犯に於て其の如法の苦切なる語言を以て現前に呵擯す、如法ならざるには非ず。三には尋思の依止たる耽嗜に於て教へて內に於て寂靜を勤修せしむ。四には時時に正法を聽聞し、常に懈廢すること無からしめ、又相似の正法を遠離せしめ、及び正行を棄捨することを對治せしむ。當に知るべし卽ち是れ其の祕密に於て能く如法・閑靜の教授を引き、實の毀犯に於て若し正了知せば、要ず當に呵擯すべく、方に調伏する者をば如法の言を以て現前に呵擯して心に雜染無く、尋思する者に於ては方便して其をして決了することを得易からしめ、諸の五妙欲に流蕩する者に於

復次に、五種の相に由りて(一)能く喜に順ずる所緣の境界に於て隨順して行じ(二)深心に喜樂して、不如正理に其の相を執取して貪欲を發生し(三)多く尋思を起し(四)方便求覓し(五)此に因りて廣く福・非福の行を行ず。能く喜に順ずる所緣の境界の如く、憂に順じ捨に順ずる所緣の境界も其の所應の如く當に知るべし亦爾なりと。其の差別をいはゞ能く憂に順ずる所緣の境界に於ては隨順して行じ、深心に厭惡して瞋恚を發生し、能く捨に順ずる所緣の境界に於ては隨順して行じ、深心に愚昧にして愚癡を發生す、餘は前說の如し。

第十二目　恒住を解す

復次に、諸の苾芻あり、阿羅漢を證し諸漏永盡し、一切の境に於て隨順して行じ、恒時に堪へず、乃至失念して諸の煩惱を生ず、是の故に恒に雜染なき住に住す、是の因緣に由りて說いて恒住と名づく。彼の行に隨ふ品の若しは喜、若しは憂、若しは欣、若しは戚は、諸の阿羅漢には皆な所有無し、乃至善の中に亦た是の事無し。又彼の恒住は極めて行じ難きが故に、及び罪無きが故に名づけて最勝と爲し、能く成就する者極めて得難きが故に說いて第一眞實の福田と名づく、應當に請し奉るべし。乃至廣說、當に知るべし前の攝異門分の如しと。

第十三目　師弟圓滿を解する中の前番

復次に、善說の法と毘奈耶との中に於て應に知るべし大師及び弟子衆は各〻二相に由りて其の德圓滿すと。云何んが二相に應に大師の其の德圓滿すと知るべきや。謂はく利他の行に依り諸の所有る受は皆な是れ苦なりと悟入せしめんと欲するが故に受の所依を說き、彼の因緣を說き、能く雜染する所有る隨行を說き、所對治及び能對治の師句の安立を說き、一切種の究竟の出離を說く、是れを第一の師德の圓滿と名づく。又自利の行に依り不共の三種の念住、雜染無き住を宣說す、是れを第二の師德の圓滿と名づく。云何んが二相に應に弟子の其の德圓滿すと知るべきや。謂はく如來の無

るべし此の空に復た七種あり、一には後際空、二には前際空、三には中際空、四には常空、五には我空、六には受者空、七には作者空なり。當に知るべし此の中(一)諸行の未來世に於ける實に行聚の自性の安立ありて、諸行生ずる時彼より來ることあること無し、若し是の事あらば彼れ應に生ずべからず、未來世に於て諸行の自性已に實有なるが故なりと。又應に無常の得可きあるべからず、既に得可きあらば是の故に當に知るべし諸行生ずる時從來する所無く。本無く今有りと、是れを後際空と名づく(二)又諸行の過去世に於て實の行聚の自性の安立あり已に生じ已に滅し、諸行は彼に往いて積集して住すること無し。若し此の事あらば諸行に滅ありと施設すべからず、過去の行聚の自性儼然として常に安住するが故なり、若し滅あること無くんば彼の無常の性は應に知る可からさるべし。既にあること知る、是の故に諸行は正に滅する時に於て都べて往く所として積集して住すること無し、有り已つて散滅するに、餘因を待たず、自然に壞滅す、是れを前際空と名づく。(三)又刹那に生滅する行の中に於て唯だ諸行の暫時得可きあるのみ、其の中都べて餘行の得可きこと無く、亦た別物無し、是れを中際空と名づく。當に知るべし亦た是れ(四)常空(五)我空なりと。(六)(七)無我なるを以ての故に果性の諸行は空にして受者無く、因性の業行空にして作者無し、是の如きを名づけて受者、作者の二種皆な空なりと爲す、作者、受者所有無きが故なり。唯だ諸行あり、前生に於て滅し、唯だ諸行あり、後生に於て生ず、中に於て都べて前生を捨つる者後生を取る者無し、是の故に說いて、唯だ諸法の衆緣により生ずるあつて能く諸法を生ずと言ふ。又一切の法は都べて作用無く、少法として能く少法を生ずること無し、是の故に說いて此れ有るが故に彼れ有り、此れ生ずるが故に彼れ生ずと言ふ。但だ唯だ彼の因果の法の中に於て世俗諦に依り作用を假立し、此の法は能く彼の法を生ずと宣說するなり。

第十一目　隨行を解す

諸の有情類は業に隨つて行ずとのみ言つて愛に隨ふと言はず。何を以ての故にとならば略して三愛、あり、一には欲愛、二には色愛、三には無色愛なり。此の中、欲愛の是れ不善なる者は異熟ありと雖も、然も若し惡不善の業を起さずんば終に惡趣の異熟を與ふること能はず。若し欲界の愛は無明觸の所生の諸受に於て希求を起す時、可愛の境に於て貪欲を發生し、可憎の境に於て瞋恚を發生し、可迷の境に於て愚癡を發生す。此の三種の增上力に由るが故に不善業を行じ、此の業に由るが故に諸の惡趣に生ず、但だ彼の貪瞋癡の纒のみに由りて定んで惡趣に墮するには非ず、然も卽ち此の愛は所造の業の異熟生ずる時に於て能く助伴と爲る。又可愛の境界を希求する增上力に由るが故に、善行を修行する身語意業此れを因と爲すに由りて善趣に生ずることを得。此の中、可愛の諸の異熟果は但だ應に業のみを用つて引生因と爲すべし、染性の愛には非ず。又若し此の愛の色無色繫なるは不善に非ずと雖も然も是れ染汚なり、一切皆な異熟果あるに非ず。又卽ち此の色無色愛に由りて有愛と名づくるは、彼れ正法を聽聞する因に由るが故に其の欲界に於て麁鄙の相を觀じ、明觸を證得して世間の如理作意と相應する諸受を生ず、欲界の貪瞋癡等を調伏し、修所成の善有漏の業を造り、此の間に於て彼の業を造るに由るが故に當に彼に生ずることを得べし、彼の染汚性の愛には由らず、然も卽ち此の愛は所造の業に於て異熟生ずる時能く助伴と爲る。是の故に但だ諸の有情類は業に隨つて行ずとのみ說いて、愛に隨ふと言はざるなり。

第十目　空を解す

復次に、外事の中に於て世間の假名の增上力の故に亦た果あり及び受者ありと說く。彼れ或時は空なること世に現に得可く、或時は空ならず。果と受者との如く因と作者とも當に知るべし亦た爾なりと。是の如きを名づけて世俗諦空と爲す、勝義空には非ず。若し恒時に一切の諸行は唯だ因果のみあり、都べて受者と及び作者と無しと說くは當に知るべし是れを勝義諦空と名づくと。應に知

第七目　所學を棄捨することを解す

復次に、諸の出家の者、所學を棄捨する增上力の故に、當に知るべし境界を顧戀することを安立すと。又出家の者、尸羅を毀犯する增上力の故に、當に知るべし、未だ出家せざる者の趣入することを棄背する心の株覆の事を安立すと。慚愧を遠離するが故に、一向に愛味するが故に、若し堅く所緣の境界を執取するを、當に知るべし彼れを最極愛味と名づくと。是の因緣に由りて、上品の諸善を修する業の中に於て心の株杌と爲り、是れ調柔ならず堪能する義無し、又卽ち此の增上力に由るが故に諸の惡行を行じ、內に所造の衆惡を隱匿することを懷くが故に其の覆を生ず。是の如き一切を略攝して一と爲し、說いて境に於ける最極愛味の心株の覆事と名づく。

第八目　業を解す

復次に、若し諸根に於て護ること無き行者は樂つて不正法を聽聞するに由るが故に、便ち無明觸より生起する所の染汚の作意を生ず。卽ち此の作意の增上力の故に當來世の諸處に生起する所有る過患に於て如實に知らず、如實に彼の過患を知らざるが故に便ち希求を起し、彼を希求するが故に彼の相應の業を造作し增長し、相應の業を造作し增長するが故に當來世に於て六處生起す、是の如きを名づけて順次の道理と爲す。逆の次第をいはゞ、謂はく彼の六處は業を以て因と爲し、業は愛を因と爲し、愛は復た彼の無明を用つて因と爲し、無明は復た不如正理の作意を用つて因と爲し、不正の作意は復た無明觸を用つて其の因と爲す。又此の中に於て先の所造の業は是れ現法受の六處の因なり、現法の造業は是れ次生受の六處の緣なり、或は是れ後受の六處の由藉なり、愛等業等も其の所應に隨つて當に知るべし亦た爾なりと。

第九目　頌の中の等の字を解す

復次に、二の因緣に由りて後有生起す、一には後有の業、二には後有の愛なり。而も但だ說いて

有餘依般涅槃界教を說き、二には無餘依涅槃界教を說きたまふ。若しは是の如く煩惱斷ずるに由るが故に斷を成就すと名づけ、補特伽羅にして煩惱を成ぜざれば卽ち是の如くなるに由り彼の果たる後有の衆苦に住せず、當に知るべし是れを有餘依涅槃界教を說きたまふと名づくと。若し是の如くなるに由り煩惱の後有の苦果に住せずんば、卽ち是の如くなるに由り乃至壽盡し旣に滅沒し已つて一切の餘依都べて所有無く、此の身に住せず、餘身に住せず、中有に住せず、一切の衆苦の邊際を證得す。當に知るべし是れを無餘依涅槃界教を說きたまふと名づくと。略して三種の念力强き因あり、一には其の年少壯なるに由り、二には前生の串習に由り、三には現法の數習に由る。

第四目　內所證を解す

復次に、五種の相に由りて當に知るべし涅槃は是れ內證法なりと、謂はく信を離るゝが故に、乃至見の審察忍を離るゝが故なり、前の如く應に知るべし。謂はく現法の中にて內の各別の內外增上より生ずる所の雜染に於て如實に有及び非有を了知するなり。

第五目　一切を辯ずることを解す

復次に、三の因緣によりて諸佛の無上菩提を顯示す、一には一切の境を覺了するが故に、二には有及び非有の如實の事を覺了するが故に、三には染淨の二品の一切の法を覺了するが故なり。是の故に他のもの是の如き三處に於て世尊に請問したてまつるなり。

第六目　知相を解す

復次に、諸の有爲法は俱有にして轉ずる時に心をして迷亂せしめ、能く相に於て邪に分別を取らしむ。是の故に如來は諸の弟子の爲に分別し開示して彼の相に於て決定して悟入せしめたまふ。眞實の相を了知せんと欲するが爲の故に、又自らに於て欺誑すること無からんが爲の故に、又他に於て坦然として畏れ無く正しく記別せんが爲の故なり。

設ひ復た已に得るも而も未だ受用せず、其の中間に於て卽ち憙樂の增上力に由るが故に染の欣悅に住するを歡喜ありと名づく。受用する時に於て多く貪愛を生ずるを染著ありと名づけ、故に愛ありと名づく。又未來に於て希求を起すが故に、及び已得に於て領納を生ずるが故に憙樂ありと名づけ、過去世に於て隨ひ憶念するが故に歡喜ありと名づけ、已に獲得し正受用する時に於て貪愛を生ずるが故に染著ありと名づく、是の如きを名づけて第二の差別と爲す。云何んが第二の自體を生起するや。謂はく憙樂等を集因と爲すが故に當來世に於て生老を根となして衆苦生起するなり、此と相違するは當に知るべし是れを第二住無しと名づくと

第二目　遠涅槃を解す

復次に、二種の法あり、更互に相違す、一には煩惱、二には涅槃なり。是の故に雜染法に安住し已つて、卽便ち後有に隨順して轉ず、若し後有に於て隨順し轉ずる時には當に知るべし說いて涅槃を去ること遠しと名づくと。復た六種の鄙碎の士夫補特伽羅の鄙倅の行相あり、一には性となり忿恚多し、二には所作思はず、三には他を逼惱することを樂ふ。四には若し苦に觸せらるれば便ち不實・麁惡の語言を發す、五には或は眞實に能く無義を引く麁惡の語言を發す、六には此に因つて展轉して無量差別の惡言を發起す、但だ詞を少くして喜足を生ずるのみに非ず。二の因緣に由りて諸の出家の者は力め勵みて行を受け、速疾に能く沙門の義利を證し、諸の未信者には淨信を生ぜしめ、其の已信の者をば倍ゝ增長せしむ。何等を二と爲すや。一には忍辱、二には柔和なり。忍辱と言ふは、謂はく他の怨に於て終に返報すること無きなり。柔和と言ふは、謂はく心に憤恚無く他を惱まさゞるなり。

第三目　略說を解す

復次に、要を以て之を言はゞ、如來は略して二種の處所に依りて、無界教を說きたまふ、一には

を生ずるが故に境界の喜に住し未來世に於ては現在の境に依り愛樂を生ずるが故なり。若し是の如き三世の境の中に於て染汚に住すれば、當に知るべし彼れを稱讃する所欲に匱乏ある苦及び生老等の所有る衆苦と爲す、是れを煩惱を生起して作す所の衆苦の過患と名づく。云何んが無常所作の衆苦なりや。謂はく樂に順ずる處に背失あるが故に變壞の苦を起し、苦に隨順する處現在前するが故に厭離の苦を起し、一切の自體終沒する時に於て皆な滅壞するが故に滅壞の苦あり、當に知るべし是れを三種の無常所作の衆苦と名づくと。此の中、如來は是の如き二種の過患を超過して一向の樂に住したまふ、即ち此の樂に於て應に如實に、此れに由るが故に樂なりと知り、復た應に如實に樂の方便を知りたまふ。「云何が樂と爲すや。謂はく一切の境と相應するもの永盡せる無上安隱なり、即ち有餘依般涅槃界なり。云何んが方便なりや、謂はく前の說の如く、五種の受に於て五轉の如實の妙智を發起するなり。若し諸の聲聞、大師の所證の人天の妙樂に超過せるを棄捨し、下劣なる人天の樂を希求せば當に知るべし彼れ諸の智者の所に於て多く毀辱を受け、亦た自らを欺誑すと。

第十項　別嗢拕南第四の一頌半を以て十四門を標す

復次に、嗢拕南に曰はく、

「一住と涅槃に遠きと、略說と內の所證と、一切を辯ずると知相と所學を捨つると業等と、空と
隨行と恒住と、師弟の二の圓滿となり。

第一目　一住を解す

[一]二の因緣に由り當に知るべし名づけて第二住ありと爲すと。謂はく(一)愛あるが故に、(二)第二の自體を生起せんと欲するが爲めに其の因を受習し、此の自體滅して第二の自體次に生起するが故なり。云何んが愛ありや。謂はく諸の可愛の所緣の境界將に現前することを得んとするに、最初に染汚の欣悅を生起するを憙樂ありと名づく。此より已後乃至未だ彼を得ず、多く住し作意し思惟す

【一】總頌の中には多住と云ひ、別頌の中には一住と云ふ、有愛を斷ずれば第二住なきが故に一住なりと雖も有愛斷ぜざれば第二住乃至多住あるなり。

云何んが世俗諦なりや。謂はく卽ち彼の諦の所依處に於て假想して我或は有情乃至命者及び生者等を安立し、又自ら稱して「我が眼は色を見、乃至我が意は法を知る」と言ひ、又言說を起す、謂はく是の如き名乃至是の如き壽量の邊際と、廣說すること前の如し。當に知るべし此の中、唯だ假想あり、唯だ假に自稱するのみ、唯た假に言說する所有る性相作用の差別を世俗諦と名づく。云何んが勝義諦なりや。謂はく卽ち彼の諦の所依處に於て無常の性あり、廣說乃至、緣生の性あり、前に廣說せるが如し、無常の性の如く苦性等あるも當に知るべし亦た爾なりと。若し是の如き世俗・勝義諦の所依處に於て其の世俗諦を如實に是れ世俗諦なりと了知し、其の勝義諦を如實に是れ勝義諦なりと了知す、是の如きを名づけて有爲法見と爲す。若し有爲法見を成就することあらば苾芻は此に齊つて言說滿足す。(二)云何んが名づけて無爲法見と爲すや。謂はく卽ち彼の諦の所依處に於て已に二種の諦の善巧を得たる者は此の善巧の增上力に由るが故に一切の〔所〕依等の盡きたる涅槃に於て深く寂靜を見、其の心趣入し、前に廣說せるが如く乃至解脫す、是の如きを名づけて無爲法見と爲す。若し無爲法見を成就することあらば苾芻は此に齊つて言說滿足す。又此の法見をば、當に知るべし、三種の補特伽羅皆な成就することを得と。一には異生の法隨法行して已に定心を得、博識聰敏にして能く正理の如く諸法を觀察するもの、二には有學の已に、諦迹を見たるもの、三には無學の諸漏永盡せるものなり。

第十二目　苦を解す

復次に、若し人天の盛事を希求し、自ら誓願を發して梵行を行ずる者あらば、當に知るべし彼を人天を稱讚する二種の過患と爲すと。何等を二と爲すや。一には煩惱所生の衆苦、二には無常所生の衆苦なり。云何んが煩惱所生の衆苦なりや。謂はく人天に於ては境界の愛に住し、現在世に依るが故に境界の樂に住し、過去世に依るが故に境界の欣に住し、現在世に於ては過去の境に依り愛樂

第二の心定なる補特伽羅は彼に於て皆な能く如實に了知す、當に知るべし是れを第三の殊勝と名づく、餘は前說の如しと。又彼の第二の心に已に定を得たる補特伽羅は諸の過患に於て如實に了知し、已に修地に入る、卽ち前に得たる所の無我と相應する所有る正見は此の修に由るが故に二時の中に於て其の斷界及び無欲界と彼の一切の菩提分法とに依りて皆な共に圓滿す、初の未だ定を得ざる補特伽羅は心未だ定ならざるが故に彼の一切に於て皆な未だ圓滿せず、當に知るべし是れを第四の殊勝と名づく、餘は前說の如しと。又彼の第二の心に已に定を得たる補特伽羅は所有る多聞、毘鉢舍那の助伴の支分もて彼れ能く勝三摩地を攝受し、能く淨く毘鉢舍那を修治し、是の因緣に由りて止と觀との二種平等に雙び轉ず。心に未だ定を得ざる補特伽羅は應に知るべし多聞と彼とを倶に闕く。是の如く世間の正見多聞を成ずるも、定ならずして正法に住する補特伽羅と、卽ち此の世間の正見多聞を成就し、定を得て正法に住する補特伽羅とに於て當に知るべし此の第五の殊勝の正加行の果たる稱讚すべき利益ありと。是の如く卽ち彼れ已に勝奢摩他と、毘鉢舍那とを獲得するに由り、斷界に依りて應に遍知すべき者をば能く正に遍知し、應に永斷すべき者をば能く正に永斷し、應に作證すべき者をば能く正に作證し、應に修習すべき者をば能く正に修習し、無欲界に依りて彼の一切に於て已に知り已に斷じ已に證し已に修し、所依の色と及び能依の名とに於て正に知り已に知り、所依の無明及び能依の有愛に於て正に斷じ已に斷じ、所依の明淨智及び能依の解脫に於て煩惱斷じ正に證し已に證し、所依の奢摩他及び能依の毘鉢舍那に於て正に修し已に修す。

第十一目　法見を解す

復次に、二の法見あり、一には有爲法見、二には無爲法見なり。有爲法見とは、謂はく一あるが如し、諦の依處と、及び諦の自性とに於て皆な如實に知るなり。云何んが名づけて諦の依處と爲るや。謂はく名色及び人天等の有情數の物なり。云何んが諦と爲すや。謂はく世俗諦及び勝義諦なり。

行の果の稱讃する利益ありと。何等を五と爲すや。謂はく彼の第一の正法に住する者は先づ其の心に未だ定を得ざるに由るが故に奢摩他支の戒未だ清淨ならず、亦た未だ鮮白ならず、卽ち此の第二の正法に住する者は心に定を得るが故に清淨鮮白なり、當に知るべし是れを第一の殊勝の正加行の果たる稱讃すべき利益と名づくと。又彼の第一の、心に未だ定を得ざる補特伽羅は一切の受幷に其の所依幷に其の所緣幷に其の助伴幷に其の轉に於て如實に知らず、知らざるに由るが故に便ち三種の無智を因と爲す過患の爲に觸せらる。何等を三と爲すや。一には受の雜染所作の過患、二には世の雜染所作の過患、三には現法後法の雜染所作の過患なり。當に知るべし此の中(一)受の雜染所作の過患とは、謂はく愚癡の者其の樂受並に彼の隨轉幷に隨染する所に於て貪愛の縛あり、苦受等に於て瞋恚の縛あり、其の不苦不樂受等に於て愚癡の縛及び隨眠の縛あり、愚癡ありて隨眠せらるゝに由るが故なり。(二)世の雜染所作の過患とは、謂はく愚癡の者は現在世に於て貪染の縛あり、過去世に於て顧戀の縛あり、未來世に於て繫心の縛あり。(三)現法後法の雜染所作の過患とは、謂はく彼の是の如き雜染心の者は世に於て受に於て雜染あるが故に便ち能く後有を感ずる業を生長し、此に由りて後有の諸蘊を增益し。當に生ずることを得しめ、又能く所有る貪愛を增長す。謂はく後有愛と及び資財愛となり、後有愛の故に能く當來の所有る自體を生じ、資財愛の故に追求する時に於て極めて疲怠を生じ、若し境界を得れば便ち染惱を生じ、若し獲得せざれば所欲を遂げずして、便ち自ら燒然す、若し得已つて失はゞ便ち愁惱の爲に損害せらる、是の如きを名づけて現法の過患と爲す。若し卽ち彼の作と及び增長とに由り能く後有を感ずる諸の業煩惱の增上力の故に當來に於ける生老死等の衆苦の差別を起す、是の如きを名づけて後法の過患と爲す。第二の心定なる補特伽羅は應に知るべし一切上と相違すと。當に知るべし是れを第二の殊勝と名づく、餘は前說の如しと。又彼の第一の補特伽羅は心未だ定ならざるが故に其の無智の所作の過患に於て若しは自若しは他、如實に知らず、

て能く根を修めて速に圓滿を得しむ、是の故に彼を說いて正行者と名づく。是の如く當に知るべし善說の法と毘奈耶との中に於て大師の美妙なる諸の弟子衆は所得の義を得て正行を修すと。

第九目　無我論を解す

復次に、無我論師に略して三種の正所作の事あり。何等を三と爲すや。謂はく苦集諦の所攝の行の自相・共相に於て應に正しく顯了して無我を安立すべし。當に知るべし此の中、各各別の多數の性を顯はすが故に自相を顯了す、生滅の相似の性を開示するが故に共相を顯了す、是れを第一の正所作の事と名づく。復た無我に於て唯だ因行のみあり、其の所有の如く雜染清淨をば如實に顯了す。當に知るべし此の中三種の受に於て緣として生ずる三種の煩惱隨眠を未だ永斷すること能はずと。(一)其の見道に於ては我見の隨眠をば未だ除遣すること能はず、(二)其の修道に於ては我慢の隨眠をば未だ除遣すること能はず、(三)見慢品に於ては能く無明を起し未だ永斷せず、未だ彼の對治の明を生起すること能はず、是の故に苦の邊際を作すこと能はず、是の如きを名づけて雜染を顯示すと爲す。此れと相違するは當に知るべし卽ち是れ清淨を顯示するなりと、是れを第二の正所作の事と名づく。(三)復た諸行に於て我を增益する薩迦耶見を斷じ、能く實の無我の正見を取るに依りて清淨相の如く應に實に此の無我の見を顯了し、異生の位に在りて能く正しく聖諦現觀を攝受す。又能く諸聖の慧眼を證得し、有學の位に在りて能く上位の盡・無生智を得、無學の位に在りて能く一切の學と無學とをして見修所斷の所有る煩惱を餘無く永斷せしむ、是の故に當に知るべし此の無我の見を能く清淨ならしむるが故に應に顯了すべしと、是れを第三の正所作の事と名づく。

第十目　定を解す

復次に、其の世間の正見多聞を成就せるも、定にあらずして正法に住する者と、卽ち此の世間の正見多聞を成就し、定を得て正法に住する者とに於て當に知るべし略して五種の殊勝なる正しき加

名づけて第五品の衆と爲す。此の中、如來の可意と稱するは、謂はく諸の弟子善說の法と毘奈耶との中に於て諸根を修して圓滿することを得んが爲の故に正行を修行するなり。又一類の不可意なる者あり、謂はく邪行を行じ或は修行せざるなり。是の故に如來第一の衆を觀ては悅意を生起し第二の衆を觀ては不悅意を生じ、第三の衆を觀ては悅意を生起して不悅意を生じ、第四の衆を觀ては不悅意を生じて悅意を生起したまひ、第五の衆を觀ては悅意を生起して不悅意を生じ、亦た復た悅不悅意を生起したまふ。如來は復た此の五衆に於て是の如き五轉の差別の悅と不悅との意を發起したまふと雖も、然も諸の如來は終に彼の愛恚の行相の爲に染汚せられず、諸の煩惱並に其の習氣永に離繫するに由るが故に、根を善修するが故なり。是の故に如來は一切の煩惱並に習を永斷するを所依止と爲して能く善く念に住し、弟子衆に於て諸の雜染無きを說いて五轉無上修根と名づく。又是の如き一切の五轉に於て其の所應に隨つて當に正しく三種の對治を思惟すべし、一には無常想、二には慈心、三には無相定なり。是の如き三種は其の所應に隨つて當に其の相を知るべし。又佛世尊と所作已辦の無學の弟子とを已修根と名づく、彼れ長夜に涅槃を樂ふに由るが故に前の如き諸の有情數の境相現前して或は純ら可愛なる、或は純ら非愛なる、或は多雜類の愛非愛に通ずるに遇ふと雖も、貪瞋癡を永に遠離するに由るが故に、心解脫と及び慧解脫との增上力に由るが故に、卽ち無相に由り心をして彼に於て速疾に棄捨せしめ、意樂に由るが故に諸の境界に於て厭逆の想を起す。又涅槃に於て寂靜の德を見、是の如く速に能く、捨に安住す。此の因緣に由りて一刹那の頃も失念の所作の雜染汚心も亦た起ることを得ず。當に知るべし此に齊りて善く修習するが故に善修根と名づくと。若し諸の有學は未だ速疾に捨に安住することは能はず、餘の煩惱ありて彼れに熏じて相續して雜穢を成ずるが故なり。又一切の三轉の境の中に於て憎惡して起す所の諸の煩惱なるが故に現行の煩惱に逼迫せらるゝ時則ち能く方便して厭逆の想及び過患の想に住す。是の如く修行し

と及び解脫と皆な悉く圓滿す。當に知るべし是れを修行の次第と名づくと。

第八目　修を解す

（一）不善修を辯ず　復次に、一の沙門若しは婆羅門あり、自ら既に諸根を善修すること能はず、而も不如理に他の爲めに根を善修する法を施設す、唯だ所有る境界を棄背するを見て諸根を護ると名づく。然も其れ自ら諸の弟子衆に於て深く染著を生じ、一分は愛を起し、一分は憎を生ず、謂はく其の敎に於て順と逆との因緣にて適と不適との意常に現行するが故に此の微細の自己の雜染に於て慧を以て如實に悟入すること能はず、而も自ら能く諸根を善修すと謂つて增上慢を起し、諸有る是の如き見に隨順する者は彼れ根をして諸の境界を離れしめ、獨り空閑に處すと雖も而も彼の境を緣じて種種の尋思の雜染を發起し、然も智慧の自ら悟入すること無し、是れを亦た諸根を善修すと名づけず。又亦た根を善修するを爲さゞるが故に正行を勤修し、但だ他の言を信じて邪勝解及び邪慢を起す。

（二）善修根を明す　諸佛如來は諸の弟子の爲めに如理に煩惱の斷を施設したまふが故に善根を修すと名づく、唯だ一向に諸の境界に背くには非ず。又諸の如來は其の三種の不共の念住に於て善く其の心を住するが故に諸の弟子衆に染著せず、正行の衆に於ては悅意現行し、邪行の衆に於ては不悅意を行ず、此に由りて所生の貪欲の雜染、瞋恚の雜染は都べて所有無し。是の因緣に由りて弟子と等しく煩惱を斷ずと雖も而も無上に諸根を善修すと名づく。又此の修根は五品の衆に依りて差別あるが故に當に知るべし亦た五轉の差別ありと。謂はく佛世尊に（一）或は弟子の一向に正行にして亦畢竟するあり、（二）或は弟子の一向に放逸にして亦畢竟するあり、（三）或は弟子の正行を修行するも而も畢竟せざるあり、（四）或は弟子の邪行を行じ而も畢竟せざるあり、（五）或は弟子の、多數の品類にして一行は正行、一行は放逸、一行の一分或る時は放逸、或は不放逸なるあり、是の如きを

との有情差別するが故に、當に知るべし一向に適意なると一向に不適意なると、適意不適意相雜するものと差別すと。可意と不可意との境界差別するが故なりとは自ら境界の一向に可意なるあり、自ら境界の一向に不可意なるあり、自ら境界の其の類相雜り少分可意にして少分は不可意なるあり是の如く有情の、或は一向に恩あり、或は一向に怨あり、或は恩怨相雜る。或は一向に得あり、或は一向に失あり、或は得失倶に備はる。若し有情に於て愛して復た愛を生ずるは當に知るべし一向に是れ其の所愛なりと。若し有情に於て恚りて復た恚を生ずるは當に知るべし一向に其の所愛に非ずと。若し有情に於て愛し已つて恚を生じ、或は有情に於て恚り已つて愛を生ずるは當に知るべし是れを所愛非所愛と名づくと。是の如き等の差別の因緣に由り、適意等の三に其の差別あり。又惡行に於て現法の所有る過患を觀じ、當來の所有る過患を隨觀す。是の故に遠離して妙行を修習す。若し六處に於て一切門に由りて皆な誹毀せらるゝは是れを現法の所有る過患と名づく。是の因緣に由りて惡趣に墮す、是れを當來の所有る過患と名づく。此の中、他の爲に誹毀せらるとは、謂はく外道及び餘の世間の聰敏ある者、其の鄙惡なる名稱聲頌を聞けるが爲に咸く共に誹毀す、當に知るべし其の餘は卽ち說く所の如しと。又此の中念住を修すと言ふは、謂く念覺分の創始て發起するは異生地に在り、數ば修習するは有學地に在り、修圓滿するは無學地に在り。覺分を修習して未だ斷界を得ざるに其の斷界に於て正しく希求する時を遠離に依ると名づけ、未だ無欲界を得ざるに無欲界に於て正しく希求する時を離欲に依ると名づけ、未だ滅界を得ざるに其の滅界に於て正しく希求する時を滅に依ると名づけ、下劣を棄捨して覺分を修するが故に、勝妙を廻向して覺分を修するが故に棄捨し廻向すと名づく。又諸の苾芻諸根を守護して慚あり愧あり、是の因緣に由りて惡行を恥ぢ、妙行を修習す。妙行を修するが故に變悔あること無し。變悔無きが故に歡喜を發生す。此れを先と爲すが故に心に正定を得。心正定なるが故に能く見ること如實なり。見の如實なるが故に明

ずと。

(二)如來の說法は其の果利あることを明す　(1)諸佛如來は諸の弟子の爲めに正法を宣說したまふは唯だ明及び解脫の二果の勝利を證得せんが爲なり。當に知るべし是の如く正法を說く者は大果大利自利利他圓滿せざること無く、三世に行じて忘失すること無く、最勝の義に住するが故に、三種の所緣の境差別するが故に說いて三明と名づくと。若しは心解脫、若しは慧解脫を皆な解脫と名づく。是れ愛、無明の根本雜染の勝れたる對治なるが故に未得の明と解脫とを得と爲す。(2)當に知るべし略して四種の修道ありと。(一)謂はく根を修するが故に能く正しく身を修す。(二)身を修して引く所の善行を修するが故に能く正しく戒を修す。戒を修して引く所の念住・覺支を無倒に修するが故に能く(三)心と(四)慧とを修す。此の中、根を修するに復た三種あり、一には世間修、二には有學修、三には無學修なり。若し思擇力を所依止と爲し、可愛・不可愛の境と不如理の相とを取ると雖も、而も煩惱の諸纏を發起せず、設令ひ暫らく起すとも尋いで復た除遣するは是れ世間修なり。若し聖諦に於て已に現觀を得るも、失念に由るが故に或は適意、或は不適意を生じ、或は二意を兼ね、而も心纏縛の堅住と爲らず、速に雜染に於て能く解脫を得るは是れ有學修なり。若し卽ち此の心堅固に安住すれば、前の如く內に於て臨逭あること無く、善く脫し善く修し、都べて一切、下至失念無く、諸の可意・不可意等に於て發心し親近し、彼の有德を計して之に趣向す、是れを無學善淨に根を修すと名づく。

當に知るべし戒を修し心を修し慧を修する三種も亦た爾なりと。此の中最初は是れ初めの修根の所引なり、第二は是れ第二の所引なり。第三は是れ第三の所引なり。修戒修心修慧、相望するに、各三種の所引あるも當に知るべし亦た爾なりと。此の中可意と不可意との境界差別するが故に、恩あると怨あるとの有情差別するが故に、功德と過失と相應する有情差別するが故に、所愛と非所愛

(1)略して說法を擧げ明及び解脫を得と爲す。

(2)廣く四種の修道を明す。

第五目　引發を解す

復次に、其の六根に於て前の所說の五の寂靜の相、寂靜ならざるが故に當に知るべし三種の苦果を攝受すと。謂はく(一)現法の中にて根の增上の雜染に依りて住し、諸の不善の現行を因と爲すに由りて或は他所に於て其の退劣を成じ、或は譏呵せられ、或は殺害せられ、是の如き等の現法の衆苦を受け、(二)又當來の生老病死の種種の諸苦を受け、(三)又當來に先の數習の所引の等流に由りて諸根を護らず諸の雜染を受くるが故に亦た名づけて苦と爲す。此れと相違するは其の六根に於て五種の寂靜相あるに由るが故に、當に知るべし三苦の滅果を攝受すと。

第六目　不應供を解す

復次に、略して二種の世俗の梵志あり、實に福田に非ざるに增上慢を懷き自ら福田なりと謂ひ、自ら我は是れ眞實の福田なりと稱す、當に知るべし非實なる福田の性及び相を成就するが故に應に供養すべからずと。一には他より得る所の利養恭敬の現前せんに猛利に耽著し、諸根饕餮にして性と爲り躁擾にして詐つて現前に離欲の行を示す。二には家產を攝受し、親屬と雜居し、鄙穢にして專ら自ら身を修し、凡そ行ずる所の行、既に自利に非ず亦た利他に非ず、尸羅の正法正行を遠離し、能く善趣に住する善行を遠離し、能く涅槃に住する妙行を遠離す。當に知るべし彼は一切の愚夫異生の類と差別あること無しと。正法に住する者は此れと相違す、當に知るべし是れを勝義の梵志と名づくと。

第七目　明解脫を解す

(一)外道の說法は利なきことを辯ず　復次に、此の正法の外に諸の沙門婆羅門等あり、諸の弟子の爲に法を宣說する時、多分、詰責する勝利を求め、及び他難を免脫する勝利を求めんが爲にす。當に知るべし是の如く法を宣說する者は第一義に就いて義無く利無く自の利益に非ず他を利益するに非

に於ける疑惑所作の苦を受くるなり。此の二種の苦惱に住するに由るが故に、根〔門〕を守らざる增上緣の力より得る所の衆苦もて不安隱にして住すと名づけ、是の如きを名づけて現法の中に於て根〔門〕を守らざる者の所有る過患と爲す。此と相違するは當に知るべし即ち是れ根〔門〕を守護する者の所有る功德なりと。

第四目　觀察を解す

復次に、諸の苾芻あり、欲貪を離れんが爲に方便を勤修し、正しく加行道を修習するに由るが故に諸の煩惱を伏して是の思惟を作す、我れ諸欲に於て欲貪ありて而も覺了せずと爲んや、あること無しと爲んやと。乃ち淨相作意を以て思惟し、斷と未斷とに於て方に決定することを得。觀察作意を依止と爲すが故に貪欲の生起する處所を尋求し、如實に了知し、憶念分別す、是れ諸の煩惱の勝れて安足する處なりと。彼の煩惱未だ永斷せざるに由るが故に、若し煩惱の爲に心を漂漾せらるる時、能く下劣なる分に趣くを了知するが故に便卽ち制伏す、若し制伏せずんば先に得たる所の少三摩地に於てすら尙ほ還つて退失す、況んや能く勝品の功德に進趣するをや。整攝するに由るが故に能く退失せず、亦た能く勝品の功德に進趣す。若し觀察せずんば復た還つて增上慢を發起するが故に亦退失あり、觀察に由るが故に能く證することを決定す。若し心漂漾せんに能く正了知して還つて復た整攝すれば是の故に不退なり、方便を修し欲貪を離れんとするに餘の上位に於て其の所應に隨ふが如きも當に知るべし亦た爾なりと。若し猛利なる見もて審に觀察する時而も生起せず、彼れ便ち決定の勝解を獲得す、我れ諸處に於て已に能く勝伏す、謂はく此の所緣の應に生ずべき煩惱をば我れ是の處に於て已に勝伏せるが故に生起せざらしめたりと、學地を超過すること猶ほし大王の能く己心に隨つて自在にして轉ずるが如く、一切の魔羅の聚落を降伏し、究竟の盡・無生智を證得し、梵行圓滿するなり。

又四相に由りて能く教授教誡に隨順すと名づく、一には能く諸處の差別を分析し、諸行の中に於て無我智を得て見清淨なるが故に、二には諸受幷に所依の滅に於て增上慢を離れ、最極寂靜にして見清淨なるが故に、三には能く未來の諸苦を超越して見清淨なるが故に、四には能く現在の諸苦を超越して見清淨なるが故なり。此の中、內外の諸處の識、觸、受、想、思、愛の衆別を分析して無我を顯示し、緣に依りて起る方便の道理に由りて能く最初の正見清淨を引くこと明の燈に依るが如く、影の樹に依るが如し、彼れ有に非ざるが故に此も亦有に非ず。內外の諸處の差別を因と爲す諸受は、彼の諸處、餘無く滅するに由るが故に此も亦隨つて滅することを顯示し、增上慢を離れ、其の涅槃に於て如實に了知し、最勝寂靜にして、能く第二の正見清淨を引く。現法の中に於て智慧の刀を以て能く永に一切の煩惱を斷滅し、餘無く當來の所有る衆苦を超越することを顯示し、能く第三の正見清淨を引く。遍く苦に順じ樂に順じ、非苦樂に順ずる一切の法の中に於て貪欲を起さず、瞋恚を起さず、愚癡を起さざることを顯示し、見道を顯示し、其の念住に於て善く其の心を住し、修道を顯示し、諸の覺分を修し、謂ゆる諸漏をして永に滅盡せしむるが故に現法の雜染の苦住に超越し、能く第四の正見清淨を引く。

第三目　苦住を解す

復次に諸の惑濁あり、根〔門〕を守らずして住し、諸の境界に於て心に愛染多く、心に散亂多し。此の因緣に由りて二種の苦を受く、一には麁重所作の苦、二には諸法の中に於ける疑惑所作の苦なり。所以は何ん、彼れ方便して應に身を勤修すべく、身を勤修し已つて應に戒奢摩他支を勤修すべきに、身を修せず亦た戒奢摩他支を修せざるを以て因緣と爲すに由るが故に身輕安ならず、心輕安ならざれば是の故に彼れ麁重所作の苦を受け、輕安闕くるが故に勝三摩地を觸證すること能はず、是の因緣に由りて應に如實に知るべきを如實に知らずして多く疑惑を生ず、是の故に彼れ諸法の中

復た最勝の正念正知あり、謂はく已に滅盡定を獲得せる者、或は已に無想定を獲得せる者、或は已に無尋伺を獲得せる者は、當に知るべし、聖住・天住に依止す。此の最勝の正念知の住を除いて、更に餘の能く過上せる者あること無し。或は滅定より起ち已つて住し、或は將に定に入らんとして方便して住し、如實に受の生・住・滅を了知す、是れを最勝の正念正知と名づく。滅定に依りて如實に受を知るが如く無想定に依りて如實に想を知り、無尋伺定にて如實に所有る尋伺を了知するも當に知るべし亦た爾なりと。此の最勝の正念正知に由りて唯だ法を取るが故に是の如き受・想・尋伺に於て我・我所の虚妄分別を起さず。若しは諸の愚夫は受・想・尋伺の差別して生ずる時、受等の法に於て唯だ法のみあるの想を發起すること能はず、但だ是の念を作す、我れ能く領受すと、乃至廣說。是の因緣に由りて彼れ尙ほ正念正知すらあること無し、何に況んや最勝をや。此の中、後說の正念正知は或は不還果、或は阿羅漢なり、當に知るべし前說の正念正知は作意の放逸あること無きを得たる諸の異生の位より一來果に至るなりと。

第二目　教授を解す

復次に、二の因緣に由りて如來自ら言はく、「其の年衰暮し、身力疲怠すれば諸聲聞を勸めて他の說法を請せしむ」と、一には其の少年なるを恃んで專ら憍傲を行じ、放逸に住する者をして自ら怖厭せしめんが爲の故に、二には當來世に於て諸有る苾芻、其の年衰老して勢力あること無く、疑悔を遠離すれば、少年の諸の苾芻等を勸請して正法を宣說せしめ、諸有る苾芻、其の年盛美にして勢力を具足し、疑悔を遠離すれば、恐懼する所無く、他の爲に說法せしめんが爲なり。當に知るべし此の中、略して二種の大集會に處して正法を宣說することあり、一には決擇說、二には直言說なり。決擇說とは、謂はく詰問徵覈の方便を興し、正道理を說いて疑惑を滅除するなり。直言說とは、謂はく諸の聽衆默然として住し、說の如く法師、正法を宣說するなり。

卷の第九十二

攝事分中契經事處擇攝第二の四

第九項　別嗢拕南第三の一頌を以て十二門を標す

復次に、嗢拕南に曰く、

『(一)上の貪と(二)敎授と(三)及び苦住と、(四)觀察と(五)引發と(六)不應供と(七)明解脫と(八)修と(九)無我論と(十)定と(十一)法見とにして(十二)苦を最も後と爲す。』

第一目　上の貪を解す

三の因緣の故に補特伽羅に、所緣の境に於て上品の貪、行ず。何等を三と爲すや。一には康强にして羸劣に非ず、二には端儼にして醜陋に非ず、三には貪を習して貪を捨するに非ず。復た三種の對治に由りて攝受して尙ほ是の如く上品の貪を懷く補特伽羅をすら善說の法と毘奈耶との中に於て梵行を勤修し、其の心を調伏せしめ、寂靜を得しむ、何に況んや但だ中・軟品の貪を懷く微薄塵の者をや。何等を三と爲すや。一には根門を密護するを所依止と爲して一切の欲樂の邊を遠離するが故に、二には食に於て量を知り、初夜にも後夜にも睡眠を減省するを所依止と爲して一切の自苦の邊を遠離するが故に、三には最勝なる正念正知を所依止と爲して中道の出離の行を行ずるが故なり。當に知るべし此の中、四念住に於て善く心を住する者は、或は行の時に於て境界現前せんに若しは相と及び隨好とを取らず、如實に受の生・住・滅を了知し、若しは其の相と及び隨好とを取り、如實に想の生・住・滅を了知し、或は住の時に於て如實に彼の尋思に因る生と住と滅とを了知す。是の如き相に由り正念正知にして一切時に於て、一切種の所緣の境界に於て能く正軌の如く其の心を守護す、是れを最勝の正念正知と名づく。

と爲すやと。二には我を尋求す、我は常なりと爲んや、是れ無常なりと爲んやと。三には云何んが我なりや、我は是れ常なりや、無常なりやと尋求す。四には我所有を尋求す、我は、何れの處に住在するやと。當に知るべし、此の中略して四種に我を尋求するありと、一には自性を尋求し、二には其の轉を尋求し、三には其の因を尋求し、四には窟宅を尋求す。此の中三種は諸行の差別に施設することを得可し、又此の施設は顚倒に非ざるべし。第四の一種は一切種に由るも終に差別を施設することを得可からず。當に知るべし我の自性を施設すとは、謂はく卽ち十二種處に生ずる所の六識幷に受・想・思を施設して以て其の我と爲す、此を過ぎて餘の我は得可からざるが故なり。又卽ち此の我は體是れ無常なり、生あるに由るが故に、老の故に、死の故なり。又此の諸行は諸趣に於て種種なる自體生起し差別し、成實ならざるを以ての故に幻事の如しと說き、想・心・見倒、性を迷亂するが故に陽焰の如しと說き、起盡の法なるが故に增減ありと說き、刹那の性なるが故に名づけて暫時と曰ひ、數數壞し已つて速疾に餘あり、頻頻に續くが故に說いて速疾に現前し相續すと爲し、來るに所從無く、往くに所至無し、是の故に說いて本無くして今有り有り已つて散滅すと爲す。是の如きの相に由り略して生身の展轉無常及び有因の刹那の展轉無常を說く。是の如き三種は如理に我の自性、若しは轉、若しは因を施設す、我の所有の窟宅を施設することは終に得可からず。諸行の中に諸行の性と離れて別に實我ありて諸行の中に住することと得可からざるに由るが故に、是の因緣に由り世俗諦に約するに諸行は尙ほ空にして施設す可からず、何に況んや勝義〔諦に於て〕をや、是の故に一向に空に於て空を立つ。是の如く心の如理作意に由り、聞いて解了するが故に、思うて等了するが故に、修して諦了するが故に、其の次第の如く差別して說いて言く、應當に歡喜すべく、應當に等喜すべく、應當に遍喜すべしと。

瑜伽師地論卷第九十一

し、三には煩惱並に諸の習氣に餘無く離繫するを證得すること究竟圓滿し、四には四種の現法樂住を證得すること究竟圓滿し、五には世間の靜慮・解脫・等持・等至を證得すること究竟圓滿し、六には名身句身文身を證得し、所欲に隨ふことを得、艱難無く正法を宣說するを得ること究竟圓滿するなり。當に知るべし此の中、淨信根を修すること究竟して滿ずとは、謂はく涅槃に於て意樂淨なるが故なり。精進根を修すること究竟して滿ずとは、謂はく能く勇猛に一切有情の義利を造作すること善淸淨なるが故なり。念根を修習すること究竟して滿ずとは、謂はく三念住に忘失の法無く善淸淨なるが故なり。定根を修習すること究竟して滿ずとは、謂はく聖天及以び梵住に於て善淸淨なるが故なり。慧根を修習すること究竟して滿ずとは、謂はく十智力善淸淨なるが故なり。彼れ是の如く能く六處に住して圓滿の因を修するに由り大王と爲ることを得、所謂法王なり。是に由りて六種の圓滿を證得す。謂はく(一)聖神通の增上力の故に大財富自在圓滿を得、(二)諸根淸淨の增上力の故に大舍宅自在圓滿を得、(三)諸の煩惱を斷ずる增上力の故に安樂の諸の坐臥の具を受くる自在圓滿を得、(四)現法樂住の增上力の故に其の舍宅に處し、臥具の中に坐し、第一の諸の損惱無き大安樂住の自在圓滿を證得し、(五)靜慮、解脫、等持、等至の增上力の故に能く一切有情の正しき利益の事を辦じ、遊戲喜樂する自在圓滿を證得し、(六)諸の名身句身文身に於て所欲に隨ふことを得、艱難無く正法を宣說することを得る增上力の故に法王と爲りて能く他の獲得する所に於て平等に分布し作用する自在圓滿を得。是の如きを名づけて六處の修滿ずるを依止と爲すが故に六種の自在圓滿を證得すと爲す。

第十二目　論の施設を解す

復次に、略して四種の我を尋求する論あり、此の論に由るが故に薩迦耶見を未だ永斷せざる者の我を求むる尋思數數現行す。云何んが四と爲すや。一には我を尋求す、我は何を用つて以て自性

る艱險衆苦に墮在して生あり老あり病あり死あり、然も其れ老病死に於て究竟して出離すること能はず、如實に是の如き次第を了知し、老死を觀じ、老死の集を觀じ、老死の滅を觀じ、能く老死の滅に趣證する行を觀じ、如理作意を依止と爲すが故に、久しく已に大資糧を積集せるが故に俱生の慧を以て便ち能く一切の法性を覺悟し、諸法の法住法界に安住す、是の如きを名づけて自ら內に諦を察觀する行を發起すと爲す。

(六)第六相を解す　又彼れ復た上の漏盡を求めんと欲し、方便して宿住念智を發起し、先世を憶念し、諸の如來の正等覺の所に從ひ、漏盡道に於て聞思を積習す。是に由りて長時の積集を發起し、世間の正見を現在前せしめ然も此の正見たるや教授者の如きは此を以て依と爲し、能く菩薩をして一坐に安處し、乃至究竟の漏盡を證得せしむ、是の如きを名づけて廣大に善修して正見現前すと爲す。

(七)第七相を解す　又卽ち彼の教授者の所有る正見の如きは、漸次に勝進するに由り、先に已に下地の諸欲を遠離し、乃至、上無所有處を極め、當に聖諦に於て現觀を得る時便ち無漏の四念住等乃至最後の八聖支道、所有る一切の菩提分法を證す、其の最後を擧ぐれば、當に知るべし亦た前位の一切を攝すと、彼を得るに由るが故に不還果を成じ無漏の菩提分法を得るを以て、是の故に說いて清涼を獲得すと名づく。彼れ是の如く世間の究竟の安樂を獲得し、出世無漏の安樂を獲得し、清涼を得るに由るが故に離熾然と名づく。世間道、乃至已に無所有處の所繫の煩惱を離れ、及び已に見道所斷の諸の煩惱を遠離するに由るが故に離熱惱と名づく。

(八)第八相を解す　餘無く有頂の所繫の煩惱を永斷せんと欲するが爲の故に復た純無漏道を勤修す、所謂る無上の覺支を修習す、是を無上修道に進修すと名づく。此修に由るが故に無學地の中の六種の修法究竟圓滿す、一には聖神通を修すること究竟圓滿し、二には淨五根を修すること究竟圓滿

岸に住するを見る。三には彼れ欲界に在る衆多の憂苦、種種の災横、諸の惡毒刺其の下に遍布するを見る。四には彼れ色界に在りて世間の慧眼に闕くる所あるが故に猶ほし盲冥にして其の中に處在するが如くなるを見る。五には彼れ無色界に在りて、世間の慧眼已に圓滿するが故に、諸の聖慧眼に闕くる所あるが故に、猶し昏闇にして其の上に居住するが如くなるを見る。既に是の如く貪愛の河に墮する諸の有情類の、遍く一切に於て皆な寂靜ならず、若しは觸、若しは岸、若しは下中上の苦の逼迫するを見已つて大悲を發起す、是れを哀愍と名づく。

（二）第二相を解す　又即ち此の哀愍を成就せる者は或は王家、或は帝師の家に生れ、未だ出家せずと雖も內に勇悍を興し、我れ今定んで當に妙跡に通達し、梵行を歸修し、終に退轉無かるべしとす、是の如きを名づけて內に勇悍を興すと爲す。

（三）第三相を解す　又彼れ即ち未だ出家せざる位に於て贍部の影に居り、獨坐思惟し、便ち能く最初の靜慮に證入し、後に自他の老・病・死法に於て正審に觀察し、能く定んで忍可す。是の如きを名づけて諦察法忍內に自ら現前すと爲す。

（四）第四相を解す　又彼の宿世に習ひし所の善根一切の善行に覺發せられ復た勇悍なる諦察法忍の增上力に由るが故に便ち能く廣大なる妙欲を棄捨し、淨信にして出家し施設無しと雖も正梵行者として而も能く自然に禁戒を受持す。此の禁戒を依止と爲すに由るが故に漸次に能く乃至非想非非想處を證す、是の如きを名づけて能く正に出離すと爲す。

（五）第五相を解す　又彼れ世間道を棄て正に出離を求めんと欲するが爲に先世に正等覺せし所に於て、無上究竟の出離を獲得するに由り、正聞し、勝解し、積集し熏修し、身相續するが故に世間道に於て都べて信樂すること無く、是の因緣に由り菩提樹に往く。即ち先時に老病死の假想の道を觀ずるに依つて諸諦の相に於て次第に觀察し、是の思惟を作す、是の諸の世間の有情の類は種種な

性となり煩惱諸纒に執著する補特伽羅に於て其の便を得、媚惑せんと欲するが爲に其の相續に於て所緣を安立す。又即ち根門を護らざる補特伽羅は、般涅槃に於て欲樂劣れるが故に、親愛劣れるが故に、譬へば乾朽せる葦草の舍宅の如し、魔便ち彼の積集する可愛の境界に於て炬火もて之を焚燎す。二の因緣に由りて彼れ境界の爲に常に蔽伏せらる、一には未生の纒は其をして生ぜしむるが故に、二には已生の纒は相續せしむるが故なり。境界の愛の爲に蔽伏せらるるに由り、廣く諸の境界を追覓する時に於て多く種種の惡不善の行を行じ、是の如き邪惡の行を行ずる時に於て復た種種なる惡不善の法の爲に蔽伏せらるること前の所說の如し。邪行を行じ已つて路を失つて行き、流に沿うて去るを順流者と名づけ、此れと相違する所有る白品は當に知るべし是れを非順流者と名づくと。

第十一目　菩薩の餘乘に勝るることを解す（八相を標解す）

復次に、八種の相に由りて當に知るべし總じて後有の菩薩の諸の正行の道及以び道果を攝し、聲聞乘に勝れて無有上なりと爲す。何等を八と爲すや。謂はく(一)哀愍するが故に、(二)內勇悍なるが故に、(三)諦察法忍の性現前するが故に、(四)能く出離するが故に、(五)自の內に諦を觀ずる行を發起するが故に、(六)廣大に善修して世間の正見現在前するが故に、(七)無漏の菩提分法を獲て清淨を得るに由るが故に、(八)善く清淨に覺分を修するに由りて倶に進んで無上純淨なる修道を修し、六處に依止して修習圓滿し、六種の最勝無上圓滿なる德を獲得するが故なり。

(一)第一相を解す　當に知るべし此の中、諸の有情に於て長時に哀愍し、其の心に熏修し、最後有に住する諸の大菩薩は、諸の愚夫の、貪愛の河に墮し、流に順つて漂溺して五相の苦の爲に逼切せらるるを見、既に觀見し已つて深く大悲を起すと。何等を五と爲すや。一には彼れ貪愛の河に墮し正しく尋思せず、不可愛の水に常に逼觸せらるるを見る。二には彼れ內外の六處の三毒の火鶏兩

第九目　不善義を解す

復次に、諸の苾芻あり、義の不善なる、他より聞く所の種種なる文字の一義の言説に於て便ち猶豫を懐き歡喜を生ぜず、今此の中に於て何者を實と爲すやとす。復た四種の能く微妙淸淨なる智見を生ずる無倒の觀門あり。何等を四と爲すや。謂はく(一)極めて精勤して苦を觀察する者の生受因に於ける如實なる妙智、(二)又依持及び所以の因に於ける如實なる妙智、(三)又住因に於ける如實なる妙智、又依・緣・自性・助伴・苦樂非苦樂に隨順する行に於ける如實なる妙智なり。又二緣の故に如來は義の不善に於て補特伽羅の所有る猶豫を除滅したまふ、一には種種なる文詞の表す所の一義を顯示したまふ、文に差別あるも、義に差別無しと、是に由りて能く猶豫を斷除せしめたまふ。二には聖教の廣義を開顯し、此に由りて能く義に於て通達せしめたまふ。云何んが名けて聖教の廣義と爲すや。謂はく資糧地より乃し漏盡に至るを皆な說いて名づけて聖教の廣義と爲す。此の中、邊際の根成熟して住し、如來所化の無我相應する善受堅固にして聞思所成の正見成就し、此を依止と爲し此を建立と爲し、獨り空閑に處し、內外處の四種の識住を緣じて諸有る取識を斷滅せんと欲するが爲に循身念を修する勝れたる奢摩他・毘鉢舍那に攝受せられ、此の親近し修習する勢力に由りて、如實に初識住を緣じ、現觀に隣逼する止觀雙行することを發生す。此より無間に聖諦の中に於て能く現觀に入り、復た更に修習し、所得の道の如く以て漸く進趣し、能く一切の諸漏永盡を得。能く如實に初識住を緣ずるが如く、乃至如實に第四の識住を緣ずること當に知るべし亦た爾なりと。

第十目　隨流を解す

復次に、先の所說の如く根門を護らざる補特伽羅、煩惱の諸纒現前するも捨てざるは世及び出世の思擇と修習との二力の對治に闕乏する所あり、煩惱生じ已つて性となり多く堅執せんに、魔既に性となり堅執なるを了知し已つて便ち其の所に往き、諸の境界を以て之を媚惑す、是の如く彼の魔、

已つて終に正しく修學する所を退捨せず。所を捨つと。此と相違する所有る白品は七の因緣の故に善說の法と毘奈耶との中に於て既に出家し

第八目　著處を解す

復次に、若し苾芻ありて四の著處に依らば、當に知るべし彼れ四種の邪行を行ずるなりと。何等を名づけて四種の著處と爲すや。謂はく苾芻あり、內外處に於て貪愛あるが故に能く後有を感じ、現法の中に於て涅槃を樂はず、是れ初めの著處なり。復た苾芻あり、先に捨てたる所の外の諸の所有る父母等の事に於て顧戀する所ありて其の心を繫縛す、是の如きを名づけて第二の著處と爲す。復た一あるが如し、現法の中に於て一切の利養恭敬を希求し、諸の所得の利養恭敬に於て耽著して捨てず、是の如きを名づけて第三の著處と爲す。復た一あるが如し、是れ有學の者にして已に諦跡を見たるも、餘の我慢あり、少分の貪愛に隨逐せられ、修に於て棄捨し縱逸にして住す、是の如きを名づけて第四の著處と爲す。

云何んが名づけて四種の邪行と爲すや。謂はく彼の最初の後有を愛樂する補特伽羅は現法の中に於て涅槃を樂はず、若し諸の有學縱逸を行じ、此の著處の增上力に由るが故に樂つて在家及び出家衆と共に相ひ雜住す、是の如きを名づけて最初の邪行と爲す。又復た卽ち前の後有を愛樂する補特伽羅は後有を愛樂する增上力の故に邪願を發起し梵行を行ず、是の如きを名づけて第二の邪行と爲す。又復た先に捨てたる所の外事に於て顧戀する所あり、彼の著處の增上力に由るが故に能く正しく修學する所を退捨せしむ、是の如きを名づけて第三の邪行と爲す。又現世に於て利養と及び恭敬とを希求し、諸の得る所の利養恭敬に於て耽著して捨てざる補特伽羅は此の著處の增上力に由るが故に尸羅を毀犯し、廣說乃至、螺音狗行す、彼れ利養恭敬を顧戀するに由り所學を捨てず是の罪を見ず、公然と戒を犯す、是の如きを名づけて第四の邪行と爲す。

學する所を捨つ。云何んが七と爲すや。謂はく(一)諸の異生未だ諸の異生地を超度すること能はず、五取蘊の衆の苦惱の法に於て如實に五轉を了知すること能はず。(二)或は復た異生諸の妙欲に於て上品に其の過患を觀ること能はず。(四)又行く時に於て及び住する時に於て恆常に縱逸にして可愛の境に於て不如理なる所有る相貌を取り、繫念せざるが故に恆常に善品の惡刺を尋思し非理に尋思す。(四)又無畏無し、若しは王、若しは餘のもの事に因りて呼逼せんに怖畏に由るが故に、則便ち隨從し、復た親愛あつて、諸の親屬に於て顧戀する所あり、彼れ若し招命せば親愛に由るが故に、則便ち隨從す。(五)又境界に於て或は貪に隨順し、或は瞋に隨順し、或は癡に隨順し、猛利なる諸の煩惱の纒を發起す。(六)又卽ち彼の心の相續の中に於て常に隨縛あり。(七)又下劣なる勝解を成就するに由り、一切の廣大なる勝解あること無し。謂はく出離・遠離・涅槃に於て彼の劣の勝解を成就するに由るが故に諸の境界に於て其の心趣入す、一切の父母等の事に於て孑然として顧戀無きこと能はざるに由るが故に其の出離に於て心趣入せず、八聖支に於て勝解無きが故に其の遠離に於て心趣入せず、彼の果たる煩惱斷の中に於て勝解無きに由るが故に其の涅槃に於て心趣入せず。略して二處に由りて一切の漏を攝す、一には見所斷、二には修所斷なり。當に知るべし此の中、非理作意と及び所緣の境とを順漏法と名づくと。若し諸の有學は能く發起する修所斷の漏と非理作意の所緣の境界とに於て未だ永斷せずと雖も、而も妙慧に由りて正に通達するが故に說いて此の順漏法の中に於て其の心寂靜なりと名づく。猶ほ失念の增上より生ずる所の微劣纒あるが故に未だ清涼と名づけず、未だ宴默と名づけず。然も其の起す所の一切の見道所斷の諸漏皆な永斷するが故に亦た清涼と名づけ、當來に於て生ぜざる法なるを以ての故に亦た宴默と名づく。而も彼の異生にして下劣なる諸の勝解を成就する者遍く一切の諸の漏法に順ずるに於て、心寂靜ならずんば清涼と名づけず宴默と名づけず。當に知るべし是の七の因緣に由るが故に復た還退して正しく修學する

に於て善く修習するが故に彼れ復た各各に別別の境界に馳散すること能はず、當に知るべし爾の時彼れ善く調伏し、神力彼に於て自在を得るなりと。

第六目　勝資糧の善備を解す

復次に、諸の苾芻あり、先に已に妙慧の資糧を修集し、復た善友に値遇することを得、圓滿して諸行の三種の過患を聽聞す、謂はく(一)現法の過患、(二)後法の過患、(三)現法後法の過患なり。當に知るべし此の中、大種の互に違するを所依止と爲す一切の疾病を現法の過患と名づけ、惡趣の諸行常恆に隨逐して能く作し能く往くを後法の過患と名づけ、先に現法に於て憙貪を成就するを以て所依と爲し、能く現法後法の老死を引くを現法後法の過患と名づくと。是の如きを總略するに三種の苦あり、一には疾病の苦、二には惡趣の苦、三には老死の苦なり。謂はく善趣に依り及び惡趣に依りて是の如き諸の過患を聽聞し已つて精進し修行し、法隨法行し、斯に因りて能く聖諦現觀に入り、次に善淨なる無我の眞智に由り、空室に入るが如く、內外の六處皆な空なりと現觀す。彼れ爾の時に於て慧を以て、諸の境界に依り妄念の所生の諸の煩惱の纒能く損害を爲し、及び餘殘の煩惱の隨眠貪愛の隨眠あるに通達し、又自ら、相續中に有る諸の煩惱、有る諸の貪愛、有る諸の苦惱、有る諸の損害及び過、一切の煩惱貪愛に通達し、有餘依般涅槃界を證し一向に寂靜なり、次に後に復た有無餘依般涅槃界を證す。彼の先の修習は、譬へば草木の枝條莖葉の如く、正法の聞慧は聖道を積集し、法隨法行を所依の筏と爲し、修道の中に於て正勤修習し、漸次に心善解脫を證し、有餘依般涅槃界に住し、一切の災惱をば皆な解脫することを得。既に此に住して、當に知るべし究竟して衆苦を越度して彼岸に到ると。

第七目　所學を捨つることを解す

復次に、七の因緣に由り、善說の法と毘奈耶との中に於て出家し已ると雖も復た還退して正に修

の如く惡作し、是の如く非法雜染にして住す」と。已に淨信なる者には其をして變退せしめ、未だ淨信ならざる者には信をして生ぜざらしむ。是の故に彼の人、現法の中に於いて此の如き追悔の所作、發憤の所作、遠避の所作、譏毀の所作の種種なる諸苦を領受す、此れ及び前に說ける後法所作の衆苦を領受するを總略して一と爲し、衆苦を受くと名づく。

（三）重ねて料簡す　此の中云何んが非律儀と名づくるや。謂はく是の如き現法・後法に於て衆の過患を具し、境界に行處して不如理に諸相隨好を妄執するの邪想を起し、邪想を先と爲して其の住處に於て彼に順ずる相應の尋思を發起し、此に由り前の所說の一切の過失に於て如實に觀見すること能はず、復た所有る過失を觀見すと雖も未だ數數ば多修習すること能はざるが故に、所依の中に於て諸の煩惱品の所有る麁重を未だ除遣すること能はず、身未だ輕安ならず、謂はく色心の身なり。此の行相に由つて纒及び隨眠猶ほ尙ほ和合して能く思擇と修習の二力の對治に違背せしむるを非律儀と名づく。此と相違するは當に知るべし即ち是れ律儀の行相なりと。又此の律儀は三の因緣の故に能く修習をして速に圓滿を得しむ。何等を三と爲すや。所謂最初に善說の法と毘奈耶との中に於て淨信にして出家し、既に出家し已つて便ち神力と相應する聞慧を用て蟲獸に相似の六根を攝持し、既に攝持し已つて復た如理作意の思慧を用て正審に過患を觀察し、方便して聞慧の上、修慧の下に在るが故に中間に繫縛す、中間に繫し已つて彼の神力に於て自在を得るや不やを試察せんと欲するが爲に乃ち淨相を取り、諸の境界に於て之を放縱し彼の神力に於て未だ自在ならざるが故に、各各に別別の境界に馳散して然も其れ究竟して逃竄すること能はず、未だ善く彼の過患を觀見せざるが故に彼の蟲獸をして未だ善く調伏せざらしめ、又神力をして自在を得ざらしむ。是を了知し已つて復た如理なる思慧を多修習し、究竟に到らしめ、作意を超過し、轉た更に勤修して循身正念す。此の正念

受多分現行するなり。因の故なりと言ふは、謂はく當來世の所有る受因卽ち思求する願なり。是の如き乃至有頂の所有る諸法は緣生の性なるが故に皆な是れ無常なりと觀察す、是の如く如理に審正に諸の離欲地を觀察するを是れを上品の世間律儀と名づく。當に知るべし此の中、前の二律儀は思擇力の攝なり、後の一律儀は修習力の攝なりと。(6)彼れ旣に是の如き勝妙なる不放逸力を成就し、如實に聖諦の理に通達するが故に、便ち能く、我我所を執して以て前行と爲す一切の見道所斷の煩惱を永斷し、又能く有學の律儀を獲得す。(7)彼れ卽ち有學の律儀を修習し、復た能く、妄りに我慢を執して以て前行と爲す一切の修道所斷の煩惱を永斷し、究竟して無學の律儀を證得す。此の上に更に若しは過え若しは勝れたる所餘の律儀無し。

第五目　聖敎に入りて護らざるを解す

(一)總標　復次に、若し諸の苾芻、已に聖敎に入りて諸根を護らずんば、彼れ便ち一向に衆苦を造作す。謂はく後法の苦或は現法の苦なり。

(二)別解　當に知るべし是の如く根を護らざる者は癩病の人の蘆荻の叢に入るが如し、其の葉の可愛の境界なるが爲に其の身を破裂し、當來に微細に倶行する後有の衆苦を攝受して而も覺ること能はず、是の如きを名づけて後法の苦に由ると爲し、衆苦を造ると說く。彼れ又此に於て染を起し著を起し廣く毀犯を生じ、是の因緣に由りて空寂なる阿練若處に住すと雖も、而も追悔を現行して起す所の尋思の苦を受く、菅茅の刺其の足を傷害するが如し。無畏にして淨仙衆に往くこと能はず、設ひ强ひて淸淨僧の中に趣入すとも便ち有智の同梵行の人の爲に其の所犯を擧せらる、彼れ內に覆藏の意を懷くに由るが故に心、鴆毒の如く能く擧する邊に於て憤を發し擾害す。又諸の有智の同梵行者は、其の鄙劣にして沙門を捨てんことを樂ふと知つて、卽便ち遠避して與に若しは諸の村邑、若しは阿練若に同住せず、咸共に譏毀して言はく、「此の長老是の如く毀犯し、是の如く惡說し、是

(6)有學律儀。

(7)無學律儀。

有る善根の苗稼を損壞す、是の因緣を以て非律儀と名づく。(3)又一あるが如し、能く速に作意し、諸の境界に於て自ら攝斂するも然も未だ所有る過患を觀じて再び起らざらしむること能はず、是れを軟の世間律儀と名づく。(4)又一あるが如し、能く速に作意し、諸の境界に於て而も自ら攝斂し、亦た能く彼の所有る過患を觀じ、再び起らざらしむ、是れを名づけて中の世間律儀と爲す。(5)此を依と爲すに由り、四種の作意の所攝の九相の心住を獲得すること、當に知るべし前の聲聞地に說けるが如しと。此を得るに由るが故に欲貪を離れたる諸の異生類と名づく。彼れ先に加行の觀を修習する時に農を營む者の如く、增上を得しむること猶ほし大王の如し。先に得たる所の等至より生ずる所の勝妙なる諸受に於て能く是れ大放逸の安足する處なりと正了知し已つて便ち臣の如くならしめ、正法を聽聞して增上して生ずる所の勝奢摩他の攝護する所の毘鉢舍那、其をして彼の所生の受の性は是れ緣生なり、緣生の性なるが故に體是れ無常なりと觀察せしむ。彼れ此に由るが故に便ち意地の諸の過患の相と倶行する作意を以て離欲を得、既に離欲し已つて復た等至の所依の別を觀ずるが故に十種差別し、時分別なるが故に多百差別す。此の中、等至の所依別なるが故に十種別なりとは、謂はく(一)有尋有伺と、(二)無尋唯伺と、(三)無尋無伺と、若しは(四)喜倶行すると、若しは(五)樂倶行すると、若しは(六)捨倶行すると、(七)退分と、(八)住分と、若しは(九)勝進分と、(十)順決擇分となり。時分別なるが故に多百差別すとは、謂はく卽ち是の如き行相の、生住滅の時分に依りて作す所の差別の道理を觀察するに當に知るべし復た多百の差別ありと。是の如く彼の所生の受は是れ無常の性なり、流轉し差別する種種なる性なりと了知し已つて略して三相に由りて復た審に彼は是れ無常の性なりと觀ず、謂はく(一)所依の故に(二)現行の故に、(三)因の故なり。所依の故なりとは、謂はく極乃至第四靜慮の所有の色身は是れ受の所依なり、現行の故なりとは、謂はく極乃至第四靜慮の所有る色身は是れ受の所依なり。現行の故なりとは、謂はく極乃至滅受想定の其の間の想

(3)軟品の世間律儀。
(4)中品の世間律儀。
(5)上品の世間律儀。

於て能く涅槃を障ふ。此の因緣に由りて能く當來の有暇の圓滿を得、決定せざるが故に此の後有の願は當に知るべし彼の微細の縛の中に於て最極微細なりと。何を以ての故にとならば彼の三十三天宮の中に一の園囿あるが如し、其の中に、天或は非天を禁縛す、然も彼れ法爾として暫らくして解脫を得、天の妙欲を以て遊戲して住し、乃至未だ逃竄の心を起さず、此の心若し起らば便ち妙欲を失ひ、還つて自身、縛の爲に縛せらるるを見、彼れ纔に心を起さば便ち微細なる縛の爲に縛せらる、時分を以ての故に說いて微細と名づく、識り難きが故に微細と說くには非ず、縛せらるゝの時に由り能く自ら我れ今縛ありと解了す。若し諸の苾芻、心に後有を願ふ、此の心若し起らば便卽ち縛せられ、既に縛せられ已つて、自身に縛ありと了知すること能はず、是の故に此の縛は最極微細なり。當に知るべし時分と及以び識り難きとは俱に微細なるが故に極微細と名づくと。

第四目　一切種律儀を解す

(一)七章を開く　復次に、若し諸の苾芻は精勤し加行し、諸根を守護し、其の律儀と及び非律儀とに於て應當に了知すべく、軟と中と上との世間と、有學と無學との律儀に於て應當に了知すべし。

[1]**(二)次第に律儀非律儀を解釋す**　云何んが律儀なりや。謂はく一あるが如し、可愛の境に於て諸の雜染心を忍せず受けず執せず取らざるなり、設ひ暫らく起らしむるも尋いで還つて棄捨す、是れを律儀と名づく。[2]云何んが非律儀なりや。謂はく一の苾芻の農を營む者の如し、善士に親近し、正法を聽聞し如理作意し、所緣の境界の良田を正修して其をして善根の苗稼を生起せしむるも、然も其の種性、猛利多貪にして未だ嘗て貪欲を對治する猛利なる慚愧を串習せず、亦た未だ曾て、若し勝妙なる境界現前するに遇ふことあらざるも、彼れ本性猛利なる貪に由るが故に、未だ曾て貪を對治することを串習せざるが故に、所有る慚愧皆な羸劣なるが故に便ち貪纏を起し、堅執して捨てず、心貪纏に於て防護すること能はず、而も自ら放縱にして非理作意と相應する心牛境界の田に入り、所

(1)律儀。
(2)非律儀。

(七)所學を捨つると(八)著處と、(九)不善の義と、(十)隨流と(十一)菩薩の餘乘に勝るとにして、(十二)論の施設は最後なり。」

第一目　唯緣を解す

先の所作の諸の業煩惱及び自の種子相續して引く所に由りて諸受生起す、其の六觸處は唯だ爲に緣と作るのみ、心より起す所の功用の所引の諸の取受の業の如し、手は唯だ能く取受を助くる緣と作るのみ、當に知るべし此の中の道理も亦た爾なりと。

第二目　尋伺を解す

復次に、諸有る苾芻如法なる邊際の臥具を受用し、空閑に安住せんに若し能く尋思をして躁擾ならしめ、勝妙なる境相心に來現することあらば當に知るべし是れ魔の品類の所作なりと。此の中、苾芻は應に九相を以て其の心を安住せしむべし。(一)諸の境界と相應する尋思に從つて心を攝めて、住し、客尋思の隨一更に起ること無からしむ。(二)若し此の依に由り、此の境界に由りて喰味する所あらば此の境界に於て其の所得に隨ひ其の所住に隨つて能く自ら遠離す。(三)彼れ爾の時に於て可愛の事に於て終に諸欲の尋思に依止せざるも而も所作あり、(四)恚の尋思及び(五)害の尋思に於ても亦た能く遠離し、(六)其の心を淨修し、(七)現法の中に於て能く涅槃を得。(八)涅槃を得已つて終に他と共に諍競して住せず、謂はく諸の諍競は佛の聖法と毘奈耶との中に於て極めて衰損を作す。(九)是の如く愚癡の所生の尋思も亦た尋思せざること餘の外道の如し。

第三目　願を解す

復次に、若し先世の後有の苦因に由り、現法の中に於て六觸處の果法ありて轉じ、六境界に由りて損惱せらるる時、若し苾芻あつて、後有を求めんが爲めに自ら誓願を發して梵行を修行す。彼れ爾の時に於て其の第七の後有の苦因をして倍々更に增長せしめ、轉た損惱を爲さしめ、現法の中に

第九目　愛相を解す

復次に、佛の善説の法と毘奈耶とに於て深心に愛樂する新學の苾芻は二種の相に由りて應に正了知すべし、一には身相に變異無きに由るが故に、二には心相に變異無きに由るが故なり。謂はく(一)形色の極めて光淨なるに由るが故に、面貌熈怡として極めて鮮潔なるが故に、膚體充實して羸損せざるが故に、諸根適悦にして寂靜なるが故に身に變異無し。(二)所得あるに隨つて喜足を生ずるが故に、食樂して資財を畜積し而も受用することを遠離するが故に、其の室家に於て顧戀無きが故に心に變異無し。

復た三種の婬貪の對治あり、能く婬貪をして未だ生ぜざるをば生ぜざらしめ、已に生ぜざるをば尋いで斷ぜしむ。一には不應行の想を思惟し、二には極不淨の想を思惟し三には一切の根門を密護するなり。此の中、一切の根門を密護する略と廣とは應に知るべし聲聞地の如しと。謂はく能く諸の根門を密護すとは、母邑をして身を摩觸せしめざるが故に善く身を護ると名づけ、諸の母邑に於て覩ず聽かず憶念せざるが故に善く根を守ると名づけ、設ひ見設ひ聞き設ひ隨つて憶念すとも卽ち能く長時に正念を攝受し、猛利なる慧を以つて深く過を見るが故に、善く念に住すと名づく。彼れ是の如く善く其の身を護り、善く諸根を守り、善く正念に住するに由りて便ち能く不應行の想を思惟し、此に由りて煩惱は心を蔽うて暫らくも欣味せしむること能はず。又た能く極不淨の想を思惟す。此に由りて煩惱は心を蔽うて速に廻轉せしむること能はず。

第八項　別嗢拕南第二の二頌を以て唯緣等の十二門を列釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『(一)唯緣と(二)尋思と(三)願と、(四)一切種の律儀と、(五)聖敎に入りて護らざると、(六)勝れたる資糧善く備はると、

第七目　護根門を解す

復次に、略して二種の補特伽羅あり、一には根門を密護すること能はず、二には善く能く根門を密護す。云何んが名づけて根門を密護すること能はざる補特伽羅と爲すや。謂はく一あるが如し、諸の境界に於て如理に作意し思惟すること能はず、可愛の色に於て貪欲纒の爲に纒縛せられ、不愛の色に於て瞋恚纒の爲に纒縛せられ、又彼の境に於て所有る過患を隨念すること能はず、設ひ隨念することあるとも善く修習せず。是の因縁に由りて心諸纒の爲に覆蔽せられ、諸纒を起し已つて制伏すること能はず。又是の異生は未だ有學の心・慧解脱を得ず、上の無學の心慧解脱に於て如實に知らず、知らざるに由るが故に諸の有學の心・慧解脱に於て亦た滿ずること能はず、彼れ爾の時に於て未だ修力を以て所依止と爲さず、煩惱品の所有る麁重に於て未だ永害すること能はず、又先の善き、思擇力に依らず、念成就せざるを因縁と爲すが故に當に知るべし根門を密護すること能はずと。此の三相に由りて補特伽羅は、應に知るべし根門を密護すること能はずと、一には纒に由るが故に、二には思擇所攝の對治に缺減あるに由るが故に、三には修力所攝の對治に缺減あるに由るが故なり。此れと相違するは當に知るべし白品なり、諸の根門に於て善く能く密護すと。

第八目　敎を解す

復次に、二種の相に由りて諸の聖弟子は其の大師の所說の法敎に於て能く正しく記別し、能く善く宣說す。謂はく能く眞實の義を辯釋するが故なり。云何んが二と爲すや。一には是の意趣に由りて宣說し善く能く是の如き意趣に悟入して而も正しく記別す。二には如來無量の門を以て廣く聖敎を宣べ、無量品の補特伽羅の爲に種種辯說したまはんに此の法敎に於て法性に違はずして能く正しく記別す。

知るべし、此の中第一第二の處所の勝解は初學の所依なり、第三の處所の所起の勝解は第二學の與めに其の所依と作り、後の三の處所の所起の勝解は第三學の與めに其の所依と作ると。若し此の智に由りて能く煩惱を斷じ、及び煩惱の斷ずるを當に知るべし是れを心無忘失と名づくと。又當來に於ける後有の因斷ずるを說いて愛盡と名づけ、現法の境界の諸の雜染斷ずるを說いて取盡と名づく。又彼の第一の補特伽羅は正しく出離の勝解を信ずることありと雖も而も未だ決定せず當來に於いて彼をして一切悉く皆な棄捨し及與び變異せしむるに堪へたり、第二には其の無惱の勝解あり、第三には其の遠離の勝解あること、當に知るべし亦爾なりと。若し諸の有學の六處の勝解は、能く當來に棄捨し及與び變異するに堪ゆること無しと雖も然も幼童の等持念慧に似て皆な悉く羸劣なり。聖處に生ずと雖も未だ善修せざるが故に貪瞋癡に於て遠離して餘無く永斷すること能はず、慧劣れるに由るが故に、及び貪等を未だ永斷せざるに由るが故に、若し勝妙なる境界現前するに遇はば時時に忘念す。此の因緣に由りて勤めて生起し、心解脫及び慧解脫を學し諸の煩惱を盡す、是の故に有學の補特伽羅には仍ほ所作あり、此の分に由るが故に減劣と名づく。若しは阿羅漢の六處勝解は尙ほ能く當來の變異に堪ふること無し、況んや棄捨することあらんや。善道を修するが故に、貪瞋癡等永斷して餘無く愛盡・取盡の勝解圓滿して已に盡智・無生智を得るが故に、六種の恒住に攝受せらるるが故に、所有る智慧有學の如く時時に忘念するに非ざるが故に阿羅漢の六處の勝解は第一義にして最極圓滿なるに由り亦た最極淸淨を成就すと名づく。餘の下位の補特伽羅は此の因緣に由るに非ず亦た自ら高かに所解を記別すること無く、三摩地の所行所緣に於て散亂無きが故に、內心住と名づく。卽ち三摩地善く成滿するが故に不狹小と名づけ、一切の煩惱を皆な離繫するが故に善解脫と名づけ、所有る智慧を善く積集するが故に說いて善修と名づけ、見滅盡するが故に愛味あること無く、其の心一向に善にして無罪なり。

(一)四種の相に由つて速かに諸漏を盡すことを明す　復次に、四種の相に由り正に精進を起し、速に諸漏をして永盡して餘無からしむ。何等を四と爲すや。(一)一には平等精進を發起す、謂はく極めて掉擧せず、發勤精進し、其の身心をして疲倦し損惱せしめ、亦た極下せず、精進を發起し、身命を虚棄して、所得無からしむ、是れを初相と名づく。(二)又此に由らずして憍慢を生ず、謂はく我れ獨り能く發勤精進し、餘は則ち爾らずと、是れ第二の相なり。(三)又正に發勤精進する果たる世間の安觸の所證の差別に於て愛味あること無く、此と俱行して不放逸を修す、是れ第三の相なり。(四)又精進平等の相に於て能く善く攝受して當來に於て退失あること無からしむ、是れ第四の相なり。是の如く正に發勤精進するが故に諸漏を永盡して阿羅漢を成ず。

(二)六處三學の名字を列ぬ　若し彼の大師と有智の同梵行との所に於て自己の所證の差別を記別せんと欲せば、唯だ阿羅漢のみ六處の勝解にて能く正に記別す、謂はく三學及以び五種の補特伽羅に依る。

云何んが名づけて六處勝解と爲すや。一には出離の勝解、二には無惱の勝解、三には遠離の勝解、四には愛盡の勝解、五には取盡の勝解、六には心無忘失の勝解なり。云何んが三學なりや。一には增上戒學、二には增上心學、三には增上慧學なり。

(三)五種の補特伽羅六勝解を行じ三學に依ることを明す　云何んが五種の補特伽羅なりや。一には異生居家に處在して唯だ信に依りて出離を欣樂する勝解を發生し、境界の縛より心に出離を求む、是れを第一の補特伽羅と名づく。二には異生既に出離し已つて唯だ戒に依り諸の有情に於て身語意に由りて無惱行を行ず、是を第二の補特伽羅と名づく。三には異生能く利養及び恭敬の愛を斷じ、現法の中に於て欲界の欲を離る、是れを第三の補特伽羅と爲す。四には有學の已に諦跡を見たる、是れを第四の補特伽羅と名づく。五には無學の阿羅漢を得たる、是れを第五の補特伽羅と名づく。當に

癡の火乃ち燒然することを得るは、世の見る所の草木と相似す。梵行を善修する諸の聖弟子は當來の後有の苦生ぜざるが故に、諸の如來の成就せる明力と少分相似す、現法の緣の苦は生ぜざるに非ざるが故に、設ひ暫く生じ已るも速疾に斷ずるが故なり。然るに諸の如來は二種の明力を皆な悉く成就す、是の故に說いて無上明持と名づく。

第五目　隨遍を解す

復次に、一の沙門或は婆羅門あり、勝れたる現量を越ゆ、世間の愚夫すら尙ほ迷惑せず、況んや諸の智者をや。一切の愚癡の安足する所の處をば虛妄なる推度を以て依止と爲し、或は前際に依り、或は現法に依り堅固に執著して四種の苦樂の邪論を建立す。謂はく(一)前際に依つて虛妄に宿作因を計度するが故に諸の苦樂を立つるは一向自作〔論〕なり。(二)虛妄に自在變化を計度して以て因と爲すが故に諸の苦樂を立つるは一向他作〔論〕なり。(三)虛妄に先には自在の作なり、然も後には宿作因の所作なりと計度するが故に諸の苦樂を立つるは自作他作〔論〕なり。(五)虛妄に無因生を計度するが故に諸の苦樂を立つるは非自非他所作の因生〔論〕なり。或は現法に依り虛妄に計度し、若しは自の欲、自作の功用に隨つて生起する所の者を立てゝ自作と爲し、若しは欲に隨はず自ら覺知せずして、他に引かるゝ者を立てゝ他作と爲し、若しは所欲に隨ひ自ら覺知する所にして他に引かるる者を自他作と立て、若しは自他の功用を先と爲して生起する所の者但だ境界の現在前するに由るが故に微細なる因觸を了達すること能はず、便ち邪執を起し、自他の作す所の因より生ずるに非ずと謂つて無因性を立つ。此の中唯だ諸の根境識の和合の所生の苦樂の得可きありて、都べて前際或は現法の中の若しは自、若しは他の實有として得可き無し、唯だ卽ち此の三事の和合に於て假に自他を立つ、是の故に當に知るべし唯だ其の觸のみありて一切に遍行して苦樂の因と爲ると。

第六目　勝解を解す

眞實なる意趣を觀察すべし。云何んが四と爲すや。謂はく或は(一)有と(二)無と、或は(三)異と(四)不異となり。彼の六處に生あり滅あるを以て展轉して異相の施設することを知るべし。生滅に由るが故に有と無と得可く、異相あるが故に他の種類に待して異性得可く、自の種類に待して前後別無ければ不異得可し。六處永滅せば、常に寂靜の相なり、是の故に彼の戲論と俱行する四種の行相に由りて思惟し觀察すること道理に應ぜず。當に知るべし此の中能く無義を引く思惟分別より發する所の語言を名づけて戲論と爲すと。何を以ての故にとならば是の如き事に於て勤めて加行する時、少分をも善法を增益し不善法を損すること能はざればなり。是の故に彼を說いて名づけて戲論と爲す。

第三目　縛の解脫を解す

復次に、內外處に於て若し欲貪あらば、境界現前し、或は現前せざるも而も其の諸根は棄捨すること能はざるあるが故に名づけて縛と爲す。若し欲貪無くんば設ひ境界正に現在前するあるとも諸根は彼に於て尙ほ能く棄捨す、況んや現前せざるをや、故に解脫と名づく。

第四目　相を解す

復次に、梵行を善修して諸の蘊・處に於て我我所の見を已に永斷せる者は若し身を損し、乃至命を奪ふ苦受の爲に觸せらるゝも、終に色變・心變の得可き無し、是の如きを麁にして善く根を守る相と名づく。彼れ是の如く善く諸根を守り四苦を解脫する增上力に由るが故に四種の喜を得。一には當來の外緣の生苦に解脫を得るに由るが故に、二には當來の內緣の生苦に解脫を得るに由るが故に、三には現法に於て般涅槃する時二種の依の所作の衆苦、解脫を得るに由るが故に、四には命終し已つて世の見る所の草木と相似して一切の衆苦相續せざるが故なり。二種の相に由りて草木と相似す、一には六處、有情想を離るゝは世の見る所の草木と相似す、二には六處を所依止と爲す貪瞋

るが故に藏と名づけ、隨眠に由るが故に護と名づけ、我見に由るが故に覆と名づく。所餘の差別は廣說すること前の攝異門分の如し。

第六項　第二の總嗢拕南一頌を以て四門を標す

復次に、總の嗢拕南に曰く、

『(一)同分に因る等と、(二)唯だ緣と作る等と、(三)上品の貪等と、(四)後は多住等なり。』

第七項　別嗢拕南第一の一頌を以て因同分等の九門を別釋す

別の嗢拕南に曰く、

『同分に因ると思と、縛の解脫と相と觸遍きと、勝解と根門を護ると、敎と愛相とを後と爲す。』

第一目　同分識に因ることを解す

諸の聖弟子は、同分識に因りて無我に隨入す、三種の相に由りて諸識の中に於て正觀して住す。云何んが同分識に因りて無我に隨入するや。謂はく現見する五有色處、四大種の身は若しは增、若しは減、若しは取、若しは捨にして無常の性なるに由るが故に彼の識を緣ずるに於て無常に隨入す。無常ならば則ち苦、苦ならば則ち無我なり。是の因緣に由りて無我に隨入す。云何んが無我の性に隨入し已つて三種の相に由りて諸識の中に於て正觀して住するや。謂はく(一)諸の邪見は一切皆な我見を以て根と爲す、是の故に此の根をば必ず應に先づ斷ずべし。又(二)正慧を以て卽ち彼の識を觀ずるに所依所緣差別して轉ずるが故に無量種あり。又(三)此の識を觀ずるに差別して轉ずる時に刹那の量の如きすら安住し堅實なること尙ほ得可からず、何に況んや畢竟をや。

第二目　思を解す

復次に、六處の滅の究竟寂靜なる無戲論の中に於て戲論と俱なる四種の行相に由りて應に思惟すべからず、應に分別すべからず、應に詰問すべからず、唯だ應に他に依りて覺慧を增長し、審諦に

の保命、卽ち爾の時に於て倏ち殀喪に歸し、(二)不善心にして殞ちて諸の惡趣に往く。是の故に彼の二種の雜染に於て一刹那の中にても深く過患を見、慚愧を發生するすら尙ほ妙善と爲す。況んや能く相續せんをや。

第六目　著處を解す

復た衆多の、魔の歸向する所の所有る雜染の著の安足する處あり、智者は了知して應當に遠避すべし。謂はく已離欲の諸の異生の類の繫屬する定生喜樂の諸處の所有る愛味の著の安足する處、未離欲の者の妙五欲に於て受を依と爲すが故に、憙樂し諍競し貪愛し耽染する著の安足する處、恩に於て怨に於て諸の有情所の一切の愛恚の著の安足する處、廣大なる上品の能く境界の樂に順じ苦に順じ、求むる所、尋ぬる所、貪愛す可き所を引く所有る三世の著の安足する處なり。

當に知るべし此の中、可欣可樂可愛可意の諸句の差別は前に已に辯ぜるが如しと。不可欣とは未來世に於て樂ふ可からざるが故なり。不可樂とは、過去世に於て隨つて憶念するに由つて樂ふ可からざるが故なり。不可愛とは、諸の境界に於て樂ふ可からざるが故なり。不可意とは、諸受に於て樂ふ可からざるに由るが故なり。又苦と言ふは、卽ち境界に於て樂ふ可からざるが故なり。損惱と言ふは、卽ち諸受に於て樂ふべからざるが故なり。違背と言ふは、過去世に於て樂ふべからざるが故なり。逆意と言ふは、未來世に於て樂ふ可からざるが故なり。

第七目　頌の中の等の字を解す

復次に、二の雜染あり、一には外境雜染、二には內受雜染なり。眼等を依と爲し、色等の境に於て諸の貪著を起すを外境雜染と名づけ、諸觸を依と爲し、內受に貪著するを內受雜染と名づく。此の二の雜染は永に寂滅なる般涅槃の中に於て皆な得可からず、諸の魔怨の能く遊履する所に非ず。

復次に、十五相に由りて應當に一切種類の愛見の雜染を了知すべし、謂はく諸處に於て諸纒に由

第三目　因緣を解す

復次に、二の因緣に由りて六識身を說く、內の六處を以て因と爲し、外の六處を以て緣と爲す。謂はく(一)內の六處は彼の種子の爲めに依附せらるゝが故に、又(二)內の六處は相續一類にして先に得たる所の如く畢竟じて轉ずるが故なり。境界は爾らず、彼の種子の依附する所に非ざるが故に、又一類に相續して轉ずるに非ざるが故なり。

第四目　染路を解す

復次に、二種の相に由りて當に總じて一切の雜染を了知すべし、一には一切の雜染の自性、二には一切の雜染の行路なり。自性と言ふは、所謂る欲貪なり、諸の雜染の與めに根本と爲るが故なり。行路と言ふは、謂はく內外處なり、能取所取差別あるが故なり。

第五目　保命を解す

復次に、若し諸の苾芻は二の處所に於て等しく隨つて觀察す、若しは行若しは住如理作意を所依止と爲し、二の雜染に於て應に其の心を脫すべし。云何んが名づけて二の處所と爲すや。謂はく(一)自の保命忽然として殀喪すると、(二)不善の心に殞ちて諸の惡趣に往くとなり。云何んが名づけて如理作意を所依止と爲すと爲すや。復た何等の二種の雜染に於て應に其の心を脫すべきや。謂はく我れ寧ろ種種なる楚撻の損害に遭ふも己が諸處の身に於て復た我をして不善心にして殞ちて諸の惡趣に生ぜしむること勿れと。又我れ應當に喜樂と俱なる如實の觀察もて、現行せる不善を對治せんと欲するが爲めに懇勵して諸行無常を修習し、(一)若し經行する時には諸の境界に於て諸相を執取し隨好を執取する所有る雜染に心をして解脫せしめ、(二)遠離して住する時には諸の不善、種種なる尋思の所有る雜染に於て心をして解脫せしむべしと。當に知るべし此の中第一の雜染は是れ相似因なり。第二の雜染は是れ相似果なりと。又二の雜染現在に轉ずる時に二處に生ず。謂はく(二)自

【一】內の六處を種子の依附處と云ふは第六の意根を取る阿羅耶識ありて種子を持すればなり。

卷の第九十一

・攝事分中契經事處擇攝第二の三

第五項　別嗢拕南第四を以て離欲等の七門を列釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『(一)離欲未離欲と、(二)問と(三)因緣と、(四)染路と、(五)保命と、(六)著處と(七)等なり、皆な廣說すること應に知るべし。』

第一目　離欲未離欲を解す

若し苾芻あつて其の欲界に於て或は已離欲、或は未離欲にして、五妙欲意所識の法と、定地の三世とに於て三種の纒と及び彼の根本の所有る隨眠とに由つて正に雜染する時に現法の中に於て究竟涅槃を趣證するに任ぜず。當に知るべし此の中過去世に由り彼に依りて識を取り、未來世に由り彼に屬して識を取り、現在世に由り彼に著して識を取る、彼の根本の所有る隨眠は相續に墮在して常に隨逐するに由るが故に彼を執して識を取る。此と相違して雜染無き時現法の中に於て能く究竟涅槃を趣證するに堪ふるなり。

第二目　問を解す

復次に、聖教の中に於て當に知るべし四の如理なる問者ありと。一には淨信ある若しは諸の長者、若しは長者の子、二には聰慧を具せる多聞の苾芻、三には是れ大師の親承の侍者、四には即ち大師なり。二の因緣ありて佛は、弟子に於て知りて而も故らに問ひたまふ、謂はく弟子の、請問せんと欲すと雖も而も無畏無く、或は其の義に於て了知する所無きを觀じたまひ、(一)現在・未來の過を遮せんが爲の故に、(二)正法をして久住することを得しめんが爲の故なり。

前の恩德に於て報ゆること能はざるを以ての故なり。

(五)上來所明の略義を明す　當に知るべし此の中總略の義をいはゞ、謂く善說の法と毘奈耶との中にて既に出家し已つて四の因緣に由り自己に於て正に應に行ずべき所の如きを而も行ずること能はず、大師の聖敎に於て出家の正しく應に行ずべき所の如きをも亦た行ずること能はず、謂はく(一)相雜住することを樂ふが故に、(二)音聲に隨逐する勝解に隨順して言說するが故に、(三)利養恭敬に耽著するが故に、(四)此の耽著する增上緣の力に由り正法を聽聞すれども自利利他の行を修せざるが故なり。又佛世尊は自ら能く善く衆を御し徒衆を攝することを顯はすことを欲せず、唯だ深く諸の有情を哀愍するが故なり、是の因緣に由りて邪行を行ずる弟子衆の中に於て能く護惜すること無くして分明に示語し、寧ろ弟子をして此の分明にして麁なる利益語に由りて現に正しき法と及び毘奈耶とを捨てゝ當に利益を獲せしめんや、此に住して廣く邪行を興さしむることなし。

瑜伽師地論卷第九十

しめ、善尋思を以て正しく尋思し、則ち其の中に於て能く善く量を知り、諸の雜染を離れて言說を起し、經行の處に於ては能く正しく經行し、所坐の處に於ては能く正しく安坐す。是の如き等の一切の處所に於て皆な善く量を知り、是の如く行の時の淸淨を先と爲し、其の住の時に於ても亦た淸淨なることを得、其の間能く觀察作意を以て、數數現行の煩惱を觀察し、淨く心を修治し、是の如く能く一向に諸の白淨の法を成就するに趣く、一切の魔怨も奪ふこと能はざる所にして及び彼に反する一切の惡不善の法の四種の雜染なり。謂はく(一)後有の因性なるが故に、(二)現法の身心遍く燒惱するが故に(三)惡趣の因性なるが故に、(四)生等の衆苦の因性なるが故なり。

言說に二あり、一には音聲に隨逐して勝解する言說、二には法隨法行に隨逐する言說なり。第一の言說は是れ正法に於て受持し讀誦し、請問し徵覈するより發起する所なり。第二の言說は是れ所緣に於て心をして究竟解脫に安住せしめ、敎授を施設するより發起する所なり。若しは是の義の爲に如來出世したまひ、諸の弟子衆は聖敎に隨入す、應に勤めて是の如き善法を修習すべし。若し彼の法と毘奈耶との中に於ては一切種の所修の梵行無く、當に知るべし亦た梵行を修する者無しと。其の中に於て梵行無きを以ての故に梵行と稱する者は皆な邪行を修し師弟展轉して互に相ひ觸惱し、各〻自ら尊卑なる體式ありと許す。正法の中に於ては二は倶に得可し。若し大果大利の應所證の空と應所修の空とを棄捨することあらば極下劣と爲し大罪過あり、利養恭敬の愛味に漂はされて多く邪行を習ふ、當に知るべし彼れ大梵行灾の爲に觸惱せらると。彼れ是の如く利養恭敬に耽嗜し愛著し、自ら逼惱するに由るが故に能く解脫に隨順する言敎に於ては聽聞せんことを欲せず、爲に宣說すと雖も耳を屬すること能はず。或は利養恭敬に貪著する增上力の爲の故に而も强ひて聽聞すれども心に解を求むること無く、修行せんと欲せず、究竟して善く自ら調伏することを爲さず、乃至般涅槃を證することを爲さず。是の如き事に由りて大師を憎惡し、不平等を行じ、廣大なる現

空を遍知して內外空を以て內外の法に於て無我の見を修するを所依止と爲し、(三)無我の見は即ち彼に於て無常の見を修するを所依止と爲し、(四)無常の見は正法を聞き如理作意するを以て所依止と爲す。

(三)空を修する位を明す　又此の中に於て若し諸の茲濁欲貪を離れんが爲に精勤し修學し觀察し作意する增上力の故に、欲界繫の諸の不淨の相に於て勉勵して思惟するも、彼れ外空に於て未だ作證せざるが故に、其の正道に於て未だ善修せざるが故に、染習に趣くが故に、外空の性に於て心證入せず、愛樂せざるが故に便ち其の中に於て我慢門に由り心流散せず等しく隨つて觀察す。寂靜相を以て內空を思惟するも、彼れ我慢をば未だ永斷せざるに由るが故に、其の正道に於て未だ善修せざるが故に亦た此の中に於て心證入せず。遂に內外の一切の行の中に於て無我の見を修するも、無我の見に於て未だ善修せざるが故に亦た其の中に於て心證入せず。乃ち內外の一切の行の中に於て無常の見を修し、心をして不動ならしめ、諸行の中に於て無常を見るが故に、一切種の動皆な所有無し。故に無常の見を不動界と名づく。是の處に於て心に不勝解無きに由るが故に正慧を以て如實に通達し、或は不淨を緣じ、或は慈悲を緣じ、或は息念の所有る境界を緣じ、或は諸行の無常の境界を緣じ、三摩地に於て極めて多修習するを因緣と爲すが故に心をして調柔せしめ、是に由りて漸次に一切處に於て皆な能く證入す。此の因緣に由りて所證の空に於て能く證すること圓滿す、所證に於て圓滿なることを得るに因るが故に其の心は一切の能く順下上分結を解脫す。此の因緣に由りて所修の空に於て能く修すこと圓滿なり、所修に於て圓滿を得るに因るが故に無學の正見等の法を成就す。若し是の時に於て乃至空に於て未だ證入すること能はずんば、當に知るべし此の時は此れ異生位なり、若し時に證入するは是れ有學の位なり、若し時に修習して已に圓滿を得るは是れ無學の位なり。

(四)空を修する方便を明す　此の修をして圓滿を得しめんが爲の故に正行を勤修し、心をして證せ

【六】順ずる下上分結とは五順下分結(一)身見(二)戒禁取(三)疑(四)欲界貪(五)欲界瞋と五順上分結(一)色貪(二)無色貪(三)掉擧(四)慢(五)無明なり。

(一)廣く分別して空性を明す　復次に二種の空あり、一には應所證の空、二には應所修の空なり。若し諸の苾芻樂つて雜住に依らば此の二種に於て成辦すること能はず、應所證の空を證すること能はざるが故に、應所修の空を修すること能はざるが故なり。二種に於て成辦せざるに因るが故に當に知るべし四種の妙樂を退失すと。謂はく(一)一切の惡事を攝受し、衆苦を遠務するに於て皆な悉く解脱する妙出離樂と、(二)貪欲瞋恚等の事を解脱する初靜慮の中の妙遠離樂と(三)尋伺止息する妙寂靜樂と、(四)二解脱の攝にして造作する所無く恐怖無き攝の妙等覺樂となり。二解脱とは、一には時愛心解脱、二には不動心解脱なり。若し阿羅漢の根性鈍なるが故に、世間定に於て是れ其れ法を退す、未だ所有る定障を解脱すること能はざるが故に時愛心解脱と名づく。法を退するを以ての故に時時に退失し、時時に現前す、故に說いて時と名づけ、現法樂に於て憙んで證住せんと欲するが故に說いて愛と名づく。不動心解脱とは、謂はく阿羅漢の根性利なるが故に是れ法を退せず、一切皆な無漏の道力を以て解脱を得、一切種に於て都べて退失すること無し、當に知るべし此の中、決定の義は是れ三昧耶の義なりと、餘は前說の如し。造作する所無く恐怖する無しとは、當に知るべし異類の得可きありて阿羅漢の心をして、中に於て染して彼れ變異するが故に愁歎を生ぜしむる等無きなり。

應所證の空に略して二種あり、一には外空、二には內空なり。外空とは、謂はく一切の五種の色想則ち五妙欲の引發する所を超過し、欲貪を離るゝに於て正しく能く作證す。內空とは、謂はく內の諸行に於て增上慢を斷じ、正しく能く作證するなり。應所修の空に亦た二種あり、一には內外の諸の境界の中に於て無我の見を修し、二には卽ち彼に於て無常の見を修するなり。

(二)空の所依を明す　此の四種の空は、當に知るべし四行を所依止と爲すと。(一)外空は內住の心の增上緣の力を以て生ずる所の樂を離れ其の身を滋潤するを所依止と爲し、及び(二)我慢なれば內

處に住し、先に城邑・聚落・人の想に於て作意し思惟し、次に復た阿練若の想を思惟するなり。彼れ即ち自身の中に於ける此の想を觀察して究と爲す、謂はく人邑等の想なり。此の想は不空なり、謂はく阿練若の想なり。又餘は不空なり、謂はく阿練若の想を緣と爲す阿練若の想と相應する諸の受・思等なり。或は即ち此の想は一類に由るが故に之を觀じて空と爲す、謂はく麁重なる不寂靜住及び熾然等無きなり。一類に由るが故に觀じて不空と爲す、謂はく微細にして極めて寂靜なる住と熾然を離れたる等とあるなり。又即ち彼に於て能く山林卉木禽獸等の阿練若の差別相の想を取りて復た思惟すること無く、但だ地に別相無き想を思惟す。又即ち彼に於て能く險惡高下不平にして諸の刺棘瓦礫等多き地の差別相の想を取りて復た思惟すること無く、但だ地の平坦細滑にして猶ほし掌中の如く別相無き想を思惟し、此より次第に色想等を除き、漸次に空處、識處、無所有處の差別相の想を思惟し、後、非想非非想處の所有る相の想に於て作意し思惟し、一切の處に於て前の所說の如く空性を歷觀し、諸の下地には麁想ある等を觀じ、諸の上地には靜想ある等を觀ず、是の如きを名づけて諸の聖弟子世間道を以て空性を修習すと爲す。當に知るべし乃至上極の無所有處に趣かんが爲め、漸次に離欲し、斯より已後聖道の行を修し、漸次に無常の行等を除去し、能く非想非非想處に趣き、畢竟じて離欲すと。彼れ爾の時に於て自ら身中空にして諸想無しと觀ず、謂はく一切の漏一向に寂靜にして永く熾然を離る。又身中に法ありて不空なりと觀ず、謂はく此の依止を緣として六處展轉して互に相ひ任持し、乃至壽住を緣と爲す諸の清淨の法は壞滅することあること無し。當に知るべし世尊昔修習せる菩薩の行位に於て多く空を修して住したまへるが故に能く速に阿耨多羅三藐三菩提を證したまへり、無常苦を思惟して住するが如きには非ずと。是の故に今は上妙菩提を證得し住し已つて昔串習し隨轉せる力に由るが故に多く空に依つて住したまふ。

第十目　三の空性の中、第三の證修の二空を解す

し、是の如きを名づけて彼を引く空住と爲す。當に知るべし此の中內の煩惱に於て如實に了知し、知ることあるを有と爲し、知ること無きを無と爲す、是れを空性と名づく。

第九目　三の空性の中、第二の邪正二空を解す

復次に、正見圓滿し、已に諦跡を見たる諸の聖弟子は皆な能く如實に彼の邪空を越え、亦た能く如實に正空に入る。世間道及び出世道を以て空性を修習する其の義云何ん。謂はく此の處に於て彼れ有に非ざるが故に正しく觀じて空と爲し、若しは此の處に於て所餘は有なるが故に如實に有なりと知る。譬へば客舍の一時の間に於て諸の人物無きを說いて名づけて空と爲し、一時の間に於て諸の人物あるを說いて不空と名づけ、或は卽ち此の舍をば一類無きに由り說いて名づけて空と爲す、謂はく材木無く、或は覆苫無く、或は門戶無く、或は關鍵無く、或は隨つて一分所有無きが故なるも、然も此の舍卽ち舍の體の空なるには非ざるが如し。是の如く自體の所依止の身を亦たは受趣と名づけ、亦たは想趣と名づけ、亦たは思趣と名づく。然も此の自體の所依止の身に一時の間に於て一類の或は受、或は想、或は復た思等の一切の煩惱隨煩惱等無きに由りて說いて名づけて空と爲し、一時の間に於て一類あるに由りて說いて不空と名づく。或は卽ち自體の所依止の身に一時の間に於て一類の或は眼、或は耳、或は鼻、或は舌、或は身の一分、或は意の一分無きに由りて說いて名づけて空と爲す。然も自體の所依止の身卽ち自身の體一切皆な空なるには非ず。當に知るべし此の中總略の義をいはゞ若し諸法の所有る自性畢竟じて皆な空なりと觀ずるを是れを空に於て顚倒して趣入すと名づけ、亦た佛の善說したまへる所の法と毘奈耶とに遠越すと名づくと。若し諸法は自相に由るが故に一類は是れ有なり、一類は有に非ず、此の有と非有とを畢竟じて遠離すと觀じ、又有性は一時の間に於て一分遠離し、一時の間に於て一分離せずと觀ず、是の如きを名づけて彼の空性に於て顚倒あること無く如實に趣入すと爲す。世間道を以て空性を修すとは、謂はく聖弟子は、遠離

く言說を起す。或は見聞、或は覺、或は知の增上力に由るが故に六觸處に於て其の[五]五轉に由り如實智を起すを世間の邊際の方便を得と名づく。未來の諸行の因永盡するが故に名づけて能く世間の邊際に到ると爲す。世の因果に於て如實に知るが故に世間解と名づけ、能く正しく最後身を任持するが故に善く世間の邊際に運轉すと名づく。現法の中に於て一切の境界の愛永盡するが故に、具に恒住するが故に說いて能く世間の愛を超ゆる者と名づく。是の如き等の所說の行相に由り當に知るべし世間の邊際を得と名づくと。

第七目　堅執を解す

復次に、善說の法と毘奈耶との中の諸の出家に非ざる者隨つて一の惡不善の尋思あり、未だ生ぜざるも、生ずる時は一向に能く梵行の障礙を爲す、如し彼れ生じ已らば堅執して捨せず。此の中行ぜざるを最も殊勝なりと爲す、設ひ行ある者も應に堅執すべからず、相續の中に於て應に居住を作す依止と爲すべからず。何を以ての故にとならば刹那の雜染は修する所の梵行を傾動すること能はざるも、要ず當に相續して能く傾動すべきが故なり。

第八目　三の空性の中第一の二種の空性を解す

復次に、當に知るべし略して二種の空住あり、一には尊勝なる空住、二には彼を引く空住なり。(一)諸の阿羅漢は無我を觀じて住す、是の如きを名づけて尊勝なる空住と爲す。阿羅漢の法爾の尊勝に由り無我を觀じて住するを諸住の中に於て最も尊勝と爲す、是の如く或は尊勝なる所住、或は卽ち尊勝に住す、此の因緣に由り是の故に說いて尊勝なる空住と名づく。(二)彼を引く空住とは、謂はく一あるが如し、若しは行若しは住、如實に煩惱の有無を了知し、煩惱ありと知らば便ち斷ずる行を修し、煩惱無しと知らば便ち歡喜を生ず。歡喜を生ずるが故に乃至心をして三摩地を證せしむ。心に三摩地を證得するに由るが故に如實に諸法の無我を觀察し、晝夜に隨學して曾て懈廢無

【五】五轉とは六觸處の(一)自性(二)因緣(三)雜染の因緣(四)清淨の因緣(五)清淨を觀ずるとなり。

後有の種子或は增し或は減す、此を因と爲すに由りて當來の後有或は生じ〔或は〕生ぜず、能く種子を攝受する煩惱或は集起し、或は滅沒することあるを以ての故に一切の世間及び出世間の所有る法敎をば如實に建立す。唯だ內法に於てのみ此の大師あり、諸の弟子の爲に正に宣說する所の師の假立の句は眞實に得可し、諸の外道には非ず。

第三目　王國を解す

復次に、欲界の中に於ける諸の器世間は當に知るべし譬へば王所王の國の如く、有情世間は譬へば臣民の如く、彼の惡天魔は譬へば君主の如しと。

第四目　二の世間を解す

復次に、二の世間あり、一には有情世間、二には器世間なり。其の器世間は火災等の爲に壞滅せられ、有情世間は刹那刹那に各各の內身任運に壞滅す。

第五目　有爲を解す

復次に、空に二種あり、一には有爲、二には無爲なり。此の中、有爲の空は常恒に久久安住して變易せざる法及び我我所無きなり。若し諸の無爲は唯だ空にして我及び我所あること無し。又此の空性は諸の因緣を離れたる法性の所攝なり、法爾道理を所依趣と爲す。此れ或は是の如く、或は異り或は非なり、一切處に遍じて、同じく法爾道理に歸せざる無し。

第六　身行を遮することを解す

復次に、如來は能く一切の世間の邊際を得るを遮せず、唯だ身行隨往して能く世間の邊際を得るを遮す。此の中當に勝義の道理に依りて應に世間を知り、若しは世間の邊際の方便及び世の邊際を得べし。謂はく方處に於て世間の想あり、假名を施設する增上力の故に、卽ち世間の若しは智、若しは想の增上力に由るが故に世間ありと說く。若しは想、若しは智の增上力の故に諸の世間に於て廣

略して二種の道不同分あり、一には自性不同分、二には行相不同分なり。（一）若しは苦集に趣く行、若しは苦滅に趣く行、是れを自性不同分と名づく。當に知るべし初めの一は能く雜染に趣き、第二は能く清淨に趣くと、是れを此の中の不同分の義と名づく、卽ち此の滅に趣く行なり。（二）或は〔三〕有爲の共相の行轉ずるあり、或は〔四〕有爲無爲の共相の行轉ずるあり、是れを行相不同分と名づく、當に知るべし此の中若し諸の有爲の共相の行相をば彼れを道果に望めて不同分と名づけ、若し有爲無爲の共相の行相をば彼れを道果に望めて亦た同分と名づく、何を以ての故にとならば道果たる涅槃は常に無我なるが故なり。

第二目　師不同分を解す

復次に、正法の內に於て略して五種の師の假立の句あり、諸の外道の師の所製の論の中には都べて得可からず、謂はく（一）諸取に趣く行、（二）諸取盡くるに趣く行、若しは（三）一切の法を遍知し（四）永斷し（五）苦の邊際を作すなり。若しは五相受の建立處に於て一一の相の中に四相の薩迦耶見に依らず、彼を用て依と爲して能く四種の行相の憍慢を害す。若し慢を因と爲さば三の過患あり、慢を離るるを因と爲さば三の勝利あり。當に知るべし此の中、憍慢を懷く者は涅槃界に於て其の心退還す、怖畏するに由るが故なり、是れを第一の過患と名づくと。諸の惡行恒に現行する中に於て、及び可愛の諸の雜染の事に於て其の心趣入す、是れを第二の過患と名づく。涅槃界に於て深く怖畏を生ずる增上力の故に、便ち能く當來の生等の生死の重病を生起し、怖畏の增上力に由るが故なるが如く、是の如く亦た諸の惡行に於て、及び可愛の諸の雜染の事に於て、其の心趣入する增上力に由るが故に、能く當來の生等の生死の重病を生起するに堪ふ。生等の病の如く眼等の處癰、貪等の毒箭も當に知るべし亦た爾なりと、是れを第三の過患と名づく。此と相違するは當に知るべし卽ち是れ慢を離るるを因と爲す三種の勝利なりと。若しは緣に隨つて起る增上力の故に現法の中に於て

〔三〕有爲の共相の行。有爲の共相の行とは、無常觀を云ふ。
〔四〕有爲無爲の共相の行とは空無我觀なり。

は諸の業煩惱に依止して諸の生處に於て往還して絕ゆること無し、故に淪沒と名づく。其の水の大海は唯だ其の中に墮し暫時衰損するのみ、或は傍生趣は業煩惱の一分の勢力に由りて其の中に生じ、暫時淪沒するも而も究竟するに非ず、當に知るべし是れを沒同分ならずと名づくと。

(三)此の中超渡同分ならずとは、謂く水の大海をば、未だ欲貪を離れざる諸の異生類すら倘ほ能く越渡す、何に況んや其の餘をや。生死の大海には三分を建立す、(一)未離欲の者は五の可愛の境の差別に由るが故に、(二)已離欲の者は意の識る所の可愛の諸の法境の差別に由るが故に、(三)諸の有學の者は內の六處に差別あるに由るが故なり。其の未離欲の諸の異生類は五の可愛の境界の大海に於て未だ超渡すること能はず、其の已離欲の諸の異生類は內の各別の六處の大海に於て未だ超渡すること能はず、彼れ此に於て未だ超渡せざるに由るが故に前の二種の境界の大海に於て亦た未だ超渡せず。其の有學の者は普く六處に於て遍知して苦と爲し、即ち所緣に於て正道を修習す、彼れ是の如き住に安住するに由るが故に未離欲已離欲地の二種の境界に於ける所有る心意の所緣の境相明了に現前す。又猛利なる觀察作意に由りて先の所見に於て等しく隨つて憶念す、此の因緣に依り彼に於て速疾に慧を以て通達し、亦た能く除遣し、又彼れ其の六處の大海に於て速に能く超渡す、能く超渡するが故に前の二種の境界の大海に於て畢竟じて超渡し、及び能く、能く所學を棄捨する煩惱を發し、能く尋思して心を亂す煩惱を發し、能く世間の利養恭敬に耽著する煩惱を發し、能く一切の惡行煩惱を發すを超渡するなり。

第四項　別嗢拕南第三を以て同等の十門を列釋す

嗢拕南に曰く、

『道と師との不同分と、王國と二の世間と、有爲と身行を遮すると、堅執と三の空性となり。』

第一目　道不同分を解す

ざるが故に唯と名づけ、此の見は、他を信じ、行相を欣樂し、周遍尋思し、聞に隨つて起す所の見を遠離し、審察して忍し、唯だ自ら證するが故に內の所證と名づく。此の道果の法に亦た五相あり、當に知るべし已に攝異門分に其の相を分別せるが如しと。

第十目　二海不同分を解す

復次に、海に二種あり、一には水海、二には生死海なり。三種の相に由りて當に知るべし、水海と生死海と同分にあらずと。何等を三と爲すや。一には自性の同分ならざるが故に、二には淪沒の同分ならざるが故に、三には超渡の同分ならざるが故なり。(一)此の中自性同分ならずとは、謂はく水の大海は色の一分を用て自性と爲すが故に邊あり量あり、生死の大海は一切の行を用て自性と爲すが故に邊無く量無し。

(二)此の中淪沒同分ならずとは、謂はく若しは所有る淪沒、若しは此の淪沒に由り、若しは是の如く淪沒すること、皆な同分ならざるなり。謂はく水の大海は或は傍生趣、或は人趣あり中に於て淪沒す、生死の大海には諸天世間も亦た常に淪沒す。又水の大海は唯だ身に由るが故に中に於て淪沒し、語に由らざるが故に、意に由らざるが故に、貪に由らざるが故に、瞋に由らざるが故に、癡に由らざるが故に、生等の衆苦の法に由らざるが故に中に於て淪沒す。此の中に諸の業と煩惱と彼の果との三分を宣說す、其の次第の如く應に彼の相を知るべし。生死の大海は亦た身に由るが故に、乃至亦た生等の苦に由るが故に中に於て淪沒す。諸の出家の者は妄尋思に由り、妄觀察に由り、自ら起す所の諸の邪分別に由り、種種の不正尋思を發起し、心をして擾亂せしめ生死の海に於て恒常に淪沒す。

又餘の外道は諸の煩惱の繋に纒繋せらるるが故に生死の海に於て恒常に淪沒す。諸の在家の者は恒常に無間に衆苦に逼切せられ煩惱燒然するも、而も厭ふこと能はず、故に淪沒と名づく、其の餘

第七目　著を解す

復次に、內法に住する者は二種の著に於て應當に二種の過患を了知すべし。謂はく諸の異生は二緣の識及び能依の受に於て無我の性を了知すること能はざるが故に、未離欲の者の、利養恭敬增上の業緣より起す所の諸受に於て第一の著あり、已離欲の者の諸の欲緣を離れて起す所の諸受に於て第二の著あり、此の著を因と爲して當來生起するを說いて名づけて生と爲す。又諸の外道は取著に由るが故に諸の繫縛を生ず、繫縛生ずるが故に能く一切の惡不善の法を生ず、當に知るべし是れを第一の過患と名づくと。又此の著の增上力に由るが故に當に正しき法と毘奈耶とに於て沒し及び當來世の生等の衆苦差別して生ずべく、現法の中に於て此の增上力を因緣と爲すが故に般涅槃せず、當に知るべし是れを第二の過患と名づくと。此と相違するは應に知るべし卽ち是れ白品の差別なりと。

第八目　無我を解す

復次に、四の因緣に由りて法無我に於て能く究竟に到る。謂はく一切の法は皆な無我なりとは、(一)識の自性、識の諸の因緣、識の諸の助伴を除いて其の餘の所有は不可得なるが故に、(二)又識の自性は是れ無常なるが故に、(三)又此の因緣は是れ無常なるが故に、(四)又此の助伴は是れ無常なるが故なり。

第九目　聖道を解す

復次に、八聖支道の法に由るが故に、及び此の果の故に正しき法と及び毘奈耶とを顯發す。五種の相に由り當に八聖支道の法は最勝にして無罪なることを知るべし、謂はく(一)現法の煩惱の有無に於て善く分別するが故に名づけて現見と爲し、(二)能く煩惱をして離繫を得しむるが故に無熾然と名づけ、(三)若しは行若しは住若しは坐若しは臥、一切時の中にて皆な修習す可く修習し易きが故に名づけて應時道と爲し、(四)涅槃に導くが故に名づけて引導と爲し、(五)一切の諸の外道に共ぜ

には阿羅漢にして已に無學の心解脫意を得たるものなり。未得意とは、謂はく三學に於て創めて事業を修する有學の異生は彼れ全く未だ一切の二種の心解脫意を得ず、是の故に異生の體の後の有餘依滅及び自體の後の無餘依滅涅槃界を希求する時に三學の中に於て多く修學して住す。若し諸の無學は已に心解脫意を證得すと雖も而も或は失念し、縱逸を行ずる時に便ち現法樂住を退失することあり、彼れ此の現法樂住に於て或は退し退せずと雖も然も堪能無くして解脫を退失す。若し不放逸を修行することある者は一切皆な解脫を證得することを爲す、然れども已に解脫を證得すれば退すること無し、不放逸を修するも復た何の所用あらん。若し現法樂住を證得せんが爲めに勤めて功用を作すは工業を造るが如し。不放逸には非ず。若し諸の有學先に已に心解脫意を證得すれば彼れ亦た決定して三菩提に趣き、修する所の道に於て他緣に由らず、自然に能く無放逸行を修し、現法の中に於て猶ほ未だ畢竟じて放逸を息めざるが故に、若し一切の未得意の者あらば彼れ應に決定して不放逸を修すべし。又三相に由りて所應作を辦ず、一には諸根に集成せらるゝに由るが故に資糧圓滿し、二には如法に隨順する諸の臥具に習近するに由るが故に心に安住を得、三には善士に依止し親近し、他の法音を聞き、如理作意する業の因緣に由るが故に乃至二の心解脫を獲得す。又卽ち此の不放逸に應ぜる所作轉ずる時に於て二種の相に由りて應に彼の六處の寂滅に於て增上慢あり增上慢無きを知るべし。謂はく未だ滅せざるに於て邪分別を起し、妄りに執して滅せりと爲す、所緣に由るが故なり、及び未得に於て邪分別を起し、妄りに執して得たりと爲す、彼れ是の如く邪分別を起し、滅解脫なりと謂ふと雖も而も未だ身壞して已後壽命永く盡き六處永く滅せしむること能はず、亦た諸の境界の想を離るゝこと能はず。又彼れ六處の寂滅に於て若しは緣じ若しは證し邪に領受するに由るが故に是の如き事あり。此の二種の相を應に知るべし說いて增上慢ありと名づくと。此と相違するを當に知るべし說いて增上慢無しと名づくと。

は有學の解脫の喜を領受するが故に喜と倶行し、第三には無學の解脫の喜を領受するが故に喜と倶行す。彼れ眼等の所識の色等の所緣の別に由るが故に復た六種あり。又此の等持に諸相を具ふるが故に名づけて圓滿と爲す。又此の等持は究竟の邊際なり、謂はく能く世間の離欲に往趣し、或は能く出世の離欲に往趣す、此ヶ過ぎて更に能く趣く淸淨なる等持の得可き無し、是の故に此を缺減あること無しと說く。若し速に沙門果を證せんと欲する者は身命等に於て顧戀する所無く、恆常無間に殷重に加行し、熾然に精進し、諸欲の中に於て自相を了知し、堅く正念を守り、過患を了知して希望する等無く、正知現前し、正念正知を所依と爲すが故に方便して四無放逸を勤修す。謂はく晝分の若しは行、若しは坐に於て、諸の障法に於て其の心を淨修す、乃至廣說。是の如く勇猛精進を發起し、其の所證に於て怯劣する所無し。九種の相に由りて其の心を安住せしめ、一向に奢摩他定を修習し、身に輕安を得、愛味等無きが故に染汚無く、惛沈及以び睡眠の二の隨煩惱の爲に擾亂せられず、一向に〔四〕念住を所依止と爲して精勤して毘鉢舍那を修習し、堅く正念を守り、掉擧の隨煩惱を遠離するが故に愚癡あること無く、已に止と觀と雙び運轉する道に入り、其の心正定にして、卽ち此の二分、一境に隨行し、彼の障を斷ぜんが爲に是の如き五種の對治を修習するを所依止と爲すが故に彼の障に於て遍知し永斷し、三等持に於て六境事の所有る差別に依り喜と倶行する定は能引を圓滿す。二の因緣に由りて諸佛世尊は諸の弟子の爲に自己の能引導の法を宣說したまへり、一には黑品の所有る過失に於て解を生ぜしむるが故に、二には白品の所有る功德に於て解を生ぜしむるが故なり。

第六目　學等を解す

復次に、此の正しき法と毘奈耶との中に於て略して二種の補特伽羅あり、一には已得意、二には未得意なり。已得意とは、復た二種あり、一には已に諦を見已に有學の心解脫意を得たるもの、二

す、是れ邪分別なり、是れ大邪見なりと。然れども其の如來は善く世間の或は一向樂、或は一向苦、或は雜苦樂なりと知りたまへるも然も彼の一切は皆な是れ無常なり、是の故に諸の弟子衆をして一切の無常なる世間を超過し、苦樂を超過せしめんが爲に正しき法要を說きたまへり。三種の相に由り應に諸の可意の事を正了知すべし、謂はく(一)未來世の諸の可愛の事は所追求と名づけ、(二)若し過去世の諸の可愛の事は所尋思と名づけ、(三)若し現在世の可愛の外境は所受用と名づけ、若し現在世の可愛の內受は所耽著と名づく。當に知るべし此の中、三世に墮して四の行相ありと。一には未來に於て、二には過去に於て、三には現在に於てす。此の行相に於て能く隨つて悟入す、是れ(一)悅意の相と(二)意の樂ふ所の相と(三)可愛なる色相と(四)平安なる色相とにして、其の所應の如く當に知るべし卽ち是れ(一)可欣(二)可樂(三)可愛(四)可意の四種の行相なりと。

第五目　障を解す

復次に、定を勤修する者は略して二門、二時、二地の所有る諸欲に由りて、引發する所の三種の等持に於て能く障礙を爲す、是の如き障礙を斷除せんと欲するが爲に正勤して五種の對治を修習す。當に知るべし此の中先に受用せる所の過去の諸欲は遠離處に於て尋思門に由り心をして飄蕩せしむと。復た現在の居家の所有る利養恭敬と倶行する諸欲あり、尋思門に由り心をして散亂せしむ、此の中、利養恭敬と倶行する所有る諸欲は其の行ずる時に於て心をして飄蕩せしめ、先に受用せる所の居家の諸欲は其の住する時に於て心をして散亂せしむ。卽ち此の諸欲は異生地に於て能く障礙を爲し、有學地に於て亦障礙を爲す。又異生の修する所の無量と倶行する等持に於て能く障礙を爲し、亦た有學の能く善く一切の智事に通達する廣大の等持に於て能く障礙を爲し、亦た無學の極善修習する究竟の等持に於て能く障礙を爲す。當に知るべし是の如き諸の生起する所の一切の等持は皆な喜と倶なりと。此の中第一には諸の有情に於て利益し安樂する意樂門の中にては喜と倶行し、第二に

彼の法の二相を顯了すと。

第三目　定を解す

復次に、內法に住する者は未だ定心を得ざるも尙ほ外道の定心と差別す。智勝るゝに由るが故なり、何に況んや定心あるをや。何を以ての故にとならば彼の諸の外道は定心を得乃至極遠に非想非非想定を證得すと雖も然も猶ほ未だ六觸處に於て其の五轉を以てし、如實に了知して心正に離欲し、解脫を證得すること能はず、是の故に彼れと此の正しき法・律とは猶ほし地空相去るが如く極めて遠し。內法に住する者は未だ定を得ずと雖も但だ無我の勝解を信聞するに由りて便ち能く三摩地心を證得し、六觸處に於て能く斷じ能く知り、心に離欲を得及び解脫を證す。是の故に當に知るべし正しき法と律とに於て彼には失壞あり、此には失壞無し、唯だ正しき勝解相續して轉ずる時に六境界に於て六根に依止す。略して五種の寂靜なる妙行あり、謂はく(一)深く彼に於て過患を見るが故に名づけて善調と爲し、(二)應に役すべからざる諸の境界の中に於て而も役せざるが故に名づけて善覆と爲し、(三)應に役すべき所の諸の境界の中に於て、或は卒爾に現前する境の上に於て善く念に住するが故に名づけて善守と爲し、(四)一切の煩惱をば皆な能く斷ずるが故に名づけて善護と爲し、(五)已に善く修習し、道を圓滿するが故に名づけて善修と爲す。

第四目　殊勝を解す

復次に、二の處所に於て如來は勝れたる安立智を證得し、能く正に諸の苦樂を超ゆることを顯說したまへり、勝れたる安立智を證得せざるには非ず。中に於て若し是の如き解を作すことあり、「此の大沙門喬答摩種は知無く解無し、諸の世間の一向に安樂なるに於て弟子をして此の安樂は衆苦に間雜すと謂ひ深く怖畏せしめんが爲の故に、苦樂間雜し依附する諸の世間を超えんが爲めの故に、諸の苦樂を超過せんと欲するが爲の故に法要を宣說す」と。當に知るべし此の解を是れを邪想と爲

第一目　無智を解す

若しは諸の邪見、若しは諸の我見、若しは卽ち無明は、前に說ける所の三有情衆の無智を根と爲すに依るが故に生起することを得。若し能く此の無義の根本たる一切衆の中の能起の一切、雜染の一法を斷ずれば當に知るべし彼れ能く所辨を正記すと。此の中第一の起す所の雜染は實事を損減し、第二の雜染は虛事を增益し、第三の雜染は其の如實に顯了する方便に於て能く愚癡を作す、彼の二因に於て愚癡あるが故に或は增益を起し、或は損減を起すなり。

第二目　智を解す

復次に、二種の如實智あり、一には如理作意より發す所、二には三摩地より發す所なり。當に知るべし、(一)此の中、正しき聞思所成の作意に由りて正法を聽聞する增上力の故に五種の受の分位に於て轉變して起す所の過患をば如實に了知し、又卽ち此の分位に於て轉變して如理に思惟するを不定地の如實の正智と名づく、此を依止と爲して能く隨つて修に入るなりと。云何んが名づけて分位に轉變して起す所の過患と爲すや。謂はく苦樂の位の諸の無常の性なり。苦の分位の中に自性苦の性あり、樂の分位の中に、變壞法の性あり。云何んが名づけて分位轉變と爲すや。謂はく樂の分位と苦の分位と別異の性あり、苦の分位と樂の分位と別異の性あるが若くは、是の如く當に知るべし一切の分位展轉して別異なりと。此の別異に於て如實に觀見し、此の分位に於て無常想に住し、如實に別異の過患を觀見し、所有る受は皆な是れ苦なりと知り已つて苦想に住して是の如き想あり、是の如き見あれば能く清淨を證す、是の故に亦た如實智と名づくることを得。(二)定に依りて發す所の如實智とは、謂はく卽ち彼れに依りて行相轉ずる時、輕安に攝せられ、清淨にして擾るゝこと無く寂靜にして轉ず、當に知るべし此の行は前と差別すと。又無常性は是れ一切の行の共相なり、苦性は是れ一切の有漏法の共相なり。二の如實智を依止と爲すが故に當に知るべし如實に能く正し

の能く涅槃に往く妙行をば默然業と名づく。

（3）復次に、能く各別の處所の那落迦を感ずる惡業を黑黑異熟業と名づけ、能く各別の處所の天趣を感ずる善業を白白異熟業と名づく。能く餘處を感ずる所有る諸業は黑白黑白異熟業と名づく、是の處所に於て二の業果の現前に得可きあり、是の故に總じて説いて以て一業と爲す。若し出世間の諸の無漏業ならば皆な不黑不白無異熟業能盡諸業と名づく。若しは已盡業若しは當盡業の二種を總じて能く諸業を盡くすと名づく。未生の者をして當に生ぜざらしむるが故に、已生の者をして離繫を得しむるが故に、可愛の因果異熟に約するに由るが故に不白と説く。當に知るべし各別の處所の天趣は一向に白なりとは、謂はく他化自在天處を過ぎて欲界の中の魔王の都する所の衆魔の宮殿あり及び上梵世より乃至非想非非想處の所有る善業を總じて説いて一と爲す、彼の處所の眼所見の色、乃至意所知の法の、一向可愛に相續し、殊勝增上の義に由るが故に、〔二〕意門意を引發し成ずる義なるが故なり。各別の處所の那落迦に四あり、一には大那落迦、二には別那落迦、三には寒那落迦、四には邊那落迦なり。此の處所に於て各別に純ら順樂受業の諸の果異熟を受け、各別に純ら順苦受業の諸の果異熟を受く、是の故に説いて各別處所と名づく。又魔宮、初二靜慮に於ては純ら悅樂を受け、若し第三靜慮已上に於ては純ら喜樂を受く。喜樂と言ふは、心をして調柔ならしめ、心をして安適ならしむ、喜と相似するが故に名づけて喜と爲し、是れ喜受に非ず樂と相似すれば説いて名づけて樂と爲す、是れ樂受には非ず。六觸處門に恆に領受する所の者を、當に知るべし即ち彼を六觸處及び各別の處所と名づく、因果相續する道理の義なるが故なり。

第三項　別嗢拕南第二を以て智等の十門を列釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『無智と智と定と、殊勝と障と學等と、著と無我と聖道と、二海の不同分なり。』

（3）一種の四業を解す。

【二】意門とは意根門なり。

び進趣し欲愛を離れんが爲の故なり。當に知るべし此の中に或は瞋の意樂、或は害の意樂、或は嫉妬の性、或は可愛の事に深く染著を生じ。此を因と爲すに由りて、諸の有情に於て邪行を發起すと。謂はく身語意より發する所の惡業・種種なる惡事なり。若し是の如き能く四種の惡業を起す因緣を對治せんと欲するが爲に四無量の勝れたる三摩地を修することあるも、彼れ乃至少男少女の無處無容に於て暫らく更に惡業を作る思を發起す、是の故に彼れ是の如き加行を修して能く所有る惡業の因緣を盡くす。當に知るべし是の如く正に加行を修するに二の因緣に由りて其の所作及び所增長の一切の惡業に於て皆な能く摧伏すと、謂はく無量と定とを修習するに由るが故なり。所以は何ん。所作の惡業は但だ有量なる有情の境界に於て不饒益を欲する意樂より起す所なり、修する所の〔四〕無量は乃ち無量なる有情の境界に於て饒益を作さんと欲する意樂より起す所なればなり。又能く不善業を發起する心は下劣界の攝にして是れ所對治なり、修する所の無量と倶行する心は勝妙界の攝にして是れ能對治なり。又心は是れ諸の所造の業に勝る、皆な心に屬するが故なり、世間は並に是れ心の亂なりと說く、心に繫屬するが故に、心に依つて轉ずるが故なり。是の如く行者先づ正願を發して所依止と爲して後善く〔四〕無量心と定とを修習し、當に進趣し欲愛を離るる時に於て便ち能く不還果に住することを獲得すべし。若しは但だ此に於て暫らく喜足を生じ、現法の中に於て上進することを求めず、彼れ現法の中にすら尙ほ業を造らず、況んや生位に於てをや、或は後位に於てをや。又定んで能く當に生位・後位の異熟を受くべからず。

(六)又正法の外の邪見に墮する者、邪道を行ずる者の所有る一切の善不善業は邪見より起す所、邪見の增上力より生ずる所なるが故に皆な曲業と名づく、(七)猛利なる貪瞋より起す所の諸業をば皆な穢業と名づく。(八)猛利なる癡者、上品の鈍根にして念を忘失する者、極めて闇鈍なる者の癡より起す所の業は皆な是れ濁業なり。(九)一切の能く善趣に往く妙行をば皆な淨業と名づけ、(十)一切

身相續の中に於て隨應する諸業なり。此の餘の諸業を是れを非學非無學業と名づく。

（五）若し見所斷の煩惱の相應、若しは此れより發する所の思等の諸業、一切の能く諸の惡趣に往く業、此等を皆な見所斷業と名づく。若し修所斷の煩惱の相應及び此より發する所の思等の諸業、是の如きを皆な修所斷業と名づく。無斷業とは、所謂る一切の有學無學の出世間業なり。當に知るべし此の中、三種の相に由り故思所造の諸の不善業は卽ち現法に於て增長することを作し已つて還つて復た除斷すと。何等を三と爲すや。一には現法斷の故に、二には生斷の故に、三には後斷の故なり。（1）現法斷とは、謂はく一あるが如し、現法の中に於て故思して業を造り、增長することを作し已つて尋いで復た厭離するなり、其の所作に於て厭離を受くるが故なり、此れ是の異生未だ離欲を得ず、此に住して命終し、而も未だ能く次生の位に於て彼の業を造らず異熟を受けざらしめず、亦た未だ能く其の後位に於て是の事あること無からしめず、現法の中に於ても亦た未だ一向に能く造らざらしめざるなり。（2）生斷の故なりとは、謂はく復た一あり、厭離を受け已つて是れ異生なりと雖も而も欲界に於て已に離欲を得て此に住して命終す、彼れ現法に於て更に造作せず、尙ほ次生に於て異熟を受けず、況んや復た生じ已つて當に所作あるべきをや。然も未だ後位の作業及び異熟を受くるを解脫せざるなり。（3）後斷の故なりとは、謂はく復た一あり、是れ有學にして欲界に於て未だ離欲を得ずと雖も、厭離を受け已つて最初の或は復た第二の沙門果の證を獲得し、彼れ是の念を作さく、凡そ我が所有は多の麁重に由り、多の熱惱に由る唯だ應に棄捨すべく厭賤す可き身なり、所作の惡業をば願はくは現法に於て一切皆な受けん、或は我が所有る現法受業の若しは苦、若しは樂は皆な願はくは彼と俱時にして受けん、復た我れをして當に生位に於て、或は後位に於て彼の異熟を受けしむる勿かれと。是の如く正心に誓願を發し已つて彼を斷ぜんが爲の故に復た[一]無量を修す、奢摩他品の定の所攝の正に起す加行を以て能く彼の業を起す因緣をして究竟して盡さしめんが爲の故に、及

【一】無量とは慈・悲・喜・捨の四無量なり。

生受無くして而も後受あるは、證得する所の阿羅漢果に於て障を爲すこと能はず。然れども彼れは是れ定受業ならざるに非ず。何を以ての故にとならば卽ち彼の煩惱の助伴なるに依り、及び卽ち彼の諸行の相續に依つて此の業を施設して定受と爲すに由るが故なり。

(2)復次に、(一)二の因緣に由りて善業を建立す、一には愛果を取るが故に、二には所緣の境に於て如實に遍知し彼の果に反するが故なり。二の因緣に由りて不善業を立つ、一には非愛の果を取るが故に、二には所緣の境に於て邪執著するが故なり。善・不善の二種の行相に於て記す可からざるが故に無記業を立つるなり。

(二)順樂受業とは謂はく初二三靜慮地の繫と及び欲界繫との所有る善業なり。順苦受業とは、謂はく能く惡趣の生を招感する業なり。餓鬼及び傍生の中に生ずるも先業を因と爲して樂受を感得するは當に知るべし此の業を名づけて順樂受業と爲すことを得と。順不苦不樂受業とは、謂はく第四靜慮及び上地等の諸の所有る業なり。唯だ那落迦を除いて所餘の處に於ては當に知るべし皆な苦樂の雜受を得と。卽ち彼の業の增上力に由るが故に此の依身をして苦樂雜住し、相妨礙せさらしむ。

(三)順現法受業とは、謂はく是の如き相狀の意樂の所作の諸業に由り、若しは是の如き相狀の加行、謂はく事加行或は身加行或は語加行の、所作の諸業に由り、若しは是の如き相狀の良田の所作の諸業に由つて、現法の中に於て異熟成熟するを、是の如きを名づけて順現法受業と爲す。若し所作の業、現法の中に於て異熟未だ熟せず、次の生の中に於て當に異熟を生ずべくんば、是の如きを名づけて順生受業と爲す。若し所作の業、現法と次生とに異熟未だ熟せず、此より已後異熟方に熟さば當に知るべし是れを順後受業と名づくと。

(四)有學業とは、謂はく聖弟子、時時の間に於て增上戒に依り、增上心に依り增上慧に依り無漏を修學し、及び此の後に善有漏業を得るを有學業と名づく。無學業とは、謂はく一切の阿羅漢等の

(2)十種の三業を解す。

の所作なると、同法の者に於て見已つて歡喜し、彼に於て隨法し多く隨尋思し多く隨伺察するとに由るなり、是の如きを名づけて意樂に由るが故に業をして重を成ぜしむと爲す。(2)加行に由るとは、謂はく彼の業に於て無間に所作し、殷重に所作し、長時に積集し、又其の中に於て他を勸めて作さしめ、又卽ち彼に於て稱揚讃歎するなり、是の如きを名づけて加行に由るが故に業をして重を成ぜしむと爲す。(3)田に由るが故なりとは、謂はく諸の有情、已の恩あるものに於て、若しは正行と及び正行の果とに住する彼に於て、善作惡作を發起するなり、當に知るべし此の業を說いて名づけて重と爲すと。彼と相違するを說いて名づけて輕と爲す。(二)若しは業の、是れ明了に非さる所作、或は夢中の作、或は無覆無記に由る所作、或は不善の作なるも尋いで復た追悔して對治し攝受せる、又一切の清淨なる相續に於ける所有る諸業、是の如きを皆な不增進業と名づく。當に知るべし此れに異なるを增進業と名づくと。(三)此の中、故思所造業とは、謂はく先づ思量し已り、隨尋思し已り、隨伺察し已り而して所作あるなり、復た或は錯亂し、或は錯亂せず。其の錯亂せるは、謂はく餘處に於て思うて殺害せんと欲し、或は劫盜せんと欲し、或は別離せんと欲し、或は妄語及び欺誑せんと欲する等、是の如く思ひ已つて卽ち此の想を以て別處に成辦するなり。當に知るべし此の中、意樂に由るが故に說いて名づけて重と爲し、事に由るが故に說いて名づけて重と爲すにはあらず。錯亂せずとは、當に知るべし其の相此れと相違すと。若し此の業に異なるは是れを卽ち名づけて非故思造と爲す。(四)定受業とは、謂はく故思所造の重業なり。不定受業とは、謂はく故思所造の輕業なり。(五)異熟已熟業とは、謂はく已に與果せる業なり。異熟未熟業とは、此と相違す。

若し阿羅漢を證得せんと欲する時には先に造作せる所の決定受業は異熟果現在前するに由るが故に能く障礙を爲し、身相續に隨逐するに由るが故にはあらず。所以は何ん。但だ彼の業は不平等なる所依の身を生ずるに由るが故に能く障礙を爲して阿羅漢果を得ること能はざらしむるのみ。若し

卷の第九十

攝事分中契經事處擇攝第二の二

(三)廣く十六種の業を列釋す

復次に、嗢拕南に曰く、

『五〔種〕の二と十〔種〕の三とにして、四業を最後と爲す。』

(一)二種の業あり、一には重業、二には輕業なり。(二)復た二業あり、一には增進業、二には不增進業なり。(三)復た二業あり、一には故思所造業、二には非故思所造業なり。(四)復た二業あり、一には定所受業、二には不定所受業なり。(五)復た二業あり、一には異熟已熟業、二には異熟未熟業なり。

(一)三種の業あり、謂はく善業、不善業、無記業なり。(二)復た三業あり、謂はく順樂受業、順苦受業、順不苦不樂受業なり。(三)復た三業あり、謂はく順現法受業、順生受業、順後受業なり。(四)復た三業あり、謂はく學業、無學業、非學非無學業なり。(五)復た三業あり、謂はく見所斷業、修所斷業、無斷業なり。(六)復た三業あり、謂はく三曲業即ち身曲等なり。(七)復た三業あり、謂はく三穢業即ち身穢等なり。(八)復た三業あり、謂はく三濁業即ち身濁等なり。(九)復た三業あり、謂はく三淨業即ち身淨等なり。(十)復た三業あり、謂はく三默然業即ち身默然等なり。

四種の業あり、一には黑黑異熟業、二には白白異熟業、三には黑白黑白異熟業、四には不黑不白無異熟業能盡諸業なり。

[1](一)當に知るべし此の中、三の因緣に由りて業をして重を成ぜしむ、一には意樂に由るが故に、二には加行に由るが故に、三には田に由るが故なりと。(1)意樂に由るとは、謂はく猛利なる纏等

(1)五種の二業を解す。

はく佛等に於て已に證淨を得、彼れ佛等に於て先に現起せる所の一切の無智をば、當に諸諦に於て現觀を得べき時先に已に斷盡す。是の故に今に於ては名づけて斷と爲さざるも、而も佛等に於て證淨と俱行する明現前するが故に、說いて名づけて生と爲す。卽ち學道を以て修所斷の餘品の無明を斷ずるも、而も其の明に於ては生起と名づけず、此の道と先と種類同じきが故なり。彼の無學道將に現在前せんとし、修斷の無明皆な悉く滅盡し、又能く諸の無學の明を生起す。(三)云何んが三相にて應に第三の補特伽羅を知るべきや。謂はく無我と相應する正法を聞き、初め但だ聞に由りて信解を發生し、而も未だ悟入せず、彼れ無我に於て信解を生ずるが故に能く我見を斷ずるも、未だ悟入せざるが故に名づけて無我の見を生ずと爲ることを得ず。聞く所の法の如く復た能く如理に正しく思惟する時、無我の理に於て能く悟入するが故に、乃ち名づけて無我の見を生ずと爲ることを得るも、彼の隨眠に於ては而も未だ斷ずること能はず、此より已後修道力に由り諦現觀を證して方に隨眠を斷じ無漏を發生す。

瑜伽師地論卷第八十九

攝事分中契經事處擇攝第二の一

一八三四

著を離れ、先づ善く正定の資糧を修治し、漸次に乃至能く清淨なる第四靜慮に入る。此れを以て依と爲し、諦現觀を證し、隨つて漏盡の心善解脫を得。一切の苦に於て離繫を得るが故に、究竟寂靜に攝受せらるるが故に、微妙清淨なる一切の身心無間に滿ずるが故に、一切の煩惱永に離繫するが故に、普く能く諸の無漏受を領納す、是を正行と名づく。是の如く應に知るべし內證滯り無きと、及び彼の相違する五種の差別は他に稱讚せらると。彼れ爾の時に於て諸の蓋纏及び一切の苦をば心善く解脫するに從つて現法の中に於て彼の諸の隨眠餘無く永斷し、前際後際の業及び異熟所有の雜染をば皆な善く解脫す、現法に於て聖道及び道果を獲得するに由るが故なり。

(五)復次に、略して三種の補特伽羅あり、一には未だ聖教に入らざる異生、二には已に聖教に入れる有學、三には已に聖教に入れる異生なり。三種の相に由りて應に最初の補特伽羅を知るべく、第二第三も當に知るべし亦た爾なりと。(一)云何んが三相にて應に最初の補特伽羅を知るべきや。謂はく初に一の補特伽羅あり、已に世間の正見を成就することを得、施ありと了知するも、乃至廣說、彼れ異時に於て不正法を聞きたるを因緣と爲すが故に、便ち非理作意を發起し、世間の正見の將に滅せんと欲するに臨んで、未だ一切悉く皆な已に滅せずと雖も而も能く滅するに堪へ、又彼の所治の誹謗の邪見將に生ぜんと欲するに臨んで、未だ已に生ぜずと雖も而も能く生ずるに堪ふ。彼れ中間に於て正法を聽聞するを因緣と爲すが故に遂に還つて如理作意を發生し、彼れ誹謗の邪見を生ぜんと欲するに臨んで現行せざるが故に說いて名づけて斷と爲す、然れども其の正見先づ成就するが故に名づけて生と爲さず。第二に一の補特伽羅あり、正見及び邪見を成ぜず、正法を聽聞して如理作意するを因緣と爲すが故に爾れ乃ち世間の正見を發生し、彼れ邪見に於て名づけて斷と爲さず、先に成ぜざるが故なり。第三に一の補特伽羅あり、邪見を成就して正法を聽聞し、如理作意を因緣と爲すが故に邪見を斷滅し、正見を生起す。(二)云何んが三相にて應に第二の補特伽羅を知るべきや。謂

(五)聖教の中に於ける已入未入對を明す。

無きが故に清淨を得。是の如きを名づけて雜染の業をして淸淨を得せしむる論と爲し、是の如く正業の染淨を施設するを無上論と名づく。云何んが正行なりや。謂はく一あるが如し正法の中に於て多聞を成就し、業雜染及以び淸淨に於て正に雜染淸淨の相を知り已つて不善業を捨て善業を修習す。彼れ聞思に於て如理作意し、勤めて方便し已つて證の爲めに修するが故に空閑處に住し、淨く心を修治し、諸蓋及び衆苦の法を離れしむ。貪欲、瞋恚、掉擧、惡作を斷除せんと欲するが爲めに九種の行を以て其の心を安住せしめ、心をしての所對治を棄捨せしめ、惛沈、睡眠及び疑蓋を斷除せんと欲するが爲めに六事[二]を分析して如理作意し、其の心を修飾し、心をして觀の所對治を棄捨せしむ。彼の止觀の所治より出で已つて能く正しく修學して衆苦を消伏す、彼れ旣に是の如く淨く其の心を修して諸蓋衆苦の法を離れしめ已つて復た衣服、飮食、臥具を受用する儀則に於て淨く其の心を修す。若し是の如き衣服乃至臥具に習近すれば不善法增し善法退減するに由りて卽便ち遠離す、寧ろ受用す可けんや。麁弊衣等の儉爾たるは自存にして衆苦を忍受し、正行を進修す。又二緣に由りて勝妙なる衣服等を受用し、因つて能く惡不善の法を生長せしむ。謂はく諸の妄想不正の尋思なり。何等か二緣なりや。一には諸善に於て未だ長時に串ひ修習すること能はざるが故に心調柔ならず、二には衣服飮食等の事に於て欲貪堅著す。是の因緣に由りて正行を修する者は其の心を調柔して所作に堪へしめ、衣服等の欲貪堅著及び諸の無常の衆の緣生の法に於て恒常に繫念して深く過患を見る。爾の時復た勝妙なる衣服等の事を受用すと雖も而も其の中に於て雜染あること無く、是の如き行者は亦たは安樂を受け亦たは罪あること無し。奢摩他毘鉢舍那の修習力に由るが故に淨く其の心を修め、諸蓋を離れ已るも、思擇力に由りて衣服等に於て邪に受用するが故に爾の時に於て暫少く心一境性を成就すと雖も欲貪隨眠仍ほ未だ斷ぜざるが故に當來世に於て復た雜染を爲す。彼れ妙慧を以て是れに通達し已つて便ち加行を修し、畢竟斷を爲し、如法なる邊際の臥具を受用し、諸の貪

【二】六事とは地水火風空識の六界なり。

の諸の領受する所の一切は皆な是れ宿因の所作なりと、是れを第一の邪論と名づく、謂はく惡因論なり。復た有ひは說いて言はく彼の最初の如きは自在變化す、是より已後諸の領受する所の一切は皆な是れ宿業の所作なりと、是れを第二の邪論と名づく、謂はく惡因論なり。三種の自苦行とは、謂はく身語意護なり。身護とは、謂はく身を以て他の有情と共に相ひ雜住せず、唯だ山林阿練若處に往き、獨り閑靜に居り、都べて所見無くして苦行を修するなり。語護とは、謂はく彼れ默無言の禁を受持するなり。意護とは、謂く心自ら逼切する苦を忍受し、彼れ是の如き欲樂の言說を起して他の爲めに顯示す。此の二種の所見圓滿するに由り、及び三種の苦行圓滿するに由り能く衆苦を越ゆるも、然も其の自苦をば越度すること能はず、是の故に他の爲めに譏毀せらる。若し論の受くる所の一切は皆な是れ宿因の所作、亦た是れ自在變化する因の作、亦た是れ三種の苦行の能越の因の所作なり。是れ則ち三種に苦行を修し、倶に受くる所の衆苦は定んで是れ宿世の黑業より感ずる所、亦た是れ暴惡なる自在の化する所にして、三種の苦行をば皆な越ゆること能はず、是の故に今に於て斯の苦受を受く。若し彼れ復た內證稽留すと雖も而も他の爲めに稱讃せらるることあるすら猶尙ほ不可なり、況んや此れ他の爲めに稱讃せらるるをや。勝利亦た所有無し、是の故に名づけて第二の過患と爲す、此の分に由るが故に唯だ譏毀す可し。

(ロ)復次に、上と相違するは當に知るべし正業の染淨及び正行を施設する中に二の勝利ありと。一には內證に滯ほり無き勝利、二には他に稱讃せらるる勝利なり。云何んが業雜染論を施設するや。謂はく二業あり、一には善業、二には不善業なり。過去世に於て已に曾て善不善の業を造作し、現法の中にて愛非愛の異熟果等を受け、愛非愛果の差別を受くる時更に復た善不善業を造作し、此に由りて當來に愛非愛の異熟果等を受く、是の如きを名づけて業雜染論と爲す。云何んが業淸淨論を施設するや。謂はく一あるが如し、新業を造らず故業の觸已んで尋いで復た變吐し、對治力に由りて永斷して餘

(ロ)正論を明す。

す、自苦行に由りて宿所作の惡業をして變吐せしむと。若し是の事あらば彼の宿所作の能く苦受に順ずる諸の不善業能く現法の中に於て自苦に逼切せらるゝ苦受の果を感得すと爲んや不や。若し此の苦受の果を感得すと言はゞ自苦行を修するは卽ち唐捐なりと爲す、彼の果を受け已らば自然に變吐するなり。若し是の如くならば宿世の所作の諸の不善業は自苦行の能く變吐する所に非ず、又卽ち此の業の一分をば吐す可し。謂はく現法の中にて彼の果を受くる者は若しは餘の能く後に順じて受くる所の業をば彼れ後世に於て當に其の果を受くべく、自苦の行、其の果をして悉く皆な變吐せしむべきに非ず。若し現在に逼切する苦受は宿因の〔所〕作に非ず是の如き所說の諸の領受する所の一切は皆な是れ宿因の所作なりと言はゞ道理に應ぜず。能く苦受に隨順する惡業をば其をして樂受に順ずることを成ぜしむ可からざるが如く、是の如く宿世の所作の能く樂受に順ずる善業をば其をして不苦不樂受に順ずる業を成ぜしむ可からず。或は彼の二種の順現法受は其をして順後受を成ぜしむ可からず、若しは順後受を成ぜしむ可からず。若しは順後受ならば其をして無所受を成ぜしむべからず、若し未成熟ならば熟せしむ可からず、若しは已に成熟ならば彼彼の方便をして轉ぜしむ可からず。此の中に說く所の要略の義をいはゞ所謂る一切の善不善の業は自性決定し、時分決定し、品類決定するなり。若し是の如くならば業の決定に隨つて必ず能く是の如き類の果を攝受す、中に於て更に自ら逼切せらるゝ苦を受くるも、復た何の所用かあらん。又若し此の受は宿業の因より感ずるは彼れ自ら許す所にして業の一分をして滅盡せしめ、少分の勝利を得可し。是の因緣に由りて此の如く許す所の少分の勝利亦た所有無し、是の如くならば則ち極めて自ら稽留する業の爲めに縛せらるゝが故に終に解脫無し、此の道理に由りて是れを此の邪論邪行に於ける第一の過患と名づく。謂はく內證の自義に於て稽留するなり。云何んが他に譏毀せらるゝ過患なりや。謂はく彼れ二種の邪論に依止して三種の自ら苦惱する行を發起す、若しは是の說を作す、所有る士夫補特伽羅

る論を宣說す、謂はく現法の中の諸の受くる所の苦は一切皆是れ宿因の作す所なりと。彼れ宿世の諸の不善業を見て二種の因と爲す、謂はく(一)現法の中の諸の不善業は皆な是れ宿業の串習より引く所なり、(二)諸の受くる所の苦も亦た是れ彼の業の造作する所なり。是の因緣に由りて自苦行を修して故の惡業より招く所の苦果をして皆な悉く變吐せしめ、更に當[來]の不善業を造作せず、現法の中に於て又能く身語意を防護して住し、後當に一向の善業を勤修し、不善法をして轉じて非漏を成ぜしむ。此の因緣に由り不善業盡き、彼れ盡くるに由るが故に衆苦も亦た盡きて苦の邊際を證す。

云何んが邪行なりや。謂はく一あるが如し、自の業雜染を了知すること能はず、彼の業の對治を了知すること能はず、又前後の所證の差別に於て如實に知らず、彼れ是の如き愚癡法を成ずるが故に其の師の所に於て無根信を得、非信の處に於て妄りに眞實なる聖敎の勝解を生じ、彼れ、非實非理の邪論に墜墮し、他に朋黨して廻動する時疑ふ可き處に於て而も疑を生ぜず、師を尋求し躬ら往いて請問し、能く正に記せんが爲めに、能く記せざらんが爲めに、能く疑を淨ふせんが爲めに、能く淨ふせざらんが爲に、一切智非一切智の爲にせざるに由り、大師世を去らば所疑の處に於て畢竟じて隨轉す。何を以ての故にとならば大師世に住したまへば能く爲めに此れ一切智と非一切智とを決了したまふ、大師の滅後は何れの所にか請問し、云何んが決了せん、是れを邪行と名づく。何に緣つて應に是の如き施設の業をして淸淨ならしむるは道理に應ぜずと知るべきや。二緣に由るが故なり、謂はく(一)彼の苦行の宿因の作す所なるは理に應ぜざるが故に、(二)此に由りて能く宿の不善業を盡すことは理に應ぜざるが故なり。所以は何ん。軟中上品の自苦行の緣に遍切せらるゝ時、軟中上品の苦受生ずるが故に、卽ち此の三品の遍緣を遠離し、遍切する所の三品の苦受生ずることを得ざるに由るが故に、謂ゆる因の作す所なりとは道理に應ぜず。又此の苦行は功能あること無く、宿の所作をして能く苦受を感ぜしめ、諸の不善業は順樂受を成ず。是の故に彼れ是の如き定見を起

便ち應に愚夫同意の所樂の諸根を欣慕すべく、彼れ愚夫同意の所樂の法を獲得するに由るが故に、是れ則ち並に沙門の法及び沙門の論を退失す、是の如きを名づけて第三の過失と爲す、若し此れを略說せば三種の過あり、謂はく(一)現在世の諸の不善受の因成ぜざる過と、(二)精進を謗る過と、(三)正智を謗る過となり。

　云何んが一切の業異熟を領受する論を施設するに五種の相に由りて不雜染を成ずるや。謂はく(一)若しは能く領受する者、(二)若しは此に由りて領受し、(三)若しは是の如く領受し、(四)若しは領受する時、(五)是の如く雜染し是の如く淸淨なり。當に知るべし此の中、(一)五取蘊に依り假名の補特伽羅を施設して領受者と爲すと。(二)卽ち此の假者は六觸處に由るが故に能く領受す。(三)母胎の中に於て四種の差別あり、謂はく精血と大種所造と諸業と煩惱との攝受する所なるに依りて結生し相續して取の識及び母腹の中の所有の孔穴あり、是の如きに由るが故に母胎に入ることを得。次に名色あり、次に六處あり、次に觸、次に受、是の如く次第して領受することあり。(四)又卽ち此の受も亦た現在の觸を以て其の因と爲し、亦た宿世の業等を用て因と爲す。(五)彼れ若し諸の不正法を聽聞して非理作意を以て因緣と爲し、便ち無明の觸より生ずる所の受に觸し、受を緣と爲すが故に復た愛を生じ、愛を緣と爲すが故に復た取、乃至當來の生老死等を生じ、衆苦差別す。是の如く諸の無明の觸より生ずる所の受を領受する時、便ち雜染所攝の二諦あり。此れと相違し、正法を聽聞して如理作意するを因緣と爲すが故に便ち能く明觸より生ずる所の諸受の差別を領受し、此の受を受くる時便ち淸淨所攝の二諦あり。

(四)(イ)復次に、當に知るべし邪業淸淨及び邪行を施設する中に二の過患ありと。何等を二と爲すや。一には內證稽留する過患、二には他に譏毀せらるゝ過患なり。云何んが邪業淸淨を施設するや。謂はく一あるが如し、實に大師に非ざるに妄りに、己を分別して自ら大師と稱し、是の如き邪に施設す

(四)施設業行邪正對を明す。
(イ)邪論を辨ず。

(一)惡因論を施設するに由るが故に　(二)亦た無因論を施設するに由るが故　(三四五)に及び惡因無因に三過あるを施設するに由るが故なり。此の中(一)惡因論を施設すとは、謂はく一あるが如し、是の如きの見を起し、是の如きの論を立つ、若し士夫補特伽羅あり、諸の領受する所は一切皆な是れ宿因の作す所なりと、是の如く或は謂はく自在變化等の因の作す所なりと。(二)無因論を施設するとは、謂はく一あるが如し、是の如きの見を起し、是の如きの論を立つ、若し士夫補特伽羅あり諸の領受する所は當に知るべし、一切因なく緣なしと。(三)云何んが惡因無因に三種の過あるを施設するや、謂はく現法の中の不善と俱行する不善の諸受は、宿世の業を因と爲さば亦た過失あり、現法の業を因と爲さば亦た過失あり、若し此の受は宿世の惡業を以て因と爲すとは是れ則ち一あり、不善の諸の樂法受に依りて其の樂不善の受生ずることあらんに、此れ宿世の諸の不善の業を用て以て因と爲して生ずと言はゞ道理に應ぜず。何を以ての故にとならば彼の宿世の諸の不善の業に非ざるもの現法の中に於て樂の異熟を感ずるは正道理に應ずればなり。若し此の受は現法の中の惡業を用て因と爲すと言はゞ、是れ則ち自意の立つる所の諸の惡因論及び無因論を退失す、謂はく諸の受くる所は皆宿因の〔所〕作なりと、乃至廣說是れを初過と名づく。(四)又若し說いて諸の不善の法は皆な宿世の惡業を用て因と爲すと言はゞ、是れ則ち決定して所有る善法は亦宿世の善法を用て因と爲す、是の如く所有る不善の對治と諸善の加行と俱に生ずれば精進皆な無用を成す、是の如きを名づけて第二の過失と爲す。(五)又若し現在に士用あること無くんば是れ則ち應に善不善に依り、審正に是は所應作なり不所不應作なりと觀察すること無かるべく、又如實の智、應に無用を成ずべし。謂はく了知し已つて此れ我れ應に轉ずべく、此れ我れ應に成ずべしと、彼れ有るに非ざるが故に、此も亦有るに非ず、故に如實智は理として成就せず、智成ぜざるが故に念、安住せず、念、住せざるが故に三摩地無く、定あること無きが故に不正の尋思は心をして迷亂せしめ、心迷亂するが故に

を受け、便ち喜足を生ずるも、現法の中に於て聖道を起さず、涅槃を證せず、彼れ是の如く防護して住し、現法の中に於て暫時は惡不善の業を作さずと雖も然も煩惱の隨眠の纏の爲に縛せられ既に終沒し已つて後有續いて生じ、受くる所の身に隨つて先の業緣に依り廣く雜染を起す。（二）若し善く身語意業を防護して住する者には此の差別あり、謂はく此れ彼れ誓つて遠離を受け新業を造らざるに依るが故に業熟すと雖も暫く異熟に觸し尋で能く變吐す。彼れ唯だ此に於て誓つて遠離を受け、喜足を生ぜず、現法の中に於て能く聖道を起し、亦た能く彼の果たる涅槃を證得す。彼れ爾の時に於て乃至有識身相續して住し、恒に先業より感ずる所の諸受を受く。現法の中に於て彼の有識身、乃至壽量未だ滅盡せざる位は、常に相續して住し、壽量若し盡くれば有識身を捨て、後の命根に於て更に成就せず、是の因緣に由りて識と一切の諸受と倶に滅して後相續せず、彼の影の如き受と其の識の樹と皆な滅盡するが故に遍く一切に於て施設す可からず、彼れ爾の時に於て二の因緣に由りて先の所作の業は當來世に於て染を爲すこと能はず。一には煩惱其の助伴と爲りて雜染せしむる者を餘無く斷ずるに由るが故に、二には此の諸行相續し成熟するに依りて雜染餘無く滅するに由るが故なり。彼れ爾の時に於て諸の有情の所に善友の意樂相續し轉ずるが故に無怨心と名づけ、彼の所緣に於て瞋恚斷ずるが故に無恚心と名づけ、業異熟に於て深く過患を見る增上緣の力にて誓つて遠離するが故に無染心と名づけ、已に具に能く彼れを對治する諸の聖道を獲得するが故に顚倒無き善解脫心と名づく。彼れ是の如く能く具に六種の恒住を證得するに由り、若し彼の多所に於て住する現法の中に於て種種なる諸の惡不善の業緣間雜することありと雖も、此の遠離に由りて一向に善を成ず。是の因緣に由りて當に知るべし此れと先の防護して住するとは其の差別ありと。

（三）復次に、當に知るべし業異熟を領受する論を施設するに五種の相に由りて其の雜染を成じ五種の相に由りて不雜染を成ずと。云何んが名づけて五種の相に由り其の雜染を成ずと爲すや。謂はく

（三）五相染不染對を明す。

の是の如き業を造作し已ることあつて若し追悔を生じ、對治を修習する補特伽羅は彼れ此の業に於て若しは增長せず、若しは更に增長す、此の業は是れ順惡趣受なりと雖も亦た轉じて順現法受を成ぜしめ、解脱を障へずと。是の故に此の論を梵行を修習し能く涅槃を證するを誹謗すと名づけず、當に知るべし此の論を是れ正論と爲す。

(2)(一)復次に、十種の對治を闕くことあらば業雜染の爲めに染汚せられ、若し是の如き十種に會遇することあらば便ち清淨を得。一には若し是の如き對治に由らば業を作ることありと雖も而も增長すること無し、彼を當來に望むれば不定受を成す。二には若し是の如き對治に由らば未だ永斷せずと雖も而も更に受けず。三には若し是の如き對治に由らば永斷し離繫す。四には諸の根門を守護するが故に善く其の身を修し、增上戒學を修習せんと欲することを爲す。五には增上戒を修習し已つて增上心學を修習せんと欲することを爲す。六には增上心を修習し已つて增上慧學を修習せんと欲することを爲す。七には增上慧を修習し已つて諸漏を斷ずることを爲す。八には猛利の意樂にて修習す。九には長時に修習す。十には無量門の對治を修習す。若し是の如き十種の業對治に會はざることある者は業雜染の爲めに染汚せらる、此と相違するは當に知るべし清淨なりと。

(二)復次に、現法の中に於て善く身語意業を防護せずして住する者は彼れ先に惡不善業を造作し亦た增長せしめ、當來世に於て其をして雜染ならしむ、若し善く身語意業を防護して住する者は彼れ雜染せず。(一)云何んが現法の中に於いて善く身語意業を防護せずして住し、(二)云何んが善く身語意業を防護して住するや。(一)善く身語意業を防護せずして住すとは、謂はく一あるが如し、諸の不善の身語意業の纒の發起する所に於て能く誓つて遠離するも、然も能起の不正作意に於て相應無明猶ほ故らに發起し、又諸の善の身語意業に於て受學し隨轉す。此の因緣に由りて現法の中に於て諸の煩惱邪欲の尋求して作す所の衆苦に於て差別あること無く、彼れ唯だ即ち此に於て誓つて遠離

(2)重ねて廣く邪正の二論を分別す。
(一)對治會不會對を明す。
(二)三業護不護對を明す。

制伏す可からず、定んで傷損を爲すを說いて名づけて箭と爲す。

(十六)三種の所有を明す　復次に、若し貪と瞋と癡とは慚愧と間雜せば相續するに由るが故に、剎那に非ざるが故に、制伏す可きあるを說いて所有と名づく、是は繫の所攝なり、極めて下穢なる義なり。

第八目　業を解す

(一)三惡行業を明す　復次に、一切の不善の身業を名づけて惡行と爲す。身業を說くが如く語業・意業も當に知るべし亦た爾なりと。此の惡業の數ば現行するに由るが故に諸の惡趣に於て或は已に隨得し、或は當に隨得すべく、或は現に隨得す、是の故に彼れを說いて名づけて惡行と爲す。此に由りて業雜染の義を示現す。煩惱雜染は前に已に顯了せり。

(1)**(二)正邪二論を擧げて業を說くに同じからざることを明す**　復次に、二の業雜染を安立する論あり、一には邪論、二には正論なり。(一)邪論と言ふは、謂はく是の如く說くなり、若し故思ありて凡そ造作する所の諸の不善業は一切決定して當に惡趣を受くべしと。此の論は便ち梵行を修行し能く涅槃を證することを謗る。何を以ての故にとならば諸の有情類は易く現法の中に於て故思あること無くして不善業を造ることを得可からず、況んや餘生に在るをや。若し彼れ決定して惡趣を感ずといはゞ、便ち應に解脫の得可きものあること無かるべし。是の故に當に知るべし此を邪論と爲すと。(二)若し是の如く說く、諸の故思あつて不善業を造すれば、此の業をば亦たは作し亦たは增長する者は定んで當來に於て不可愛の惡趣の異熟を受く、若し作すと雖も增長せざることある者は彼彼の法受を依止と爲すが故に諸の造作する所、或は樂、或は苦にして當に造時に於て現法の中に於て此の業決定すべし、或は樂受に順じ、或は苦受に順ず、諸の是の如き業を造作し已ることあつて若し追悔すること無く對治を修せざる補特伽羅は彼れ此の業に於て若しは更に增長し、若しは增長せず、此の業は定んで順現法受なりと雖も亦た轉じて順惡趣受を成ぜしめ、現法の中に於て能く解脫を障ふ。諸

(1)二論を辯じて業染を安立す。

と名づけ、安立す可しと執するを說いて住の故なりと名づく。又此の中に於て欲愛を緣と爲して欲取を建立し、智論に依止する利養恭敬等の愛を緣と爲して見取を建立し、定愛を緣と爲して禁戒取を立て、有無有愛を緣と爲して我語取を立つ。

(十)四繫を明す　復次に、當に知るべし四繫は唯だ外道に依りて差別し建立すと、前の如く應に知るべし。

(十一)五蓋を明す　復次に、五處に違背して當に知るべし五蓋の差別を建立すと。一には在家の諸欲の境界の爲めに漂淪せらるゝが故に聖教に違背して貪欲蓋を立つ、二には諸の同法の者の訶諫驅擯教誡等に堪へざるが故に所有る愛樂す可き法に違背して瞋恚蓋を立つ、三には奢摩他に違背するに由るが故に惛沈睡眠蓋を立つ、四には毘鉢舍那に違背するに由るが故に掉擧惡作蓋を立つ、五には法に於て論議し、無倒に決擇し、諸法を審察する大師の聖教、涅槃の勝解に違背するに由るが故に疑蓋を建立す。

(十二)三種の株杌を明す　復次に、若しは貪瞋癡の纏に纏はるゝが故に、或は彼の隨眠に隨眠せらるゝが故に心調柔ならず、心極めて愚昧にして自義を得るに於て能く衰損を作すが故に株杌と名づく。

(十三)三垢を明す　復次に、弊下の境に於て起す所の貪欲を名づけて貪垢と爲し、瞋るべからざる所緣の境事に於て起す所の瞋恚を名づけて瞋垢と爲し、極めて顯現し愚癡の衆生すら尙ほ能く了ずる事に於て起す所の愚癡を名づけて癡垢と爲す。

(十四)三種の燒害を明す　復次に、若し貪と瞋と癡と數數現行し、恒常に流溢し、身心を燒惱し、極めて衰損を爲さば說いて燒害と名づく。

(十五)三種の箭を明す　復次に、若し貪と瞋と癡とは慚愧を遠離せば、慚愧無きが故に一向無間に

惱を説いて名づけて軛と爲す。

（九）四取を明す　復次に、當に知るべし二品に依りて四取を建立す、一には在家品、二には外道法の中の諸の出家品なりと。當に知るべし此の中若しは所取若しは能取若しは所爲取、是の如き一切を總説して取と爲す。問ふ、何んが所取なりや。答ふ、欲・見・戒禁・我語は是れ所取なり。問ふ、何んが能取なりや。答ふ、四種の欲貪は是れ能取なり。問ふ、何んが所爲取なりや。答ふ、諸欲を得んが爲め、及び受用せんが爲めの故に初の取を起し、利養及び恭敬を貪る增上力に由るが故に或は他の立つる所の論を詰責せんが爲め、或は他の徵する所の難を免脱せんが爲めに第二の取を起し、奢摩他支を所依止と爲し、所建立と爲し、世間離欲乃至非想非非想處の三摩鉢底に往趣せんと欲するが爲めに第三の取を起し、分別して計する所の作業の受果の所有る士夫を隨説せんと欲するが爲め、及び流轉還滅の士夫の相を隨説せんが爲めに我語取を起すなり是の如き四取は二品に依る、謂はく欲を受用する諸の在家品、及び惡説の法と毘奈耶との中の諸の出家品なり。佛世尊は每に自ら稱して「我れは諸取を遍知し永斷せる正論の大師たり」と言へるに由るが故に、此の法に於て誓つて修行する者は煩惱を帶して身壞し命終すと雖も而も彼に於て諸取を建立せず。所以は何ん。彼れ諸欲に於て顧戀する所無くして出家するが故に、見・戒禁及び我語に於て執受無きが故なり。惡説法者に二の差別あり。一には見愛に於て展轉して怨諍論を發起する者、二には能く世間定に證入する者なり。見愛に於て展轉して怨諍論を發起する者に依つて見取を建立し、能く世間定に證入する者に依りて戒禁取を立て、二品を依と爲して我語に執著するが故に俱品に依りて我語取を立つ。此の中、見とは、謂はく六十二なり、前の如く應に知るべし。邪分別の見の受持する所の身護・語護を説いて名づけて戒と爲し、此れに隨つて受くる所の形服・飲食・威儀・行相を説いて名づけて禁と爲し、諦の故に、住の故に有我を論説するを名づけて我語と爲す、實物ありと執するを説いて諦の故なり

意言を起發し、餘は前說の如くなるを、害尋思と名づけ、心に染汚を懷き、親戚を攀緣し、意言を起發し、餘は前說の如きを、是の故に說いて親里尋思と名づけ、心に染汚を懷き、國土を攀緣し、意言を起發し、餘は前說の如きを、是の故に說いて國土尋思と名づけ、心に染汚を懷き、自義を攀緣して推託し遷延し、後時に得んことを望んで意言を起發し、餘は前說の如きを、是の故に說いて不死尋思と名づけ、心に染汚を懷き、自他の若しは劣若しは勝を攀緣し、意言を起發し、餘は前說の如きを、是れを輕蔑相應尋思と名づけ、心に染汚を懷き、施主を攀緣して家勢に往還し意言を起發し隨順し隨轉す、是れを家勢相應尋思と名づく、愁歎等の事は前の如く應に知るべし。

（六）八纏を明す　復次に、一切の煩惱に皆な其の纏あり、現行する者を悉く纏と名づくるに由るが故なり。然るに八種の諸の隨煩惱ありて四時の中に於て數數現行す、是の故に唯だ八種のみを立てゝ纏と爲す。謂はく增上戒を修學する時に於ては無慚・無愧、數數現行して能く障礙を爲す。若し增上心を修學する時に於ては惛沈・睡眠、數數現行して能く障礙を爲す。若し增上慧を修學する時に於ては法を簡擇するが故に掉擧・惡作、數數現行して能く障礙を爲す。若し同法の者、展轉して財及び法を受用する時には嫉妬・慳悋、數數現行して能く障礙を爲す。

（七）四暴流を明す　復次に、欲貪・瞋等の欲界所繫の煩惱の行者にして、欲界所繫の上品の煩惱を未だ斷ぜず未だ知らざるを欲暴流と名づく。有と見と無明との三種の暴流も其の所應の如く當に知るべし亦爾なりと、謂はく欲界に於て未だ離欲を得ざるものは諸の外道を除いて欲暴流と名づけ、已に離欲を得たるを有暴流と名づく。若し諸の外道ならば多に從つて門を論ぜば當に知るべし餘の二種の暴流ありと。謂はく諸の惡見を略攝して一と爲して見暴流と名づけ、惡見の因緣を略攝して一と爲して說いて第四の無明暴流と名づく。

（八）四軛を明す　復次に、若し諸の煩惱の等分の行者には增せず減ぜず、卽ち上の所說の一切の煩

於て反つて瞋り、打たるるに於て反つて打ち、弄せらるるに於て反つて弄するも當に知るべし亦爾なりと。自の諸欲に於て深く貪愛を生ずるを名づけて耽嗜と爲し、他の諸欲に於て深く耽著を生ずるを遍耽嗜と名づけ、勝に於ても劣に於ても其の所應に隨つて當に知るべし亦た爾なりと。諸の境界に於て深く耽著を起すを說いて名づけて貪と爲し、諸の惡行に於て深く耽著を生ずるを非法貪と名づけ、自の父母等の諸の財寶に於て正しく受用せざるを名づけて執著と爲し、他の委寄せる所有る財物に於て規つて抵拒せんと欲するが故に惡貪と名づけ、妄りに諸行を觀じて我我所と爲し、或は分別起、或は是れ倶生なるを說いて名づけて見と爲し、薩迦耶見を所依止と爲して諸行の中に於て常見を發起するを名づけて有見と爲し、斷見を發起するを無有見と名づく。當に知るべし五蓋は前の定地に已に其の相を說けるが如しと。所欲の如くならず非時は睡纏に隨縛せらるるが故に瞢と名づけ、非處に思慕するを說いて不樂と名づけ、麁重剛强にして心調柔ならず、身を擧げて舒布するが故に頻申と曰ひ、飮食する所に於て善く通達せず、若しは過ぎ若しは減ず、是の故に名づけて食に量を知らずと爲す。所應作に於て而も便ち作さず、所應作に非ざるに更に反つて作し、聞・思・修習する所の如き法の中に放逸を先と爲して功用を起さざるを不作意と名づく、所緣の境に於て深く繫縛を生ずること、猶し美睡の其の心を隱翳するが如し、是の故に說いて不應理に轉ずと名づく。自ら輕蔑するが故に心下劣と名づけ、性となり他を惱ますが故に抵突すと名づけ、性となり好んで譏嫉するが故に諛訛と名づく。師長・尊重・福田及び同法の者を欺誑するを不純直と名づく。身語の二業皆な悉く高疎にして其の心剛勁にして又淸淨ならざるを不和輭と名づく。諸の戒見、軌則、正命に於て皆な同分ならざるを不隨順と名づけ、同分にして轉ずるも心に愛染を懷き、諸欲を攀緣し、意言を起發し隨順し隨轉するを欲尋思と名づけ、心を憎惡を懷き、他に於て不饒益の相を攀緣して意言を起發し隨順し隨轉するを恚尋思と名づけ、心に損害を懷き他に於て惱亂の相を攀緣し、

て他に望めて恥ぢざるが故に無愧と名づけ、他の下劣に於て己を勝たりと謂ひ、或は復た等に於て己を等たりと謂ひ、心をして高擧せしむるが故に名づけて慢と爲し、等に於て勝と謂ひ、勝に於て等と謂ひ、心をして高擧せしむるが故に過慢と名づけ、勝に於て勝と謂ひ、心をして高擧せしむるを慢過慢と名づけ、妄りに諸行を觀じて我我所と爲し、心をして高擧せしむるが故に我慢と名づけ、其の殊勝なる所證の法の中に於て未だ得ざるを得たりと謂つて心をして高擧せしむるを增上慢と名づけ、多勝の中に於て己は少しく劣なりと謂つて心をして高擧せしむるを下劣慢と名づけ、實に其の德無きに己に德ありと謂つて心をして高擧せしむるが故に邪慢と名づけ、心に染汚を懷き、榮譽を隨恃し、形相疎誕なるが故に名づけて憍と爲し、諸の善品に於て勤修することを樂はず、諸の惡法に於て心に防護無きが故に放逸と名づけ、諸の尊重なるもの及び福田に於て心の謙敬ならざるを說いて名づけて傲と爲し、若し煩惱の纒能く發起せしめ、刀仗を執持し、鬪訟違諍するが故に憤發と名づけ、心染汚を懷き、己が德を顯はさんが爲めに假に威儀を現ずるが故に名づけて矯と爲し、心に染汚を懷き、己が德を顯はさんが爲めに或は親事を現し或は軟語を行ずるが故に名づけて詐と爲し、心に染汚を懷き、所求あらんことを欲し、矯めて形儀を示すが故に現相と名づけ、現に遮逼を行じて乞匃する所あるが故に硏求と名づけ、得る所の利に於て喜足を生ぜず、他の利を獲ることを說いて更に勝利を求む、是の故に說いて利を以て利を求むと名づけ、自ら己が德を現はし、謙恭を遠離し、尊重す可きに於て而も尊重せざるが故に不敬と名づけ、不順の言に於て性堪忍せざるが故に惡說と名づけ、諸有の朋儔引導して非利益の事を作さしむるを名づけて惡友と爲し、財利に耽著して不實の德を顯はし、他をして知らしめんと欲するが故に惡欲と名づけ、大人の所に於て廣大なる利養恭敬を欲求するが故に大欲と名づけ、染汚心を懷いて不實の德を顯はし、他をして知らしめんと欲するを自の希欲と名づけ、罵らるるに於て反つて罵るを名づけて不忍と爲し、瞋に

正法の内に於て法慳を發起し、此に由りて當來に智慧貧乏なり。餘は所應に隨つて配屬すること應に知るべし。

(三)三縛を明す　復次に、貪縛の爲に纏縛せらるるに由るが故に、能く樂受に隨順する境界に於て心に捨すること能はず、是の如く瞋縛に纏縛せらるるが故に、能く苦受に隨順する境界に於て心に捨すること能はず。愚癡縛に纏縛せらるるに由るが故に、能く非苦樂受の中庸に隨順する境界に於て心に捨すること能はず。此の因緣に由るが故に三縛を立つ。

(四)七隨眠を明す　復次に、煩惱品の所有る麁重の依身に隨附するを說いて隨眠と名づく、能く種子と爲りて一切の煩惱の纏を生起するが故なり。當に知るべし此に復た七種を建立すと。未離欲品の差別に由るが故に、已離欲品の差別に由るが故に、二俱品の差別に由るが故なり。未離欲品の差別に由るが故に(一)欲貪(二)瞋恚隨眠を建立し、已離欲品の差別に由るが故に(三)有貪隨眠を建立し、二俱品の差別に由るが故に(四)慢(五)無明(六)見(七)疑の隨眠を建立し、是の如く一切の煩惱を總攝す。

(五)隨煩惱を明す　復次に、隨煩惱とは、謂はく貪不善根・瞋不善根・癡不善根、若しは忿、若しは恨、是の如く廣說諸の雜穢の事を說く。當に知るべし此の中、能く一切の不善法を起す貪を貪不善根と名づく、瞋・癡も亦爾なり。若し瞋恚の纏の能く面貌を慘裂し奮發せしむるを說いて名づけて忿と爲し、內に怨結を懷くが故に名づけて恨と爲し、衆惡を隱藏するが故に名づけて覆と爲し、染汚驚惶するが故に熱惱と名づけ、心に染汚を懷き他の榮を憙ばざるが故に名づけて嫉と爲し、資生の具に於て深く鄙悋を懷くが故に名づけて慳と爲し、彼れを欺誷せんが爲めに內に異謀を懷き、外に別相を現はすが故に名づけて誑と爲し、心、正直にあらず、明ならず、顯ならず、僻行邪曲なるが故に名づけて諂と爲し、所作の罪に於て已に望めて羞ぢざるが故に無慚と名づけ、所作の罪に於

【一】隨煩惱の解釋に二說あり常には貪瞋癡等の根本煩惱に隨逐して起る忿恨等の枝末の煩惱を隨煩惱と云ふ、然るに今の文は煩惱は前後展轉相隨逐して起るが故に一切の煩惱を隨煩惱と云ふ。

（四）問答して解脫の體を辯ず　云何んが解脫なりや。謂はく畢竟の斷對治を起すが故に、一切煩惱の品類の麁重永に息滅するが故に、轉依を證得し、諸を煩惱をして決定し究竟して不生法を成ぜしむ。是れを解脫と名づく。若し聖弟子は無所有處にて已に離欲を得て唯だ非想非非想處の所有る諸行を餘し、復た能く勝れたる有頂定に安住し、爾の時に無間に能く隨つて諸漏の永盡を證得す。若し所餘の位にては能く漸く彼彼の諸漏を斷ずと雖も、然も無間に能く隨つて諸漏の永盡を證得するに非ず、是の如く乃至無所有處にて未だ離欲を得ざるなり。

第七目　煩惱を解す（十六門あり）

（一）三漏を明す　復次に、諸の欲界繫の一切の煩惱の唯だ無明のみを除けるを說いて欲漏と名づけ、諸の色無色の二界の所繫の一切の煩惱の唯だ無明のみを除けるを說いて有漏と名づく。若し諸の有情の或は未離欲或は已離欲のものの、諸の外道の所有る邪僻なる分別の愚癡より生ずる所の惡見其の心を蔽覆し此の惡見に依りて彼の諸欲に於て一分尋求すると一分離欲すると、乃至非想非非想處なるとを除いて、彼の三界に於ける所有る無智を總攝して一と爲して無明漏に立つ。

（二）九結制立の所由を明す　復次に、九種の事あり、能く和合するが故に當に知るべし九結の差別を建立すと。云何んが九事なりや。一には在家品の可愛の有情・非有情數の一切の境界に依る貪愛の纒の事、二には即ち此の品の可惡の有情・非有情數に依る瞋恚の纒の事、三には有情非有情數の憍慢の纒の事、若しは四五六は惡說の法の諸の出家品の三種の邪僻なる勝解に依る纒の事なり、謂はく（一）不正の法を聽聞するに依るが故に、（二）不如理なる邪思惟に依るが故に、（三）非方便の所攝の修に依るが故に、是の如き差別を即ち三種と爲す、七には善說の法と律とに於て勝解無き纒の事、八には出家品の智の貧窮なるに依る事、九には在家品の財貧窮なるに依る事なり。此の九事に由り其の所應の如く當に知るべし愛等の九結に配屬すと。此の中、嫉に由りて心を變壞するが故に

しく資糧を安處する言教と名づけ、心をして蓋と趣愛とを離れしむる言教を正しく作意を安處する言教と名づく。此の言教に依る勝れたる奢摩他に攝受する所の慧を毘鉢舍那支と名づく、是の故に此の言教を說いて毘鉢舍那支と名づく。(四)云何んが無間殷重の加行なりや。謂はく常に所作し、委悉に所作し、勤精進して住す、當に知るべし卽ち止觀に依りて加行するなりと。又勤精進するに應に五種を知るべし、一には被甲精進、二には加行精進、三には不下精進、四には無動精進、五には無喜足精進なり。此の中、最初は當に知るべし猛利なる樂欲を發起し、次は所欲に隨つて堅固勇悍なる方便を發起し、次は受くる所の諸法を證得せんが爲に、自ら輕蔑せず亦た怯懼無く、次は能く寒熱等の苦を堪忍し、後は下劣に於て喜足を生ぜず、後後の轉た勝れ轉た妙なる諸の功德を欣求して住するなりと。(五)彼れ是の如く勤精進して住するに由りて諦現觀に入り、諸聖の出世間の慧を證得し、修道の中に於て此の慧に依止して、若しは行じ若しは住し、能く正しく所依の身の中の諸の隨煩惱を除遣して心をして淸淨ならしむ。謂はく聚落或は聚落の邊に住し、若しは少壯にして端嚴美妙なる形色母邑を見、卽便ち作意して不淨なりと思惟す、彼を緣ずる貪を損害せんと欲するが爲の故なり。若し他人の逼迫し惱亂するに遇はば、卽便ち作意して慈相を思惟す、他を緣ずる瞋を損害せんと欲するが爲の故なり。是の如く行ずる時に能く正しく諸の隨煩惱を除遣し、心をして淸淨ならしむ。若しは遠離處にて入・出の二種の息念を修習し、欲等の諸の惡尋思を除遣す。是の如く住する時能く正しく諸の隨煩惱を除遣し、心をして淸淨ならしむ。彼れ是の如く已に證得する所の出世間の慧に依つて一切の行に於て無常の想を修し、能く正しく所餘の我慢を蠲除す。是の如き善士を所依止と爲して復た無倒なる教授の前行を得、此に由りて漸次に能く有學の圓滿なる解脫を證す、金剛喻三摩地を得るが故なり。亦た無學の圓滿なる解脫を證す、一切の煩惱を皆な離繫するが故なり。

多く所作あり。何等を五と爲すや。一には正しき教授、二には奢摩他支、三には毘鉢舍那支、四には無間殷重なる加行、五には出世間の慧なり。(一)正しき教授とは、謂はく三種の正友の顯はす所なり、一には大師、二には軌範尊重なるもの、三には同梵行者及び內法に住する在家の英叡なり。是の如きを名づけて三種の正友と爲す。諸の有智の者は彼に從つて應に求めて善門の眞正の教授を積集すべし。(二)奢摩他支とは、謂はく一あるが如し、尸羅を具して住す、廣說應に知るべし聲聞地の如しと。是の如く尸羅具足して住し已つて便ち悔あること無し、悔無きが故に歡び、廣說乃至樂しむが故に心定なり。(三)毘鉢舍那支とは、謂はく三種の、欲に隨ふ言教を得、一には聖正なる言教、二には厭離の言教、三には心をして蓋と趣愛とを離れしむる言教なり。(1)云何んが聖正なる言教なりや。謂はく衆聖の五の無學蘊に依る所有る言教なり、即ち是れ諸聖の成就せる是の如き戒と是の如き定と是の如き慧と是の如き解脫と是の如き解脫知見とを宣說するなり。(2)云何んが厭離の言教なりや、謂はく三種に依りて少欲喜足を增さしむる言教及び斷を樂ひ修を樂ふに依つて憒鬧を離れしむる言教なり。(3)云何んが心をして蓋と趣愛とを離れしむる言教なりや、當に知るべし此の教に復た三門ありと。一には一切煩惱蓋に蓋と趣愛とを離るる言教、二には五蓋に蓋と趣愛とを離るる言教、三には無明蓋に蓋と趣愛とを離るる言教なり。當に知るべし此の中、斷と離と滅との界を證得せんが爲なるに依る所有る言說は、是れ初の言教なりと。即ち彼に於て勝れたる功德を見及び所治の蓋處と諸行とに於て深く過患を見るに依る所有る言說は、當に知るべし是れを第二の言教と名づくと。是の如き緣性緣起に隨順する所有る言說を當に知るべし是れを第三の言教と名づくと。是の如き三種の言教を總じて毘鉢舍那支と名づく。又此の言教は略を以て之を言はば復た三種あり、一には能く樂欲を生ずる言教、二には能く正しく資糧を安處する言教、三には能く正しく作意を安處する言教なり。謂はく聖正なる言教を能く樂欲を生ずる言教と名づけ、厭離の言教を正

はく愁等の苦、愛等の雜染なり。

第四目　不愚を解す

復次に、三種の相に由りて當に不愚を知るべし、一には自性の故に、二には礙に由るが故に、三には障に由るが故なり。(一)不愚の自性とは、謂はく五相の受の安立の中に於て善く能く自相共相を覺了し、此に由りて能く一切の煩惱を斷じ、能く聖諦を覺り、能く涅槃を證するなり。(二)不愚の礙とは、四種の魔に由るなり、謂はく(1)蘊魔の一切處に遍じ隨逐する義に由るが故に、(2)彼の天魔の時時の間に於て能く數ば任持し障礙する義に由るが故に、(3)死〔魔〕(4)煩惱魔の能く死生より生ずる所の衆苦の與めに器と作る義なるが故なり。(三)不愚の障とは、謂はく不現見の境を緣ずる煩惱及び不現見に非ざる境を緣ずる纏或は彼の隨眠なり。

第五目　教授を解す

復次に、諸佛世尊と佛の聖弟子とは三種の相は由りて能く正しく諸の弟子衆に教授す。何等を三と爲すや。一には引導教授、二には其の所應に隨つて所緣の境に於て安處する教授、三には所化をして自義を得しむる教授なり。是の如き教授は其の次第の如く當に知るべし即ち是れ三種の神變なりと。

第六目　解脫を解す

(一)解脫智を求むることを明す　復次に、二種の相に由りて應に能く解脫を成就する妙慧を求むべし。一には如理の聞思、久遠相續の慧は能く有學の解脫を成就す、二には有學の久遠相續の慧は能く無學の解脫を成就す。

(二)解脫の位を擧ぐ　復次に、略して二種の解脫の成就あり、一には有學、二には無學なり。有學とは、謂はく金剛喩三摩地と俱なり。無學とは、謂はく彼れの已上なり。

(三)淸淨の比丘に五種の法ありて多く所作あることを明す　復次に、心淸淨行の苾芻に五種の法ありて

復次に、是の如く五相に安立せる諸受に、當に知るべし復た八種の差別ありと。一には內處の差別、二には外處の差別、三には六識身の差別、四には六觸身の差別、五には六受身の差別、六には六想身の差別、七には六思身の差別、八には六愛身の差別なり。當に知るべし此の中、三和合の義に由りて前の三の差別を立て受の因緣の義に由りて第四の差別を立て、三和合の觸の果の義に由りて第五の差別を立て、受を分別し隨つて言說する義に由りて第六の差別を立つと。所以は何ん、諸受を受くる時に是の如き想を作す、我れ今此の苦、此の樂、此の非苦樂を領受し、亦復た他の爲めに隨つて言說を起すと。業と煩惱との二の雜染の義に由りて當に知るべし第七と第八との兩種の差別を建立すと。所以は何ん、彼の受の若しは合し若しは離するに於て思の造作を起し、如如に思の所造作を發起せば是の如く是の如く愛を生じ求願するに由る。

第三目　愚を解す

復次に、當に知るべし略して二種の一切ありと。一には少分の一切、二には一切の一切なり。一切は皆な無常なりと說くが如きは當に知るべし此れ少分の一切に依ると、唯だ一切の行のみにして、無爲には非ざるが故なり。一切の法は皆な無我なりと言ふは當に知るべし此れは一切の一切に依ると。又三相に由りて應に是れ愚なりと知るべし、一には自性に由るが故に、二には因緣に由るが故に、三には果に由るが故なり。（一）愚の自性の故にとは、謂はく、纒に由るが故に、即ち是れ現在世に忘失するなり。隨眠に由るが故に、即ち是れ當來忘失する法なり。（二）愚の因緣の故なりとは、謂はく五相の受の安立の中に於て是れ無常なり等と覺了すること能はず、及び自體の初中後の位に遍する所有る惱亂をば皆な了ぜざるが故なり、當に知るべし即ち是れ生老病及び死の法性に於て覺了すること能はざるなりと。初の惱亂とは、謂はく生に由るが故なり。中の惱亂とは、謂はく病に由るが故なり。後の惱亂とは、謂はく老死の二種の法に由るが故なり。（三）愚の果の故なりとは、謂

卷の第八十九

攝事分中契經事處擇攝第二の一

第二節　契經事の中の處擇攝を明す

第一項　第一の總嗢拕南半頌を以て四門を標す

是の如く已に行擇攝を說けり、處擇攝をば我れ今當に說くべし。總の嗢拕南に曰く、

『初は(一)安立等と(二)智と(三)同等となり、最後は當に知るべし(四)離欲等なり。』

第二項　別嗢拕南第一を以て安立等の八門を列釋す

別の嗢拕南に曰く、

『(一)安立と(二)差別と、(三)愚と(四)不愚と(五)教授となり、(六)解脫と(七)煩惱と(八)業と、
皆な廣說す應に知るべし。』

第一目　安立を解す

五種の相に由りて當に諸受を安立する差別を知るべし。一には自性の故に、二には所依の故に、三には所緣の故に、四には助伴の故に、五には隨轉の故なり。(一)自性の故にとは謂はく三受あり、一には苦、二には樂、三には不苦不樂なり。(二)所依の故にとは、謂はく六種あり、即ち眼・耳・鼻・舌・身と意となり。(三)所緣の故にとは、謂はく色等の六の所緣の境界なり。(四)助伴の故にとは、謂はく想、思、或は餘の善・不善・無記の心法の此れと相應するなり。(五)隨轉の故にとは、謂はく此の相應の心なり、彼れに依るに由るが故に三受隨轉し、彼を諸受の同生同滅する所依止の處と爲す。

第二目　差別を解す

復次に、五種の相に由りて有學、無學の二種は差別す。謂はく(一)諸の無學の成就する所の智を說いて無上と名づけ、一切の有學の成就する所の智を說いて有上と名づく。智の無上なるが如く當に知るべし(二)正行と及び(三)解脫との無上なるも亦た爾なりと。又(四)諸の無學は善淸淨なる諸の聖慧眼を以て佛の法身を觀ず、有學は爾らず。又(五)諸の無學は善圓滿なる無顚倒の行を以て如來に奉事す、有學は爾らず。是れを五相と名づく。

瑜伽師地論卷第八十八

一會坐の處中の大衆は皆な佛の所に於て他に勝る心を起し、彼の外道の敵論者の所に於ては他勝る心を起す。又(六)佛世尊の言辭は威肅なり、其の敵論者の出す所の言辭には威肅あること無し。

第十七目　二種の論を解す

復次に、二種の論あり。何等を二と爲すや。一には有我論、二には無我論なり。無我論は力あり、有我論は力無し。有我論者は常に無我論者の爲に伏せらる、唯だ論者の其の力の羸劣なるを除く。云何んが名づけて有我論者と爲すや。謂はく一あるが如し、是の如きの見を起し、是の如きの論を立て、色等の行に於て建立して我と爲す、謂はく我に行あり、行は是れ我所なり、我は行の中に在りて流れず散ぜず、遍く支節に隨ひ至らざる所無し、是の故に色等の諸行の性は我にして諸行の田に依りて福非福を生じ、茲に因りて愛不愛の果を領受す、譬へば農夫の良田に依止して農業を營事し、及び藥草叢林を種植するが如し、是れを我論と名づく。云何んが名づけて無我論者と爲すや。謂はく二種あり、一には我を破する論、二には無我を立つ。我を破する論とは若し實我は能く作用ありて愛非愛の諸果の業の中に於て自在を得と謂はゞ、此の我は恆時に樂を欣ひ苦を厭ふ、是の故に此の我は唯だ應に福を生じ非福を生ぜざるべし。又我の作用は常に現在前せば、內外の諸行の若し變異する時に應に愁憂悲歎を發生すべからず。又我は是れ常ならば覺を以て先と爲し、凡そ生起する所は常に應に隨轉して變易あること無かるべし、然るに不可得なり。是の如きを名づけて有我論を破すと爲す。無我を立つとは、一切の行は衆緣より生ずるを以て若し福緣に遇はゞ福便ち生起し、此れと相違せば非福を生起す。此を緣と爲すに由りて能く一切の愛・非愛の果を招く、衆緣に依るが故に皆な是れ無常なり、唯だ是の如き因果所攝の諸行の流轉に於て我等を假立す、若し勝義に依らば一切の諸法皆な無我等なり。是の如きを名づけて無我論を立つと爲す。

第十八目　學無學の二種の差別を解す

地を我と爲す、我卽ち是れ地なり、乃至廣說、一切應に知るべし。

第十五目　外愚の相を解す

復次に、諸の外道の輩に略して五種の愚夫の相あり、彼の相に由るが故に愚夫の數に墮す。謂はく諸の外道は性となり聰慧なる者すら猶尙ほ聰慧の慢を懷くことを免れず、況んや聰慧に非ざるをや、是を第一の愚夫の相と名づく。又諸の外道は多く利養恭敬を貪求せんが爲に自讚他毀す、是れを第二の愚夫の相と名づく。又諸の外道は、若し諸の聖者、爲に正法・正敎・正誠を說かば卽便ち違逆して呵罵し毀呰す、是れを第三の愚夫の相と名づく。又諸の外道は憙んで自ら似正法論を陳說し、或は他に開示す、是れを第四の愚夫の相と名づく。又諸の外道は、如來、如來の弟子の爲に降伏せられ、亦た如來の所說の法と律とは是れ眞善の說なりと知り、自の法と律とは是れ妄惡の說なり知ると雖も、然も我慢の增上力に由るが故に都べて信受せず、乃至集の因緣を觀察せざるなり、是れを第五の愚夫の相と名づく。

第十六目　六分を成ずることを解す

復次に、如來は六分を成就したまひて無間論師子王と名づくることを得。何等を六と爲すや。所謂る(一)最初に外道敵論者の所に往詣し、乃至其の一切の義を問ふことを恣にす、凡そ興す所の論は諍論の爲には非ず、唯だ諸の有情を哀愍するが故に其の未だ信ぜざる者は彼をして信を生ぜしめ、若し已に信ぜる者は倍す增長せしむるを除く。又(二)論を興す時に諸根寂靜にして形色變ること無く、亦た怖畏の習氣隨逐すること無し。又(三)終に諸天世間の爲に勝伏せられず、一切世間に敵論者無く、能く越ゆること一翻、唯だ說くこと一翻にして皆な能く摧伏す。又(四)諸の世間の極めて聰慧なる者、極めて無畏なる者も若し如來と共に論を興す時は所有る辯才皆な悉く謇訥し、增上の怖畏、身心を逼切し、一切の矯術虛詐の言論を皆な設くること能はず。又(五)復た一切の同

(3)互に勝劣する苦、(4)堅く執著する苦を發起す。當に知るべし此の中(1)若し他に勝たるれば便ち愁惱を生ず、是れを初の苦と名づくと。(2)若し他に勝たば遂に方便を作して自の見品をして轉た復た增盛ならしめ、他の見品をして漸く更に隱昧ならしめ、唯だ我が見のみ淨にして餘所の見には非ずとし、邪見に執著して深く愛藏を起す、此の因緣に由りて種種不正なる尋思を發生し、及び種種の不寂靜の意を起し其の心を損害するを第二の苦と名づく。(3)邪見を愛藏する增上力の故に他を以て己れを量る、謂はく己れを勝なり或は等なり或は劣なりと爲し因つて自ら高擧し、他を凌蔑するなり、是れを第三の互に勝劣する苦と名づく。(4)彼れ此れに依るが故に利養を追求し、即ち追求する苦の爲に觸せられ、凡そ所作あらば皆な惱亂を爲し、他論を詰責し及び自論の爲に他の難ずるを免脫す、是れを第四の堅く執著する苦と名づく。是の如き四種を見違諍より生ずる所の衆苦と名づく。內法の異生は上品の無我の勝解に安住して、當に知るべし、已に是の如き衆苦を斷ぜりと。所以は何ん、彼れ當來に於て意樂に由るが故に是の如き等の諸の惡見趣に於て除遣するに堪能なり、是の故に若し初の見圓滿に住すれば能く初の苦を超ゆ。(二)又即ち此の初の見圓滿に依りて親近し修習し、極めて多修習し、內の諸行に於て法智を發生し、現見せざるに於て類智を發生するを總攝して一聚と爲し、他を緣ぜざる智を以て現觀に入る、謂はく無常の行、或は隨つて餘の一行を以てし、彼れ爾の時に於て能く隨つて第二の見圓滿を證得し、及び第二の苦を超ゆ。(三)彼れ此に住し已つて先の所得の如き七覺分法に親近し修習し、極めて多修習し、能く前の所說の如き四種の業等の雜染を斷じ、能く隨つて後の見圓滿を證得し、後有の苦を超ゆ。此の中、第一の補特伽羅は猶ほ二苦を殘し、及び現在の所依の身苦を殘し、第二の補特伽羅は唯だ一苦及び依身の苦を殘し、第三の補特伽羅は一切の苦斷じ、但だ依身の苦のみ暫時餘在す、譬へば幻化の如し。又分別の薩迦耶見に依りて二十句を立つ、俱生には依らず、又內法の者は是の如き行無く、遍處定に依る、謂はく

得て、有學の位に住する者なり。三には已に最後究竟第一の阿羅漢果を得て、無學の位に住する者なり。

云何んが名づけて三の見圓滿と爲すや。一には初の聖者の隨順する無漏有漏の見圓滿し、二には未だ善淨ならざる無漏の見圓滿し、三には善淸淨なる無漏の見圓滿す。此の三圓滿は三種の補特伽羅を說くに依りて、其の次第に隨つて前の如く應に知るべし。

云何んが名づけて三種の苦を超ゆと爲すや。謂はく初の見圓滿は能く外道の我見違諍より生ずる所の衆苦を超ゆ、第二の見圓滿は能く一切の惡趣の衆苦を超ゆ、第三の見圓滿は能く一切の後有の衆苦を超ゆ。

此の中(一)云何んが諸の外道の我見違諍より生ずる所の衆苦と名づくるや。謂はく此の正法と毘奈耶との外の所有る世間の種種なる異道、薩迦耶見を以て根本と爲して生ずる所の一切の顚倒せる見趣、是の如き一切を總じて我見と稱す、謂はく我論者の我論と相應する一切の見趣、或は一切常論者、或は一分常論者、或は無因論者、或は邊無邊論者、或は斷滅論者、或は現法涅槃論者の彼の論と相應する一切の見趣なり。或は有情論者の彼の論と相應する一切の見趣、謂はく諸の邪見にして一切の化生の有情を撥無し、他世を誹謗するなり。或は命論者の彼の論と相應する一切の見趣、謂はく命論者は命は身に即し或は身に異なり等と計するなり。或は吉祥論者の彼の論と相應する一切の見趣、謂はく參羅・曆算・卜筮を觀ずる種種の邪論にして妄りに誦呪・祠祀・火等は所愛の境を得、能く吉祥を生じ、能く無義を斷ずと計するなり。又相を覩て祥・不祥と爲すと計するなり。彼れ復た云何ん。謂はく二十句の薩迦耶見を所依止と爲して前際後際を妄計する六十二種の諸の惡見趣を發起し、及び總じて一切を謗る邪見を起すなり。云何んが違諍より生ずる所の衆苦なりや。謂はく彼れ展轉して見欲相違し、互に諍論を興し、(1)種種の心憂惱する苦、(2)深く愛藏する苦、

第十三目　大師の記を解ず

復次に、善く法を取る者は聞・思に由るが故なり、善く思惟する者は修慧に由るが故なり、善く顯了する者は如所有性の故なり、善く通達する者は盡所有性の故なり。二種の相に由りて諸の聖弟子は能く正しく請問し、大師は善く記したまふ、謂はく諸取の斷・遍知に於て論じたまふなり。何等を二と爲すや。一には此の諸取の斷・遍知に於て論ず。二には此の諸取の斷・遍知のが爲に論ずるなり。當に知るべし此の中（一）一切の行の斷と遍知とに於て論ずるは所謂る如來なりと。（二）又此の諸取を若し未だ斷滅せずして隨觀せば彼に三種の過患あり、若し已に斷滅して隨觀せば彼に功德あり。一には諸行の中に於て生ずる所の諸取の行若し變壞せば便ち愁等を生ず、應に知るべし是れを第一の過患と名づくと。已に諸行の變壞の所作を得たり。二には諸行の中に於て生ずる所の諸取は、未だ得ざる可意の諸行を得んが爲に、追求する時に於て廣く非一種種なる衆多の差別の不善を行ず、此の追求に由りて不善を行ずるが故に四種の苦に住す、一には將に現前せんとする隣近に起す所なり、二には正に現前する現在に起す所なり、三には他の逼迫增上して起す所なり、四には自の雜染增上して起す所なり、應に知るべし是れを第二の過患と名づくと。三には即ち是の如き惡不善の法の愛習を因と爲すに由りて身壞し死して後に諸の惡趣に往く、應に知るべし是れを第三の過患と名づくと。此れと相違するは諸取を斷じ隨觀するに於ける三種の功德勝利なり、應の如く當に知るべし。

第十四目　三見の滿を解す

復次に、當に知るべし略して三種の聖者あり、三の見圓滿して能く三苦を超ゆと。云何んが名づけて三種の聖者と爲すや。一には正見具足す、謂はく無倒なる法無我の忍に於て異生の位に住する者なり。二には已に聖諦を見、已に能く正性離生に趣入し、已に現觀に入り、已に果に至ることを

に非ず、是の故に說いて是れを不共の義と名づく。又即ち此の法は微妙審諦にして聰明なる智者の內の所證なるが故に說いて了し難しと名づく。此等の差別は當に知るべし前の攝異門分の如しと。
二種の相に由りて一切如來の所說の義智をば皆な應に了知すべし。何等を二と爲すや。一には敎智、二には證智なり。(一)敎智とは、謂はく諸の異生の聞・思・修の所成の慧なり。(二)證智とは、謂はく學・無學の慧及び後に得る所の諸の世間の慧なり。此の中、異生は一切の佛の所說の義に於て皆な能く了知するに非ず、亦た慢に於て是れ慢なりと覺察するに非ず、又未だ斷ずること能はず、若し諸の有學ならば我見の一切の義の中に於て皆な了知せざるには非ず、又能く慢に於て是れ慢なりと覺察するも、而も未だ斷ずること能はず、若し諸の無學ならば能く一切を作す。

第十一目　不記を解す

復次に、諸佛如來は世俗諦及び勝義諦に於て皆な如實に知り、正觀して彼の二種の道理に於て應に記別すべからず。若し記別すれば能く無義を引くが故に記別せず亦た執著せず。謂はく滅後の若しは有、若しは無、亦有亦無、非有非無に於て、若しは如來に於て是の如き智見を先と爲して記せざるなり、謂はく無知の者は、當に知るべし、自ら妄見と倶行する無智の性を顯はすと。

第十二目　變壞を解す

復次に、應に知るべし略して二種の變壞ありと。一には諸行衰老する變壞なり、謂はく一あるが如し、年、百二十にして其の形衰邁するなり、是の因緣に由りて身老病と名づく。二には心變ふる變壞なり、是の因緣に由りて心老病と名づく。第一の變壞は若しは愚も若しは智も皆な其の中に於て欲する所に隨はざるなり。第二の變壞は智者は中に於て能く欲する所に隨ふも、諸の愚者には非ず。又諸の愚夫は若し身老病せば當に知るべし其の心定んで隨つて老病す、其の智ある者は身老病すと雖も而も心自在にして老病に隨はずと。是れを此の中の愚癡の差別と名づく。

し執著す可きをや、當に知るべし未だ薩迦耶見を斷ぜずんば二の過患ありと。一には能く害し苦ある諸行に於て我我所を執す、此の因緣に由りて能く生死に流轉する大苦を感ず。二には現法に於て能く無上なる聖慧命根を礙ふ、譬へば人あり、自ら力の能く怨家を害する無きを知り、彼れ害を爲さんことを恐れ、先づ相ひ親附して如意の事を以て現に之に承奉す、時に彼の怨家親附するを知り已つて便ち其の命を害ふが如し、愚夫異生も亦た復た是の如し、怨家に似たる薩迦耶見の當に苦害を爲すべきを恐れ、便ち愛縛を起し、可意の行を以て現に承奉す、是の如く愚癡異生の類は能く害を爲す薩迦耶見に於て唯だ功德のみを見て過失を見ず、殷勤に親附し、旣に親附し已つて未だ退くことを得ざるに由りて說いて聖慧命の根を損害すと名づく。

第十目　疑癡の處所を解す

復次に、諸の外道の輩は內の法と律との、二種の處所に於て疑惑し愚癡なり。何等を二と爲すや。謂はく(一)佛世尊は有の見及び無有の見を誹毀して而も弟子の終沒の後に於て一は有生なりと記し、一は無生なりと記し、又勝義の常住の我は現法にも當來にも都べて不可得なりと說く。世に三師ありて而も現に得可し、一には常論者、二には斷論者、三には如來なり。此の疑癡の者に二種の因あり、當に知るべし前の似正法の見の如しと。二種の法教の能く此の因を斷ずること、亦た前說の如き二の因緣に由る。卽ち此の所說の無我の法性は彼の諸の外道入り難く了じ難し、謂はく此の自性は了知し難きが故に、此の相貌は了知す可きこと易しと雖も、然も其の相貌相似せざるが故なり。當に知るべし此の中、虛誑無き義、自の所證の義、是れ不共の義なり、故に彼の自性は悟入す可きこと難しと。卽ち此の自性は體是れ甚深にして甚深に似て現ず、是の故に說いて虛誑無き義なりと名づく。又此の自性は內に於て見難く、他の言音に從つて亦た覺了し難し、是の故に說いて自の所證の義なりと名づく。又此の自性は尋思する者の尋思する所に非ず、度量する者の所行の境界

りと言ふは、不順は是れ不如理なる虚妄分別にして阿羅漢の現法の不順には非ず。所以は何ん。彼れ食物に於て〔五〕蘊〔十八〕界〔十二〕處等を務むることは現に可見なるが故なり。此の因緣に由りて諸の阿羅漢は其の滅後に於て諸行に順ぜず、執著を了せず、是の故に世尊の言はく、「阿羅漢は是れ不順なり」とは定んで是れ密語なり。當に知るべし此れは是れ似正法の見なりと。二種の義の勢力を緣と爲すに由りて、諸の同梵行のもの、或は大聲聞は、是の如く生ずる所の似正法の見を斷滅せんと欲するが爲に極めて功用を作す、(一)彼の人をして或は自ら陳說し、或は他に示し、是の因緣に由りて極下趣に墮せしむること勿く、或は(二)如來の聖教を愛敬するに由りて是の如き似正法の見に因りて佛の聖教をして速疾に隱滅せしむること勿れと。

(二)義に隨って廣く似正法見を生ずるの因を辯ず　復た二因あり、能く是の如き似正法の見を生ず、一には内の薩迦耶見に於て未だ永斷すること能はず、二には此れに依りて妄りに流轉還滅する士夫を計す。是の如き二種の因を斷ぜんが爲の故に二の正法を說いて以て對治と爲す、謂はく諸行に於て次第に(一)無常(二)無我を宣說す。四句の中に於て流轉還滅する士夫を推求するに都べて不可得なり、謂はく有爲に依り、或は無爲に依る。聲聞・獨覺・佛世尊の我を說いて如來と名づく。當に知るべし此の我は二種の假立なり、有餘依の中には有爲を假立し、無餘依の中には無爲を假立すと。若し勝義に依らば有爲に非ず無爲に非ず、亦た無爲に非ず有爲に非ず。是の如き正法の教を說くに由るが故に六種の相に於て覺悟生ずる時に當に知るべし似正法の見を永斷すと。謂はく阿羅漢は(一)依の所攝に於ては滅壞する法なるが故に無常を覺悟し、(二)現法の中に於て老病等の衆苦の器と爲るが故に是の苦を覺悟し、(三)任運に滅すると(四)斷界と(五)離界と及び(六)滅界とに於て覺悟して滅と寂靜と清涼と及び永沒と爲す。若し是の如き正しき覺悟を具ふる者は是れ阿羅漢なりや、增上慢と俱行する妄想すら尙ほ有ることを得ず、況んや是の如き其の滅後に於て若くは順不順に戲論

此の欲門に依りて諸の我慢の纏數數現起するなり。未だ斷ぜずと言ふは、隨眠に由るが故なり。未だ遍知せずとは彼の纏に由るが故に、彼れ爾の時に於て忘念あるが故なり。未だ滅せずと言ふは、此の纏に於て暫く遠離することを得たりと雖も尋で復た現行するなり。未だ吐かずと言ふは、彼の隨眠をば未だ永拔せざるに由るが故なり。

第八目　記の三の中、第三に二種の慰問を解す

復次に、同梵行者は餘の同梵行の所に於て略して二種の慰問あり、一には病苦を問ふ、二には安樂を問ふ。(一)病苦を問ふとは、彼れに問うて言ふが如し、受くる所の疹疾寧ろ忍ぶ可きや不やと、謂はく氣息に擁滯無きやを問ふなり。支持することを得るや不やとは、謂はく苦受至つて增さざるや、無間に非ずや、不愛の觸に觸せらるるに非ずや、慮に違ふに非ずや、身を笮すに非ずや、或は笮さるる者、除釋を得るやを問ふなり。(二)安樂を問ふとは謂はく一あるが如し、所問に隨つて少病なりや不やと言ふなり。此れは嬰疹の爲に惱まされざるやを問ふなり。少惱なりや不やとは、此れは外の諸災橫の爲に侵逼せられざるやを問ふなり。起居輕利なりや不やとは、此れは夜寐ぬるに安善を得るや、進むる所の飲食消化し易きやを問ふなり。歡樂ありや不やとは、此れは無罪なる觸に住することを得るやを問ふなり。是の如き等の類の差別の言詞は聲聞地に、飲食する所の量を知る中に於て釋せしが如し。

當に知るべし此の問は四位の中に在り、一には內の逼惱する分、二には外の逼惱する分、三には夜に住する分、四には晝に住する分なり。

第九目　似正法を解す

(一)經を引いて略して似正法の見を辯ず　復次に、若し說いて諸の阿羅漢は現法の中に於て食物に於て〔五〕蘊〔十八〕界〔十二〕處等を務むと言ふあり、若しは順不順をば如實に知らず、阿羅漢は不順な

諸の聰慧ならざる聲聞の弟子は大師の教に越して惡見の中に墮し、或は言說を起す。何等か二緣なりや。一には世俗諦に愚なり、二には勝義諦に愚なり。此の愚に由るが故に一向に世俗諦の理に違越し、及び一向に勝義諦の理に違越し、行の流轉に於て正思惟せず。

第七目　記の三の中、第二に三處の實記を解す

復次に、三種の處に於て唯だ諸の聖者のみ其の所樂に隨つて能く如實に記す、諸の異生には非ず、他より聞くをば除く。謂はく諸行の中の我我所の見の我は如實に非ず。若し彼れを依と爲して我慢ありて轉ずるは、彼れ已に斷ずと雖も而も此の我慢は一切未だ斷ぜず。若し起る〔所〕依無きも我慢斷ぜずんば故の如く現行す。當に此の中の二種の我慢を知るべし、一には諸行に於て執著して現行す、二には失念に由りて率爾に現行するなり。此の中に執著して現行する我慢をば聖者は已に斷じて復た現行せず、第二の我慢は隨眠に由るが故に、薩迦耶見を復た永斷すと雖も、聖道に於て未だ善修せざるを以ての故に猶ほ起つて現行す。薩迦耶見は唯だ習氣のみあり、常に隨逐せられて失念する時に於て能く我慢の與めに所依止と作り、暫らく現行せしむ。是の故に此の慢を亦た未だ斷ぜず亦た現行することを得と名づく。又諸の聖者は若し諸行に於て自相を思惟するすら尙ほ我慢をして復た現行せざらしむ、況んや共相を觀ずるをや。若し假法に於て作意し思惟して、正念に住する者も亦た我慢をして現行することを得ざらしむ、若し假法に於て作意し思惟して、正念に住せざれば、爾の時に我慢暫く現行することを得。若し諸の異生は諸行に於て共相を思惟すと雖も、尙ほ我慢の爲めに亂心相續す、況んや餘位に住するをや。又薩迦耶見は聖相續の中にては隨眠と纒と皆な已に斷盡す、學位の中に於ては習氣隨逐して未だ永斷すること能はず。若し諸の我慢は隨眠と纒と皆な未だ斷ずること能はず。又我欲を計する者は當に知るべし卽ち是れ我慢の纒攝なりと。何を以ての故にとならば失念に由るが故なり。欲に於て定に於て諸の愛味の爲に漂淪せらるることは

二には流轉還滅の根本なるが故に、三には還滅の故に、四には流轉の故に、五には流轉還滅の方便なるが故なり。(一)自性の故なりとは、當に知るべし、色等の五種の自性なりと。(二)流轉還滅の根本なるが故なりとは、謂はく欲なり、善法欲に由り乃至能く諸漏永盡することを得、是の故に此の欲を還滅の根本と名づく。若し是の欲に由つて我れ當に人中の下類を得べく、乃至當に梵衆天等の衆同分の中に生ずべしと願ひ、此の心に於て親近し修習し多修習するに由るが故に彼に生ずることを得、是の故に此の欲を流轉の根本と名づく。(三)還滅の故なりとは、諸行の中に於て唯だ貪取を斷滅することを得んと欲するが故なり。若し諸行に即して是れ取の性なりといはば應に滅すべからざるべし、阿羅漢も猶ほ諸行の現に得可きあるを以ての故なり。若し諸行に異んじて取の性ありといはば應に是れ無爲なるべく、無爲なるが故に常にして亦た滅す可らず、是の故に取の性は但だ是れ諸行の一分の所攝なり。即ち此の一分は已に斷滅することを得て畢竟して行ぜざるが故に還滅す可し。(四)流轉の故なりとは、復た三種あり、一には後有の因なるが故に、二には品類別なるが故に、三には現在の因なるが故なり。(1)後有の因とは、謂はく一あるが如し當來を願樂して諸業を造作し、彼れ是の念を作す、願はくは我れ來世に當に此の行を成ずべしと。是の因緣に由りて能く後有の諸行の生因を引き現在を引かず、彼れ現在に於て引くこと能はざるが故に諸行に唯だ二種あるのみなりと施設す。(2)品類別なりとは、謂はく十一種の諸行の品類なり、前の如く應に知るべし。(3)現在の因とは、謂はく所造の色は四大種に因り、受等の心法は觸を以て緣を爲し、所有る諸識は名色を緣と爲す。(五)流轉の方便とは、謂はく薩迦耶見を所依と爲すが故に諸行の中に於て我慢及び諸の愛味、我我所の見を發生するなり。還滅の方便とは、謂はく諸行に於て我慢を遠離し、及び過患を見、幷びに彼れを出離して我我所無きなり。又流轉の方便とは、謂はく無明愛品なり、其の所應に隨つて當に其の相を知るべし。還滅の方便とは、謂はく彼の對治なり。又二緣に由りて

と爲る愛なり。此に復た五の緣起の次第あり、謂はく界の種種なる性を緣と爲して觸の種種なる性を生じ、觸の種種なる性を緣と爲して受の種種なる性を生じ、受の種種なる性を緣と爲して愛の種種なる性を生じ、愛の種種なる性を緣と爲して取の種種なる性を生ず、夫れ緣生の者は體必ず無常なり。(四)果に由るが故なりとは、謂はく三時に於て薩迦耶見、能く障礙を爲す、一には無我の諦察法忍に依る時、二には現觀する時、三には阿羅漢を得る時なり。此の中、一時彼の隨眠の薩迦耶見の增上力に由るが故に惑あり疑あり、多修習する諦察法忍を因緣と爲すに由るが故に疑惑に於て少しく能く除遣すと雖も、然も諦現觀を修習する時に於て意樂に由るが故に涅槃に於て我れ當に有ること無かるべしと恐れ、此の隨眠の薩迦耶見の增上力に由るが故に諸行の中に於て邪分別を起し、我れ當に斷ずべく、當に壞すべく、當に無なるべしと謂つて便ち涅槃に於て斷見及び見を發生す。此の因緣に由りて般涅槃に於て其の心退還して趣入することを樂はず。彼れ異時に於て此の過に從つて其の心を淨修し又聖諦に於て已に現諦を得たりと雖も然も我れ能く諦現諦を證せりと謂ふ。彼れ此の慢に於て隨眠に由るが故に仍ほ未だ離るること能はず。又時時の間に忘念に由るが故に我を觀じて慢を起し、此の慢纒に因つて差別して轉じ、我れを謂つて勝なり或は等なり或は劣なりと爲す。前の兩位の中にては隨眠の力に由りて能く障礙を作し、第三の位に於ては習氣の力に由りて能く障礙を作す。又三緣に由りて諸行生長す、一には宿世の業・煩惱の力に由り、二には願力に由り、三には現在の衆因緣の力に由る。異生地に於て能く遍知するが故に見地の中に於て無間に能く見道所斷の諸漏永盡することを得、見地の中に於て能く遍知するが故に次に餘結を斷じて阿羅漢を得、無間に諸漏永盡することを證得す。

第六目　記の三の中、第一に五相の問記を解す

復次に、五種の相に由りて諸行の中に於て如理に問記す。何等を五と爲すや。一には自性の故に、

復次に、諸の所化の者に略して三種の調伏せらるる性あり、一には愚癡放逸なる性、二には極下劣なる心の性、三には能く正行を修する性なり。

第三目　四處に於て恭敬住を生じ速かに無上を證することを解す

復次に、四種の相に由りて四の處所に於て恭敬住を生じ速かに無上を證す。一には所應得に於て猛利なる樂欲を生ずるが故に、二には得る方便たる法隨法行に於て猛利なる愛樂を生ずるが故に、三には大師の所に於て猛利なる愛敬を生ずるが故に、四には所說の法に於て猛利なる淨信を生ずるが故なり。

第四目　三種の無上を解す

復次に、三種の無上あり、謂はく妙智無上と正行無上と解脫無上となり。（一）妙智無上とは、謂はく盡智・無生智・無學の正見智なり。（二）正行無上とは、謂はく樂速通行なり。（三）解脫無上とは、謂はく不動心解脫なり。當に知るべし此の中、總じて智斷の現法樂住を說くと。有學の妙智・正行・解脫は無上と名づけず、猶ほ有上なるが故なり。當に知るべし一切の阿羅漢の行皆な名づけて樂速通行と爲すことを得と。一切の麁重永滅するが故に、一切の所作已辦せるが故なり。

第五目　二時を解す

復次に、菩提分に依りて諸行を擇ぶが故に二時の中に於て四種の相に由りて如實に薩迦耶見を遍知し、卽ち二時に於て無間に諸漏永盡することを證得す。云何んが二時なりや。一には異生地に在り、二には見地に在り。云何んが四種の相に由るや。一には自性に由るが故に、二には處所に由るが故に、三には等起に由るが故に、四には果に由るが故なり。（一）自性の故なりとは、謂はく諸行の自性の薩迦耶見及び五種の行をば彼れ計して我と爲し、或は我所と爲すなり。（二）處所の故なりとは、謂はく所緣の境なり。（三）等起の故なりとは、謂はく見取所攝の無明の觸より生ずる受を緣

ること無しと雖も、而も是れ眞實の自讃毀他なり。又諸の如來は正法を宣說して速に能く二種の無智を壊滅す、謂はく不正法を聞きて勝解等を生じ長時に積集して堅固なる無智と及び久習せるに非ずして近く生ぜる無智となり。復た俱生に由りて善趣に往く道を了知すること能はず、亦た能く現法涅槃に往く道を了知すること能はざるが故なり。

第八目　純染を解す

復次に、當に知るべし、十一種の相に諸行を總攝して立てて行聚と爲すと。應に知るべし聚の義は是れ其れ蘊の義なりと。又一向に雜染の因緣の增上力に由るが故に取蘊を建立す、當に知るべし取蘊は唯だ是れ有漏なりと。又雜染と清淨との因緣の二の增上力に由つて總蘊を建立す、當に知るべし此の蘊は漏無漏に通ずと。又三相に由り諸行の中に於て煩惱生起す、謂はく(一)所依の故に、(二)所緣の故に、(三)助伴の故なり。

第十三項　別嗢拕南第十一を以て少欲住等の十八門を解す

復次に、嗢拕南に曰く、

『(一)少欲と(二)自性等と(六)記の三と、(九)似正法と(十)疑癡の處所と、(十一)不記と(十二)變壞と(十三)大師の記と、(十四)三見の滿と(十五)外の愚相と等なり。』

第一目　小欲住を解す

三種の相に由りて如來の心は少欲住の中に入る。一には爾の時に化事の究竟するに由り、現法樂住に安住せんと欲するが爲なり、二には弟子、正行門に於て深く厭薄す可きに由り、三には常に樂ひ營んで多事多業を爲す所化の有情を化導せんが爲なり。又前說の如く如來の寂靜天住に入る一切の因緣は當に知るべし此の中にても亦復た是の如しと。

第二目　自性を解す

覺す、乃至廣說。此の中に欲界を說いて此世と名づけ、色・無色界を名づけて他世と爲す、現在、過去の二世別なるが故に當に知るべし是れを第二の差別と名づくと。師に由らざるが故に說いて自然と名づけ、六種の通慧にて現に得る所なるが故に名づけて作證と爲し、諸の有情に於て最も第一なるが故に說いて圓滿と名づけ、此の第一の性は自然に知るが故に、他に顯示するが故に說いて開示と名づく。

第六目　無因を解す

復次に、二種の相に由る無因論とは、諸行の中に於て無因を執して轉ず、謂はく諸行の生起する因緣と滅盡する因緣とに於て了知せざるが故なり。此の生に由るが故に彼の諸行生じ、此の滅に由るが故に彼の諸行滅す、此の二事に於て證得すること能はざるなり。又諸行の性相を證得せずして、是の如き見を起し、是の如き論を立つ、有は定んで有なり、無は定んで無なり、無は生ず可からず、有は滅す可からずと。卽ち此の論者は三位の中に於て現に諸行の生滅を證得し一切世間の共に了達する所の麁淺なる現量にて毀謗し違逆す可し。何を以ての故にとならば現に彼彼の若しは刹帝利或は婆羅門、吠舍等の家の所有の男女の和合の因緣を見るに或は八月を過ぎ、或は九月已つて便ち男女を生じ、是の如く生じ已らんに或は一類あり、當に爾の時に於て壽盡きて中夭すべく、復た一類あり、乃至住壽存活し支持し、或は苦、或は樂、或は非苦樂の受の位の差別の心諸の心法皆な是れ新新にして古古に非ざればなり。

第七目　毀を解す

復次に、略して二種の自讃毀他あり、謂はく(一)唯だ語言し及び(二)說法し正行するなり。(一)若し唯だ語言するのみにして自ら稱讃し他を毀呰するは彼れ但だ非善士の法に由つて其の心を纏擾するのみ、是れを自毀と名づく、勝賢善には非ず。(二)若し法を說き正行を行ずるに由るは讃毀す

復次に、應に知るべし涅槃の資糧を修集するに略して三障あり、一には廣き事業に依り財寶具足して多く放逸を行ずるなり、二には善知識の方便して曉喩する無きなり、三には未だ正法を聞かず、未だ正法を得ず、忽に死緣に遇つて非時に夭沒するなり。此れと相違するは當に知るべし無障にして亦た三種ありと。又諸の聖者は將に終らんと欲する時に略して二種の聖者の相あり、謂はく臨終の時(一)諸根澄淨にして(二)佛の所記を蒙るなり。三種の相に由りて佛は過世の一切の聖者の爲に聖性を記別したまひ、種姓滿つるが故に但だ物類のみを記したまふ。我れ已に法及び隨法を了知すとは、法とは謂はく正見の前行たる聖道なり、隨法と言ふは謂はく彼の法に依りて他の音を聽聞して如理作意するなり。又我れ未だ曾て正法の所依處を惱亂せずとは、謂はく此の義の爲に如來は告命し、及び此の義の爲に宣說する所あり、乃至諸漏をして永盡せしめんが爲なり。彼れは此れに由るが故に已に漏を盡すことを得たり。

第五目　希奇を解す

復次に、諸佛如來に略して二種の甚希奇法あり、謂はく(一)未だ信ぜざる者をば信ぜしめ、已に信ぜる者をば增長せしめ、(二)速に聖敎に於て悟入することを得しむ、謂はく大師の相、或は法敎の相、或は已に第一の德相を證得して普ねく十方に於て美妙なる聲稱、廣大なる讚頌遍滿せざる無し。又能く無因論及び惡因論を說くを除遣し、一切の正因論を說くを攝受す。所以は何ん、無因論及び惡因論を說くすら尙ほ人天の善趣及び樂解脫に往かんと欲する諸の聰慧なる者の勝解の依處に非ず、況んや是れ其の餘をや。當に趣入する所として正因論を說くは、當に知るべし其相は彼と相違すと。大師の相とは、謂はく薄伽梵は是れ眞の如來應正等覺乃至世尊なり、廣く釋することは前の攝異門分の如し。法敎の相とは、謂はく正法を說く初中後善なり、乃至廣說、當に知るべし亦た攝異門分の如しと。第一の德相を證得すとは、謂はく一切の此世他世に於て自然に通達し、現等正

して二邊を遠離すと名づく。是の故に若し能く是の如く記別せば善記別と爲す、如來の讃したまふ所なり。或は復た言へることあり、何の因緣の故に乃ち沙門喬答摩の所に於て梵行を修習するやと。若し此の問を得ば應に前の如く說くべし。增益・損減の二邊を遠離し、中道に依りて記するを不亂記と名づく。若し有情は染淨を修習すと謂はゞ是れを一邊と名づく、謂はく增益の邊なり。若し一切都て修習すること無しと謂はゞ是れ第二邊なり、謂はく損減の邊なり。若し諸行の爲に厭離し欲滅して修習すれば是れを中道にして二邊を遠離すと名づけ、是の故に此の記を不亂記と名づけ、名づけて善記と爲す。當に知るべし此の記は諸佛の讃したまふ所なりと。

第三目　相を解す

復次に、法に二種あり、一には有爲、二には無爲なり。此の中、有爲は是れ無常性なり、三有爲の相を施設することを得可し、一には生、二には滅、三には住異性なり。是の如き三相は二種の行の流轉に依つて安立す、一には生身展轉して流轉するに依り、二には刹那に展轉して流轉するに依る。初の流轉に依るとは、謂はく彼彼の有情の衆同分の中に於て初めて生ずるを生と名づけ、終沒するを滅と名づけ、二の中間の嬰孩等の位に於て住異性を立て、乃至壽住するを說いて名づけて住と爲し、諸位後後に轉變する差別を住異の性と名づく。後の流轉に依るとは、謂はく彼の諸行刹那刹那に新新に生ずるを說いて名づけて生と爲し、生ぜる刹那の後に住せざるを滅と名づけ、唯だ生ぜる刹那のみ住するが故に住と名づく。異性に二あり、一には異性の異性、二には轉變の異性なり。異性の異性とは、謂はく諸行は相似し相續して轉ずるなり。轉變の異性とは、謂はく相似せずして相續して轉ずるなり。此の異性は住相を離れて外に別體として得可きに非ず、是の故に二種を總攝して一と爲して一相を施設す。此れと相違するは應に知るべし常住なる無爲の三相なりと。

第四目　障を解す

らば諸行の中に於て見と我慢との爲に覆障せらるゝ者は如實に其の性弊劣なる諸行の體相を知らずして、人天の身及び彼の衆具に於て謂つて高勝なりと爲す、是の故に彼の二を說いて高視と名づく。愛は猶し烟の如く心をして擾亂し安隱なることを得ざらしむ、是の故に烟と名づく。

第十二項　別嗢拕南第十を以て無厭等の八門を解す

復次に、嗢拕南に曰く、

『(一)厭患無きと無欲と、(二)亂るゝ無く問起すると(三)相と、(四)障と(五)希奇と(六)無因と、(七)毀とにして(八)純染は俱に後なり。』

第一目　無厭患と無欲とを解す

二の信者あり而も信者の所作に稱當するに非ず。何等を二と爲すや。一には在家の信者なり、涅槃あることと及び一切の行は是れ無常性なることを信ずるも、然も諸行に於て過患を觀ぜず、厭離して住せず、出離することを知らずして之を受用するなり。二には家法を捨離し非家に趣く淨信ある者なり、彼れ涅槃に於て猛利なる樂欲に安住すること能はず、此の欲を用て所依止と爲し、常に勤めて所有る善法を修習せず、現法の中に於て般涅槃せざるなり。此と相違するは應に知るべし信者の所作に稱當するなりと。

第二目　無亂問記を解す

復次に、內法の中に於て略して二種の聰明を具する者あり。若し淨信なるあらんに或は諸の外道來つて請問する時に能く亂るゝこと無くして記す、謂はく中道に依るなり、諸行の中に於て生滅を問ふ時は有情を增さず、實事を減ぜず、唯だ諸行に於て生滅を安立して亂れずして記す。若し有情に生あり滅ありと立つれば是れを一邊と名づく、謂はく增益の邊なり。若し生滅して都て所有無しと立つれば是れ第二邊なり、謂はく損減の邊なり。唯だ諸行に於て生滅を安立する、是れを中道に

こと能はず、便ち愛味を生じ、愛味に由るが故に過去の行に於て深く顧戀を生じ、未來の行に於て深く欣樂を生じ、現在の行に於て、厭離し欲滅することを修行すること能はず、善說法者は當に知るべし一切彼れと相違すと、是れを第二の二念の差別と名づく。(三)又惡說法者は是の如き邪行の四種の雜染に雜染せらるゝが故に能く後有を感ず。何等を名づけて四種の雜染と爲すや。一には業雜染、二には見我慢纏の雜染、三には愛纏の雜染、四には彼の隨眠の雜染なり。若し諸の新業をば造作し增長し、若し諸の故業數數ば觸し已つて變吐せずんば、是れを業雜染と名づく。若し諸行に於て邪分別し薩迦耶見を起し、他の有情に於て諸の沙門婆羅門等と已れと校量し、以て自らを勝と爲し、或は等、或は劣と謂ふ、是れを見我慢纏の雜染と名づく。內に於て、外に於て起す所の貪欲は愛行の中に於て應に其の相を知るべし、是れを愛纏の雜染と名づく。相續の中に於て見と我慢と愛との三品の麁重に常に隨逐せらる、是れを彼の隨眠の雜染と名づく。是の如き四種を總攝して二と爲す、謂はく業と煩惱となり。煩惱に復た二あり、纏と及び隨眠となり。諸行の中に於て先づ邪執を起し後に貪著を生ず、此の二種の增上力に由るが故に復た餘の煩惱雜染ありと雖も而も但だ此れのみを取る。爾所の煩惱にして諸行の中に於て他を校量せず、自ら邪執を起すを說いて名づけて見と爲し、他を校量するを說いて我慢と名づく。是の如き邪執は是れ無明品なり、此を先と爲すに由りて貪著を發起するを名づけて愛品と爲す。此の二種の根本煩惱に由りて生死の中に於て流轉して絕えず、若し善說の法と毘奈耶との中に正しく修行する者は能く是の如き四種の雜染を斷じ、現法の中に於て能く般涅槃す。又此れに由るが故に能く究竟圓滿の涅槃に住す、若し爾らざる者は、尙ほ彼分涅槃にすら住すること能はず、何に況んや究竟なるをや、是れを第三の二念の差別と名づく。

又此の中に於て見及び我慢を說いて高視と名づけ、愛を說いて烟と名つく。何を以ての故にとな

復次に、應に知るべし四の因緣に由りて二の處所に於て恐怖を發生して能く障礙を爲す。何等を四と爲すや。一には若しは此の位に於て生起し、二には若しは此の法に依りて生起し、三には若しは彼れ是の如く生起し、四には若しは彼の行相生起するなり。(一)位に生起すとは、謂はく非聖位の中に於て諸の聖諦を生起し未だ善巧なることを得ず、又此の非聖は五の處所に於ても亦た未だ善巧ならざるなり。(二)依りて生起すとは、謂はく諸行に於て邪なる行相を起し、我・我所を計して薩迦耶見を依と爲して生起するなり。(三)是の如く生起すとは、謂はく二種の諸行變壞する差別に由つて生起す、一には異緣に變壞せらるゝに由るが故に、二には自心に邪分別を起して變壞するに由るが故なり。(四)行相生起すとは、謂はく愛する所に於て未來に當に變壞すべきことを慮恐するが故に恐怖の行相を生じ、正に變壞せるに於ては損惱の行相を生じ、即ち愛する所の已に變壞せる中に於ては彼を欣んで重ねて顧戀の行相を生起す。又涅槃に於て自體の永に變壞することを分別するが故に怖畏の行相を起す。是の如き行相差別し轉ずる時に、聖教を愛樂し及び涅槃を愛樂するに於て能く障礙を爲す。

又二種の門に由りて所緣の境、自の所行の處に於て我・我所の執差別して轉ず、謂はく(一)推求するが故に、及び(二)領受するが故なり、即ち見と及び受となり。

第七目　善說惡說の中の宿住念の差別を解す

復次に、三種の相に由りて善說法者・惡說法者は等しき事の中に於て宿住隨念す、當に知るべし染淨其の差別ありと。何等を三と爲すや。(一)謂はく惡說法者の宿住隨念は彼の諸行の自相共相に於て如實に知らず、便ち諸行に於て全く常なりと計し、或は一分常なりと計し、或は非常なりと計し、或は無因なりと計す。善說法者の宿住隨念は如實に知るが故に邪分別無し、是れを第一の二念の差別と名づく。(二)又惡說法者は何れの定に隨依して宿住念を發すも、如實に是れ苦なりと了知する

無所有處の所有る貪欲を離れ、諸の下地に於て其の煩惱、心に解脱するを得るも、而も未だ薩迦耶見を脱すること能はざるに由り、此の見に由るが故に下上地の所有る諸行の和雜せる自體に於て差別を觀ぜず、總じて計して我と爲し、或は我所を計し、此の因緣に由りて有頂に昇ると雖も而も復た退還し、若し是の如き一切の自體に於て遍知して苦と爲し、出世道に由りて先づ一切の薩迦耶見を斷ずれば、後に能く所餘の煩惱を永斷し、此の因緣に由りて復た退轉すること無し、是の故に當に知るべし唯た見雜染のみ是れ大雜染なりと。

第四目　一趣を解す

復次に、應に知るべし三種の相に由りて道を一趣と名づくと。謂はく異生地に於て五の行相を以て諸行の五處の差別を觀察し、卽ち此の觀察を二時の中に於て修治し淨からしむ、謂はく行に於て學地及び無學地に向ふ。云何んが名づけて五種の行相に諸行を觀察すと爲すや。一には諸行の自性を觀察し、二には諸行の因緣を觀察し、三には雜染の因緣を觀察し、四には清淨の因緣を觀察し、五には清淨を觀察するなり。

第五目　學を解す

復次に、應に知るべし異生の位に於て先づ五處に於て善巧なることを得已つて、後に學位に於て卽ち是の如き五種の處所に於て更に五種の差別の行相を以て審諦に觀察し、能く速疾なる通慧を獲得せしむと。何等を名づけて五種の行相と爲すや。謂はく(一)諸行と諸行の因緣と雜染の因緣と清淨の因緣と滅寂靜とを觀察するが故に、(二)清淨道に趣向し出離するが故に、(三)諸行は種種衆多なる性なるが故に、(四)各ゝ自の種子より生起する所なるが故に(五)各々餘緣を待つて生起する所なるが故なり。

第六目　四怖を解す

子に隨逐せらるゝ識を說いて名づけて因と爲し、因と相似する四種の識住を說いて名づけて緣と爲す。又喜貪は其の識を滋潤し、彼彼の當に生を受くべき處に於て結生相續して薩迦耶を感ぜしむるに由りて亦た名づけて緣と爲す。此の中一あり、四識住に由りて攝受する所依に由り喜貪に由るが故に現法の中に於て新新に造集し及び增長す。彼れ後時に於て阿羅漢を成じ、識の種子をして悉く皆な腐敗し、一切の有の芽をして永に生ずることを得ざらしむ。又復た一あり一切の縛を具し、正行を勤修し、涅槃を欣樂し、遍く一切の諸の生を受くる處に於て厭逆の想を起す、彼れ縛を具するが故に種子壞せず識住和合す、然も諸有に於て厭逆の想を起すが故に喜貪無し、彼れ是の如く正行を修するに由るが故に現法の中に於て般涅槃するに堪へ、其の後有の芽も亦た生ずることを得ず。又復た一あり、學地に住し不還果を得、唯だ非想非非想處の諸行のみありて餘と爲し、有頂定に於て具足し安住す。彼の識の種子は猶ほ未だ一切悉く皆な滅盡せざるも、然も識住に於て能く遍く了知し、能く遍く通達す。彼れ忘念の增上力に由るが故に上地の貪愛猶ほ少分を殘す。是の不還の者は當來の下地の一切の有の芽復た更に生ぜず。此れと相違するは當に知るべし一切の諸の後有の芽皆な生長することを得と。

第三目　見大染を解す

復次に、雜染に二あり、一には見雜染、二には餘の煩惱雜染なり。(一)見雜染とは、謂はく諸行に於て我・我所を計して邪執して轉ずる薩迦耶見なり。此の見に由るが故に或は諸行を執して以て實我と爲し、或は諸行を執して實の我所と爲す。(二)復た所餘あり、此を根本と爲す諸の外の見趣其の餘の貪等の所有る煩惱なり、當に知るべし是れを第二の雜染と名づくと。

又見雜染を解脫し得る時亦た能く餘に於て畢竟じて解脫するも、餘の雜染を解脫し得たる時に卽ち能く諸の見雜染を解脫するには非ず。所以何んとならば、此に生ぜる者は世間道に依り乃至能く

諍論を興すも、如來は乃ち一切の他義を以て卽ち自義と爲すが故に諍ふ所無し、唯だ、哀愍して其をして義を得せしめんが故に、他所に往きて爲に正法を說かんに而も諸の邪執・愚癡なる世間のもの顚倒して妄りに自義・我義と謂つて差別あるが故に我の諍を興すを除く、此の因緣に由りて當に知るべし如來を道理語者と名づくと。(二)又復た如來を眞實語者と名づく、謂はく若し世間の諸の聰敏なる者、共に許して有なりと爲さば、如來は彼れに於て亦た說いて有なりと爲したまふ、謂はく一切の行は皆な是れ無常なりと。若し世間に於ける諸の聰敏なる者、共に許して無なりと爲さば、如來は彼れに於て亦た說いて無なりと爲したまふ、謂はく一切の行は皆な是れ常住なりと。(三)又復た如來を利益語者と名づく、謂はく諸の世間の盲冥ある者は、自ら世法に於て了知すること能はず、如來は彼に於て自ら現に等覺して爲に開闡したまふ。(四)又復た如來は或る時は世間に隨順して轉ず、謂はく[一]阿死羅摩登祇等の少事業に依りて以て自ら存活すれば然も諸の世人は彼が爲に大富、大財、大食の名想を假立す、彼の世人名想を假立するが如く如來も彼れに隨つて亦た是の如く說きたまふ。又一事に一國土に於て名想を假立し、餘の國土に於て卽ち此の事に於て餘の名想を立つるが如く、如來も彼れに隨つて亦た是の如く說きたまふ。若し怨諍を懷きて怨諍を興さば則ち道理語者、眞實語者、利益語者、世に隨つて轉ずる者と名づくることを得ず。是の如き四種の因緣を具するに由る、是の故に當に知るべし如來は無諍なりと。又佛世尊は自然に所應作の義を觀察し、請問すること無しと雖も而も自ら現等覺する法を宣揚し、能く稱當せる名句文身を以て諸法の差別を施設し建立したまふ、廣說せば前の攝異門分の如し、是の如く當に知るべし乃至說いて平等に開示すと名づくと。

第二目　芽を解す

復次に、一因二緣は後有の芽をして當に生長することを得しむ、謂はく五品の行の中、煩惱の種

【一】阿死羅摩登祇とは女の名、阿死羅は女の別名、摩登祇は女の總名なり。

能く一切の愁等の諸苦を斷ず。當に知るべし、此の三縁五相に由りて是の如き彼分涅槃を獲得すと。可愛の事の無常轉變するに由りて悲傷し心感ふるが故に名づけて愁と爲し、彼に由りて言を發し咨嗟し戯欷するが故に名づけて歎と爲し、此に因つて胷を拊するが故に名づけて苦と爲し、內に寃結を懷くが故に名づけて憂と爲し、茲に因つて迷亂するが故に名づけて惱と爲す。又財寶を喪失し、無病なる親戚等の事の、隨一現前して創めて憂惱を生ずるを以て說いて名づけて愁と爲し、此に依るに由るが故に次に乃ち言を發し哀吟し寃なりと悲しみ、身を擧げて煩熱するを歎苦の位と名づけ、此の愁歎を過ぎ、身の煩熱し已つて內燒け外靜にして心猶ほ未だ平ならざるを說いて憂の位と名づけ、初日を過ぎ已つて或は二・三・五・十の日夜・月に彼の因緣に由りて意尙ほ未だ寧かならざるを說いて名づけて惱と爲す。

第十一項　別嗢拕南第九を以て諍等の七門を解す

復次に、嗢拕南に曰く、

『(一)諍と(二)芽と(三)見大染と、(四)一趣と(五)學と(六)四怖と、(七)善說惡說の中の、宿住念の差別となり。』

第一目　諍を解す

四の因緣に由りて、如來は世間の迷執と共に怨諍を爲さゞれども、然も彼の世間のもの邪分別を起して謂つて怨諍すと爲す。何等を四と爲すや。一には道理の義を宣說するが故に、二には眞實なる義を宣說するが故に、三には利益の義を宣說するが故に、四には有時は世に隨つて轉ずるが故なり。(一)此の中、如來は四の道理に依つて正法を宣說したまふこと前の如し。所謂る觀待道理、作用道理、因成道理、法爾道理なり、此れに由て如來を法語者と名づく。如來は終に故らに他所に往いて諍を興す事を求めず。所以何ん。諸の世間のもの他義に違返するを謂つて自義と爲して故らに

理作意を遮止す。二には住處に於て不正尋思を遮止し、正しき尋思を開許す。三には止觀を勤めて修行する處に於て未だ斷ぜざる諸行を斷ぜしめ、及び煩惱永に離繫することを得て涅槃を證せしむることを開許す。是の如く宣說して三處に從つて諸の隨煩惱をして心に淸淨なることを得しむ、謂はく行處・住處・依處に從ふ。又正しく過去・未來・現在の諸行を觀察するを正しき觀察と名づく。一切の諸行に又三漏あり、三漏を先と爲して欲害あり、欲害を先と爲して尋思の熱惱あり、尋思の熱惱を先と爲して追求の憂惱あり、是の如き一切をば皆な永斷するが故に說いて一切の煩惱を永斷すと名づく。是の如く心善解脫せる無相樂住に安住して恐怖無き時を、現法の中に於て圓滿なる般涅槃の數に入ると名づく。又三法に依りて自義に依止するを歸依に住すと名づけ、他義に依止するを洲渚に住すと名づく。何者をか三と爲すや。一には內の如理作意を先と爲して法・隨法行するに依る、二には佛の所說の正法を聽聞するに依る、三には正法に親近する內の善士に依り、餘の正法の外の一切の外道に親近する諸の不善士に依らず。是の如き三法は當に知るべし、人中の四種の多の所作の法を顯示すと。謂はく(一)善士に親近し(二)正法を聽聞し(三)如理作意し(四)法・隨法行するなり。

(二)彼分涅槃を明す　復た三緣及び五種の相に由りて當に知るべし彼分涅槃を證得すと。何等か三緣なりや。一には苦を遍知するが故に、二には深く一切の苦行に隨順する諸の過患を見るが故に、三には愁等の一切の苦を超過するが故なり。云何んが五相なりや。一には苦の種類の相交涉する時に愁等を發生すと知る、是れを彼に於て自性を遍知すと名づく。二には種子ありて彼の法生ずることを得と知る、是れを彼に於て因性を遍知すと名づく。三には自らの所行・所知の境界を知る、是れを彼に於て緣性を遍知すと名づく。四には我所及び我に執著するは皆な是れ能く衆苦の諸行に順ずと隨觀す、是れを彼に於て行性を遍知すと名づく。五には三世の欲界所繫の諸行の過患を隨觀して

の苦因に隨逐せらるゝも果位に至ることなし。又本性、諸行は衆緣より生ずるが故に自在を得ず亦た宰主無し、若し宰主あらば彼の一切の行は性無常なりと雖も應に所樂に隨つて流轉するも絕えず或は生ぜしめざるべく、廣說乃至死に於てす。

第三目　請と無請との說經を解す

復次に、二種の契經あり、一には請に因つて說きたまひ、二には請に因らずして說きたまふ。(一)請に因つて說きたまふとは、謂はく若し補特伽羅にして此の諸の行相の敎に由りて調伏する者あらんに、彼の請に因るが故に爲に是の如き諸の行相の敎を轉じたまふなり。(二)請に因らずして說きたまふとは、謂はく若しは彼の多百の衆の中に於て無量なる門を以て美妙なる說を作し、或は大師の近住の弟子の阿難陀等の爲に是の如き說を作すなり、正法をして久住することを得しめんが爲の故なり。

第四目　涅槃に二種あることを解す

(一)圓滿涅槃を明す　復次に、當に知るべし三分に由るが故に圓滿なる涅槃を攝受すと。一には敎授に隨順するに由るが故に、二には正しく一切の行を觀察するに由るが故に、三には一切の煩惱を永斷するに由るが故なり。(一)敎授に隨順すとは、謂はく記說、敎誡、神變の所攝なり。如來彼の心を記說せんと欲するに隨つて自の定意に由りて三の行相を以て遍く他の心を照らす、若しは展轉して久遠に滅せる心、若しは無間に滅する心、若しは現在の所緣に於て轉ずる心なり。定より起ち已つて、定內に受くる所の他心を隨念し分別し思推し、其の受くる所の如く卽ち是の如く記す、汝是の如き心あり、謂はく久遠に滅せる者は是の如き意なり、謂はく無間に滅する者は是の如き識なり、謂はく現在の者は此れ種類に據るも刹那に據らずと。卽ち是の如き記說は神變を依止と爲すを以ての故に其の三處に於て敎誡を爲す。一には行處の現前する境界に於て如理作意を開許し、不如

卷の第八十八

攝事分中契經事行擇攝第一の四

第十項　別嗢拕南第八を以て智事等の四門を解す

復次に、嗢拕南に曰く、

『(一)二智幷に其の事と、(二)樂等の行の轉變と、(三)請と無請との說經と、(四)涅槃に二種あるとなり。』

第一目　二智並に其の事を解す

智に二種あり、一には正智、二には邪智なり。此の中、正智は事あるに依りて生ず、邪智も亦た爾なり。此の二智は倶に事あるに依ると雖も然も正智は如實に事を取り、邪智は邪分別して如實に事を取らず。正敎の如理作意を前行と爲すことあるに由るが故に所知の境に於て正智生ずることを得、邪敎の非理作意を前行と爲すことあるに因るが故に所知の境に於て邪智生ずることを得。正智生じて所知の境を壞するには非ず、但だ此の境に於て邪執を捨てゝ正智を起すのみ、闇中の色の如し、明燈生ずる時に此の色を壞せず、但だ能く照了するのみ、當に知るべし此の義も復た是の如しと。

第二目　樂等の行の轉變を解す

復次に、樂受に隨順する諸行と無常相と共に相應するが故に若し苦位に至れば爾の時に說いて損惱迫迮すと名づけ、若し不苦不樂の位に至れば爾の時に方に行苦に於て苦迫迮すと名づけ、若し彼の位に至らざれば便ち應に畢竟じて唯だ樂受に順ずるのみにして餘位に至ることなかるべし。又生老等の法の隨ふ所の諸行は皆な悉く是れ苦なり、彼れ若し疾病の位に至れば說いて損惱迫迮すと名づけ、若し生等の苦の位に至れば苦迫迮すと名づけ、若し彼の位に至らざれば諸行の中に於て生等

違するは當に知るべし苦の差別なりと。(三)又樂と言ふは、謂はく樂に順ずる行及び樂の已に滅せるなり、樂の所隨とは、謂はく樂の因ありて未來世に於て當に樂を生起すべきなり、喜樂遍しとは、謂はく現在に於て樂處に隨順するなり、未だ永離せざる樂とは、謂はく餘の二世なり。此れと相違するは苦の差別の四なり、應の如く當に知るべし。

瑜伽師地論卷第八十七

に於て若しは自、若しは他、如實に知らざるが故に愚昧と名づけ、淸淨を離るるが故に不明了と名づけ、淸淨の因に於て善巧ならざるが故に說いて不善と名づく。又乃至所說に應ずる語、所說の如き語、是處の說語、是の如き一切に於て如實に知らず、是の故に彼を說いて量を知らずと爲し、恩を知らずと爲す。當に知るべし內法は彼と相違すと。(五)又諸の外道の師及び弟子は異說無しと雖も所說減ずる無く顚倒無きが故に、流漫せずと雖も所說增す無く加益無きが故に、等しと雖も所說の義相似たるが故に、是法なりと雖も說文平等なるが故に、復た法及び隨法を記別すと雖も然も同法に於て樂つて朋黨を爲す。當に知るべし彼れ法・隨法行に於ける自義證得に不放逸なる者すら尙ほ得ること能はず、況んや縱逸なる者をや。彼れ是の如く自義を得ざるに由りて便ち他論の爲に制伏し輕毀せらる、幷に彼の受くる所は諸の惡邪法なり。當に知るべし內法は彼れと相違すと。是れを五種の高下の差別と名づく。

第十一目　苦樂不定等を解す

復次に、四種の相に由りて當に知るべし諸行は定んで苦染に非ず、又四相に由りて定んで樂淨に非ずと。是の如き四相は總じて三事に依る。何等を三と爲すや。一には生處に依るが故に、二には受に依るが故に、三には世に依るが故なり。(一)此の中、樂とは、謂はく第三靜慮に在り。樂の所隨とは、謂はく人中に在り、二種あるべし。喜樂遍しとは、謂はく初・二靜慮に在り。未だ樂を永離せずとは、謂はく第四靜慮已上に在り。此の中、苦とは、謂はく餓鬼及び傍生に在り。苦の所隨とは、謂はく人中に在り。憂苦遍しとは、謂はく那落迦に在り。未だ苦を永離せずとは、謂はく上の天衆の中に在り、當苦の隨ふ所なるが故なり。(二)又樂と言ふは、謂はく不苦不樂受の現在前する位なり、樂の所隨なりとは、謂はく苦受の現在前する位なり、喜樂遍しとは、謂はく樂受の現在前する位なり、永離せざる樂とは、謂はく一切の位に於て樂因の隨ふ所なるが故なり、若し此れと相

ち此の法印は道理を隨論する法王の造る所なれば、諸聖の身に於て惱害を爲さず、隨喜して能く一切の聖財[三]を得、此れに由りて自然に吉安にして生死の廣大なる險難の長道を超度す、是の故に亦た衆聖法印と名づく。當は知るべし此の中、前に由るを通達智と名づけ、後に由るを善清淨の見と名づくと。

第十目　善說と惡說との師等の別を解す

復次に、應に知るべし、五種の相に由りて內と外との法に於て師及び弟子の高下は差別すと。一には住に由るが故に、二には衆を御するに由るが故に、三には論の決擇に由るが故に、四には建立し開顯する道に由るが故に、五には行に由るが故なり。謂はく(一)諸の外道の師及び弟子は恒常に憒閙なる住に住し、內法の師と弟子とは時時に極めて寂靜なる住に住す、是れを第一の高下の差別と名づく。(二)又外道の師は自の有量なる出家の弟子に由りて諸の外道の僧を說いて僧ありと名づけ、自の有量なる在家の弟子に由りて諸の外道の衆を說いて衆ありと名づけ、彼の一切共に許して師と爲すことを希ふが故に衆師と名づけ、愚類の衆生は咸く有德なりと謂ふ、是の故に說いて共推する善色と名づく。當に知るべし如來は彼れと相違すと、一切の天及び世間の無上の大師たりと雖も彼の同く尊ぶに於て冀ふ所無し。(三)又外道の師は自の弟子と共に議論を興し之を決擇する時、凡そ所說あれば展轉して意解し、各各差別して相ひ扶順せず、轉た愚昧を增し其の智を淨うするに非ず、當に知るべし內法は彼と相違すと。(四)又外道の師は諸の弟子の爲に無因不平等因に依止して其の道を施設し建立して開顯す。是の如き不正法を聽聞するが故に大羅刹の爲に其の心を嬈亂せらる。又不正尋思と相應する非理作意に由りて其の心散動す、他所に於て勝負の心を懷きて他を咎責するを以て、若し他のもの反詰すれば便ち卒暴を興し、審に思擇せずして、輕がるしく言詞を出す。自ら無因不平等因の爲に覆藏せらるるが故に名づけて雜染と爲し、此に由りて愚夫は染の因緣

【三】七聖財卽ち信、戒、聞、慙、愧、捨、慧なり。

の貪の所有と、瞋恚身繫攝の瞋の所有と、餘の二身繫攝の癡の所有となり。當に知るべし此の中極めて鄙穢なる義は是れ所有の義なりと。增上慢を離れたる無我智の者は如理作意と共に相應するが故に、定地の攝なるが故に、當に知るべし、此の智は二の因緣に由りて不善清淨なりと。一には卽ち此の時に於てす、謂はく順決擇分の善根の位に趣入する時に於て麁なる我慢ありて隨入し、微細に現行し作意し〔有〕間・無間に轉ず。是の因緣に由りて是の如き念を作さく、「我れ今空に於て能く修し能く證す、空は是れ我が有なり、是の空に由るが故に我を計して勝と爲すと。空の如く無相及び無所有も當に知るべし亦た爾なりと。二には能く彼の法をして現行せしむる因緣なり、謂はく諸欲或は薩迦耶の染愛ある識に於て、是の如く染愛ある識に由りて遍く了知せざる增上力の故に、便ち諸欲、薩迦耶の愛の爲に漂溺せらる。此の意樂に由りて彼の涅槃に於て趣入すること能はず、其の心退還すること前に已に說けるが如し。又八相に由りて能く遍く了知し、遍く了知するが故に諸の過患を除く、當に知るべし是れを極善清淨と名づくと、增上慢を離れたる無我の眞智なり。又(一)此の中に於て已に滅壞するが故に、滅壞する法なるが故に說いて無常と名づく。(二)諸の業煩惱の集成する所なるが故に說いて有爲と名づく。(三)昔の願力に由りて集成する所なるが故に思の所造と名づく。(四)自の種子と現在の外緣とより集成する所なるが故に說いて緣生と名づく。(五)未來世に於て衰老する法なるが故に說いて盡法と名づく。(六)死歿する法なるが故に歿法と名づく。(七)未だ老死せざる來た疾病等の種種なる災橫の爲に逼惱せらるるが故に破壞法と名づく。(八)現量に依るに由りて能く離欲するが故に能く斷滅するが故に現法に於て離欲する法、及び滅する法を得と名づく。當に知るべし此の中、離欲する法と及び滅する法とを除いて、所餘の相に由りて略して三世の所有る過患を觀じ、所餘の相に由りて彼の出離を觀ず。若し是の如き過患の出離に由つて遍知すれば彼の識を善く遍知すと名く。一切の法の中に我性あること無きを諸の法印と名づく。卽

斷ずるが故に、二に隨眠斷ずるが故に、三には後有の諸行の因性斷ずるが故に、四には現在の諸行の染行斷ずるが故なり。是の如き四種を當に知るべし、總說して二種の斷と爲す、謂はく煩惱斷と及び事斷となり、前の二相を煩惱斷と名づけ、後の二相を說いて事斷と爲す。

第七目　流轉を解す

復次に、欲界の中の諸行流轉する初中後の位に於て當に知るべし略して三種の密苦ありと。一には生るる時に其の胎藏の爲に覆障せらるるが故に覆障の苦あり、二には生れ已つて嬰稚の位に處して疾病の苦多し、三には衰耄し、諸根成熟して老死の苦あり。又彼の諸行流轉し生起する初中後の滅は、當に知るべし卽ち是れ三種の苦の滅なりと。

第八目　有性を解す

復次に、三の有性あり、彼れを斷ぜんが爲の故に諸の聖弟子は當に勤めて修學すべし。一には過去を因と爲す有性に依る、是の因緣に由りて淨信にして家を捨てて非家に趣き、深く過患を見て諸欲を厭棄す。二には未來に生ずる所の諸行を因と爲す有性に依る。三には現在に未だ意樂の雜染を斷ぜざる有性に依る。是の如き三種の有性を斷ぜんが爲の故に三の斷あり、謂はく(一)顧戀無きが故に、(二)欣樂せざるが故に、(三)斷〔界〕と離欲〔界〕と滅界と集成するが故なり。

第九目　不善清淨と善清淨とを解す

復次に、諸行の中に於て略して二種の增上慢を離れ無我を觀ずる見あり。何等を二と爲すや。一には不善清淨、二には善清淨なり。云何んが名づけて不善清淨と爲すや。謂はく一あるが如し、遠離して住し、諸行は無常の性なりと觀ずる忍に依り、世間智に由りて無我の性に於て勝解を發生し、此の勝解に因りて眼所識の色、乃至意所識の法等に於て隨つて觀察し、我我所の相現行せざるが故に說いて名けて斷と爲す。又能く四の外繫所攝の貪瞋癡の三種の所有を制伏す、謂はく貪欲身繫攝

道の如く樂欲し勤行するものあらば彼の行をして攝受せしめんが爲に方便して如理所引の作意の正道を教授門を以て爲に宣說す。四には彼れ聖教の如く行ずる時に若し止觀を障礙する過失あらば皆な除遣せしむ。五には若し彼の法に隨順するものあらば皆な攝受せしむ。是れを能く不同分法を說くと名づく。

（三）此の中、正行の不同分とは、（1）謂はく彼の聲聞は先に如來に依り後に正行を行ず、夫れ如來は少しの所依もなし。（2）又彼れは聲聞種性を成就して正行を行じ、佛如來は自の種性を成ず。（3）又彼の聲聞は或は已に成熟し、或は當に成熟すべし。最後有の菩薩の身中には二行得可きにあらず、若し未熟の者ならば彼れ道に隨つて行じ能く熟し、當來に成熟すること相續し、若し已熟の者ならば彼れ現法に於て大師の教を成ず。是の如き二種を其の聖教の如く卽ち是の如く行ず、若し道に隨つて行ぜば彼れ來世に於て當に涅槃を證すべし。若し現法に於て大師の教を成ぜば彼れ此の身に依りて便ち聖道と道果の涅槃とを證す。卽ち此の聖道及び聖道の果は無損の樂なるが故に如實法と名づく、饒益の性なるが故に又說いて善と爲す。

第五目　勝解を解す

復次に、諸行の中に於て略して二種の無我の勝解あり、一には聞思の增上の勝解、二には修證の增上の勝解なり。此の中、聞思の增上の勝解は能く修證の增上の勝解の與めに生ずる依止と作る。諸の善男子は淨信して出家し、復た此に在りて極善に殷到すと雖も且く其の中に於て應に喜足すべからず、要らず此れを依と爲して諸行の中に於て漸次に無常等の想を修習し、無我の增上の勝解を證得し、彼の證をして轉た增勝ならしめんが爲の故に勸めて觀解を修す。

第六目　斷を解す

復次に、四種の相に由りて應に知るべし諸行に二種の斷ありと。何等を四と爲すや。一には諸纒

因緣と脫と脫の方便とを了知すべきこと易きも、愚夫の內縛は一切知り難し。又(四)彼の外縛は死後には卽ち無きも、愚夫の內縛は死後に諸行隨逐し、往來し循環して捨てず。又(五)彼の外縛は所有る出家の能く諸欲を捨つるは、便ち解脫を得、一切の怨讎拘礙すること能はず、愚夫の內縛は欲を離るることを得と雖も、乃至有頂すら尙ほ未だ脫すること能はず、況んや唯だ出家をや。當に知るべし此の中、欲を離れたる位に在りては魔羂も彼に於て自在を得ず、未離欲の位にては便ち自在を得、其の出家の位にては未だ魔手を脫せず、若し在家の位にては欲に隨つて作され、未離欲の位にては魔縛に縛せられ、世間道に由りて有頂に生ずと雖も未だ魔羂を脫せずと。

第四目　三の異あることを解する中、第三に如來と阿羅漢との異を解す

復次に、略して四相に由りて當に如來と慧解脫の阿羅漢との同分・異分を知るべし。一種の相に由りて說いて同分と名づく、謂はく解脫等しきが故なり。三種の相に由りて說いて異分と名づく、謂はく(一)現に等覺するが故に、(二)能く說法するが故に、(三)正行を行ずるが故なり。(一)此の中(1)如來は師無く自然に三十七菩提分法を修し、現に等正覺し、(2)等正覺し已つて遍く勝義に依りて、若しは現法の能あるもの、能無きものに於て、若しは現見の法、不現見の法、一切種に於て皆な悉く了達す、是れを自然等覺の菩提と名づく。(3)是の如く勝義の法を了達し已つて其の二障に於て善く解脫を得、謂はく習氣諸の煩惱障と及び所知障とを幷く、(4)諸の天衆及び餘の世間の與めに解脫の師と爲り獨一にして二無し。當に知るべし是の如き四相を了達するを是れを自然等覺菩提と名づくと、此れに由りて諸の聲聞と共ぜざるなり。(二)又他の義に依つて所作等を作し能く正法を說くは、五種の相に由りて、當に不共なることを知るべし。何等を五と爲すや。一には如來は如實に了知して一切種の道を道と爲し、一切種の非道を非道と爲す。二には知り已つて如實に是れは道なり、非道なりと宣說す、道に趣き非道に趣かさらしめんが爲なり。三には若し說く所の

に於て若しは諸行に於て如來は滅後に一行として流轉し得可きことあること無しと爲す。爾の時に何れの處にか如來を假立せん、旣に如來無し何ぞ有無等あらん。若し涅槃に於ては涅槃は唯だ是れ行の顯はす所無く、諸の戲論を絕す、自內の所證にして戲論を絕するが故に施設して有と爲すも道理に應ぜず、亦復た應に非有なりと施設すべからず、當に妙有寂靜なりと施設する涅槃を損毀すること勿れ。又此の涅槃は極めて知り難きが故に、最も微細なるが故に說いて甚深と爲し、種種にして一に非ず、諸行煩惱の斷じて顯はるる所なるが故に說いて廣大と名づけ、現量比量及び正教量の量らざる所なるが故に說いて無量と名づく。

第二目　三の異あることを解する中第一內外の荷擔の異を解す

復次に、三の因緣に由り內の荷擔の苦と外の荷擔の苦と其の差別あり、一には所荷擔、二には能荷擔、三には荷擔の時なり。謂はく外の荷擔は色の一分の攝なり、或は稈、或は薪、或は餘の種類は是れ所荷擔なり、愚夫は乃ち一切の諸行を以て所荷擔と爲す。又外の荷擔の屬して身肩に在るは是れ能荷擔なり。愚夫は乃ち一切の愛蘊を以て能荷擔と爲す。又外の荷擔は唯だ現肩を以て所擔を荷擔す、愚夫は乃ち一切の受蘊を以て所擔を荷擔し、所擔を捨てんと欲すれば要ず並に蘊を除き、別の方便無くして能く棄捨す、乃至未だ所擔を捨つる能はざる來た恒常に大重擔を荷擔するが故に、低劣、微弱、細軟、不靜なる肩を執持するが故に、長時に無間に所擔を荷ふが故に、內に三德あつて、是の如く衆苦を荷擔するを領受す。外は則ち然らず。是れを二種の荷擔の差別と名づく。

第三目　三の異あることを解する中、第二に內外縛の異あることを解す

復次に、五種の相に由りて愚夫の內縛と彼の外縛と而も差別あり。謂はく(一)彼の外縛は色の一分の爲めに繫縛せらる、或は木、或は鐵、或は索に繫せられ、愚夫は乃ち諸行の爲めに縛せらる。又(二)彼の外縛は他の縛に縛せられ、愚夫は乃ち自縛の爲に縛せらる。又(三)彼の外縛は縛と縛の

の境界に於て漂淪せられず、尋思雜染に離繫することを得るが故に尋思は唯だ善のみにして不善あること無し、是の如きを名づけて此れに由つて離繫すと爲す。此の、四種靜慮の無動三摩地に依りて第一の現法樂住に安住するを、是れを名づけて依と爲す。無學の心善解脫と慧善解脫と而も共に相應するに由る。又愛を離るとは第二身に於て復た生ぜざるが故に、涅槃の舍に於て退轉すること無きが故に、無上圓滿なる德を剋證するが故なり。此の五相に由りて應に知るべし圓滿に第一住に住すと。

第九項　嗢拕南第七を以て二品等の十一門を解す

復次に、嗢拕南に曰く、

『(一)二品の總略と(二)三の異あると、(三)勝解と(四)斷と(五)流轉と(六)有性と、(七)不善清淨と善清淨と、(八)善說と惡說との師等の別となり。』

第一目　二品の總略を解す

略して三處に由りて總じて一切の黑品白品を攝す、一には遍知する所の法に由るが故に、二には遍知するに由るが故に、三には遍知することを成ずるに由るが故なり。(一)遍知する所の法とは、謂はく苦諦、集諦なり、當に知るべし總じて一切の黑品を攝すと。(二)遍知すとは、謂はく滅諦なり、當に知るべし此れに白品の一分を攝すと。(三)遍知することを成ずとは、謂はく補特伽羅と及び道諦となり、補特伽羅は是れ假有なりと雖も當に知るべし亦た是れ白品の所攝なりと。此れ卽ち如來、諸の聖弟子は世俗諦及び勝義諦に於て皆な悉く善巧にして、二の道理に依りて如實に隨觀す。倶に不可記とは、謂はく如來は滅後に若しは有なりや、若しは無なりや、亦有亦無なりや、非有非無なりやとは皆な取るべからず亦記すべからず。所以は何ん、具に勝義に依れば彼れ不可得なり、況んや其の滅後或は有、或は無なるをや。若し世俗に依れば諸行に於て如來を假立すと爲し、涅槃

度す、四には隍塹を越え已つて遍りて宮闕に臨む、五には自にも非ず餘の希望する所にも非ず、勝幢既に仆れて徐に中宮に入り、是の如く宮に入りて諸の罣礙無し、涅槃の宮に入るも亦復た是の如し。先に能く五下分に順ずる結を斷ずるは彼の門を闢くが如し。次に涅槃に於て深坑の想を起し無明の怖畏斷じて餘無きが故に隍塹を超えて墮落せざるが如し。能く薩迦耶の彼岸に到るが故に、能く最後身を持つが故に彼の果決して之を越度するが如し。將に無餘依涅槃界に入らんとするは宮闕に遍るが如し。已に有愛を斷じ諸の境界に於て復た愛の生ずること無く、遍く一切に於て憍慢起らずして涅槃に入ること、自他の希望する所に非ず、勝幢既に仆れて徐に中宮に入るが如し。前の所說の五種の因緣の如く涅槃宮に入るも當に知るべし亦た爾なりと。又既に入り已つて二種の相に由りて聖住に安住す、一には行に由るが故に、二には住に由るが故なり。行は三相に由りて應に正了知すべし、一には不共の故に、二には無染の故に、三には正しく所依止に依止するが故なり。五下分に順ずる結を永斷するが故に、諸欲の中に於て畢竟じて離欲し、卽ち是の處に於て遊行するが故に、說いて不共と名づく。六恒住に於て常に攝受するが故に名づけて無染と爲す。一分の法に於て思擇して遠離す、謂はく惡象馬等なり、一分の法に於て思擇して習近す、謂はく衣服飮食等なり、是れを名づけて正しく所依に依止すと爲す。(五)是の如く行に於て善清淨にし已つて、復た五相に由りて應に住を了知すべし。謂はく若しは(一)此に由りて住し、若しは(二)此れを依と爲し、若しは(三)此れに由つて離繫し、若しは(四)此を依と爲し、若しは(五)此に由りて相應す。當に知るべし此の中不動心解脫に由りて住し、一分の法に於て思擇して除遣す、謂はく遊行と散亂と劬勞との因緣の身心の疲怠なり。一分の法に於て思擇して忍受す、謂はく寒熱等なり、是れを名づけて依と爲す。三種の雜染に於て離繫するに由る、謂はく見雜染及び愛雜染、尋思雜染なり。見雜染に離繫することを得るに由るが故に後有の中に於て心に動搖無く、愛雜染に離繫することを得るに由るが故に諸

第六目　道の四を解す

復次に、二種の道に依りて當に知るべし四種の行相を施設すと。云何んが二種の道に依るや。謂はく見道に依ると及び修道に依るとなり。云何んが四種の行相を施設するや。一には應に遍知すべき行相、二には應に永斷すべき行相、三には應に作證すべき行相、四には應に修習すべき行相なり。是の如き四種の三は見道に依り、一は修道に依る。見道に入る時に諦現觀し、倶に能く苦を遍知し、一分の集を斷じ、一分の滅を證し、彼の一分に於て能く斷證する者は修道の中に於て餘無く斷じ及び證することを求めんが爲の故に所得の道の如く應に勤めて修習すべし。是の如き諸の思擇道及び修道を修するに因るが故に餘の集を永斷し、餘の滅を證得す。

第七目　究竟の五を解す

復次に、是の如き極究竟を證得せる者は五種の相に由りて應に究竟を知るべし。何等を五と爲すや。謂はく(一)已に苦及び苦因を餘無く盡すことを證得せるが故に、(二)他義を作すに堪へ一切の自義皆な圓滿するが故に、(三)畢竟の斷及び智を證得するが故に、(四)能く究竟の涅槃城に入るが故に、(五)既に入ることを得已つて其の聖住に於て能く安住するが故なり。(一)第一相に於て割愛等の四種の差別あり、前の如く應に知るべし。(二)第二相に於て阿羅漢諸漏を盡す等の所有る差別あり、前の如く應に知るべし。(三)第三相に於て畢竟の究竟あり、一切の行事皆な悉く斷ずるが故なり。畢竟の無垢あり、一切の煩惱畢竟じて斷ずるが故なり、畢竟の梵行あり、以て後邊と爲す、謂はく已に彼の對治を獲得せるが故なり。(四)第四相に於て譬へば世間にて五種の相を具ふるを宮城に入ると名づけ、一種を闕くに隨つて名づけて入ると爲さざるが如く、是の如く要ず彼と相似せる五種の相を具せるが故に當に知るべし涅槃の宮城に入ると名づくと。何等を世間の五相を具ふと名づくるや。一には宮城の門を闢く、二には隍塹を超踰して墮落せず、三には深く果決を起して之を越

る增上力の故に流轉し雜染す、餘殘を斷ずるが故に便ち清淨なることを得。當に知るべし此の一切品の中に於て諸の清淨品は皆な內法に住すと。是の如きを名づけて四の所緣の事と爲す。

第四目　無等の敎を解す

復次に、三の因緣に由りて如來の所說の敎は與に等しきもの無きなり、一には不共法を宣說したまふが故に、二には無倒の法を宣說したまふが故に、三には自覺の法を宣說したまふが故なり。此の中に、若し薩迦耶の集行に趣かば卽ち是れ苦の集行に趣くなり、若し薩迦耶の滅行に趣かば卽ち是れ苦の滅行に趣くなり、と宣說したまふを、是れを不共法の敎を宣說したまふと名づく。若し復た說いて此れ眞實有なりと言ふ、是れを無倒法の敎を宣說したまふと名づく。若し復た說いて我れ如實に知ると言ふ、是れを自覺の法の敎を宣說したまふと名づく。

復た三種の諸行の流轉する差別あり、一には薩迦耶是れ諸の有情の染著の安足する處所の義なるが故なり、二には世間是れ染著の處にして敗壞する義なるが故なり、三には有是れ染著する者の更に生ずる義なるが故なり。

第五目　四種の有情衆を解す

復次に、彼の有情衆に略して四種あり。何等を四と爲すや。一には一向に可愛の業果に安住するなり、卽ち此の果に於て耽著し受用す、謂はく天處に生じ專ら放逸を行ずるなり。二には一向に因もて轉ずるなり、謂はく彼れを希求する所謂る沙門若しは婆羅門なり。三には般涅槃を樂ふ諸の有情衆なり。四には諸の雜種類なり、謂はく此に住し、或は果に於て耽著し受用し、或は當來の愛果を攝受することを樂ひ、或は時時に涅槃の資糧を修し、諸の放逸を離るゝなり。前の三種の有情衆の中に於て其の所應に隨つて當に世間と彼の集と滅との邊、及び薩迦耶と彼の集と滅との邊を知るべく、後の第四の有情衆の中に於て當に薩迦耶と彼の集と彼の滅と趣道との差別を知るべし。

復次に、嗢拕南に曰く、

「(一)斷支と(二)實に顯了すると、(三)行緣と(四)無等の敎と、(五)四種の有情衆と、(六)道の四と(七)究竟の五となり。」

第一目、斷支を解す

諸の修斷とは、略して五支に由りて、斷を攝受し能く諸行に於て如實に顯了す、一には身遠離するに由るが故に、二には心遠離するに由るが故に、三には奢摩他品の三摩地に由るが故に、四には毘鉢舍那品の三摩地に由るが故に、五には常に委に所作するに由るが故なり。

第二目　實に顯了するを解す

復次に、當に知るべし十二種の如實に顯了する行相ありと。攝異門分に說けるが如し。謂はく(一)聽聞して各別に(二)善取し(三)惡取するが故に、(四)正敎と(五)現量と(六)比量との境界なるが故に、(七)自相と(八)共相との故に、(九)如所有性と(十)盡所有性との故に、(十一)見と(十二)究竟地とに入るが故なり。

第三目　行緣を解す

復次に、略して四種の如實に顯了する行相、道理、智の所緣の事あり。謂はく(一)內法に住する異生率爾に境に墮して起す所の受の中に於て如實に知らざる增上力の故に、能く諸行をして流轉し雜染せしめ如實に知るが故に、能く清淨ならしむ。復た(二)在家の異生あり、後有を欣ぶ等の所依の中に於て如實に知らざる增上力の故に、能く諸行をして流轉し雜染せしめ、彼と相違すれば能く清淨ならしむ。復た(三)諸の外道あり、愛樂する所の虛妄分別定んで喜愛を生ずる所依の行の中に於て如實に知らざる增上力の故に能く諸行をして流轉し雜染せしめ、彼と相違すれば能く清淨ならしむ。復た(四)內法に住する有學あり、諸の根境所有の妄念に依り、餘殘の行に於て如實に知らさ

依りて梵行を修するが故に、同梵行の可樂の法の中に於て憎背を起すが故なり。此の二緣に由りて増上戒學に於て能く雜染を爲す、當に知るべし卽ち彼れ戒禁取に由り増上心學に於て能く雜染を爲すと、此れ實に身繫を執取するに由るが故に増上慧學に於て能く雜染を爲す。是の如き四法能く色身名身の趣向、所緣の立安の事の中に於て心をして繫縛せしむるが故に身繫と名づく。又彼れ意地に在るが故に、意の分別なるが故に、意と相應するが故に、意の隨眠なるが故に、染汚の意なるが故に意の所成と名づく。又彼れ斷ずとは、謂はく彼の境を緣ずる諸の煩惱斷ずるなり、彼の所緣には非ず、卽ち彼の境に於て無倒に解するが故なり。又後有の諸の業煩惱に攝持せらるるに由つて、後有の種識をば當に知るべし、此の依止に於て建立すと。彼れ有ること無きが故に當來の三種の前の所說の如き差別の理趣の生長廣大は、當に知るべし一切悉く皆な盡滅すと。又卽ち彼に所住の識無きに由りて因分果分復た生長せず、諸道に攝せられて生長することを得。又彼の空解脫門を依止と爲すが故に無所爲と名づけ、無願解脫門を依止と爲すが故に名づけて喜足と爲し、無相解脫門を依止と爲すが故に說いて名づけて住と爲し、彼の愛樂に於て數ば修習するが故に善解脫を得、一切の隨眠永に滅盡するが故に心善解脫す。是より已後恒住を逮得し、諸行に住すと雖も畏るる所無く、已に諸蘊任運にして滅することを得、餘因斷ずるが故に復た更に生ずること無し。彼の有漏識の永滅し已るに由つて遍く十方に於て皆な所趣無し、唯だ影の如き諸受と彼の識蘊識樹とを除くのみ、當に知るべし燈の如く皆な寂滅に歸すと。卽ち有餘依涅槃界の中に於て初の纒斷ずるに依りて說いて寂靜と名づけ、第二斷ずるに依りて說いて淸涼と名づけ、第三斷ずるに依りて說いて宴默と名づく。又三緣に由り識趣識住皆な所有無し、一には自然に染汚するに非ざるに由るが故に、二には所餘は染汚せざるに由るが故に、三には餘識の助伴無きに由るが故なり。

第八項　別嗢拕南第六を以て斷支等の七門を解す

に、(二)瞋恚身繫に由りて彼の事を緣ずるが故に、(三)戒禁と此の實との二取の身繫に由りて彼の事に住するが故なり。中の嗢拕南に曰く、

『果因と受と、世と愛と及び繫となり。』

(四)經文を消釋す　喜愛の滋潤は前の如く應に知るべし、謂はく諸行因の中に宣說せるが如し。又卽ち彼の識是の如く轉ずる時に二の生處に於て、應に知るべし結生相續し增廣すと。一には有色に於てし、二には無色に於てす。有色處に於ては中有に依止して去來あり、無色處に於ては唯だ從りて生ずるあり、卽ち兩處に於て乃し壽盡に至るまで相續して住するが故に名けて住と爲す。當に知るべし此の欲界に住する人中に三分の位ありと。謂はく初めて胎に入りて識の滋潤せらるると、胎分圓滿すると、胎より出づるとなり。當に知るべし此の三に復た差別あり、欲と色と無色と其の次第の如しと。若しは如來の所說の識流轉の道を棄捨して是の言を作すことあり、我れ當に更に別異の施設を作すべしと。當に知るべし是の人の施設する所は其の文に異あれども其の義に別無く、但だ言事のみありと。或は餘の智者其の異文に於て先づ道理を示し、後に方に「汝が施設する所の別異は何ん」と詰問せば、彼れ爾の時に於て茫然として了せず、或は後時に於て自ら達鑒することを得、前の所立に於て如理に諦觀し、反つて愚昧を生じ、愚昧に由るが故に自ら覺つて我れ本受持するは惡たり善に非ずと知ること無し。又十色界を名づけて色界と爲す、當に知るべし復た六種の受界、想界、行界ありと。又三位に於て當に知るべし諸識は煩惱を解脫すと謂はく(一)諸行に於て深く過患を見、能く諸纏をして遠く分離せしむるが故に、(二)見地の中に於て一切の外道の諸繫の隨眠永に斷滅するが故に、(三)修道に依止して究竟することを得るが故なり。又諸の外道は妄計する所の一切の生處、謂はく大自在、[二]那羅衍拏及び衆主等の無量なる品類に於て彼に生ぜんと樂ふが故に貪身繫と名づく。他の諸見の異分の法の中に於て深く憎嫉するが故に瞋身繫と名づく、邪願に

【二】那羅衍拏(Nārāyaṇa)は天上界の力士の名なり。

於て遠離を得、苦苦を永斷し、前の如く復た是の如き勝解を生ず、當に彼に我れ無かるべく、我れに當に彼れ無かるべしと。是の如く行ずる者は其の苦苦に於て究竟して解脫し、亦た永に下分に順ずる結を超越し、卽ち此の道に於て次第に進修し、乃至能く阿羅漢果を得。若し諸の愚夫は薩迦耶見を以て依止と爲し、永く壞、行の二苦を超越し及び永に上分に隨順する一切の結を斷滅する中に於て我は當に無かるべしと謂つて應に怖るべからざるに於て妄りに怖畏を生じ、尙ほ樂をすら起さず、況んや當に能く斷ずべきをや。

(三)當に因つて長く唯法無人怖を生ずべからずと辯ず　又是の處に於て二の因緣に由りて應に怖を生ずべからず。(1)謂はく唯だ有心にして四識住に住すれば轉ずるあり染あり、又唯だ有心にして四識住を斷ずれば轉ずる無く染無し。復た四依あり、謂はく色と受と想と行となり。復た四取あり、謂はく欲と見と禁戒と我語とに於ける所有る欲貪なり。復た二緣あり、謂はく若しは所緣及び若しは能緣なり。復た六識あり。謂はく眼識等なり。復た二識住あり、謂はく煩惱纏住及び彼の隨眠住なり。此の中諸取の增上力の故に不如理分別を以て先と爲す、(一)我我所の邪境界の取に由り、(二)自相の境界を緣ずるの取に由り。(三)倶有依に由る。此の三因緣は諸識をして轉ぜしめ及び染汚せしむ。(2)復た三種に由る、謂はく(一)現法に於て集諦に趣くが故に、(二)未來の苦を緣じて我れ當に是の如くなるべしとし是の如く愛するが故に、(三)彼の先因より生ずる所の現苦に於て而も安住するが故なり。復た三種に由る、謂はく(一)樂位に趣くが故に、(二)苦位を緣ずるが故に、(三)不苦不樂位に安住するが故なり。復た三種に依る、謂はく(一)來世に趣くが故に、(二)去世を緣ずるが故に、(三)現世に住するが故なり。復た三種に由る、謂はく(一)後有の愛に由りて「後有に趣くが故に、(二)彼彼の喜樂の愛に由りて未來の境界を緣ずるが故に、(三)喜貪倶行の愛に由りて現在に住し已つて境界を得るが故なり。復た三種に由る、(一)貪欲身繫に由りて貪處の事に趣向し隨順するが故

(1)六種の二門を擧げて唯法無人怖を生ずべからずと明す。

(2)五種の三門を擧げて以て前の中の言を辯ず。

第六目　斯の聖教等に於けるを解す

(一)總じて善惡二説を標釋す　復次に、是の處に世尊は自の聖教に依りて善説の發起を顯示せんと欲するが爲め、他の邪教に依りて惡説の失墜を顯示せんと欲するが爲めに、自ら所説あり、後に結集する者法門の中に於て稱して世尊の嗢拕南の説と爲す。

(二)二説の利損を辯ず　二の因緣に由りて善説の法と律とを名づけて大果大利を發起すと爲し、惡説の法と律とを即ち唐捐と爲す。一には善説の法と毘奈耶との中に於ては一切の衆苦を永離することを得べし、謂はく三種の苦性なり、二には一切の諸結を永斷することを得可し、謂はく下上分結なり、惡説の法と毘奈耶との中に於ては是の如き二事皆な得可からず。彼れ薩迦耶見に依止するに由りて諸行の中に於て心に苦苦を厭ひ、欲樂を依と爲して玆の勝解を起す、願くは當來に於て我れを苦しむることあること無く、我れに苦あること無からんことをと。或は復た已に即ち彼の苦因及び彼の當果を斷じて未來世に於て二種の相に由りて勝解を生ず、謂はく(一)苦は未來に當に我を離るべく、(二)及び我れ未來に當に苦あること無かるべしと。是の如き四種の行相に由り斷を樂ふを依と爲し、欲界の欲を離れて初靜慮に生じ、次第に乃至彼の非想非非想處の若しは定若しは生に於てし、是の因緣に由りて苦苦を超越すと雖も、而も未だ下分の諸結を斷ずること能はず、未だ彼を斷ぜざるが故に當に知るべし苦苦をば未だ永に超越せず、彼れ壞、行の二苦の斷の中に於てすら尙ほ樂を生ぜず、何に況んや能く斷ずるをやと。彼の隨順して未だ斷ぜざる所なるに由るが故に、當に知るべし上分に順ずる諸結に於て亦た未だ斷ずること能はず。內法に住する者、初め觀を修する時に欲界に於て未だ離欲を得ずと雖も有情勝るるが故に而も三苦に於て深心に厭離し、欲を斷ずることを樂ふに依りて諸行の中に於て無我の見を用ゐて以て依止と爲し其の勝解を發す、願はくは未來に於て三苦に我れ無く、我れに三苦無からんことをと。彼れ初め是の如き行を修習し已つて欲界の欲に

に於て捨離すること能はざるなり。(二)自性の故なりとは、謂はく二の因緣に攝受する所等を隨つて觀察するに彼の隨眠に於て遠離することを得ざるなり。(三)果に由るが故なりとは、謂はく即ち彼の薩迦耶見を以て依止と爲すが故に、我慢の隨眠を遠離すること能はざるなり。是の二の隨眠の增上力の故に、能く當來の諸根を引いて起らしめ、彼に由りて苦樂二受を領納し、更に我我所を計することを發起するに因つて、不如正理の思惟と相應して意言分別して我我所に其の領受ありと謂ふ。(四)等流の故なりとは、謂はく先因の力に持たるるに由るが故に即ち見の種子は意に隨逐する所にして、後有の意界は前の因緣の熏修する所の力に由りて成滿することを得。即ち是の如き後有の意の中に於て無明種及び無明界あり是の二の種子に隨逐せらるる意の所緣の法界は彼れ宿世の惡說の法と及び毘奈耶とに依つて生ぜる所の分別の薩迦耶見を以て依止と爲すに由りて今の界を集成す。即ち此の界の增上力に由るが故に俱生の薩迦耶見を發起し、善說の法と毘奈耶との中に於て亦復た現行して能く障礙を爲す。

(2)又即ち此の見は二種の相に由りて六轉して現行す、一には世に由るが故に、二には慢に由るが故なり。世に由るが故なりとは、謂はく我れ過去に於て曾有なりしと爲んや、曾無なりしと爲んやと、乃至廣說、應の如く當に知るべし。慢に由るが故なりとは、謂はく我れを勝なりと爲せんやと、乃至廣說、彼れ是の如き一切に於て如實に知らず見ず、此の因緣に由りて正理の如くならずして邪觀を起す。

(3)又明位に三あり、謂はく他の音を聞き如理作意するは是れ初の明位なり、已に能く正性離生に證入せるは是れ第二の明位なり、心善解脫の阿羅漢果は是れ第三の明位なり。其の無明位に復た二種あり、一には先、二には後なり。隨眠の位は是れ先なり、諸纏の位を後と爲す。又見修の所斷に約して異あり、當に知るべし是れを第二の差別と名づくと。

(2)二相六轉の現行を辯ず。

(3)明無明の位を明す。

第四目　愚夫の分位の五を解す

復次に、愚の位に五あり、若し中に於いて轉ぜば愚夫の數に墮す。何等を五と爲すや。一には倶生の慧を獲得せざるが故に、二には他音を聞くに從つて緣生ずる慧を獲得せざるが故に、三には眞聖の慧を獲得せざるが故に、四には愚癡の纒に纒縛せらるるが故に、五には彼の隨眠に隨縛せらるるが故なり。

復た四種の我を妄計する論あり、一には諸行は是れ我なりと宣說す、二には我に諸行ありと宣說す、三には諸行は我に屬すと宣說す、四には我は行の中に在りと宣說す。二の因緣に由りて我を妄計する論は諸の雜染を作す、一には執著するが故に、二には隨眠の故なり。執著するが故なりとは、謂はく諸の外道、解脫を求むと雖も彼れ障と爲るに依つて一切種に於て獲得すること能はざるなり。隨眠の故なりとは、謂く諸の內法、境界に耽著し、暫時障を爲すも究竟に非ざるなり。

第五目　二種の見の差別を解す

(一)略して二見の同分不同分の義を辯ず　復次に、若しは有我の見、若しは無我の見は同じく諸行を緣じて境事と爲すが故に說いて同分と名づけ、而も彼の事に於て邪取、正取、染汚、清淨等の義別なるが故に不同分と名づく。

(二)廣く見我の差別を釋す　[1]又四相に由りて所緣の事に於て邪僻に執著する增上力の故に能く我見をして諸の雜染を作さしむ、一には因緣の故に、二には自性の故に、三には果に由るが故に、四には等流の故なり。(一)因緣の故なりとは、謂はく二の愚癡なり、一には事の愚癡、二には見の愚癡なり。事の愚癡とは、事に愚なるに由るが故に先に邪法を聞き、後に我見を起すなり。見の愚癡とは、謂はく見に愚なるが故に見と相應する諸の無明觸より生起せられたる受に於て妄計して我と爲し、此を緣と爲すに由りて恒に我愛の爲に隨逐せらるるなり、復た此れに由るが故に常に我見

---

(1)四相の離染を辯ず。

づく。

(二)義釋に隨つて解す　(一)又餘無く斷ずる三相をば應に知るべし、一には現行せざるに由るが故に、二には界に由るが故に、三には事に由るが故なり。現行せずとは、謂はく生起すと雖も而も染著せず、未だ永斷せずと雖も數諸の善法を修習するに由るが故に遠分の諸の纏煩惱をして復た現行せざることを成ぜしむ。界とは三界なり、前の如く應に知るべし。事とは謂はく二事なり、一には煩惱の事、二には是れ苦事なり。(二)又安樂利益の隨逐する諸の離繫品の五種の界の中に於て寂靜、微妙、勝功德等あり乃至涅槃を其の最後と爲す、差別をば應に知るべし。(三)又此の中に於て一切の依持をば皆な喜捨すとは、當に知るべし[一]父母等の事を割捨するなりと。(四)又中有、生有、後有に於て復た更に生ずること無し、其の次第の如く當に知るべし說いて相續ある無く取無く生無しと名づくと。(五)又三品に於いて三種の門に由りて障礙を爲すが故に當に知るべし三結の差別を建立すと。謂はく(一)未だ發趣せざるが故に、(二)已に發趣すと雖も邪成立するが故に、(三)正法の中に於て正行せざるが故なり。卽ち在家品は惡說の法と毘奈耶との中に處し、而も出家品は善說の法と毘奈耶との品に處す。(六)又逆流に趣向するを行ずる者は惡趣を解脫し、二種の解脫の決定することを成就す。一には煩惱を解脫すること決定し、二には後有を解脫すること決定す、是の因緣に由るが故に預流と名づく、乃至廣說(七)又若し阿羅漢果を證得するは、先に學地に在りて諸行の中に於て已に我及び我所を執受せず、後に諸漏に於て皆な解脫を得。(八)又四種の義と相應するが故に當に知るべし是れを阿羅漢の相と名づくと。一には自事已に究竟して應に他事を作すべき義なるが故に、二には應に自義を得て一切に遍滿すべき道理の義なるが故に、三には未來の行因已に永に斷滅し應に現法樂住を證すべき義なるが故に、四には有學地を超え無學地に入れると相應する義なるが故なり。

【一】父母妻子等の七攝事。

第三目　二智を解す

(一)正しく二智を辨じて見をして清淨ならしむることを明す　復次に、二智あり、能く見をして清淨ならしめ及び見をして善清淨ならしむ、謂はく法住智及び此を先と爲す涅槃智なり。(一)法住智とは、謂はく能く諸行の自相の種類の差別を了知し、及び能く諸行の共相の過患の差別を了知す。謂はく若しは苦、若しは樂、不苦不樂の三位に隨順する諸行に於て方便して三苦等の性を了知するなり。(二)涅槃智とは、謂はく是の如き一切の行の中に於て先に苦想を起し後に是の如く思ふ、卽ち此の一切の有苦の諸行は餘無く永斷す、廣說乃至名づけて涅槃と爲す、是の如く了知するを涅槃智と名づく。卽ち此の二智は見をして清淨及び善清淨ならしむ。要ず二門に由りて正勤修習して方に彼をして淨ならしむ。一には自ら力無き補特伽羅は他の敎授に因りて能く彼をして淨ならしめ、二には自ら力ある補特伽羅は多聞思求して能く彼をして淨ならしむ。此の中第一の補特伽羅は聰利ならざるが故に、信等の諸根唯だ一味なるが故に、止觀の所緣は少分の法の諦察忍に於て轉ず。此と相違するは當に知るべし第二の補特伽羅なりと。

復た三種の現觀邊智あり、彼を修習するが故に見清淨なることを得と。一には能く無漏を生ずるに順ずる智、二には無漏智、三には無漏智の後に相續する智なり。初のは世間第一法の所攝の智なり、第二は若し彼れに住せば能く見諦の一切煩惱を斷ず、第三は煩惱斷じて後に解脫相續する智なり。若し中智に住すれば便ち已に正性離生に入り異生地を超過すと名づくるも、未だ預流果を得ず。未だ第三解脫の預流果の智を剋證せずと雖も其の中間に住する所の刹那に於ては未だ剋證せざるが如し。終に中夭無く時少きを以ての故なり、此より無間に必ず第三を證す、此の位の中に住して如實に所知の境を現見するが故に見清淨なりと名づくるも、餘惑あるが故に善清淨なるには非ず。若し此の智に於て更に各修習し、阿羅漢を成じ、一切の煩惱をば皆な離繫するが故に善清淨なりと名

欲するを自作論と名づけ、若し一切は皆な自在等の變化する因の作なりと欲するを他作論と名づけ、若し少分は自在天等の變化する因の作にして一分は爾らずと欲するを俱作論と名づけ、若し無因作論ならば俱非作論と名づく、當に知るべし是れを第二の我の無智に依つて論じ問記する衰損と名づくと。彼の諸論に由りて前際を計度し過現世に依りて妄りに分別するが故なり。

(3)法隨法行に依る證得の衰損とは、謂はく沙門若しは婆羅門あり、他を責むるを勝利と爲すと觀ぜずして論じ、難を免るゝを勝利と爲すと觀ぜずして論じ、亦た我の無智の諸論に依りて利養恭敬等の事を求めんが爲に樂欲し開闡せざるも、惡說の法と毘奈耶との中に於て出家を求む、唯だ出離解脫を樂求するを除く、當に知るべし彼れは是れ薄塵の種類にして性と爲り愚戇にして專ら止行を修す。彼は初靜慮定の敎授敎誡を得んが爲に能く後際に俱行する見趣に於て、及び前際に俱行する見趣に於て然りと許さゞるに由るが故に超過することを得、現法の中に於て又能く欲界の諸結を超過し喜を遠離することを證し、斯より已上無聞無知にして卽ち此の中に於て涅槃の想を生ず。彼れに由るが故に喜を遠離することを證するが如く是の如く、或は別の因緣に由りて第二、第三靜慮の愛味無き樂、第四靜慮の苦樂無き受を證得することあり。此より已上乃至非想非非想處も當に知るべし亦た爾なりと。種種の想と俱行する苦樂受等の差別に於て已に超過せるが故なり。是の如く彼れ趣の諸の取行に於て超越すること能はず、退還する法を樂つて未だ般涅槃せず涅槃の慢を起す、當に知るべし是れを第三の衰損と名づくと。此の中、如來は自然に寂靜の妙迹を證覺し、說く所の如き一切の行相に於ける三種の衰損をば五種の相に由り如實に了知す。謂はく若しは(一)彼の自性、若しは(二)彼の諸見、若しは(三)無智に由りて彼れ生起することを得ること、若しは(四)所緣轉ずること、若しは(五)彼の所緣の麁弊の過患及び上の出離、是の如き事に於て如實に了知し、卽ち出離の中常に自ら出離す。

(3)法隨法行に依る證得の衰損。

り、一向苦ある者は謂はく捺落迦に在り、樂あり苦ある者は謂はく鬼、傍生、人、欲界の天に在り、不苦不樂ある者は謂はく第四靜慮已上乃至非想非非想處に在り。

(四)六十二見に三の衰損を爲すことを明す　又是の如き諸の外道の處に於て當に知るべし總じて三種の衰損ありと。一には見及び欲樂の展轉し相違し論ずる衰損、二には我の無智に依りて論じ問記する衰損、三には法隨法行に依る證得の衰損なり。

(1)此の中の三種の若しは有想を計し、若しは無想を計し、若しは非有想非無想を計する論者及び斷見の論者は或は他を責むるを勝利と爲すに依りて論じ、或は難を免るゝを勝利と爲すに依りて論じて計度を起す、當に知るべし是を第一の衰損と名づくと。彼の諸論は後際を計度し、未來世に依りて我を妄計して有、無なりと爲すに由るが故なり。

(2)我の無智に依りて論じ問記する衰損とは、謂はく若しは諸の雜染若しは雜染の處、若しは能雜染是の如き一切の世俗勝義の二諦の道理に於て如實に知らず、此の無智は趣向する所あり以て先と爲すに由るが故に差別あることを得。此の無智より何れの所に趣同するや。謂はく三の四轉なり、一には常、無常等、二には有邊、無邊等、三には自作、他作等なり。所以は何んとならば、彼れ無智に由り要らず趣向を先にし是の如く差別して後に方に問記すればなり。

又聖法と毘奈耶との中に於て所有る智者は記事すべからず、二の道理に於て記すべからざるが故なり、謂はく世俗と勝義との二諦の道理なり。

此の中、四種の一向常論にして前際を計する者及び前際を計する無因論者の二種の差別は皆な先に我を計して後方に我は一向常なり等と緣ずる諸論の差別なり。又即ち四種の一分常論にして前際を計する者は彼に差別あり、謂はく一分常無常を緣ずる論あり、或は一分非常非無常を緣ずる論あり。邊無邊等の諸轉は前の邊無邊等の如く應に其の相を知るべし。若し一切は皆な宿因の作なりと

(1)見及び欲樂展轉し相違して論ずる衰損。

(2)我の無智に依りて論じ問起する衰損。

一切を言ふが如くにして滅ずること無くして之に印順すべし」と。是の計度に差別あるに由るが故に四種を建立す。

[4]世に依るに由るとは、謂はく過去及び現在世に依りて分別を起すが故に前際を計すと名づけ、未來世に依りて分別を起すが故に後際を計すと名づく。

[5]諸見に依るに由るとは謂はく三見に依る、前の如く應に知るべし。初見に依るに由つて現法の中に於て我は有色なりと計し、後は或は有色有想なり或は無有想なり或は非有想非無想なりとす。第二の見に依りて現法の中に於て我は無色なりと計す、後に於て計する所は前の如く應に知るべし。第三の見に依る我論に二あり、一には我の有色無色なるを說き、二には我の非有色非無色なるを說く、餘は前說の如し。

又卽ち我は是れ有色なりと計する者は、或は狹小なりと言ひ、或は無量なりと言ふ、我の無色なるを計するも當に知るべし亦た爾なりと。此の二我論は第三の見に依りて立てゝ二論と爲す、一には我の狹小なるを計し、二には我の無量なるを計す。是に由りて四種の我論は差別す。我は有邊と說き、我は無邊と說き、我は亦有邊亦無邊と說き、我は非有邊非無邊なりと說く。其の次第に隨つて前の如く應に知るべし。

又卽ち是の如く諸見に依止し、及び我論に依りて復た我の清淨解脫を宣說す、欲、靜慮に於て皆な自在を得、其の所欲に隨つて多く變化に住し、其の所欲の如く靜慮に安住し、清淨の見を以て方便の法樂に遊戲受用す。是の如きを名づけて諸見に依るが故に應に安立を知るべしと爲す。

[6]生處に由るとは、謂はく我に一の想あり乃至廣說。一の想ありとは、謂はく無色の空無邊處、識無邊處に在るなり。種種なる想ありとは、謂はく下地に在るなり、卽ち所說の如く其の次第に隨つて、應に知るべし、我に狹小の想あり、無量の想ありと說くと。一向樂ある者は謂はく下三靜慮に在

(4)世に由る。
(5)諸見に由る。
(6)生處に由る。

唯だ能く世俗定に入るのみならば當に知るべし是の天は不善清淨なりと、諸諦の中に於て了達せざるが故に、其の心未だ善解脫を得ざるが故なり。若し能く內法定に證入すれば當に知るべし是の天を善清淨と名づくと、諸諦の中に於て已に了達せるが故に、其の心已に善解脫を得たるが故なり。當に知るべし無亂に亦二種ありと。一には無相無分別、二には有相有分別なり。此の中第一は是れ善清淨天、第二は是れ不善清淨天なり。前の清淨天は自の不死無亂に於て轉ず、是の故に說いて不死無亂と名づく。後の不清淨は若し不死無亂に依ることあらんに、詰問せらるゝことあらば便ち餘事に託して矯亂して之を避け、諸諦に於ける無相心定の善巧ならざるを以ての故に先づ心慮を興し是の思惟を作さく、我等既に不死無亂と稱するも復た、所餘の不死無亂あり、諸の聖諦に於ける無相心定已に善巧なるを得、彼の成ずる所の德を我に望むるに勝れたりと爲す。彼れ若し中に於て我に詰問せば我れ若しは記別し、或は爲に異記し、或は實有を撥し、或は非有を許さんと。彼れ記別に於て是の如き等の諸の過失を見已つて、是の思惟を作さく、「我れ一切の詰問せらるゝ中に於て、皆な應に記すべからず」と。又是の中に於て餘過有るを見る、謂はく他のもの此に由りて我が無知を鑑み、因りて則ち不死無亂を輕笑すれば諂を行ずる者ありて是の思惟を作さく、「我れ此の中に於て應に是の如く記すべし、我が淨天は一切隱密にするには非ず、皆な記別することを許す、謂はく自の所證及び清淨の道なりと。是の如く思ひ已つて故らに詭言を設けて相矯亂す。彼れ既に是の如く思惟に住し、遍く其の心を彼の最上なる清淨天の所に布き、故らに我れは是れ不死無亂なりと稱し、恐怖を懷くに由りて記別する無く、我が劣昧なることを他の爲に知らるゝこと勿れと。是の因緣に由りて解脫すること能はず、此を以て室と爲して自ら安處す。

　又愚戇にして止行を專修するあり、其の諂詐の方便を以て矯つて亂言を設くること能はず、但だ是の思を作さく、「諸の來問するものあらば我れ當に反詰すべく、彼れの答ふる所に隨つて我れ當に

するに五あり、一には有想論、二には無想論、三には非有想非無想論、四には斷見論、五には現法涅槃論なり。是の如き五種をば復た略して三と爲す、一には常見論、二には斷見論、三には現法涅槃論なり。

(三)六十二見生起の因緣を明す　又此の一切の諸の惡見趣は六の因緣に由りて建立することを得、一には因緣に由るが故に、二には教に依るに由るが故に、三には靜慮に依るに由るが故に、四には世に依るに由るが故に、五には諸見に依るに由るが故に、六には生處に依るに由るが故なり。

(1)因緣に由るとは、謂はく彼の一切の薩迦耶見を以て因緣と爲すなり。

(2)教に依るに由るとは、謂はく彼の能く見趣を顯はす不正なる法藏に依り師弟傳聞し、展轉相ひ授くるを方便と爲すに由るが故なり。

(3)靜慮に依るに由るとは、謂はく靜慮を依止と爲すを以ての故に先に聞ける所、先に信解せる所に於て決定を得るなり。又此の靜慮に復た二種あり、一には宿住隨念と倶行し、二には所得の天眼と倶行するなり。宿住隨念と倶行すとは、謂はく前際を計する三の常論の中、下中上の淸淨の差別に由り、及び四種の邊無邊論に於て彼れ諸の器世間の成壞の兩劫の出現の方便を憶念するに由る。若し時に成劫の分位を憶念せば爾の時に便ち三種の妄想を生ず。若し一向に上下を憶念することあらば下は無間捺落迦の下に至り、上は第四靜慮の上に至るまで是の如き分量の邊際を憶念し、便ち世間に於て有邊の想に住す。若し一向に傍に無際を憶することあらば、便ち世間に於て無邊の想に住す。若し二種を憶念すること倶行するあらば、便ち世間に於て二の倶なる想に住す。若し時に壞劫の分位を憶念せば爾の時に便ち非有邊想非無邊想に住す、諸の器世間所得無きが故なり。復た諸の靜慮に依止することあるが故に當に知るべし或は一分常論を說き、或は無因論を說き、或は不死矯亂論を說くと。應に知るべし此の中に二の淨天ありと。一には不善淸淨、二には善淸淨なり。若し

(1)因緣に由る。
(2)教に由る。
(3)靜慮に由る。

漸次あり、謂はく學智見を依止と爲すが故に厭離を得たる者は諸行の中に於て喜樂を生ぜず、乃至耽湎を生ぜずして住し、厭離を先と爲して離欲を得、離欲を先と爲して心善解脫し、斯より已後卽ち是の如く心善解脫に由りて恒常にして住するが故に順無く違無し。

又行の時に於て、或は住の時に於て一切の相に於て復た作意すること無く、無相界に於て作意し思惟し無相にして住す、能障此の一切の見趣に於て先に已に永斷せり、況んや當に礙を爲すべけんや。彼れ是の二の若しは行、若しは住、乃至壽盡に由りて便ち無學の內の般涅槃を以て般涅槃し、先に生ぜる所の有今に於て永盡し、當來の諸行復た更に生ずること無し。

(二)薩迦耶見を本として六十二見を生ずることを明す　又三分に由りて當に薩迦耶見を建立して以て根本と爲す一切の見趣を知るべし、一には前際に倶行するに由るが故に、二には後際に倶行するに由るが故に、三には前後際に倶行するに由るが故なり。(一)前際に倶行すとは、謂はく一あるが如し、是の思惟を作さく、我去世に於て曾有と爲んや、曾無と爲んや、曾て是れ誰れなりしと爲んや、云何にして曾有なりしやと。(二)後際に倶行すとは、謂はく一あるが如し、是の思惟を作さく、我は來世に於て當有と爲んや、當無と爲んや、當に是れ誰れなりと爲んや、云何んが當有なりやと。(三)前後際に倶行すとは、謂はく一あるが如し、是の思惟を作さく、我は曾有の誰れなりしや、誰れか當有の我れなりや、今此の有情何れの所より來り、此に於て沒し已つて何れの所に去り至るやと。

又諸の外道は薩迦耶見を以て根本と爲して六十二の諸の惡見趣あり。謂はく四の常見論、四の一分常見論、二の無因論、四の有邊無邊想論、四の不死矯亂論、是の如き十八の諸の惡見趣は是れ前際を計して我を說く論者なり。

又十六の有見想論、八の無想論、八の非有想非無想論、七の斷見論、五の現法涅槃論あり、此の四十四の諸の惡見趣は是れ後際を計して我を說く論者なり。是の如く後際を計度する論者をば略攝

巻の第八十七

攝事分中契經事行擇攝第一の三

第七項　嗢拕南第五を以て因等の六門を解す

復次に、嗢拕南に曰はく。

『(一)因と(二)勝利と(三)二智と、(四)愚夫の分位の五と、(五)二種の見の差別と、(六)斯の聖教等に於けるなり。』

第一目　因を解す

一切行の因に略して二種あり、一には共、二には不共なり。(一)共因とは、謂はく喜を先因と爲す、此の喜に由るが故に彼彼の生處に於て厭離することを障へ、自體を滋潤す。將に所生の處に生ぜんと欲するが爲めには、一切の煩惱の因たるありと雖も、而も生處に於て喜を生ずる者は生じ、彼に於て厭逆の想を起す者には非ず。又即ち此の喜は唯だ色に依りて說く、宿因生じ已らば餘因の究竟するを待たずして轉ずるが故なり。(二)不共因とは、謂はく苦、樂、非苦樂に順ずる觸を受等の所有る心法に望め、無間滅の意及び倶生の名、十種の色等を六種の識に望むるに、彼は先因より生ずる所なりと雖も、刹那刹那に別に餘因を待つて方に生起することを得るに由る。

第二目　勝利を解す

(一)羅漢に四種の勝利あることを明す　復次に、解脫心あり淨智見ある諸の阿羅漢には四の勝利あり、當に知るべし、諸の外道と共ぜずと。一には行の時に於ては恒常にして住する性なり、二には住の時に於ては無相にして住する性なり、三には往昔の因より生ずる所の諸行任運に滅に歸す、四には後有の行は今の因斷ずるが故に當に復た生ぜざるべし。是の如き四種の勝利を證せんが爲めに三の

諸の不正なる想を斷ぜんが爲に無相心三摩地を修習す。此の對治を修するは要らず彼の對治を修する中に於ける猛利なる樂欲に由りて方に成辦することを得、彼の樂欲猛利ならざる者には非ず。此の猛利なる欲は二緣に由りて生ず、謂はく(一)此の對治に大果あるが故に、(二)一切の諸の外道に共ぜざるが故なり。(一)大果ありとは、謂はく修習する時に便ち能く無相心定を剋證し、及び二界の妙甘露門、所謂る斷界及び無欲界、若しは有餘依及び無餘依に住するなり。此に安住する者は二涅槃に近づく。未だ今時に於て一切皆な得たるにあらず。(二)不共なりと言ふは、謂はく無相定は唯だ內法のみにありて諸の外道には無し。何を以ての故にとならば、彼の外道は若し所得あらば卽便ち增益して如量に觀ぜず、若し所得無くんば卽ち妄分別するに由る、我見に由るが故に諸行に愚にして或は唯だ身或は唯だ無色に於て或は總じて二に於て我の執著を生じ、我を執するを以ての故に、我は當に無なるべしと謂つて便ち二涅槃に於て心に欣樂せず、尙ほ未だ入ること能はず、況んや安住するをや、唯だ驚怖を增すのみにして其の心退還す。內法に住する者は彼れと相違し、般涅槃に於て心に退轉すること無く、唯だ苦のみ滅するなりと了じ、唯だ靜德なるのみなりと見る。若し諸の有學ならば唯だ內の滅のみを祈りて道を生ぜんが爲に更に他より敎授敎誡を求むるには非ず、若し諸の無學ならば唯だ內の滅を欣んで終に更に諸の煩惱を盡すことを求めず、唯だ先因より生ずる所の諸行のみあり任運に滅に歸して般涅槃す。

瑜伽師地論卷第八十六

の過失の故に、五には尋思の過失の故に、六には依止の過失の故なり。(一)現行の過失とは、謂はく貪纏に由るが故に染し、瞋纏の故に憎み、既に猛利なる貪瞋等を懷くが故に遂に羞恥無く、羞恥無きが故に惡に住して捨てざるなり。(二)意樂の過失とは、謂はく染する者の邊に於ては此の貪の意樂を最も下劣と爲し、是の如く憎む者の邊に於ては此の瞋の意樂を最も下劣と爲す。(三)加行の過失とは、謂はく或は精進を發せざるあり、或は精進の慢緩なるあり。(四)智慧の過失とは、謂はく或は聞思所成の慧の中に於て、正念を忘失して多く愚癡に住し、修所成に於て心寂定ならず。(五)尋思の過失とは、謂はく居家に隨順する所有る惡・不善覺に於て多分に尋思し、正しき法と律とに於て其の心錯亂するなり。(六)依止の過失とは、謂はく彼れ其の往昔に修集せざりし因に依止して修集せざりし因に由るが故に自性の微褊なる小信を成就し、自性の小戒を修し住することを成就し、自性の小念に住し守ることを成就し、自性の俱生の小慧を成就するなり。

復次に、四種の相に由りて能く彼の人をして聖教に入らしむと雖も而も邪行を行ぜしむ。一には微劣不淨なる意樂に由るが故に、二には聖教の瑕隙を伺求して正法の賊と爲るに由るが故に、三には專ら飮食、衣服、活命の因緣を爲すに由るが故に、四には王賊・債主の加ふる所の迫切を怖畏するに由るが故なり。若し是の如き諸の邪行を行ずる者は便ち二事に於て稽留する所あり、一には在家の自義を失壞して稽留し、二には出家の自義を失壞して稽留す。

復次に、是の如き邪行に二の因緣あり、謂はく三事に於て正しく尋思せざると及び彼の前行の諸の不正なる想となり。其の三事とは、前の如く應に知るべし。彼に於て諸の不正なる想を發起し相好を隨取し、斯れより已後其の隨法に於て多く隨つて尋思し、多く隨つて伺察す。

(2)復次に、是の如き邪行の因緣を斷ぜんが爲に當に知るべし亦た二種の對治ありと。一には不正なる尋思を斷ぜんが爲に無顚倒と數數との二行を以て諸の念住に於て善く其の心を住せしむ、二には

(2)治を明す。

故に、二には正法を聽聞せんが爲の故に、三には生ずる所の疑を決せんが爲の故に、四には他に順つて翼從を爲さんが爲の故に、五には他を愍み饒益を爲さんと欲するが爲の故に、六には如來の聖敎を愛重するに由るが故に、七には如來世俗の心を起して會に趣かしめんと欲すと知るが故なり。

(五)初信後悔對　復次に、五種の相に由りて當に一切の初新の者の性を知るべし。一には晚き出家に由るが故に、二には幼き出家に由るが故に、三には少き出家に由るが故に、四には勞策の出家に由るが故に、五には受具の出家に由るが故なり。

復次に、三種の相に由りて惡作を生起す。一には所學に違越せる增上の故に、二には誓つて法律を受けたる增上の故に、三には居家を棄捨せる增上の故なり。

(六)師說資往對　復次に、如來は將に諸の聲聞の爲に正法を宣說せんと欲せば四種の相を現じたまふ。一には極下座より安詳として起つて極高座に上り、儼然として坐したまふ、二には說法に隨順する威儀に安住したまふ、三には謦欬音を發し、將に說法せんとすることを示したまふ、四には面目顧視したまふこと龍象王の如し。

復次に、犯戒の聲聞は當に三處に於て安住し、慚羞して大師の所に往くべし。一には深く己が犯を知るを增上處と爲す、二には師事するに儀を失することを增上處と爲す、三には事乖けるに由りて則ち當に方便を以て威儀を調順して大師の所に往くべきことを增上處と爲す。

(七)呵犯治邪對　復次に、三種の相に由りて應に正に犯戒の聲聞を訶責すべし。一には曰く汝は甚だ鄙劣にして活命すと、二には曰く汝が意樂は淸淨ならずと、三には曰く汝は活命の意樂を以て非法の行を行ずと。

[1]復次に、善說の法と毘柰耶との中に於て略して六相に由り、當に知るべし、徧く一切の邪行を攝すと。一には現行の過失の故に、二には意樂の過失の故に、三には加行の過失の故に、四には智慧

(1)邪を明す。

同事行を以て彼の一分を攝せんと欲するが爲の故に、四には未來の衆生の與めに大照明を作らんが爲の故に乃至彼をして暫く觸證を起さしむるが故に、五には彼の麁弊なる勝解の諸の外道を引かんと欲するが爲の故に、六には彼れ聲を承けて謗を起すが爲の故に妙色寂靜なる威儀を現じて其をして驚歎し、心に歸向を生ぜしめんが故に、七には彼の處中の衆生は其の少功を以て多福を樹つるが爲の故に、八には壞信放逸なるものをして深く恥愧を生ぜしめんが爲には、小功を用ふると雖も而も大福を獲るが故なり、放逸なる者の爲にするが如く懈怠なる者にも亦た然なり、九には彼の盲聾顚狂心亂の衆生の種種なる災害をば皆な靜息せしめんが爲の故に、十には無量無邊なる廣大の威德の天・龍・藥叉・健達縛・阿素洛・揭路茶・緊捺洛・牟呼洛伽等をして如來に隨從して入る所の家に至り、深く羨仰を生じ、勤めて賓衞を加へ、惱害を爲さざらしめんが爲の故なり。

復次に、八の因緣に由りて如來は寂靜天に入りて住したまふ。一には雜住を樂ふ者を引いて遠離に入らしめんが爲の故に、二には同事行を以て遠離者を攝せんと欲するが爲の故に、三には自ら現法樂住を受くるが故に、四には大族の諸天と示して同じく集會せんが爲の故に、五には佛眼を以て十方世界を觀察し、大神化を現じ、其の所應に隨つて饒益の事を作さんが爲の故に、六には諸の聲聞衆をして如來を見たてまつるに於て深く渴仰を生ぜしめんが爲の故に、七には諸の大聲聞は略說する所に於て善く能く悟入することを顯はさんが爲の故に、八には勸めて戲論に樂著し、言辭を制作することを捨てしめんが故なり。

(四)攝衆誘天對　復次に、五種の相に由りて大師は諸の聲聞衆を攝受したまふ。一には法を以ての故に、二には財を以ての故に、三には依止の與めの故に、四には初めて攝受するが故に、五には擯し攝受するが故なり

復次に、七の因緣に由りて釋梵天等は如來の所に往く。一には如來を供養したてまつらんが爲の

事なりや。一には資命の衆具、二には他の損害する相、三には或は他の毀罵、或は一の非愛あつて現行するに隨ふ同梵行者の不同分法なり。三には教授を先と爲し、他の音に依つて如理作意し、能く正見を生じ、能く邪見を斷ず、當に知るべし此の三を是れを住時の正道の言教と名づくと。復た二種の彼の行時に於ける正道言教あり、謂はく諸の有智の同梵行者は彼れが爲に處非處を宣説する時に忿怒を生ぜず、又麁弊の資命の衆具を若しは得ると得ざるとに由り及び戒等の所有る災害に由るも、心に熱惱せざるを、是れを第一と名づく。所得の勝れたる利養恭敬に於て心の悒然ならざるを、是れを第二と名づく。彼れ是の如く住時・行時に能く正しく涅槃の妙道を修行するに由り、此に由りて久しからずして當に涅槃を得、終に毀失すること無かるべし。

第十目　師の所作等の品を後に廣することを解す

(一)師所作の事を明す　復次に大師は、諸の聲聞に於て略して五種の師の所作の事あり、一には正しく折伏す、二には正しく攝受す、三には正しく訶責す、四には正しく雜染を説く、五には正しく清淨を説くなり。

(二)記別驅擯對　復次に、二の因緣に由りて諸の諍事に於て違越せる聲聞は覆相して彼の所諍の事を記別す、一には擾亂增廣するが故に、二には律と相應するが故なり。

復次に、七の因緣に由りて大師は諸の聲聞衆を驅擯す、一には一切種の皆な邪行を行ずるを見るが故に、二には彼の多分なるを見るが故に、三には彼の衆首の上座、阿遮利耶、鄔波柁耶の方便に由るが故に、四には共住するに堪へざるが故に、五には驅擯せらるるが故に、六には現前の過を避けんが故に、七には未來の過を生起せざらしめんが故なり。

(三)行乞入住對　復次に、十の因緣に由りて如來は聚落に入りて乞食したまふ。一には當に杜多の功德を顯はすべきが故に、二には彼の一分を引きて乞食に入らしめんと欲するが故に、三には

倒に數數作意するを以て、諸行の無常の性を觀察し、無常の想に由りて無我の想に住し、見道の中に於て既に無漏の無我の想に住し已つて上の修道に於て有學の想に由りて我慢を永害し、涅槃を隨得する二種皆な具するなり。

第九目　違糧を立つることを解す

（一）違順の資糧の法を辯ず　復次に、涅槃に住せんが爲めなるも仍ほ未だ善き資糧を積集せざる者には略して五種の資糧に違する法あるなり。一には往昔の笑戲・歡娛・承奉等の事を憶念し、思慕の俱行する作意を發し愁歎等を生ずるに因る。二には彼の種種なるを依と爲すに由りて領受する所の究竟法の中に於て多く妄念を生じ、諸法に於て顯了なる能はざらしむ。三には食ふ所或は過ぎ或は少く此れに由りて身をして沈重羸劣せしめ、諸の梵行に於て樂つて修行せず。四には眠ることを憙んで斷ずることを串習せず、便ち上品の睡眠の爲めに纒はる。五には猥雜に親近して住し、諦に正法を思ふ加行を遠離す。是の如き五種は資糧に違する法なり。

復次に、五種の彼れに隨順する法あり。一には二の離欲に於て猶ほ未だ離るること能はずして一種の欲に隨ふ、謂はく諸纒の遠分離欲に於て善品を勤修し、及び隨眠に於て永害し離欲して正しき對治を得るなり。二には根門を護らず。三には食に量を知らず。四には初夜後夜に勤修し、勉勵し警覺すること能はず。五には善法を觀察し究竟すること能はず。上と相違するを當に知るべし是れを資糧に順ずる法及び能く彼に隨順する隨順法と名づくと。

（二）敎道を辯ず　又諸の聲聞是の如き資糧に順ずる法及び彼の因緣を修行し、其の中間に於て涅槃を求むる時、大師彼れが爲に五種の正道の言敎を制立したまふ。一には所聞の法の如く遍く一切に於て諸行は無常なり、諸法は無我なり、涅槃は寂靜なりと觀察するに由り、依つて且らく世間の作意を以て惑無く疑無きを得。二には卽ち住する時に於て三事に著せず、正しく尋思せず。何第か三

一には果の差別の故に、二には自性の差別の故に、三には品類の差別の故に、四には方便の差別の故なり。（一）果の差別とは、謂はく此の想を修し能く一切の欲貪、色貪及び無色貪、掉、慢、無明を遣るなり。當に知るべし此の中三種の本煩惱の斷を顯示し、及び三種の隨煩惱の斷を顯はすと。欲貪の煩惱は掉を助伴と爲し、色貪の煩惱は慢を助伴と爲し、無色貪の惑は無明を伴と爲す。復た差別あり、謂はく此の中に於て下分・上分の結盡くることを顯示す。（二）自性の差別とは、謂はく此の中に於て正に聞所成の慧を修習するに由りて說いて親近と名づけ、正に思所成の慧を修習するに由りて能く修に入るが故に說いて修習と名づけ、正に修所成の慧を修習するに由りて多修習と名づく。

　又了相作意を修習するに由るが故に親近と名づけ、唯だ加行と究竟との作意を除いて、正に諸餘の作意を修習するに由るが故に修習と名づけ、加行と究竟との作意を修習するを多修習と名づく。是れを第二の三種の差別と名づく。

又所依、所緣、作意に由り、其の次第に隨つて當に知るべし是れを名づけて乘と爲し事と爲し隨つて建立すと爲すと。又長時に串ひ修習するに由るが故に說いて純熟すと名づけ、數數ば無倒に方便を修するが故に說いて善受と及び善發と名づく。（三）品類の差別とは、謂はく是の如き無常想を修する時に速に能く一切の隨眠を永拔し、下地の一切の善法を棄捨して上地の一切の善法を攝受し、餘の一切の不淨想等の最も高廣なる性に於て能く善く住持す。遍く一切を行ずること猶ほし所取の事を觀察するが如し、即ち是の如く能取の事を觀じて彼の相を解脫し、能く無漏無常の想を得。若しは有漏想、若しは無漏想、是の如き一切は皆な涅槃に於て善く能く隨順し趣向し臨入し、皆な能く無明の大闇を對治し、一切永斷す。彼を永斷するが故に清淨鮮白なり、諸の無學の想は皆な一切の無漏〔有〕學の想の增上に由るが故に得るなり。（四）方便の差別とは、謂はく獨り空閑に處して無顚

に服行す、又(十)能く善く非時の死緣を避く。是の如き十種の聰慧の者の相は當に知るべし具さに諸の聰慧の相を攝すと。

第七目　智斷の相を解す

復次に、諸行の中に於て無我の理に依りて知る者と斷ぜる者とは當に知るべし略して三相に由つて差別すと。(一)謂はく諸行に於て能く遍く薩迦耶見を了知するも而も未だ斷ぜざる者は、彼れ諸行に於て忘念の行多分に現行して少しく不忘念なり。薩迦耶見をば已に永斷せる者は當に知るべし其の相彼と相違すと。是れを第一の差別の相と名づく。(二)又諸行に於て遍く薩迦耶見を了知すと雖も而も未だ斷ぜざる者は、諸の廣大なる可愛の事の中に於て多く喜樂を生じ、諸の下劣なる不可愛の境に於て多く憂苦を生ず。彼の二の境界現在前する時に縱逸無き者すら尙ほ自ら正念を繫守すること能はず、況んや縱逸なる者をや。彼れ爾の時に於て薩迦耶見其の心を纒繞し、彼に由りて心をして解了すること能はざらしむ。薩迦耶見をば已に永斷せる者は當に知るべし其の相彼れと相違すと。是れを第二の差別の相と名づく。(三)又諸行に於て薩迦耶見をば未だ永斷せざる者は未だ內の一切の行の中に於て現前に安立し、有情想を離るること、草木葉等の外事に於けるが如くなる能はず。薩迦耶見を已に永斷せる者は當に知るべし其の相彼と相違すと。是れを第三の差別の相と名づく。是の如く已に薩迦耶見を斷ぜるに此の三種の差別の相あり。

當に知るべし復た三種の勝利ありと。一には能く後有を感ずる一切の煩惱を永斷す。二には彼に依りて久しからずして速に能く彼の對治道を積集することを獲得す。三には旣に自らの義利を作し已つて卽ち彼の道に依りて方便勤修し現法樂住し、此に由りて極安樂住を獲得するなり。

第八目　想を解す

復次に、四の差別に由りて當に知るべし一切種の行の無常苦想を修習すと。何等を四と爲すや。

諸の愚夫の類は五種の相に由りて當に知るべし流に順つて漂溺せらると。謂はく若しは(一)此に於て漂溺し、若しは(二)此れに由りて漂溺し、若しは(三)此れに依りて漂溺し、若しは(四)此の如く漂溺し、若しは(五)漂溺する時の諸の所有る相なり。(一)此に於て漂溺すとは、謂はく善趣惡趣に於て漂溺せらるること兩岸より彼此往來して倶に漂溺せらるるが如し。(二)此に由りて漂溺すとは、謂はく愛河浸淫の性に漂溺せらるるに由る。當に知るべし此の愛に五種の相ありと。一には諸の境界に遊び下分に趣くが故に、二には微細に隨行して覺了し難きが故に、三には諸の境界に於て廻轉し難きが故に、四には乃至有頂まで一切廣大なる種種の諸行の隨逐する所なるが故に、五には不寂靜の相、身心を亂すが故なり。(三)此れに依りて漂溺すとは、謂はく色等の五種の諸行に依りて漂溺せらる、卽ち善趣惡趣の兩岸に於て五種の行の品類差別ありて數數攀緣し、流に順つて漂溺す。(四)此の如く漂溺すとは云何んが漂溺するや。謂はく諸行に於て前の所說の如き流轉等の事をば其の次第に隨つて如實に知らずして或は計して我及び我所と爲すが故なり。(五)漂溺する時に於ける所有る相とは、謂はく彼れ是の如く漂溺せらるる時に身を寶愛し長久ならしめんと欲すと雖も、自性滅するに由りて住せしむること能はざること漂溺せらるるが如し。

此れと相違するは當に知るべし卽ち是れ流に逆つて行く者なりと。又聰慧の者に十種の相あり、當に知るべし、具に諸の聰慧の相を攝すと。謂はく(一)倶生の慧を成就するが故に、又(二)方便の聞思修の所成の慧を成就するが故に、又(三)成就するが故に、動搖すること無きが故に、善思の所思、善說の所說、善作の所作なり、又(四)能く自ら己が所有の性に依り、未だ嘗て命の爲に他に依附せず、又(五)求むる所あらんに安樂ならざる無く、又(六)求むる所あらんに能く正行に依り、皆な悉く法を以てし非法を以てせず、又(七)自の宜しき所の資產の衆具をば能く正しく防守して散失せしめず、又(八)過患を觀て而して之を受用し、又(九)病緣の所有る醫藥に於て觀察し思擇して然る後

(2)復た四種の愛の所行路あり、一には意業にて希求する境界、二には身語の二業、三には獲得、四には所得の中に於て其の所欲に隨つて若しは轉じ、若しは習するなり。此は是れ業を發する愛の所行の路にして、若しは境界或は復た諸有を求む。當に知るべし彼の四種の行路に於て其の次第の如く趣る等差別すと。趣る等を說くが如く餘の所說の諸の有漏の事に於ける所有の憙足の愛の所行の路に憙樂と戲論と染著と耽湎との四處差別すること其の次第の如く、當に知るべし、亦た爾なりと。

(3)復た二種の遊愛行路の果相の差別あり、一には心の差別、二には身の差別なり。心の差別とは、復た二種あり、一には品類の差別、二には雜染の差別なり。品類の差別とは、謂はく自性に由るが故に、所依の故に、所緣の故に、助伴の故なり。雜染の差別とは、謂はく貪瞋癡等の所有る煩惱及び隨煩惱に由るなり。身の差別とは、亦た二種あり、一には種種の身の差別の故に、二には一種の身の差別の故なり。當に知るべし此の中、心の所有る雜染の差別は能く二種の身の差別の因と爲ると。彼を斷ぜんが爲めの故に諸の修行者は應に無倒なる數數の作意を以て觀行を勤修すべし。

復た四種の因の差別に由るが故に果をして差別せしむ。謂はく若しは(一)此に於て差別し、若しは(二)此に由りて差別し、若しは(三)即ち此れ差別し、若しは(四)此の如く差別す。(一)此に於て差別すとは、謂はく善趣惡趣に於ける所有の差別なり。(二)此に由りて差別すとは、謂はく貪瞋癡の染汚する所の心に由りて、彼れをして差別せしむるなり。(三)即ち此れ差別すとは、謂はく五種の行に攝受する所の身の種種なる差別なり。(四)此の如く差別すとは、謂はく諸行の流轉する雜染清淨の因緣及び清淨の體に於て如實に知らずして、憙樂等及び趣走等の種種の差別を生ずるなり。

第六目　流に順ふことを解す

復次に、諸行の無常なることを了達する能はずして薩迦耶見を所依止と爲して流に順つて行く。

(2)四種の愛の行路を明す。

(3)二種の遊愛行路を明す。

世に於て因展轉して來り、諸行相續して前際知り難く後〔際〕は窮盡すること無し。是の五相に由りて流轉す。

(三)流轉五相の所縛を明す　愚夫は、當に知るべし、復五相に由りて縛せらると。一には彼の處に於て縛す、二には彼に由つて縛す、三には正に是れ能く縛す、四には彼に依るが故に縛す、五には領受する所あるなり。彼の處に於て縛すとは、謂はく能く惡趣に往く業に由るが故に善趣の柱に於て之を繫縛し、或は能く惡趣に往く業に由るが故に惡趣の橛に於て之を繫縛するなり。又喜貪俱行の愛に由るが故に自事の柱に於て之を繫縛し、彼彼の喜樂の愛及び後有の愛に由るが故に自事の橛に於て之を繫縛す。彼に由つて縛すとは、謂はく愚夫異生無明の爲に縛せらるゝなり。正に是れ能く縛すとは、謂はく自の同類にして苦に於て厭ふこと無き、相似の法なるが故なり。彼れに依るが故に縛すとは、謂はく後の〔五〕蘊に依りて縛せらるゝが故なり。領受する所ありとは、謂はく彼の生等の衆苦を領受するなり。

第五目　憙足の行を解す

(一)喜足の事を辨ず　復次に、愚夫異生は有漏の事に於て四の憙足あり、當に知るべし多分は是れ諸の外道なりと。何等を四と爲すや。一には人身に於て憙足し、二には欲界天の身に於て憙足し、三には梵世に生ずるに於て喜足し、四には邊際の有頂に到ることに於て喜足す。愚夫は彼に於て其の次第に隨つて、若しは趣り、若しは住し、若しは坐し、若しは臥するなり。

(二)愛の行路を明す (1)復た五種の一切愚夫の愛の所行の路あり、一には後有、二には未來の所求の境界、三には將に得んとする現前の境界、四には已得の所有る境界、五には現前に受用する境界なり。當に彼に於て其の次第の如く趣る等の差別を知るべし。應に知るべし此の中趣るに二種ありと、一には後有に於てし、二には未來に求むる所の境界に於てするなり。

---

(1)五行路を明す。

死の法に同じからざるが故に器生死に望むるに當に知るべし略して五の不同分ありと。(一)謂はく器生死は共因の所生なるも種類生死は但だ不共のみに由る、是れを第一の因不同分と名づく。(二)又器生死は無始終に於て前後際斷ずるも、種類生死は無始終に於て相續し流轉して常に斷絶すること無し、是れを第二の時不同分と名づく。(三)又器生死は或は火水風に斷壞せらるゝも、種類生死は則ち是の如くならず、是れを第三の治不同分と名づく。(四)又器生死は因の永斷すること無きも、種類生死は則ち是の如くならず、是れを第四の斷不同分と名づく。又器生死は斷じて復た續くも、種類生死は斷じ已れば續くこと無し、是れを第五の續不同分と名づく。

(二)生死の五種流轉を辯ず　又生死に於て五種の相に由りて一切の愚夫は流轉して息まず、一には愛の因に由るが故に、二には愛の果に由るが故に、三には愛の自性に由るが故に、四には因展轉するに由るが故に、五には卽ち因展轉し依止して前際窮盡すること無きが故なり。(一)此の中、無明を是れを愛の因と名づけ、(二)能く善趣惡趣に往く諸業、是れを愛の果と名づく。善趣に往く業に由るが故に愛結に繫がれて愚夫自然に往くことを樂ひ、惡趣に往く業に由るが故に愛鎖に繫がれて愚夫往くことを欲せずと雖も强ひ逼めて去らしむるなり。(三)愛の自性とは、略して三種あり、一には後有の愛、二には喜貪倶行の愛、三には彼彼の喜樂の愛なり。是の如き三愛を略攝して二と爲す、一には有愛、二には境愛なり。後有の愛とは、是れを有愛と名づく。喜貪倶行の愛とは、謂はく將に現前することを得んとする境界に於ける及び已に得たるも未だ受用せざる境に於ける、並に現前して正しく受用する境に於ける所有る貪愛なり。彼彼の喜樂の愛とは、謂はく未來に希求する所の境に於ける所有る貪愛なり。當に知るべし此の中喜貪倶行する愛に由るが故に愛結に繫がると名づけ、後有の愛及び彼彼の喜樂の愛に由るが故に愛鎖に繫がると名づく。若し彼の事に於て愛結に繫がるれば名づけて馳走と爲し、若し彼の事に於て愛鎖に繫がるれば名づけて流轉と爲す、又長

等を三と爲すや。一には資產圓滿、二には自體圓滿、三には廣大殊勝なる有情の供養圓滿なり。當に知るべし復た三種の因緣ありて能く是の如き圓滿の差別を得と。謂はく施戒の、諸根を調伏して倶行し、及び欲界の慈修より得る所の果、慈を先導と爲し、慈を因處と爲し諸の有情に於て損害寂靜の行相轉ずるが故なり。

第三目　智の境界を解す

(一)智行を辯ず　復次に、當に知るべし所知の事に於て七種の如實に通達する智行ありと。一には已得の智、二には未得の智、三には無顚倒の智、四には是處の非有を非有なりと知る智、五には是處の所餘を不空なりと知る智、六には苦不淨の智、七には速に滅壞する智なり。

(二)斷愚を辯ず　又十五種の相に由りて諸行を覺了し、能く速に一切行の愚を斷滅す。何等か十五なりや。謂はく(一)水界より生ずる所なるが故に、(二)無我は我に似て顯現するが故に、(三)隨欲に任せずして造作するが故に、諸の色は猶ほし聚沫の如しと覺了す、(四)三和合して生ずる相似の法なるが故に、(五)雲・地・雨の和合する方便の如く、諸の受は喩へば(六)浮泡の若しと覺了す、所知の境に於て(七)能く顯はし(八)能く燒き(九)能く迷亂せしむる相似の法なるが故に、諸の想は陽焰に同じと覺了す、(十)薩迦耶見の根本斷ずるが故に、(十一)多品の自體は因差別するが故に、(十二)刹那の量にして後時に暫らくも停まること無き相似の法なるが故に、諸行を覺了して芭蕉柱に譬ふ、(十三)有取の識は、(十四)四識住に依りて(十五)種種なる自體を發起し隨轉する相似の法なるが故に諸識を覺了して幻事に方ぶ。此の廣き分別は前の攝異門分の如く應に知るべし。

第四目　流轉を解す

(一)二世間を舉げて以て差別を辯ず　復次に、二の世間ありて一切の行を攝す、一には有情世間、二には器世間なり。有情世間を種類生死と名づけ、器世間を器生死と名づく。種類生死は其の餘の生

りと。一には正法を習近し正審に靜慮するなり、二には善友に親事するなり、三には尸羅・根護・少欲等の法を以て其の心を熏練するなり、四には獨り空閑に處し、奢摩他、毘鉢舍那の勝正なる安樂を用つて以て翼從と爲るなり。又清淨とは、謂はく卽ち彼の清淨に依りて道を行じ、多修習するが故に有學の法をして無明の殼を破つて無學地に趣かしむ。

(二)五種の漸次を明す　又眞實究竟の解脫を得んが爲には當に知るべし略して五種の漸次ありと。一には先に資糧を集め以て依止を爲す、二には此を以て依と爲して奢摩他、毘鉢舍那を修す、三には此を以て依と爲して諦現觀涅槃の勝解を具ふ、四には此を以て依と爲して劣少なる證に於ては喜足を生ぜず、亦た安住せず、可厭の法に於て深く厭患を生ず、五には此を以て依と爲して最後の金剛喩定相應の學心を證得す。

第二目　自體を解す

復次に、五の因緣に由りて當に知るべし一切の自體の諸行は皆な悉く無常なりと。(一)謂はく一切の自體は壽量に限あり、假使ひ人ありて自ら驗を祈らんと欲し、我れ今手を以て泥團或は牛糞團を執持し、能く幾時を經んと、是の願を作し已つて隨つて彼の團を取らんに、是の人爾の時情の所欲に任せて能く執つて捨てず、乃至後に於て棄てんと欲せば卽ち棄て、持たんと欲せば卽ち持つ、受くる所の必死の身は壽の盡くる際に至るも尙ほ己が所欲を遂げ、一刹那をも延ぶること能はざるが如きには非ず、況んや久住するをや。(二)又一切の自體は因の所生なるが故に、彼の因の作なるが故に、是れ無常なるが故なり。(三)又自體廣大に興盛なれども終に磨滅に歸することありて而も得可きが故なり、謂はく色界・欲界に在る天・人・大梵・帝釋・轉輪王等なり。(四)又無倒なる阿笈摩に由るが故なり、謂はく佛世尊諸の自體の無常なる法性に於て現見し現證して宣說したまへるが故なり。(五)復た三種の諸の受欲者の圓滿の差別あり、是の因緣に由りて諸の受欲者恆常に戲論す。何

慧を智と名づけ、現在の境を照らす此の慧を見と名づく。(二)又所取を緣と爲す此の慧を智と名づけ、能取を緣と爲す此の慧を見と名づく。(三)又聞思所成の此の慧を智と名づけ、修所成の者、此の慧を見と名づく。(四)又能く煩惱を斷ずる此の慧を見と名づけ、煩惱斷じ已つて能く解脫を證する此の慧を智と名づく。(五)又自相の境を緣ずる此の慧を智と名づけ、共相の境を緣ずる此の慧を見と名づく。(六)又假の施設に由りて遍く彼彼の內外の行の中に於て或は立てて我と爲し、或は有情、天、龍、藥叉、健達縛、阿素洛、揭路茶、緊捺洛、牟呼洛伽等を立て、或は軍林及び舍山等を立つ、是の如き等の世俗の理行を以て所知の境を緣ずる此の慧を智と名づけ、若し能く自相共相を取る此の慧を見と名づく。(七)又諸法を尋求する此の慧を智と名づけ、既に尋求し已つて諸法を伺察する此の慧を見と名づく。(八)又無分別の影像を緣じて境と爲す此の慧を見と名づく。(九)又有色[一]爾焰の影像を緣と爲す此の慧を見と名づけ、無色爾焰の影像を緣と爲す此の慧を智と名づく。

[3]彼れ是の如く若しは智若しは見を所依止と爲る方便に由りて修する時、復た更に四の善巧の事を勤修す、一には觀察の事、二には捨取の事、三には出受の事、四には方便の事なり。觀察の事とは、謂はく四念住なり、四顚倒を對治せんと欲するが爲の故に如實に一切の境を遍知するが故なり。捨取の事とは、謂はく四正斷なり、不善法を斷除せんと欲するが爲の故に及び諸の善法を修集せんが爲の故なり。出受の事とは、謂はく四神足なり、四靜慮に依りて次第に始めに憂根より乃至樂を超出するが故なり。方便の事とは、謂はく諸の根・力・覺支・道支なり。當に知るべし卽ち是れ能く見修所斷の煩惱を斷ずる正方便なるが故なり。是の如く善巧の事を勤修する者は當に知るべし、四種の所依能依の義ありと。所依の義とは、謂はく觀行者正に勤めて修習するなり。能依の義とは、謂はく諸の無漏法を學することを成就せるも、而も未だ清淨ならず、餘の無明の縠に纒裹せらるゝが故なり。又彼の諸法は清淨道に由つて後方に清淨なり。此の清淨道に當に知るべし復た四種の差別あ

【一】爾焰(Jñeya)とは所緣亦は境界と譯す。
(3)四善巧を修することを明す。

故に(三)處中の行に於てすら尙ほ入ること能はず、況んや出離するを得るをや。若し現觀に隨順して正見住する時三事の中に於ける所有る我執をば皆な已に離繫せるも、猶ほ隨眠のために繫縛せらる。諸行の中の若しは集若くは沒に於て能く善知するが故に二邊を遠離して處中の行に入り、未だ出離せずと雖も能く出離するに堪ふ。若し已に聖諦現觀を引發すれば正見に由るが故に三事の中に於て我の執著無く、隨眠を遠離し、處中の行に於て先づ趣入し已つて、後此れに由るが故に方に出離することを得、當に知るべし是の如く三見轉ずる時此の差別ありと。

第六項　別嗢拕南第四を以て速通等の十門を解す

復た次に、嗢拕南に曰く、

『(一)速通と(二)自體と(三)智の境界と、(四)流轉と(五)喜足の行と(六)流に順ふと、(七)知斷の相と(八)想と(九)達糧を立つるとにして(十)師の所作等の品をば後に廣ず。』

第一目　速通を解す

(一)三法を明す[1]未得の眞實究竟の解脫を證得せんと欲するが爲めに略して三法ありて能く速疾の通慧を獲得せしむ、一には智力、二には不放逸力、三には數習力なり。(一)智力とは、謂はく若し彼に住して能く無間に諸漏を永盡するに堪ふるは、當に知るべし卽ち是れ有學の智見なりと。(二)不放逸力とは、謂はく已に是の如き智見を獲得し、卽ち是の如き所得の道に依り、方便勤修して心に於て惡不善の法を防護するなり。(三)數習力とは、謂はく卽ち此の方便勤修を常に轉ずるに依りて終に、我れ今日に於て諸漏を盡し心解脫するを得と爲せんや、來日に於てすと爲んや、後日に於てすと爲んやとの此の邪思に由りて心をして厭倦せしむることを謂はず、厭倦を無くし已つて便ち怯畏無く、怯畏を無くし已つて加行を捨てず、能く諸漏を盡すなり。

[2]問ふ、智と見と何の差別なりや。答ふ、(一)若し過去及び未來を照らし現見の境には非ざる此の

(1)三力速通を得しむることを明す。

(2)智見の差別を明す。

て其の心退還す。

(三)能治の行を解す　復次に、是の如きの驚恐を斷ぜんが爲に二種の法ありて多の所作あり。一には諸の有智の同梵行の所に於て如實に自ら顯はす、二には善法の欲に因り解了心及び調柔心を發す。(一) 又是の如き解了心を發す者は正法を聽聞して三種の相に由りて歡喜を發生す。一には補特伽羅の增上に由るが故に、二には法の增上に由るが故に、三には自の增上に由るが故なり。補特伽羅の增上とは、謂はく深く讃仰す可く大威力を具せる端嚴なる大師と及び稱揚せらるゝ善說法者とを親見するに由る。法の增上とは、謂はく所說の法の能く煩惱業苦を出離せしめ、及び最上の深義を信解せしむるなり。自の增上とは、謂はく力能ありて、所說の法に於て能く隨つて覺悟するなり。(二) 又是の如き調柔心を發す者は、謂はく三見あり、一には若しは彼に依りて轉じ、二には若しは彼に由りて遍知し、三には若しは應に引發する所なり。彼に依りて轉ずとは、謂はく諸諦に於て未だ現觀を得ざれば現觀を得んが爲に彼の勝解と倶行し極めて善く串習せる正見に依りて轉ずるなり。彼に由りて遍知すとは、謂はく現觀の正見に隨順するに依りて三事の我執、薩迦耶見及び彼の隨眠斷常の兩見の依止する所の性並に所得の果に於て能く遍く了知す。三事と言ふは、一には若しは所取、二には若しは能取、三には若しは是の如く取るなり。此れ何の所取なりや。謂はく五取蘊なり。誰れか能取なりや、謂はく四取なり。云何んが而も取るや、謂はく四識住なり、其の次第に隨つて前の如く應に知るべし、二取心の所依處と爲ると。又卽ち彼の所有る諸纏の非理なる所引、彼の境界を緣ずる薩迦耶見の生起する執著及び彼の隨眠に於て前の如く應に知るべし。云何んが應に引發する所なりや、謂はく彼に住して能く薩迦耶見の三事の執著及び彼の隨眠を永斷し、聖諦智に於てし、他緣を藉らざるなり。又若しは彼の應に遍知する所に依りて、正見轉ずる時、其の三處に於て我の執著及び有の隨眠を起し、諸行の中の若しは(一)集若しは(二)沒に於て善知せざるが

第十目　法網等の品を後に廢することを解す

(一)四種の法嗢拕南を辯ず　復次に、三解脱門の増上力に由るが故に當に知るべし、四種の法嗢拕南を建立すと。謂はく空解脱門、無願解脱門、無相解脱門なり。一切行は無常なり一切行は苦なりとは、無願解脱門に依りて建立する第一第二の法嗢拕南なり。一切法は無我なりとは、空解脱門に依りて建立する第三の法嗢拕南なり。涅槃は寂靜なりとは、無相解脱門に依りて建立する第四の法嗢拕南なり。

(二)所治所遣の退還の心を明す　復次に、當に知るべし二種の法嗢柁南増上行の欲ありと。一には勝解と倶行する欲、二には意樂と倶行する欲なり。(一)勝解と倶行する欲とは、四種の法嗢拕南に由るが故に諸行の中に於て樂欲を生ずるなり。(二)又諸行の寂靜に於て樂欲を生ずる者は意樂に由るが故に獨り空閑に處して作意し思惟するなり。四種の相に由りて彼の寂靜に於て其の心退還す。一には中に於て勝利を見るも趣入せざるに由るが故に、二には彼れを信ぜずして不清淨の信を得るが故に、三には彼の所縁に於て喜樂を生ぜず安住せざるが故に、四には彼に於て不樂の勝解を起すが故なり。彼と相違するは當に知るべし卽ち是れ意樂と倶行する欲なりと。

又二縁に由りて、無我の勝解の欲に依止するは彼の涅槃に於て驚恐に由るが故に其の心退還す、一には此の欲に於て善く串習せず、未だ究竟に到らざるが故に、二には作意する時に於て彼の因縁に由りて念忘失するが故なり。又此の忍欲をば未だ串習せざるが故に爾の時に當りて諸行の中に於て唯だ行のみを了する智にして其の心愚昧にして數數我を思惟す、我は爾の時當に何れの所にか在るべきと、我を尋求する行微細に倶行し障礙して轉ず。此の縁に由るが故に彼れ是の思を作さく、我は當に有らざるべしと。是の念を作さず、唯だ諸行のみあり、當來は有ならずと。彼れ是の如く隨逐する身見を依止と爲すに由るが故に變異隨轉する識を發生し、驚恐に由るが故に彼の寂滅に於

淨なる圓鏡の面上に質像を依と爲して影像を發生し、影像を依と爲して自の依止に於て劣・中・勝の想を發生するが如し。是の如く邪分別に由るが故に自の依止を緣ずる我見を緣と爲して他の依止を緣ずる我見を發生すること、質像に依りて影像を發生するが如し。又此れを緣と爲して我慢を發生し、他に方べて己は或は勝、或は等、或は劣なりと謂ふ。(二)倶生の我見を緣と爲して我慢を生ずとは、當に知るべし譬喩前と差別す、明眼の人淨水の器に臨み、自ら眼耳を觀るが如しと。(三、四)所餘は前の如く應に其の相を知るべし。

此の一切種の薩迦耶見をば唯だ善說の法と毘奈耶とに依りてのみ方に能く永斷す、餘の邪敎には非ず。是の如く如來と及び衆の共に知る同梵行者と、或は諸弟子の同梵行者とに大恩德あり。唯だ是の如き一因緣に由るが故に大師或は滅度の後の同梵行者に於ける眞實の報恩と名づく。又第二に由る、謂はく若し能く卽ち是の如き差別の句義に依りて利益せんが爲の故に正行を勤修するあり、是の如きを亦た隨分の報恩と名づく、彼の希望する所未だ滿足せざるが故なり。

第九目　三相の行を解す

復次に、三種の相に由りて諸行滅するが故に、說いて無餘依涅槃界と名づく、一には先に生起する所の諸行滅するが故に、二には自性滅壞し諸行滅するが故に、三には一切の煩惱の永に離繫するが故なり。(一)先に生起する所の諸行滅すとは、謂はく先世に於ける能く後有を感ずる諸の業煩惱の造作する所、及び先願の思求する所に由りて今生起する所との諸行の永滅するなり。(二)自性滅壞し諸行滅すとは、謂はく彼の生じ已つて性に任せて滅壞し究竟して住するに非ざる諸行永滅するなり。(三)一切煩惱の永に離繫すとは、謂はく諸の煩惱を餘無く斷滅し、今滅するに由るが故に後更に生ぜず。是の故に此の三相に由りて諸行滅するが故に說いて寂滅と名づく、永く相無きには非ず、其の相異なるが故なり、若し永く相無くんば施設して說いて寂滅と名づく可らず。

に於て斷じ能く作證するが故に當に知るべし是れを未だ證せざるを證せんが爲なりと名づくと。
(四)若し已に阿羅漢果を證得せば更に未だ得ざるを得んが爲め乃至未だ證せざるを證せんが爲の故に正勤修習すること無く但だ現法樂住の爲めに正勤修習す。

(二)三精進の想を明す　又自義に依りて三の勝進の想あり、謂はく諸行の中に於ける厭背の想と過患の想と實義の想となり。(一)厭背の想とは、復た四行あり、謂はく諸行に於て(1)病の如し(2)癰の如し(3)箭の如し(4)惱害すと思惟するなり。病の如しとは、謂はく一あるが如し、界錯亂して生ずる所の病苦に因りて厭背の想を修するなり。癰の如しとは、謂はく一あるが如し、先業より生ずる所の癰苦に因りて厭背の想を修するなり。箭の如しとは、謂はく一あるが如し、他の怨箭の中る所の苦に因りて厭背の想を修するなり。惱害すとは、謂はく親財等の匱乏の中に於て自ら邪計して生ずる所の諸苦に因りて厭背想を修するなり、是の如きを名づけて觀行を修する者諸行の中に於て厭背の想を修すと爲す。(二)過患の想とは、復た二行あり、謂はく諸行に於て無常を思惟すると、及び苦を思惟するとなり。(三)實義の想とは、亦た二行あり、謂はく諸行に於て空性と及び無我性とを思惟するなり。此の中、先に過患の想と及び實義の想とに於て正に修習し已つて然る後に方に能く厭背の想に住す。當に知るべし此の中に先に其の果を說き、後に其の因を說くと。

第八目　見の差別を解す

復次に、四種の我見あり、所依止と爲りて能く我慢を生ず。一には有分別の我見、謂はく諸の外道の起す所なり。二には俱生の我見、謂はく下禽獸等に至るまで亦た能く生起す。三には自の依止を緣ずる我見、謂はく各別の內身に於て起す所なり。四には他の依止を緣ずる我見、謂はく他身に於て起す所なり。(一)分別の我見を所依止と爲して我慢を生ずとは、謂はく此の見に由り自と他との身を觀じて實我ありと計し、此の二種の我見を依と爲すに由りて我慢を發生するなり。譬へば淸

づけて染と爲し、亦たは名づけて渇と爲す。(2)瞋の異名は亦たは名づけて恚と爲し、亦たは名づけて憎と爲し、亦たは名づけて瞋と爲し、亦たは名づけて忿と爲し、亦たは名づけて損と爲し、亦たは不忍と名づけ、亦たは違戾と名づけ、亦たは暴惡と名づけ、亦たは蛆螫と名づけ、亦たは拒對と名づけ、亦たは慘毒と名づけ、亦たは憤發と名づけ、亦たは怒憾と名づけ、亦たは懷感住と名づけ、亦たは生欻勃と名づく。(3)癡の異名は亦たは無智と名づけ、亦たは無見と名づけ、亦たは非現觀と名づけ、亦たは惛昧と名づけ、亦たは愚癡と名づけ、亦たは無明と名づけ、亦たは黑闇と名づく。是の如き等の名は當に知るべし前の攝異門分に多分已に辨ぜるが如しと。(4)喜と貪との差別をば我れ今當に說くべし、依止の受を緣じて生ずる所の欣樂を說いて名づけて喜と爲し、受を生ずる境を緣じて生ずる所の染著を說いて名づけて貪と爲す。又將得の境に於て生ずるを喜と名づけ、若し已得の境に於て生ずるを貪と名づく。又已得に於て將受用に臨むを喜と名づけ、即ち此の事に於て正受用する時を貪と名づく。又能く境界を得る方便に於けるを喜と名づけ、即ち境界に於けるを貪と名づく。又後有に於けるを喜と名づけ、現の境界に於けるを貪と名づく。又愛する所の他の有情類の榮利に於けるを喜と名づけ、自ら得る所の榮利に於けるを貪と名づく。

第七目　勝進を解す

(一)四精進を明す　復次に、諸行の中に於て如理に修する者に四の勝進あり、謂はく勝進の想に略して三種あり、一には未だ得ざるを得んが爲め、二には未だ會せざるに會せんが爲め、三には未だ證せざるを證せんが爲なり。若し現法樂住を獲得せんが爲なるを第四の精進と名づく。(一)最初に能く先に未だ得ざりし所の預流果を得るが故に當に知るべし是れを未だ得ざるを得んが爲なりと名づくと。(二)即ち此れを依と爲して復た能く上の學果に契會するが故に當に知るべし是れを未だ會せざるに會せんが爲なりと名づくと。(三)即ち此れを依と爲して復た能く阿羅漢果を證得し、諸惑

(2)瞋の異名。

(3)癡の異名。

(4)喜と貪との差別。

若しは色集し、若しは受等集し、若しは識集す。(二)即ち此の三種の因緣滅するが故に三種の行滅す、是れを諸行還滅の智と名づく。(三)雜染因緣の智、(四)淸淨因緣の智及び(五)淸淨智とは、謂はく愛味と過患と出離とに於て前の如く應に知るべし。(六―九)四聖諦の中の苦等の四智は前に聖諦の道理を分別せるが如く應に其の相を知るべし。異生の位に於て前の五智を修して能く速に後の四聖諦の智を證し、彼を證するに由るが故に能く諸行に於て如實に了知す。又若し前の諸智に於て闕くることあらば必定して諦の道理を以て諸行を遍知すること能はず、要らず當に證得して方に能く遍知すべし。若し諦理に於て行を遍知する智に闕くる所あらば必定して上の修道に於て對治力を以て諸の煩惱を斷じ、一切の行を超ゆること能はず、此れと相違すれば乃ち能く超越す、是の故に說いて九種の智ありて能く諸行に於て遍知し超越すと言ふ。

第六目　智癡住を解す

(一)無癡住　復次に、觀行を修する者は三處に由るが故に諸行の中に於て愚癡無くして住す。何等を三と爲すや。一には過去の諸行に於て如實に是れ無常の性なりと了知す。二には現在の諸行に於て如實に是れ滅法の性なりと了知す。三には未來の諸行に於て如實に生滅法の性なりと了知す。彼れ是の如きに由り三世の行に於て愚癡あること無く、不染汚心安樂にし住して明の數に墮在す。

(二)有癡住　此れと相違するは當に知るべし卽ち是れ愚癡ありて住し無明の數に墮すと。

復た三種の煩惱の異名あり、多分說いて煩惱品の中に在り。一には貪の異名、二には瞋の異名、三には癡の異名なり。[1]貪の異名とは亦たは名づけて喜と爲し、亦たは名づけて貪と爲し、亦たは名づけて顧と爲し、亦たは名づけて欣と爲し、亦たは名づけて欲と爲し、亦たは名づけて昵と爲し、亦たは名づけて樂と爲し、亦たは名づけて藏と爲し、亦たは名づけて護と爲し、亦たは名づけて著と爲し、亦たは名づけて希と爲し、亦たは名づけて耽と爲し、亦たは名づけて愛と爲し、亦たは名

(1)貪の異名。

復次に、二種の相に由りて當に聖者の慧眼清淨なることを知るべし、謂はく遠塵と及び離垢とに由るが故なり。(一)見所斷の諸の煩惱の纒に離繫を得るに由るが故に名づけて遠塵と爲し、(二)彼の隨眠に離繫を得るに由るが故に說いて離垢と名づく。又現觀する時麁なる我慢隨入し、作意し、間・無間に轉ずるあり、若し遍く所取能取の所緣平等なりと了知せば彼れ卽ち斷滅す、彼れ斷滅するが故に說いて遠塵と名づけ、一切の見道所斷の煩惱隨眠斷ずるが故に說いて離垢と名づく。

第四目　勝利を解す

復次に、遠塵離垢し、諸法の中に於て法眼を得る時、當に知るべし卽ち十種の勝利を得と。何等を十と爲すや。一には四聖諦に於て已に善く見るが故に說いて見法と名づく。二には隨つて一種の沙門果を獲るが故に說いて得法と名づく。三には已が所證に於て能く自ら我れ今已に所有る那落迦・傍生・餓鬼を盡し、我れ預流を證す乃至廣說と了知す、是の如きに由るが故に說いて知法と名づく。四には四證淨を得、佛法僧に於て如實に知るが故に遍堅法と名づく。五には自の所證に於て惑無し。六には他の所證に於て疑無し。七には聖諦と相應する敎を宣說する時に他緣に藉らず。八には他面を觀ぜず他口を看ず、此の正しき法と毘奈耶との中に於て一切の他論も轉ずること能はざる所なり。九には一切の所證の解を記別する時、都べて畏るゝ所無し。十には二の因緣に由りて聖敎に隨入す、謂はく正世俗と及び第一義との故なり。

第五目　九智を解す

復次に、九種の智あり、能く諸行に於て遍知し超越す、謂はく(一)諸行流轉の智、(二)諸行還滅の智、(三)雜染因緣の智、(四)清淨因緣の智、(五)清淨智及び、(六)苦智、(七)集智、(八)滅智、(九)道智なり。此の中に(一)諸行流轉の智とは、略して三種の因緣の集に由るが故に、一切行集の所有る正智なり。謂はく(1)熏集の故に、(2)觸集の故に、(3)名色集の故に、其の所應に隨つて

卷の第八十六

攝事分中契經事行擇攝第一の二

第五項　別嗢拕南第三を以て想行等の十門を解す

復次に、嗢拕南に曰はく、

『(一)想行と(二)愚の相と(三)眼と(四)勝利と、(五)九智と(六)無癡と(七)勝進と、(八)我見の差別と(九)三相の行とにして(十)法總等の品の三をば後に廣ず。』

第一目　想行を解す

諸行の中に於て無常想を修するの行に五種あり、謂はく無常性と無恒性と非久住性と不可保性と變壞法性とに由るが故なり。此の中(一)刹那刹那に壞するが故に無常なり、(二)自體有限の住壽に繫屬するが故に無恒なり、(三)外事初後決定して住すること無きが故に非久住なり、(四)壽量未だ滿たざるに容緣に壞せられて非時にして死するが故に不可保なり、(五)乃至爾所の時に住し、其の中間に於て定んで安樂ならざるが故に變壞の法なり。

第二目　愚の想を解す

復次に、愚夫に略して三種の愚夫の相あり。何等を三と爲すや。謂はく(一)諸の愚夫は一切の行に於て上の所說の如き五の無常性をば思惟すること能はず、非眞實なる勝劣性の中に於て勝劣を分別し自他を稱量して、己を謂つて勝と爲す、是れを第一の愚夫の相と名づく。己れ勝なりと謂ふが如く(二)等と謂ひ(三)劣と謂ふも、廣說亦た爾なり。此と相違して當に知るべし、智者に亦た三種の智者の相ありと。

第三目　眼を解す

らんことを願ふ。

第十一目　三圓滿を解す

復次に、善說の法と毘奈耶との中に於て三の圓滿あり。何等を三と爲すや。一には行圓滿、二には果圓滿、三には師圓滿なり。(一)行圓滿とは、謂はく斷と無欲と滅界とを觸證せんが爲の故に正法を聽聞し、他の爲に演說し、自ら正しく修行し、法隨法行す、是れを行圓滿と名づく。(二)果圓滿とは、謂はく卽ち此の法隨法行の增上力に由るが故に心善解脫し、又能く現法涅槃を證得す、是れを果圓滿と名づく。(三)師圓滿とは、謂はく一切の梵行の法を引發するは、皆な世尊を用て根本と爲すが故に、皆な世尊の法眼を轉ずるに由るが故に、皆な世尊を以て所依と爲すが故なり。如來の出世に由りて彼の敎の知るべきあるが故に世尊を說いて彼の根本と爲す。佛出世し已つて彼彼の所化の有情を觀待して正法眼を說きたまひ、師及び弟子展轉して傳來す、故に世尊は正法眼を轉ずと說く。法眼を轉じ已つて若し中に於て諸の疑惑を生ずることあらば、唯世尊に依りてのみ乃ち能く決了す、故に世尊を說いて所依止と爲す。

又說法の師に略して二種あり、一には敎に由る、二には證に由る。斯れは他より正法を聞き已つて宣說するに由るが故に、學道無學道を證し已つて宣說するに依るが故なり。

瑜伽師地論卷第八十五

而も自ら我れ已に能く見たりと稱せず、猶ほ未だ盡無生智を獲得せざるが故なり。無學有情衆は一切已に斷じ、諸行の中に於て而も自ら稱して我れ如實に見たりと言ふ。

第九目　淨說句を解す

復次に、八種の清淨なる說句あり。何等を八と爲すや。謂はく見、慢を超過するに由るが故に二種は超過せる意の清淨なる說句と名づけ、彼の因相を斷ずるに由るが故に相を除ける清淨なる說句と名づけ、彼の執著を斷ずるに由るが故に寂靜の清淨なる說句と名づけ、彼の隨眠を斷ずるに由るが故に善く解脫の清淨なる說句と名づく。

復次に、有學に二の清淨なる說句あり、謂はく後有の一切の行の中に於て現行せざる道理に由りて(一)已に貪愛を割き及び(二)三結を轉ずと名づく。無學に二の清淨なる說句あり、謂はく(一)止慢を現觀するが故に、及び(二)一切の苦本の貪愛隨眠をば永く拔除するが故に已に苦邊を作すと名づく。是の如き一切を總收して一と爲し、合して八種の清淨なる說句あり。

第十目　遠離の四具を解す

復次に、四支に由るが故に遠離を具足するを善く具足すと名づく。何等を四と爲すや。一には第二無くして住す、二には邊際の臥具に處す、三には其の身遠離す、四には其の心遠離す。謂はく居家の境界に於て生ずる所の諸相の尋思、貪欲、瞋恚をば悉く皆な遠離し、不放逸に依りて其の心を防守するなり。又五相に由りて發勤精進して速に通慧を證す、謂はく(一)勢力ある者は被甲精進に由るが故に、(二)精進ある者は加行精進に由るが故に、(三)勇捍ある者は廣大なる法の中に於て無怯劣精進に由るが故に、(四)堅猛ある者は寒熱蚊虻等の動かすこと能はざる所の精進に由るが故に、(五)善軛を捨てざることある者は下劣に於て喜足無き精進に由るが故なり。又惛沈・睡眠・掉擧・惡作其の次第の如き奢摩他毘舍那品の隨煩惱を斷ぜんが爲めの故に正しき止觀に失壞あること無か

(一)見慢を明す　何等を二と爲すや。謂はく見雜染、及び慢雜染なり。此の二に當に知るべし五種の差別ありと、謂はく行に由るが故に、纒の故に、隨眠の故なり。何等を五と爲すや。一には我を計し、二には我所を計し、三には我慢、四には執著、五には隨眠なり。當に知るべし此の中、我と我所と我慢との三種を計して所依止と爲し、所緣の事に於て固く執し、唯だ此のみ諦實にして餘は皆な愚妄なりと取著すと。當に知るべし此の中に纒の道理に由りて說いて執著と名づけ、卽ち彼の種子隨縛し相續するを說いて隨眠と名づくと。又有識身及び外事等は當に知るべし是れ彼の五種の因相なり、謂はく我を計する因相乃至隨眠の因相なりと。卽ち此の因相に復た二種あり、一には所緣の因相、二には因緣の因相なり。(一)我を計すると(二)我慢とは有識身を以て所緣の因相と爲し、(三)我所を計するは通じて二種を以て所緣の因相と爲し、(四)彼の執著は不正なる法を聞きて不如理作意すると及び彼の隨眠とを以て因緣の因相と爲し、(五)彼の隨眠は如實に諸行を了知せざると煩惱諸の纒をば數數串習するとを以て因緣の因相と爲す。

(二)四人に約して雜染を安立す　復次に、四種の有情衆あり、當に知るべし中に於て雜染を安立すと。何等を四と爲すや。一には外道有情衆、二には此法の異生有情衆、三には有學有情衆、四には無學有情衆なり。(一)外道有情衆の中には具に一切あり、(二)此法の異生有情衆の中には四種得可く、及び彼の因相並に執著の因相の一分あり而も執著は得可からず。(三)有學有情衆の中には我、我所の二種を計す、及び彼の因相と執著と隨眠とは皆な得可からず、及び我慢と執著と並に彼の因相とは然もあり、我慢と隨眠とは得可べし。(四)無學有情衆の中には一切皆な得可からず。

又外道有情衆の凡そ所有る行は彼れを斷ぜんが爲にせず、此法異生有情衆の修する所の諸行は正しく彼を斷ぜんが爲にして、而も未だ斷ずること能はず、未だ見ること如實ならざるが故なり。有學有情衆は已に一分を斷じ、餘分を斷ぜんが爲に、復た正行を修し、見ること如實なりと雖も、

三には微細なるに由るが故なり。

復た五相に由りて後有の縛の爲に繫縛せらるとは、當に知るべし五の我慢の現行するありと。謂はく(一)所依に由るが故に、(二)所緣の故に、(三)助伴の故に、(四)自性の故に、(五)因果の故なり。當に知るべし此の中薩迦耶見を以て依止と爲して我を計す、未來に或は當に是れ有なるべし、或は當に非有なるべしと、有と非有とを以て所緣の境と爲す。此の中、非有を所緣の境と爲すに唯だ一種あり、有を所緣と爲すに乃ち五種あり。謂はく(1)我は當に有色なるべし(2)我は當に無色なるべし(3)我は當に有想なるべし(4)我は當に無想なるべし(5)我は當に非有想非無想なるべしと。是の如き一切を總收して一と爲し、合して六種の所緣の境界あり。助伴と言ふは、謂はく心を動亂するなり。自性と言ふは、恃擧する行相を其の自相と爲し、戲論する自性を其の共相と爲す、一切の煩惱は戲論の性なるが故なり。因果の性とは、謂はく能く生を感ずるを因性と爲すが故に、業行を造作し愛し隨逐するが故なり。

第七目　解脫を解す

復次に、三種の相に由りて當に知るべし心善解脫すと。謂はく(一)諸行に於て遍く了知するが故に、(二)彼の相應の諸の煩惱の斷に於て作證を得るが故に、(三)煩惱斷じ已つて一切處に於て愛を離れて住するが故なり。又此の中に於て四種の行に由りて諸行の中に於て能く遍く如所有性を了知す、謂はく無常等なり。十一の行に由りて諸行の中に於て能く遍く盡所有性を了知す、謂はく過去未來等なり、前に廣說せるが如し。

第八目　見慢の雜染を解す

復次に、二種五種の雜染并に五種の因相あり、是の如き二種は諸の有學の者は應に知るべく應に斷ずべく、諸の無學の者は已に知り已に斷ぜり。

復次に、八種の相に由りて、彼の諸行の生起に於て世俗に言説する士夫の數の中に入ることを得。謂はく(一)是の如きの名、(二)是の如きの種類、(三)是の如きの族姓、(四)是の如きの飲食、(五)是の如きの若しは苦若しは樂を領受し、(六)是の如きの長壽、(七)是の如きの久住、(八)是の如きの所有る壽量の邊際なり。是の如き諸相は菩薩地の宿住念の中に於て、當に知るべし、前に已に廣く分別せるが如しと。

第五目　三遍智及び斷を解す

復次に、三種の相に由りて諸行の中に於て應に無我の遍智及び斷を知るべし。何等を三と爲すや。一には內遍智、二には外遍智、三には內外遍智なり。斷も亦た是の如く、其の所應に隨ふ、所謂る諸行都べて我あること無く、我所あること無く、亦た餘の互に相繋屬することあること無し、當に知るべし是の如く內と外と俱との遍智及び斷に於て此の中に法住智決定を得るに由り、遍智此を數習すが故に彼の相應する所有る隨眠を捨て畢竟斷を得と。當に知るべし此の中、諸行に於て未だ遍智を得ざる者に遍智を得しめんが爲の故に如來大師は正しき法要を說きたまへりと。若し諸行に於て已に遍智を得るも、而も未だ永斷せざる者には唯だ先に得たる所の如き遍智に於て數習して永斷することを得しめんが爲の故に復た勸導を加へたまへり。

第六目　縛を解す

復次に、生死の中に於て流轉する者に三種の縛あり、此の縛に由るが故に心解脫し難し、當に知るべし此れ唯だ善說の法と律とのみ能く解脫せしむ、惡說に由るには非ずと。何等を三と爲すや、一には其の愛結を除ける餘結に繫せらるる所の諸の有漏の事なり、二には愛結に染せらるる諸の有漏の事なり、三には能く當來の後有の諸行を生ずるなり。此の三縛に於て、三の因緣に由りて心解脫し難し、謂はく初は種種に由るが故に、第二には堅牢なるに由るが故に、愛樂す可きが故に、第

過去世に於て調せず伏せず、隨眠の行、展轉する隨眠、世俗に說いて言ふ士夫の隨眠ありて、而も命終し已らんに現在世に於て結生相續し、隨眠の行に攝せられたる自體あつて而も生起することを得、現在世に於て乃至壽盡き亦復た是の如く調せず伏せず廣說乃至、而も命終し已つて未來の自體復た生起することを得。又能く隨眠ある行を攝取し、彼れを攝取して以て因と爲すに由るが故に便ち生等の衆苦の爲に縛せられ亦た貪等の大縛の爲に縛せらるるなり。(四)調伏死とは、謂はく現在世に於て已に調し已に伏し隨眠あること無く、命終し已つて未來の自體復た生起せず、亦た隨眠ある行を攝取せず、彼を攝取して以て因と爲さざるが故に生等の衆苦の差別を解脫し、亦復た貪等の大縛を解脫するなり。(五)同分死とは、謂はく過去にて調せず伏せずして曾て身命を捨てしが如く、現在世に於ても亦復た是の如くして身命を捨つるなり、當に知るべし此の如きを同分死と名づけ、相似死と名づけ、隨順死と名づくと。(六)若し過去に於ては調せず伏せずして身命を捨て已るも、現在世に於て已に調し已に伏して身命を捨つるは、當に知るべし此を不同分死、不相似死、不隨順死と名づくと。若し現在に於て隨眠の行、展轉する隨眠ありて而も命終する時に、過去の如く死ぬるを同分死及び隨順死と名づけ、過去の如くならずして而も命終する時は當に結生する所の未來の相續の同分の諸行を攝取する能はず。

又此の六種の死に當に知るべし二種の相ありと、謂はく諸行流轉する過患の相、及び諸行還滅する勝利の相なり。若し過去に於て及び現在に於て調せず伏せず同分にして死し、復た未來に於て生等の苦を取り、及び貪等の煩惱の爲めに縛せらるる者をば諸行流轉する過患の相と名づく。若し現在に於て已に調し已に伏し、不同分にして死し、又未來に於て衆苦を取らず、一切の煩惱の縛を解脫する者をば諸行還滅する勝利の相と名づく。

第四目　數に墮することを解す

三の因緣に由りて諸の聲聞ありて大師の所に往きて略教授を請ふ。何等を三と爲すや。(一)謂はく唯だ多聞のみを究竟と爲す者、諸の餘行に於て而も厭背する者、是の如き解を生ず、但だ略して法を聞くに自義を得るに足れり、何ぞ多聞に藉りて以て究竟と爲んや、要ず正行を修するを貞實と爲すが故に、又多聞を棄捨して欲を究竟するが故に、(二)又入る所の門に所作多きを怖畏することある者は、善方便を爲して入ることを得るが故に、或は即ち彼れ已に多法に於いて善く聽き善く思ふことあつて、彼れ是の念を作さく「我れ多法に於て已に善く聽思せり、若し我れ今已に聽思して得たる所の諸法を盡して以て依止と爲さんに、住心の境及び解脫の境に於ける欲繫の心は、將に我れをして散亂を作意せしめざらんとす、若し爾らば住心すら尙ほ得ること能はず、何に況んや解脫をやと。(三)又是の如き所聞所思の一切の法の中に於て決定することを得ず、當に何れの者に依りて速に通慧を證すべく、當に何れの者に依りて速に出離を得べく、當に何れの境に緣りて住心を得べく、當に何れの境を緣じて解脫を得べきやと。彼れ既に是の如く自ら決定せず、若しは大師或は業の識る所の如來の弟子に於いて、現前に見已つて便即ち往詣して略教授を請ふなり。

第二目　敎果を解す

復次に、當に知るべし正敎授に四種の自義果得ありと。謂はく此れが爲めに出家し、及び此の如く出家す、即ち形相具足し、事業具足し、意樂具足し、處捨取具足す、此に依るが故に無上得、現法得、自然得、內證得を得るなり。

第三目　終を解す

復次に、六種の死あり、謂はく(一)過去死(二)現在死(三)不調伏死(四)調伏死(五)同分死(六)不同分死なり。(一)過去死とは、謂はく過去の諸行沒し、乃至命根滅するが故に死するなり。(二)現在死とは、謂はく現在の諸行沒し、乃至命根滅するが故に死するなり。(三)不調伏死とは、謂はく

して防守せしめ、或は設し彼れ幽縶の處より逃れて遠所に至るものあらば還た執へて將ち來り、或は尙ほ彼れをして轉動すらせしめざるあるあり、況んや逃避するを得るをや。或は廣大微妙なる種種可愛の所繫の妙欲を安置して幽縶の處に在らしめ、彼れをして自然に心に樂著を生じ、逃避せんと欲すること無からしむるあり。是の如く彼の人(一)一切種の縛の爲に縛せられ、(二)善方便の守の爲に守られ、(三)最も堅牢なる繫の爲に繫せられ、復た(四)怨家の欲に隨つて害を加ふるが爲に、所謂る打拍し或は復た觧割し、或は杖捶を加へ、或は總じて命を斷ず。若し能く是の四縛を脫する者あらば乃ち名づけて一切の縛より觧脫を得たりと爲すことを得。是の如く彼の三處の世間に於て愚癡の有情は種種なる縛の爲に繫縛せらるとは當に知るべし卽ち貪瞋癡の縛に譬ふと。其の守禁する者とは不正尋思及び未だ煩惱隨眠を永拔せざるに譬ふ、不正尋思の故に尙ほ動ぜしめず、況んや離欲して遠く逃避することを得るをや。煩惱隨眠をば未だ永拔せざるが故に、世間道の方便にて逃避して遠く有頂に至ると雖も後執へて將いて還るべし、可愛なる妙欲をば之を九結に譬ふ、彼の結に由るが故に生死に於て自然に樂著し、自の繫縛に於て觧脫を欲せざらしむ。彼れ既に是の如く種種なる縛の爲に極めて密縛せられ、善方便の縛に密縛せられ、最も堅牢の縛に密縛せられ、復た四の魔怨は其の所欲に隨つて生等の苦を以て害を之に加ふ。若し能く彼の四種の繫縛より善く觧脫する者は乃ち名づけて一切の縛より觧脫を得たりと爲すべし。

第四項　別嗢拕南第二を以て略教授等の十一門を觧す

復次に、嗢拕南に曰はく、

『(一)略教と(二)教果と(三)終と(四)數に墮すると、(五)三の遍智斷と(六)縛と(七)觧脫と、(八)見慢の雜染と(九)淨說句と、(十)遠離の四具と(十一)三の圓滿となり。』

第一目　略教を釋す

り、是の如く二種の相に由りて如所有性の所有る愛味を觀察す。又諸行は是れ無常、苦、變壞の法なりと觀察するを、是れを彼に於ける過患と名づけ、又此の患過は極めて廣大なりと爲すなり、是の如く二種の相に由りて如所有性の所有る過患を觀察す。又復た諸行の中に於ける欲貪の滅、欲貪の斷、欲貪の出を觀察するを、是れを彼れに於ける出離と名づけ、又此の出離は寂靜なり無上なり畢竟安隱なりとす、是の如く二種の相に由りて如所有性の所謂る出離を觀察す。(二)又即ち此の愛味、即ち此の過患、即ち此の出離をば諸行の中に於ける若しは過去若しは未來若しは現在、若しは內若しは外、若しは麁若しは細、若しは劣若しは勝、若しは遠若しは近をば審諦に觀察するを當に知るべし是を彼れに於て如所有性、所謂る愛味と過患と出離とを觀察すと名づく。

(三)料簡して重ねて辯す　(1)又是の如き三事の體性は是れ有なりと了知せんが爲に應に三種の有情衆の別を知るべし、一には諸欲に於て染著する衆、二には諸欲に於て遠離する衆、三には諸欲に於て離繫する衆なり。此の三處に於て復た三種の世間の愚癡あり、謂はく若しは天世間、若しは沙門婆羅門、若しは諸の天人なり。是の如き三種の世間は三の因緣に由りて應に安立すと知るべし。一には欲自在及び淨自在を得るに由るが故なり、謂はく若しは魔、若しは梵世間なり。二には勤修して彼の因を得るに由るが故なり。謂はく若しは沙門婆羅門なり。三には種種なる業因の果に趣くが故なり、謂はく若しは諸の天人なり。(2)(一)又此の三處に於て其の所應に隨つて能く斷じ、作證するに二種の道ありて四倒心を離る、謂はく已に見地に入り及び上の修道に於て多修習して住するなり。(二)又此の二種の道に四種の相の心解脫の果あり、一には貪瞋の縛の解脫相、二には欲貪の滅斷出離の相、三には九結の離繫の相、四には生等の諸苦の解脫相なり。此の中前の三相は因處の煩惱の解脫を顯示し、後の一相は果處の諸苦の解脫を顯示す。此の義の中に於て譬へば人あり、囹圄に處在して種種なる縛の爲に繫縛せらるるが如し。所謂る或は木、或は索、或は鐵、又は餘人を置いて其を

(1)人に約して三事を辯ず。

(2)道に約して辯ず。

(一)見修二道に約して以て過患を辯ず。

(二)四解脫に約して以て出離を辯ず。

り。因は唯だ因縁、餘の三は唯だ縁なり。又因縁とは、謂はく諸行の種子なり、等無間縁とは、謂はく前六識等及び[一一]相應法の等無間に滅し、後の六識等及び相應法の等無間に生ずるなり。所縁縁とは、謂はく五識身等は[一二]五の別境を以て所縁と爲し、第六識身等は一切法を以て所縁と爲す。增上縁とは、謂はく五識等は[一三]眼等の各別の所依を以て增上縁と爲し、及び能生の作意等を以て增上縁と爲し、意識身等は四大種の身及び能生の作意等を以て增上縁と爲す。又先所造の業を所生の愛非愛の果に望むれば當に知るべし亦た是れ增上縁なりと。是の如く[一四]資糧を道に[一五]望め、道を涅槃を得るに望むるも當に知るべし亦た是れ增上縁の攝なりと。

第十一目　染淨を解す

[一六]復次に、三種の事と二種の相とに由りて應當に雜染と清淨とを觀察すべし。

(一)三事に由りて解す　云何んが三種の事に由りて一切の雜染と清淨とを觀察するや。一には諸行の中に於て雜染の因縁を觀察す、謂はく彼の愛味を觀じて愛味と爲すが故なり。二には諸行の中に於て清淨の因縁を觀察す、謂はく彼の過患を觀じて過患と爲すが故なり。三には諸行の中に於て清淨を觀察す、謂はく彼の出離を觀じて出離と爲すが故なり。是の如き一切を總略して一と爲して三事に由りて一切の雜染と清淨とを觀察すと名づく。

(二)二種の相に由りて解す　云何んが二種の相に由りて一切の雜染と清淨とを觀察するや。一には如所有性に由るが故に、二には盡所有性に由るが故なり。(一)如所有性とは、謂はく諸行の中に於て若しは愛味と若しは過患と若しは出離となり。(二)盡所有性とは、謂はく諸行の中に於て所有る愛味を盡し、所有る過患を盡し、所有る出離を盡すなり。(一)此の中、諸行を縁と爲して樂を生じ喜を生ずと觀察するを是れを彼れに於ける愛味と名づけ、又此の愛味を極めて狹少なりと爲すな

づく、是れを厭と離欲と解脫との第二の差別と名づく。云何んが遍解脫なりや。謂はく是の如き煩惱雜染の解脫に由るが故に、生等の諸苦雜染も亦た普く解脫す、是れを遍解脫と名づく、是の如く智の增上力に由るが故に諸行の中に於て厭を起し、厭に習するに由るが故に離欲を得、離欲に習するに由るが故に解脫及び遍解脫を得るを、是の如きを名づけて智果の漸次と爲す。

[2]此の中に復た四種の邪執あり、何等を四と爲すや。一には見の邪執、二には慢の邪執、三には自內の邪執、四には他教の邪執なり。(一)見の邪執とは、謂はく諸行の中に於て我我所を執するなり。(二)慢の邪執とは、謂はく諸行の中に於て我慢の執を起すなり。前の見の邪執は諦現觀を障へ、後の我慢の邪執は修所斷の煩惱等斷ずるを障ふるなり。(三)自內の邪執とは、謂はく獨り空閑に處して不正分別を依止と爲すが故に實我ありと執し、或は見邪執し、或は慢邪執するなり。(四)他教の邪執とは謂はく他教に由りて邪執著を起して此は是れ我なり、此は是れ我所なりと謂ひて我慢行轉ずるなり。又內に於て不正分別を起し、我我所を執するを內の邪執と名づけ、亦た非他教の邪執と名づく。是の如き一切の邪執の永斷するを當に知るべし是れを智果と名づくと。

第十目　非斷非常を解す

復次に、三種の相に由りて應に知るべし諸行は[7]非斷非常なりと。何等を三と爲すや。一には[8]無住行を以て因と爲すが故に、二には[9]生じ已つて住因無きが故に、三には[10]未來の諸行の因性の滅するが故なり。此の中、諸行の因は無常なるが故に、生じ已つて住因不可得なるが故に當に知るべし諸行は常に非ずと。能く未來の諸行を生ずる現在の因性の滅するが故に當に知るべし諸行は斷に非ずと。

復た四緣あり、能く諸行をして展轉し流轉せしむ。何等を四と爲すや。一には因緣、二には等無間緣、三には所緣緣、四には增上緣なり。卽ち此の四緣に略して二種あり、一には因、二には緣な

(2)四執に約す。

が故に諸行に於て離欲を修すと名づく。滅界に於て未得を得んが爲に勤めて修習するが故に諸行に於て滅を修すと名づく。

第九目　二種の漸次を解す

復次に、心解脱の爲に勤めて修習する者に二種の漸次あり、一には智の漸次、二には智果の漸次なり。

(一)智の漸次を明す　云何んが智の漸次なりや。謂はく諸行の中に於て先づ無常智を起すなり、彼の生滅の道理を思擇するに由るが故に、次後に彼に於て相應の行を生じ、觀じて生法・老法乃至憂苦・熱惱等の法と爲し、是の因緣に由りて一切皆な苦なり、此れ即ち先の無常智に依りて後の苦智を生ずるなり。又彼の諸行は是の生法乃至是の熱惱の法に由るが故に、即ち是れ死生緣起し、展轉流轉して自在の行相を得ざる道理なり、故に我あること無し、此れ即ち先の苦智に依りて後の無我智を生ずるなり。是の如く、無常なるが故に苦なり、苦なるが故に無我なりと觀ずるを、是れを智の漸次と名づく。

(二)智果の漸次を明す　云何んが智果の漸次なりや。謂はく厭と離欲と解脱と遍解脱となり。(1)云何んが厭なりや。謂はく對治現前することあるが故に、厭逆の想を起して諸の煩惱をして復た現行せざらしむ。云何んが離なりや。謂はく厭心を修習するに由るが故に對治に於て作意し思惟せずと雖も、然も一切の染愛の事境に於て貪現行せず、此れ伏斷の增上力に由るが故なり。云何んが解脱なりや。謂はく即ち此の伏斷對治に於て多修習するが故に隨眠を永拔するなり。是の如きを厭と離欲と解脱との第一の差別と名づく。復た差別あり、謂はく厭の位に於て斷界極めて成滿するが故に厭と名づけ、即ち厭に依止して非想非非想處を除いて餘の下地に於て離欲を得る時、離欲の位を施設するが故に離欲と名づけ、非想非非想處に於て離欲を得る時、解脱の位を施設するが故に解脱と名

(1) 四法に約す。

諸行は決定して是れ空なりと知るべし、一には畢竟離性空なるが故に、二には後方に離性空なるが故なり。畢竟離性空なりとは、謂はく諸行の中の我我所の性は畢竟じて空なるが故なり。後方に離性空なりとは、謂はく已に一切の煩惱を斷じ、心解脱せる中に於て一切の煩惱皆な悉く空なるが故なり。(四)又二相に由りて當に諸行は決定して無我なりと知るべし、一には諸行は種種外性なるが故に、二には諸行は衆緣より生じて自在ならざるが故なり。

(三)第三番の解　復た十相に由りて當に諸行は四相決定せりと知るべし、謂はく(一)敗壞と(二)變易と(三)別離との相應する法性の相に由るが故に、(四)非可樂と(五)不安隱の相と、(六)應に遠離すべき異相の相なるが故なり、是の如き等の相は前の聲聞地に已に廣く分別せしが如し。

第八目　界を解す

復次に、出世道に依りて作意し修する中に五の離繫品の界あり、一には斷界、二には無欲界、三には滅界、四には有餘依涅槃界、五には無餘依涅槃界なり。謂はく見道所斷の諸行斷ずるが故に名づけて斷界と爲す。修道所斷の諸行斷ずるが故に無欲界と名づく。即ち此れ唯だ餘依あるのみなるが故に有餘依涅槃界と名づく。此の依の滅するが故に名づけて滅界と爲し、亦た無餘依涅槃界と名づく。即ち此の五界は一切行の永に寂靜なるに由るが故に諸行止と名づく。我・我所・我慢・執著と及び隨眠と皆な遠離するに由るが故に說いて名づけて空と爲す。一切の相皆な遠離するに由るが故に無所得と名づく。斷界の中に於て一切の有漏に隨順する法の上の所有る貪愛皆な遠離するが故に名づけて愛盡と爲す。無欲界に於て所有る欲貪皆な遠離するが故に名づけて無欲と爲す。滅界の中に於て及び有餘依無餘依涅槃界の中に於て其の所應の如く皆な永滅するが故に皆な寂靜なるが故に其の次第に隨つて說いて名づけて滅と爲し、亦た涅槃と名づく。又斷界に於て未得を得んが爲に勤めて修習するが故に諸行に於て厭を修すと名づく。無欲界に於て未得を得んが爲に勤めて修習する

して有なりといはば是れ卽ち應に先に有にして而も無なるに非ざるべく、未來の諸行は便ち應に是れ無常決定に非ざるべく、現在の諸行も亦應に起盡と相應せざるべし。現在の行は緣より生じ已つて決定して有なるに非ず、有を以て先と爲し、非有を施設するに由り、是の故に過去の諸行は無常決定なり。是の如く現在の諸行は、未來の行の先に無にして而も有なるに由り、過去の行の先に有にして而も無なるに因り、此に由りて起盡相應すと施設す。是の故に說いて、當に知るべし去來の諸行の無常性すら尙ほ決定す、何に況んや現在をやと言ふ、是れを諸行無常の決定と名づく。(二)云何んが諸行の苦性決定なりや。謂はく去來の諸行すら尙ほ是れ生等の苦法なり、何に況んや現在をや。所以は何ん、過去の諸行は是れ已に度れる苦なり、未來の諸行は是れ未だ至らざる苦なり、現在の諸行は是れ現前の苦なればなり、是れを諸行の苦性決定と名づく。(三)云何んが諸行の空性決定なりや。謂はく去來の諸行すら尙ほ定んで空性なり、何に況んや現在をや。所以は何ん、未來の諸行は其の性未だあらず、此に由るが故に空なり、過去の諸行は其の性已に滅す、此に由るが故に空なり。現在の諸行にして未だ滅せずと雖も諦義勝義の性の遠離する所なり、此に由るが故に空なり、是れを諸行の空性決定と名づく。(四)云何んが諸行の無我決定なりや。謂はく去來の諸行すら尙ほ定んで無我なり、何に況んや現在をや。所以は何ん、未來の諸行は我の相に非ず、未だ現前せざるが故に過去の諸行は我の相に非ず、已に越度せるが故に、現在の諸行は我の相に非ず、正に現前するが故なり、是れを諸行の無我決定と名づく。

(二)第二番の解　又(一)二相に由りて當に諸行の決定して無常なるを知るべし、一には過去世は已に滅壞せるに由るが故に、二には未來現在世は是れ應に滅壞すべき法なるに由るが故なり。又(二)二相に由りて當に諸行は決定して是れ苦なりと知るべし、一には是れ生等の苦の法なるが故に、二には是れ三苦の性なるが故なり、此の諸の苦相は前の如く應に知るべし。(三)又二相に由りて當に

り、彼を斷ぜんが爲の故に而も能く猛利なる樂欲乃至正念及び無放逸を發起し、觀行を勤修す。

第六目　愚相を解す

復次に、二種の愚夫の相あり。何等を二と爲すや、一には所應求に於て如實に知らず、二には所應求に非ざるに而も反つて生起す。何等を名づけて是れ所應求なりと爲すや。所謂る涅槃なり、諸行永滅するなり。而るに諸の愚夫は當來世の諸行の不生に於ては都べて樂欲無く、諸行の生ずるに於て唯だ欣樂あるのみ、是の因緣に由りて所應求と及び諸行の生ずる所有る衆苦とに於て如實に知らざるなり。何等を名づけて所應求に非ざるに而も反つて生起すと爲すや。所求に非ずとは、謂はく老・病・死・非愛の合會・所愛の別離・所欲の匱乏・愁歎・憂苦・種種の熱惱なり、彼れ是の如き諸行の生起するに於て反つて欣樂を生じ、生を本と爲す一切の行の中に於て深く樂著を起し、生を本と爲す所有る諸苦に於て造作し積集す。是の因緣に由りて生苦及び生を本と爲す老・病・死等の衆苦の差別あるに於て解脫を得ず、是の如きを名づけて所應求に非ざるに而も反つて生起すと爲す。

第七目　無常等の四決定を解す

復次に、諸行の中に於て四決定あり、一には無常決定、二には苦決定、三には空決定、四には無我決定なり。

(一)第一番の解　(一)云何んが諸行無常の決定なりや。三種の相に由りて當に知るべし過去・未來の諸行すら尙ほ定んで無常なり、何に況んや現在をやと。何等を三と爲すや。謂はく(1)先に無にして而も有なるが故に、(2)先に有にして而も無なるが故に、(3)起盡相應するが故なり。若し未來の行は先に未だ有らざる所なれば定んで非有なりとはいはば是れ應に先に無にして而も有なるに非ざるべく、是の如くならば應に無常決定に非ざるべし、彼れ先時に非有を施設し、非有を先と爲し、後時に方に有なるに由り、是の故に未來の諸行は無常決定なり。若し現在は緣より行生じ已つて決定

無我なりと了知し、彼れ聖教に隨つて是の如く勝解し、是の如く通達す。(五)既に通達し已つて復た推度相應の思惟所成の微細作意を以て卽ち彼の境に於て如實に了知し、(六)卽ち是の如く通達し了知する增上力に由るが故に彼の相應の煩惱の現行に於て現法と當來との所有る過患を如實に觀察し、思擇力を依止と爲すに由るが故に設ひ復た生起すとも而も實に著せず、卽ち能く捨離す。(七)彼れ是の如く通達と了知と及び思擇力とに由りて多修習するが故に能く正性離生に入る、(八)既に正性離性に入り已つて修道力に由りて漸く諸欲を離るるなり。彼れ思擇と見道との二種の力に由るが故に其の所應に隨つて諸の煩惱を斷ず、謂はく不現行斷の故に、及び一分斷の故なり、修道の力に由りて究竟して離欲す。是の如く前の二種に由りて漸く欲貪を離れ修道の力に由りて心に解脫を得るなり。

第五目　果を解す

復次に、二種の煩惱斷ずる果、及び苦滅の果あり。一には見所斷の果なり、彼を證するに由るが故に能く自ら我れ已に㮈落迦・傍生・餓鬼を永盡し、我れ今預流の退墮無き法を證得すと了知す、乃至廣說。二には修所斷の果なり、彼を證するに由るが故に能く自ら我が最後身は暫時支持す、第二有等は永に復た轉ぜずと了知す。

復た二種の苦滅あり、一には現在を因と爲す未來の苦滅し、二には過去を因と爲す現在の苦滅するなり。復た二種の苦滅あり、一には心苦滅し、二には身苦滅するなり。復た二種の苦滅あり、一には壞苦・苦苦の苦滅し、二には行苦の苦滅するなり。復た二種の苦滅あり、一に非愛業果の苦滅し、二には可愛業果の苦滅するなり。

復た少分已に、諦迹を見たる諸の聖弟子あり、已に諸の惡道の苦の所有る怖畏を超過すと雖も未だ一切の結を永盡せざるに由るが故に其の心に猶ほ當來世に於て諸の異生に共ずる生老死の怖あ

第三目　前行を解す

復次に、即ち彼の解脫に二種の前行法あり、一には見前行法、二には道果前行法なり。（一）見前行法とは、謂はく解脫と及び彼の方便と自內所證との增上力に由るが故に、他の言音に從つて聞思修の所成の妙善を起し、如理作意して、未だ正性離生に入らざるを能く正性離生に入れしめ如實の見、出世の正見を得しむるなり。（二）道果前行法とは、謂はく是の如き正見を得已つて復た所餘の正思惟等を起す、或は同時に生じ、或は後時に生ずる道前行法は所餘の諸の煩惱を斷ぜんが爲のなり。

第四目　觀察を解す

復次に、未だ得ざる所の解脫を證得せんと欲するが爲の故に應に八事を觀察すべし、謂はく諸行の中に於て（一）愛味と（二）過患と（三）出離との觀察と及び（四）聞と（五）思と（六）思擇力と（七）見道と（八）修道との觀察となり。

（一）前の三種を總じて一門とし、所觀を以て觀察を辨ず　（一）諸行の中に於て愛味を觀察する時には能く善く諸行の愛味の所有る自相に通達し、（二）即ち諸行に於て患過を觀察する時には能く善く三受の分位の過患の共相を了知す、謂はく是の中に於て甚少なる愛味にも諸の過患多きなりと。（三）是の如く愛味染著には諸の過患の共に相應すること多きを了知し已つて愛味する所の一切の行の中に於て生起する所の欲貪の煩惱に隨つて即ち能く除遣し制伏し斷捨す、此に於て欲貪現行せざるが故に說いて名づけて斷と爲す、永離欲するが故に名づけて斷と爲すには非ず。又彼の事に於て心未だ解脫せず、若し隨眠に於て究竟して超越せば、乃ち永離欲し心解脫を得るなり。是れを一門の觀察の差別と名づく。

（二）後の五種を能觀に約して觀察を辨ず　（四）又修行者彼の諸行に於て正觀察する時に、先づ聞所成の慧を以て阿笈摩の如く、諸行の體は是れ無常なり、無常なるが故に苦なり、苦なるが故に空及び

り。又解脫に三種あり、一には世間解脫、二には有學解脫、三には無學解脫なり。(一)世間解脫は是れ眞實に非ず、退轉あるが故なり。(二)有學解脫は是れ眞實なりと雖も而も究竟に非ず、猶ほ所作あるが故なり。(三)當に知るべし所餘は二種を具足すと。

(二)方便　云何んが方便なりや。謂はく諸行の中に於て、如所有性と及び盡所有性とに依りて、無常想を修し、無常に依りて苦想を修し、苦に依りて空無我想を修し、此れに因りて諦現觀に入ることを得る時、所知の境を正しく觀察するに由るが故に正見を獲得し、此の正見を依止と爲すに由るが故に修道の位の中にて遍ねく諸行に於て厭逆の想に住す。彼れ住する時に於て彼の相應の受に由り不現前の境を憶念し思惟すれば明了に現前すと雖も而も喜を生ぜず、喜を生ぜざる增上力に由るが故に彼れ行ずる時に於て卽ち彼の受の所緣の境界に於て染著を生ぜず、彼れ一切の所求の境界に於て處中を得るが故に尙ほ希求せず、何に況んや耽著をや。彼れ是の如く若しは住し若しは行ずるに喜貪の纒に於て速に能く滅盡するに由りて心淸淨にして住し、又乃ち卽ち彼に於て所得の道の如く極めて多修習するを、因緣と爲すが故に彼の品の麁重隨眠を永拔し、眞實究竟の解脫を獲得す、當に知るべし卽ち是れ心善解脫なりと。

(三)自の內の所證　云何んが自の內の所證なりや。當に知るべし四種の相ありと。若し有學の解脫の轉ずる時に於ては二種の相に由りて內慧觸證す、謂はく(一)我れ已に諸の惡趣の中に生ずる所の諸行を盡し、又已に盡く其の七生二生一生所餘の後有に生ずる所の諸行を除けりと、又(二)我れ已に能く究竟し盡して退轉無き道に住せりと。若し無學の解脫の轉ずる時に於てならば卽ち是の如き二種の相に由るが故に內慧觸證す、謂はく(一)我れ已に其の餘の一切の煩惱を斷ぜんが爲に所應學の事を作せり、我れ今尙ほ餘の一生の在ることすら無し、況んや二をや、況んや七をやと、又(二)所樂に隨つて亦た能く他の爲に如實に記別すと。是の如きを名づけて自の內の所證と爲す。

正法を聽聞し、不如理作意の增上力の故に、今に於て彼れを因と爲すに由り、彼を緣と爲すに由り邪解脫の見を數習して集成する所の界なり。常見に由ると說くが如く是の如く、(二)斷見に由り、(三)現法涅槃の見に由り、(四)薩迦邪見に由るをも廣く說くこと亦た爾なり。

(二)能治の道を明す　此の中、世尊は、種種なる勝解の智力、種種なる界の智力の增上力に由るが故に、彼の先の勝解及び彼の後の界を尋求して其の所應の如く彼の邪勝解と界とを調伏せんが爲の故に、多分爲に四種の法敎を轉ず、或は復た餘の智の未成熟の者には彼の智を成熟せしめんが爲の故に、智の已成熟の者には彼れをして諸の煩惱を解脫せしめんとの故なり。初の邪界の有情の爲に因滅するが故に行滅すと說き、行盡門に由りて無常性を說く、彼の邪勝解と界とを調伏せんが爲の故なり。第二の邪界の有情に隨ふが爲に因集るが故に行集ると說き、行起門に由りて無常性を說く、彼の邪勝解と界とを調伏せんが爲の故なり。第三の邪界の有情に隨ふが爲に諸行苦門に由りて正法敎を轉ず、彼の邪勝解と界とを調伏せんが爲の故なり。第四の邪界の有情に隨ふが爲に、若し諸行を離れて薩迦耶見を起す行者には諸行空門に由りて正法敎を轉じ、若し諸行に卽して薩迦耶見を起す行者には無我門に由りて正法敎を轉ず、彼の邪勝解と界とを調伏せんが爲の故なり。

第二目　說を解す

復次に、善說の法と律とは略して三種の不共支に由るが故に外道に共せずして善說の數に墮す。一には眞實究竟の解脫を宣說するが故に、二には卽ち彼の方便を宣說するが故に、三には卽ち彼の自の內の所證を宣說するが故なり。

(一)眞實究竟の解脫　云何んが眞實究竟の解脫なりや。謂はく畢竟解脫と及び一切解脫となり、卽ち是れ見道の果と及び此の後の所得なる世出世の修道の果となり。此の中、見道の果は畢竟に由るが故に眞實と名づくることを得るも、而も究竟には非ず、一切解脫に於て猶ほ所應作あるが故な

(四)大乘相應の契經　即ち方廣分を大乘相應の契經と名づく。此の分別の義は前の如く應に知るべし。

是の如き四種の契經は餘の未顯了の義を顯了せしむる等の二十種の契經に由り、其の所應の如く當に其の相を知るべし。

第二目　總じて後の二十種の經を知るべしと勸む

第二項　能釋の摩呾理迦を辯ずる中、初に總嗢拕南を以て綱要十一門を標す

是より已後、此の所說の四種の契經に依りて當に契經摩呾理迦を說くべし、如來の說きたまふ所、如來の稱したまふ所、讃したまふ所、美めたまふ所の先聖の契經を決擇せんと欲するが爲なり。譬へば[六]本母無き字は義明了ならざるが如く、是の如く本母に攝せざる所の經は其の義隱昧にして義明了ならず、此れと相違するは義明了なり、是の故に說いて摩呾理迦と名づく。總の嗢拕南に曰く、

『(一)界と(二)略敎と(三)想行と、(四)速通と(五)因と(六)斷支と、(七)二品と(八)智事と(九)諍と、(十)無厭と(十一)少欲にして住するとなり。』

第三項　別嗢拕南第一を以て界等の十一門を解す

別の嗢拕南に曰く、

『(一)界と(二)說と(三)前行と(四)觀察と(五)果と、(六)愚相と(七)無常等の定と(八)界と、(九)二種の漸次と應に當に知るべし、(十)非斷非常と及び(十一)染淨となり。』

第一目　界を解す

(一)所治の四種の界の體を明す　四種の所化の有情あり、先に邪解脫の見を數習して集成せる所の界なり。何等を四と爲すや。謂はく(一)先有、先世、先身、先所得の自體の中に於て、常見增上の不

【六】本母は摩呾理迦の譯語にして十四音の字母を云ひ又は三百の字界に名づく。論藏は世尊自ら法相を分別し。又は聖弟子の已に諦跡を見たる者の自己の所證に依つて無倒に法相を分別するを云ふ。論は生智の母なれば本母と云ふ。

遣する契經、二十四には正法をして久住せしめんが爲なる契經なり。

第一目　別して初の四經を釋す

(一)別解脫契經　別解脫契經とは、謂はく是の中に於て[二]五犯聚と及び五犯聚を出づるとに依りて一百五十の學處過[三]を說けるなり。自愛する諸の善男子をして精勤し修學せしめんが爲なり。

(二)事契經　事契經とは、謂はく四阿笈摩なり、一には雜阿笈摩、二には中阿笈摩、三には長阿笈摩、四には增一阿笈摩なり。(一)雜阿笈摩とは謂はく是の中に於て世尊彼彼の所化を觀待して、宣說したまへる如來及び諸の弟子の所說の相應と、蘊・界・處の相應と、緣起・食・諦の相應と、念住・正斷・神足・根・力・覺支・道支・入出息念・學・證淨等の相應となり。又八衆に依りて衆の相應を說きたまへり。後に結集する者、聖教をして久住せしめんが爲に嗢拕南頌を結び其の所應に隨つて次第し安布せり。當に知るべし是の如き一切の相應は略して三相に由ると。何等を三と爲すや。一には是れ能說、二には是れ所說、三には是れ所爲說なり。若しは如來若しは如來の弟子は是れ能說なり、弟子の所說、佛の所說分の如し。若しは所了知なると、若しは能了知なるとは是れ所說なり、五取蘊・六處・因緣相應分と及び道品分との如し。若しは諸苾芻・天魔等の衆は是れ所爲說なり、結集品の如し。是の如く一切をば粗ぼ略して能說・所說・及び所爲說なりと標擧す。卽ち彼の一切の事の相應の教を間厠し鳩集すれば、是の故に說いて雜阿笈摩と名づく。(二)卽ち彼の相應の教を復た餘相を以て處中にして說けり。是の故に說いて中阿笈摩と名づく。(三)卽ち彼の相應の教を更に餘相を以て廣長にして說く、是の故に說いて長阿笈摩と名づく。(四)卽ち彼の相應の教を更に一二三等の漸增する分數の道理を以て說く、是の故き說いて增一阿笈摩と名づく。是の如き四種をば師弟展轉して今に傳來す、此の道理に由りて是の故に說いて[四]阿笈摩と名づく。是れを事契經と名づく。

(三)聲聞相應の契經[五]　十二分教の中に於て方廣分を除ける餘を聲聞相應の契經と名づく。

【二】五犯聚とは五篇罪なり、(一)波羅夷(斷頭罪)、(二)僧伽婆尸沙(僧殘罪)、(三)波逸提(墮罪)、(四)波羅提提舍尼(向彼悔罪)、(五)突吉羅(惡作罪)なり。

【三】一百五十の學處とは實は比丘の二百五十戒なり、論主此中但だ麁戒のみを錄して且らく一百五十とせり。

【四】宋元明三本倶に阿笈摩の上に增一の二字を置くは寫誤なり。阿笈摩とは舊譯に阿含と言ふ。此に傳と譯す。

【五】十二分教とは(一)契經(二)應頌(三)諷頌(四)因緣(五)本事(六)本生(七)希法(八)譬喩(九)論議(十)自說(十一)方廣(十二)記別なり。聲聞經にも大乘經にも共に十二分教を具すと說けども今は大乘の實義に依つて小乘に方廣を許さず。

瑜伽師地論　卷の第八十五

[一]攝事分中契經事行擇攝第一の一

第一章　總じて三攝事を開列す

是の如く已に攝異門を說きつ、云何んが攝事なりや。謂はく三處に由りて應に攝事を知るべし、一には素呾纜の事、二には毘奈耶の事、三には摩呾理迦の事なり。

第二章　契經事を標釋す

第一節　契經事の中の行擇攝を明す

第一項　所釋の經を擧げて二十四處を列釋す

云何んが素呾纜の事なりや。謂はく二十四處に由りて略して一切の契經を攝す。一には別解脫契經、二には事契經、三には聲聞相應の契經、四には大乘相應の契經、五には未顯了の義を顯了せしむる契經、六には已顯了の義を更に明淨ならしむる契經、七には先時所作の契經、八には稱讚契經、九には黑品を顯示する契經、十には白品を顯示する契經、十一には不了義契經、十二には了義契經、十三には義略にして文句廣なる契經、十四には義廣にして文句略なる契經、十五には義略にして文句略なる契經、十六には義廣にして文句廣なる契經、十七には義深く文句淺き契經、十八には義淺く文句深き契經、十九には義深く文句深き契經、二十には義淺く文句淺き契經、二十一には當來の過失を遠離する契經、二十二には現前の過失を遠離する契經、二十三には所生の疑惑を除

【一】前の攝異門分に於て異門の種種の文義を辯ぜりと雖も未だ文義の所依たる根本の三藏を明示せず。故に今此の攝事分に於て具に三藏を明す。其中、第八十五卷乃至第九十八卷の十四卷に於て經藏を明し、第九十九卷乃至第百卷の前半に於て律藏を明し、第百卷の後半に於て論藏を明す。

◇卷の第九十六……〔一九六八―一九九一〕……二六〇

攝事分中契經事緣起食諦界擇攝第三の四……〔一九六八―一九九一〕……

◇卷の第九十二……（一八八一——一九〇二）……一七三

攝事分中契經事處擇攝第二の四……（一八八一——一九〇二）……一七三

◇卷の第八十六

目次

瑜伽部

六

加藤精神譯

國譯一切經

大東出版社藏版